

2016 年度

年次報告書

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

2018 (平成30) 年2月

まえがき

2016（平成 28）年度は、国立大学法人にとって第 3 期中期目標期間の初年度であり、アジア・アフリカ言語文化研究所も、共同利用・共同研究拠点（以下、拠点と略）制度の下、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」としての第 2 期に突入した。

本研究所は、拠点としての目的を「今日、人類の 7 割を超える人びと（世界総人口約 66 億人のうち 48 億人以上）が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語文化のあり方を研究し、中長期的には、21 世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目的達成のために、以下の三つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進している。

- 1) 臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

文部科学省による第 2 期の拠点認定は、拠点第 1 期 6 年の活動を総括する期末評価を通じて行われたが、本研究所は 2013 年度に実施された中間評価に続いて、2015 年度中に行われた期末評価でも、総合評価 A（拠点としての活動は概ね順調に行われており、関連コミュニティへの貢献もあり、今後も、共同利用・共同研究を通じた成果や効果が期待される）を得ることができた。しかしながら、期末評価には同時に、「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討するとともに、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」との助言が付されていたばかりか、中間評価結果のフォローアップ状況についても、「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価が下された。これを受けて当研究所は、2018 年度当初に予定されている拠点第 2 期の中間評価に向けて、国際共同研究の成果増大、共同利用・共同研究課題の応募数拡大、研究成果のさらなる質の向上に取り組む一方、研究所全体としての特徴を明確にすべく、2016 年度当初から所内プロジェクト研究部と基幹研究の編成を一新し、新たに全所プロジェクトを発足させるに至っている。とはいえ、拠点の様々な活動の中で最も重要な活動が、公募に基づいて審査・採択される共同利用・共同研究課題であることは言を俟たない。2016 年度に本研究所は、新規採択分と継続分を合わせて、共同利用・共同研究課題 29 件を実施した。

一方、本研究所では、共同利用・共同研究拠点の中間評価と同じ 2013 年度に、拠点機能以外の研究所活動全体について所外の有識者による外部評価を実施し、その結果を踏まえて、研究所の共同利用性の拡大や、共同研究の質の向上に取り組んでいる。

このように本研究所は、所外・学外の研究者コミュニティによる助言や指摘を真摯に受け止め、研究活動の改善に不断に取り組んでいるものの、全国共同利用研究所時代と比べると、拠点制度の導入によって競争的性格が強まったことは明らかなうえ、国立大学や拠点を取り巻く環境は、拠点の第 1 期中間評価や研究所の外部評価が進行する前後から急激な変化を見せてきた。文部科学省は、第 3 期中期目標期間中もイノベーションを生み出す大学改革やグローバル人材の育成を重視して、大学内の資源配分の見直しや組織再編、年俸制や混合給与の導入といった人事給与システムの改革を求めており、国立大学法人東京外国語大学に附置されている本研究所も、大学内の他の部局と同様、国立大学改革への対応を迫られるようになっている。資源の限られた小規模大学の附置研という条件下で、このように困難な状況に立ち向かい、研究の継続性や高度化を担保していくためには、今後、これまで以上に所員の努力が求められることだろう。

この年次報告書は、国立大学に附置される共同利用・共同研究拠点として、105 に及ぶ共同利用・共同研究拠点（平成 29 年 4 月 1 日現在。ネットワーク型 5 拠点を含む）の中での競争を経ながら、共同研究を中心とした研究所のさらなる発展を目指すべく、2016 年度の本研究所の成果について自己点検を行なうものである。

飯塚 正人

2017 年 8 月 31 日

2016 年度年次報告書 目次

まえがき	i
I-1 研究計画と点検評価体制	3
I-1.1 年度計画と達成状況の総括	3
I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」	3
I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括	3
I-1.2 点検評価体制	4
I-1.2.1 概要	4
I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価	5
I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価	5
I-1.2.4 個人研究に関する評価	6
I-1.2.5 経年教授に対する評価	6
I-1.2.6 第2期中期目標期間の教育研究評価に関する評価報告書について	7
I-2 研究活動	8
I-2.1 概要	8
I-2.2 基幹研究	9
I-2.2.1 概要	9
I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)	11
I-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロマクロ系の連関2	12
I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景	13
I-2.3 共同利用・共同研究課題	14
I-2.3.1 概要と外部評価	14
I-2.3.2 共同利用・共同研究課題	15
I-2.4 センター	46
I-2.4.1 情報資源利用研究センター	46
I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター	46
I-2.5 既形成研究拠点	48
I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点 (GICAS)	48
I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点	48
I-2.6 所員の個人別研究活動	49
I-2.6.1 概要	49
I-2.6.2 所員の研究業績一覧	49
I-2.6.3 受賞	90
I-2.6.4 人事評価	90
I-2.7 外部資金による研究活動	91
I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」	91
I-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」	92
I-2.7.3 科学研究費等によるその他の研究活動	92
I-2.7.4 寄付金	93
I-3 組織運営	94
I-3.1 センター	94
I-3.1.1 情報資源利用研究センター	94
I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター	94
I-3.2 外部委員会	94
I-3.2.1 運営委員会	94
I-3.2.2 共同研究専門委員会	95
I-3.2.3 研修専門委員会	95

I-3.2.4	海外調査専門委員会	95
I-3.2.5	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会	97
I-3.2.6	フィールドネット運営委員会	98
I-3.2.7	編集専門委員会	98
I-3.2.8	国際諮問委員会	98
I-3.2.9	海外拠点専門委員会	98
I-3.2.10	中東研究日本センター諮問委員会	98
I-3.3	内部委員会等	98
I-3.3.1	企画運営委員会	98
I-3.3.2	研究戦略策定委員会	99
I-3.3.3	文献資料（図書）担当	99
I-3.3.4	国際交流担当	99
I-3.3.5	出版担当	100
I-3.3.6	基礎データ担当	100
I-3.3.7	広報企画担当	101
I-4	研究者コミュニティと一般社会とに開かれた研究プラットフォームの構築	103
I-4.1	若手研究者養成プログラム	103
I-4.1.1	言語研修の実施	103
I-4.1.2	フィールド言語学ワークショップ	103
I-4.1.3	中東☆イスラーム関連セミナー	103
I-4.1.4	文化／社会人類学研究セミナー	104
I-4.1.5	短期共同研究員（公募）の受け入れ	104
I-4.1.6	大学院教育の現在	104
I-4.1.7	研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員	105
I-4.2	国内連携研究活動	105
I-4.2.1	国内研究者受け入れ（フェロー等）	105
I-4.2.2	海外調査専門委員会の活動	108
I-4.2.3	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動	108
I-4.2.4	フィールドネット運営委員会の活動	108
I-4.2.5	四大学連合文化講演会	108
I-4.2.6	地域研究コンソーシアム	109
I-4.3	国際研究連携活動	109
I-4.3.1	国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等	109
I-4.3.2	海外研究拠点	109
I-4.3.3	外国人研究員招聘	109
I-4.3.4	外国研究者受け入れ（フェロー等）	110
I-4.3.5	海外学術機関との研究協力協定	111
I-4.3.6	研究未開発言語文化の調査事業	112
I-4.3.7	その他外部資金による国際連携研究	112
I-4.4	研究成果の国内外への公開	112
I-4.4.1	AA 研フォーラムの実施	112
I-4.4.2	公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣	113
I-4.4.3	出版および広報	113
I-4.4.4	収集資料等の展示・公開	113
I-5	成果と課題	114
I-5.1	2016年度の成果	114
I-5.2	課題と展望	115
II-1	年表	119
II-2	予算・組織・機構	122
II-2.1	研究所の予算	122

II-2.1.1	2016(平成28)年度予算	122
II-2.1.2	運営費交付金(2016年度)	122
II-2.1.3	科学研究費補助金	123
II-2.1.4	受託研究・受託事業等	123
II-2.1.5	寄付金等	124
II-2.2	外部委員リスト	124
II-2.2.1	運営委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	124
II-2.2.2	共同研究専門委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	124
II-2.2.3	研修専門委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	125
II-2.2.4	海外調査専門委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	125
II-2.2.5	フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	126
II-2.2.6	フィールドネット運営委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	126
II-2.2.7	編集専門委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	126
II-2.2.8	国際諮問委員会(任期:2016年4月1日~2017年3月31日)	127
II-2.2.9	海外拠点専門委員会(任期:2016年4月1日~2018年3月31日)	127
II-2.2.10	中東研究日本センター諮問委員会(任期:2016年4月1日~2018年3月31日)	128
II-2.3	内部委員会・業務担当	128
II-2.3.1	内部委員一覧	128
II-2.3.2	各種業務分担(任期:2016.4.1~2017.3.31(1ヵ年))	128
II-2.3.3	全学委員一覧	129
II-3	研究活動の詳細	131
II-3.1	センター	131
II-3.1.1	情報資源利用研究センター	131
II-3.1.2	フィールドサイエンス研究企画センター	133
II-3.2	共同利用・共同研究課題	135
II-3.2.1	共同利用・共同研究課題実施状況	135
II-3.3	外部資金による研究の詳細	202
II-3.3.1	特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」	202
II-3.3.2	頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」	210
II-3.3.3	科学研究費等によるその他の研究活動	213
II-4	研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築	226
II-4.1	若手研究者養成プログラム	226
II-4.1.1	言語研修の実施状況	226
II-4.1.2	フィールド言語学ワークショップ実施状況	226
II-4.1.3	中東☆イスラーム関連セミナー実施状況	227
II-4.1.4	文化/社会人類学研究セミナー実施状況	227
II-4.1.5	短期共同研究員(公募)受け入れ状況	228
II-4.1.6	大学院教育の現在	228
II-4.1.7	研究機関研究員/特任研究員および日本学術振興会特別研究員】	229
II-4.2	国内連携研究活動	231
II-4.2.1	国内研究者受け入れ(フェロー等)	231
II-4.2.2	海外学術調査総括班の活動	242
II-4.2.3	四大学連合附置研究所長懇談会	242
II-4.2.4	シンポジウム等	243
II-4.2.5	地域研究コンソーシアムとの連携	252
II-4.3	国際連携研究活動	252
II-4.3.1	国際シンポジウム等一覧	252
II-4.3.2	外国人研究員招聘	263

II-4.3.3	外国研究者受け入れ（フェロー等）	263
II-4.3.4	研究未開発言語文化の調査事業.....	264
II-4.4	研究成果と資料の公開.....	264
II-4.4.1	出版.....	264
II-4.4.2	データベース構築・公開状況一覧.....	266
II-4.4.3	公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣	272
II-4.5	公共的利用.....	276
II-4.5.1	共同利用スペース等の稼動状況.....	276
II-4.5.2	文献資料室の利用状況.....	281

I 報告編

I-1 研究計画と点検評価体制

I-1.1 年度計画と達成状況の総括

I-1.1.1 年次報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」

アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）は、文部科学大臣に認定された言語学・文化人類学・地域研究分野の共同利用・共同研究拠点として、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を行い、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識枠組み提供のための基盤形成に寄与することを目的としている。

この目的を達成するために、

1. 臨地研究に基づく国際的研究拠点として共同研究プロジェクトを推進すること
2. アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源拠点及び研究成果の発信拠点としての活動を進めること
3. 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じての後継者養成を行うこと

【以上、国立大学法人東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所規程より】

を重点的活動目標としている。

この理念に沿って研究活動をいっそう充実させるため、本研究所では全国共同利用研究所時代の 1996 年度（平成 8 年度）以来、自己点検評価や第三者評価に基づいて、自己点検評価報告書「アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題」を刊行してきた。本報告書は、2016 年度における本研究所の研究体制と、それによって達成された研究および実施された活動の全体を報告するものである。

本報告書は「I 報告編」と「II 資料編」の 2 部からなり、「I 報告編」は、諸種の研究（基幹研究、両センター、共同利用・共同研究課題、既形成拠点、個人研究など）と諸種の活動（所内組織運営および共同利用・共同研究拠点としての教育・情報発信・資料構築及び公開・研究連携事業など）の概要を報告し、現状分析と今後の課題の概括を添える。「II 資料編」は、「I 報告編」において概括されている諸研究と諸活動の詳細を報告する。

I-1.1.2 年度計画と達成状況の総括

本研究所における 2016 年度の研究活動は、共同利用・共同研究拠点第 2 期の開始に合わせて、文部科学省が概算要求の仕組みを大きく変更したことから、厳しい財源難に見舞われたにもかかわらず、所員と共同研究員の多方面にわたる努力によって計画どおり進捗し、本報告書に報告するとおり、充実した成果を挙げた。本年度の研究・運営計画は十分に達成されたと言える。以下は、文部科学省に提出した「共同利用・共同研究拠点 平成 28 年度実施計画書」に記載した年度計画とその達成状況の概要である。【2016 年度の成果の概括は、[I-5.1 2016 年度の成果](#)の項を参照】

共同利用・共同研究拠点としての年度計画

1. 2015 年度以前からの継続共同研究課題 19 件と、公募および前年度中に共同研究専門委員会による審査を経て採択された共同利用・共同研究課題 10 件、合わせて 29 件を招聘外国人研究員 4 名とともに実施する。これらの課題への参加を見込まれる関連研究者数は全体で延べ 439 名である。共同研究課題は年度内にそれぞれ 2 回以上の研究会を行う。
2. 海外学術調査フォーラムを 7 月 9 日に開催するほか、海外での臨地調査に関わる手法を実践的・理論的に開発することを目的とするフィールドサイエンス・コロキウム事業の研究会を随時開催、さらに分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット関連事業を行う。
3. 共同利用・共同研究課題に対する若手研究者の積極的な参加を広く募る一方、夏に琉球語、ゾンカ語、ヒンディー語の言語研修、9 月に中東☆イスラーム教育セミナー、12 月に中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にオスマン文書セミナーを開催する。

4. 必要な研究資料を適宜収集・整備する。
5. 研究成果 10 点程度を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト刊行物の電子化と公開の準備を進める。また、広報誌『FIELDPLUS (フィールドプラス)』を企画・編集して刊行する一方、研究成果を紹介する資料展示を実施し、オンラインでも公開する。
6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年 2 回、共同研究専門委員会を年 1 回、海外調査専門委員会も年 2 回以上開催し、特に 10 月の共同研究専門委員会では、2017 年度から発足させる新規課題の審査を行う。

達成状況

1. 2015 年度以前からの継続共同研究課題 19 件と、公募および前年度の共同研究専門委員会による審査を経て採択された共同利用・共同研究課題 10 件、合わせて 29 件を外国人研究員 6 名 (昨年度からの継続 2 名を含む)、特別招へい教員 1 名とともに実施した。共同研究課題は年度内に研究会をそれぞれ 2 回以上開催した。
2. 海外学術調査フォーラムを 7 月 9 日に開催したほか、フィールドサイエンス・コロキウム・ワークショップを 2 回開催した (「災害とノのフィールドワーク」「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」)。さらに、分野を越えた研究者の協力・連携関係に資するフィールドネット・ラウンジ企画を公募し、「古い——「問題」として、「経験」として」および「毒」のバイオグラフィー——学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える」を採択して実施した。
3. 共同利用・共同研究課題に対する若手研究者の積極的な参加を広く募るべく、これまでの短期共同研究員制度を見直して、2017 年度中に新たな公募を行う準備を進める一方、夏に琉球語とヒンディー語の言語研修、9 月に中東☆イスラーム教育セミナー、12 月に中東☆イスラーム研究セミナー、1 月にオスマン文書セミナーを開催した。ただし、ゾンカ語の言語研修は担当講師の急病のため、中止を余儀なくされた。
4. 年間 1 千万円程度の予算を配分して、必要な研究資料を適宜収集・整備した。
5. 研究成果 17 点を刊行するとともに、関連データおよび過去の共同研究プロジェクト刊行物の電子化と公開の準備を進めた。また、広報誌『FIELDPLUS (フィールドプラス)』16 号、17 号を刊行する一方、2 月 13 日から 3 月 11 日まで、研究成果を紹介する企画展「チベット牧畜民の仕事展」を実施し、オンラインでも公開した。
6. 所外の研究者・有識者が過半数を占める運営委員会を年 2 回、共同研究専門委員会を年 1 回、海外調査専門委員会も年 2 回開催し、特に 10 月 16 日開催の共同研究専門委員会では、2017 年度から発足させる新規課題の審査を行って、新規に 11 件を採択した。

I-1.2 点検評価体制

I-1.2.1 概要

本研究所の研究の一層の充実を目指して、国立大学法人化後の第一期中期計画 (2004~2009 年度) に盛り込まれた方針、すなわち「所内に評価制度を設け、研究成果の評価基準を策定し、定期的に業績の評価を行う」に従い、2003 年 (平成 15 年) に教授会決定された自己評価書の作成手順および研究業績評価指針は次のとおりである。

1. 研究所の基幹研究プロジェクトをはじめ、研究及び研究関連業務全般にわたる年度目標とその達成状況を評価し、成果の概要及び一覧を付して年度ごとの自己評価書を作成・公開する。
2. 業績評価基準を設ける。
 1. 評価結果は、人事に適切に反映されるように努める。
 2. 実績が研究資源配分などに反映される制度を検討する。
 3. 多様な研究活動の必要性に相応した柔軟で効果的な勤務形態を可能にする。
3. 中期計画に従い、人事評価基準を、次の三項目に大別する。
 1. 学術的な個人業績に関するもの
 2. 学術的な共同研究に関わるもの
 3. AA 研の活動及びその成果普及に関わるもの

本研究所における研究活動自己評価は、2010年度に本研究所が全国共同利用研究所から新設の「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も、1年間はこの指針に従い、共同研究（4つの基幹研究、情報資源利用研究センター、フィールドサイエンス研究企画センター、2つの既形成拠点、共同研究課題／共同研究プロジェクト等とその関連業務）と、その基盤をなす個人研究という2種の研究活動について、前者に関しては外部からの評価を受け、後者に関しては自己申告する体制をとった。すなわち、(1) 学外委員を中心とする運営委員会、専門委員会等による助言や評価と、(2) 年度当初に所員が個別に提出した研究活動計画の翌年度当初における達成度自己申告、という2種の評価体制である。このうち、(2)に関しては、本研究所の共同利用・共同研究機能をより重視するという観点から、2010年度をもって自己評価書への掲載をとりやめ、各年度の所員の研究業績一覧だけを記載することとした。また、2013年度に自己評価書の名称も「年次報告書」に改めた。

なお、一部の例外を除いて委員の過半数を学外有識者が占める専門委員会等による助言と評価は、(1) 所の研究活動及び関連業務全般に関しては「運営委員会」(2) 共同利用・共同研究課題に関しては「共同研究専門委員会」、(3) その他の研究活動及び関連業務に関しては「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」がそれぞれ実施している。【所外委員を含む各委員会の詳細は [1-3.2 外部委員会](#) の項を参照】

年度計画の提出は、基幹研究、両センター、既形成拠点、共同利用・共同研究課題、所員個人の各レベルに義務づけられている。ただし公募による共同利用・共同研究課題は、例年10～11月頃に開催される審査会を経て採択されることから、審査にあたった共同研究専門委員会の評価を考慮し、場合によっては必要な修正を施した上で確定されている。

このように本研究所の自己評価体制は、一方では、所の活動全般（「運営委員会」）、主要な研究活動（「共同研究専門委員会」）、主要な業務（「研修専門委員会」「海外調査専門委員会」「編集専門委員会」「国際諮問委員会」「海外拠点専門委員会」「中東研究日本センター諮問委員会」）について外部からの評価・助言を受け、また他方では、所内諸組織の各レベルについて個別に研究活動計画の達成度を申告するという、種々の角度から幾重にも点検・評価する仕組みとなっている。

外部の意見を取り入れた自己点検・評価作業の集成として毎年作成される本報告書は、過年度をふり返り、新年度の研究の活性化と組織の柔軟性を保障する上で重要な役割を果たしている。すなわち、本報告書により、AA研における種々のレベルの研究の全体像を所内外の研究者が共有し、所の将来を展望するための確たる基盤を形成しようとするものである。

I-1.2.2 本研究所の諸般の活動に関する諮問と評価

共同利用・共同研究拠点である本研究所のあり方全般について学外の研究者・有識者から助言と評価を得るために、運営委員会が設置されている。【詳細は [1-3.2.1 運営委員会](#) の項を参照】

また、研究者コミュニティの意向を反映した共同利用・共同研究のあり方を維持するために、所外の研究者を加えたいくつかの委員会が設置されている。

なかでも共同研究専門委員会は、公募による共同利用・共同研究課題の質の向上を図るため、すべての共同利用・共同研究課題の審査と評価に当たっている。また、海外学術調査総括班の活動や、言語研修、編纂・出版事業の運営に学外からの意見を生かすため、海外調査専門委員会、研修専門委員会、編集専門委員会がそれぞれ設置されている。【詳細は [1-3.2.2 共同研究専門委員会](#)、[1-3.2.3 研修専門委員会](#)、[1-3.2.4 海外調査専門委員会](#)、[1-3.2.7 編集専門委員会](#) の項を参照】

さらに2010年度からは、国際的な「共同利用・共同研究拠点」としての一層の発展を目指し、国際諮問委員会と海外拠点専門委員会が設置された。後者は、ベイルート海外拠点の運営のために2007年以来設置されてきた中東研究日本センター専門委員会を発展させたもので、コタキナバル・リエゾンオフィスの運営、さらには中東☆イスラーム研究/教育セミナーについても、併せて助言と評価の対象としている。ベイルート海外拠点の運営についてはほかに、現地の有識者による中東研究日本センター諮問委員会も設置されている。【詳細は [1-3.2.8 国際諮問委員会](#)、[1-3.2.9 海外拠点専門委員会](#)、[1-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会](#) の項を参照】

I-1.2.3 共同利用・共同研究課題に関する評価

本研究所の理念に沿って、2016年度には公募による共同利用・共同研究課題29件（うち11件が所外代表）

が組織され、活発な共同研究事業が展開された。

人文社会系で初の全国共同利用研究所として設置されて以来、本研究所の活動の根幹を成してきた共同研究プロジェクトに対する評価は2004年度から試験的に開始され、2005年度には評価を担当する「共同利用委員会」が設置されて、2006年度より同委員会による評価が完全実施されてきた。その結果、全国共同利用研究所における最重要事業のひとつであった共同研究プロジェクトは格段に充実してきたと言える。こうした評価体制は、2010年度にAA研が「共同利用・共同研究拠点」に移行した後も基本的に変更されることはなく、新設の共同研究専門委員会が年度末に共同利用・共同研究課題の実績報告を受けて、書面審査を実施し、助言と評価を与えている。【詳細は [I-2.3 共同利用・共同研究課題](#) の項を参照】

一方、新設の「共同利用・共同研究拠点」制度が、「募集による共同利用・共同研究の実施」と、「採択にあたって学外委員が半数を占める審査委員会の審査」を義務づけていることに鑑み、2016年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、過半数を学外委員が占める共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった15件のうち11件（うち3件が所外代表）を採択した。なお、審査に関しては、2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受けて改善を図った結果、2011年度以降は次の4項目について審査し、5段階で評価を行っている。

- 研究の背景：研究目的が明確で、本研究所の共同利用・共同研究拠点としての目的に合致しているかどうか。研究の意義、特に課題として展開することの意義が明確かどうか。
- 期待される研究成果：期待される研究成果が明確、具体的で、我が国の言語学・文化人類学・歴史学・地域研究とその関連諸分野の発展に貢献できるかどうか。
- 研究の実実施計画：計画、方法が十分に練られ、かつ研究組織、研究者の構成が妥当なものかどうか。公開計画が実現性の高いものかどうか。
- 全体評価

I-1.2.4 個人研究に関する評価

本研究所ではこれまで、「個人別達成度自己評価」という形で、所員が実施する共同研究と個人研究の両面を含む研究活動を、個人別に評価する方式を採ってきた。これは、各所員が年度当初に基幹研究、両センター、既形成拠点、公募による共同研究課題／共同研究プロジェクト等の共同研究ならびに個人研究の両研究活動に関する研究活動計画を提出し、翌年度初頭にそれがどこまで達成できたかを個別に自己申告するものである。

しかしながら、本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたのみならず、基幹研究や既形成拠点、さらには2つのセンターによる事業が展開されるに至った現在、これらの研究活動は当然、各個人の研究業績にも反映されることになる。換言するならば、共同研究、基幹研究、2つのセンターによる事業とかかわりを持たない「個人研究」は存在する余地がないと言えるだろう。したがって、2011年度からは共同研究と個人研究を別個のものにとらえる前提に立脚していた「個人別達成度自己評価」の自己評価書への記載を取りやめ、各所員の研究業績を列挙して、公開する形に変更した。【詳細は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#) の項を参照】

I-1.2.5 経年教授に対する評価

2005年度より、AA研の教授職に一定年限在職し、かつ定年まで実施年を含め3年以上の残余年がある教授について、当該在職期間中の研究業績の評価を外部研究者に委託して実施している。

1. 研究方法の独創性：従来の研究に比して方法論的に新しい点、優れている点
2. 研究成果：研究がもたらした新しい視野
3. 学界への貢献：研究の学界に対するインパクト・後続研究に対する先駆的役割・研究者交流に対する貢献等
4. 総合評価

3名の外部研究者が、上記に示した4項目を総合的に評価し、4段階（特に優れている・優れている・やや劣る・極めて劣る）の何れかに位置づける方法で行われる。本年度は該当者がなく、実施しなかった。

I-1.2.6 第2期中期目標期間の教育研究評価に関する評価報告書について

AA 研の全学点検・評価室員（栗原・澤田）が、「学部・研究科等の現況調査表：研究」および「研究業績説明書」のAA 研分の作成を担当した。

「現況調査表」については、「Ⅰ アジア・アフリカ言語文化研究所の研究目的と特徴」、「Ⅱ 「研究の水準」の分析・判定」（分析項目Ⅰ 研究活動の状況・分析項目Ⅱ 研究成果の状況）、「Ⅲ 「質の向上度」の分析」という指定された項目ごとに執筆し、組織構成、外部資金等受入状況、ウェブ上で公開された研究資源、出版状況、共同研究プロジェクト／共同利用・共同研究課題の実施状況、国際シンポジウム・ワークショップ等の実施状況、質の向上がみられたプロジェクトに関する別添資料を付した。

「研究業績説明書」については、研究テーマごとに「特筆すべき研究業績」の候補を募り、寄せられた中から8件の研究テーマを選定し、テーマごとに成果となる業績と判断評価を記載し、学術的意義に関して卓越した水準（SS）2件と優秀な水準（S）6件、社会・経済・文化的意義に関して優秀な水準（S）1件という評価を与えた。

このようにして作成した「現況調査表」「研究業績説明書」に対して、大学改革支援・学位授与機構は、平成29年3月の「学部・研究科等の研究に関する現況分析結果：東京外国語大学」の中で、本研究所の「研究活動の状況」「研究成果の状況」がそれぞれ「期待される水準を上回る」、「質の向上度」が「高い質を維持している」と、高い評価を与えている。

I-2 研究活動

I-2.1 概要

本研究所は、アジア・アフリカの言語文化に関する総合的研究を目的とする大学間の共同利用研究所として1964年に設置された。基本的に言語学、文化人類学、歴史学、地域研究の各分野の研究者から構成されている。2014年に創立50周年を迎えたが、過去半世紀以上にわたって、国内外の共同研究や海外学術調査の組織化、研究資料の蓄積と公開、言語研修、辞典編纂などを通じて、この分野の研究推進に主導的な役割を果たしてきた。

2010年度から新たな共同利用・共同研究拠点（以下、拠点と略）制度の下で、「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」（研究分野としては言語学、文化人類学、地域研究）としてスタートを切るにあたり、本研究所は、拠点としての中長期的な目標を「今日、人類の7割を超える人びと（世界総人口約66億人のうち48億人以上）が暮らすアジア・アフリカ地域の多様な言語・文化のあり方を研究し、中長期的には、21世紀の地球の見取り図を描くうえで必要不可欠な、アジア・アフリカ世界に関する新たな認識の枠組みを提供するための基盤形成に寄与する一方、この地域の多様な言語・文化のあり方をモデルに、未来の多元的世界の発展可能性を追求すること」と位置づけ、目標達成のために以下の3つの領域において、国内外の関連研究者コミュニティによる共同利用・共同研究を推進していくことを活動の中心に据えた。

- 1) 臨地研究（フィールドサイエンス）に基づく国際的研究拠点としての共同研究プロジェクトの実施
- 2) アジア・アフリカ諸地域の言語・文化等に関する研究資源の収集・分析・編纂及び研究成果の発信
- 3) 研究活動及び研修・出版・広報等の活動を通じた次世代研究者養成

このような研究活動・研究事業を強力に推進するため、本研究所は2008年度以来所内及び運営諮問委員会（当時）において継続的な検討を行ったすえ、文部科学省の国立大学評価委員会からも高い評価を受けていた研究ユニットをより重点化する形で、2010年度に4つの基幹研究（「言語ダイナミクス科学研究」「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」）を発足させた。これらの基幹研究は、本研究所が重視する研究領域を明示するとともに、共同利用・共同研究課題とも連動しながら、拠点としての活動を一層深化・充実させる機能を期待されていた。

さらに2016年度には、共同利用・共同研究拠点第2期の開始に合わせて、2004年度以来12年ぶりにプロジェクト研究部をディシプリン別の3研究ユニット（言語学、文化人類学、地域研究・歴史学）に再編する一方、基幹研究も「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」の3つに組み替え、新たなスタートを切ることとなった。これと並行して、従前から設置されている2つのセンター（情報資源利用研究センター及びフィールドサイエンス研究企画センター）、また対外的に形成されてきた2つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点（GICAS）及び中東イスラーム研究拠点も既形成拠点としての研究活動を継続している。所員の多くは基幹研究、既形成拠点またはセンターに所属し、共同利用・共同研究拠点にふさわしい国内外の研究者との密接な協力に基づく共同研究活動を推進している。

こうした体制の下で、2016年度に本研究所が遂行した具体的な研究活動は次の通りである。

1. 特別経費「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究」に基づく共同利用・共同研究課題29件を実施した。
2. 急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に連関させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」を新たに発足させ、3つの基幹研究の合同研究集会を開催して、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図った。これと並行して3つの基幹研究、すなわち「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」が活動を行い、それぞれ国際シンポジウム、公開研究会、公開セミナー、ワークショップなどを組織した。【詳細は [II-3.3.1 アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築](#) を参照】

3. 情報資源利用研究センターでは、研究資源の構築と発信を通じた共同利用を進めるため、国内外の研究者が利用可能な電子辞書の充実（モンゴル語、満洲語、ハウサ語、チュルク諸語など）、またヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析システムの改良に努める一方、新たに故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データを電子化し、メタデータを作成して公開を開始した。【詳細は [II-3.1.1 情報資源利用研究センター](#)を参照】
4. フィールドサイエンス研究企画センターでは、当該分野の新たな研究手法の開発を目指す「フィールドサイエンス・コロキウム」および領域横断的な研究の可能性を発掘する「フィールドネット」の両事業を推進した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)を参照】
5. 海外研究拠点（バイルートの中東研究日本センターおよびコタキナバル・リエゾンオフィス）を維持・運営し、共同研究、国際ワークショップ、講演会を実施した。【詳細は [II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)を参照】
6. アジア・アフリカ地域における現地調査研究やその他の専門的業務に役立たせることを目的に、東京会場において琉球語、大阪会場においてヒンディー語の言語研修を実施した。あわせて、教材の開発と公開を行った。
7. 次世代研究者養成事業として「中東☆イスラーム研究セミナー」、「中東☆イスラーム教育セミナー」、「文化／社会人類学セミナー」などを引き続き実施した。
8. 基盤 B 以上の科学研究費補助金による基礎的研究 15 件をはじめ、外部資金を導入した各種研究プロジェクトを実施した。
9. 中東イスラーム研究拠点（既形成拠点）が大学共同利用機関法人人間文化研究機構（NIHU）のネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」（中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして」）に副中心拠点として加わり、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館を始めとする全国の4機関と連携しながら、中東・イスラーム研究の発展に尽力した。【詳細は [I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点](#)を参照】

なお、ついでながら本研究所は、国立大学法人の第2期中期目標期間が終了した2016年度末に文部科学省の国立大学法人評価委員会が大学改革支援・学位授与機構に委託して行った「学部・研究科等の研究に関する現況分析結果」において、「研究活動の状況」「研究成果の状況」について「期待される水準を上回る」、質の向上度についても「高い質を維持している」との高い評価を得た。また、同じ国立大学法人評価委員会による東京外国語大学の「中期目標の達成状況に関する評価結果」においても、本研究所の活動実績が「非常に優れている」と判定され、東京外国語大学が「研究に関する目標」について、86ある国立大学法人の中でわずか4法人しか受けなかった「非常に優れている」という判定を受ける原動力となった。

I-2.2 基幹研究

I-2.2.1 概要

本研究所において、多くの所員がそれぞれ一つの共同研究プロジェクトの主査となることは、研究の多様性という点では評価できるものの、研究所が組織全体としてどのような研究を目指し、何を達成しているのかが見えにくい。

こうした意見は1990年代に入ってから、研究所の内外で再三表明されてきた。すなわち、研究所として重点をおくべきテーマをより明確にすべきではないかという指摘である。当時「重点共同研究プロジェクト」というカテゴリーを設定したのは、そうした問題提起への主体的な回答に他ならない。その後、必ずしも議論が深まったとは言えなかったものの、2004年度に国立大学の法人化を迎えるに至り、本研究所は1プロジェクト研究部（言語動態、情報資源戦略、コーパス、文化動態、政治文化の5研究ユニットから構成）、2センター（情報資源利用研究センターとフィールドサイエンス研究企画センター）体制の下で、第1期中期目標期間に臨むこととなった。このうちプロジェクト研究部内の5つのユニットは、機械的に所員を分類するのではなく、なんらかのテーマの下に、実質的な所員同士の共同研究がなされることを目指して設置された。

このプロジェクト研究部に関しては、本研究所が共同利用・共同研究拠点に移行し、かつ第2期中期目標期間に突入した2010年11月5日付で、文部科学省の国立大学法人評価委員会から、柔軟な研究実施体制の整備

の具体的取組例として、「プロジェクト研究部の中に設置した複数の研究ユニットを通じて、『小規模コーパスデータ分析のためのツール開発』『心身論』『異文化交渉がつくる歴史認識』『言語の構造的多様性と言語理論』等の機動的な研究プロジェクトを実施している【東京外国語大学】」との評価を得たものの、同時に問題点も存在していた。

まず、研究所としての重点研究領域が明示されなかったことは、研究所を代表する事業と個人研究との間の線引きや、研究事業・プロジェクト間における優先順位の設定を困難なものにした。次に、1プロジェクト研究部・2センター体制の下では人員の流動性を確保することも極めて困難であった。言うまでもなく、一定期間ごとに所員をユニットやセンター間で異動させても、所全体としての研究が活性化するわけではない。このような状況の中、2010年度からの共同利用・共同研究拠点制度の導入や第2期中期目標期間開始を前にして、本研究所所長（当時）は所員の活力源としての各自の研究テーマを尊重するとともに、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を提起した（2009年4月の教授会）。

その後、本研究所が2009年6月25日付で共同利用・共同研究拠点として認定された際に、期せずして「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という拠点認定審議における意見が合わせて通達された。本研究所執行部はこの意見を真摯に受け止めるとともに、重点研究領域を明確にするプロセスの加速が必要であると考え、将来計画検討委員会（当時）とともに具体策の検討を重ねた。

その結果、所内で重点となる研究領域（テーマ）を立て、所員がその研究領域（テーマ）について研究を推進することが提起され、重点となる研究領域は「基幹研究」という名称をもって呼ぶことが定められた。そして基幹研究は、共同利用・共同研究課題と有機的に連動することによって、本研究所が主導し、外部の研究者コミュニティとともに行う重点研究を明示するものとして位置づけられることとなった。2010年度からの基幹研究発足を目指し、2010年1月から2月にかけて所員のイニシアチブにより、共同利用・共同研究拠点としての分野に応じて3件から4件の基幹研究を採択するという方針の下、「言語ダイナミクス科学」（言語学）、「人類学におけるミクロ・マクロ系の連関」（人類学）、「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」（歴史・地域）「アフリカ文化研究に基づく多元的世界像の探求」（歴史・地域）の4件が基幹研究として採択された。基幹研究は、発足から3年目の中間評価を経たうえで継続が認められるほか、予算の配分、新規採用人事に関しても重視されることになった。本研究所における基幹研究の3年に及ぶ活動は、2012年11月7日に公表された「国立大学法人・大学共同利用機関法人の改革推進状況」において、国立大学法人評価委員会から、共同利用・共同研究に関する「特色ある取組例」として取り上げられ、「アジア・アフリカ言語文化研究所では、中期的研究戦略の共同研究軸である4つの『基幹研究』へ予算を優先的に配分するとともに、公募による共同研究課題計22件（継続分を含む）を実施している。【東京外国語大学】」と評価されるに至った。なお、人文社会系の国立大学附置研究所の中で取り上げられたのは本研究所の事例のみであったことを付言しておく。

2012年度にはさらに、前述の方針に従って、外部評価委員会による基幹研究の中間評価が実施された（2012年12月8日）。外部評価委員会委員は、佐藤源之（東北大学東北アジア研究センター・電波応用工学）、関本照夫（国立民族学博物館・人類学）、堤研二（大阪大学大学院文学研究科・人文地理学）、長野泰彦（総合研究大学院大学副学長・言語学）、林佳世子（東京外国語大学総合国際学研究院・歴史学）の5氏に委嘱し、①研究の実実施計画、②研究活動・成果の公開、③今後3年間（2013年度～2015年度）の活動計画について、各基幹研究代表から提出された書類と当日のプレゼンテーションに基づき、個々の基幹研究に対する評価を行っていただいた。その結果、4つの基幹研究はいずれも2013年度以降2015年度までの活動継続が認められた。

2013年度以降は、中間評価におけるコメントを踏まえ、それぞれの基幹研究が研究内容の充実を図る一方、研究活動や成果が所外からよりいっそうアクセスしやすくなるよう、研究所ホームページの一部改修を行った。さらに4つの基幹研究は、2014年に本研究所が創立50周年を記念して開催したシンポジウムでも、現在の所の研究を代表する形で研究報告を行い、最終年度となった2015年度もそれぞれに活発な研究活動を展開した。

2010年度から2015年度にかけて活動した4つの基幹研究はこうして大きな成果を挙げたものの、第3期中期目標期間の始まる2016年度には、2004年度以来12年ぶりに改編されたプロジェクト研究部の分野別研究ユニットを代表する形で、新たに「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（言語学）、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」（文化人類学）、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」（地域研究・歴史学）の3つの基幹研究が活動を始めた。3つの基幹研究はそれぞれ、国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して研究活動を進める一方、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」（2016～2021年度）にも取り組んでいる。この全所プロジェクトは、アジア・アフリカ地域の直面する現代的諸問題の解決に向けて、緊急解決すべき問題が等しく「少数派／弱者の危機」という側面を持つことから、3分野

の基幹研究が有機的に連携し、合同研究集会を実施して、現代的諸問題研究の飛躍的發展を図るもので、文字どおり第3期中期目標期間の研究所の顔となることが期待されている。

I-2.2.2 多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)

代表者：中山俊秀

関連所員：呉人徳司，澤田英夫，星泉，渡辺己，塩原朝子，品川大輔，山越康裕，児倉徳和

ウェブサイト：<http://lingdy.aacore.jp/jp/>

研究の概要

本基幹研究は、アジア・アフリカ地域を中心に、研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築することを目的としている。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元することをめざしている。

具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する：

- ・言語の記録・保存に関する共同研究
- ・言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- ・循環型の言語研究体制を支える技術開発
- ・言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- ・現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- ・循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

関連プロジェクト

- ・AA研共同利用・共同研究課題「通言語的視点から見たオーストロネシア諸語の情報構造」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築—青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点から見た琉球諸語のケースマーキング」
- ・AA研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」

研究計画

2016年度は以下の活動を計画していた。

アジア・アフリカ地域を中心に、各地の研究機関だけでなく現地の少数言語・方言コミュニティとも連携することで、コミュニティが言語・文化の多様性を保持するために、自ら言語記録活動に関与し、その活動を通じて諸研究機関のさらなる研究の進展を促す循環型の言語研究体制を構築する。また、言語資源をもとにした共同研究活動などを通じて、AA研がこれまで培ってきた研究実績を日本社会に還元する。具体的には、以下の諸事業を統合的に実施することにより、調和のとれた多言語・多文化共生社会の実現を支援する。

- a. 言語の記録・保存に関する共同研究
- b. 言語記録活動に従事する次世代の研究者・現地コミュニティ人材の育成
- c. 循環型の言語研究体制を支える技術開発
- d. 言語資源の効果的な蓄積・利用のためのネットワーク構築
- e. 現地コミュニティに向けたアウトリーチ
- f. 循環型の言語研究体制モデルの普及と成果発信

研究成果（2016年度）

本年度は以下の活動を軸に、研究事業を活発に展開し、計画は十分に達成された。

研究面では、共同利用・共同研究課題を今年度新たに3件発足させ計8件の共同研究プロジェクトを組織し、危機言語及び言語多様性に関する学術研究ネットワークを拡充させた。研究集会（国際2回、国際・国内研究集会24回）を通じて言語の構造的多様性と研究未開発言語の記録・再活性化に関する研究を多面的に推進した。また、研究未開発言語調査派遣、研究資料の電子化を通じて少数言語の記録・記述研究を進めた。

研究理論、研究手法に焦点を当てたワークショップ（海外研究機関との連携による国際ワークショップ2回及び国内ワークショップ4回）提供や共同研究企画運営インターンシップを通じた若手養成事業も計画通り進行した。

研究還元面でも、インドネシアやロシアの現地コミュニティなどを対象としたアウトリーチ活動を行い、国際的事業を活発化させるとともに、国内向けにも公開映画上映会・講演会など（6回）を開催した。また、アーカイブ構築に向けた研究、技術インフラの整備などにより研究成果共有・研究交流ネットワークの形成を進めた。また、インドネシア、中国、アメリカ、ロシア、ドイツ、イギリス、オーストラリア、カナダ、マレーシア、ミャンマーなどの研究機関を訪問し、連携事業をより活発化すべく研究交流関係の構築を行った。

学術研究・社会還元のための研究資源・成果共同利用を目的としたオンラインデータベース（4件）などの構築・公開を行った。

『アジア・アフリカの言語と言語学』（AALL）の企画編集を行った。

以上のように、本事業の活動は当初の目的を十分に達成し、昨年度構築した事業基盤を効果的に拡充することができた。

I-2.2.3 アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2

代表者：西井涼子

関連所員：河合香吏、栗原浩英、高島淳、床呂郁哉、深澤秀夫、外川昌彦、佐久間寛、吉田ゆか子

ウェブサイト：<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/>

研究の概要

人類学はある時期まで、小規模社会のフィールドワークを活動の中心としてきた。しかし近年、上位の政治社会にあたる国民国家や「近代世界システム」をはじめ、イスラーム文化圏、中華文化圏、インド洋海域世界といったトランスナショナルな規模にまたがる社会・文化圏、さらにはグローバルな地球環境まで視野に入れたマクロ・パースペクティブへの関心が高まってきた。

また他方では、その対極にむかう方向性として、個々人の身体性を考察の起点とした間身体的実践、ハビトゥス、熟練と暗黙知、アフォーダンス、社会空間など、ミクロー・パースペクティブを軸とした問題系も同時に浮上しつつある。こうした国内外の研究動向をまえに、人類学的思考として現在求められているのは、地域別の研究や個別の主題に基づく調査研究をこえた次元での新たな概念化と理論化の試みである。本研究は、その点で先導的な役割をになうことを目標とする。

本年度は昨年度に引き続き、ミクローマクロ系の連関をめぐる人類学的考察にとっての今日的な諸主題が、フィールドで感知される人びとの情動と、当の情動のもとで流動的に編成される社会的なものとの、交叉の形態に関する共同研究からさらに焦点化して、「リスク・ハザード」に対処する人類の知の検証とそれが切り開く可能性にむけてテーマで研究を推進した。

具体的には本年度は、国際ワークショップや公開セミナー、合評会、および公開シンポジウム等を通じて共同研究をすすめ、人間の不確実性や偶然性のただなかで営まれていることを今ほど痛切に感じることはない状況のもとで、アジア・アフリカからの「在来知」の個別を人類学が現場＝フィールドから、個別を越えた普遍的視野において探究することを本基幹研究のさらなる先導的課題として導いた。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究（4）」

- AA 研共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」
- AA 研共同利用・共同研究課題「『もの』の人類学的研究(2)(人間/非人間のダイナミクス)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「『プレゼンズ・アフリケーヌ』研究—新たな政治=文化学のために」

2016年度の主な研究活動

本年度の主な研究活動は以下の通りである。

- ウェブサイトの構築を更新した：<http://www.aa.tufts.ac.jp/kikanjinrui/>
- 国際ワークショップ1回、英語による講演会1回、公開シンポジウムを5回、公開合評会を2回開催した。
- 若手育成の研究セミナーを日本文化人類学会と共催により開催した。
【I-4.1.4 文化/社会人類学研究セミナーを参照】
- 2016年5月の合評会・シンポジウム「体制転換の人類学」の報告書、11月のシンポジウム「『もの』の人類学をめぐって—脱中心主義的人類学の可能性と課題」の報告書、12月のシンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」の報告書、同じく12月のシンポジウム「バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線」の報告書、2017年2月のシンポジウム「河合香史編『他者—人類社会の進化』(京都大学学術出版会、2016)をめぐって」の報告書、計5冊を刊行した。

I-2.2.4 中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景

代表者：黒木英充

関連所員：飯塚正人，小田淳一，苅谷康太，近藤信彰，高松洋一，床呂郁哉，錦田愛子

ウェブサイト：<http://meis2.aacore.jp/?lang=ja>

研究の概要

本基幹研究は、中東から東南アジアまでを含めたイスラーム圏において観察される人間移動と、諸宗教宗派・民族の織りなす社会関係を連関させて「多であること」の問題性を追究する。多元的社会の生成過程とイスラーム的ネットワーク拡張の動態、移民・難民の政治社会空間に対する影響、個人・集団のアイデンティティ戦略と政治思想の連関などの問題に取り組む。

本基幹研究は、2005(平成17)～2009(平成21)年度「中東イスラーム研究教育プロジェクト」の発展系である。バイルート、コタキナバル両海外拠点を管轄するフィールドサイエンス研究企画センターや、MEIS(Middle East and Islamic Studies)「中東イスラーム研究拠点」と連携しながら、バイルート拠点において共同利用・共同研究課題を国際的規模で推進する。また中東☆イスラーム研究/教育セミナー、バイルート若手研究者報告会や歴史文書セミナーなどを通じて次世代研究者の育成に当たる。さらに歴史的画像資料などの修復やデジタル化、それを使った研究成果の社会還元を積極的に行う予定である。

関連プロジェクト

- AA 研共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」
- AA 研共同利用・共同研究課題(JaCMES 実施分)「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies(中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究)」
- AA 研共同利用・共同研究課題(KKLO 実施分)「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia(東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究)(第2期)」
- AA 研共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民/難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究」
- AA 研共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為(第二期)」

研究計画

具体的な研究推進、次世代研究者育成、研究成果の社会還元の活動は以下を予定していた。

1. 共同利用・共同研究課題をバイルート JaCMES, コタキナバル KKLO にて国際共同研究として実施する。
2. 中東☆イスラーム研究/教育セミナーにより次世代研究者の育成に資する。
3. オスマン文書セミナーにより当該地域の歴史研究者の養成に資する。
4. 中東都市多層ベースマップシステムの充実に資する。

5. 本研究活動の全体をウェブサイト上で公開する。
6. JaCMES, コタキナバル・リエゾンオフィスにおいてラウンドテーブル型研究会や講演会を開催し、現地研究者との研究交流、研究活動の現地社会還元を図る。

研究成果（2015年度）

具体的な研究推進、次世代研究者育成、研究成果の社会還元の活動は以下の通りである。

1. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies（中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究）」は、第1回研究会をバイルートの中東研究日本センター（JaCMES）にて2016年9月1・2日に、第2回研究会をAA研にて2017年3月3・4日に実施した。2回の研究会を通じてレバノンの共同研究員と共に、参集者全員が英語による研究報告・コメントを行った。
2. 海外拠点実施分の共同利用・共同研究課題「Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia（東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究）（第2期）」は、第8回研究会を2016年8月28日にHotel Meridien Kota Kinabaluにて、第9回研究会を11月13日にAA研にて、第10回研究会を2017年3月31日にAA研にて開催した。
3. 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」は、第8回研究会を2016年11月19日に本郷サテライトにて、第9回研究会を総括会議として3月27日にAA研にて開催した。
4. 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加」は、第7回研究会を2016年7月10日にAA研にて、第8回研究会を10月29日に、第9回研究会を総括会議として2017年2月22日に関西学院大学梅田キャンパスにて開催した。
5. 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為（第二期）」は、第1回研究会を2016年10月1日にAA研にて、第2回研究会を2017年3月19日にAA研にて開催した。
6. 次世代研究者養成のために、2016年9月18～21日に21名の受講生を対象に「中東☆イスラーム教育セミナー」を、12月16～18日に4名の受講生を対象に「中東☆イスラーム研究セミナー」を、いずれもAA研にて実施した。
7. 現地研究者との研究交流を目的としたラウンドテーブル（JaCMES Round Table “The future of Syria and the surrounding countries”）をJaCMESにて2016年11月29日に実施し、日本・レバノンから5名のパネラーを中心とした討議を行った。
8. 2017年1月7・8日にAA研にて「オスマン文書セミナー」を開催し、延べ43名の受講生を対象にオスマン帝国史を中心とした歴史研究者の養成に貢献した。
9. 中東都市多層ベースマップシステムについて掲載地図を増やすなど、さらなる充実を期した。
10. 本研究活動の全体を俯瞰できるウェブサイトを維持・発展させ、研究成果の公開に資した。
11. 2016年3月22日にバイルートの映画館Metropolis Empire Sofilにて第14回JaCMES公開講演会・第2回映画会議“Protesters on the Street”を開催した。
12. 2016年8月9-13日にKKLOにて「マレーシア サバ州で話されている言語に関するワークショップ」を開催した。
13. 2017年3月29日にAA研にて、中東・イスラームに関係するAA研の特任助教・研究機関研究員各1名の研究成果報告の研究会を開催した。

I-2.3 共同利用・共同研究課題

I-2.3.1 概要と外部評価

本研究所は、文部科学大臣によって言語学、文化人類学、地域研究分野の共同利用・共同研究拠点に認定された「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」であり、公募による共同利用・共同研究課題は、共同利用・共同研究拠点としての本研究所が最も重視する事業であることから、公募によらずに実施してきた従来の共同研究プロジェクトとは区別して、「課題」という新たな名称を採用している。共同利用・共同研究拠点の認定制度は、国公立大学を通じて研究者が共同で研究を行う体制を整え、わが国全体の学術研究をさらに発展させる目的で、2008年に文部科学省が創設したもので、大学に附置された研究施設のうち「全国の関連研究者に利用させることにより、わが国の学術研究の発展に特に資する」と認められたものだけが共同利用・

共同研究拠点に認定された。

このようにして認定された共同利用・共同研究拠点に対し、文部科学省は「募集による共同利用・共同研究の実施」と「採択にあたって学外委員が半数以上を占める審査委員会の審査」を義務づけており、これに従って、本研究所では共同利用・共同研究拠点に移行する2010年度を前に、全国の関連研究者から新たに共同利用・共同研究課題を公募し、学外委員が過半数を占める審査委員会の厳正な審査を経て11件の共同利用・共同研究課題を採択した。続く2011年度にも同様の方式で6件、2012年度に8件、2013年度に10件、2014年度に8件、2015年度に10件の共同利用・共同研究課題を採択し、結果として2016年度には計29件の共同利用・共同研究課題を実施することとなった。ちなみに、これら課題に参画するメンバーの数は所員延べ63名、共同研究員延べ376名の合計439名、2016年度中に開催した課題研究会の総数は80回、研究業績総数は論文・図書を合わせて517点にのぼる。

これら進行中の共同利用・共同研究課題に対する評価は、年度末に提出される「実施年次報告書」を共同研究専門委員会が書面審査する形で行われ、翌年度以降の研究の発展に寄与している。

他方で、本研究所は2016年度も共同利用・共同研究の新規課題を公募し、共同研究専門委員会による審査を経て、応募のあった11件のすべてを採択した。これにより、2017年度には計28件の共同利用・共同研究課題を実施することになった。なお、公募による共同利用・共同研究課題の審査にあたっては2010年度の共同研究専門委員会による指摘を受け、従来の5項目の審査基準を3項目（「研究の背景」「期待される研究成果」「研究の実施計画」）に整理したうえ、それに基づいて各共同利用・共同研究課題に対する点数評価を行った。

【本年度の各共同利用・共同研究課題の成果の概要等については、[I-2.3.2 共同利用・共同研究課題](#)を、研究会実施状況及び研究業績一覧については、[II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況](#)を参照】

I-2.3.2 共同利用・共同研究課題

“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収

集からのアプローチ

研究代表者名： 星 泉 参加者：所員 1 共同研究員 7

研究期間： 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

昨年度までに拡充した共同編集用チベット牧畜語彙データベースをもとに執筆を進め、辞典の評価版を完成させるのが主たる目標である。本課題のメンバーで昨年度より実施中の科研費基盤研究(B)を併用し、以下のような計画のもとに研究を進める。

(1) 牧畜語彙辞典の評価版の作成

昨年度現地調査で収集した2,000語弱の牧畜語彙の整理を進め、解説記事と辞典項目の執筆を行う。メーリングリストと研究会で細部の打ち合わせを行い、年度末には辞典の評価版（プロトタイプ）を完成させる。データの一部はウェブサイトで一般公開する (<http://nomadic.aa-ken.jp>)。

(2) 研究成果の公開

6月に開催される国際チベット学会で、本研究のこれまでの成果をまとめたパネルセッションを実施する。研究成果は昨年度同様、論文やエッセイの形で発表するとともに、公開ワークショップという形で研究成果を公表する。公開ワークショップとあわせて、昨年度完成させた牧畜村の一日を撮影した短編映像集の上映会を実施する。

(3) 現地還元（アウトリーチ）

9月に実施予定の追加調査の際に、現地の大学にて現地の学生や若手研究者を対象とした調査法に関するワークショップを行う。

研究実績の概要 (2016 年度)

3 年間に実施した現地調査と共同研究により、青海チベットにおける牧畜民の生活知の様々な面を明らかにすることができた。具体的には家畜の認識語彙の調査結果を体系的にまとめ、乳文化については、搾乳をはじめ、乳製品の加工、およびそれらに関わる儀礼の詳細なデータを記録することができた。また、放牧地や家畜の管理、肉の加工、食生活、テントやかまどに関する語彙、糞・毛・皮に関する語彙についても調査・記録が進んだ。宗教儀礼については、日常生活に関わりの深い儀礼を中心に記録を進め、家畜の放生や山神信仰から呪術に至るまで、多岐にわたる語彙を記録した。牧畜をやめて町暮らしをしている人びとの生活についても記録し、特に若い人たちを中心にローカルレベルで進められている様々な新しい生産活動についての取材をもとに、分析・記述を進めた。調査地の言語の音声特徴を明らかにするための言語調査も行なった。記録した単語は共同編集用のデータベースに蓄積し、整理を進め、完成には至らなかったものの、辞書の試作を進めた。

調査の際には、現地出身の大学院生を同行してトレーニングを施した他、現地の複数の団体の招きでチベットの学生等に向けた講演を行うなど、現地向けのアウトリーチ活動も行った。

研究成果を国際的に公表するために国際チベット学会でパネルセッションを組織して研究発表を行った他、国内学会等でも招待講演を行った。最終年度には国際シンポジウムを開催し、チベットから招へいた研究者らとともに議論を深めた。

また、一般向けの活動としては、最終年度に企画展『チベット牧畜民の仕事展』を実施し、本課題で制作した記録映像『チベット牧畜民の一日』とともに好評を博した。雑誌『FIELDPLUS』vol. 17 の巻頭特集を担当した他、『チベット文学と映画制作の現在』で2号にわたり「牧畜民の暮らしと文化」という巻頭特集を組み、成果を分かりやすく提示し、読者から大きな反響があった。

成果の公開状況、計画

- (1) 国際チベット学会でパネルセッションを組み、本課題の共同研究員および研究協力者のうち 6 名が研究発表を行ったほか、各メンバーが関連する研究を各種口頭発表を行い、また論文や書籍の形で公刊した。
- (2) ウェブサイト (<http://nomadic.aa-ken.jp>) にて研究成果の一部を公開している。
- (3) 2017 年 2 月に AA 研で一般向けの企画展「チベット牧畜民の仕事展」を実施し、映像作品『チベット牧畜民の一日』の上映会も実施した。
- (4) 2017 年 2 月に AA 研で国際シンポジウム「チベット牧畜民の「今」を記録する」を実施し、3 年間の研究成果を発表した。
- (5) 2016 年 7 月に刊行された『FIELDPLUS』vol. 17 の巻頭特集として「チベット牧畜民の「今」を記録する」が掲載された。
- (6) 2017 年 3 月に刊行された『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 4 の巻頭特集として「牧畜民の暮らしと文化 2」が掲載された。

以上の通り、研究発表、論文、著書で研究成果を公開した他、研究成果の一般向けの公開にも尽力した。

- (1) 当初計画よりも遅れているが、編纂作業を継続し、2017 年度中に『チベット牧畜文化辞典 (仮題)』の評価版を刊行する予定である。
- (2) 辞書の電子版も 2017 年度中に公開する。

インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築

研究代表者名： 塩原 朝子 参加者：所員 2 共同研究員 19

研究期間： 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

昨年度同様、以下の3つの事業を継続して行う。

- (1) 共同研究員および研究協力者がフィールドで得た一次データの処理について知見を共有する
- (2) 共同研究員および研究協力者がフィールドで得た音声データ、動画データをメタデータ・アノテーションとともにアーカイブする作業を進める
- (3) インドネシアのクワンパで言語ドキュメンテーションに関するワークショップを開催し、現地の研究者と共同でのデータアーカイビングを検討する。

また、既に得られたデータを用いた次の新しい試みを開始する。

- (4) 文法研究に利用するアノテーションの方法の検討
- (5) 現地に研究成果を還元する方法の検討

(4) については文に現れる名詞句の指示物の animacy と文法関係に関するアノテーションをつける手法である GRAID (Haig and Schnell 2011) や名詞句の談話的ステータスに関するアノテーションのための手法 RefLex (Riester and Baumann 2013) の導入を検討する。(5)については4月に共同研究員であり外国人研究員として着任中である Anthony Jukes 研究員の研究協力者である Jahja Poli'i 氏をインドネシアから招聘し、インドネシアの危機言語の一つである Tombulu 語の辞書作成を行う。また、(3)で交流を持つ現地話者とともに、現地の民話を収集し、出版する方法を検討する。

研究実績の概要（2016年度）

昨年度に開催したクワンパでのワークショップによって収集したデータをアノテーションとともにオーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC に登録した。

国内外での研究会を通じて、マレーシアサバ州とインドネシアヌサ・トゥンガラ州の7言語のデータを集中的に収集した。これらのデータのうち、ドゥスン語のデータはオーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC に登録申請中である。また、スグ語、イラヌン語のビデオデータを YouTube で公開した。3月の「インドネシアヌサ・トゥンガラ・ティモール州の危機言語」ワークショップで収集したデータについては、現在話者と転写・翻訳などの作業を進めている。また、共同研究員がこれまでに収集したデータの PARADISEC からの公開も行った。

またデータのコーパス化に関しては、研究協力者の Schnell 博士の協力を得て、GRAID という指示対象に人称・有生性・文法機能に関する情報を付与する規格により、文法情報に関するアノテーションを行うことに着手している。アノテーションのついたテキストは、順次 Multicast: Multilingual Corpus of Annotated Spoken Texts (<https://lac.uni-koeln.de/en/multicast/>)より公開予定である。

最終年度にあたり、これまでインドネシアで行ってきたワークショップの内容・意義を Jukes, Shiohara and Yanti (2017), Yanti (2017) の形で学術論文として公開した。

終了報告

このプロジェクトはインドネシアを中心とする地域の少数言語・危機言語のデータをできるだけたくさん、できるだけ良い形で後世に残すこと、またそのためのネットワークを構築することを目的として活動を行った。

研究期間内の実施状況と成果は以下のとおりである。

- (1) 国内研究会において、共同研究員が共同で各自のデータを処理し、アノテーションをつけ、その成果としていくつかの危機言語のデータを AA 研のサイトや YouTube, またオーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC

にアーカイブした。また共同研究員の間で、今後得られたデータに関しても、適切に処理しアーカイブを行うルーティンができあがった。アノテーションは転写・翻訳といった基本的なものばかりでなく、GRAID など文法タグまで含む規格を導入することにより、さらに汎用的な利用を可能とするコーパスの構築の筋道もできた。

(2) インドネシア・マレーシアで開催したワークショップにより、日本人研究者、インドネシア内外の危機言語を研究する研究者、インドネシア・マレーシアの話者コミュニティとのネットワークを構築するとともに、現地話者および研究者と継続的にドキュメンテーションを行う体制を作ることに成功した。

(3) インドネシア・マレーシアで開催したワークショップの内容に基づき、類似のアウトリーチ活動を行う研究者にとって有用な事柄を論文を執筆し、公刊した。

成果の公開状況, 計画

2016 年度にクーパーンで開催したワークショップで得られた言語データ (PARADISEC より公開)

NTT2015: Recordings of various texts in several languages spoken in Nusa Tenggara Timur

<http://catalog.paradisec.org.au/collections/NTT2015>

共同研究員内海敦子 (明星大学) のトンサワン語 (北スラウェシ, インドネシア) のデータ (PARADISEC より公開)

<http://catalog.paradisec.org.au/collections/AU1>

2016 年 8 月にコタキナバルで開催したワークショップで得られた言語データ (YouTube で公開)

イラヌン語

<https://www.youtube.com/watch?v=JLlo3Tim7A4&t=54s>

スグ語

<https://www.youtube.com/watch?v=qvv7nV8TR2o>

GRAID 規格によるアノテーションのついたテキストは、順次 Multicast: Multilingual Corpus of Annotated Spoken Texts (<https://lac.uni-koeln.de/en/multicast/>)より公開予定である。

「インドネシア ヌサ・トゥンガラ・ティモール州の危機言語」ワークショップで収集したデータについては、PARADISEC で公開するとともに、一部 (ヘロン語の単語) を加工し研究所内の情報資源利用研究センターのプロジェクトとして公開する予定である。

朝鮮語アクセント・イントネーション研究

研究代表者名: 伊藤 智ゆき 参加者: 所員 1 共同研究員 7

研究期間: 2014 (平成 26) 年度~2016 (平成 28) 年度

研究計画

2016 度は、2015 年度までに行ってきた調査・研究を継続し、更に多くのアクセント資料の収集を行う。また、これまでに収集したデータについて、詳細な分析と成果公開 (学会発表, 論文執筆等) を進める。研究内容としては、例えば以下のようなものが挙げられる。

(1) 全羅道方言アクセントに関する分析: 他方言に比べ、研究があまり進んでいない全羅道方言について、より多くのアクセント資料を収集する。更に、頭子音のタイプや母音の長短と関連して、実際のピッチがどのように実現されるのか、分析を進める。また、全羅道方言とソウル方言に見られる音調パターンの成立背景について検討する。

- (2) 慶尚道方言の複合語アクセント分析：慶尚道方言の複合語アクセントは、原則として前部要素決定型と考えられているが、実際にはさまざまな例外が見られるようである。その実態の解明を目指す一方、一複合語が複数のアクセント句から成る場合、分節音の実現にどのような影響があるのか、考察する。
- (3) 慶尚道大邱方言の固有語アクセント研究：大邱方言の固有語アクセントに関し分析を進め、慶尚南道方言との違いについて、最適性理論に基づき、説明を試みる。
- (4) 小倉進平による朝鮮語音声の観察の分析：小倉進平が、『朝鮮語方言の研究』(1944)などの論著において行った方言調査の報告について、そこで用いられている音声表記や、彼が行った音声学の観察について、分析を進める。
- (5) 慶尚道・全羅道境界地域で話される方言アクセントの分析：慶尚道・全羅道の境界地域で話される方言は、慶尚道型アクセントと類似する特徴を持ちながら、様々な相違点も存在する。それらの方言のアクセント体系について、調査及び分析を行う。
- (6) 慶尚道方言の用言アクセント分析：慶尚道方言の用言アクセントに、どのようなバリエーションが見られるか明らかにする。また、語幹構造（頭子音、末子音、母音のタイプ）とどのような相関性が見られるか、分析を進める。
- (7) 慶尚道・全羅道方言の漢字語アクセント分析：慶尚道・全羅道方言の漢字語が、中期朝鮮語アクセントとどのように対応しているのか、また歴史的にどのような変化を辿っているのか、考察する。

研究実績の概要（2016年度）

今年度は、韓国朝鮮語諸方言のアクセント・イントネーションについて、更に詳細な研究を進めた。具体的には、慶尚道方言複合語アクセント研究、慶尚道大邱方言の固有語名詞アクセントに関する通時的・共時的研究、慶尚道方言のイントネーション研究、韓国朝鮮語諸方言アクセント体系に関する、フットを用いた音韻論的分析、ソウル方言の母音長に関する研究、延辺朝鮮語の喉頭素性対立とピッチに関する音響音声学的研究、小倉進平による朝鮮語方言の研究の中での音声記述に関する検討、日本語と朝鮮語における「アクセント推移」に関する研究、中期朝鮮語文献に見られる、アクセント上の変容に関する研究等が挙げられる。

終了報告

プロジェクト全体として、韓国朝鮮語諸方言（慶尚道方言、全羅道方言、江原道方言、ソウル方言、延辺朝鮮語、中期朝鮮語等）のアクセント・イントネーションに関し、インフォーマント調査、文献調査を通じたデータ収集を十分に行うことができた。また、収集したデータに基づき、各方言のアクセント・イントネーションについて詳細な分析を行ってきた。本プロジェクトにおけるこれまでの研究成果をとりまとめ、更に日本語アクセント・イントネーションとの比較も視野に入れるべく、2016年7月2-3日、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所にて、国際シンポジウムを開催した。同シンポジウムにおいては、本共同研究プロジェクトの共同研究員全員が、英語もしくは日本語による口頭発表を行った（主査である伊藤はシンポジウムの企画・進行を務めた）。同シンポジウムでは、様々な先行研究がありながらも未だ定説のない、日本語・朝鮮語祖語の音調体系とその歴史的発展について、両言語のアクセント・イントネーションを専門とする国内外の研究者が集まり、互いに議論することを通して、これまでの研究を更に有機的に発展させる基礎を構築した。

成果の公開状況、計画

本プロジェクトの研究成果は、上記の通り、最終年度開催の国際シンポジウムにて公開済みである。また、同シンポジウム及び2017年3月開催の研究会における研究発表の要旨は、AA研webページにて公開している。また、同シンポジウム以外にも、他の学会における研究発表や学術論文として、成果を公開済みである。

国際シンポジウムでの口頭発表のうち、一部について、論文としてまとめ、AA研ジャーナル（『アジア・アフリカ言語文化研究』）に投稿済みであり、特集号として、2017年度秋に刊行予定である。

アジア地理言語学研究

研究代表者名： 遠藤光暁 参加者：所員 2 共同研究員 18

研究期間： 2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

既に語彙に関しては当初目標とした「アジア全域で 1000 地点以上の密度の言語地図の作成」を達成し、2000 地点程度になっている。今年度は「風・鉄・名詞の数え方」の3項目を3回の研究会でそれぞれ扱う。既に作図や解釈については定着しつつあるが、最終回の項目は文法項目であり、方法論がよく分かっていない点がある。また既存資料に限りがあるので、地点数は1000地点に到達しない可能性もある。

研究集会は各回とも英語で行い、可能な限り海外からのゲストメンバーも1～2名参加してもらうよう働きかける。その報告書となる論文集である *Studies in Asian Geolinguistics* を前年度に引き続き3冊作成し、AA研の電子刊行物として公開したい。

研究実績の概要（2016年度）

第1回研究会は本来2回分の研究会で扱うことを予定していた「風」と「鉄」を予算の都合により1回にまとめて討論したものである。しかし、出版予定の地図集では予定通りおのおの1項目として立項することが可能な内容となった。第2回は「名詞の数え方」として東南アジア・東アジアに広がる類別詞を多く使用する言語に関する報告を中心としつつ、類別詞をほとんど使用しない言語についても扱った。これはこれまでの語彙項目とは異なり、文法項目のサンプルとして重要なものであった。コーディネーターの倉部慶太氏の雛形が当を得たものであったので、複雑な現象を要領よく扱う目処が立った。第3回アジア地理言語学国際会議では自由題で各自の興味に基づきアジア諸地域の地理言語学的研究の発表・討論を行った。通常の研究集会で扱ったテーマの延長線で更に発展させた発表も多く、よりバラエティに富んだ深化した内容となった。

成果の公開状況、計画

2015年度の3回の研究集会の内容と第3回アジア地理言語学国際会議論文集をAA研電子出版物として

Endo, Mitsuaki (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics I*

Endo, Mitsuaki (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics II*

Endo, Mitsuaki (ed.), *Studies in Asian Geolinguistics III*

Endo, Mitsuaki (ed.), *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics* を <https://publication.aa-ken.jp/> に公開した。

2016年度の2回の研究集会の内容を *Studies in Asian Geolinguistics IV, V, VI* として2017年度の早い時期にAA研の電子出版物として公開する予定であり、特にIVとVについては編集もほぼ最終段階にある。

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究 実施年度 2016年度

研究代表者名： Eric Mcready 参加者：所員 1 共同研究員 17

研究期間： 2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

本プロジェクトの目標は、形式意味論・語用論の道具立てを手がかりに、対象言語における談話小辞についての理解を深めることである。昨年度の研究会では、メンバーは多くの必要な道具立てについて知識を得るとともに、いくつかの対象言語における談話小辞の体系について情報を共有した。

本年度の研究会では、意味分析に必要な道具立ての検討を引き続き行うとともに、対象言語の小辞の体系についての経験的観察を進める。さらに、対象言語の言語事実を説明するためには既存の道具立てにどのような修正を加えたらいいのかについても議論を始める。年度末には、メンバーは各自の研究対象言語を分析するにあたって必要なすべての道具立てを身につけることが期待される。また、少なくともいくつかの言語については、実際の言語事実の形式的分析が遂行できるような段階に持っていく。具体的には、情報に関わる小辞の分析で有用な形式語用論の概念である「検討中の疑問 (question under discussion)」やタイ語をはじめとする対象言語の小辞の体系についての研究発表を予定している。

研究実績の概要 (2016 年度)

研究会を2回開催し、各自の研究対象言語の具体的な談話小辞についての言語事実とその説明、談話小辞一般の意味論・語用論の先行研究における位置づけ、意義について、情報共有およびディスカッションを行った。

また、本プロジェクトのメンバーを主な著者とする単行本の出版計画を進めた。各著者は、自らの論文の要旨を執筆し、編者である McCready, 田窪, 野元がそのとりまとめと海外学術出版社との折衝を行った。

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸方言のケースマーキング

研究代表者名： 下地理則 参加者：所員 1 共同研究員 11

研究期間： 2015 (平成 27) 年度～2017 (平成 29) 年度

研究計画

本研究課題は、琉球諸方言のケースマーキングの類型化を行うことを目指している。琉球諸方言の格体系に関して、類型的に特に重要な有標主格性と活格性の問題を重点的に扱いつつ、それに関連する諸現象も視野にいれ、有標主格や活格を生み出すメカニズムにせまることを当初目指していたが、去年度の研究を通して、上記のおおまかなテーマからより具体的かつ本質的な議論に到達した (詳しくは年次報告書参照)。すなわち、(1) 主語・目的語のハダカ標示 (無助詞) を正面から扱うということと、(2) 上記に関連し、主題や焦点などの取り立て性と格標示を切り離さずに統一的に考えるパラダイムを模索するということである。よって、本年度は、(1)(2) を個別方言の格体系の報告に組み込む仕組み (調査票の作成や分析・類型の手法の開発) を整え、次年度に取りまとめる具体的な成果 (書籍) のフォーカスを定めることを目指す。

本年度は3回の研究会を予定している。第1回目の研究会では、上記 (1)(2) を踏まえた調査票の指針 (Analytical Questionnaire, AQ) を代表者があらかじめ用意し、それに沿って格体系の概要を報告しあう。地域ごとにチームを組み、夏休み中のフィールドワークで AQ を埋めるようにし、第2回目、第3回目の研究会で、さらに報告を行う。第3回の研究会の最後の総括で、成果の具体的なフォーカスを定める。

研究実績の概要 (2016 年度)

今年度の成果は以下のとおりである。

上述の通り「無助詞」の問題を通して、他研究機関との連携を図った結果、書籍化につなげたこと、および2017年7月予定の成城大学でのシンポジウム「私たちの知らない<日本語>—本州・九州・琉球の方言と格標示—」(これも、くろしお出版より書籍化の予定) の開催に至ったこと、これらが最大の成果である。一方、研究代表者個人の業績として、Mouton de Gruyter 社から出版された他動性に関する論集に、琉球語の格とアスペクトに関する論考を寄稿したことと、Cambridge University Press から出版予定 (現在校正中) の Cambridge Handbook of Japanese Linguistics に、日琉諸語の格標示体系についての章を寄稿したことが挙げられる。後者については、本共同研究の成果がなければ生まれなかった論考であり、本共同研究のメンバーから集めたデータを含めて、その成果を収録している。

成果の公開状況、計画

共同研究ホームページ (<https://sites.google.com/site/ryutyp/>) を用意している。現在、研究会の議事録は公開しているが、今後、発表原稿を公開予定である。2017年度が最終年度であるため、その成果をとりまとめ、英語で出版する予定である。科研費の公開促進費を来年度申請するか、あるいは別の出版助成を使って、出版する予定である。

公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究

研究代表者名： 児倉徳和 参加者：所員 3 共同研究員 10

研究期間： 2015（平成27）年度～2016（平成28）年度

研究計画

2年目／最終年度である2016年度は、以下の活動を行う予定である。

(1) 文法記述の検討 データ入力班のミーティング（月2回程度）では、2015年度までに対象言語のうち保安語・土族語・東郷語・東部裕固語の文法記述を検討した。これを受け、これら4言語の語彙・テキスト資料を整理・検討する。

(2) 語彙・テキスト資料のデータベース化 2016年度はデータの校閲とデータベース化の作業を共同研究員の栗林均氏との連携により行っていく。データベースのプラットフォームについては、当面 AA 研情報資源利用研究センター（IRC）で公開されている全文検索エンジンを利用する計画である。

(3) 周辺言語の立場からの文法記述、言語データの検討 年3回開催予定の全体ミーティング（研究会）では、データ入力班・分析注釈班のメンバーが分析について発表を行う。

(4) データ利用に関する協議 内蒙古大学の照日格图氏との間で、作成中のデータベースの公開方法および公開範囲についての協議を開始する。

(5) 成果物に関する相談 2014年度の3回の研究会で、プロジェクトで目標とする成果物について相談を行ったが、引き続き相談を行っていく。

研究実績の概要（2016年度）

今年度の3回の研究会では、主に当該地域の言語を専門とし、現地調査の経験をもつ共同研究員と、海外で当該地域の言語の研究を現地調査に基づき行っている研究者の発表を通じ、最新の言語使用の状況について情報を共有することができ、また、『蒙古語族語言方言研究叢書』のデータの性質について、コンサルタントの属性だけでなく調査とデータの採録の手法についても情報を共有することができた。

『蒙古語族語言方言研究叢書』データベース作成については、前年度までに入力されたデータを成型し、データベース化する作業を行った。特に文法記述について注釈入りの和文訳が保安語、土族語、東郷語、東部裕固語の4言語について完成した点、表記について4言語統一の転写表記を作成した点、4言語の横断検索が可能になった点、データのフォーマットが固まったことにより Toolbox での分析作業を本格的に開始できた点で、データベース化が大きく前進した。

終了報告

本研究課題では、通算6回の研究会と、45回のデータ入力班ミーティングを開催した。

研究会では河西回廊地域以外のモンゴル諸語の専門家による『蒙古語族語言方言研究叢書』の記述についての報告と、主に当該地域の言語を専門とし、現地調査の経験をもつ共同研究員と、海外で当該地域の言語の研究を現地調査に基づき行っている研究者による当該言語の使用状況、現地調査の把握と、『蒙古語族語言方言研究叢書』を含めた過去の調査研究のレビューを行い、河西回廊地域で話される諸言語の文法と使用状況、『蒙古語族語言方言研究叢書』のデータの性格について情報を交換することができた。

データ入力班ミーティングでは、『蒙古語族語言方言研究叢書』のデータベース化に向けた作業として保安語、土族語、東郷語、東部裕固語の文法記述の検討と、日本語訳作成、データベースでの4言語横断検索横断のための4言語共通転写法の策定と4言語のテキストの一部（日常会話部分）へのグロスの付加を行った。

本課題は当初の目的として、『蒙古語族語言方言研究叢書』のデータベース化と、当該地域の言語研究コミュニティの構築を掲げてきたが、特に後者について、海外の研究者を含めた研究コミュニティが構築されたのは、当初の予測を超え、また今後の国際的共同研究に向けた基礎となる大きな成果であった。

成果の公開状況、計画

『蒙古語族語言方言研究叢書』データベースは

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/22.html>

にて本研究課題のメンバー内で共有し、現在正式公開に向けた校正作業を進めている。2017年度にデータベースの校正作業を行い、正式公開を目指す。

また、本データベース作成のために入力したデータの一部は既に共同研究員の栗林均氏により『「東郷語詞彙」「新編東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』として公開されている（「図書」の項参照）。

紙媒体での成果公表に向け各人作業を行い、2017年7月に会合を開き協議する。

アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究代表者名： 梶茂樹 参加者：所員 2 共同研究員 15

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

本年度は研究初年度なので、第1回目の研究会では、まず研究代表者がプロジェクト全体の構想を説明し、具体的分析例として、自身が調査したコンゴ（旧ザイル）、ウガンダなどの言語（テンボ語、ハヤ語、アンコレ語、トーロ語、ニョロ語など）を例に取り、言語の条件に合わせて単語の音節、モーラ毎にどのような声調・アクセントのパターンがあるかを示し、議論する。そして各メンバーが自身の研究言語について大まかな説明をし、それが声調・アクセント的どのような言語であるかを紹介する。第2回目については、現段階では誰が発表するかは未定であるが、毎回2発表を予定している。本プロジェクトでは、今まで様々な理論に基づいて分析・発表してきたものを、一度初期に戻し、単語の音節、モーラ毎にどのような声調・アクセントのパターンがあるかをまず示してもらうことにする。そうすることによって、語族、言語のタイプを超えて共同で議論する基盤が整うと考える。

研究実績の概要（2016年度）

第1回研究会で代表者が、アフリカの声調/アクセント言語について、その類型、文法的機能などを、各メンバーのデータをもとに総合的に考察したい旨述べ、具体例として、自身の調査した言語の中から、コンゴ東部からウガンダにかけて話されるバンツ系言語のテンボ語、ハヤ語、アンコレ語、トーロ語、ニョロ語など、幾つかのバンツ系諸語の声調の類型について述べた。

第2回研究会では、塩田がナイジェリアのハウサ語について、また阿部がタンザニアのバンツ系のベンデ語の類型について述べた。

第3回研究会では、古本がスワヒリ語マクンドゥチ方言についてピッチによる語彙的区別があるかどうかについて、また米田がナミビアのバンツ系のヘレロ語の名詞の声調について報告を行った。

アフリカにはスワヒリ語諸方言のように概して声調を持たない言語もあるが、多くは声調（あるいはアクセント）言語であり、そのタイプは思いのほか複雑であることが知れた。

成果の公開状況, 計画

この研究プロジェクト専用のウェブ・サイトは持たないが、随時 AA 研の HP を利用して発信を行っている。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp219>

<http://www.aa.tufs.ac.jp/en/projects/jrp/jrp219>

なお各自の論文など研究成果は随時、しかるべきところに発表している。

現在のところ、プロジェクト成果全体をまとめるには至っていないが、3年後には出版・公開を考えている。

南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究代表者名： 中川裕 参加者：所員 1 共同研究員 7

研究期間： 2016（平成 28）年度～2018（平成 30）年度

研究計画

すでに本研究グループのメンバーが編集主幹として編纂してあるグイ語・ガナ語話者社会の小百科事典的な冊子 *An Encyclopedia of Gui and Ghana Culture and Society* の言語学的情報の敷衍と精緻化に着手する。まず、冊子の見出し項目のうち、動植物（87 項目）、生業（32 項目）、物質文化（26 項目）、地理・自然環境（25 項目）、心理・信仰（29 項目）、社会生活（77 項目）から、伝統的文化語彙が関連する項目の精選作業を行い、各項目の記述の担当責任者を定める。そこに現れるすべての語彙素の言語民族誌的情報を整備するために、各語彙素に関連する言語学的・人類学的な記録をもちより、交差的確認によって記載すべき情報の点検をする。2016 年度は、特に、動物および植物の名称、生業と物質文化の領域、それに加えて意味類型論的に重要な意味領域である色彩、親族名称に焦点を当てて考察と討議を進める。

研究実績の概要（2016 年度）

本研究課題には、(1) カラハリ狩猟採集民の特殊文化語彙の言語民族誌的ドキュメンテーション；(2) 関連する語彙意味類型論的な特色の考察；(3) 言語ドキュメンテーションを現地社会に還元する手法についての探求という、それぞれ、(1) 記述的、(2) 理論的、(3) 応用的な側面があるが、今年度は (1) と (2) に成果を上げることができた。

まず、(1) 記述的には、これまで別々の文脈で記録されてきたカラハリ狩猟採集民のグイ・ガナ語の狩猟採集文化語彙素の資料（百科全書的情報を含む記述資料）をなるべく網羅的に集約して、記録信頼性の相互検証をし、言語学的な整備してデータベース化する作業に着手した。手始めに、編纂の目標とする具体的なプロジェクト成果物を、グイ・ガナ言語民族誌としての『カラハリ動物辞典（仮題）』と決めた。そこでは、カラハリ乾燥帯での狩猟採集という生態学的に独特な生業の文脈で駆使される概念の範疇化や語彙化についての考察結果が記載され、民族誌的にも、また、ドキュメンタリー言語学的にも実証的な意義がある。今年度は記載項目の暫定案を作成し大まかな分担を決めた。

次に (2) 理論的には、カラハリ狩猟採集民の「色彩語」と「親族名称」という類型論的に重要な 2 つの意味領域についての考察が進展した。グイ・ガナ語のこれら 2 領域の語彙体系がもつ世界の言語における類型論的稀少特徴にかんする論考を、具体的な研究成果として発表した（論文 4 本、学会発表 3 本）。このような稀少特徴の精査は、「世界の言語の普遍的傾向から離れ、言語文化個別的に発達し付与された意味・価値によって、言語の多様性の限界はどこまで拡張するものか？」という理論的に重要な問題を探る手がかりとなる。

成果の公開状況, 計画

研究成果の公開は、現時点までは、学術論文、学会・研究会での口頭発表、図書、一般向けの講演会などによる。オンラインでは、本課題の AA 研 Web ページ (<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp220>) に、2016 年度第 1 回研究集会の概要を記載。

直近の予定としては、『FIELDPLUS』18号で、中川裕、高田明、大野仁美による本研究課題を紹介する巻頭特集が決定している。また、オンラインでは、本課題のAA研Webページ(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp220>)に、2016年度第1回研究集会以後の成果についてを記載する予定。

参照文法書研究

研究代表者名： 渡辺 己 参加者：所員 4 共同研究員 15

研究期間： 2016（平成28）年度～2017（平成29）年度

研究計画

今年度は本課題の初年度なので、第1回の研究会では代表者からの趣旨説明と特定の言語を超えた参照文法書一般についての発表から開始する。申請時の予定では3回/年×2年=6回で、毎回3名（組）ずつの発表を考えていたが、予算の制約上、年2回しかできない可能性が高いので、毎回4～5名（組）の発表をおこなうことにした。今年度で合わせて9名（組）前後の参加者に、自分が専門とする言語・語族の既存の文法書について、その特徴、良い点、悪い点、さらにその言語の類型的特徴をどのように文法記述に反映すべきか、その問題点などについて順次発表してもらう。

研究実績の概要（2016年度）

初年度である2016年度には3回の研究会をおこなった。本研究課題のテーマは、個別言語や地域、あるいは特定の言語現象に絞ったものではなく、非常に大きなものであると言える。言語研究のうち、ある意味究極の課題である、一言語全体の文法記述はどうあるべきかを考えることが本課題のテーマである。しかし昨今の言語研究では、分野の細分化に伴い、このような言語全体の捉え方については、議論する場もなく、実際、本課題を開始するまで、研究者間でもどの程度このテーマ・問題が共有されているのかも分からなかった。そこで本課題では、参加メンバーがそれぞれが専門とする言語・語族で、すでに刊行されている文法書を概観・概説しながら、それらの特徴や問題点について解説するという発表を通し、メンバー同士で意見交換・研究討議をする場とした。3回の研究会は、本課題を企画した代表者の予想と期待をはるかに超えて、いずれも非常に活発な議論の場となった。

成果の公開状況、計画

成果は最終年度後に報告書を作成して公開する予定である。

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究代表者名： 山越康裕 参加者：所員 4 共同研究員 14

研究期間： 2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

2015年度に引き続き、年間通してある程度共通の形態・統語論に関するテーマを設定し、共同研究員が研究対象とする言語における形式と機能について確認する予定である。当初は年3回の研究会開催をベースに研究計画を立案していたため、第1回研究会にてテーマ設定、第2回、第3回研究会にてテーマに関する報告というスケジュールを想定していた。しかし予算の状況により年2回の研究会開催となったことから、テーマ設定は第1回研究会より前に、オンラインベースで検討していく。現段階では、昨年度にとりあげた「連辞性」について引き続き扱い、とくに動詞を中心とした屈折体系、「動詞複合体」に焦点をあて、対象言語における動詞複合体の構造を記述し、言語間の異同を対照していくことを想定している。

なお、本研究課題に関わる所員が共同利用・共同研究課題として主体的に関与している「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」および「参照文法研究」における議論も、本研究課題に直接・間接的に関連する内容を多く含む。それぞれの研究課題で議論した内容が、それぞれ言語の記述的研究にとり有益となることから、できるかぎり内容を共有し、各共同研究員に還元できるようつとめる。

研究実績の概要（2016年度）

3年間の研究期間の2年目にあたる2016（平成28）年度は計3回の研究会を開催し、前年度に引き続き動詞の屈折、とくに非定形動詞が形成する節のふるまいに焦点をあてた研究報告を中心に議論を展開した。報告者は共同研究員6名のほか、メンバー外から若手研究者2名による報告もおこなわれた。

第1回研究会ではいわゆる「アルタイ諸言語」ではない言語であるが、アルタイ的な文法構造を有する2言語、北サハリンとその対岸を中心に話される危機言語ニヴフ語とシベリア西部で話されるネネツ語について、それぞれ専門的に記述をおこなっている蔡氏、松本氏から報告を受けた。両氏の報告はとくに複合語や、それに準ずる動詞抱合に焦点を当てた内容であり、複合が生産的な語形成法ではない／しかし語の連続によって新たな概念を表す手法が発達しているアルタイ諸言語にも通ずる問題であった。また、風間氏からは主要部内在型関係節の類型についての報告があった。その報告を受け、第2回研究会では蝦名氏からケチュア語、東外大大学院の日高氏からウズベク語の関係節のふるまいについて報告を受けた。また、同じく東外大大学院の山田氏からはダグール語の動詞aa-のふるまいに関する報告がなされた。

第3回研究会では引き続き動詞の屈折に焦点をあて、梅谷氏からモンゴル語の連体節、および吉岡氏からはブルヤスキー語の動詞屈折形式の記述に関する問題について、それぞれ報告を受けた。

成果の公開状況、計画

現時点において具体的な成果公開はおこなっていない。なお、研究会の内容をふまえたフィードバックについては、ウェブページを設けてウェブ上でおこなっている（URL: <https://sites.google.com/site/altaitypestudy/>）。研究課題期間終了後に、『アジア・アフリカの言語と言語学』にて成果を発表することを検討している。

バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）

研究代表者名： 阿部優子 参加者：所員 2 共同研究員 16

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

ターゲット：研究上の問題点の共有

- (1) 参照文法を執筆中の若手研究者を中心に研究発表（年3回の研究会で約5件の発表）。また発表を通じてこれまでのマイクロ・バリエーション研究について理解を深める。
- (2) 研究会全体での重点目標となるパラメータ（第1フェーズ）を選定する。
- (3) ヘルシンキ大学で開催されるバントゥ諸語研究会議（6th International Conference on Bantu languages）のWorkshop 1: “Approaches to morphosyntactic micro-variation in Bantu”へ参加し、共同研究の概要と展望、既存データを部分的に提示する。

研究実績の概要（2016年度）

本年度は研究会を3回実施。国外メンバーに対しては、スカイプにて議論に参加してもらった配慮をした。

第1回は、プロジェクトの概要、連携先の説明を行うとともに、Microvariationの理論的背景、バントゥ諸語研究の動向について参加者と情報を共有した。第2回は、Marten et al. (2007) で提案された19のパラメータについて、参加者が持ち寄ったデータを検討した。具体事例を通して、パラメータおよびその値が指示する現象や、それを検討することの通バントゥ類型論における意義について参加者の理解を深めることができた。第3回は、最

新の研究で提案された 142 パラメータについて、各参加者の研究言語のパラメータ値と例を検討するため、3 日間のワークショップを開催した。このワークショップには国外のプロジェクト参加者および研究協力者も招聘した。Marten 教授および研究協力者からロンドン大学 SOAS での最新の研究動向を報告してもらった。また Bostoen 教授から、本プロジェクト参加者がカバーしていない西バントゥ諸語の Microvariation について報告してもらった。さらに、将来的に連携を想定しているタンザニア・ダルエスサラーム大学の Mapunda 博士は、タンザニアの民族語の事例を報告した。続くワークショップでは、参加者が準備したパラメータの値と例文について一項目ずつ検討し、パラメータの理論的背景、また各々の値・例文の妥当性を議論した。

この議論を受けて、再検討・修正した各言語のデータが本年度の成果となる見込みである。

成果の公開状況、計画

第3回研究会は、国際ワークショップとして国外メンバーも招聘して開催した。第1日目の報告については公開講座とし、本年度の成果の一部を公開した。

各言語の例文については、データの信憑性が十分でないため未だ一般公開は差し控えているが、メンバーのみ共有できるよう、クラウド上で管理し、公開に向けて準備している。

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間

研究代表者名： 宮原暁 参加者：所員 1 共同研究員 9

研究期間： 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

平成28年度、本研究では過去2年間に行ってきた現地調査の結果をどのように整理し、研究成果として公表していくかに注力する。

これまで本共同研究では、女性の経験世界を内側から検討するローカル空間の調査と、「外界」との関係から検討するディアスポリック空間の調査の二つの民族誌的調査を参加研究者のフィールドにおいて、現地の研究者の協力を得つつ、実施してきた。本年度、共同研究の成果をまとめるにあたって、第一に注目したいのは、中国大陸から移民した人たちにせよ、中国大陸に残った人にせよ、経験を解釈する女性の説明、ないしその根底にある論理が、男性の説明、論理とは著しく異なっているという点である。この点をどのように全体の理解に結びつけていくかが、本年度の共同研究の課題の一つである。

また広東、閩南、客家といった民系の違いも、重視すべき点の一つである。とりわけ移民先と出身地を結ぶディアスポリック空間がどのように創造、想像されるのかという点に関して、例えば「僑郷」の構造の違いに現れるように、民系の違いは本質的である。

共同研究全体としては、これらの点に配慮しながら、各参加者がそれぞれの関心とフィールドで発見した論点をシェアしながら、研究成果の取りまとめを行っていききたい。

研究実績の概要（2016年度）

IUAES, Intercongress 2016 (Dubrovnik, Croatia), International Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas (Vancouver, Canada)の二つの国際学会において、「外界」との関係から検討するディアスポリック空間に関わる民族誌的調査の成果を報告した。特に第1の国際学会では、昨年度、課題として検討した広東と閩南の民系の違いについて、異なる移動のモデルを提示した。

終了報告

本研究プロジェクトでは、中国系移民の移動の経験（特に女性の経験世界）のいくつかの側面を「場」の生成に即してとらえようとした。

ここで言う「場」の生成とは、ある地理的広がりに対して、人が意味を与えたり、そこから意味を汲みとったり、あるいは相互の交渉を通して意味が編集されたりすることをさしている。このプロセスはきわめて複雑であり、移動する当の本人が感じる「土着からの圧力」や、逆に地付の人が異人に対して感じる「移民の圧力」のほか、移民が自己の内部に感じる「内面的他者」が折り重なり、干渉しあい、「場」が生みだされる。

こうした「場」は、近代性(modernity)といくつもの経路を通じて関わっている。それは、今日の人の移動が、強固な政治的な「場」としての国民国家の間で見られると言うだけではない。近代性が、なにかしら人間を物理的に把握される空間との関わりでとらえる認識様式に関わっているとすれば、先のプロセスは、近代性を背景に生み出され、同時に近代性を成立させる条件となってきたと考えられるからである。

もちろん、ここでの近代性と「場」の生成のプロセスは、トートロジカルであり、人と空間とを結合させる認識の仕方を、広義の近代性の一つの側面として光をあてているに過ぎない。しかし、近代性が西欧近代のみならず、複数あるとすれば、この側面は、いくつかの近代性を横断して生ずる人の移動を考察するうえで、十分ではないにせよ、必要な条件となろう。

こうした点に鑑み、本プロジェクトでは、中国系移民が「場」と遭遇し、地付の人たちが移民の圧力を感じるなか、どのように新たな「場」を生成していったのか、そうしたなかで、どのように自己に内在化された他者を克服していったのかを問うことで、中国系移民の移動の経験と近代性について新たなヴィジョンを提示しようとした。

成果の公開状況、計画

IUAES, Intercongress 2014, IUAES (Chiba, Japan), Intercongress 2015 (Bangkok, Thailand), IUAES, Intercongress 2016 (Dubrovnik, Croatia), The 6th International Conference of Institutes & Libraries for Chinese Overseas Studies, (Xiamen, China), The 9th International Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas (Vancouver, Canada)などの国際学会において、女性の経験世界を内側から検討するローカル空間の調査と、「外界」との関係から検討するディアスポリック空間の調査の二つの民族誌的調査の成果をパネルを組むなどして順次報告した。その一部は、大阪大学グローバルコラボレーションセンター・ディスカッション・ペーパー・シリーズとして、まとまった形で公開している。

本共同研究及び同一タイトルの科研の成果を、文化人類学会の英文ジャーナル *Japanese Review of Cultural Anthropology* にて特集として公開することを計画している。

「もの」の人類学的研究(2) (人間／非人間のダイナミクス)

研究代表者名： 床呂郁哉 参加者：所員 4 共同研究員 15

研究期間： 2014 (平成 26) 年度～2016 (平成 28) 年度

研究計画

最終年度となる 2016 年度の本研究課題では、前年に引き続き各地における人間と非人間の「もの」(人工物、自然物、動植物などを含む)の関係の諸相に関する個別の研究報告と討議を実施することに加えて、最終的な成果取り纏めに向けた取り組みを実施していく。

より具体的にはとくに下記の2点に関して検討を行う。まず(1)前年度までの議論を引き継ぎ、アジア・アフリカ各地における社会・文化的文脈に即して、それぞれのフィールドで人間と「もの」がいかなる関係を取り結んでいるのかの諸相を実証的・具体的に解き明かしていく。(2)そうした個別の事例が、「もの」をめぐる人類学的研究のより一般的な理論的枠組みの中にどのように位置づけることが可能であり、また各事例がどのように相互に関連しているのか等について全員の討議を通じて検討を実施する。この作業には狭義の文化(社会)人類学者や霊長類学者に加えて、前年度までに引き続き哲学、生物学、認知科学、芸術研究など関連分野の研究者も協力者として参加してもらおう。なお成果に関しては、まず研究会を実施した後に、AA研のHP上などでその報

告等の要旨などを公開していくことはもちろん、最終的な成果報告書の出版に向けたメンバー全員による報告書のドラフト作成とそれに関する討論の作業を実施していく。

研究実績の概要 (2016 年度)

本研究課題の最終年度の3年目となる2016年度においては、同課題の基本的・理論的な方向性を再確認したうえで、最終的な研究成果をアウトプットとして出すための作業に重点を置いた。より具体的に言えば第1回研究会においては、春日、西井、黒田、伏木の各メンバーから、それぞれフィジーにおける時間論と「もの」、タイのイスラム社会のイスラーム復興運動をめぐる参加者における髪の毛など身体の物質性、日本の伝統的な製鉄・冶金技術、アジアの人形劇などを題材として、世界各地の「もの」と人間の関係をめぐる個別の事例に関して事例報告と質疑応答を実施した。第2回研究会では前半で河合と小松がそれぞれ感覚と「もの」性、遺伝子組み換え作物と人間を題材として「もの」と人間の関係に関する個別の報告を実施した。

さらに第2回研究会の後半では、成果出版物(仮題:『ものの人類学(2)―人間/非人間のダイナミクス』)の内容に関して執筆者全員による執筆構想を提出して質疑応答を実施すると同時に、その出版計画についても具体的な打ち合わせと討議を実施した。その結果として、2017年度中に成果論集を京都大学学術出版会から出版する方向で調整が実施された。

終了報告

本研究課題では3年間で通算9回の研究会を実施し、のべ24名の報告者(共同課題のメンバーの他にゲスト3名を含む)による報告と質疑応答を行ってきた。これを受けて最終年度の2016年度では最終的な研究成果の取り纏めと出版に向けた作業を行った。これまで本研究課題は各地における人間と非人間の「もの」の関係の諸相と、その関係の構築における広義の技術に焦点を当て、新たな視点から人類学的に検討することを主な目的として研究会を実施してきた。この結果として、本研究課題では、世界各地における各種の非人間の「もの」との関係の諸相や、人間が「もの」と関わる多様な技術・技芸の具体的な諸相を明らかにすることを通じて、通念的に流布している人間中心主義的な世界観や認識論を超えて、人間と「もの」の関係性に関する新たな視点(いわゆる存在論的転回等の問題意識を踏まえた、脱人間中心主義的な「もの」研究の枠組みの可能性)を問題提起することが可能になったと総括できる。この詳細に関しては2018年3月に出版予定の成果論集『ものの人類学(2)―人間/非人間のダイナミクス(仮題)』で展開する予定である。

成果の公開状況, 計画

本研究課題のメンバーは、個別に学会や論文等で本課題に関係した研究成果を発表しているのはもちろん、それに加えて「ものの人類学をめぐって―脱人間中心主義的人類学の可能性と課題」と題するシンポジウムを2016年11月12日(土)に開催し、本課題の代表者の床呂をはじめ複数のメンバーが執筆するなどして研究成果の一部を広く公開した。また副代表の河合香吏編の英文論集 *Institutions: The Evolution of Human Sociality* (Kyoto University Press & Trans Pacific Press) などにおいても本研究課題の複数のメンバーが本課題の研究主題にも関係する成果の一部を公表している。また各研究会の概要に関しては下記のHPで公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp202#jrp20203>

2017年度中に成果論集を京都大学学術出版会から出版する方向で、各メンバーには既に第一稿を提出してもらい、7月に出版打ち合わせと合評会を実施し、そこでのコメントを踏まえてリライトした第二稿を9月末に提出してもらおう。その後、細かい校正・編集作業等を経て最終的には2018年3月に成果論集『ものの人類学(2)―人間/非人間のダイナミクス』を刊行する予定で具体的な作業が進んでいる。

人類社会の進化史的基盤研究(4)

研究代表者名: 河合香吏 参加者: 所員 3 共同研究員 19

研究期間: 2015(平成27)年度~2017(平成29)年度

研究計画

本共同研究課題は「人類社会の進化的基盤研究」と題して、人類学（社会文化人類学および生態人類学）と霊長類学（霊長類生態学および霊長類社会学）の研究者を主たるメンバーとして、2005年度以来、テーマをかえながら継続的に展開されてきた共同研究の第4期にあたるものであるとともに、その総括と位置づけられる。これまで「集団」、「制度」、「他者」をテーマとしてきたが、今期は「生存・環境・極限」をテーマとして、共同研究会活動を開始した。

初年度の2015年度には3回の研究会を開催した。第1回は趣旨説明と、本研究課題を進めるに当たって、霊長類学、生態人類学、社会文化人類学の立場からそれぞれ共同研究に参加する際の立ち位置や方向性を確認し、第2回以降は、各共同研究員の個別研究として、「生きる共同体の過去と未来」、「類人猿のホーティカルチャー」、「極限的出会いの構図」等の事例報告をもとに霊長類や人類の「生存・環境・極限」をめぐる、その進化的基盤について議論した。

2016年度は3年計画の2年目にあたり、上記1年目の成果を踏まえて、引き続き個別研究をもとにしてさらなる議論を展開し、理論的な深化を目指す。研究会は年間2回が限度であるため、1回に2日間を費やし、4ないし5人が発表をする。また、本課題メンバーによる日本霊長類学会大会の自由集会や日本人類学会進化人類学分会シンポジウム等における企画も検討している。

研究実績の概要（2016年度）

2回の共同研究会を実施した。本年度は本共同研究課題3年計画の2年目にあたり、2回の研究会ともに、各自個別の事例研究を中心とした発表をし、全員で討論した。これらにより五里霧中であった本研究課題のテーマ「生存・環境・極限」に関する研究の展望が次第にひらけてきた。発表内容の詳細はAA研および本研究課題のHP [<http://human4.aa-ken.jp>] に記しているのをご参照いただきたい。

以上、2回の研究会以外に、2016年7月15日（金）には第32回日本霊長類学会の自由集会にて「人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」というタイトルでセッションを設けた。課題代表者による趣旨説明の後、霊長類学会員の松田一希（中部大）の他、共同研究員から杉山祐子、寺嶋秀明、中川尚史が発表し、霊長類学会員の本郷峻（京都大）と共同研究員の内堀基光がコメントし、フロアを交えて討論を行った。さらに、2017年2月4日（土）には、AA研基幹研究人類学班主催の公開シンポジウム「『他者—人類社会の進化』（河合香史編、京都大学学術出版会、2016）をめぐる」において、課題代表者および共同研究員の西江仁徳、北村光二、船曳建夫が同書の内容紹介をし、共同研究員のデイビッド・スプレイグの他、大石高典（東京外国語大学）、佐久間寛（AA研）にコメントを仰いで議論の場を持った。また、共同研究員の内堀基光、西井涼子がフロア参加した。

成果の公開状況、計画

研究全体をまとめた出版物（紙媒体）による成果報告は2016年度には刊行していない。共同研究会の内容については、その要旨を上記の通り、AA研のHPに掲載するとともに、本研究課題独自のHP [<http://human4.aa-ken.jp>] に随時、掲載してきた。また、上記、第32回日本霊長類学会の自由集会「人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」の成果（概要）は『霊長類研究』誌（Vol.32 No.2: 87-91）に掲載し、AA研基幹研究人類学班主催の公開シンポジウム「『他者—人類社会の進化』（河合香史編、京都大学学術出版会、2016）をめぐる」の成果（シンポジウムにおける発表および討論の全文）はAA研基幹研究人類学班のHP [<http://coe.aa.tufs.ac.jp/kikanjinrui/library/>] 上にアップし、さらに紙媒体の報告書として冊子化した。

現時点では、2017年度には出版物（紙媒体）による成果公開の計画はない。本共同研究課題終了後の翌年度（2018年度）に最終報告として成果論文集を刊行する予定である。なお、口頭発表として、2015年度、2016年度と同様に2017年度にも日本人類学会進化人類学分会シンポジウム等において成果報告を企画したい。また、共同研究会の報告（発表要旨）等については、2015年度と同様に、AA研のHPに掲載するとともに、本共同研究課題独自のHP [<http://human4.aa-ken.jp>] 上で随時、公開していく。

『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究代表者名： 中村隆之 参加者：所員 1 共同研究員 8

研究期間： 2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

本共同研究は『プレザンス・アフリケーヌ』（以下、PA誌と略記）を資料対象にし、とりわけ「政治と文化」の主題が焦点化する第2期以降を扱いながら、当該雑誌の射程を総合的に検討する試みである。

2015年度の成果を受けて、2016年度に行う作業軸は、主に以下の3つとなる。

(1) 2015年度に作成したPA誌の目録（佐久間研究員）を活用し、黒人文化人の言語圏を超えたネットワークを明らかにする。英語圏（吉田研究員）およびスペイン語圏（佐々木研究員）、黒人作家芸術家会議を始めとするパン・アフリカニズムの問題系（林裕哲氏）をこの観点から解明する。この雑誌に深く関与した西欧の学者・知識人についても掘り下げて検討する（星埜研究員）。

(2) 1955年から1960年にかけての「政治と文化」をめぐるPA誌の議論を継続的に検討する。昨年度の「民族詩論争」に関する研究報告（中村研究員）を受けて、ウォロフ語文学を事例とした「国民（民族）文学」をめぐる研究（砂野研究員）を行う。この文脈において、本研究課題の中核的関心に当たる「新たな政治=文化学」を展望する研究を行う（真島研究員）。

(3) 2017年度開催予定の国際コロックの準備を行う。

研究実績の概要（2016年度）

2016年度は2回の研究会を実施した。以下、研究実績を箇条書きで記す。

(1) 『プレザンス・アフリケーヌ』誌（以下、PA誌）の基礎研究：星埜研究員（第1回）は、PA誌創刊号（1947年）のアリウン・ジョップ、ジッド、サルトルの各記事を詳細に論じ、本研究会における第1期PA誌の知的基盤を提供するものだった。同様に、佐々木研究員（第2回）は、PA誌の1995年の号に発表されたフレイジアとファノンに関する英語論文を紹介した。

(2) PA誌と冷戦：吉田研究員（第1回）の報告は、1956年の第1回黒人作家芸術家国際会議を同会議に参加したアメリカ合衆国の黒人知識人の立場から考察するものだった。合衆国黒人知識人を特に冷戦における反共政策との関わりで論じることにより、本研究会におけるPA誌と「社会主義」という主題を深めた。

(3) PA誌と脱植民地化：ロモ研究員（第2回）は、PA誌が「アフリカ分割」と植民地化以降の歴史的な文脈のなかから登場した雑誌であることを強調するとともに、メディアとしてのPA誌の果たした社会統合的役割を論じた。

(4) 言語と政治：砂野研究員（第2回）は第1期から第2期までの主要論文のなかで言語を主題とした論文を中心に、PA誌における言語問題を精緻な裏付けとともに論じながら、PA誌の寄稿者がフランス語で書いてきたことの自明性を鋭く問うた。

(5) 国際シンポジウムの準備：今年度の研究会を通じて2017年度開催予定の国際シンポジウムに向けた協議を行った。

成果の公開状況、計画

本課題に参加する所員および研究員による平成27年度の成果発表は、学術論文4件、口頭発表12件、図書2件、社会に向けた成果発表7件である。

2017年度の成果公開計画については、2件の計画を予定している。1件は、佐久間所員作成のPA誌目録の公開であり、プレザンス・アフリケーヌ社からの刊行を予定している。2件目は、AA研ジャーナルに投稿した中村研究員の資料である。共に今年度中の刊行を予定している。

東・東南アジアの越境する子どもたち——トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会——

研究代表者名：石井 香世子 参加者：所員 2 共同研究員 8

研究期間：2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

初年度となる2016年度は、共同研究員間の用語の定義と理論的枠組みの統一に重点を置く。具体的には1年間を通じて3回の研究会を実施し、本主題の下での各自のフィールド調査を実施する。各回の研究会では、上記用語の定義と理論的枠組みに関して有益なインプットが期待されるゲストスピーカーを呼び、毎回の研究会の前半でご講演をお願いする。また各自フィールド調査の進行状況と暫定的な調査結果を報告しあう。研究会各回の後半ではそれら2種類の報告を踏まえて用語の定義と理論的枠組みの統一に関するディスカッションを実施する。

2016年度の終わりを目途に、共同研究全体のなかで共通した用語の定義と理論的枠組みの統一が図られることが期待される。2017年度以降は、これら共通の定義・統一された枠組みのもとで各自が本格的なフィールド調査を実施し、国際会議の場で発表しあい、それをもとに議論と精査を重ね、最終成果物を醸成していくことを目指している。

研究実績の概要（2016年度）

共同研究初年度となる本年度(2016年度)は、主要な分析枠組みを (1) Partial Citizenship, (2) Ubiquitous Borders, (3) Transnational Class に設定し、用語定義の確認と理論的な枠組みの共有を図り、メンバーのフィールド調査の方向性を確認しあうことを第一目的とした。

本年度は3回の研究会を実施し、まず第1回では「移動する子ども」概念を提唱している第一人者の早稲田大学の川上郁夫先生たちを迎えて、本研究プロジェクトで扱う「越境する子ども」の「越境」や「子ども」の範囲や定義について議論を交わし、確認をした。

第2回研究会では、主要な分析枠組みのうち第一の、Partial Citizenship of Family Migrants に関して、類似概念の整理と本研究プロジェクトで主要な先行研究とする論文・著作を確認した。また主要先行研究の著者である南カリフォルニア大学のパレーニャス先生をお迎えして、同概念についてご講演いただいた。また同概念枠組みを用いて、内外の研究者たちからそれぞれご自分のケースについて分析したご発表をいただいた。

第3回研究会では、第二の主要な分析枠組み、Ubiquitous Borders について、本研究会の分析枠組みにもっとも近い理論を展開している、フンボルト大学のレブーン先生の論文を確認し、ご講演いただいた。また日本におけるボーダー研究の第一人者の一人、中央学院大学の川久保文紀先生に、そもそもボーダー研究の視座から捉えたボーダーとは何か、最新のボーダー研究のレビューとともにご発表いただいた。また同分析枠組みを用いて、香港中文大学のチョイ先生に香港における移民労働者の子どもの事例を分析していただいた。どの研究会の際も、各メンバー間のフィールド調査の進行状況を報告しあい、上記分析枠組みに照らして今後の調査の進行状況を確認しあった。

成果の公開状況、計画

以下のホームページを作成・公開し、研究成果の公開のみならず公開研究会の案内など情報発信と、進行中の共同研究の議論に関して広く各国の研究者たちと議論するための双方向的な環境を作っている

Research Project: Child Migration in Asia

<http://childmigration.aa-ken.jp/index.html>

2017年11月25日に予定している国際会議での発表ペーパーのうち10-12本を選び、2018年度中の出版を目指して改稿・編集作業を行う。

まず2018年2月にシンガポール国立大学出版局の編集専門スタッフたちによる Academic Writing Workshop を開き、実際の発表ペーパー（内容的な部分を、国際会議の場での議論と編者の指摘を踏まえて各自修正したもの）について、英語論文としての体裁について修正指導を受ける。これに基づいて英語論文としての体裁を整えた論文をとりまとめ、当該主題に興味を持つ可能性が高い英語圏の出版社に原稿を送る。

新出多言語資料からみた敦煌の社会

研究代表者名：松井太 参加者：所員 1 共同研究員 9

研究期間：2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

2016年度の実施計画はおおよそ以下の通りである。

・第1回研究会（6月）：敦煌石窟の銘文資料および壁画資料に関する、本課題の2014～2015年度の調査状況、及びこれに関係する先行研究について、参加メンバー全体で認識を共有する。石窟遺跡・各国所蔵敦煌文献の原文書調査（7～9月にメンバー個別に実施予定）計画も協議する。成果刊行物の編集作業も継続する。

・第2回研究会（10月）：第1回研究会の情報交換と知見をふまえ、石窟銘文資料については、各自の集積してきたテキストデータから、成果刊行物の担当部分の試作品を提出する。成果刊行物の構成・書式も検討する。

・第3回研究会（3月）：成果刊行物をAA研出版物申請・2017年度第1回募集に応募するため、2日間をかけて編集作業を行う。

・これまで同様、研究会で得られた個別的な学術上の知見は、参加メンバーが個人または共同で論文として刊行し、すみやかに学界に提供する。また、本研究課題の最終的な目標である、石窟銘文資料の校訂テキストの公刊についての議論を継続的に進める。

研究実績の概要（2016年度）

2016年度は本課題の最終年度に当たるため、成果刊行物の刊行を念頭に置いて共同研究を進めた。2016年内に2回の研究会を行い、6件の研究報告を行った。本年度は特に、ウイグル文、漢文、ブラーフミー文、シリア文などが扱われたほか、「出行図」という、石窟研究に関連する重要な分野の考察が進められた。また主査松井太が代表となる科研費基盤研究(B)「多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合」は、本課題と密接に関わっている。この科研費による現地調査（中国甘粛省）で得られた成果も各人が取りまとめる形で報告し、メンバー間の質疑討論によって深化させることができた。各報告は2017年に刊行の本課題成果刊行物『敦煌石窟多言語資料集成』の各章・一部を成す。研究会は2回のみで開催となったが、2016年12月の現地調査では共同研究員のほとんどが集合し、情報・意見交換を行ったほか、メール会議によって成果刊行物の編集作業も進めた。

終了報告

世界有数の仏教聖地である敦煌が、北アジア・中央アジア諸地域の交流の焦点であったことは、敦煌地域発現の多言語（漢語・チベット語・西夏語・古代ウイグル語・モンゴル語など）の文献資料からも示される。近年の中国における敦煌研究の急激な発展に伴い、漢文資料の分析は大いに進められたが、非漢語資料をも併せ分析して敦煌社会の多文化性に着目する視点はむしろ後退している状況であった。

本研究課題は、各種の諸言語に通じた若手研究者が共同して、世界各国に所蔵される敦煌発現の未公開写本資料あるいは敦煌石窟現地に遺存する銘文資料を言語横断的・通時代的・包括的に比較検討し、敦煌社会における言語・文化交流の実像を解明することを目的としていた。共同研究員は、主査松井太による科研費基盤研究(B)「多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合」、あるいは個人個人の科研費・研究費によって、敦煌ほかで現地調査を行った。現地で集積した情報を、本課題における研究会で報告し、メンバー間で意見を交換することによって、個別研究をさらに深めることができた。

なお、本課題の成果刊行物『敦煌石窟多言語資料集成』を、課題終了後まもなく AA 研から刊行することができた(松井太・荒川慎太郎共編, 2017年7月, x+496 p., +16 pls.)。敦煌石窟に残された諸言語の題記銘文類の校訂テキストと石窟の供養人像に関するデータとを集成して提出したものであり、敦煌学界、さらには広く東アジア・中央アジアに関わる言語学・文献学・歴史学の諸分野を裨益すると考える。

成果の公開状況, 計画

共同研究員各人が、国内外の学会・研究会で研究報告を行い、国内外の学術誌に寄稿するなどして、本研究で得られた知見を公開している。2017年7月に、本研究課題の成果刊行物『敦煌石窟多言語資料集成』(松井太・荒川慎太郎編)を刊行した。また調査地敦煌などの学会・研究会において、本課題・刊行物の説明・紹介を行う。

里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革——中国古代簡牘の横断領域的研究(2)

研究代表者名: 陶安あんど 参加者: 所員 1 共同研究員 14

研究期間: 2014(平成26)年度~2016(平成28)年度

研究計画

本年度は最終年度に当たるが、研究成果の総纏めを目指して、里耶秦簡の第5・6・8層出土簡牘の訳注を完成させ、且つ簡牘セミナーの準備を進める予定である。

訳注については、昨年度訳文および暦日・人名・地名・官職名の注釈を一通り作成したが、第5・6・8層から出土した簡牘は約2500枚に及んでおり、訳文や注釈の統一及び個別事項注釈の作成にはなお多くの時間を要すると考えられるので、本年度は、主に訳注の読合せと個別字釈・注釈の討議を行う予定である。

簡牘セミナーは、前記訳注を教材として使用するため、訳注の完成を俟って、実施する予定である。今までもセミナーの開催方法などについて議論を重ねてきたが、実施時期は、終了年度の翌年九月(2017年9月)を予定しており、本年度後半から具体的な準備作業を開始する必要がある。

本研究課題の申請書類には、「AA 研の言語研修の場を借りて簡牘セミナーを開催」と記入したが、研修担当の所員とも協議した結果、「言語研修」よりも「研究/教育セミナー」の枠組みを活用した方が適切であると判断される。とくに、「言語研修」に伴う受講料の徴収が、全国からできるだけ多くの院生を集める上で障害となることが危惧される。

研究実績の概要(2016年度)

本年度は、里耶秦簡訳注の完成と簡牘セミナーの企画を目標に掲げたが、前者がまだ完全には達成できていないのに対し、後者は予定通り企画し、2017年9月6日より10日にかけて合宿形式で八王子セミナーハウスにて史料講読研修「中国古代文書簡牘」を実施する段取りとなっている。内容的には、セミナーの前半では、古文書学的研究の蓄積が最も豊富な西北漢簡を中心に据え、後半では、本研究課題の史料講読と訳注製作によって多くの新知見が齎された里耶秦簡に焦点を合わせる。前後に二つの対照的な史料群を取り上げることを通じて、居延漢簡を中心とする伝統的な研究成果の真髄を伝授するとともに、里耶秦簡に関する本課題の研究によって新たに明らかになった秦・漢の異質性を際立たせることができるように思われる。詳細は、<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/training/ilc/silc2017>を参照されたい。

一方、訳注については、注釈項目が予想以上に増えたため、今なお未完成である。項目増加の背景には次のような事情がある。すなわち、2500余枚の簡牘が訳注収録対象となっているが、その中で暦日・人名・地名・官職及び身分呼称という四種の特殊事項に関わる記述については、当初より網羅的に抽出して索引に纏め、事前に記述箇所(暦日828, 人名1211, 地名904, 官職・身分呼称2999)と注釈項目数(暦日322, 人名419, 地名183, 官職・身分呼称357)を把握していたのに対し、通常事項については、史料講読と類似した形で、訳注作成と並行的に徐々に蓄積していく方式を用いた。そのため、作成の過程で、通常事項を中心に項目数が急増し、年度末現在約400項目が未執筆のままとなっている。

終了報告

本研究課題の研究実績は凡そ次の7項目に分けて整理することができる。

1. 『文献と遺物の境界 II』(靱山明・佐藤信編, 2014年12月)を出版した。本書の最大の特徴は、共同研究員の高村武幸氏が開発した簡牘の形態分類法に基づいて、西北出土漢簡の代表格である居延漢簡について新たな整理手法を示し、台湾中央研究院における実物調査のデータを公開している点である。
2. 公開されている里耶秦簡(第5・6・8層出土簡牘すべて、第7層・第9-12層・第14-17層の一部)を共同で講読した。講読の過程で、形態的特徴と様式論的特徴に特に意を用いた。
3. 里耶秦簡に基づいて文書簡牘の様式論的分類体系を構築した。従来の古文書学的簡牘研究は、前漢後半以降の西北漢簡を中心に発展してきたが、秦代の地方官庁から比較的短期間内に廃棄されたと推測される里耶秦簡に準拠することにより、秦と漢とは、行政組織と共に文書行政の運用においても大きな変革が生じたことが確認された。
4. 西北漢簡についても近年とくに『肩水金關漢簡(壹伍)』の公開によって史料の大幅な拡充が見られたが、里耶秦簡との並行講読により文書様式の変遷を分析するための貴重な比較材料が提供され、前項に掲げた様式論的分類体系の構築に大きく寄与した。
5. 中国古代史の再構築という本課題の歴史学的研究目標については、秦・漢の異質性を可視化し、その継承と変革を明らかにするという当初の目的は、直接的には、文書行政に限定した形で結実することになったが、より広い意味での歴史学的研究は、本研究の中から生まれた共同研究員の幾つかの科学研究費に発展的継承された。それらの採択と研究は、本研究の方向性が認められたことを物語るように思われる。
6. 2016年3月には、代表者の陶安と一部の共同研究員が台湾中央研究院において居延漢簡の実物調査を実施し、簡牘形態分類法を開発した高村武幸共同研究員の指導の下で、簡牘の再加工および廃棄に関するデータを集めたほか、形態分析に必要な実測図作成などの調査技法を、今まで調査経験がなかった若手研究員へと伝えた。
7. 本研究課題の成果をさらに広く若手研究者に伝授するために、史料講読研修「中国古代文書簡牘」を企画し、2017年9月6日より10日にかけて合宿形式で八王子セミナーハウスで実施することとなっている。

成果の公開状況、計画

研究成果については、以下の通り学会報告・論文・図書を発表した。また、本研究課題のHP(<http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/>)への史料メモの掲載により研究の迅速な公開に努めたが、未公開のままとなっている史料メモも少なくない。里耶秦簡の訳注も未完のためまだ公開ができていない。

未公開の史料メモを整理して順次公開するほか、引き続き訳注の完成に向けて努力する予定である。簡牘セミナーでは、授業を概論・講読・演習という三つの形式に区分し、概論は専門外の参加者にも配慮して、講義形式で簡牘や文書行政に関する基礎知識を教授するが、担当教師は、セミナーでの教育実践を踏まえ、共同して文書簡牘の概説書を執筆する予定である。

近世イスラーム国家と周辺世界

研究代表者名： 近藤信彰 参加者：所員 3 共同研究員 19

研究期間： 2014(平成26)年度～2016(平成28)年度

研究計画

過去2年は国際ワークショップや外国人研究員の報告など、国際性の高い研究会が多く、外国からのゲストスピーカーに報告してもらうことが多かった。また、年一回のオスマン文書セミナーも共同研究課題と共催で行ってきた。このため、通常の日本語による研究会を十分に開催できず、国内の共同研究員に関して言えば、ゲストとテーマが一致した一部の方にしか、報告をお願いできていない状況にある。そこで、最終年度にあたる今年度

は、終了後に出版するべき和文の論集の準備のために、シンポジウム形式にして、なるべく多くの共同研究員に日本語で報告していただき、予算の関係から、研究会は年2回とし、1回につき、午後と翌日の午前にまたがるように開催する。また、一人当たりの発表・質疑の時間を1時間程度と短くする。研究会は公開で行い、院生や若手研究者の参加を促す。予算不足の際には、科学研究費「イスラーム国家の王権と正統性——近世帝国を視座として」と共催することで対応する。特に、近世イスラーム国家のガバナンスおよび周辺世界との交渉・交流を主要なテーマとする。

研究実績の概要（2016年度）

本年度は最終年度にあたるため、国際シンポジウムや文書セミナーとの共催をさげ、できるだけ、多くの共同研究員に研究報告してもらうことにした。一人、30分報告、20分ディスカッションで、合計11名の報告を得た。扱うテーマは多岐にわたったが、近世イスラーム国家とは何か、これら諸国と周辺世界の関係はいかなるものであったか、具体的な知見が得られた。これらのなかでは、特に多田報告が、細かな徴税制度の変遷から、時代性を描き出し、さらにオスマン帝国の同時代の世界における位置づけを論じた点、重要であった。また、堀井報告や和田報告のような、近世イスラーム国家と周辺世界の接点に関する研究も、本課題の問題設定上、注目された。

全体としてみるならば、現在の研究所の予算の問題もあって、年2回の研究会しか開けなかったのは、反省点である。補正予算による募集もあったが、春の時点で、2回開催で計画を立ててしまったため、応募には至らなかった。今後は、並行して進めている科研費のプロジェクトの方に軸足を移して、研究会活動を続けたい。

終了報告

先の共同研究課題「近世イスラーム国家と多元的社会」（2011-2013年度）に引き続き、対象を地域的に広げて、共同研究を進めてきた。合計9回の研究会を開催し、そのうち、3回は国際ワークショップ、2回はオスマン文書セミナーであった。科研費等の資金のおかげで、Chrisoph Werner（マールブルグ大学）、Sunil Sharma（ボストン大学）、Azfar Moin（テキサス大学）など世界をリードする研究者を招聘して国際ワークショップを開催し、若手研究者にも報告の機会を与えることができたのは大きな意義があった。また、オスマン文書セミナーにおいて、他地域間の文書史料の形式・内容の比較を行うとともに、若手を含む研究者のスキルアップに貢献できたことは、特筆できよう。また、イスラーム史の分野において、16-18世紀がもつ意義への理解がようやく進んできたことは、本課題の活動を抜きにしては考えられない。

一方で、さまざまな活動を組み込んだために、全体としてまとまりを欠いた感はいなめない。その意味で、最終年度に集中的に行った研究報告は、近世イスラーム国家とその周辺の研究にかかわる様々な問題を鳥瞰する意味で、非常に有意義であった。今後は、成果のとりまとめに、力を尽くしたい。

成果の公開状況、計画

研究会の報告要旨は以下のサイトに順次掲載されている。

http://meis2.aacore.jp/jr_islamic_states_surrounding_world

雑誌の特集号として関係論文を掲載すべく、準備を始めている。

シティズンシップと政治参加 —移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較

研究一

研究代表者名： 錦田愛子 参加者：所員 2 共同研究員 12

研究期間： 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

本年度は最終年度となるため、成果物のとりまとめを念頭に置きながら、これまでの議論の総括を試みる。年度内2回の研究会では、報告がまだの4名の共同研究員に研究報告をして頂く。また、これまでの全報告を踏ま

えて、成果論集にまとめるに際して共有できるキーワードや分析概念を析出するべく、研究会の中で議論を重ねる。具体的には、受入国で移民／難民がシティズンシップを得ていく上では、どのような政治への関わり方がありえるのか、人口増加そのものが直接与える圧力や、参政権を求める裁判、難民定住政策、国際的法規範の影響力など、指摘されてきた論点を切り口に検討する。

研究実績の概要（2016年度）

研究課題の最終年度に当たる本年度は、共同研究員による報告と同時に、成果出版に向けて研究を総括し、論集のコンセプトを固めて執筆に着手する上での話し合いが進められた。初回の研究会では、タイ国境沿いのビルマ難民に関する人類学的調査の報告があり、滞在が長期化しても帰化が認められない難民の生活の実態が、国家や国籍といった制度を問い直す可能性を提示している点が指摘された。またイギリス法体系に関する別の報告では、英領インド洋植民地チャゴス群島について、米軍基地利用のために実施された住民の強制退去から住民の権利を擁護する法的根拠として、13世紀のマグナ・カルタが現行法としても有効である事例が紹介された。これらはいずれも、移動する人の存在が国家や国内法といった制度の瑕疵を照らし出す例と理解される。第2回研究会ではさらに、これら法の狭間を示す分野としての無国籍および複数国籍の研究が報告された。事例の中では、近年の日本の在留管理制度の変更がもたらした影響にも言及された。国際法に関する報告では、難民および庇護希望者の労働の権利について、国際人権規約の社会権規約と、難民条約のどちらがより積極的な保護の根拠法となるかという点に関する議論が紹介された。これらは移民／難民の存在が、法的枠組みに対して惹起し得る問題提起について指摘する研究と位置づけられる。以上の報告ならびに前年度までの報告の議論を踏まえて、第2回目・第3回の研究会では、成果論集の全体を通じたコンセプトや、各担当章での執筆内容について、討議が行なわれた。その結果、移民／難民と、地域社会・国家とをとりまく関係性を明らかにし、現代における諸課題を指し示していく方向性が確認され、各章の執筆を開始している。

終了報告

本研究課題では、複合的要因により越境移動を重ねる人々を移民／難民として相対的に捉え、彼らの存在が滞在国における国籍や市民権など法的枠組み、コミュニティ形成、および社会福祉に与える影響を多面的に理解する比較研究を行なった。各国の事例研究からは、これら移民／難民の滞在が受け入れ国内で長期化する一方で、法的地位は不安定であり、制度の間を縫う NGO 等の補完的な枠組みにより生活を維持している様子が確認された。また移民／難民の受け入れ政策の厳格化が、逆に偽装結婚や無国籍といった問題を生むという因果関係が指摘された。これらは受入国の政治枠組みとの齟齬による生じる影響であり、非国家組織により移民／難民に対しても一定のシティズンシップが与えられている現状を示すと同時に、その限界を示唆するものである。また他の事例からは、受け入れコミュニティにおいて、移民／難民がもたらす人口圧力やジェンダーバランスの変化、食文化など異なる生活習慣に対して、対応をめぐる論争が起こり、政策上も新たな試みがなされていることが明らかにされた。法的枠組みの議論においては、移民／難民に対する統合政策について、MIPEX などの国際的指標や、EU 法の整備などでシティズンシップの向上が志向される一方で、法律上は国家主権との関係や、国内法体系の中での人権保障の限界など多くの問題が存在し、論争があることが指摘された。これらの研究成果は、移民／難民のシティズンシップを議論するに際して、国籍付与や市民権などの既存の国家の制度にもとづく権利保障だけでなく、より幅広い枠組みの検討や議論が有効であることを示すものである。研究期間を通じては、共同研究員による計 18 本の報告と、共催のシンポジウムでの関連分野の専門家による 2 本の報告が行なわれた。

成果の公開状況、計画

本研究会での議論の内容は、AA 研の共同利用共同研究課題ホームページを通じて記録が公開されている。また共同研究員それぞれが編者となり、本研究課題に関連した内容の編著を刊行し、また論集にそれぞれ執筆するなどして、成果の公開が進んでいる。研究会での議論を踏まえた内容は、学会や一般向けの公開セミナー等での口頭発表という形でも報告されている。

本研究会では、法学、人類学、政治学など他分野の研究者および NGO の実務家による学際的な議論が展開され、それぞれの研究分野における先端的研究動向を共有しながらシティズンシップをめぐる新たな可能性について模索することができた。その成果については、14名の共同研究員がそれぞれの報告にもとづき執筆する形での論集の執筆を既に進めており、2017年7月末に完成校を揃え、2017年度中に明石書店から刊行予定である。

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）

研究代表者名： 富沢寿勇（静岡県立大学） 参加者：所員 5 共同研究員 19

研究期間： 2014（平成26）年度～2016（平成28）年度

研究計画

本課題は複数の分野（人類学、地域研究、歴史学、政治学等）の研究者によって東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関して共同研究を進めていくことを目的としているが、本年度は前年度までと同様に東南アジアにおけるムスリム／非ムスリムの関係性の特質などについて各メンバーによる個別の研究報告と討論を通じて検討していくことに加え、さらに最終年度として本研究課題全体の成果取り纏めに向けた作業を進めて成果報告論集（英文）の出版を目指す。

具体的には第一回目と第二回目では東南アジア島嶼部と大陸部におけるムスリム／非ムスリム関係の動態などについての個別報告と討論を実施する他、第三回目の研究会においては成果刊行のための包括的な全体討論と打合せを実施する。なお、研究の進め方として、前年までと同じく AA 研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）を中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しながら国際的な共同研究として実施していく。具体的には東南アジア研究者との共同によるコタキナバルでの国際ワークショップを開催する。成果に関しては前年度同様 HP へアップするのはもちろん、KKLO の実施している講演会を通じて研究者以外の聴衆へのアウトリーチ活動等も実施し、さらに遅くとも次年（2017）度以内の英文論集の刊行に向けて成果取り纏め活動を重点的に実施する。

研究実績の概要（2016 年度）

本研究課題は 2016 年度が最終年度となる。このため同年度においては、前年度同様に参加者全員による担当地域や国に関する個別報告と質疑応答などを実施することと並んで、最終的な研究成果を英文論文集として刊行するための成果取り纏めの作業も実施した。より具体的に言えば、2016 年度にはコタキナバル（マレーシア）で開催された国際ワークショップを含む計 4 回の研究会を実施し、うち第 1 回、第 2 回、第 4 回研究会では個別の報告として菅原、左右田、床呂、ファルーク、シャムスル、吉田、坪井、小林、川端による東南アジア各地におけるイスラームと文化多様性に関する個別の事例報告と全員による質疑応答と検討を実施した。また第 3 回研究会では、成果出版物 *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia Vol.2*（仮題）の内容に関して執筆者全員による執筆構想を提出して相互批評と情報交換を実施すると同時に、その出版計画に関しても具体的な打ち合わせと意見交換を行った。その結果として、2017 年度中に成果論集を刊行する方向で調整が実施され、2017 年度には既に具体的な執筆と編集作業に着手しつつある。

終了報告

本研究課題では、東南アジアにおけるイスラームと文化多様性の諸相に関する研究を目的として、2016 年度までの 3 年間で毎年コタキナバル（マレーシア）で開催される国際ワークショップ 3 回を含む通算 10 回の研究会を実施し、同課題のメンバーによる報告と質疑応答等を行ってきた。最終年度の 2016 年度では前年度までの活動成果を継承しつつ、最終的な研究成果の取り纏めと出版に向けた作業を行った。本プロジェクトを総括すれば、その大きな特徴として、複数の分野（人類学、歴史学、政治学、宗教学等）の研究者（外国人メンバーを含む）によって東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関して学際的に国際的な共同研究を進めてきた点を挙げることができる。また 3 年間の共同研究を通じて、東南アジア地域における非ムスリム集団とムスリムの関係の多様性、そしてムスリム内の多様性に関して個別事例を通じて検討することができたのはもちろん、中東などを専門とする研究者らもメンバーに加えることで、地域間比較の観点から東南アジアにおけるムスリム／非ムスリムの関係性の特質なども検討することができた。また研究の実施においては AA 研の海外拠点コタキナバル・リエゾンオフィス（KKLO）を中心としてこれまでに構築してきた東南アジアの研究者とのネットワークを活用しつつ、国際的共同研究として実施してきたことを大きな特色として総括することができる。具体的な研究成果の詳細に関しては、2017 年度中に出版予定の英文成果論集で公開する予定である。

成果の公開状況、計画

まず各研究会の内容等に関しては AA 研のホームページ (URL は下記参照) で公開しているほか、学会等でメンバーが個別に成果発表を実施した。これに加えて研究成果発信と社会還元のため 2014 年度から 16 年度までの毎年、東マレーシア・サバ州コタキナバルにおいて現地在住の邦人 (大使館・企業・NGO 関係者、留学生、その他) を対象とした講演会 (KKLO 主催) を実施したなかで、本研究課題のメンバーである金子、坪井、福島が講演を実施したことに加えて、16 年度にはインドネシアのジャカルタにおいても邦人向け講演会を実施し、本課題のメンバーである吉田が講演を行うなど、本研究活動の成果の一端を広く一般社会にも公開するアウトリーチ活動を実施した。(本課題の URL ; <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp209>)

2016 年度の第 3 回研究会において、本研究課題の成果出版物 *Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia Vol.2* (仮題) の内容に関して執筆者全員による執筆構想を提出して相互批判と情報交換を実施すると同時に、その出版計画についても具体的な打ち合わせと意見交換を行った。その結果として、2017 年度中に成果論集を刊行する方向で調整が実施され、2017 年度には既に具体的な執筆と編集作業に着手しつつある。

アフリカに関する史的研究と資料

研究代表者名 : 荻谷康太 参加者 : 所員 2 共同研究員 8

研究期間 : 2014 (平成 26) 年度~2016 (平成 28) 年度

研究計画

最終年度となる本年度は、これまでの研究期間において十分に扱うことができなかったアフリカ南部及び東部を主たる地域的射程とする。研究会の進め方としては、これまで通り、共同研究員・研究協力者がそれぞれの研究の中で使用してきた、もしくは今後使用しようと考えている資料群の解説を交えた発表を行い、それを受けて、参加者全員で議論を行う。ただし、本年度は最終年度であるため、各研究会の中で、最終的な成果公開に向けた議論も併せて行う予定である。

なお、いずれの研究会も、共同研究員及び研究協力者による研究発表については公開とし、また、可能な限り、東京外国語大学本郷サテライトで開催しようと考えている。更に、各研究会で行われた研究発表の内容は、その概要 (報告書) を本共同研究課題のウェブサイト (<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp208>) で公開する。

研究実績の概要 (2016 年度)

最終年度となる 2016 年度は、当初の予定通り、3 回の研究会を開催した。

第 1 回 (通算第 7 回) 研究会では、共同研究員 2 名が報告を行った。まず大澤広晃氏は、イギリスの「人道主義」に関する 2 つの史料を取り上げ、その中に見出される「アフリカ」に関するイメージもしくは表象が 19 世紀末から 20 世紀初頭にかけて如何に変化したのか、もしくは変化しなかったのかを明らかにした。次に永原陽子氏は、歴史学の問題に引きつけながら近年の南アフリカにおける知の脱植民地化を巡る議論を紹介し、そこから、本共同研究において共有されるべきアフリカ史理解の在り方とそのための史料に関する諸問題が論点として提示された。加えて、第一次世界大戦期の南部アフリカを例としながら、「アフリカ史のアフリカ化」において検討すべき植民地史料の利用可能性を論じた。

第 2 回 (通算第 8 回) 研究会では、共同研究員 1 名、研究協力者 1 名による報告が行われた。まず、研究協力者の西野太郎氏は、アラビア語・イタリア語・ポルトガル語資料の分析に基づき、1500 年から 1501 年にかけて行われた、ポルトガル船団のインドへの航海を記した 4 つのイタリア語写本の史的価値の考察を行った。次に、共同研究員の北川勝彦氏は、本共同研究課題の成果出版の枠組みを如何に設定すべきかという問題を念頭に、「アフリカ史のアフリカ化」に関連する諸問題、更には、世界史及び世界史研究におけるアフリカの位置もしくはアフリカ史の記述方法に関する複数の論点を提起した。

第3回（通算第9回）研究会では、共同研究員の溝辺泰雄氏が報告を行い、イギリス領ゴールドコーストを地域的射程とし、19世紀末から20世紀初頭の新聞資料や、脱植民地期に開始されたラジオ国際放送に関連する諸資料を取り上げ、アフリカ分割期及び脱植民地期における現地エリートや政治家の諸見解を詳しく分析した。

終了報告

本共同利用・共同研究課題では、3年間の研究期間中、通算9回の研究会を開催し、歴史学、人類学、地域研究を専門とする14名が研究報告を行った。それぞれの報告が考察の対象とした地域は、北アフリカ、北東アフリカ、東アフリカ、西アフリカ、南部アフリカと多様であったが、それ故に、アフリカ及びヨーロッパ各地の文書館や図書館、宗教施設などが所蔵する様々な言語（英語、フランス語、ドイツ語、イタリア語、ポルトガル語、アラビア語、ゲエズ語、その他サハラ以南アフリカの諸言語）の資料群に関する広範な情報を本課題に参加した研究者の間で蓄積・共有することができ、「アフリカ史」を叙述するために利用できる多岐に亘る文字資料についての知見を深めることができた。また、こうした文字資料のみならず、アフリカ史研究における口承資料や遺物、画像などの非文字資料の活用の問題も、本課題の研究会では繰り返し論点として取り上げられ、特に文字資料と非文字資料の双方を駆使したところに見えてくるアフリカ史叙述の在り方について議論を深めることができた。

最終年度には、本課題への取り組みを通じて得られた知見をもとに成果出版に関する議論を重ね、その結果、具体的な「史料」を提示しながら「アフリカ史」を考える上で重要な複数のテーマを論じるという内容の出版物をまとめることが決定した。これは、アフリカ史研究の専門家のみならず、アフリカ史に関心を抱く大学学部生や大学院生、隣接領域の研究者、高等学校の教員なども読者層として想定するものであり、2017年度中に全ての論考を取りまとめて、可能な限り早い時期に山川出版社から出版する予定である。

成果の公開状況、計画

本課題の研究会でなされた全ての研究発表の概要は、本共同研究課題のウェブサイトにおいて公開している（<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp208>）。

また、アフリカ史研究の専門家のみならず、アフリカ史に関心を抱く大学学部生や大学院生、隣接領域の研究者、高等学校の教員なども読者層として想定した成果出版物『史料から考えるアフリカ史』（仮）を山川出版社から刊行する予定である。

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究代表者名： 山田敦士 参加者：所員 3 共同研究員 17

研究期間： 2015（平成27）年度～2017（平成29）年度

研究計画

計画初年度の議論により、テキスト研究の射程が、テキストの内容分析のみならず、その道具性やテキストを取り巻く社会的活動にまで広がりうるとの認識が共有された。テキストは本来、その一つ一つが「モノ」としての存在である。したがって、それを取り巻く「コンテキスト」には多くの分析すべき情報が含まれているはずである。研究計画2年目は、テキストを成り立たせるこうしたコンテキストにも注目し、既存テキストに対する研究の深化を図る。

研究会は2回開催する。今年度は、漢族や回族、白族といった豊富なテキスト資料をもつ民族集団の事例を取り上げる。それぞれの領域を専門とする共同研究員の研究報告を題材に、多角的なアプローチの可能性を探る。共同研究員だけでカバーしきれない領域については外部講師を招聘し、意見交換に努める（現在、2名に依頼中）。なお、2回の研究会は共同研究員がフィールドワークをおこなう時期の前後に開催することとし、研究会とフィールドでの知見の相互還元が可能なように配慮する。

研究成果の公開に関して、本年度は7冊程度のプロジェクト出版物が計画・準備されている。

研究実績の概要（2016年度）

平成28年度は、初年度に構築した共通基盤にのっとり、個別事例の検証をおこなった。議論の促進を図るために、以下二つの共通テーマの設定、および隣接領域または地域からの外部報告者の招聘をおこなうこととした。

(1) 漢族、あるいは非漢族との接点におけるテキスト研究

雲南地方は漢族の爆発的な増加により、言語文化的に大きく変容したことがわかっている。そこで「漢族」を共通項とし、漢族自身の、あるいは非漢族が漢族との接点においておこなうテキスト活動を議論した。漢族によるテキストは、多量かつ広範にわたる。しかし、在地テキストのなかには、内容よりもその「モノ」としての性質に着目すべき場合がある。例えば、漢族と非漢族の間で交わされた契約文書などは、唯一無二のモノとして、その成立背景や保存のあり方など、考察すべき情報が多分にある。こうしたテキストのモノ的側面への視座は、テキストの成立前後までを理解しようとする本プロジェクトにとってきわめて重要である。

(2) 音声表象のテキスト化

従来のテキスト研究は、文字によって表記されたものに対する研究（テキスト成立を境に「テキスト後」と呼ぶ）に偏りがちであった。そこで、文字によって表記される以前の状態（同様に「テキスト前」）に焦点をあてることとした。雲南大理地方の白族、および隣省のプイ族においては、「テキスト前」段階の題材である「歌」のテキスト化がおこなわれている。「歌」は音声表現であるものの、白族、プイ族のどちらにおいても、文化伝承が図られる場面においてテキスト活動がおこなわれている。しかし、テキスト化に対する社会・文化的意味づけは異なるようで、周辺民族においても様ではない。こうした「テキスト前」からそのテキスト化、さらにその使用にかけての一連の過程を追うアプローチは、新しいテキスト研究の視点として十分に魅力的である。

成果の公開状況、計画

研究課題に関わる成果として、学術論文13編、口頭発表15題、資料集・報告6冊が公開された。研究課題に関する成果出版物として、8冊程度の資料集の刊行を予定している。

アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から

研究代表者名：鶴田格 参加者：所員 2 共同研究員 17

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

研究会初年度となる今年は、まず第1回目の研究会において代表者の鶴田格が農業革命の概念と実態の比較史的検討の枠組みについて報告する。また同時に共同研究員の杉山祐子より杉山が長年ザンビアの農村研究の中から練り上げてきた「フォーク・イノベーション」論について報告する。この二人の報告を、今後研究会の中で議論を行っていくための理論的な基礎としたい。第2回目と第3回目の研究会においては、現代アフリカにおける在来農法の存続、近代農法の導入とそれが生み出すさまざまなインパクトといった点について、人類学者の報告をもとに集中的に議論をする。その際、特定地域の事例的報告という枠をこえて、アフリカの広い範囲で現在重要となっている特定の食料作物（バナナ、キャッサバ、トウモロコシ、コメなど）や換金作物（カカオ、コーヒーなど）をテーマとしてとりあげ、サハラ以南のアフリカ全体を視野にいれてこれらの作物の生産・消費ならびに農村社会におこっている変化を検討する。

研究実績の概要（2016年度）

2016年度の三回の研究会はそれぞれ統一のテーマのもとに実施された。第1回ではアフリカ農業農村社会史を農業革命あるいはイノベーションという観点から再検討するための理論的枠組みを検討し、第2回はいまアフリカで急拡大しつつある水稲稲作に焦点をあて、第3回ではアフリカ農業の基本形態ともいえる焼畑農耕について検討した。なお第2回、第3回ではアフリカの特徴を浮き彫りにするために東南アジア研究者から報告をいただき、地域間比較のための議論を深めた。全体を通して浮かび上がってきたアフリカ農業農村の特質に関わる論点

としては、(1) 政治権力または階層分化と農業技術変化との関連、(2) アフリカの在来農業イノベーションの特質、(3) 市場経済の浸透と農業技術変化との関連、などがある。(1)については、アフリカではユーラシア大陸と異なり近代以前に強大な国家権力が存在せず、自給的農耕民世界と牧畜民世界が併存し、社会の異質化・階層化を生み出さない自然社会としての「農耕社会」が長期にわたって温存されてきたことが指摘された。(2)については、アフリカ農業の在来の技術革新は、①多くの選択肢を確保しつつ技術体系の変化が進行する、②トップダウンではなく個別的多発的におこなわれヨコの社会的つながりによって普及していく、③近代技術や近代品種が採用されることもあるが一直線に近代化の方向性に進むことにはならない、などの諸点が指摘された。(3)については、早くも13世紀後半から主食のコメが商品化し、近年では「緑の革命」型の近代稲作技術が国家の強い政策実行力のもとで農村に普及した東南アジアと比べ、アフリカにおいては「伝統(自給)作物」と「近代(商品)作物」の対照が明瞭であり、いまだに自給作物の栽培に重点がおかれていることなどが論じられた。

成果の公開状況、計画

2016年度中に開催した3回の研究会は公開とし、何名かの非メンバーが研究会に参加した。各研究会の概要については、その概要をAA研の本共同利用・共同研究課題のウェブサイト(<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp223>)で公開している。本共同利用・共同研究課題の成果については、最終年度にあわせて成果出版物の刊行準備を進めることになった。

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2) ジャワのイスラーム化再考

研究代表者名：菅原由美 参加者：所員 2 共同研究員 9

研究期間：2016(平成28)年度～2018(平成30)年度

研究計画

今年度は、

(1) まず、ジャワのイスラーム化に関する研究史、南アジアのイスラーム化に関する研究史、Sufismに関する研究史の整理を、メンバー全員で行い、文献学や歴史学的研究の問題点や不足点について、時期ごとに検討する。その後、それらの不足点を補うために用いるべき方法論や新史料について議論し、それらを用いて分析をおこなう担当者を定める。または、外部から専門家を探し、研究会に参加してもらい意見を聞く。メンバーの担当課題を明確にし、来年度予定する国際シンポジウムの発表内容を確定しする。

(2) また、上記の研究会を公開でおこない、ジャワ史、インドネシア史、海域東南アジア史、イスラーム史に関心をもつ研究者(できれば若手を積極的に勧誘し)の参加を促す。

(3) 第一期に作成したコンコーダンスを、第一期国際シンポジウム参加メンバーに公開し、意見をもらう。掲載するテキストをさらに増やし、ホームページを作成し、コンコーダンスを今年9月にインドネシアで開催されるインドネシア写本学会国際シンポジウムにおいて公開するための準備をおこなう。

研究実績の概要(2016年度)

本研究の目的は、これまで史料の限界により、十分には議論されてこなかったジャワ地域のイスラーム化について、14世紀から19世紀のジャワ語史料及び関連資料の開拓・再検討及び、南アジアのイスラーム化との比較分析を通して再考することである。本年度は、初年度として、まず国内研究会を4回行い(内、2回は代表者科研究研究会との共催)、参加者の研究発表を通して、関連研究史の整理を行った。オランダ人研究者によるイスラーム諸王国時代の研究は非常に限られた史料しか利用していないこと、「九聖人」に関わる写本群の研究はほとんど進んでいないことが明らかになった。この研究会と同時に、マタラム王国王統記『ババッド・タナ・ジャウイ』(ジャワ文字、バライ・プスタカ版)の講読会を公開で開始し、ジャワ語史料の読解・分析方法についての議論を行った。ジャワ語韻文テキストの共同講読を公開で行う試みは国内でこれが初めてであり、ジャワ語韻文読解の様々な問題点が明らかになった。この講読成果は終了後に史料改題として発表する予定である。

さらに、ジャワ語文献コンコーダンス (JVDO) の完成度を上げるために、ジャワ語テキストの収集と整備を行った。これらを順次、コンコーダンスに掲載していくことを計画している。

成果の公開状況、計画

Javanese Documents Online (JVDO)の最新版が現在、公開中である。さらに、新しいテキストの掲載を進めている (<https://jvdo.aa-ken.jp/>)。Javanese Studies Series Vol.5 の出版を昨年度末に予定していたが、最終訂正が期限に間に合わなかったため、2017年度出版に回した。6月完成予定。次のVol.6について、7月末に出版申請を行う。

イスラームに基づく経済活動・行為 (第二期)

研究代表者名： 福島康博 参加者：所員 2 共同研究員 13

研究期間： 2016 (平成 28) 年度～2018 (平成 30) 年度

研究計画

本研究課題は、共同研究員を「イスラーム金融」「ハラール産業」「ファッション・美容」「ツーリズム」「イスラーム・グッズ」「イスラームと地域経済」という六つのサブ・グループに振り分けている。このサブ・グループは、同じ産業であっても異なる地域 (例えば中東と東南アジア、南アジアと中央アジア、など) を専門とする共同研究員複数で構成している。そのため各回の研究会はサブ・グループ単位での報告を行い、このことで各産業の特徴と地域間の相違を同時に明らかにすることを可能なものとする。

上記の趣旨に基づき、2016年度は「イスラームと地域経済」と「ツーリズム」の二つのサブ・グループによる報告を行う予定である。「イスラームと地域経済」は、第一期から引き続き採用しているサブ・テーマであるものの取り扱いがなかったため、第二期初年度である今年度を実施する。他方「ツーリズム」は、第二期より新たに採用したサブ・テーマであり、また近年日本において外国人ムスリム観光客への関心が高まっていることから、早い段階において議論を行うこととする。なおこれに関連して、他大学が招聘予定のマレーシア人研究者に報告を依頼している。共同研究員のみならず外部者からの報告を受けることにより、より活発な議論が行われることを目指す。なお、報告者の事情等で上記サブ・グループ単位での報告が難しい場合は、近接テーマ・地域の共同研究員2名で研究会を実施することとする。

研究実績の概要 (2016年度)

2013年度から15年度まで実施してきた共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為」を受け、第二期として3年計画で始まった本研究課題は、2016年度は1年目であった。第二期が第一期とは異なる点として、取り扱うサブ・テーマとして新たにムスリム・フレンドリー・ツーリズムを加えた。これに基づいて、10月に開催した第1回研究会では、マレーシアのスルタン・ザイナル・アビディン大学応用社会科学部のアフマド・プアド・マット・ソン氏を招き、マレーシアにおけるムスリムによる観光の現状と、観光産業の中核であるホテル産業でのムスリム観光客対応についての実態調査と分析についての報告がなされた。

3月の第2回研究会では、研究地域と対象が異なる2本の報告が行われた。一つは共同研究員の藤原達也氏による、日本のハラール食品産業が直面している課題を経営学の分析手法を用いて明らかにすることを目的とした報告である。ハラール食品に関する報告は、第一期においても取り上げたことがあるが、日本企業側に焦点を当てたことと、経営学の分析手法を用いた点で、オリジナリティーの高い報告であった。もう一つは、二ツ山達朗氏 (京都大学) による、チュニジアにおけるカレンダーやポスター等の生産・流通・消費に関する報告が行われた。本報告は、従来はハラール産業とはみなされていないものの、イスラームに基づく商品のあり方を問うことでイスラームと経済の関係性を検討する報告であった。

成果の公開状況、計画

2016年度の研究会は、いずれも公開で開催した (第1回の際の共同研究員における打ち合わせを除く)。また、開催に先立ち、日本中東学会や東南アジア学会等のメーリングリストを通じて、事前の広報を行った。この結果、それぞれの研究会において、共同研究員以外に数名程度の外部からの出席者が得られた。

2016年度の研究会で発表を行った3名の報告書は、すべてAA研のサイトにおける本研究課題紹介ページに加え、基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」のページにて公開されている。

基幹研究当該ページ：http://meis2.aacore.jp/jr_islam_economy_20170319.html

2017年度は、前年度と同様、2-3回程度の研究会を公開方式で実施する。具体的には、サブ・テーマであるムスリム・フレンドリー・ツアー、および地域経済とイスラームの関係を中心的に取り上げる。報告者については、基本的に共同研究員から選ぶこととするが、内容に応じて共同研究員以外の研究者を招聘し報告を依頼することもある。

近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究代表者名： 太田信宏 参加者：所員 3 共同研究員 15

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

共同研究開始にあたり、最初に、専門とする言語・分野を異にする共同研究員に、それぞれの専門領域において16世紀から18世紀（当研究課題では、この時期をとりあえず「近世」と呼ぶ）に成立した諸文献の特徴について、特に前後の時期との違いがあればその点を中心に、議論を行う。あわせて、近世南アジアの文化・文芸に関する近年の研究動向を概観し、その成果と課題を確認する。これらのふたつを通じて、近世という時代に関するそれぞれの認識の共通する点と齟齬する点を理解し合い、共同研究を円滑に進めるための共通基盤を確立する。そのうえで、今年度は、近世南アジアの文芸・文化全般に大きな影響を及ぼしたと推測される修辞学に着目する。サンスクリット語による伝統的な学問分野のひとつである修辞学が近世期にあらたな展開を見せたことは、これまでも修辞学の専門研究で論じられているが、修辞学の新展開が、サンスクリット語以外の諸語の文芸や、修辞学以外の思想や宗教にどのような影響を及ぼしたのかを検討する。言語や宗教などの境界を越えた文芸・文化のつながりと比較は、当研究課題の特徴であるが、修辞学を事例につなぐりと比較の手法について議論を深める。

研究実績の概要（2016年度）

本研究課題の開始にあたり、最初に、近世期南アジア文化に関する欧米での研究動向や成果を振り返りつつ、本研究課題が追及すべきテーマと方向性をあらためて確認した。本研究課題の特徴は、思想・宗教、文学、歴史という異なる分野、さらには、サンスクリット語・ペルシア語などの普遍的言語と地域言語という異なる言語の専門研究者が参加し協働することにある。言語と分野の違いによってややもすると細分化されたかたちで研究が進行しつつある近世期南アジア文化を、異なる言語・分野間のつながりに着目して捉えなおすことを目指すことをメンバーの共通認識とした。カンナダ語宮廷文学と、ペルシア語、ブラジ・バーシャーの文学作品との比較を試みた研究報告の質疑応答からは、異なる言語の文学の比較研究は二次文献に依拠せざるをえない場合もあるが、完全に依拠することの危険性と限界が再認識された。また、近世文化において、歴史認識・叙述の展開が重要な要素であり、「歴史書」も、「事実」の記録ではなく、文学作品のような構築されたテキストとして分析の対象とすることを確認した。ベンガル地方におけるヒンドゥーとムスリム間の関係をヒンドゥーの聖者伝をもとに分析した研究報告の質疑応答からも、聖者伝の中から「事実」を掬い取るだけでなく、聖者伝を社会的状況や先行する諸文献との関係性のなかに位置付けて分析することの必要性と可能性が浮かび上がった。

成果の公開状況、計画

研究会の報告内容を逐次、下記のAA研ホームページにおいて公開している。

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/projects/jrp/jrp226>

概論と、研究会における報告をもとにした各論から構成される成果論集を、研究課題期間終了後にすみやかにとりまとめ、AA研プロジェクト出版物として刊行する予定である。

中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究代表者名： 近藤洋平 参加者：所員 2 共同研究員 9

研究期間： 2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究計画

活動の初年度である本年度は、本研究課題が掲げる問題意識と到達目標についての参加者の共通理解を深めること、また各参加者の研究テーマについての相互理解を図ることを第一の目標とする。2016年9月のペイルート JaCMES における研究会では、この2点を中心に取り上げ、あわせて、課題達成のための今後の活動計画を話し合う。

2017年2月に AA 研で開催予定の研究会では、9月に話し合った内容に基づいて、参加研究者が自らの研究の進捗状況を報告する。

また必要に応じて、この2月の研究会では、国内外の研究者を研究協力者として招聘し、研究課題に有益な知見を得る。

研究実績の概要（2016年度）

プロジェクトを始めるにあたり、各共同研究者の研究関心について参加者相互の理解が不十分であったことから、本年度は参加研究者同士の交流促進と、各人の研究関心・研究課題をうまく取り入れる形での本プロジェクトの運営および推進についての議論に重点を置いた。9月にペイルートの中東研究日本センター（JaCMES）で開催した第1回研究会では、出席した共同研究員が、自らのこれまでの研究課題を紹介した。そして中東地域に暮らす少数派について、各集団を「生き残り戦略」の観点から考察を進めていくことで、参加者の間で確認した。

上記確認に基づき、AA 研で開催した第2回研究会では、中東の少数派の「生き残り戦略」について、合計7件の例につき議論を交わした。この研究会には、国内の研究者1名を研究協力者として招聘した。参加者による報告の中には、我が国においてはまったく紹介されていない事例も含まれており、プロジェクトの意義を確信するとともに、プロジェクトの内容をいかに早く、正確に、そして広く我が国そして世界の言論空間に発信していくかを考えるきっかけとなった。そして引き続いて、少数派の「生き残り戦略」について考えていくことを確認した。

成果の公開状況、計画

2016年度の研究会は、いずれも公開で開催した。それぞれの研究会においては、共同研究員以外に数名程度の外部からの出席者が得られた。

2016年度に開催された研究会のプログラムは、AA 研のウェブサイトにて記載されている。このほか、研究成果は2019年度末までに出版する予定である。

I-2.4 センター

I-2.4.1 情報資源利用研究センター

年度計画

1. AA 研の言語文化に関する情報資源の蓄積、加工、公開、活用に関する研究を行う。
2. IRC プロジェクトを通じて、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を行う。
3. IRC ウェブサイトの充実を図り、情報資源の発信体制をより一層強化する。
4. 所内基幹研究班、特別経費プロジェクト等との連携研究を実施する。
5. IRC ワークショップを開催し、研究手法の普及、発展を推進する。
6. 情報資源利用の新展開のため他の研究機関との連携、共同研究を模索する。

実施状況

1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化に関し、以下のプロジェクトを支援した。
() 内は代表者名である。
 - 1) 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」(奥田統己・山越康裕)
 - 2) 「チュルク諸語対照基礎語彙(第3期)」(児倉徳和)
 - 3) 「オスマン演劇ポスター画像公開」(江川ひかり)
 - 4) 「インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター」(塩原朝子)
 - 5) 「故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開」(塩原朝子・品川大輔)
 - 6) 「ハウサ語、ヨルバ語電子辞書の作成と公開」(塩田勝彦)
 - 7) 「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」(栗林均)
 - 8) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析(2)」(町田和彦)
 - 9) 「アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラム」(高松洋一)
2. 上記プロジェクトのうち、「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」、「オスマン演劇ポスター画像公開」、「ハウサ語、ヨルバ語電子辞書の作成と公開」、「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」、「ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析」は、所外の研究者と連携して行ったプロジェクトである。また、「アラビア文字紀年銘(クロノグラム)年代計算プログラムの公開」は基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」と、また、「チュルク諸語対照基礎語彙(第3期)」、「インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター」は基幹研究「言語ダイナミクス科学研究」と関連の深いプロジェクトである。
3. 公開している情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させるために IRC ウェブサイトの全面リニューアルを行なった。
4. 研究手法の普及・発展に資する IRC ワークショップを開催した。
 - 1) IRC 国際ワークショップ「中野暁雄氏の「ベルバル民族誌」について：ラハセン・アフーシュ氏による証言の再解釈 ―スース地方の現代社会と照らし合わせて―」, 2017年2月9日, AA 研セミナー室(301), 講演者：ラハセン・ダーイフ(リヨン第2大学)

I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター

年度計画

1. 臨地調査の手法の実践的・理論的な洗練と、「フィールドサイエンス」という「現地学」の構築にむけた研究活動を推進する。
2. 上記の目的のためにフィールドサイエンス・コロキウムを企画・実施する。
3. フィールドサイエンスを専門とする異なる分野の研究者の連携を図るオンラインのフィールドネットの整備を進め、分野を超えたフィールドサイエンス創成の方向性を模索する。
4. 研究所の有する2つの海外研究拠点である中東研究日本センター(JaCMES:レバノン共和国ベイルート)及びコタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO:マレーシア連邦・サバ州)の運営と整備を進める。
なお、各事業のおおまかなスケジュールは以下のとおり。

- 4～6月
 - ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
 - ・第1回フィールドサイエンス・コロキウム
- 7～9月
 - ・第1回フィールドネット運営委員会
 - ・KKLO「サバの少数言語に関するセミナー」
- 10～12月
 - ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
 - ・第2回フィールドサイエンス・コロキウム
 - ・JaCMES 若手研究報告会
 - ・KKLO 第1回現地講演会
 - ・フィールドネットワークワークショップ
 - ・フィールドネット第1回公募制ラウンジ
 - ・第2回フィールドネット運営委員会
- 1～3月
 - ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会
 - ・第3回フィールドサイエンス・コロキウム
 - ・海外拠点専門委員会
 - ・JaCMES 諮問委員会
 - ・KKLO 第2回現地講演会
 - ・フィールドネット第2回公募制ラウンジ

実施状況

2016年度のフィールドサイエンス研究企画センター（以下 FSC）は、床呂郁哉（センター長）、太田信宏（副センター長）、黒木英充、塩原朝子、児倉徳和、佐久間寛、吉田ゆか子から構成された。

1. および2. 臨地調査手法の洗練，フィールドサイエンスの構築，フィールドサイエンス・コロキウムの構築，フィールドサイエンス・コロキウムの企画・実施
 - 2010年度発足の「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」の企画立案により，所内基幹研究「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」との連携をはかりながら，少人数で集中的に討議をおこなう公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」を2回開催した。
 - ・「災害とノのフィールドワーク」（2016年6月17日（金）開催）
 - ・「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは（第3回）」（2017年2月12日（日）開催）
 - 文理各専門分野の研究者が情報を交換する組織として2008年度に設置したフィールドネットの機能を強化する目的で，2011年度に発足したフィールドネット運営委員会を通じ，フィールドネットの企画・運営体制の整備を継続した。
 - フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を2回（6月17日（金），2月12日（日））開催した。
3. フィールドネットの整備と公募企画の開催
 - 利便性の向上をはかるためにウェブサイト画面の改良作業と整備を続行した他，新規企画としてフォトコンテストを企画し，そのための写真の募集を開始した。
 - 公募企画「フィールドネット・ラウンジ（公募形式）」2件を開催した。
 - ・ワークショップ「老い——「問題」として，「経験」として」（2016年12月4日（日）開催）
 - ・ワークショップ「「毒」のバイオグラフィー ——学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える」（2017年1月21日（土）開催）
 - フィールドネット運営委員会を1回（2017年3月29日（水））開催し，フィールドネットの今後の活動方針を策定した。

4. 海外研究拠点の運営と整備

[II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)「3. 現地研究拠点」を参照

I-2.5 既形成研究拠点

I-2.5.1 アジア書字コーパス拠点 (GICAS)

代表：荒川慎太郎 副代表：澤田英夫
関連所員：伊藤智ゆき，小田淳一，高島淳，町田和彦

年度計画

アジア諸文字情報資源の蓄積と公開 (GICAS 図書資料・展示資料の整備と管理)
アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開

実施状況

2016 年度の年度計画に沿った活動成果は、以下のとおり。

1. アジア諸文字情報資源の蓄積と公開 (GICAS 購入図書・展示会物品等の整理・管理)
 - プロジェクトスペース (207) に設置されている特別書架の貴重書の整理を行い、研究者の利用の便を図った。
 - GICAS 所蔵、アジアの各種文字のタイプライター展「アジア諸文字のタイプライター」(AA 研, 2015 年 10 月 26 日～11 月 27 日) で使用したタイプライターを清掃・整備した。
2. アジア諸文字情報資源に関連する研究成果の公開
 - a) IRC のサーバを利用してモンゴル語全文検索に関して、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。
<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/ 20.html>
(解説用ページは <http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>)
 - b) IRC のサーバを利用してヒンディー語とウルドゥー語の自動形態素解析ソフトを、昨年度の内容を修正・拡張し、公開した。
ヒンディー語用 (<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/ 08.html>)
ウルドゥー語用 (<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/ 09.html>)
 - c) 上記で開発された文字処理技術により『ヒンディー語・日本語辞典』を編集・刊行した。
<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/foreign/hindi/index.html>
上記で開発された文字処理技術を利用して『カンナダ語・日本語辞典』を編集・刊行した。
<http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/dicts/foreign/kannada/index.html>

I-2.5.2 中東イスラーム研究拠点

代表：近藤信彰 副代表：高松洋一
関連所員：飯塚正人，錦田愛子，野田仁
特任助教：細田和江

年度計画

2005 年度から 5 年間に渡って実施した「中東イスラーム研究教育プロジェクト」によって形成された研究拠点を、2016 年度より、人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として、発展させる。

パレスチナ／イスラエル研究会，政治変動研究会，「移動・交流が創る中東・イスラーム圏」研究会を立ち上げ，国内研究会を開催するとともに，一般向けの大規模講演会，国際ワークショップ等を開催する。

実施状況

人間文化研究機構の「現代中東地域研究」推進事業の副中心拠点として，活動を開始した。9 回の国内研究会のほか，公開講演会「9・11 から 15 年 中東の混迷と『イスラム国』」を開催した。カザフスタンより Zhanar Jampeissova 氏を招聘して，二度の国際ワークショップを開催するとともに，アメリカより，Sabri Ates 氏を招聘し，共催の CAAS シンポジウムで基調講演を依頼したほか，大阪でも国際ワークショップを開催した。さ

らに、パレスチナ関係では、国際ワークショップ“The Other Possibility of Peace”を開催した。Web ページやデータベースの整備も行った。

I-2.6 所員の個人別研究活動

I-2.6.1 概要

全国共同利用研究所としての本研究所の設立理念は、アジア・アフリカ地域の言語文化に関して、現地調査に基づく総合的あるいは個別の研究を遂行してその成果を公開すること、および国内外のそれらの研究の連携と活性化を図り、基礎資料の構築と公開に努めることにあり、2010 年度に新設の共同利用・共同研究拠点に移行した後も、この基本理念は変わらない。

そうした理念に立って共同利用・共同研究拠点の任務を遂行するための研究活動は本年度、4 つの基幹研究、2 つのセンター（情報資源利用研究、フィールドサイエンス研究企画）、2 つの既形成拠点およびそれらと密接に連携しつつ遂行される共同利用・共同研究課題（29 件）を中心に実施された。所員がこれらの多様な共同研究活動に何らかの形で参画していることは言うまでもない。

本項目は、以上のような本研究所における共同研究活動が、所員個人のレベルにおける成果としてどのように反映されているのかを、本年度の所員ごとの研究業績を列挙する方式で示したものである。

I-2.6.2 所員の研究業績一覧

所員

荒川 慎太郎（あらかわ しんたろう）

准教授，言語学研究ユニット
研究主題：西夏語学，西夏語文献学

業績

1. 論文：「大英図書館所蔵西夏文「礼贊文」断片について—黒水城出土チベット語文献中の資料 K.K.II.0303.a—」『京都大学言語学研究』35, 195–216, 2016.12.（査読有）
2. 論文：“On Two Fragments “praising Buddha” preserved in the British Library: Unique use of Tangut verb-prefix and suffix”『北方文化研究』7, 19–28, 2016.12.
3. 論文：「西夏文字」『口訣研究』38, 57–81, 2017.2.
4. 総説・解説：「東アジア，漢字以外の文字あれこれ」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』65, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
5. 総説・解説：「漢字からの独立—中国を取り巻く諸民族の文字」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』62, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
6. 総説・解説：「東アジアの漢字受容—漢字文化圏の誕生」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』61, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
7. 総説・解説：「漢字の変遷—字体と書写材料」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』59, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
8. 総説・解説：「青銅器に残る漢字—金文と祭祀」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』58, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
9. 総説・解説：「漢字誕生—「古くて新しい？」甲骨文字」『世界の文字の物語—ユーラシア文字のかたち』57, 2016.4, 古代オリエント博物館・大阪府立弥生文化博物館.
10. 書評：「古代文字への情熱—希代の碩学 豊田五郎」『東方』425, 2016.6.

11. 講演：「東アジアの文字世界—漢字とそれをとりまく文字」, 古代オリエント博物館「古代オリエント博物館 春の特別展「世界の文字の物語」」関連講演会「文字のシルクロード：西アジアから東アジアへ」, 2016.5.21, 池袋サンシャインシティ：ワールドインポートマート5階 コンファレンスルーム 15.
12. 口頭発表：「西夏語の方向接辞」, 「科研費（基盤 B）研究会「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」2016年度第1回研究会, 2016.7.2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
13. 口頭発表：「関于大英図書館所蔵西夏文仏典断片」, 北方民族大学・中国民族古文字研究会「北方民族文字数字化与西夏文献研究国際研討会」, 2016.8.21, 中国・寧夏回族自治区, 銀川, 北方民族大学, 設計芸術学院学術報告庁.
14. 口頭発表：「党項語音韻学：党項語声・韻的共現関係」, 寧夏高校人文社科重点研究基地（建設）・北方民族大学西夏研究所「第二屆西夏文献解読研討班」, 2016.8.25, 中国, 寧夏回族自治区, 銀川, 北方民族大学, 設計芸術学院学術報告庁.
15. 口頭発表：「党項語語法：党項語動詞前綴与趨向範疇」, 寧夏高校人文社科重点研究基地（建設）・北方民族大学西夏研究所「第二屆西夏文献解読研討班」, 2016.8.26, 中国, 寧夏回族自治区, 銀川, 北方民族大学, 設計芸術学院学術報告庁.
16. 口頭発表：“On the Formation of the Tangut Version Jinggangjingzuan 金剛經纂 from the Chinese Version”, ロシア科学アカデミー東洋文献研究所：The 6th International Symposium on Oriental Ancient Documents Studies, 2016.10.3, Hotel Oktyabrskaya (Main Conference hall), Saint-Petersburg, Russia.
17. 口頭発表：「西夏文字—そのユニークな特徴と最近の研究」, 韓国 口訣学会：International conference for the 20th Anniversary of the Society for Kugyol Studies, 2016.10.7, Gwanjeong Library Yangduseok Hall, Seoul National University, Seoul, Korea.
18. 口頭発表：“Tangut Script –Studies of the unique features”, Department of Korean Language and Literature, Seoul National University: International Symposium SCRIPTA 2016 Tangut and Other Asian Scripts, 2016.10.8, Gwanjeong Library Yangduseok Hall, Seoul National University, Seoul, Korea.
19. 口頭発表：“On Two Tangut Fragments“praising Buddha” preserved in the British Library”, School of Mongolian Studies, Inner Mongolia University and Research Center for Ancient Scripts of Northern Nationalities: 内蒙古大学首届北方民族古文字国際学術研討会, 2016.12.3, Lecture Hall, School of Mongolian Studies, Inner Mongolia University, Hohhot, China.
20. 講演：「漢字系文字のなかまたち—その特徴と古代文字の解読—」, (公財) 調布市文化・コミュニティ振興財団「平成 28 年度ちょうふ市内・近隣大学等公開講座 東京外国語大学 (12 月)」, 2016.12.13, 調布市文化会館たづくり 8 階映像シアター.
21. 口頭発表：“Linguistic researches of Tangut based on the corpus”, 東京外国語大学 AA 研「頭脳循環プロジェクト」：International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut, 2017.1.21, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
22. 口頭発表：“Directional prefixes in Tangut”, 科学研究費補助金基盤 (B)「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相 (代表：荒川慎太郎)：Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages, 2017.1.22, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304.
23. 口頭発表：“Re-analysis of the Tangut suffix for ‘dual’”, SOAS University of London: Recent Advances in Tangut Studies, 2017.2.28, Room T102, 21/22 Russell Square, SOAS, London, UK.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 荒川 慎太郎

課題番号： 16H03414

研究課題名： 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 白井聡子, 倉部慶太

期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 佐藤 貴保 盛岡大学文学部 准教授

課題番号： 15K02906

課題名： 西夏王国の人名に関する研究—多民族国家における文化交流・融合の視点から—

研究種目： 基盤研究 (C)
研究分担者： 荒川 慎太郎
期間 (年度)： 2015(H27)～2017(H29)

科研費：
研究代表者： 松井 太 大阪大学文学研究科 准教授
課題番号： 26300023
研究課題名： 多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合
研究種目： 基盤研究 (B)
研究分担者： 荒川慎太郎, 岩本篤志, 橘堂晃一, 佐藤貴保, 赤木崇敏, 岩尾一史, 山本明志, 坂尻彰宏
期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)

受賞

賞名： 第44回金田一京助博士記念賞
受賞対象： 『西夏文金剛経の研究』
授与機関： 金田一京助博士記念会
授与年月日： 2016年10月

所属学会 (役職)

日本語学会
遼金西夏史研究会

その他研究成果

名称：エッセイ「アジア諸文字のタイプライター」展を巡って」
期間 (年度)： 2016
成果：2015年に開催された「アジア諸文字のタイプライター」展に関するエッセイ『FIELDPLUS』No. 16, pp.22-25, 2016.7.1

飯塚 正人 (いづか まさと)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット
研究主題：イスラーム学・中東地域研究

業績

1. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組)：「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2016.4.
2. 学外の社会活動 (新聞・雑誌)：「静岡新聞」(識者評論 ベルギー同時テロ IS 拠点 監視強化で実行か), 2016.4.
3. 学外の社会活動 (講演会)：下越佐渡有道会記念講演会 (「イスラム原理主義」とテロ/ジハードの論理), 2016.4.
4. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演：有)：「ナビゲーション」, 2016.5.
5. 学外の社会活動 (講演会)：警部任用科本課程第46期研修 (イスラム情勢), 2016.6.
6. 学外の社会活動 (講演会)：茨城県民大学講座 (多極化世界の中のヨーロッパと中東 テロ・移民・難民問題を考える), 2016.7.
7. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組)：「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2016.7.
8. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演：有)：「ホウドウキョク」(NOTTV), 2016.7.
9. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演：有)：「Mr.サンデー」, 2016.7.
10. 学外の社会活動 (新聞・雑誌)：『週刊新潮』7月14日号 (「バングラデシュ」世俗派と原理主義の45年闘争史), 2016.7.
11. 学外の社会活動 (セミナー・ワークショップ)：高大連携事業『東京外国語大学夏期世界史セミナー：世界史の最前線』(イスラーム世界の歴史とイスラーム), 2016.7.
12. 学外の社会活動 (講演会)：日本工業倶楽部素修会講演会 (「イスラム国」のイスラーム思想), 2016.7.
13. 学外の社会活動 (講演会)：第52回法務省入国管理局関係職員特別科 (難民調査官) 研修 (イスラム世界を理解する), 2016.7.

14. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2016.8.
15. 学外の社会活動 (講演会) : 特定非営利活動法人「難民を助ける会」研修会 (イスラーム入門), 2016.9.
16. 学外の社会活動 (講演会) : 国際テロリズム捜査研修 (イスラーム情勢), 2016.10.
17. 学外の社会活動 (講演会) : 警部任用科本課程第 47 期研修 (イスラーム情勢), 2016.10.
18. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2016.10.
19. 学外の社会活動 (講演会) : 第 51 回法務省入国管理局関係職員高等科研修 (イスラーム世界を理解する), 2016.11.
20. 学外の社会活動 (講演会) : 調布市北部公民館国際理解講座 (『中東の混迷とヨーロッパ』), 2016.12.
21. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 『週刊新潮』1 月 26 日号 (墓碑銘 トランプ氏と渡り合う姿が見たかったイラン, ラフサンジャニ師の現実路線), 2017.1.
22. 学外の社会活動 (講演会) : 第 13 回法務省入国管理局関係職員専攻科研修 (イスラーム世界を理解する), 2017.1.
23. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演 : 有) : 「あしたのコンパス」(ホウドウキョク), 2017.1.
24. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2017.1.
25. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2017.1.
26. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「好きか嫌いか言う時間」, 2017.1.
27. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組) : 「池上彰のニュース そうだったのか!!」, 2017.2.
28. 学外の社会活動 (新聞・雑誌) : 『週刊新潮』3 月 23 日号 (鞭打ち! 斬首刑! 親日「サウジ」に恐怖の「勸善懲悪委員会」), 2017.3.
29. 学外の社会活動 (講演会) : 警部任用科本課程第 48 期研修 (イスラーム情勢), 2017.3.
30. 学外の社会活動 (講演会) : 世田谷区ピースセミナー (現代イスラーム文化の源流), 2017.3.

競争的研究資金

研究代表者 : 桑原 尚子 早稲田大学 法学学術院
 課題番号 : 16H03538
 研究課題名 : イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究
 研究種目 : 基盤研究 (B)
 研究分担者 : 飯塚正人, 佐藤やよひ, 大河内美紀, 青柳かおる, 吉川 孝, 辻上 奈美江
 期間 (年度) : 2016(H27)~2018(H30)

科研費 :
 研究代表者 : 黒木 英充
 課題番号 : 25257003
 課題名 : レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間構想
 研究種目 : 基盤研究 (A)
 研究分担者 : 飯塚正人, 鈴木茂, 眞島一郎
 期間 (年度) : 2014(H26)~2016(H28)

外部団体委員

人間文化研究機構 現代インド地域研究評価部会 現代インド地域研究評価部会委員
 人間文化研究機構 研究推進委員会 地域研究推進委員会委員
 人間文化研究機構 研究推進委員会イスラーム地域部会 イスラーム地域部会委員
 早稲田大学イスラーム地域研究機構
 共同利用・共同研究拠点運営委員会 共同利用・共同研究拠点運営委員会委員
 筑波大学北アフリカ研究センター共同研究会 客員共同研究員

所属学会 (役職)

地中海学会 (常任委員, 学会誌編集委員)
 日本イスラーム協会
 日本オリエント学会
 日本中東学会 (理事, 評議員)

石川 博樹 (いしかわ ひろき)

准教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: アフリカの歴史

業績

1. 著書: 「偽バナナは消えたのか: 北部エチオピアの栽培植物をめぐる歴史学的考察」『環境に挑む歴史学』(水島司編), 336-347, 2016.10.11, 勉誠出版.
2. 総説・解説: 「大教室で受講者の声を聴く」『Globe Voice』11, 22-23, 2016.10, 東京外国語大学.
3. 講演: 「食と農のアフリカ史: アフリカ史研究の可能性を探る」, 京都大学アフリカ地域研究資料センター「第221回アフリカ地域研究会」, 2016.10.20, 京都大学稲盛財団記念館.
4. 口頭発表: 「一皿のなかの歴史: 歴史学研究と地域研究」, 地域研究コンソーシアム「2016年度ワークショップ「地域研究の底力: 現場から考える」」, 2016.11.6, 京都大学稲盛財団記念館.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 石川 博樹

課題番号: 15K02888

課題名: 植民地期PALOPにおける主食作物栽培とその社会的影響に関する研究

研究種目: 基盤研究 (C)

期間 (年度): 2015(H27)~2017(H29)

所属学会 (役職)

史学会

日本アフリカ学会 (関東支部運営幹事)

日本ナイル・エチオピア学会 (評議員, 運営幹事, 学会誌編集担当幹事)

日本オリエント学会

日本ポルトガル・ブラジル学会

キリシタン文化研究会

伊藤 智ゆき (いとう ちゆき)

准教授, 言語学研究ユニット

研究主題: 音韻論, 中期朝鮮語, 中国語中古音

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 15KK0041

研究課題名: 朝鮮語諸方言における複合語・派生語のアクセント研究 (国際共同研究強化)

研究種目: 国際共同研究加速基金

期間 (年度): 2016(H28)~2018(H30)

科研費:

研究代表者: 伊藤 智ゆき

課題番号: 26370442

研究課題名: 韓国語慶尚道方言のアクセント研究

研究種目: 基盤研究 (C)

期間 (年度): 2014(H26)~2016(H28)

所属学会 (役職)

日本言語学会

朝鮮学会

日本音韻論学会 (理事)

太田 信宏（おおた のぶひろ）

准教授，フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題：南アジアの歴史

業績

1. 著書（編著）：『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』（太田信宏編），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
2. 論文：「刻文史料に見る前近代南インドの職人カースト集団——名誉，グル，由来——」『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』（太田信宏編），217-236, 2017.2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
3. 口頭発表：「完璧な妻か，完璧な夫婦か：『ハディバデヤ・ダルマ（貞女の法）』再読」，人間文化研究機構プログラム「南アジア地域研究」東京外国語大学拠点「人間文化研究機構プログラム「南アジア地域研究」東京外国語大学拠点 2016 年度第 1 回研究会」，2016.4.23, 東京外国語大学本郷サテライト。

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 太田 信宏

課題番号： 16K03075

研究課題名： 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権

研究種目： 基盤研究（C）

期間（年度）： 2016(H28)～2019(H31)

科研費：

研究代表者： 水野 善文 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号： 16H03410

研究課題名： 南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承

研究種目： 基盤研究（B）

研究分担者： 太田信宏，藤井守男，萩田博，丹羽京子

期間（年度）： 2016(H28)～2019(H31)

所属学会（役職）

日本南アジア学会（事務局長）

史学会

歴史科学協議会（『歴史評論』編集委員）

日本印度学仏教学会

インド考古研究会

カルナータカ歴史アカデミー

小田 淳一（おだ じゅんいち）

教授，情報資源利用研究センター

研究主題：計量文献学

業績

1. 著書（分担執筆）：『中東世界の音楽文化～うまれかわる伝統』（担当章：「眩惑の反復—あるベルベル吟遊詩人の曲を巡って—」），386pp., 2016.9.23, スタイルノート。
2. 論文（共著：小田淳一・石井満）：「音楽番組におけるカット割りの計量修辞学的分析」『2016 年度人工知能学会全国大会（第 30 回）論文集（CD-ROM：60.pdf）』，2016.6.（査読有）
3. 口頭発表：「ラモン・リュイは『ブリコロール』か？」，国立民族学博物館共同研究「個—世界論—中東から広がる移動と遭遇のダイナミズム」，2016 年度第 2 回研究会，2016.10.29, 国立民族学博物館。

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 小田 淳一

課題番号： 15K12831

課題名： 映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析

研究種目： 挑戦的萌芽研究

研究分担者： 石井 満 尚美学園大学 芸術情報学部 准教授

期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)

科研費：

研究代表者： 小田 淳一

課題番号： 16H05671

課題名： インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究

研究種目： 基盤研究（B）海外学術調査

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 西尾 哲夫 国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

課題番号： 24242013

課題名： アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト ―エジプト系伝承形成の謎を解く

研究種目： 基盤研究（A）

研究分担者： 小田淳一, 杉田英明, 中道静香, 青柳悦子, 鷺見朗子, 永崎研宣, 菅瀬晶子, 岡本尚子, 相島葉月

期間（年度）： 2012(H24)～2016(H28)

所属学会（役職）

情報処理学会

計量国語学会

人工知能学会

苅谷 康太（かりや こうた）

准教授, 情報資源利用研究センター

研究主題：西アフリカ・イスラーム地域研究

業績

1. 論文：「19世紀初頭の西アフリカにおける不信仰者の分類と奴隷化：ウスマーン・ブン・フーディーの著作の分析から」『アフリカ研究』89, 1-13, 2016.5.（査読有）
2. 論文：“The “Ignorant People” in Hausaland: ‘Uthmān bn Fūdī’s *Hukm juhāl balad Hawsa*”, *Journal of Asian and African Studies*, 92, 207-220, 2016.9.（査読有）
3. 口頭発表：「初期ソコト・カリフ国における背教規定の確立」, 「日本アフリカ学会第53回学術大会」, 2016.6.5, 日本大学生物資源科学部.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 苅谷 康太

課題番号： 15K16578

課題名： 18-19世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

研究種目： 若手研究（B）

期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)

所属学会（役職）

日本アフリカ学会

日本イスラーム協会（学会誌編集委員）

河合 香吏 (かわい かおり)

教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: 人類学, 東アフリカ牧畜民研究

業績

1. 著書 (編著): Kawai, Kaori (ed.), *Institutions: The Evolution of Human Sociality*. 2017, 461 pp., Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
2. 論文 (書籍論文): Introduction - From "Groups" to "Institutions": In pursuit of an evolutionary foundation for human society and sociality, In: Kaori Kawai (ed.), *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, 2017, 1-14, Kyoto University Press & Trans Pacific Press.
3. 論文 (書籍論文): Institutionalized cattle raiding: Its formalization and value creation amongst the pastoral Dodoth, In: Kaori Kawai (ed.), *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, 2017, 219-238, Kyoto University Press and Trans Pacific Press.
4. 総説・解説: 「自由集会-6 人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」『霊長類研究』32(2): 87-91, 2016.12, (査読なし).
5. 総説・解説: 「セミナー『科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式』報告」『文化人類学』81(4): 714-718, 2017.3, (査読あり) 日本文化人類学会.
6. 講演: 「自由集会-6 人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる」, 日本霊長類学会「第32回日本霊長類学会大会」, 2016.7.15, 鹿児島大学.
7. 口頭発表: 「編者による報告」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所基幹研究人類学班「合評会シンポジウム『他者—人類社会の進化』(河合香吏編, 京都大学学術出版会, 2016) をめぐって」, 2017.2.4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 河合 香吏

研究種目: 研究成果公開促進費・学術図書

研究課題名: 制度: 人類社会の進化

期間 (年度): 2015(H27)~2016(H28)

科研費:

研究代表者: 河合 香吏

課題番号: 15K03034

研究課題名: 共鳴する「五感」: 東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究

研究種目: 基盤研究 (C)

期間 (年度): 2015(H27)~2018(H30)

所属学会 (役職)

日本文化人類学会

日本アフリカ学会 (評議員)

生態人類学会

日本ナイル・エチオピア学会 (評議員)

日本霊長類学会

栗原 浩英 (くりはら ひろひで)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題: ベトナム現代史

業績

1. 論文:「史料の秘匿から公開に向けて—ロシア・中国・ベトナムの事例をめぐって—」『歴史学研究』951, 40–51, 2016.11.
2. 著書 (藤田和子・文京洙他との共著):『新自由主義下のアジア』(藤田和子・文京洙編著), 326pp, 2016.10, ミネルヴァ書房
3. 学外の社会活動 (取材協力):「対中関係は調整局面に」『The Daily NNA ベトナム版』, 2017.2.8.
4. 学外の社会活動 (インタビュー): “Chuyen gia Nhat Ban: Phan quyet cua PCA co y nghia quan trong”, 2016.7.1, URL: <http://www.vietnamplus.vn/chuyen-gia-nhat-ban-phan-quyet-cua-pca-co-y-nghia-quan-trong/397106.vnp>

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 栗原 浩英

課題番号: 15K01865

課題名: ベトナム・中国間境域における協力/対立と国家関係の連動性に関する研究

研究種目: 基盤研究 (C)

期間 (年度): 2015(H27)~2017(H29)

外部団体委員

公益財団法人岡崎嘉平太国際奨学財団奨学生選考委員

所属学会 (役職)

日本ベトナム研究者会議

東方学会

歴史科学協議会

東南アジア学会

アジア政経学会

歴史学研究会

呉人 徳司 (くれびと とくす)

准教授, 言語学研究ユニット

研究主題: 言語学, チュクチ語

業績

1. 著書: *Linguistic Typology of the North 4*. (Ebata, Fuyuki and Tokusu Kurebito (eds.)), 202pp., 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 論文:「東部ユグル人とその言語」『現代中国における言語政策と言語継承』(包聯群編) 3, 72–81, 2016.8. (査読有)
3. 論文: “Diversity of the passive voice in the Mongolic languages”, *Linguistic Typology of the North* (ed. by Fuyuki Ebata and Tokusu Kurebito) 4, 1–11, 2017.3. (審査なし)
4. 口頭発表: “Diversity of the passive voice in the Mongolic languages”, *Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia*, 2016.7.8-9, 新潟大学 (審査なし)
5. 口頭発表: “Some questions of causative and passive of Khorchin dialect in Mongolian”, *International Association for Mongol Studies: the 11th International Congress of Mongolists*, 2016.8.15-18, Ulaanbaatar, Mongolia. (審査有)
6. 口頭発表: “Notes on Tense in the Mongolic Languages”, *The Linguistic Association of Finland: Time and Language*, 2016.8.25-26, Turku, Finland. (審査有)
7. 口頭発表: “Notes on phonological and morphological characteristics in Eastern Yugur”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第5回研究会, 2016.11.12-13, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所. (審査なし)
8. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演: 有): 「モンゴル伝統文化の重要性」(モンゴル国のインターネット放送), 2016.8.18

競争的研究資金

科研費:

研究代表者： 呉人 徳司
課題番号： 15H05155
研究課題名： 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究
研究種目： 基盤研究 (B) 海外学術調査
研究分担者： 風間伸次郎, 江畑冬生
期間 (年度) : 2015(H27)~2018(H30)

科研費：
研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授
課題番号： 16K02686
研究課題名： 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究
研究種目： 基盤研究 (C)
研究分担者： 呉人徳司
期間 (年度) : 2016(H28)~2018(H30)

外部団体委員

北海道立北方民族博物館 研究協力員

所属学会 (役職)

日本語学会
国際モンゴル学会

黒木 英充 (くろき ひでみつ)

教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 中東地域研究, 東アラブ近代史

業績

1. 論文:「シリア内戦の途中検証—私たちは何を誤ったのか」『中東と日本の針路—「安保法制」がもたらすもの』(長沢栄治, 栗田禎子編), 2016.5.
2. 論文:「シリア内戦とレバノン内戦」『現代中東を読み解く—アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』(後藤晃, 長沢栄治編), 2016.8.
3. 論文:「シリア—内戦と多民族・多宗派問題」『現代中東を読み解く—アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』(後藤晃, 長沢栄治編), 2016.8.
4. 書評:「サーミー・ムバイヤド『イスラーム国の黒旗の下に』」『日本経済新聞』, 2016.11..
5. 口頭発表:「世界を巻き込むシリア内戦—人類最古の文明地域における戦争の意味」, 栃木県オリエン特協会・日本オリエン特学会・栃木県文化協会・下野新聞社・栃木県立博物館「第42回栃木県オリエン特セミナー」, 2016.5.21, 栃木県立博物館.
6. 口頭発表:「レバノン-メキシコ-日本コネクション—“Lebanon 1949” 復活の背景」, 科学研究費「レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク」, 中東映画研究会その他「レバノン1949」, 2016.5.30, 東京大学福武ホール.
7. 口頭発表:「移動と労働 (亡命者, 難民, 出稼ぎ労働者とジェンダー)」, 科学研究費「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」(科研費「イスラーム・ジェンダー学」キックオフシンポジウム), 2016.6.11, 東京大学東洋文化研究所.
8. 口頭発表:“Strategies for minorities in a plural society: A case of dragomans”, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所: 共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究」第1回研究会, 2016.9.1-2, Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut.
9. 口頭発表:「対テロ戦争と世界内戦—最終的 (?) 引金としてのシリア内戦」, 人間文化研究機構「現代中東地域研究」(9.11 から 15 年—中東の混迷と「イスラーム国」), 2016.9.11, サンケイホール.
10. 口頭発表:“Dragomanity: An origin of multifaceted nature of Lebanese and Syrian migrants?”, 科学研究費「レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク」: Workshop: The future of Lebanese and Syrian migration studies, 2016.10.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

11. 口頭発表：「シリア内戦から見たロシア—「国際社会」総崩れへの歯止め?」, ロシア・東欧学会, JSSEES「ロシア・東欧学会・JSSEES2016年合同研究大会」, 2016.10.29, 京都女子大学.
12. 口頭発表：「シリア内戦の都市・農村関係の側面について」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「AA研フォーラム」, 2016.12.15, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
13. 学外の社会活動 (テレビ・ラジオ番組・出演:有) :NHK ラジオ第1放送「先読み! 夕方ニュース」, 2016.5.
14. 学外の社会活動 (講演会) :AAR Japan 難民を助ける会 (「難民の日」トークイベント 吹き荒れる暴力 テロの背景にあるもの), 2016.6.
15. 学外の社会活動 (講演会) :長野市民教養講座「アジア諸国の歴史と現況」(「肥沃な三日月地帯」から「戦争の三日月地帯」へ シリア内戦の世界史的意味), 2016.7.
16. 学外の社会活動 (講演会) :武蔵大学第65回公開講座(シリア内戦をめぐるイスラームと暴力のとらえ方), 2016.10.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 黒木 英充

課題番号: 25257003

研究課題名: レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間想像力

研究種目: 基盤研究 (A) 海外学術

研究分担者: 鈴木茂, 真島一郎, 飯塚正人

期間 (年度): 2013(H25)~2016(H28)

科研費:

研究代表者: 長澤 榮治 東京大学東洋文化研究所 教授

課題番号: 16H01899

研究課題名: イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究

研究種目: 基盤研究 (A)

研究分担者: 黒木英充, 村上薫, 松永典子, 後藤絵美, 岩崎えり奈, 服部美奈, 岡真理, 臼杵陽, 山岸智子, 嶺崎寛子

期間 (年度): 2016(H28)~2019(H31)

科研費:

研究代表者: 大沼 保昭 学習院女子大学国際文化交流学部 客員研究員

課題番号: 25245029

研究課題名: 多極化する世界への文際的歴史像の探求

研究種目: 基盤研究 (A)

研究分担者: 黒木英充, 平野聡, 渡辺浩, 木畑洋一, 三ツ松誠, 豊田哲也, 姜東局, 水谷智, 中溝和弥, 三牧聖子, 浅野豊実, 長縄宣博, 平野千果子, 茂木敏夫, 佐々木閑, 篠田英朗

期間 (年度): 2013(H28)~2016(H29)

外部団体委員

北海道大学スラブ研究センター 運営委員

筑波大学北アフリカ研究センター 客員共同研究員

所属学会 (役職)

日本オリエント学会

歴史学研究会

史学会

北米中東学会

日本中東学会

児倉 徳和 (こぐら のりかず)

助教, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 記述言語学, シベ語 (満洲語口語)

業績

1. 口頭発表：「シベ語における意図と知識についての予備的考察」, 東京外国語大学語学研究所「Luncheon Linguistics」, 2016.4.13, 東京外国語大学語学研究所.
2. 口頭発表：「シベ語の談話における小辞 =ni' の機能：所有・主題と認知」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「第6回シベ語研究会／シベ語言語研修フォローアップミーティング」, 2016.5.22, 東京外国語大学本郷サテライト.
3. 口頭発表：「ツングース語族の文法書」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」」2016年度第1回研究会, 2016.7.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 口頭発表：「論満語及錫伯語の動詞形態系統簡化」, 中国人民大学国学院, 冯其庸学术馆「国学与丝绸之路历史文化研究国际学术讨论会（满学组）／第二届国际满文文献学术研讨会」, 2016.8.24-28, 冯其庸学术馆（中国・無錫）.
5. 口頭発表：「論錫伯語助動詞構成的意願性范畴」, 伊犁师范学院錫伯語言文化研究中心「第1回錫伯族語言文化國際學術討論會（首屆錫伯族語言與文化國際學術研討會）」, 2016.9.9-11, 伊犁师范学院（中国・イーンニン）.
6. 口頭発表：「言語資料のいい録音のための5+1」, 国立国語研究所, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「隠岐の島調査事前ワークショップ」, 2016.10.23-24, 島根大学.
7. 口頭発表：「錫伯語的情態系統」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「首屆錫伯語語言文化國際研討會」, 2016.10.26-30, 九州大学箱崎キャンパス, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表：「ことばを手がかりにシベ人の思考を探る」フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」, 2016.11.19-23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 口頭発表：「各言語における発見：シベ語」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」成果とりまとめのための研究会, 2017.1.21-22, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
10. 口頭発表：「『蒙古語族語言方言研究叢書』データベースについて」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「公開資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第6回研究会, 2017.3.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
11. 口頭発表：「シベ語の補助動詞 o- のテンポラリティとモダリティ」2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30, 京都大学ユーラシア文化研究センター（羽田記念館）.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 久保 智之 九州大学人文科学研究科(研究院) 教授

課題番号： 24320079

研究課題名： シベ語の体系的文法と辞書の作成

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 児倉徳和

期間(年度)： 2012(H24)～2016(H29)

科研費：

研究代表者： 児倉 徳和

課題番号： 26770144

研究課題名： 記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究

研究種目： 若手研究 (B)

期間(年度)： 2014-2016

科研費：

研究代表者： 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号： 15H05153

研究課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕

期間(年度)： 2015(H27)～2019(H30)

科研費：
研究代表者： 渡辺 己
課題番号： 16H05672
課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をととして—
研究種目： 基盤研究 (B)
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕, 沈力, 清澤香
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

所属学会 (役職)

満族史研究会
日本言語学会
日本中国語学会

近藤 信彰 (こんどう のぶあき)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題：イラン近代史

業績

1. 論文：「18 世紀スィンド地方におけるペルシア語文化と地方社会——詩人伝『詩人たちの諸論攷』を中心に」, 『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』 (ed. by 太田信宏), 317–329, 2017.2, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 論文：“Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India”, *Crossing the Boundaries: Asians and Africans on the Move: Proceedings of the Papers Presented at Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 7th International Conference* (ed. by Nobuaki Kondo), 67–73, 2017.3.
3. 口頭発表：「19 世紀後半テヘランの宗教的少数派——シャリーア法廷記録より」, 日本中東学会「日本中東学会第 32 回年次大会」, 2016.5.14-15, 慶應義塾大学三田キャンパス.
4. 口頭発表：「サファヴィー朝君主の称号について」, 科学研究費「イスラーム国家の王権と正統性——近世帝国を視座として」「シンポジウム「イスラームの王権をみる視角」」, 2016.7.16, 関西学院大学文学部.
5. 口頭発表：“Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India”, Tokyo University of Foreign Studies: *Crossing the Boundaries: Asian and Africans on the Move*, 2016.10.22-23, ILCAA.
6. 口頭発表：“State and Shari‘a in Early Modern Iran”, Nihui Area Studies Program for the Modern Middle East at ILCAA: International Workshop “State and Shari‘a in the Pre-20th Century Middle East”, 2017.2.18, ILCAA.

競争的研究資金

科研費：
研究代表者： 近藤 信彰
課題番号： 15H01895
課題名： イスラーム国家の王権と正統性——近世帝国を視座として
研究分担者： 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子
研究種目： 基盤研究 (A)
期間 (年度)： 2015(H27)～2019(H31)

科研費：
研究代表者： 高松 洋一
課題番号： 25284132
課題名： イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開
研究分担者： 近藤信彰
研究種目： 基盤研究 (B)
期間 (年度)： 2013(H25)～2016(H28)

科研費：
研究代表者： 三浦 徹 公益財団法人東洋文庫 研究員
課題番号： 25284141

課題名： ワクフ（イスラーム寄進制度）の国際共同比較研究
研究種目： 基盤研究（B）
研究分担者： 近藤信彰，大河原知樹，守川知子，林佳世子，永田雄三，磯貝健一
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

所属学会（役職）

日本中東学会（理事，編集副委員長）
西南アジア研究会
International Society for Iranian Studies
International Qajar Studies Association
Association for the Study of Persianate Societies
日本オリエント学会
メトロポリタン史学会
史学会

佐久間 寛（さくま ゆたか）

助教，フィールドサイエンス研究企画センター
研究主題：人類学（「西アフリカ社会」）

業績

1. 著書（編著）：『体制転換の人類学』（佐久間寛編），2017，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
2. 論文：「冗談関係」『ぴえりあ』（東京外国語大学出版会・附属図書館編）8, 2016.4，東京外国語大学出版会。
3. 口頭発表：「趣旨説明：ハザードとしての体制転換」，基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究——人類学におけるマイクロマクロ系の連関 2」「体制転換の人類学」，2016.5.20-21，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
4. 口頭発表：「クエント的民族誌の希望：『革命キューバの民族誌』によせて」，基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究——人類学におけるマイクロマクロ系の連関 2」「体制転換の人類学」，2016.5.20-21，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
5. 口頭発表：「ポランニー思想のマトリクス：『経済と自由』を中心に」，「日本文化人類学会 50 回研究大会」，2016.5.28-29，南山大学。
6. 口頭発表：「経済的なものをめぐるモラルと自由：カール・ポランニー2.0 から」，2016 年度第 2 回アフリカ・モラル・エコノミー研究会，2016.7.10，キャンパスプラザ京都。
7. 口頭発表：「モラル・エコノミーの変容と持続：ニジェール西部における灌漑稲作の導入を事例に」，2016 年度第 3 回アフリカ・モラル・エコノミー研究会，2016.10.15，キャンパスプラザ京都（龍谷大学サテライトキャンパス）。
8. 口頭発表：“Moral Economy and Land Tenure in Sahel (Western Niger)”, Africa Moral Economy Project: 7th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016.12.9-12, Kyoto University.
9. 口頭発表：“Qui est le propriétaire de cette terre ? Possession et « affect » des terres dans le système agraire Songhai (Ouest Niger)”, Laboratoire Dynamiques Européennes: MONDIALISATION ET MUTATIONS SOCIO-CULTURELLES EN AFRIQUE, 2017.1.11, Université de Strasbourg.
10. 口頭発表：「社会文化人類学的苦悩あるいは可能性としての表象／想像力：他者研の他者からのコメント」，基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究——人類学におけるマイクロマクロ系の連関 2」合評会シンポジウム：『他者——人類社会の進化』をめぐって，2017.2.4，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
11. 口頭発表：“Present of Sudanese agricultural complex: The case of western Niger”, Core Project (Anthropology) of ILCAA: The Potential Value of Indigenous Knowledge in Managing Hazards in Asia and Africa: The Anthropological Explorations into the Linkage of Micro-Macro Perspectives 2: International Workshop: Agricultural Practice and Social Dynamics in Niger, 2017.3.12, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 佐久間 寛

課題番号： 15H05385

課題名： サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

研究種目： 若手研究 (A)

期間 (年度)：2015(H27)～2017(H29)

所属学会 (役職)

日本アフリカ学会

日本文化人類学会 (関東地区研究懇談会運営委員, 次世代育成セミナー実施運営委員)

生態人類学会

澤田 英夫 (さわだ ひでお)

教授, 情報資源利用研究センター

研究主題：ビルマ系少数言語の記述, 東南アジア大陸部インド系文字の体系

業績

1. 論文：「ロンウォー語の複動詞構造」『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』(東南アジア諸言語研究会編) 162-207, 2017.3, 慶應義塾大学言語文化研究所.
2. 口頭発表：「碑文資料の電子化(Digitization of Inscription Materials)」, 平成 28 年度文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「ミャンマー連邦共和国の文化遺産保護のための取組みと課題」ミニシンポジウム “Palm Leaf Documents, an urgent necessity for digitization” (共催：京都大学, 京都大学附属図書館, National Library of Myanmar), 2016.8.5, 京都大学附属図書館.
3. 口頭発表：“Multi-verb Constructions of Standard Lhaovo”, 暨南大学: 第 49 回国際シナ=チベット言語学会議, 2016.11.10-13, 暨南大学 (中華人民共和国広州市) .
4. 口頭発表：“Problems on the Digitization of Inscription Texts”, 平成 28 年度文化庁委託文化遺産国際協力拠点交流事業「ミャンマー連邦共和国の文化遺産保護のための取組みと課題」シンポジウム (共催：京都大学, 京都大学附属図書館, National Library of Myanmar), 2017.1.25, 京都大学東京オフィス.
5. 口頭発表：「ロンウォー語の直示的移動動詞」, 慶應義塾大学言語文化研究所公開シンポジウム「移動動詞表現の対照—東南アジア諸言語の「行く・来る」を中心に—」, 2017.3.25, 慶應義塾大学.
6. 口頭発表：「ビルマ語群北部下位語群ギャンノツ土語についての予備的報告」, 2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30, 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
7. 学外の社会活動 (講演会)：東京外国語大学公開講座「アジアの諸文字と古代文字の解説」, 2016.12.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 藤代節 神戸市看護大学看護学部 教授

課題番号： 16H03417

研究課題名： 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 澤田英夫, 片山修, 岸田文隆, 岸田泰浩, 菅原睦, 早津恵美子

期間 (年度)：2016(H28)～2018(H30)

外部団体委員

慶應義塾大学言語文化研究所東南アジア諸言語研究会 (兼任所員)

所属学会 (役職)

日本言語学会 (評議員)

椎野 若菜 (しいの わかな)

准教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題: 社会人類学, 東アフリカ民族誌

業績

1. 著書 (共編著): 『フィールドノート古今東西 (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ13)』 (椎野若菜編), 2016, 古今書院.
2. 著書 (共編著): 『女も男もフィールドへ (FENICS 100万人のフィールドワーカーシリーズ12)』 (椎野若菜編), 2016, 古今書院.
3. 論文: 「FENICS: 異分野同士の学びの場—私のフィールドノートから—」 『地理』 61(5), 60-93, 2016.5.
4. 口頭発表: “Changing Positionarity in the Field and Private Life”, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences (IUAES): 国際人類学民族科学連合 (IUAES) 2016, 2016.5.4-9, クロアチア.
5. 口頭発表: 「分科会 調査者のライフイベントとフィールドワーク人生」, 文化人類学会第50回研究大会, 2016.5.28, 南山大学.
6. 口頭発表: “Toward the Co-existence of Various ‘Single’ in the Global Societies”, 国際研究集会「グローバル社会における多様な「シングル」の共存にむけて」, 2017.2.2-4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 松田 素二 京都大学文学研究科 教授

課題番号: 16H06318

研究課題名: 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服: 人類の未来を展望する総合的地域研究

研究種目: 基盤研究 (S)

研究分担者: 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐, 宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越言, 山田肖子

期間 (年度): 2016(H28)~2020(H32)

科研費:

研究代表者: 野口 靖 東京工芸大学芸術学部 准教授

課題番号: 16K13128

課題名: ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究

研究種目: 挑戦的萌芽研究

研究分担者: 椎野若菜

期間 (年度): 2016(H28)~2018(H30)

所属学会 (役職)

日本文化人類学会 (倫理委員)

日本アフリカ学会

比較家族史学会 (理事)

ナイル=エチオピア学会 (理事)

生態人類学会 (理事)

東京都立大学社会人類学会

塩原 朝子 (しおはら あさこ)

准教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 言語学, インドネシア諸言語

業績

1. 論文: “Pseudo-cleft construction in the Sumbawa Besar Dialect of Sumbawa”, *AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association* (ed. by Hiroki Nomoto, Takuya Miyauchi and Asako

Shiohara (eds.)), 258–272, 2016.12.

- 論文：Anthony Jukes, Asako Shiohara and Yanti. “Collaborative Project for Documenting Minority Languages in Indonesia and Malaysia”, *Asian and African Languages and Linguistics*. 11, 45–56, 2017.3
- 論文：“Voice in eventive coordinate clauses in Standard Indonesian”, *NUSA: Linguistic Studies of Language in and around Indonesia*. 59, 47–67. 2016.10.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 塩原 朝子

課題番号： 15K02472

研究課題名： Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2015(H27)～2019(H30)

所属学会 (役職)

日本語学会

品川 大輔 (しながわ だいすけ)

准教授, 情報資源利用研究センター

研究主題：バントゥ諸語, 記述言語学

業績

- 総説・解説：「姿勢のよい闊歩」はどこから来てどこへ行くのか—バントゥ諸語の語彙分布から探る— 『FIELDPLUS』 17, 16–17, 2017.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：「マイクロバリエーションの事例研究：いくつかの具体例」, AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ 1)」2016 年度第 1 回研究会, 2016.4.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：「キリマンジャロ・バントゥ諸語記述研究の射程—マイクロバリエーション研究とその先」, AA 研フォーラム, 2016.6.16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：「最新版 *Microvariation* パラメーター内容の紹介およびバントゥ諸語のマイクロバリエーション国際ワークショップ (3 月 3–5 日開催予定) の事前打ち合わせ」, AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ 1)」2016 年度第 2 回研究会, 2016.12.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：「ダルエスサラーム大学 *Microvariation* ワークショップ報告」, AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ 1)」2016 年度第 2 回研究会, 2016.12.17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
- 口頭発表：「アフリカ都市言語研究の動向と都市言語の諸相—シェン (Sheng) を事例に—」, 日本アフリカ学会関西支部主催 2016 年度第 1 回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人々—日常生活の言語・文学・音楽—」, 2017.1.7, 大阪大学 (豊中キャンパス).
- 口頭発表：「キリマンジャロのことば—チャガ諸語の共時的多様性と分岐のプロセス」, 京都大学タンザニアフィールドステーションセミナー (第 18 回), 2017.1.28, International School of Tanganyika

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 品川 大輔

課題番号： 16K02630

課題名： 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のミクロな類型的多様性の探究

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 松田 素二 京都大学文学研究科 教授

課題番号： 16H06318

研究課題名： 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究
研究種目： 基盤研究 (S)
研究分担者： 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐,
宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越言,
山田肖子
期間 (年度) : 2016(H28)~2020(H32)

芝野 耕司 (しばの こうじ)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題：マルチメディアデータベース, 多言語情報処理, コンピュータ支援言語学習(CALL)

業績

1. 論文 (共著 : Mochizuki, Hajime and Kohji Shibano) : “Extracting Formulaic Sequences Containing Useful Expressions for Language Learning from Closed Caption TV Corpus”, *World Conference on E-Learning in Corporate, Government, Healthcare, and Higher Education, E-Learn 2016*, 2016.11. (査読有)
2. 口頭発表 : “Modification of word2vec by Formulaic Sequences and Extraction of Useful Expressions for Language Learning from Closed Caption TV Corpus”, *IICLLHawaii 2017: The IAFOR International Conference on Language Learning*, 2017.1.0, Honolulu, USA.
3. 口頭発表 : “Developing Intimacy by Style-shifting in Japanese: A TV Subtitle Corpus-based Study”, *AAAL: AAAL 2017*, 2017.3.18-21, Portland. OR.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 芝野 耕司

課題番号： 26240051

課題名： 大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテラーメイド日本語教育

研究種目： 基盤研究 (A)

研究分担者： 藤村知子, 大津友美, 佐野洋, 藤森弘子, 望月源, 鈴木美加

期間 (年度) : 2014(H26)~2017(H29)

科研費：

研究代表者： 藤村 知子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授

課題番号： 16H03432

課題名： 大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 e ラーニング教材の研究

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 芝野耕司, 望月源, 佐野 洋, 藤森 弘子

期間 (年度) : 2016(H28)~2019(H31)

科研費：

研究代表者： 望月 源 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授

課題番号： 15H02794

課題名： 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 芝野耕司, 佐野洋, 藤村知子

期間 (年度) : 2015(H27)~2018(H30)

科研費：

研究代表者： 藤森 弘子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号： 26284070

課題名： アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 芝野耕司, 伊集院郁子, 伊東祐郎, 工藤嘉名子, 鈴木 美加, 中村彰, 藤村知子

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 中村 美奈子 お茶の水女子大学基幹研究院 准教授

課題番号： 26350269

課題名： タンジブルインタフェースを用いたダンスのシミュレーション

研究種目： 基盤研究 (C)

研究分担者： 芝野耕司

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授

課題番号： 25540152

課題名： インド古典文献韻律指向検索アーカイブの構築

研究種目： 挑戦的萌芽研究

研究分担者： 芝野耕司

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授

課題番号： 16K12544

課題名： インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析

研究種目： 挑戦的萌芽研究

研究分担者： 芝野耕司

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

外部団体委員

日本規格協会 情報分野規格の利用促進標準化調査研究委員会（本委員会・WG2）

所属学会（役職）

情報処理学会

計量国語学会

Linguistic Society of America (LSA)

American Association for Applied Linguistics (AAAL)

Association for Advancement of Computing in Education (AACE)

陶安 あんど（すえやす あんど）

准教授，地域研究・歴史学研究ユニット

研究主題：中国法制史と法社会学

業績

1. 論文：「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀四種』譯注稿一事案四一」『法史学研究会会報』20, 2017.3.
2. 総説・解説：「秦簡にみえる「最」と「取」に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 総説・解説：「上古漢語における「何」の意味に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 総説・解説：「「何計付」の句讀に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 総説・解説：「里耶秦簡における「校」・「校券」と「責券」に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.8, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 総説・解説：「卒人に関する覚書」『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.10, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

7. 総説・解説：「應書」に関する覚書『中国古代簡牘の横断領域的研究 HP』, 2016.12, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 書評：「書評：高村武幸『秦漢簡牘史料研究』」『史学雑誌』125(11), 2016.11.
9. 書評：「書評：鷹取祐司『秦漢官文書の基礎的研究』」『法制史研究』66, 2017.3.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 陶安 あんど

課題番号： 16H03487

研究課題名： 最新史料に見る秦・漢法制の変革と帝制中国の成立

研究種目： 基盤研究 (B)

期間 (年度)： 2016(H28)～2020(H32)

所属学会 (役職)

日本法制史学会

日本法社会学会

法史学研究会

東洋法制史研究会

中国史学会

東方学会

高島 淳 (たかしま じゅん)

教授, 文化人類学研究ユニット

研究主題：言語情報処理, 宗教学・インド宗教史 (ヒンドゥー教)

業績

著書 (編著)：『カンナダ語・日本語辞典』(高島淳編), 三省堂.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 森 雅秀 金沢大学人間科学系 教授

課題番号： 25257007

課題名： 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開

研究種目： 基盤研究 (A) 海外学術

期間 (年度)： 2013(H25)～2017(H29)

研究分担者： 高島淳, 乾仁志, 高田良宏, 高本康子

所属学会 (役職)

日本宗教学会 (評議員)

日本南アジア学会

「宗教と社会」学会

高松 洋一 (たかまつ よういち)

准教授, 情報資源利用研究センター

研究主題：オスマン朝史, 古文書学, アーカイブズ学

業績

1. 総説・解説：「<辞典案内>トルコ語」『教養学部報』582, 2016.4.

2. 総説・解説：「オスマン朝のハットウ・ヒュマーユーン (宸筆)」『歴史と地理』699, 2016.11, 山川出版社.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 高松 洋一
課題番号： 25284132
研究課題名： イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開
研究種目： 基盤研究 (B)
期間 (年度) : 2013(H25)~2016(H28)

科研費：
研究代表者： 近藤 信彰
課題番号： 15H01895
課題名： イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として
研究分担者： 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子
研究種目： 基盤研究 (A)
期間 (年度) : 2015(H27)~2019(H31)

所属学会 (役職)

日本オリエント学会
日本アーカイブズ学会

外川 昌彦 (とがわ まさひこ)

准教授, 文化人類学研究ユニット
研究主題: 南アジアの人類学, インド・バングラデシュ研究

業績

1. 著書 (編著): 『バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線』 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 論文: “Fakir Laloni Sani: Upanibesh-Uttar Bangla Anchaler Dharmiya Cintadhara”, *Bhabnagar: International Journal of Bengal Studies*, 4, 451–466, 2016.4. (査読有)
3. 論文: 「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動と日本人—ヒンドゥー教僧院長のマハントと英領 インド政府の宗教政策を背景とした」『日本研究』 53, 189–230, 2016.6. (査読有)
4. 論文: 「英領インドにおける岡倉天心のブッダガヤ訪問について—スワミー・ヴィヴェーカー ナンダとラビンドラナート・タゴールとの交流から」『アジア・アフリカ言語文化研究』 92, 181–205, 2016.9. (査読有)
5. 総説・解説: 「ダッカ・テロ事件のワークショップを振り返って—「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち」(2016年10月9日, 於東京外国語大学) の報告」『日本バングラデシュ協会・メールマガジン』, 2016.11.
6. 総説・解説: 「シンポジウム・バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線」『日本バングラデシュ協会・メールマガジン』, 2017.1.
7. 口頭発表: 「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とシンハラ人ナショナリズム—英領インド政府と ヒンドゥー教僧院長マハントの対応を背景として」, 「宗教と社会」学会, 2016.6.11, 上越教育大学.
8. 口頭発表: “Okakura Tenshin (Kakuzō) in Shantiniketan: Beginning of Tagore’s Center for International Exchanges”, The International Conference on “Tagore and Japan & Various Aspects of Japan and Her Culture, 2016.6.26, Visva-Bharati University.
9. 口頭発表: 「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とシンハラ・ナショナリズム」, NIHU 「南アジア地域研究」, 2016.7.20, 京都大学.
10. 口頭発表: “Rabindranath Thakurer Shiksha Bhabna”, International Symposium: Tagore’s Educational Thought, 2016.8.5, Uttara University.
11. 口頭発表: “Shantiniketan and Okakura Tenshin: Tagore’s Center for National Education”, International Symposium: Tagore’s Educational Thought, 2016.8.6, Uttara University.
12. 口頭発表: 「ヴィヴェーカーナンダの宗教観の変遷—仏教とヒンドゥー教」, 日本宗教学会, 2016.9.11, 早稲田大学.
13. 口頭発表: 「マハトマ・ガンディーと原子爆弾—非暴力運動の意味」, 日印サルボダヤ交友会, 2016.10.2, 九段下, 東京

14. 口頭発表：「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち—その背景とこれからを考える—」, AA 研・基幹研究人類学班「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち—その背景とこれからを考える」, 2016.10.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
15. 口頭発表：「宗教が紛争を生み出すとき—バングラデシュのテロ事件から考える」, 四大学連合文化講演会, 2016.10.28, 一橋講堂学術総合センター.
16. 口頭発表：“Saintly Cults and Syncretistic Tradition in Bengal”, Faculty Seminar of the Bengali Department, 2016.12.6, Jahangirnagar University.
17. 口頭発表：「バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線・趣旨説明」, AA 研・基幹研究人類学班：シンポジウム「バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線」, 2016.12.11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
18. 口頭発表：「英領インドにおける岡倉天心とインド人知識人の交流—反響するアジアへのまなざし」, ディスカバー・インディア・クラブ, 2016.12.18, 浜松町・東京
19. 口頭発表：「インド・ブッダガヤにおける宗教政策と観光政策の歴史的動態」, 科研・研究会「ツーリズムにおけるスピリチュアル・マーケットの展開の比較研究」, 2017.1.13, 筑波大学.
20. 口頭発表：“スワミー・ヴィエーカーナダにおける宗教的包摂主義とヒンドゥー教中心主義”, 科研・研究会「アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究」, 2017.1.28, 北海道大学.
21. 口頭発表：“Okakura Tenshin (Kakuzō) in Shantiniketan”, International Conference: An Encounter Between Two Asian Civilizations: Rabindranath Tagore and the Early Twentieth Century Indo-Japanese Cultural Confluence. 2017.3.15, The Asiatic Society, Kolkata.
22. 口頭発表：“The Bodh-Gaya Restoration Movement by Anagarika Dharmapala and the Japanese”, International Buddhist conference: Buddhism in India-Japan Relations, Japan Foundation, 2017.3.17, Delhi University.

その他研究成果

名称：「ダッカ・テロ事件のワークショップを振り返って—「ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち」（2016年10月9日，於東京外国語大学）の報告」日本バングラデシュ協会，メールマガジン，2016年11月号

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 外川 昌彦

課題番号： 16K02602

課題名： 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざし—植民地主義をめぐる日印の比較研究

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 外川 昌彦

課題番号： 25370750

課題名： 近代日本のアジア認識とインド—岡倉天心とインド知識人の交流から

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2015(H27)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 山中 弘 筑波大学人文社会系 教授

課題名： ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究

課題番号： 16H03329

研究分担者： 外川昌彦, 岡本亮輔, 別所裕介, 安田慎, 鈴木涼太郎, 門田岳久

研究種目： 基盤研究 (B)

期間 (年度)： 2016 (H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 櫻井 義秀 北海道大学文学研究科 教授

課題名： アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究

課題番号： 16H05712

研究分担者： 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高
研究種目： 基盤研究 (B)
期間 (年度)： 2016 (H28)~2018(H30)

科研費：

研究代表者： 中谷 哲弥 奈良県立大学 教授

課題番号： 15K01958

課題名： 南アジア地域の持続可能な観光とコミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する比較研究

研究分担者： 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2015 (H27)~2017(H29)

日本学術振興会：

研究代表者： 外川昌彦

期間： 2016-2018

研究種目： 二国間交流事業 (ICHR との)

研究課題名： ブッダガヤへの日本の巡礼者—インドにおける仏教復興運動と日印交流

床呂 郁哉 (ところ いくや)

教授, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題： 東南アジア島嶼部の人類学

業績

1. 著書 (編著)：『「もの」の人類学をめぐって—脱人間中心主義的人类学の可能性と課題 (シンポジウム報告書)』(床呂郁哉編), 2017, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 著書 (編著)：『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (シンポジウム報告書)』(床呂郁哉編), 2017, アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 論文：「フィリピン南部ムスリムの移民/難民状況の動態と「再難民化」『移民/難民のシチズンシップ』(錦田愛子編), 179-198, 2016.4, 有信堂高文社.
4. 論文：「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究 (第二巻)』(山本信人・宮原暁編), 2017.3, 慶應義塾大学出版会.
5. 論文：“Peace building in the wild: Thinking about institutions from cases of conflict and peace in Sulu.”, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*. (ed. by Kawai, Kaori), 2017.3, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, Kyoto.
6. 書評：「書評：エドゥアルド・コーン『森は考える—人間のなるものを越えた人類学』 亜紀書房」『図書新聞』, 2016.6, 図書新聞社.
7. 書評：「鈴木佑記著『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』」『東南アジア研究』 54(2), 2017.3.
8. 口頭発表：「フィリピン南部におけるムスリム分離主義の現在—ドゥテルテ新政権下におけるミンダナオ紛争と和平プロセスの行方」, AA 研共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究 (第二期)」AA 研共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究 (第二期)」研究会, 2016.7.16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 口頭発表：「もの人類学をめぐって—脱人間中心主義的人类学の可能性と課題」(趣旨説明とイントロダクション), AA 研基幹研究人類学班「シンポジウム：もの人類学をめぐって—脱人間中心主義的人类学の可能性と課題」, 2016.11.12, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
10. 口頭発表：「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築 (趣旨説明とイントロダクション)」, AA 研基幹研究人類学班「シンポジウム：トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2016.12.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 25257002
研究課題名： 東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究
研究種目： 基盤研究 (A)
研究分担者： 西井涼子, 福島康博, 富沢寿勇, 塩谷もも
期間 (年度)： 2013(H25)～2016(H28)

科研費：
研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 25370936
研究課題名： スルー海地域世界を中心とする真珠のグローバル化に関する文化人類学的研究
研究種目： 基盤研究 (C)
期間 (年度)： 2013(H25)～2017(H29)

科研費：
研究代表者： 石井 香世子 立教大学社会学部 准教授
課題番号： 16H02737
課題名： アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究
研究種目： 基盤研究 (A)
研究分担者： 床呂郁哉, 萩原崇世, 酒井千絵, 陳天璽, 岩井美佐紀, 横田祥子, 工藤正子
期間 (年度)： 2016(H28)～2019(H31)

所属学会 (役職)
日本文化人類学会

中見 立夫 (なかみ たつお)

教授, 地域研究・歴史学研究ユニット
研究主題：東アジア・内陸アジアの国際関係史

競争的研究資金

科研費：
研究代表者： 中見 立夫
課題番号： 16H03462
研究課題名： “帝国” 周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究
研究種目： 基盤研究 (B)
研究分担者： 野田仁, 青木雅浩
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

外部団体委員

広島大学文書館 客員研究員
財団法人アジア研究協会 理事
財団法人東方学会 第32期理事

所属学会 (役職)

国際モンゴル学連合
東アジア近代史学会
一般財団法人東方学会
公益財団法人アジア研究協会

中山 俊秀 (なかやま としひで)

教授, 情報資源利用研究センター
研究主題：ワカシュ諸言語 (北米北西海岸), 形態・統語論, 言語類型論

業績

1. 口頭発表：“Observations on revitalization in Nuuchahnulth and Miyako communities”, Department of Linguistics, Hong Kong University: Documentary Linguistics: Asian Perspectives, 2016.4.6-9, Hong Kong University.
2. 講演：「伝え合いの英会話—文を作ることから気持ちを伝えるコミュニケーションへ」, 布池外語専門学校「招待講演会」, 2016.4.27, 布池外語専門学校.
3. 口頭発表：“Emergent units in speaking for interacting”:, International symposium on the emergence of units in social interaction, 2016.8.3-6, University of Helsinki.
4. 口頭発表：「コミュニケーションの中での文法を捉える」, 琉球諸語研究会, 2016.9.24, 九州大学.
5. 口頭発表：“Rethinking linguistic communication and grammar”:, Invited lecture, 2016.11.16, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University.
6. 口頭発表：“Rethinking grammar: Multiplicity in grammar”:, Invited lecture, 2016.11.17, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University.
7. 口頭発表：「言語使用を基盤とした文法とその研究の方向性と可能性を考える」第56回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会, 2017.2.3, 国立情報学研究所.
8. 口頭発表：“Working with Conversational Data”, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University: Special lecture, 2017.3.15, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University.
9. 口頭発表：“Introduction to Language Documentation and Revitalization”, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University: Special lecture, 2017.3.15, Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University.
10. 口頭発表：“On the Question of Universality of Lexical Categories: What Nuuchahnulth (Nootka) Can Tell Us”, Division of Linguistics and Multilingual Studies, Nanyang Technological University: Special Seminar, 2017.3.22, Division of Linguistics and Multilingual Studies, Nanyang Technological University.
11. 学外の社会活動（出前授業）：「「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」（於：キャリアガイダンス）, 2016.6. 東京都立国際高等学校.
12. 学外の社会活動（セミナー・ワークショップ）：「国際理解教育の文脈と方法」, 2016.9. (株)メガブルーバード.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 中山 俊秀

課題番号： 15K02473

研究課題名： スートカ語における統語構造の特性—節と節結合の連関の中で

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2015(H27)～2017(H29)

科研費：

研究代表者： 吉田 憲司 国立民族学博物館文化資源研究センター 教授

課題番号： 16H06281

研究課題名： 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化

研究種目： 新学術領域研究

研究分担者： 中山俊秀, 園田直子, 丸川雄三, 高野明彦, 西尾哲夫, 野林篤志, 飯田卓, 卯田宗平, 寺村裕史, 平勢隆郎, 柳澤雅之

期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 中山 久美子 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 共同研究員

課題番号： 15K02509

研究課題名： スートカ語アハウザット方言の統合テキストデータベースの構築

研究種目： 基盤研究 (C)

研究分担者： 中山俊秀

期間 (年度)： 2015(H27)～2017(H29)

外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

所属学会（役職）

日本語学会
日本認知言語学会
Linguistic Society of America
Association for Linguistic Typology
International Pragmatics Association
Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas

西井 涼子（にしい りょうこ）

教授，文化人類学研究ユニット
研究主題：東南アジア大陸部の人類学

業績

1. 論文：“The Muslim community in Mae Sot: The transformation of the Da’wa Movement”, *Communities of Potential Social Assemblages in Thailand and Beyond* (ed. by Shigeharu Tanabe), 107–127, 2016.12, Silkworm Books, Chiang Mai.
2. 口頭発表：“The Body at Death: Muslim-Buddhist Relations in a Southern Thai Village”, Association for Asian Studies: 第75回アジア研究学会（AAS）年次集会, 2016.3.31-4.3.
3. 口頭発表：「民族誌記述の基点としての『もつれ髪』—ヒッピーからダツワ実践者へ」, アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題研究会「「もの」の人類学的研究会（2）—人間/非人間のダイナミクス—」, 2016.6.11, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費：
研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 25257002
研究課題名： 東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究
研究種目： 基盤研究（A）
研究分担者： 西井涼子，福島康博，富沢寿勇，塩谷もも
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

外部団体委員

公益信託渋澤民族学振興基金「渋澤賞」選考委員会委員

所属学会（役職）

日本文化人類学会（編集委員）
東南アジア学会

錦田 愛子（にしきだ あいこ）

准教授，地域研究・歴史学研究ユニット
研究主題：イスラエル・パレスチナ紛争，中東地域研究，難民研究

業績

1. 論文：「パレスチナ・ディアスポラ—繰り返される移動」『パレスチナを知るための60章』（臼杵陽編），23–26, 2016.4, 明石書店.
2. 論文：「シリア・レバノンのパレスチナ人—安全と未来を求めて」『パレスチナを知るための60章』（臼杵陽編），240–243, 2016.4, 明石書店.
3. 論文：「封鎖されたガザ地区に生きる人々——政治的孤立による人と物の移動の変化」『日本の科学者』51(11), 18–23, 2016.10.

4. 論文：「移民／難民とパスポート」『パスポート学』（陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編），215-218, 2016.10, 北海道大学出版会.
5. 論文：「アラブ諸国のパスポート」『パスポート学』（陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編），47-51, 2016.10, 北海道大学出版会.
6. 論文：「外国人の市民権とは——グローバル市民への視点」『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし、互いに学ぶ社会へ』（小泉康一・川村千鶴子編），92-100, 2016.10, 慶應義塾大学出版会.
7. 論文：「ヨーロッパの市民権を求めて —アラブ系移民／難民の移動と受入政策の変容」『中東研究』528, 16-25, 2017.1.
8. 論文：「中東地域からの移民／難民をめぐる動向と展望」『アジ研ワールド・トレンド』46-47, 2017.1.
9. 論文：「トランプはどこまでイスラエルに味方するのか：入植地問題」『ニューズウィーク日本版』, 2017.2.
10. 論文：「中東和平交渉は後退するのか—トランプ発言が意味するもの」『ニューズウィーク日本版』, 2017.3.
11. 論文：「北欧をめざすアラブ系「移民／難民」—再難民化する人びとの意識と移動モデル」『広島平和研究』4, 13-34, 2017.3. (査読有)
12. 論文：「中東・北アフリカの移民／難民研究」『中東・イスラーム研究概説 —政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』（私市正年・浜中新吾・横田貴之編），151-159, 2017.3, 明石書店.
13. 口頭発表：「内通者を生むパレスチナ／イスラエルの政治背景」, アップリンク「映画『オマールの壁』トークイベント」, 2016.4.22, 渋谷アップリンク.
14. 口頭発表：「シリア難民の移動と受入国における状況— 中東の混乱とヨーロッパでの受け入れをめぐる変化」, 日本赤十字社和歌山医療センター「第2回 日本赤十字社和歌山国際保健セミナー」, 2016.5.21, 日本赤十字社和歌山医療センター.
15. 口頭発表：「ヨーロッパをめざす中東難民 レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って」, NIHU・AA 研拠点第1回パレスチナ／イスラエル研究会, 2016.6.26, 東京大学東洋文化研究所第一会議室.
16. 講演：「再難民化するパレスチナ人～サイクス・ピコ合意 100 年目の離散の現状」, 「日本イスラム協会公開講演会」, 2016.10.8, 東京大学文学部法文1号館 113 教室.
17. 口頭発表：“Migration in desperation: Palestinians' move to EU countries”: The 2016 International Metropolis Conference, 2016.10.24-28, Nagoya Congress Center.
18. 講演：「海を越えるパレスチナ難民—アラブ系移民／難民のヨーロッパへの移動と背景—」, 公益財団法人大同生命国際文化基金「大同生命地域研究賞 第10回ミニフォーラム」, 2017.2.9, 大同生命保険株式会社 大阪本社5階 第4会議室.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 錦田 愛子

課題番号： 26283003

課題名： アラブ系移民／難民の越境移動をめぐる動態と意識：中東と欧州における比較研究

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 高岡豊, 濱中新吾, 溝渕正季

期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 錦田愛子

課題番号： 16KK0050

研究課題名： ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究

研究種目： 国際共同研究加速基金 (国際共同研究強化)

期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 青山 弘之 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号： 15H03132

研究課題名： 「アラブの春」後の中東における非国家主体と政治構造

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 錦田愛子, 末近浩太, 山尾大

期間 (年度)： 2015(H27)～2017(H29)

受賞

賞名： 大同生命地域研究奨励賞
受賞対象： 中東地域における離散パレスチナ人難民に関する人類学的・政治学的研究
授与機関： 公益財団法人 大同生命国際文化基金
授与年月日： 2016年7月22日

外部団体委員

国立民族学博物館 共同研究員

野田 仁 (のだ じん)

准教授，地域研究・歴史学研究ユニット
研究主題：中央アジア史，露清関係史

業績

1. 著書： *The Kazakh Khanates between the Russian and Qing Empires: Central Eurasian International Relations during the Eighteenth and Nineteenth Centuries*, 2016.4, Brill.
2. 論文：「遊牧民の移動と国際関係—中央ユーラシア環境史の一断面」『環境に挑む歴史学』, 2016.10, 勉誠出版.
3. 論文：「露清国境地域における所属の明確化と秩序回復のプロセス」『2016年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書』, 2017.3, 公益財団法人 JFE21 世紀財団.
4. 論文：“The conflicts beyond the border and their resolution between Russia and the Qing China”, *Crossing the Boundaries: Asians and Africans on the Move, Proceedings of the Papers (CAAS 7th International Conference)* (ed. by Kondo Nobuaki), 167–172, 2017.3.
5. 総説・解説：「バシキール人：南ウラルの勇者」『テュルクを知るための61章』, 2016.8, 明石書店.
6. 総説・解説：「カザフ人：遊牧政権から中央アジア地域大国へ」『テュルクを知るための61章』, 2016.8, 明石書店.
7. 口頭発表：「越境問題・国際紛争」とその解決：19世紀後半の露清国境の事例から，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「AA 研フォーラム」, 2016.5.19, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表：“The Conflicts beyond the Border and Their Resolution between Russia and the Qing China”, Tokyo University of Foreign Studies: Consortium for Asian African Studies Symposium “Crossing the Boundaries: Asians and Africans on Move”, 2016.10.22-23, Tokyo University of Foreign Studies.
9. 学外の社会活動（インターネット）：Ministry of Information and Communications of the Republic of Kazakhstan, “Internet project National Digital History of Kazakhstan” (National Digital History of Kazakhstan), 2016.12.
10. 学外の社会活動（セミナー・ワークショップ）：Онлайн-семинар Евразийского национального университета имени Л.Н. Гумилева, 2017.3. Astana, Kazakhstan.
11. 学外の社会活動（その他）：「国際協力機構 国際協力人材赴任前研修」（於：カザフスタン赴任国概要講義），2017.3.

競争的研究資金

科研費：
研究代表者： 野田 仁
課題番号： 15K02914
課題名： 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成
研究種目： 基盤研究 (C)
期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)
科研費：
研究代表者： 中見 立夫
課題番号： 16H03462
研究課題名： “帝国” 周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究
研究種目： 基盤研究 (B)
研究分担者： 野田仁，青木雅浩

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)その他競争的資金

研究代表者： 野田 仁

研究課題名： 露清帝国間の移動・境界と国際秩序

資金名称： JFE21 世紀財団アジア歴史研究助成

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

深澤 秀夫（ふかざわ ひでお）

教授，文化人類学研究ユニット

研究主題：マダガスカルを中心とするインド洋海域世界の社会人類学的研究

業績

1. 総説・解説：「子どもと遊ぶ大人が見た遊びの世界 マダガスカルにおけるフィールドワークから」『FIELDPLUS』16, 2016.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 口頭発表：「マダガスカルの一農村の三十年間に稲作をめぐる変わったこと・変わらないことー〈生活〉の中における新しい技術をめぐる取捨選択の論理ー」, アジア・アフリカ言語文化研究所 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」2016.12.3, 京都大学稲盛記念会館.
3. 学外の社会活動（講演）：「マダガスカルの村で〈世界〉をおちこちに読み解く 人が集まって暮らす景観が語るもの」在マダガスカル・邦人会 文化講演会, 2016.9.24, 駐マダガスカル・日本大使館.
4. 学外の社会活動（講演）：「マダガスカルにおける老いと力 祝福・呪詛・勘当・邪術」在マダガスカル・邦人会 文化講演会, 2017.2.18, 駐マダガスカル・日本大使館.
5. 学外の社会活動（新聞・雑誌）：「駐マダガスカル・日本大使館主催『マダガスカルの民話』プレスリリース」, 2017.2.24.

所属学会（役職）

文化人類学会

星 泉（ほし いずみ）

教授，言語学研究ユニット

研究主題：チベット文化圏の言語学

業績

1. 著書（共著：星泉，ケルサン・タウワ）：『ニューエクスプレス チベット語《CD付》』，白水社，東京.
2. 著書（編著）：『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA vol. 4』（チベット文学研究会（星泉・海老原志穂・大川謙作・三浦順子）編），東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 論文：Hirata, Masahiro, Taija Nan, Ryunosuke Ogawa, Shiho Ebihara, Yusuke Bessho, and Izumi Hoshi, “Milk processing system of Amdo Tibetan pastoralists and its transition in Qinghai Province, China”, *Journal of Arid Land Studies*, 26(4), 187–196, 2017. (査読有)
4. 総説・解説：「慈悲，誇り，故郷」『ピエリア 2016年 春号』, 2016.4.
5. 総説・解説：「映画『ラサへの歩き方～祈りの2400km』を通じて出会うチベットの人びと」『地球の歩き方 チベット 2016-17』, 2016.6.
6. 総説・解説：「他者の幸せを祈る旅—映画『ラサへの歩き方～祈りの2400km』によせて」『『ラサへの歩き方～祈りの2400km』公式パンフレット』, 2016.7.
7. 総説・解説：「文学を通して出会うチベット」『FIELDPLUS』16, 2016.7, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 総説・解説：「チベット牧畜民の「今」を記録する」『FIELDPLUS』17, 2017.1.
9. 総説・解説：「映像による記録とその功罪」『FIELDPLUS』17, 2017.1, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
10. 総説・解説：「映像紹介『チベット牧畜民の一日』」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 2017.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

11. 総説・解説:「伝説の楽士 アチョ・ナムギェル小伝」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 2017.3, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 総説・解説:「ラサの人気女性作家による初の長編小説『花と夢』」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 2017.3.
13. 口頭発表:“Local Innovations in Dairy Processing Based on the Rediscovery of Traditional Values”.; The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24, The University of Bergen.
14. 講演:“伝統的価値の再発見にもとづく乳加工イノベーション”, ツォシヨク・サルワ:ツォシヨク・サルワ起業セミナー, 2016.8.6, 中国青海省.
15. 講演:「ペマ・ツェテンとチベット映画の世界」, ヒマラヤ圏サパナ, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「ペマ・ツェテンとチベット映画の世界」, 2016.10.2, 札幌市教育文化会館.
16. 講演:「チベットの物語世界へようこそ」, ヒマラヤ圏サパナ「チベットの物語世界へようこそ」, 2016.10.2, 札幌市教育文化会館.
17. 口頭発表:「長編小説の出版状況から読み解くチベット文学の現在」, 日本チベット学会「第 64 回日本チベット学会ワークショップ「チベット学研究のホットスポット」」, 2016.11.19, 身延山大学.
18. 講演:「チベット・アムド地方の牧畜民の暮らしの「今」を映像で記録する」, 「フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」」, 2016.11.23, .
19. 口頭発表:「チベットの牧畜民とその語彙:異分野の研究者との共同研究で学んだこと」, 「AA 研フォーラム」, 2016.12.15, .
20. 講演:「『チベット牧畜民の一日』解説付き上映」, 「FIELDPLUS café」, 2017.1.18.
21. 口頭発表:「牧畜文化事典をつくる:あるいは SERNYA が牧畜特集を組む理由」, 「国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」」, 2017.2.18, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 星 泉

課題番号: 15H03203

課題名: チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂

研究種目: 基盤研究 (B)

研究分担者: 平田昌弘, 海老原志穂, 別所裕介

期間 (年度): 2015(H27)~2017(H29)

科研費:

研究代表者: 武内 紹人 神戸市外国語大学・外国語学部・教授

課題番号: 24242015

課題名: チベット語最古層の形成とその構造推移 —データベース解析による辞書と歴史文法の編纂

研究種目: 基盤研究 (A)

研究分担者: 星泉, 長野泰彦, 白井聡子, 池田巧, 西田愛

期間 (年度): 2012(H24)~2016(H28)

所属学会 (役職)

日本チベット学会 (編集委員)

その他研究成果

名称: 映像作品『チベット牧畜民の一日』

期間: 2017.2.

成果: 東北チベット, アムド地方の牧畜民の一日を生業に着目して記録したドキュメンタリー映像

町田 和彦 (まちだ かずひこ)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: 南アジアの言語学

所属学会 (役職)

日本語学会
日本印度学仏教学会
日本南アジア学会

峰岸 真琴 (みねぎし まこと)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: タイ語学, 東南アジア諸言語, オーストロアジア語族

業績

1. 論文: Minegishi, Makoto, Toshiki Osada, Nathan Badenoch, Masaaki Shimizu, Atsushi Yamada, and Yuma Ito. “A survey of recent Austroasiatic studies.” In: Mitsuaki Endo(ed.) *Studies in Asian Geolinguistics* I. 86–93, 2016, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. (電子出版, 2016.12.)
2. 論文: “Geographic distribution of Khmer phonemic systems.” In: Mitsuaki Endo(ed.) *Papers from the Second International Conference on Asian Geolinguistics*. 191–202.
3. 論文: “Milk: Austroasiatic languages.” In: Mitsuaki Endo(ed.) *Studies in Asian Geolinguistics* III. 20–21, 2016, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa. (電子出版, 2016.12.)
4. 論文: 「タイ語の動詞連続」東南アジア諸言語研究会(編)『東南アジア大陸部諸言語の動詞連続』72–97, 2017, 東京: 慶應義塾大学言語文化研究所.
5. 口頭発表: 「タイ語の主題マーカー」, 言語の類型性をとらえるための対照研究会第2回研究会, 2016.8.6, 大阪府立大学 I-site なんば.
6. 口頭発表: 「類型と有標性: 孤立語の視点から」, 言語の類型性をとらえるための対照研究会第3回研究会, 2016.12.17, 大阪府立大学 I-site なんば.
7. Bussaba Banchongmanee & Makoto Minegishi. “On developing Thai spoken corpus for analyzing discourse cohesion.” National conference “Humanities: realities and power of dreams”, 2017.11.14-15, チェンマイ大学 (査読有)
8. 学外の社会活動 (その他): 「NPO 地球ことば村」, 2003.4~現在.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 峰岸 真琴

課題番号: 25244017

課題名: コーパスに基づく談話の結束性の研究

研究種目: 基盤研究 (A)

研究分担者: 岡野賢二, 川口裕司, 長屋尚典, 川上茂信, 鈴木玲子, 降幡正志, 藤縄康弘, 野元裕樹, 黒沢直俊, 加藤晴子

期間 (年度): 2013(H25)~2016(H28)

科研費:

研究代表者: 佐藤 大和 東京外国語大学, アジア・アフリカ言語文化研究所 研究員

課題番号: 26284057

研究課題名: 超分節素の動態形式に基づくアクセント言語と声調言語の対照研究

研究分担者: 峰岸真琴, 益子幸江, 遠藤光暁, 鈴木玲子, 降幡正志, 岡野賢二, 春日淳

研究種目: 基盤研究 (B)

期間 (年度): 2014(H26)~2016(H28)

科研費:

研究代表者: 益子 幸江 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号: 26370443

研究課題名: 文イントネーションの型についての言語間対照研究

研究種目: 基盤研究 (C)

研究分担者: 峰岸真琴, 佐藤大和, 降幡正志, 岡野賢二

期間 (年度): 2014(H26)~2016(H28)

所属学会 (役職)

日本語学会（評議員）
東南アジア学会
インド言語学会

山越 康裕（やまこし やすひろ）

准教授，言語学研究ユニット

研究主題：モンゴル諸語

業績

1. 論文：“Predicative non-past participles in The secret history of the Mongols”, *Altai Hakpo* 26, 85–101, 2016.6.（査読有）
2. 論文：「シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現：分詞の定動詞化に関する3類型」『北方人文研究』（北海道大学大学院文学研究科・北方研究教育センター編）10, 79–96, 2017.3.
3. 口頭発表：“Language documentation of Mongolic languages spoken in the northeast of China: a case of Shinekhen Buryat”, The Hong Kong Language Documentation Centre (KongDoc) at the Department of Linguistics of The University of Hong Kong: Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP-2016), 2016.4.6-9, University of Hong Kong.
4. 口頭発表：「Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP2016) 報告」，東京外国語大学語学研究所「Luncheon Linguistics」，2016.4.20, 東京外国語大学.
5. 口頭発表：「ブリヤート語未来分詞の文末用法：分詞の「再名詞化」によるモダリティ表現」，日本語学会「日本語学会第152回大会」，2016.6.25-26, 慶應義塾大学.
6. 口頭発表：“Монгол төрөл хэлнүүдийн insubordination (гшшүүн бус өгүүлбэр)”，International Association of Mongol Studies: 第11回国際モンゴル学会議，2016.8.15-18, Ulaanbaatar, Mongolia.
7. ポスター発表：「中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション」，「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」プロジェクト「フィールド言語学カフェ・特別編」，2016.11.19-23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表：「中国東北部でモンゴル諸語を記録する」「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」プロジェクト「フィールド言語学カフェ・特別編」，2016.11.19-23, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 口頭発表：「ブリヤート語の動詞 *a- の屈折形式に由来する接語類」「九科研合同研究会 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」」，2017.3.30, 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
10. 口頭発表：「モンゴル語族の文法書」，AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」2016年度第1回研究会，2016.7.24, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究センター.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 山越 康裕

課題番号： 26770146

研究課題名： 中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション

研究種目： 若手研究 (B)

期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)

科研費：

研究代表者： 風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号： 15H05153

研究課題名： アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究種目： 基盤研究 (B)

研究分担者： 山越康裕，児倉徳和

期間 (年度)： 2015(H27)～2019(H30)

科研費：

研究代表者： 渡辺 己
課題番号： 16H05672
研究課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—
研究種目： 基盤研究 (B) 海外学術
研究分担者： 山越康裕, 児倉徳和, 沈力, 清澤香
期間 (年度) : 2016(H28)~2018(H30)

所属学会 (役職)

日本語学会 (大会運営委員)
日本モンゴル学会

吉田 ゆか子 (よしだ ゆかこ)

助教, フィールドサイエンス研究企画センター

研究主題: 文化人類学, インドネシアの芸能・宗教・仮面文化の研究

業績

1. 論文: 「レプリカの天女様のゆくえ—バリ島天女の舞トペン・レゴンにおける仮面の複製」『国立民族学博物館研究報告』41(1), 1-36, 2016.9. (査読有)
2. 総説・解説: 「消えゆく名前? —バリ島の名付けと少子化」『月刊みんぱく』40(9), 2016.9, 国立民族学博物館.
3. 口頭発表: 「無形文化遺産の担い手コミュニティとは何か—『美しきインドネシアミニチュア公園』のベスト・プラクティスへの申請から考える」, 「日本文化人類学会 第50回研究大会」, 2016.5.28, 南山大学.
4. 口頭発表: “Human and non-human agents in topeng dance drama in Bali: A non-anthropocentric analysis”, 国際伝統音楽評議会 東南アジアのパフォーミングアーツ研究グループ第4回シンポジウム, 2016.8.4, Cititel Hotel, Penang.
5. 口頭発表: “Balinese dance in multi-religious Jakarta: A study of Muslim learners and Hindu instructors”, International Workshop on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia (共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究 (第二期)」平成28年度第2回研究会), 2016.8.28, Le Meridien Kota Kinabalu.
6. 口頭発表: 「バリ島の曖昧な仮面たち—アブダクションの不一致をめぐって」, 共同研究会「演じる人・モノ・身体—芸能研究とマテリアリティの人類学の交差点」, 2016.10.30, 国立民族学博物館.
7. 口頭発表: 「仮面の命と物性—バリ島のトペン・レゴンの場合」, アジア・アフリカ言語文化研究所「「もの」の人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題」, 2016.11.6, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 口頭発表: 「バリ芸能における顔—人形, 仮面, 化粧」, アジア・アフリカ言語文化研究所「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2016.12.9, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 学外の社会活動 (その他・出演: 有): 「Re-Edit Sunda 南洋の暮らし 形と痕跡 talk show」, 2016.5, IDEE 自由が丘店.
10. 学外の社会活動 (講演会): 「ジャカルタ邦人向け公開講演会「バリ島の芸能文化 踊り, 奏で, 祈る日常」」, 2017.2, 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター.

渡邊 己 (わたなべ おのれ)

教授, 言語学研究ユニット

研究主題: セイリッシュ語

業績

1. 著書 (共編著): *Insubordination* (ed. by Evans, Nicholas and Honoré Watanabe), John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
2. 論文 (共著): “The dynamics of insubordination: An overview”, *Insubordination* (ed. by Evans, Nicholas and Honoré Watanabe), 1-38, 2016.11, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.
3. 論文: “Insubordination in Sliammon Salish”, *Insubordination* (ed. by Evans, Nicholas and Honoré Watanabe), 309-340, 2016.11, John Benjamins, Amsterdam and Philadelphia.

4. 口頭発表：「スライアモン・セイリッシュ語における動詞結合価の操作について」, 国際日本研究センター 対照日本語部門主催 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 20 回研究会, 2016.12.17, 東京外国語大学.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 渡辺 己

課題番号： 16H05672

研究課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—

研究種目： 基盤研究 (B) 海外学術

研究分担者： 山越康裕, 児倉徳和, 沈力, 清澤香

期間 (年度)： 2016(H28)~2018(H30)

科研費：

研究代表者： 渡辺 己

課題番号： 16K02660

課題名： スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2016(H28)~2018(H30)

所属学会 (役職)

日本語学会 (評議員, 大会運営委員, 夏期講座委員)

The Society for the Study of the Indigenous Languages of the Americas

Linguistic Society of America

特任教員

細田 和江 (ほそだ かずえ)

特任助教 (人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センター研究員), 中東イスラーム研究拠点

研究主題：イスラエル文学・文化, イスラエル/パレスチナ地域研究

業績

1. 論文：「信仰と習慣のあいだ：イスラエルのコシエルの今」『Vesta』105, 36-39, 2016.10.
2. 論文：「ヘブライ文学からイスラエル文学への系譜」『ユダヤ・イスラエル研究』30, 47-61, 2016.12. (査読有)
3. 論文：「味の根っこ：ワイン」『月刊みんぱく』, 14-15, 2017.1.
4. 論文：「イスラエル・ワインの現代史— ユダヤ人のパレスチナ入植から現代まで」『文化を食べる, 文化を飲む』(阿良田麻里子編), 171-182, 2017.3, ドメス出版.
5. 翻訳：「我が輩もユダヤ人なり」(Behar, Almog: ana min al-yahud) 『中東現代文学選 2016』(中東現代文学研究会編), 275-285, 2017.3.
6. 口頭発表：“Translation of Middle Eastern Literature in Japan after the Second World War: Focus on Arabic and Hebrew Literature”, Center for Interdisciplinary Study of Monotheistic Religions(CISMOR): CISMOR Annual Conference on Jewish Studies (CJS 9) “Judaism and Japanese Cultures: Encountering Judaism and Buddhism in Hebrew Literature”, Conference in Honor of Yoel Hoffmann’s Writings, Translations, and Beyond, 2016.11.28, 同志社大学一神教学際センター.
7. 口頭発表：“Globalization of Sushi: Kosher Sushi in the U.S. and Israel”, 現代中東地域研究みんぱく 拠点：国際ワークショップ・“Global Flow of Cultural Knowledge and Its Afterlives: Between Japan and the Middle East”, 2016.12.18, 国立民族学博物館.
8. 口頭発表：「ヘブライ文学からイスラエル文学への系譜：イスラエルの「アラブ系」による作品の新たな潮流」, 基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究機関研究員発表会, 2017.3.29, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) .

9. 招待講義：「第一回 イスラエルの誕生～先史からイスラエル建国まで」，やまと市民大学：みんなで考える中東問題～中東の歴史と昨今の中東情勢，2016.7.28，つきみ野学習センター。
10. 招待講演：「イスラエル・ワインの現代史：ユダヤ人のパレスチナ入植から現状まで」，東京工業大学「ぐるなび」食の未来創成寄附講座 食の文化研究会 公開講義第8回，2016.8.4，東京工業大学。
11. 報道：『毎日新聞』（＜世界文学ナビ＞中東編 12 エトガル・ケレット），2016.4.6。
12. 報道：『毎日新聞』（＜世界文学ナビ＞中東編 13 サイド・カシューア），2016.5.11。

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 細田 和江

課題番号： 16H06783

研究課題名： イスラエル／パレスチナにおけるアラブ性の探求—包括的な現代文化研究の基盤形成

研究種目： 研究活動スタート支援

期間（年度）： 2016(H28)～2017(H29)

科研費：

研究代表者： 福嶋 伸洋 共立女子大学文芸学部 准教授

課題番号： 15H03200

研究課題名： ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築

研究種目： 基盤研究（B）

研究分担者： 細田和江，中村隆之，中丸禎子，鶴戸聡，三枝大修，奥彩子，古川哲

期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)

科研費：

研究代表者： 鶴戸聡 鹿児島大学法文教育学域法文学系 准教授

研究課題名： アラブ＝ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築

課題番号： 26300021

研究種目： 基盤研究（B）

研究分担者： 細田和江，二村淳子，石川清子，酒井佑輔，青柳悦子，武内句子，柳谷あゆみ，茨木博史

期間（年度）： 2014(H27)～2017(H29)

外部資金（寄付金）：

研究代表者： 細田 和江

期間（年度）： 2016（H28）

研究種目： （公財）アサヒグループ学術振興財団助成・生活文化部門

研究課題名： 食の宗教規定に関する比較研究—アメリカとイスラエルにおけるコシエル（ユダヤ教の食物規定）「スシ」—

外国人研究員

ARKA, I Wayan アルカ, イ ワヤン

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間： 2017.3.1～2017.6.30

研究主題： 東部インドネシアのオーストロネシア諸語とパプア諸語

JUKES, Anthony Robert ジュークス, アンソニー ロバート

オーストラリア連邦 Commonwealth of Australia

滞在期間： 2016.2.1～2016.7.31

研究主題： インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築；インドネシア近辺の少数言語ドキュメンテーションのための教材開発

研究成果

論文：Anthony Jukes, Asako Shiohara and Yanti. “Collaborative Project for Documenting Minority Languages in Indonesia and Malaysia”, *Asian and African Languages and Linguistics*. vol.11. 45-56. 2017.3

LOMO MYAZHIOM, Aggee Celestin ロモ ミヤジウム, アジェ ケレスタン

フランス共和国 French Republic

滞在期間： 2017.3.1～2017.8.31

研究主題： アフリカの身体, 西欧的視点：「ユーラフリカ」とパン・アフリカニズムの間の支配, 抵抗, 同一性

研究成果

口頭発表： “Présence Africaine dans le contexte de la décolonisation de l’Afrique” (コメンテーター：福島亮 (東京大学大学院生)), AA 研共同利用・共同研究課題『『プレゼザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために』2016年度第2回研究会, 2013.3.25-26. AA 研.

RAHAYU, Yosephin Apriastuti ラハユ, ヨセフィン アプリアストウティ

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間： 2016.10.1～2017.8.31

研究主題： ウッタラカンダ：ムラピ・ムルバブコレクション所蔵の古ジャワ語韻文

RIESTER, Arndt リースター, アーント

ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany

滞在期間： 2017.2.1～2017.5.31

研究主題： QUD(Question under Discussion) システムを用いた談話構造・情報構造に関するアノテーション付与

研究成果

著書：Arndt Riestler and Stefan Baumann. The RefLex Scheme - Annotation Guidelines. Volume 14 of Sin SpeC. Working Papers of the SFB 732, University of Stuttgart. 2017. iii+30pp. (<http://dx.doi.org/10.18419/opus-9011>)

宋華強 ソウ カキョウ

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間： 2015.9.14～2016.7.31

研究主題： 里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究 (2)；秦簡の言語学的研究

研究成果

1. 論文：「戦国楚文字從“睪”從“甘”之字新考」『簡帛』第十三輯, 2016.11. 1-9. (査読有)
2. 論文：「葛陵簡舊釋“柰”之字新考」『中國簡帛學國際論壇 2016 論文集』(香港中文大學歷史系中國歷史研究中心等編編), 2016.12. 156-165.

Tun Aung Kyaw トウン アウン チョー

ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmar

滞在期間： 2016.9.1～2017.7.31

研究主題： 現代口語ビルマ語の新しい参照文法書の編集

特任研究員

安達 真弓 (あだち まゆみ)

特任研究員

研究主題：ベトナム語，語用論

業績

1. 口頭発表：「ベトナム語会話における指示詞由来の文末詞」，第11回東京大学言語変異・変化研究会，2017.1.13. 東京大学.
2. 口頭発表：「ベトナム語における同形の指示詞・文末詞・感動詞」，AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」 「リンディフォーラム：特任研究員研究発表会」，2017.3.28. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

阿部 優子 (あべ ゆうこ)

特任研究員

研究主題：バントゥ諸語，記述言語学

業績

1. 著書：『*Kabendeni. Historia fupi ya wilaya ya Mpanda-Katavi na watu wake, kabila la Wabende /The Short History of Mpanda District - Katavi Region: Bende Tribe and its People* カタヴィ州ンパンダ県小史：ベンデ民族とその人々』，2017. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 113 pp.
2. 口頭発表：“Toward Micro-variation Parameters of Persistent in Lake Tanganyika Bantu”, *The 6th International Conference on Bantu Languages*, 2016.6.22. University of Helsinki.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 阿部 優子

課題番号： 26370477

課題名： タンガニカ湖周辺の人々の異動と言語接触に関する研究

研究種目： 基盤研究 (C)

期間 (年度)： 2014(H26)～2017(H29)

岡田 一祐 (おかだ かずひろ)

特任研究員

研究主題：日本語史，文字史

業績

1. 口頭発表：『和翰名苑』における平仮名字体認識」，日本語学会 2016 年度春季大会，2016.5.15. 学習院大学.
2. 口頭発表：“Reorganising a Japanese calligraphy dictionary into a grapheme database and beyond: The case of the Wakan Meien grapheme database”, Japanese Association for Digital Humanities: JADH2016, 2016.9.13. University of Tokyo.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 岡田 一祐

課題番号： 15H05981

課題名： 明治期国語教科書と平仮名初習者の筆写資料とを関連させた平仮名字体史研究

研究種目： 研究活動スタート支援

期間 (年度)： 2015(H27)～2016(H28)

受賞

- 日本語学会 2016 年度日本語学会春季大会発表賞 (2016.10.30)
新村出記念財団第 34 回新村出研究奨励賞 (2016.11.23)

近藤 洋平 (こんどう ようへい)

特任研究員

研究主題：宗教学，イスラム学，イバード派

業績

1. 論文：「GCC 諸国の高等教育の現状」『中東と IS の地政学』（山内昌之編），2017.2. 331-350.
2. 論文：“The Deposition of al-Imām al-Ṣāliḥ b. Mālik and the Ibādī Imamate Tradition of Oman”, *Today's Perspectives on Ibadi History* (ed. by R. Eisener (ed.)), 2017.2. 197-210.
3. 口頭発表：“Ibādī Policy on Education and Learning in the Premodern Period”, Ministry of Religious Endowments and Religious Affairs, the Sultanate of Oman: *International Conference on Religion and Politics in Oman.*, 2016.5.25. Oxford University.
4. 口頭発表：「イバード派法学派の形成と展開に関する一考察：家族法を題材にして」，日本オリエント学会第 58 回年次大会，2016.11.13，慶応義塾大学.
5. 講演：「イスラーム思想における生命倫理と看護」，2016 年度 聖路加国際大学 円環講座，2016.11.15. 聖路加国際大学.
6. 口頭発表：“The Early Development of Ibādī Law in Oman”, Oriental Institute Beirut: *International Workshop: The Ibādīyya in the Context of Early Islamic Theology and Law.*, 2017.1.27. Oriental Institute Beirut.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 近藤 洋平

課題番号： 26870123

研究種目： 若手研究 (B)

課題名： 婚姻法の法制史的考察によるイバード派イスラーム法学派の形成と展開の研究

期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)

中村 恭子 (なかむら きょうこ)

特任研究員

研究主題：美術 (日本画)

業績

1. 論文：『ラ・ヴェネツィアーナ』のレモンはどこから，*Krug/Kpyz*, 9, 2017.3. 27-33.
2. 講演：「SAWACHI DE MOBY DICK」，東京藝術大学 芸術情報センター(AMC)「アートノマドカフェミーティング No.3」，2016.4.20. 東京藝術大学.
3. 講演：『ラ・ヴェネツィアーナ』のレモンが流通する世界」，2016 年度日本ナボコフ協会大会，2016.5.7. 東京大学.
4. 口頭発表：「SAWACHI DE MOBY DICK complete」，第 11 回内部観測研究会＋第 28 回計測自動制御学会 SI 部門共創システム部会研究会，2017.2.25-26. 早稲田大学.
5. 報道：高知新聞「日本画家の中村恭子さんが高知の「皿鉢の宴」を絵巻物に」，2016.12.16.
6. 報道：朝日新聞夕刊 マリオン面「展覧会」情報，2017.3.28.
7. 報道：『月刊美術』展覧会紹介欄，2017 年 4 月号 (2017.3.18) .

平田 秀 (ひらた しゅう)

特任研究員

研究主題：日本語の音声・音韻，日本語アクセント論

業績

1. 著書：『言語研究のための情報処理』（平田秀編），2016.9. 東京大学文学部言語学研究室 コトバ・ブック
ス, 80pp.
2. 論文：「言語学論文のための LaTeX ことはじめ」『言語研究のための情報処理』（平田秀編），2016.9. 63-68.
3. 口頭発表：「三重県尾鷲方言の助詞のアクセントについて」, 国立国語研究所共同研究プロジェクト「対照
言語学の観点から見た日本語の音声と文法」音声研究班研究発表会, 2016.9.16. 国立国語研究所.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 平田 秀

課題番号： 16H06784

研究種目： 研究活動スタート支援

課題名： 紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

研究機関研究員

小山内 優子（おさない ゆうこ）

研究機関研究員

研究主題：中期朝鮮語文法, 朝鮮語史

坪井 祐司（つぼい ゆうじ）

研究機関研究員

研究主題：マレーシアにおけるエスニシティ形成に関する近代史

業績

1. 著書：『『カラム』の時代 VIII：マレー・ムスリムの越境するネットワーク（CIRAS Discussion Paper No.68）』（坪井祐司・山本博之編），2017.3. 京都大学東南アジア地域研究研究所, 77 pp.
2. 論文：「1930 年代初頭の英領マラヤにおけるマレー人性をめぐる論争：ジャウィ新聞『マジュリス』の分析から」『東南アジア 歴史と文化』45, 2016.5, 5-24. (査読有)
3. 論文：「文字からみたマレーシアの民族, 社会」『FIELDPLUS (フィールドプラス)』16, AA 研, 2016.7, 20-21.
4. 論文：「スジャラ・ムラユ」『名著で読む世界史 120』（池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫編），2016.11, 237-239.
5. 口頭発表：“An alternative vision for Malayan decolonization from the perspective of Muslim intellectuals in Singapore”, Kota Kinabalu Liaison Office, ILCAA, TUFUS: International Workshop on Islam and Cultural Diversity in Southeast Asia, 2016.8.28, Le Meridien Kota Kinabalu, Malaysia.
6. 講演：“World View of Malay Muslim Intellectuals in Singapore”, Malay Heritage Centre, Singapore: Public Lecture Series “Age of Qalam”, 2017.2.18, Malay Heritage Centre, Singapore.

日本学術振興会特別研究員

伊藤 雄馬（いとう ゆうま）

研究課題名：少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

受入期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：峰岸 真琴

業績

口頭発表：「キックオフ研究紹介」, モンクメール研キックオフ研究会, 2016.10.1. 東京外国語大学本郷サテライト.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 伊藤 雄馬

課題番号： 16J00729

研究種目： 特別研究員奨励費

課題名： 少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

岩本 佳子（いわもと けいこ）

研究課題名：オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

受入期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：高松 洋一

業績

1. 論文：“A Study on the Turning Point of the Ottoman Policy toward Nomads: The Settlement Policy of Turkish and Kurdish Nomads in the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, 『日本中東学会年報』32, 2016. 69-95. (査読有)
2. 論文：「免税者から担税者へ：16-17世紀のバルカン半島におけるミュセッレム集団の存続と変容」『オリエント』59, 2016. 1-12. (査読有)
3. 口頭発表：「「我らのスルタン」か「我らのパーディシャー」か：オスマン朝文書行政における君主の呼称をめぐる一考察」日本オリエント学会第58回大会，2016.11.12. 慶応義塾大学.
4. 口頭発表：“Tax Revenue and Troublesome Nomads: A Study of the Settlement Policy on Turkish and Kurdish Nomads by the Ottoman Empire”, Consortium for Asia and Africa Studies(CAAS): *Symposium “Crossing the Boundaries: Asians and Africans on Move”*, 2016.10.23. 東京外国語大学.
5. 口頭発表：“Transformation of the Ottoman Auxiliary Unit in the Post-Classical Age: A Study on Musellems in the Balkans”, the Society for Turkic, Ottoman and Turkish Studies (GTOT) : *Turkologentag 2016: Second European Convention on Turkic, Ottoman and Turkish Studies*, 2016.9.15. Universität Hamburg.

競争的研究資金

科研費：

研究代表者： 岩本 佳子 特別研究員(PD)

課題番号： 15J03916

研究種目： 特別研究員奨励費

課題名： オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)

倉部 慶太（くらべ けいた）

研究課題名：北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

受入期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：澤田 英夫

業績

1. 論文：“Jinghpaw”, *The Sino-Tibetan Languages (2nd Edition)* (ed. by Graham Thurgood and Randy J. LaPolla (eds.)), 2017.1. 993-1010. (査読有)
2. 論文：“Phonology of Burmese loanwords in Jinghpaw”, *Kyoto University Linguistic Research*, 35, 2016.12. 91-128. (査読有)
3. 論文：“Orthography and vernacular media: The case of Jinghpaw-Kachin”, *IIAS Newsletter*, 75, 2016.1. 36-37.
4. 口頭発表：「ジンポー語における有気音の無気音化」, 日本言語学会第153回大会，2016.12.3, 福岡大学.
5. 口頭発表：“Grammatical relations in Jinghpaw”, : *The 49th International Conference on Sino-Tibetan Languages and Linguistics*, 2016.11.13. Jinan University.
6. 口頭発表：「ジンポー語における人称階層に基づく動詞の一致」, 日本言語学会第152回大会，2016.6.25, 慶応義塾大学.
7. 口頭発表：“Verb-possessor agreement in Jinghpaw”, *The 26th Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society*,

2016.5.26. Century Park Hotel, Manila.

8. 口頭発表: “A preliminary report on the distribution of 'eclipse' in languages of mainland Southeast Asia”, *The 3rd International Conference on Geolinguistics*, 2016.5.23. Royal University of Phnom Penh.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 倉部 慶太

課題番号: 14J02254

研究種目: 特別研究員奨励費

課題名: 北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

期間(年度): 2014(H26)~2016(H28)

科研費:

研究代表者: 荒川 慎太郎

課題名: 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相

課題番号: 16H03414

研究種目: 基盤研究(B)

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

研究分担者: 倉部慶太, 白井聡子

杉江 あい (すぎえ あい)

研究課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

受入期間: 2016.4.1~2019.3.31

受入教員: 外川 昌彦

業績

1. 論文: “Persistence and change in occupational groups among Muslims in rural Bangladesh: a case study of Sanaidar jati in Tangail district”, *International Journal of South Asian Studies*, Volume 8, 2016.12, 73-102. (査読有)
2. 口頭発表: 「バングラデシュ村落社会におけるコミュニティの動態」, 第11回南アジア学会修論・博論発表会, 2016.4.2. 神戸大学.
3. 口頭発表: 「バングラデシュ村落社会の変動—社会集団間の関係に着目して」, INDAS-South Asia 京大拠点研究グループ「南アジアの長期発展径路」2016年度 第1回研究会, 2016.7.2. 京都大学.

競争的研究資金

科研費:

研究代表者: 杉江 あい 特別研究員(PD)

課題番号: 16J05363

課題名: イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

研究種目: 特別研究員奨励費

期間(年度): 2016(H28)~2018(H30)

高尾 賢一郎 (たかお けんいちろう)

研究課題名: イスラームと社会統治に関する研究: ヒスバ制度を事例に

受入期間: 2016.4.1~2019.3.31

受入教員: 飯塚 正人

業績

1. 共訳書: サーミー・ムバイヤド著『イスラーム国の黒旗のもとに—新たなるジハード主義の展開と深層—』(福永浩一と共訳), 2016.9. 青土社 350 pp.
2. 書評: 「黒田賢治著『イランにおける宗教と国家—現代シーア派の実相—』」『宗教と社会』22号, 2016.6. 65-68.
3. 口頭発表: 「サウジアラビアに見る職業としての「ウラマー」: ワッハーブ主義におけるその役割」, 日本中東学会第32回年次大会, 2016.5.15, 慶應義塾大学.

4. 口頭発表：““Religious Police” in Changing Society: Hisba in Saudi Arabia and Others”, 早稲田大学イスラーム地域研究機構：The Emerging Gulf Region: Assessing the Field and Seeking New Possibilities, 2016.12.18. 早稲田大学.

競争的研究資金

科研費：
 研究代表者： 高尾 賢一郎
 課題番号： 16J01130
 研究種目： 特別研究員奨励費
 課題名： イスラームと社会統治に関する研究：ヒスバ制度を事例に
 研究種目： 特別研究員奨励費
 期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

I-2.6.3 受賞

受賞者氏名	賞名	受賞年月	受賞対象となった研究課題名等
錦田愛子	大同生命 地域研究奨励賞	7月22日	中東地域における離散パレスチナ人難民に関する 人類学的・政治学的研究 大同生命国際文化基金 HP http://www.daido-life-fd.or.jp/business/
中見立夫	国際モンゴル学会の 栄誉会員の称号を授与	8月15日	学会活動への貢献およびモンゴル 研究の分野での 学術功績 http://www.tufs.ac.jp/topics/post_798.html
荒川慎太郎	金田一京助博士記念賞	12月11日	『西夏文金剛經の研究』（2014年10月 松香堂刊） 金田一京助博士記念賞 HP http://dictionary.sanseido-publ.co.jp/affil/kkprize/current.html
岡田一祐	新村出記念財団 研究奨励賞	第34回 平成28年度	「明治検定期読本における平仮名字体」 （『日本語の研究』第10巻4号（2014年）） 新村出記念財団 HP http://s-chozan.sakura.ne.jp/index2.html
	日本語学会大会発表賞	8月	「『和翰名苑』における平仮名字体認識」 日本語学会大会 HP https://www.jpling.gr.jp/kaiin/gakkaisyo/happyosyo/#happyosyo2016a

I-2.6.4 人事評価

国立大学法人東京外国語大学では、2006年度から（1）教員の教育研究活動の実態を把握し、本学における教育研究の質の向上を図る、（2）教員の潜在的可能性を掘り起こし、大学の価値と競争力を高める、（3）年功序列型の給与制度の弊害を正し、教育・研究・大学運営への参画など広い意味での大学業務への貢献を給与に適正に反映させる、といった目的で、年に一度「人事評価」を実施することになった。評価項目や方法などは部局の事情を考慮し、部局ごとに独自に作成することになった。

これを受けて本研究所では、人事評価の方針および評価項目案を決定した。基本方針の概略は以下の通りである。

- ・ 教育実績、研究業績、組織運営への参画と貢献、社会貢献・国際貢献、その他の5つの大項目を設定する。
- ・ 大項目それぞれに対し、研究所の活動を可能な限り網羅した小項目を定め、それにチェックボックスをつける。
- ・ このように設計されたチェックリストを電子情報化して所内からチェックを書き込むことができるよ

うにし、所員は一定の期間内にチェックリストにアクセスし、当該年度の活動を自己申告する。

- ・ 「基本要件」を満たしたか否かの判断は「研究業績」と「組織運営への参画と貢献」の2つの大項目に含まれる小項目のみを対象とし、10以上のチェックがつけられれば満たしたものとする。
- ・ それ以外の3つの大項目に含まれた小項目へのチェックは、参考資料として活用する。

また、病気等による休職、長期研修、在外研究、長期にわたる海外での調査・研究などの特殊事情を抱える所員は、例外として個別に評価することも確認された。

2008年度には大学執行部から全学的に人事評価方式の再検討が求められたが、本研究所では自己評価委員会(当時)における審議の結果、従来の人事評価システムの内容ならびに運用には問題がなかったと判断した。その結果、2008年度以降2013年度まで、従来通りの方法で人事評価を行ってきた。しかしながら、2012年度に大学執行部が新たに全学的な人事評価実施規程案等の検討結果を示し、各部局においてそれぞれの特性を踏まえた評価方法の検討を行うように要請された。これを受けて、本研究所でも全学における枠組みを踏まえ、上記評価項目、評価システムの見直しを行うこととなった。

2013年度に入ると、新しい人事評価システムの導入に関する検討が全学的に本格化した。しかしながら、本研究所における人事評価の方針や、自己申告方式で評価を行う評価項目については、基本的に従前のそれらを基礎とすることで問題がないと判断されたため、大きな変更は加えられていない。とはいえ全学的には、自己申告以外に、部局長による総合評価についての基準がより明確化される方針が打ち出された。すなわち、教育業績、研究業績、大学運営組織への参画・貢献、社会貢献・国際貢献、その他、の5つの大項目について特に顕著な貢献があるかどうか、また、所員として、あるいは本学の教員として不適切な行為がなかったかどうか、所長が評価したうえで、学長が最終的に決定するという案が作成されたのである。このような新しい評価システム案は、全学的な協議の中で位置づけられ、2014年度に細部の詰めを行った上で、運用されている。なお、運用開始以来今日に至るまで、本研究所の所員について、東京外国語大学の教員として不適切な行為があったと評価されたことは一度もない。

I-2.7 外部資金による研究活動

I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

本研究所は言語学、文化人類学、地域研究の3つの分野で共同利用・共同研究拠点に認定されているが、本事業では特別経費により、これまで研究分野毎に進めてきた現代的諸問題の研究を有機的に関連させて一気に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した、問題解決のための研究体制を構築する。具体的には、3分野が緊急に解決すべきと考える問題が等しく「少数派/弱者の危機」という側面を持つことから、このテーマを始めとする異分野間連携の国内合同研究集会を実施して、研究の飛躍的發展を図る。そこで得られた研究成果は、3分野の基幹研究がそれぞれ国内外の研究機関や現地コミュニティと連携して実施する国際共同事業「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究」に反映され、問題解決のための新たな国際連携研究体制の構築に資する一方、各事業の成果を異分野間の連携研究にフィードバックするサイクルを確立することで、持続的な現代諸問題研究の進化を図る。

2016年度はこの新たな特別経費プロジェクトの初年度であり、3分野がそれぞれ緊急に解決すべきと考える問題の国際共同研究に取り組む一方、各分野の取組に関する相互理解を一気に深めるべく、年度初めから分野間連携担当の特任研究員を雇用し、12月には国内合同研究集会1回を実施した。活動の詳細については[II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#)を参照のこと。

I-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

年度計画

学内と連携機関（名古屋大学）から2名の若手研究者を海外連携機関（メルボルン大学、ナンヤン工科大学（NTU））に派遣するとともに、海外連携機関（オーストラリア国立大学、メルボルン大学、NTU、ロンドン大学 SOAS）から計11名の研究者を招聘し、以下の事業を推進する。

- (1) データアーカイブ
- (2) 言語コーパス構築
- (3) 言語の通時的変化・分岐に関する研究
- (4) 言語コーパスを用いた理論的研究

実施状況

派遣と招聘を年度計画通り行い、以下の事業活動を実現した。招聘した研究者が関わった研究会の情報については [11-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」](#) を参照のこと。

- (1) データアーカイブ
一次データの公開：日本側研究者が持つ危機言語・少数言語の一次データを広く利用可能な形でアーカイブした。具体的には11言語のデータを連携研究者 Thieberger 博士とのメタデータ等に関する協議を経てアーカイブ・公開した。
- (2) 言語コーパス構築：危機言語・少数言語のコーパス整備に関して、メルボルン大学の Schnell 博士と共同研究を開始した。Schnell 博士との共同研究は各メンバーが一定量のデータ（1000 クローズ）のナラティブに現れる指示対象に対して、GRAID という手法（形式（名詞句・代名詞・ゼロ形など）と文法関係・人称・有生性に関するアノテーションをつける手法）で進めており、既に各研究者が100 クローズ程度のデータに関してアノテーションを付与している。
マレー語など比較的話者数が多い言語のコーパス構築・利用方法に関しては、NTU の Bond 博士、Kratovich 博士との共同研究が順調に推移している。既に日本側ではマレー語・インドネシア語のコーパス検索システム MALINDO CONC を設計し、その試行版を完成させた。ウェブからのデータにはマレー語とインドネシア語の判定が難しいという問題があるのだが、その点に関しても主に両言語の異綴語、高頻度語を利用した判定方法を開発し、成果を出した。
- (3) 言語の通時的変化に関する研究：チベット語・西夏語に関して SOAS との共同研究を行い、連携研究者 Hill 博士（ロンドン大学 SOAS）の招聘、担当研究者荒川の出張により、コーパスに基づくチベット・タンгут系言語の分岐に関する共同研究計画を策定した。また、西夏語の口語体表現を研究する上で有用な西夏語テキストのコーパスを作成した。また、バントゥ諸語の分岐と通時的変化に関する SOAS との共同研究に関しては、Martin 教授（ロンドン大学 SOAS）らの招聘により、共同研究の基盤になる130以上の文法項目を含むパラメータについて議論を行い、比較の手法を確定した。
- (4) 言語コーパスを用いた理論的研究：コーパスに基づく理論的研究は上記(1)(2)の研究の到達点に位置するものである。少数言語・危機言語に関しては Schnell 博士との共同研究により、GRAID によるアノテーション付与を利用した類型論的研究を開始した。

I-2.7.3 科学研究費等によるその他の研究活動

本年度は、次の59件の科学研究費補助金による研究活動を実施した。

研究種目	金額 (単位: 千円)	／件数
基盤研究 A (海外, 一般含む)	30,900	／ 5 件
基盤研究 B (海外, 一般含む)	35,900	／11 件
基盤研究 C	17,196	／19 件
挑戦的萌芽研究	500	／ 1 件
若手研究 A	1,800	／ 1 件
若手研究 B	8,959	／ 1 件
研究活動スタート支援	400	／ 1 件
研究成果公開促進費	11,700	／ 3 件
国際共同研究加速基金	9,400	／ 1 件
特別研究員奨励費	5,800	／ 5 件
計	122,555	／59 件

I-2.7.4 寄付金

2016 年度の新規受入として、以下の 1 件の寄付金があった。

7 月 15 日 細田 和江 『「食の宗教規定に関する比較研究－アメリカとイスラエルにおけるコシエル（ユダヤ教の食物規定）「スシ」－」遂行のため』
アサヒグループ学術振興財団 800,000 円

I-3 組織運営

I-3.1 センター

I-3.1.1 情報資源利用研究センター

情報資源利用に関する研究を推進するために、IRC プロジェクトを組織し、本研究所が所蔵・収集しているアジア・アフリカの言語データ、言語文化に関する多様な研究資料の電子化と公開や、アジア・アフリカの言語文化に関する研究用データベース、電子辞書、映像資料体などの構築・公開・共同利用を進めるための連携活動などを進めた。

IRC 内の運営については、原則として毎月定例会議を開催し、予算執行状況の点検、IRC プロジェクトの進行状況の点検、事業改革、IRC ワークショップの開催計画などを主たる議題として討議を行なった。また、所内の情報体制の円滑化・充実のため、センターの管理するサーバーの管理運営を行なった。また、IRC の活動と構築した情報資源を公開するためのウェブサイトの全面リニューアルを行ない、情報資源の検索・閲覧・利用の利便性を向上させた。

所内の情報システムの安定的な運用及び IRC 関連研究事業の推進のために、情報処理に関する専門知識を有した2名の特任研究員を、事務管理関係業務のために1名の業務補佐を雇用する体制を継続した。

I-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

2016年度は前年度までの体制を改め海外学術調査総括班と地域研究コンソーシアム担当をFSC事業から外し、センター担当所員には臨地調査手法の洗練とフィールドサイエンスの構築、海外研究拠点の維持・運営多岐にわたるセンター業務を効率よく遂行した。また2015年度に引き続き、海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」(2010年度設置)、「フィールドネット運営委員会」(2011年度設置)に、学内外の委員を委嘱して、コロキウムの企画・運営の円滑な遂行と、相互に研究情報を交換するフィールドネットの機能を強化するための企画・運営を諮問した。

I-3.2 外部委員会

I-3.2.1 運営委員会

本研究所には2009年度まで、所外の経験豊かな学識者による運営諮問委員会が設置されていた。運営諮問委員会は、所長からの諮問に応えることで、全国共同利用研究所としてのAA研の研究や運営のあり方に関する基本的・長期的な方向性を示してきた。しかしながら、共同利用・共同研究拠点への移行にともない、2010年度からは学外委員が過半数を占める運営委員会を設置することとなり、運営諮問委員会は2009年度をもって活動を終了した。

2016年度の運営委員会は学外委員9名を含んでおり、その多くは言語学、民族学、地域研究、歴史学の研究者で、本研究所が共同利用・共同研究拠点として認定されている学問分野の研究者コミュニティを代表する形で、さまざまなご意見を頂戴している。さらに社会的に開かれた研究所のあり方を検討するため、研究機構、研究所、センターなどの運営に携わっている研究者にもご参加いただいている。委員長は渡邊興亜名誉教授(総合研究大学院大学)、副委員長は栗林均教授(東北大学東北アジア研究センター)である。

2016年度の運営委員会は2回開催された。第1回運営委員会(2016年12月21日開催)では、委員長・副委員長を選出した後、AA研の「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」としての共同利用・共同研究拠点の期末評価結果(2015(平成27)年度)実施(総合評価A)において示されたコメント(国際共同研究の成果を増加させるための取組みの検討、研究所全体の特徴の明確化)への対応が報告されるととも

に、その改善点に関して諮問し、応募件数の増加方針をめぐる功罪や国際的成果発表のあり方に関する意見を得た。また大学院博士後期課程への関与について、有資格者全員が関与すること、前期課程にフィールドサイエンスプログラムを新設したこと、東京農工大・電通大との西東京三大学共同専攻の問題について諮問し、意見が交わされた。

第2回運営委員会（2017年3月22日開催）においては、主に東京外国語大学の中期計画変更（組織運営改善に関して、40歳未満の若手教員の比率を2021（平成33）年度までに15%に引き上げる）の研究所教員人事に対する影響について諮問がなされ、その問題点の指摘と対応について議論がなされた。また第2期中期目標期間の教育研究評価に関する評価報告書が紹介され、研究分野におけるAA研の評価が大学自体の評価向上に大きく貢献していることが確認された。【2016年度の委員氏名等は、資料編 [II-2.2.1 運営委員会](#)の項を参照】

I-3.2.2 共同研究専門委員会

本研究所が共同利用・共同研究拠点に認定されたことにともない、2010年度以降に発足した共同利用・共同研究課題はすべて、公募を経て新設の共同研究専門委員会が採否の審査を行うことになった。共同研究専門委員会の委員は、AA研が共同利用・共同研究拠点として認定されている三分野（言語学・文化人類学・地域研究）の研究者コミュニティを代表する学外委員が過半数を占めている。2016年度の共同利用・共同研究課題審査会は10月16日（日）に開催され、2016年度発足分に応募のあった15件の共同利用・共同研究課題に関する審査が行われた。審査会には井上、久保田、倉沢、杉山、藤代、吉澤、米田（以上学外）、栗原、深澤、渡辺（以上所内）の各委員が出席し、各共同利用・共同研究課題の応募書類と代表者によるプレゼンテーションをもとに審査にあたった。審査会終了後は所長、副所長、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエンス研究企画センター長も加わって共同研究専門委員会を開催し、応募のあった共同利用・共同研究課題に対する順位付けを行う一方、最終評価点を附して各課題代表者への審査結果通知を行うことを承認した。なお、共同利用・共同研究課題の最終的な採否は、共同研究専門委員会の付した順位に従って、企画運営委員会が決定するが、来年度予算の如何にかかわらず11月下旬には各課題代表者に審査結果を通知することが認められた。最終的には応募のあった15件のうち11件が採択された（うち3件が所外代表）。

ほかにも共同研究専門委員会は、年度末に提出された実績報告書をもとに、本年度実施された共同研究課題29件の書面審査・評価を行い、共同研究の質の向上に寄与している。【委員氏名等は、資料編 [II-2.2.2 共同研究専門委員会](#)の項を参照】

I-3.2.3 研修専門委員会

ハンガリー語・ジャワ語（東京会場）を2017年度研修予定言語として決定した。2017年度に限り「史料講読研修『中国古代文書簡牘』」（講師：陶安あんど所員）を実施することについて、11月17日の第8回教授会において承認のち、【特別企画】として開講することが決定した。

また、今年度から教材を電子出版の形で公刊することとした。

I-3.2.4 海外調査専門委員会

1. 海外学術調査フォーラム（旧称：～2004年度「海外学術調査総括班研究連絡会」、～2010年度「海外学術調査総括班フォーラム」）の企画・開催準備を案件として、海外調査専門委員会を2016年度中に1回（12月26日（月））開催した。
2. 全体会議、地域別分科会および情報交換会からなる海外学術調査フォーラムを、7月9日（土）に開催した。フォーラムでは、全国の科研研究代表者（新規・継続分）をまじえ、海外学術調査の研究ネットワークをめぐる活発な議論の場を提供した。また海外学術調査フェスタと称する文理融合型の共同研究についてのポスター発表の場を設けた。
3. 上記総括班フォーラムと同日開催で、下記海外学術調査ワークショップを開催した。
4. 1) 「概念を規定し、事例を読み解く－鵜飼研究、中国から日本、そしてマケドニアへ」 卯田宗平（国立民族学博物館／環境民俗学） 2) 「アフリカにおけるサバクトビバッタとの闘い」 前野ウルド浩太郎（国立研

究開発法人 国際農林水産業研究センター／昆虫学)

5. 2016年度後半以降は、次年度海外学術調査フォーラムの企画・開催に向けた準備作業に着手した。
6. 文部科学省で進められている科学研究費補助金事業の見直し作業に対し、基盤研究AとBに設けられている「海外学術調査」枠の存続の必要性を専門の見地から文章として日本学術振興会を通して提出すると共に、改革に対する意見聴取のホームページについても同様の書き込みを行った。

海外学術調査フォーラム

平成28年度フォーラムプログラム（敬称略）

日時：2016年7月9日（土）10:30～19:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所

- 10:30～12:30 海外学術調査ワークショップ
会場：アジア・アフリカ言語文化研究所3階大会議室（303）
「フィールドサイエンスにおけるドキュメンテーション—あつめる・はかる・かぞえる—」
司会 深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
挨拶 飯塚 正人（AA研 所長）
1 卯田宗平（国立民族学博物館／環境民俗学）
「概念を規定し、事例を読み解く—鵜飼研究，中国から日本，そしてマケドニアへ—」
2 前野ウルド浩太郎（国立研究開発法人 国際農林水産業研究センター／昆虫学）
「アフリカにおけるサバクトビバッタとの闘い」
- 12:30～12:35 海外学術調査フェスタ展示内容の案内
深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
- 12:35～14:00 ————— 昼食・休憩 —————
- 12:35～17:30 1階資料展示室にて海外学術調査フェスタ 開催
- 14:00～14:30 全体会議（事前申込制） 会場：アジア・アフリカ言語文化研究所 大会議室（303）
司会 深澤 秀夫（AA研 海外学術調査フォーラム担当長）
挨拶 床呂 郁哉（AA研 フィールドサイエンス研究企画センター長）
中山 亮（(独)日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長）
「科学研究費の執行について」
- 14:30～15:00 会場別質疑（事前申込制） 会場：AA研 各会議室
中山 亮（(独)日本学術振興会研究事業部研究助成第一課長）
3会場において質疑応答
- 15:10～17:10 地域別分科会 会場：AA研 各会議室
- I 大陸部東南アジア 会場：3階セミナー室（301）
座長：伊藤 元己（東京大学大学院総合文化研究科）
西井 涼子（AA研）
情報提供講師：田中 伸幸（国立科学博物館）
タイトル「ミャンマーにおける生物的多様性調査」
書記：塩原 朝子（AA研）
- II 島嶼部東南アジア・太平洋
会場：3階小会議室（302）
座長：岡本 正明（京都大学東南アジア研究所）
高樋 さち子（秋田大学教育文化学部）
情報提供講師：太田 寛行（茨城大学農学部）
タイトル「インドネシア・火山噴火被災地での微生物生態調査」
書記：吉田 ゆか子（AA研）
- III 東アジア
会場：8階企画作業室（805）

座長： 窪田 順平（総合地球環境学研究所）
蓮井 和久（鹿児島大学大学院医歯学総合研究科）
情報提供講師：出雲 周二（鹿児島大学）
タイトル「中国福建省でHTLV-1 関連疾患を探る」
書記： 児倉 徳和（AA 研）

IV 南アジア・西アジア・中央アジア・北アフリカ

会場：3 階マルチメディア会議室（304）
座長： 近藤 信彰（AA 研）
錦田 愛子（AA 研）
情報提供講師：地田 徹朗（北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター）
タイトル「中央アジア・アラル海の過去・現在・未来」
書記： 野田 仁（AA 研）

V 北米・中南米

会場：2 階コモンルーム（203）
座長： 関 雄二（国立民族学博物館）
渡辺 己（AA 研）
情報提供講師：八木 百合子（国立民族学博物館）
タイトル「ペルーの社会状況と南高地における人類学的調査」
書記： 太田 信宏（AA 研）

VI 極地・北ユーラシア・ヨーロッパ

会場：4 階研修室（405）
座長： 藤田 耕史（名古屋大学大学院環境学研究所）
本山 秀明（国立極地研究所）
情報提供講師：渡辺 佑基（国立極地研究所）
タイトル「ペンギンとマグロとサメの最新科学」
書記： 山越 康裕（AA 研）

VII サハラ以南アフリカ 【報告】

会場：3 階マルチメディアセミナー室（306）
座長： 曾我 亨（弘前大学人文学部）
河合 香吏（AA 研）
情報提供講師：藤岡 悠一郎（東北大学学際科学フロンティア研究所）
タイトル「ナミビア北部における気象災害と農業」
書記： 佐久間 寛（AA 研）

17:30～19:30 情報交換会（事前申込制） 於 生協1階ホールダイニング

I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会

1. フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を 2016 年度中に 2 回（6 月 17 日（金）・2 月 12 日（日））実施し、2016 年度及び 2017 年度のフィールドサイエンス・コロキウム事業の運営に関わる企画・策定作業等を実施した。
2. 同運営委員会と同日開催でフィールドサイエンス・コロキウムの連続ワークショップを AA 研基幹研究人類学班「人類学におけるミクロ-マクロ系の連関」との共催により下記のように 2 回実施した。
 - 1) 「災害と／のフィールドワーク」日時：2016 年 6 月 17 日（金）開催
 - 2) 「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは（連続ワークショップ第 3 回）」日時：2017 年 2 月 12 日（日）開催

I-3.2.6 フィールドネット運営委員会

1. フィールドネット運営委員会を1回(2017年3月29日(水))開催し、フィールドネット事業の2016年度の活動を総括し、2017年度以降の活動方針を策定した。
2. 公募企画「フィールドネット・ラウンジ」2件を下記の通り開催した。
 - 1) ワークショップ「老い—「問題」として、「経験」として」日時：2016年12月4日(日)開催
 - 2) ワークショップ「「毒」のバイオグラフィー—学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える」日時：2017年1月21日(土)開催

I-3.2.7 編集専門委員会

2016年3月9日(水曜日)に編集専門委員会を開催した。『アジア・アフリカ言語文化研究』の原稿募集を完全電子化することが承認され、それに伴う執筆要項などの改正が認められた。『アジア・アフリカ言語文化研究』自体の電子出版化については、将来の検討課題とされた。なお2016年度においては予定どおり92、93号の2冊を発行した。

1. 2016年9月30日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』92号では、国内外より総数27件(うち論文24件、資料3件、国内19件、海外8件)の投稿があり、審査の結果、論文4件、資料1件を掲載した。
2. 2017年3月31日発行『アジア・アフリカ言語文化研究』93号では、国内外より総数32件(うち論文28件、資料4件、国内17件、海外15件)の投稿があり、審査の結果、論文5件、資料0件を掲載した。

I-3.2.8 国際諮問委員会

国際諮問委員会は、国際的な視点から共同利用・共同研究に関し、所長が必要と認める事項について所長の諮問に応じることを目的に、共同利用・共同研究拠点への移行に伴い2010年度より設置された。本委員会は本研究所の外国人研究員と所長・所員(国際交流担当)とで構成される。2016年度も、必要に応じて所長が委員との個別懇談を行い、研究所の研究等について意見交換を行ったものの、緊急に諮問を必要とするような案件はなかったことから、本委員会は開催されなかった。

I-3.2.9 海外拠点専門委員会

2017年3月30日(木)に第1回専門委員会を開催した。JaCMES, KKLO両拠点の2016年度の活動報告、2017年度活動計画を報告するとともに、現地情勢の変化と拠点の役割・機能の位置づけなどについて専門委員から助言・意見を受けた。

I-3.2.10 中東研究日本センター諮問委員会

2017年3月15日(水)に第1回中東研究日本センター(JaCMES)国際諮問委員会をJaCMESにて在レバノン3委員と黒木センター長、錦田准教授との計5人で開催した。

I-3.3 内部委員会等

I-3.3.1 企画運営委員会

企画運営委員会は原則として月に一度、教授会に先立つ1週間前に開催され、教授会に提出される諸々の案件に関し、所内規程に基づき原案を審議するほか、必要に応じて原案作成を行なう。委員会の構成メンバーは言語学、歴史学、民族学の3分野からの選出委員各1名、情報資源利用研究センター長、フィールドサイエ

ンス研究企画センター長、研究戦略策定委員会委員長、副所長および所長である。委員会の議長は所長が務める。

2016年度も従来と同様、適宜委員会のメーリングリストを通じた審議を行ったが、企画運営委員会のこうした審議は、教授会における論点の明確化と整理、さらには会議時間の短縮に大いに貢献している。また、2009年度からは3分野からの選出委員3名を共同利用委員会・共同研究専門委員会（2010年度以降は共同研究専門委員会）の所内委員としている。さらに2010年度からは同じく選出委員3名を運営委員会の所内委員に充て、企画運営委員会による研究所の重要事業への関与を強化している。こうした体制のもと、2016年度の企画運営委員会も本研究所の共同利用・共同研究拠点としての機能強化に向けて積極的に取り組んだ。

I-3.3.2 研究戦略策定委員会

自己評価委員会と将来計画検討委員会が改組され、2015年度より新たに研究戦略策定委員会が発足した。

年次計画の策定

平成29（2017）年度計画（素案）の策定を行った。

年次報告書の作成

年度初めに、2センター、各共同研究課題などが過年度の実績報告を提出し、共同研究については外部委員会の評価を受け、所内業務等については担当責任者が達成度を自己申告し、それらに基づいて過年度の年次報告書を作成した。

経年教授業績の外部評価

2015年度は、経年教授業績の外部評価に該当する教授がいなかったため、これを実施しなかった。

東京外国語大学点検・評価室への所員の研究・教育業績の報告

所員に大学情報データベースへの個人研究事業等の入力を要請し、年次報告書作成のためのデータを収集するとともに、全学の教育研究活動に関するデータ収集に協力した。また全学点検・評価室の活動には澤田英夫所員が室員として参加した。

I-3.3.3 文献資料（図書）担当

2016年度の事業計画は以下のとおりだった。

1. 雑誌類の購入・整備（継続・新規）を行う。
2. 研究所として揃えるべき基本資料の充実をはかる。
3. 雑誌の整理作業を継続する。
4. カビ対策を含む、図書の適正な維持・管理を行う。
5. 修理製本対象文献の修理を行う。
6. マイクロフィルムの劣化対策を行う。

2016年度に下記の事業を行った。

1. 雑誌類について、従来からの継続分の購入・整備を行った。
2. 貴重書、辞典類、参考図書を中心に基本資料を拡充した。
3. 雑誌の配架整理（製本を含む）を行った。
4. 除湿器の稼働、除湿剤の交換等により図書を適正に維持・管理した。
5. 修理製本対象文献の修理を行った。
6. マイクロ室所蔵マイクロフィルムを適宜チェックした。

I-3.3.4 国際交流担当

1. 2016年度着任の外国人研究員の受入れにあたりガイダンス等を行った。
2. 2017年度（2017年9月以降）着任予定の外国人研究員の募集を行い、6名を候補者として選考した。この候補者6名は2017年3月9日開催の教授会において承認された。

3. AA 研フォーラムを企画・開催した。詳細は [I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施](#) の項を参照。

I-3.3.5 出版担当

2016 年度の活動計画

1. 下記のように、年 3 回、共同研究プロジェクト、ユニット研究、外国人研究員招請に基づく研究成果を募集し、紙媒体として印刷・刊行すると共に、電子的に複製・翻刻し保存する。
 - ・ 2016 年 4 月末日：第 1 回原稿募集締め切り
 - ・ 2016 年 7 月末日：第 2 回原稿募集締め切り
 - ・ 2016 年 10 月末日：第 3 回原稿募集締め切り
2. AA 研の出版物リストの更新と電子的公開の作業を進める。

2016 年度の活動実績

1. 刊行物一覧については、資料編 [II-4.4.1 出版](#) の項を参照のこと。
資料編 [II-4.4.1](#) にあるように、共同研究プロジェクト、外国人研究員招請に基づく研究成果等、25 点を刊行した。また既刊行物を電子的に複製し、保存・公開を進めた。
「AA 研 出版物目録 2016」の刊行にあたって
「AA 研 出版物目録」の紙媒体は「AA 研要覧 2016」に挿入刊行するとともに、下記 URL にて公開した。
<http://www.aa.tufs.ac.jp/documents/publ/ILCAApubl2016.pdf>
2. 既刊行物の電子的公開について
既に刊行された共同研究成果物等について、著作権者の許諾を得て、新たに 6 点を以下の URL にて公開した。
<http://repository.tufs.ac.jp/handle/10108/4>
3. 2016 年度出版刊行ルールについて
AA 研の予算による出版物に関する「2016 年度出版刊行ルール」の主な内容は以下の通りである。
 - ・ 基礎語彙集は電子出版を原則とする。
 - ・ 基礎語彙集は一般公募とし、応募にあたっては、在職中の任期つきでない所員を通じて行う。
 - ・ 応募された原稿は二名以上の査読者によって査読し、出版の可否を判断する。
 - ・ 原稿は、東京外国語大学図書館成果公開コレクション（リポジトリ）を通して電子的に公開する。同時に紙媒体による出版を希望する場合、装丁は原則としてペーパーバックとする。
 - ・ 共同利用・共同研究課題出版物の刊行については、応募資格者を原則として常勤所員および任期つき所員としたが、離任した者も可能とした。
4. 電子出版について
既に本学リポジトリを通じて、新規刊行物および一部の既刊行物の電子的公開を行っているが、2015 年 12 月から試験的運用を開始した電子書籍の出版プロセスの再検討を行った。
2016 年度からは言語研修のテキストも電子出版として公開し、これまで合計 14 点の電子出版物を公開した。
<https://publication.aa-ken.jp/>
電子書籍は、従来の出版と同様の水準の書籍としての品質を維持し、独自の ISBN の付与を行う。公開は当面 PDF 形式に限り、改変不能にプロテクトをかけた上で、検索やテキストのコピーは自由な形式で公開している。なお、2016 年 2 月の本学学術成果に関するオープンアクセス宣言に従い、従来の「出版物の電子的複製・公衆送信に関する許諾」を、今後はクリエイティブ・コモンズの CC-BY ライセンスを原則付与することにする方向で、著作権許諾のあり方の見直しを開始した。

I-3.3.6 基礎データ担当

2016 年度の基礎データ担当の活動は下記の通りである。

要覧

1. 2016 年度の要覧（和英対訳版）を編集，刊行した。運営委員会からの要望に基づき，AA 研が行っている研究活動の広範さを視覚的にわかりやすく示すために，共同利用・共同研究課題が対象とする地域を世界地図上にマッピングした図を新たに作成した。
2. 要覧付録の関連資料について，日本語版及び英語版を編集，刊行した。
3. 要覧付属の出版物目録について，2015 年度刊行分を中心に校正を行った。

ウェブサイト

4. 2016 年度要覧の内容をウェブサイト（和文及び英文）にフィードバックする作業を行った。
5. ウェブサイトの更新に際して，正確さを期すためにテストページを活用した。

年次報告書の編集

2016 年度年次報告書の作成に際して協力を行った。

I-3.3.7 広報企画担当

2016 年度も昨年度同様，広報活動のうち『FIELDPLUS』の企画・編集および企画展実施を広報企画担当が行った。

2016 年度の事業の詳細は下記の通りである。

• 『FIELDPLUS』

AA 研の雑誌『FIELDPLUS』の企画・編集を行った。この雑誌は，言語学，人類学，歴史学・地域研究を専門とする AA 研の所員や特任研究員，研究機関研究員，共同利用・共同研究課題とともに運営する共同研究員をはじめ，各アカデミズムで活躍する新しい発想をもった研究者などを執筆陣に迎え，研究の最前線を一般向けにわかりやすく伝えていこうという趣旨の雑誌である。所員 8 名を中心に構成される編集部が企画・編集を担当し，プロの編集者とグラフィックデザイナーと協力して誌面作りを行っている。2016 年度は第 16 号（巻頭特集「イスラームに基づく商品とサービスの多様性」），第 17 号（巻頭特集「チベット牧畜民の「今」を記録する」）を制作した。

また，第 15 号（2016 年 1 月発行）と第 17 号の巻頭特集にそれぞれ関連して，カフェで執筆者を囲むトークイベントを以下のように実施した。

「人間とコンピュータの関係性を探る—現代将棋における棋士とソフトの相互作用をめぐって」
（第 15 号巻頭特集「ひとと「もの」の関係性を探る」関連イベント）

ゲスト：久保明教（一橋大学）

司会：高松洋一（AA 研所員）

日時：2016 年 7 月 7 日（木）午後 7 時～8 時 30 分（開場午後 6 時 30 分）

会場：カフェ 6 次元 東京都杉並区上荻 1-10-3

『チベット牧畜民の一日』解説付き上映（第 17 号巻頭特集関連イベント）

ゲスト：別所裕介（京都大学），海老原志穂（AA 研ジュニア・フェロー），
ナムタルジャ（滋賀県立大学），星泉（AA 研所員）

司会：高松洋一（AA 研所員）

日時：2017 年 1 月 18 日（水）午後 7 時～8 時 30 分（開場午後 6 時 30 分）

会場：サロンド富山房 FOLIO 東京都千代田区神田神保町 1-3 富山房ビル B1

共催：AA 研共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学” の構築：青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」，基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」

• 企画展

AA 研において行われているアジア・アフリカの言語と文化に関する研究の成果を広く一般に公開するために，以下の企画展を実施した。

特別展示「50 年ぶりによみがえるアイヌ語の世界：アイヌ語学者 故田村すゞ子氏の遺した川村カ子ト主催「ユーカラ大会」の記録～」

会期： 2016年8月6日(土)～2017年1月31日(火)
(午前9時より午後5時まで。ただし、8月6日のみ午後1時より開場)
会場： 川村カ子トアイヌ記念館 北海道旭川市北門町11 <http://k-aynu-mh.jp/>
共催： 川村カ子トアイヌ記念館
AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
後援等： 川村カ子トアイヌ記念館開館100周年記念事業びりかうれしか実行委員会, 旭川アイヌ協議会,
旭川チカップニアイヌ文化保存会

ポスター展示「世界の言語で読む Le Petit Prince」

会期： 2016年11月19日(土)～11月23日(水) (午前10時より午後5時まで)
会場： 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 3階大会議室
共催： 東京外国語大学風間伸次郎ゼミ
AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
後援等： 日本言語学会

大瀬二郎写真展「遙かなる地へ思いを馳せて」

会期： 2016年12月5日(月)～2017年1月20日(金)
(午前10時より午後5時まで, 土日・祝祭日及び12月29日～1月3日の年末年始は休場)
会場： 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 1階資料展示室
協力： AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」

企画展「チベット牧畜民の仕事展」

会期： 2017年2月13日(月)～3月11日(土) (午前10時より午後5時まで)
会場： 東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 1階資料展示室
協力： AA 研共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるミクロ連環系の科学”の構築：青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
共催： AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」,
科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者：星泉 (AA 研所員), 課題番号：15H03203)

I-4 研究者コミュニティと一般社会とに関わられた研究プラットフォームの構築

I-4.1 若手研究者養成プログラム

I-4.1.1 言語研修の実施

【実施の詳細については、資料編 [II-4.1.1 言語研修の実施状況](#)、[II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業](#)の項をそれぞれ参照】

言語研修は1962年から実施されてきた短期集中プログラムである。これまで実施した言語はのべ135言語、修了者数は述べ1,237人である。当研究所以外では扱うことのできない希少言語の運用能力・知識を身につける機会を提供することは、国内外に関わられた共同利用・共同研究拠点として行う研究者養成事業として意義あるものといえる。2016年度は、琉球語（東京会場）、ヒンディー語（大阪会場）の講座を開講した。

研修担当では、過去の研修教材のウェブ上での公開も進めている。

I-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ

フィールド言語学ワークショップは、研究の進んでいない言語のドキュメンテーションと記述に必要なスキルを主として実習形式で学ぶ機会を提供するものである。次世代研究者育成の一環として、主に大学院生・ポスドクなどの若手研究者を対象に開催しており、日本の大学では、通常教えられていない内容を扱っているという点で、AA研の重要な事業の一つであるといえる。

次の2種類のワークショップを提供している。

1. 文法研究ワークショップ

フィールド調査で得る言語データに現れる、さまざまな文法事象に関して若手研究者が研究発表を行い議論を行うワークショップである。

2. テクニカル・ワークショップ

若手研究者が、フィールドで得た言語データの管理や加工に関するスキルを実習形式で学ぶワークショップである。

I-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー

2005年度から始まった中東イスラーム研究教育プロジェクトの一環として、AA研が推進してきた事業を、2010年度より基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」が担うに当たり、「中東」と「イスラーム」とをより明確に区別すべく、「中東☆イスラーム研究セミナー」「同教育セミナー」と改称した。中東もしくはイスラーム世界に知的・学問的関心を持ち、調査・研究を進めようとしている若手研究者（大学院生以上）を対象に、この研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げ、問題意識にあふれた研究発表を通して研究会などにおけるプレゼンテーションやディスカッションのスキルを向上させることを目的としている。人文・社会科学分野が中心になるが、受講者の専門分野は特に限定していない。

中東☆イスラーム教育セミナーは大学院生を対象に、AA研スタッフと招聘講師による講義、そして希望者による研究発表から構成されている。学部段階からこの研究領域に関心を持ち続けてきた院生はもとより、専門分野の基礎はできているが中東やイスラームにそれほど深い知識を持たない院生も受け入れ、中東・イスラーム世界とさまざまな専門分野の基礎的な知識の提供、そして受講者の間の討論を通じた意見・知識の交換の場を作ることを目指している。年に1回の開催は従来通りである。

中東☆イスラーム研究セミナーは、それよりも一段高度なレベルの研究者、すなわち大学院博士課程後期(博

士課程) および博士論文の準備をしている若手研究者を対象にしている。ここでは講義は行わず、共同研究プロジェクト型の研究会形式を採用し、研究発表とそれに基づく質疑応答・討論に十分な時間を確保した機会を提供する。これを通して博士論文執筆のヒントを得たり、異なる研究分野や地域の研究者との意見交換から知識の幅を拡充したりすることが期待される。教育セミナーと同様、年に1回の開催である。

2016年度においては、研究セミナーが12月16～18日に実施され、4名の受講生が参加した。教育セミナーは9月18～21日に実施され、6名の教員の報告と、21名の受講者中7名の発表がなされた。詳細に関しては基幹研究「中東・イスラーム圏」のウェブサイトを参照していただきたい。そこには、受講生の感想・評価も掲載されている。なお、2006年度より東京外国語大学大学院在学中の院生を対象に両セミナーを単位認定可能な科目として開放しているが、本年度は教育セミナー受講生の5名がこれに該当した。

また、これら「研究セミナー」「教育セミナー」とは別に、オスマン帝国史研究を専門とする若手研究者を中心とした研究者コミュニティに対する還元事業の一環として、2008年度以来毎年1回2日間にわたってオスマン文書の解読・解説を行う実習型の「オスマン文書セミナー」を開催している。毎回高松洋一准教授が中心となって組織しているが、2016年度も2013年度以来引き続き秋葉淳・共同研究員の協力も得て、1月7・8日に開催し、のべ43名の参加を得た。【日程や詳細については資料編 [II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況](#)の項を参照】

I-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー

2010年度から始まった基幹研究「人類学におけるミクローマクロ系の連関」における若手研究者育成事業として新たに文化／社会人類学研究セミナーを企画し、2011年度から実施した。文化人類学／社会人類学／生態人類学を専門とする博士後期課程大学院生を主たる対象とし、博士論文を執筆するために必要な本研究領域に関する最新の学問的情報を提供して知識の幅を広げると共に、所属大学院とは異なる発表の場を提供することにより論文構想を具体化させることを目的としている。また、本研究セミナーは、受講生が同じレベルの若手研究者の発表を聴き、第三のコメンテーターの役割を果たすことによる自らの論文執筆および研究の活性化、さらには所属大学院をこえた若手研究者同士の交流の機会の提供をも目指している。2015年度からは、日本文化人類学会の「次世代育成セミナー」との共催で実施している。

2016年度は11月6日に開催された。松田素二氏(京都大学)と小田亮氏(首都大学東京)によるトーク・セッションの後、学会員5名による発表と所員5名を含む10名によるコメントが行われた。参加者の合計は41名(内外国人2名)であり、フロアからの質疑も活発であった。

【日程や詳細については資料編 [II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー](#)の項を参照】

I-4.1.5 短期共同研究員(公募)の受け入れ

短期共同研究員制度は、若手研究者を公募して本研究所に一定期間滞在させ、所員と共同で、あるいは所員の指導のもとに研究を遂行させるもので、共同利用のひとつの有効なあり方として、全国共同利用研究所時代から長く維持されてきた。2013年度より、応募状況が低調であり、2015年度には短期共同研究員への応募が1名のみであった。背景には、COE制度など、各大学・大学院における研究者受け入れ制度が拡充されてきたことに加えて、AA研のジュニア・フェロー制度、若手研究者研修制度など、他の関連制度との差異が見えにくいこと、共同利用・共同研究拠点として課題への応募件数の増加が求められていることから、2016年度も応募が無く、今年度をもって応募は停止した。

I-4.1.6 大学院教育の現在

従来、AA研は東京外国語大学博士後期課程のみに原則として関与し、1研究科1専攻体制のもと、AA研コースが学内措置として認められていた。2009年度の東京外国語大学大学院の重点化により、総合国際学研究科が発足し、2専攻(言語文化専攻・国際社会専攻)体制へと移行すると同時に、大学院博士後期課程を兼担するAA研教員はどちらかの専攻に所属することとなった。

この改組にともない、大学院博士後期課程を兼担するAA研教員は、院生を指導するほか、総合国際学研究科教授会に出席し、教務の一部のみに参与することとなった。博士後期課程の在学者あるいは志願者で、AA

研教員を主指導教員に希望する者はきわめて少ないのが現状である。AA 研所員の大学院教育に対する関与のあり方としては、個別の院生指導を行うだけでなく、本学大学院の教育の在り方と併せて、AA 研がこれまで実施してきた下記の若手研究者育成事業の総体として考えてきた。

- ・ 言語研修
- ・ フィールド言語学ワークショップ：研修事業の一環として基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」が主催する文法研究ワークショップ，テクニカル・ワークショップ
- ・ 中東・イスラーム関連セミナー：中東☆イスラーム研究セミナー，中東☆イスラーム教育セミナー，ベイルート若手研究者報告会，オスマン文書セミナーなど
- ・ 文化／社会人類学研究セミナー

学内外の要請を受けて、AA 研は5年一貫制の大学院教育を行うことを決定し、その前段階として、平成28年度より本学大学院の博士前期課程にアジア・アフリカフィールドサイエンスプログラムを設けた。なお、本プログラムの内容を紹介するための学部生向けリレー講義「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」を春学期に開講した。

I-4.1.7 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

研究機関研究員（旧称：非常勤研究員）および特任研究員は、各自の研究テーマに沿った個人研究を行うとともに、その専門分野に応じて、異なる所内組織の共同研究活動に配属され参加している。これらはAA 研の若手研究者養成事業の重要な一部であり、両センターと文部科学省特別経費による「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」、4つの基幹研究のほか、広報担当にも配置されてきた。2016年度は特任研究員7名、研究機関研究員2名の体制により、所内組織の多様な共同研究活動に参画させた。

また、2016年度には日本学術振興会特別研究員5名を受け入れた。【研究機関研究員、特任研究員、日本学術振興会特別研究員の業績については [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#)の研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員の項を参照】

I-4.2 国内連携研究活動

I-4.2.1 国内研究者受け入れ（フェロー等）

共同利用・共同研究拠点としてのAA 研は、フェロー制度をいっそう充実させて国内外の研究者に開かれた研究の場を提供すると共に、研究プロジェクトの推進を図る方針である。

2016年度は、下記の国内研究者をフェローとして17名、ジュニア・フェローとして15名受け入れた。

【詳細・業績は資料編 [II-4.2.1 国内研究者の受け入れ（フェロー等）](#)の項を参照】

フェロー

梅川 通久（うめかわ みちひさ）

研究主題：定量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間：2015.9.1～2018.8.31

受入教員：中山 俊秀

岡崎 彰（おかざき あきら）

研究主題：アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：深澤 秀夫

奥田 統己（おくだ おさみ）

研究主題：アイヌ語資料のアーカイブ化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：山越 康裕

押川 文子 (おしかわ ふみこ)

研究主題：現代インドの社会変化

研究期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：太田 信宏

小副川 琢 (おそえがわ たく)

研究主題：現代レバノン・シリア関係の展開

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

加藤 博 (かとう ひろし)

研究主題：近現代におけるエジプト社会経済変容

研究期間：2014.4.1～ 2017.3.31

受入教員：黒木 英充

川上 泰徳 (かわかみ やすのり)

研究主題：ペイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間：2015.4.1～ 2017.3.31

受入教員：飯塚 正人

姜 英淑 (カン ヨンサク KANG, Youngsuk)

研究主題：韓国語諸方言におけるアクセントの記述及び理論研究

研究期間：2016.4.1～ 2017.3.31

受入教員：伊藤 智ゆき

木俣 美樹男 (きまた みきお)

研究主題：インド亜大陸の雑穀農耕文化の起源と展開過程

研究期間：2014.4.1～ 2017.3.31

受入教員：太田 信宏

栗林 均 (くりばやし ひとし)

研究主題：伝統的モンゴル語文献資料の電子化利用に関する研究

研究期間：2013.4.1～ 2017.3.31

受入教員：町田 和彦

古谷 伸子 (こや のぶこ)

研究主題：タイにおける民間治療師実践の変容と医療システムの再編に関する研究

研究期間：2014.5.1～ 2017.4.30

受入教員：西井 涼子

佐藤 久美子 (さとう くみこ)

研究主題：トルコ語と日本語諸方言のイントネーション研究—意味論・統語論との相互作用の仕組みの解明に向けて

研究期間：2016.4.1～ 2019.3.31

受入教員：児倉 徳和

佐藤 大和 (さとう ひろかず)

研究主題：日本語と東南アジア諸言語における超分節的特性とその動態に関する研究

研究期間：2012.4.1～ 2017.3.31

受入教員：峰岸 真琴

清水 昭俊 (しみず あきとし)

研究主題：戦時期・戦後期の日本の人類学 (民族学・文化人類学)

研究期間：2015.11.5～ 2018.11.4

受入教員：宮崎 恒二

新谷 忠彦 (しんたに ただひこ)

研究主題：言語資料による大陸部東南アジアの歴史の解明

研究期間：2016.4.1～2018.3.31

受入教員：澤田 英夫

福島 康博 (ふくしま やすひろ)

研究主題：マレーシアにおけるイスラーム金融のイスラーム性に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：床呂 郁哉

細谷 幸子 (ほそや さちこ)

研究主題：イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶：障害者の生きる権利をめぐる

研究期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：飯塚 正人

ジュニア・フェロー

新谷 崇 (あらや たかし)

研究主題：イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題(1935～1941年)

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：石川 博樹

池田 昭光 (いけだ あきみつ)

研究主題：レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

海老原 志穂 (えびはら しほ)

研究主題：現代方言と文献を用いたチベット語の比較研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：星 泉

大島 一 (おおしま はじめ)

研究主題：ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：塩原 朝子

大塚 行誠 (おおつか こうせい)

研究主題：ミャンマーおよびインド北東部におけるクキ・チン諸語の研究

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：澤田 英夫

小山内 優子 (おさない ゆうこ)

研究主題：『捷解新語』の日朝対照言語学的研究

研究期間：2016.4.1～2017.1.31

受入教員：伊藤 智ゆき

勝畑 冬実 (かつはた ふゆみ)

研究主題：エジプトにおける近現代イスラーム改革思想の展開～「シャリーアの意図」概念を中心に～

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：飯塚 正人

加藤 敦典 (かとう あつふみ)

研究主題：ベトナムにおける高齢者ケアの思想・制度・実践についての文化人類学的研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：栗原 浩英

栗田 知宏 (くりた とみひろ)

研究主題：東アフリカ系ブリティッシュ・エイジアンのエスニック・アイデンティティに関する調査研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：椎野 若菜

小池 まり子 (こいけ まりこ)

研究主題：現代バリの社会・宗教改革運動ーバリヒンドゥー教徒の親族集団組織を事例としてー

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：西井 涼子

小林 貴之 (こばやし たかゆき)

研究主題：東アジアにおける社会集団の構造と対人関係に関する比較

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：深澤 秀夫

四條 真也 (しじょう まさや)

研究主題：島嶼地域における伝統の再解釈ー米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する社会人類学的研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：深澤 秀夫

澁谷 俊樹 (しぶや としき)

研究主題：ベンガルの民衆文化をめぐる地域研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：太田 信宏

竹村 和朗 (たけむら かずあき)

研究主題：現代エジプトのワクフに関する国家法 (カーヌーン) の研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：近藤 信彰

西村 (西野) 範子 (にしむら (にしの) のりこ)

研究主題：ベトナムの国際社会参画時代における内政と対中国関係の変動

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：栗原 浩英

I-4.2.2 海外調査専門委員会の活動

[I-3.2.4 海外調査専門委員会](#)の項を参照

I-4.2.3 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会の活動

[I-3.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会](#)の項を参照

I-4.2.4 フィールドネット運営委員会の活動

[I-3.2.6 フィールドネット運営委員会](#)の項を参照

I-4.2.5 四大学連合文化講演会

2016年10月28日(金)、第11回四大学連合文化講演会が「環境・社会・人間における『安全・安心』を探るー安全で安心の出来る社会～学術研究の最前線をやさしく解説する～」をテーマに、一橋講堂 学術総合

センターにて開催された。今回世話役として同講演会の組織にあたったのは東京工業大学科学技術創成研究院未来産業技術研究所である。

AA 研からは「宗教が紛争を生み出すとき —南アジアのムスリム・ヒンドゥー教徒の関係から」と題して外川昌彦所員が講演を行った。本年度も昨年同様、日本経済新聞を通して広報を行い、213名（申込数445）の聴衆を集め、好評のうちに幕を閉じた。2017年度は東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所が世話役となって、引き続き「安全と安心」をテーマに文化講演会を行う予定である。

I-4.2.6 地域研究コンソーシアム

地域研究コンソーシアムは、世界諸地域の研究に関わる研究組織、教育組織、学会、さらには地域研究と密接に関わる民間組織などから成る、新しい型の組織連携で、多くの大学や研究機関などに散らばっていた地域研究の組織や研究者の団体をつなぎ、組織の枠を超えた情報交換や研究活動を進めるため、2004年4月に発足した。AA 研は北海道大学スラブ研究センター（当時）、京都大学東南アジア研究所（当時）、国立民族学博物館地域研究企画交流センター（当時）とともに拠点組織としてコンソーシアムの設立に貢献しただけでなく、2015年12月現在99の組織が加盟するに至ったコンソーシアムの幹事組織の一つであり、石川・錦田の両所員が運営委員、飯塚所長が理事の要職を務めて、組織運営の中心的役割を担っている。2016年度は運営委員会4回、理事会3回が開催され、コンソーシアムの発足以来事務局を担当してきた京都大学地域研究統合情報センター（旧国立民族学博物館地域研究企画交流センター）の東南アジア研究所との統合にともなう運営体制および活動内容の見直しを中心に議論を重ねた一方、京都大学で開かれた年次集会初日の一般公開シンポジウム「2050年の世界と日本—地域研究の推進体制」に飯塚所長、二日目のワークショップ「地域研究の底力—現場から考える」に石川所員がそれぞれ登壇して、地域研究の将来構想に寄与した。

I-4.3 国際研究連携活動

I-4.3.1 国際シンポジウム・ワークショップ・セミナー等

AA 研は、国際的高水準にある所内共同研究の成果を国内外に発信し、海外の研究成果を迅速に取り入れ、あるいは重要な学術的課題や社会的要請の強いテーマに関する国際共同研究の場を創出することを目的として、海外の研究者を招聘する国際シンポジウム、ワークショップ、公開講演会等を積極的に開催している。2016年度においても、国際シンポジウム、国際ワークショップ、公開講演会のいずれも、著名な研究者の講演に多数の参加者を得て活発な討論を行った。【詳細は資料編 [II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧](#)の項を参照】

これら国際研究連携を目指す研究・教育活動の成果は、AA 研の刊行している『アジア・アフリカ言語文化研究』や、プロジェクト出版物等の形で順次公刊している。

I-4.3.2 海外研究拠点

[I-2.4.2 フィールドサイエンス研究企画センター](#)の項を参照

I-4.3.3 外国人研究員招聘

2016年4月から2017年3月までの期間、以下の7名を招聘した。【業績は [I-2.6.2 所員の研究業績一覧](#)の外国人研究員の項を参照】

SONG, Huaqiang ソウ, カキョウ

中華人民共和国 People's Republic of China

滞在期間：2015.9.14～2016.7.31

研究課題主題： 里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）；秦

簡の言語学的研究

JUKES, Anthony Robert ジュークス, アンソニー・ロバート

オーストラリア連邦 Commonwealth of Australia

滞在期間：2016.2.1～2016.7.31

研究課題主題： インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築；インドネシア近辺の少数言語ドキュメンテーションのための教材開発

Tun Aung Kyaw トウン アウン チョー

ミャンマー連邦共和国 Republic of the Union of Myanmar

滞在期間：2016.9.1～2017.7.31

研究課題主題： 現代口語ビルマ語の新しい参照文法書の編集

RAHAYU, Yosephin Apriastuti ラハユ, ヨセフィン アプリアストウティ

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間：2016.10.1～2017.8.31

研究課題主題： ウッタラカンダ：ムラピ・ムルバブコレクション所蔵の古ジャワ語韻文

RIESTER, Arndt リースター, アーント

ドイツ連邦共和国 Federal Republic of Germany

滞在期間：2017.2.1～2017.5.31

研究課題主題： QUD (Question under Discussion) システムを用いた談話構造・情報構造に関するアノテーション付与

ARKA, I Wayan アルカ, イ ワヤン

インドネシア共和国 Republic of Indonesia

滞在期間：2017.3.1～2017.6.30

研究課題主題： 東部インドネシアのオーストロネシア諸語とパプア諸語

LOMO MYAZHIOM, Aggee Celestin ロモ ミヤジウム, アジェ ケレスタン

フランス共和国 French Republic

滞在期間：2017.2.1～2017.8.31

研究課題主題： アフリカの身体, 西欧的視点：「ユーラフリカ」とパン・アフリカニズムの間の支配, 抵抗, 同一性

I-4.3.4 外国研究者受け入れ（フェロー等）

2016年度は次の外国研究者のうち、1名をフェローとして、また3名をジュニア・フェローとして受け入れた。【詳細は、資料編 [II-4.3.3 外国研究者受け入れ（フェロー等）](#) を参照】

フェロー

デュセンアイルアブディラシム 杜山那里 阿不都拉西木

所属：中国・中央民族大学哈薩（薩）克語（語）言文学系・准教授

研究主題： カザフ・ハン国文書に関する研究 Socialism in the Age of Empire: The Japanese Left and the Russian Revolution (1905-1925)

研究期間：2016.12.27.～2017.12.27.

受入教員：野田 仁

ジュニア・フェロー

アレズ ファクレジャハニ FAKHREJAHANI, Arezoo

研究主題：イランと中東他国との関係, そして, 相違

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：飯塚 正人

烏雲高娃 Wuyungaowa

研究主題： 近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間： 2016.4.1.～2017.3.31.

受入教員： 中見 立夫

ジュクトルジャ 周 太加

研究主題： 青海近代史—アムドにおけるチベット人の文化活動を手掛かりとして

研究期間： 2015.4.1.～2017.3.31.

受入教員： 星 泉

共同利用・共同研究拠点としての AA 研は、国際的な共同研究拠点として更なる充実を目指しており、外国人フェロー、ジュニア・フェローや短期招聘研究者を通して、国際共同研究をいっそう発展させてゆく必要がある。

その点において本年度は、おおむねその目的を達成したと考えられる。

I-4.3.5 海外学術機関との研究協力協定

オランダ王立言語・地理・民族学研究所 (KITLV) Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies

2014 年に AA 研との間で学術協力に関する協定を締結し、ジャワ文書研究等を中心とするインドネシア研究の共同研究を進めている。2016 年度には共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2):ジャワのイスラーム化再考」において KITLV 所属の Willem van der Molen 博士を共同研究員に迎え共同研究を行った。また、Willem van der Molen 博士は 2016 年度言語研修「古ジャワ語」フォローアップミーティングの講師も務めた。

アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学 Atma Jaya Catholic University of Indonesia

共同編集による学術雑誌 NUSA の第 60 号を 2016 年 3 月付で刊行した。編集委員会は東京外国語大学(AA 研所属も含む) 3 名, AA 研共同研究員 4 名, アトマ・ジャヤ・インドネシア・カソリック大学教員 4 名他からなる。また、インドネシアのヌサ・チュンダナ大学(クーパーン) で AA 研が主催した言語ドキュメンテーションに関する国際ワークショップにアトマ・ジャヤ大学の教員 Yanti 氏を招聘し講師を依頼するなどして研究交流を行った。

インドネシア科学院社会文化研究センター(PMB-LIPI) Pusat Penelitian Kemasyarakatan dan Kebudayaan

PMB-LIPI に所属する Katubi 研究員が共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」の共同研究員を務め、共同研究を行った。

ゾンカ語発展委員会 (DDC) the Dzongkha Development Commission

2013 年 8 月に DDC と AA 研との間で学術協力に関する申し合わせ覚書 (MoU) を取り交わした。2016 年度には実質的な共同研究活動は実施されなかったが、ゾンカ語発展委員会が 2011 年に出版したゾンカ語・英語辞典をもとにした電子辞典を町田和彦所員が中心となって開発し、現在 IRC のサーバを利用して公開中である。<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

レバノン大学人文科学部第 1 部 (FHS-I-LU) Faculty of Human Sciences, Branch I Lebanese University

同大学教授 Massoud Daher 博士からは、JaCMES 諮問委員の一人として JaCMES の活動全般についての助言を受け、他の同大学教授らと交えた非公式の懇談会の場でも研究活動全般に関して情報と助言を受けた。

ベイルート・アメリカン大学 American University of Beirut (AUB)

同大学教授 Abdul-Rahim Abu-Husayn 教授には JaCMES 諮問委員を委嘱し、JaCMES の活動全般についての助言を受けた。

サバ開発研究所 (IDS) Institute For Development Studies (SABAH)

サバ開発研究所 (IDS) との MoU に基づき設置されたコタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO) の主催により日本人研究者による現地講演会 2 件、ならびに日本人とマレーシア人研究者らによる国際ワークショ

ップ 1 件と交換講演会 1 件をコタキナバルで実施した。<http://www.ids.org.my/current/index.htm>

オーストリア科学アカデミー (AAS) Austrian Academy of Sciences

ダルマキールティの『プラマーナ・ヴィニシュチャヤ』第 1 章・第 2 章・第 3 章のサンスクリット校訂テキストの KWIC 索引を完成させ、Keyword In Context Index to Dharmakīrti's Pramā avinīscaya として 2015 年度に AA 研から電子出版を行った。<http://www.oaaw.ac.at/>

高等コンピューティング開発センター (インド) Indian Statistical Institute, Kolkata

2017 年 3 月末をもって協定を終了した。ヒンディー語の形態素解析および動詞句解析システムが IRC のサーバを利用して公開中である。<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/08.html>

I-4.3.6 研究未開発言語文化の調査事業

アジア・アフリカを中心とした言語態、地域生成、文化の伝承と形成に関する基礎研究を推進する為に、研究者をアジア・アフリカの各地に派遣し、研究未開発言語文化の研究資源化を推進するとともに、現地研究機関との共同研究体制を整備することを目的とする事業であった「助手投入制度」を見直し、2005 年度からそれを発展的に継承した事業である。派遣対象を助手（現助教）に限定せず、所員、研究機関研究員、共同研究員等へと拡大し、研究所の事業計画に基づき柔軟に対応できる態勢にして、2009 年度には 4 名を海外調査に派遣した。2011 年度からは「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」と「言語ダイナミクス科学研究プロジェクト」の活動の一環としての共同利用・共同研究課題遂行を目的とした共同研究員の派遣の二者に特化して実施することになった。2016 年度には「言語研修のための資料収集を目的とした派遣」に関して 1 名の派遣を実施した。【派遣実施の詳細については、資料編 [II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業](#)の項を参照】

I-4.3.7 その他外部資金による国際連携研究

実施の詳細については [I-2.7.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」](#) および [I-2.7.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」](#)の項を参照

I-4.4 研究成果の国内外への公開

I-4.4.1 AA 研フォーラムの実施

本研究所では設立以来、所員および外国人客員研究員がそれぞれの研究成果を口頭で発表する「所内研究会」を開催してきた。その目的は、所員・客員研究員の個人研究に関する所内での相互理解を深め、新たな共同研究の芽を育てていくこと、また質疑応答を通じて研究の一層の深化・発展を図ることにあった。2003 年度には研究所改革の一環として、名称を所内研究会から AA 研フォーラムに変更した。発表者を非常勤研究員、内地留学者、フェロー、短期訪問者などにも広げる一方、フォーラム自体を所外に開放し、公開性を高めて今日に至っている。また、2011 年度からの新しい試みとして、複数の所員が最新の自身の研究成果および知見を他分野の研究者にもわかりやすい形で紹介する企画も行っている。本年度は所員 9 名、所外の研究者 2 名（言語研修の一環としてのフォーラムでの講演）、その他 2 名（言語研修の一環としてのフォーラムでの講演）で、計 8 回のフォーラムを開催した。【詳細は、資料編 [II-4.2.4 シンポジウム等](#)の項を参照。12 月に開催した AA 研フォーラム・全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」に関しては同じく資料編 [II-3.3.1](#)を参照】

I-4.4.2 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

グローバル化の進展やアジアの著しい経済成長、またアジア・アフリカにおける民族・宗教対立の深刻化など、社会環境や国際情勢の変化にともなって、本研究所の研究蓄積の公開に対して一般社会から寄せられる期待は、年々高まっている。このような期待に応えるために、2016年度も、学会、法務省や警察庁などの各種官公庁、府中市、調布市等の主催する公開セミナー、講演会、公開講座等に所員が出講し、さらに東京外国語大学連携講座、調布市内・近隣大学等公開講座にも所員が出講した。また、AA 研自ら主催したのものとして、各種の基幹研究公開講演、フィールドネットラウンジ、FIELDPLUS caféなどを開催した一方、東京四大学連合文化講演会「環境・社会・人間における『安全・安心』を探る ―安全で安心の出来る社会― ～学術研究の最前線をやさしく解説する～」(学術総合センター 一橋講堂 2016年10月28日)を共催して、所員が講演を行った。【詳細は、[I-4.2.5 四大学連合文化講演会](#)および、資料編 [II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣](#)の項を参照】

I-4.4.3 出版および広報

- ・ 出版については、[I-3.3.5 出版担当](#)を参照。
- ・ 広報については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

I-4.4.4 収集資料等の展示・公開

特別展示 「50年ぶりによみがえるアイヌ語の世界:アイヌ語学者 故田村すゞ子氏の遺した川村カ子ト主催「ユーカラ大会」の記録～」
2016年8月6日(土)～2017年1月31日(火)

ポスター展示「世界の言語で読む Le Petit Prince」2016年11月19日(土)～11月23日(水)

大瀬二郎写真展「遙かなる地へ思いを馳せて」2016年12月5日(月)～2017年1月20日(金)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/images/exhibition/jiroose.pdf>

企画展「チベット牧畜民の仕事展」2017年2月13日(月)～3月11日(土)
<http://tibetanpastoralists.blogspot.jp/2016/12/blog-post.html>
<http://tibetanpastoralists.blogspot.jp/2017/03/blog-post.html>

については、[I-3.3.7 広報企画担当](#)を参照。

I-5 成果と課題

I-5.1 2016年度の成果

本研究所における本年度の主な成果は以下の通りである。

1. 本研究所では、研究所として重点をおく領域を明確にすることの重要性を幾度か議論してきたが、共同利用・共同研究拠点として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という意見（2009年6月25日付）にも応えるべく、第2期中期目標期間の始まった2010年度に4つの基幹研究を発足させた（基幹研究の立ち上げに至る経緯の詳細については、[I-2.2.1 概要](#)の項を参照されたい）。さらに、2016年度から始まる第3期中期目標期間を前に、所内の研究戦略策定委員会とともに将来構想を練り直した結果、第3期中期目標期間にはプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編のうえ、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明確にする形で「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（言語学）、「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」（人類学）、「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」（歴史・地域）の3つで再出発することとした。併せて2016年度には、急速に複雑化・深刻化するアジア・アフリカの現代的諸問題に対応するため、本研究所がこれまで研究分野別に進めてきた研究を有機的に関連させて質的に飛躍させ、その基盤の上に国内外の研究機関・現地コミュニティと連携した問題解決のための研究体制を構築すべく、特別経費による全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」が新たに活動を開始した。
2. 本研究所の2つの海外研究拠点、中東研究日本センター（バイルート）及びコタキナバル・リエゾンオフィスにおいて、臨地共同研究が順調に展開され、共同利用・共同研究機能が強化された。2014年6月にレバノンの隣国であるシリアからイラクにまたがる形で建国された、いわゆる「イスラム国」の動向など、中東情勢は相変わらず予断を許さないものの、2016年度も特任研究員1名をバイルートに常駐させて、中東研究日本センターの管理・研究・調査に当たらせた。
3. 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」が採択され、学内および連携機関の名古屋大学から2名の若手研究者を海外連携機関（メルボルン大学、ナンヤン工科大学（NTU））に派遣するとともに、海外連携機関（オーストラリア国立大学、メルボルン大学、NTU、ロンドン大学 SOAS）から計11名の研究者を招聘して、(1)データアーカイブ、(2)言語コーパス構築、(3)言語の通時的変化・分岐に関する研究、(4)言語コーパスを用いた理論的研究を推進した。
4. 共同利用・共同研究課題29件が総計376名（延べ数）の共同研究員の参画を得て、活発に展開された。なお、研究所が著しい財源難に直面したことから、それぞれの共同利用・共同研究課題が研究会を開催するための旅費に上限を設けざるを得なかったが、研究会開催地の制限を撤廃して旅費予算の有効活用を図ったこと、また何より、所員・共同研究員の絶大な尽力・協力を得て、いずれの研究課題も計画どおりに遂行された。
5. 2017年度から新規に開始する共同利用・共同研究課題の公募を行った。審査には共同研究専門委員会があたり、応募のあった共同利用・共同研究課題15件のうち11件を採択した。また、拠点期末評価におけるコメント、具体的には国際共同研究の成果増大と研究成果のさらなる質の向上を目指して、新たに外国人客員共同研究型の共同利用・共同研究課題を公募し、共同研究専門委員会の審査を経て、応募のあった7件のうち6件を採択した。
6. これまでに対外的に形成されてきた二つの研究拠点、すなわちアジア書字コーパス拠点及び中東イスラーム研究拠点は既形成拠点として、それぞれの研究活動を継続している。特に中東イスラーム研究拠点は、大学共同利用機関法人人間文化研究機構（NIHU）が本年度から取り組むネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」（中心テーマ「地球規模の変動下における中東の人間と文化—多元的価値共創社会をめざして」）に副中心拠点として加わり、「人間の移動・交流によるネットワークの構築と国家・社会・宗教の変容」という担当テーマの下、中心拠点である国立民族学博物館を始めとする全国の4機関と連携しながら、中東・イスラーム研究の発展に尽力した。

7. 言語研修事業など、運営費交付金に基づく研究・研修事業が順調に進められた。
8. 東京外国語大学大学院総合国際学研究所博士前期課程の改組にともない、本研究所として初めて、大学院博士前期課程の教育への関与を始めた。具体的には、「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス・プログラム」を提供するとともに、春学期に学部学生向けのイントロダクション「アジア・アフリカ・フィールドサイエンス研究基礎」(リレー講義)を提供した。

I-5.2 課題と展望

本研究所は1964年の創設以来、アジア・アフリカの言語と文化を調査・研究する先端的研究機関として、また人文・社会系では数少ない全国共同利用研究所として、揺らぐことのない一連の重要な研究活動を推進してきた。しかし、2009年度をもって全国共同利用制度が終わりを告げ、2010年度以降は本研究所も他の多数の共同利用・共同研究拠点との競争にさらされている。そのうえ、2013年11月には文部科学省から「国立大学改革プラン」が提示され、2016年度の第3期中期目標期間開始を前に、2013～2015年度が「改革加速期間」と位置付けられるなか、共同利用・共同研究体制についても、科学技術・学術審議会研究環境基盤部会が今後のあるべき姿を探り、改革に向けた体制の見直しを再検討した審議の報告書「共同利用・共同研究体制の強化に向けて」が2014年度末に公表された。

そこでは、「最先端の研究動向を踏まえる観点から、時限を設けて組織・体制の全面的見直しを検討すること」「IR(インスティテューショナル・リサーチ)機能の強化」「広報体制(専門部署の設置、人員の適切な配置)の整備を進めるとともに、自ら研究機関が情報発信を行う意義や目的を、研究機関の基本方針として明確に定めること」「体制整備に当たっては、研究成果を魅力的に、かつ等身大に発信するマネジメントができる人材を配置することや、各機関等の長が主導し組織としての広報体制を整備すること」「国際公募を実施し、待遇面等について柔軟な人事制度を整えることにより、国内外から卓越した研究者を集め、国際的な研究環境を目指すこと」「特に、海外の研究者向けの国際広報(報道発表や研究所の成果の英語での時宜に適った発信、海外の有力な学術誌等に対し研究成果をアピールできる人材の確保など)を充実させ、国際共同研究の萌芽を着実に育てること」「共同利用・共同研究体制を構成する人事制度(具体的には、内部昇格の制限、シニアポストへの任期制の導入、若手研究者確保に向けたテニュアトラック制度の導入、女性研究者支援のための育児施設の確保、外国人研究者に対するソフト面での支援充実、クロスアポイントメント制度の活用、寄付講座の導入など)を、オープンかつ各機関等の実態に適合した形で、自らルール化し、導入すること」等々、極めて広範な「改革」が求められており、財源の制約はあるにしても、本研究所としても可能なかぎり、こうした提言に対応して行かなくてはならない。

本研究所は、2015年度に実施された過去6年間の期末評価を経て、2016年度から始まる国立大学法人第3期も共同利用・共同研究拠点に認定されたが、その際に提出を求められた期末評価調書では、「第3期中期目標期間に向けた評価」として、「拠点を置く大学(法人)の機能強化・特色化への関わり」を記載することが義務づけられており、本研究所も国際化や大学院教育、人材の流動化などの側面で東京外国語大学の機能強化・特色化への貢献を明白に求められるようになってきている。これにより、大学の垣根を越えた共同利用・共同研究拠点としての本研究所の活動がいささかも揺らぐことはないものの、他方でそれもまた共同利用・共同研究拠点の条件とされ始めた以上、本研究所も東京外国語大学の機能強化・特色化のために一定の貢献をしなくてはならない。この点も、国立大学法人第3期における本研究所の大きな課題となっていくだろう。

とはいえ、こうした外部環境の劇的な変化を別にしても、今日、本研究所はさらなる発展のために、真剣に検討すべきいくつかの課題を抱えている。

1. 本研究所では、基幹研究を立ち上げてから、それまで以上に新規採用にあたって、必要とする人材のプロフィールについて所内での議論、合意を経て、慎重に優れた人材が確保されるように努力を積み重ねてきた。また、任期付きとなった助教職にはテニュアトラック制度を導入し、2009年度から実施するとともに、制度の改善にも努めている。しかし法人化以後、国立大学法人の人件費削減状況は年々厳しさを増していることから、人事採用が行われる機会は従前より減少しており、必要な人材の確保に関して所内合意を形成することも困難になりつつある。2013年度に大学執行部が人件費をポイントに換算して各部局に割り当てる制度を導入したことにより、他部局との人件費の切り分けはクリアになり、研究所として長期的な人事配置方針を策定することも可能になったものの、今後はますます人事採用をめぐる難しい判断を迫られるようになっていくだろう。もちろん、本研究所にとって、いかなる状況にあっても優れた研究者の確保と研究環境の改善が極めて重要な課題であることに変わりはない。少ない採用機会を有効に使うことで優秀な人材を確保するためには、目先の利益の追求に走ることなく、より大局的な視点に立って所内合意を

形成していくことがますます重要になる。このため、本研究所では2017年の秋以降、所内の研究戦略策定委員会において、今後10年単位の長期的な将来計画を検討すると決めたが、この作業を通じて何より、研究所の長期的な人事配置方針に関する所内合意を形成しなくてはならない。

2. 国立大学法人の第1期中期目標期間および第2期中期目標期間における本研究所の財政基盤は、文部科学省の特別経費に依存するところが大きかった。第3期中期目標期間にあっても、この構図は基本的に変わりようがないものの、今後も予算の先細りが確実に予想される中で、より明確かつ具体的な研究の方向性と重点領域を設定して、競争的経費の獲得に挑むことがますます重要になっていくだろう。
3. 本研究所が2009年6月25日付で「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として認定された際に通達された「研究対象分野が広く、研究者も多岐にわたっていることから、拠点としての特徴を外部に対してより具体的に示していくことが望まれる」という、拠点認定の審議における意見を真摯に受け止めなければならない。2010年2月に本研究所が基幹研究を策定したことは、この意見に対する一つの回答であったが、本研究所は2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果でも、「今後は、研究所全体としての特徴を明確にすることが期待される」とのコメントを通達された。これを受けて本研究所では早速、所内の研究戦略策定委員会を中心に研究戦略を見直し、外から見て研究所の「顔」がわかるような研究体制を構築するための所内組織改編に取り組んだ結果、2016年度以降はプロジェクト研究部をこれまでの5研究ユニットから言語学、文化人類学、地域研究・歴史学の3研究ユニットに再編し、基幹研究も各研究ユニットの重点研究テーマを明らかにするような形で設定し直したが、研究所の組織・体制に関しては、今後も不断に見直す努力が不可欠である。
4. 国立大学法人運営費交付金の削減等、極めて厳しい予算状況を踏まえ、外国人研究員のあり方についても不断の見直しが必要となろう。2010年に共同利用・共同研究拠点に移行したのを機に、2011年度以降は採択済みの共同利用・共同研究課題に貢献できる外国人研究員を公募する方針を採ってきたが、2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価における「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討することが期待される」とのコメントを踏まえ、2016年度には外国人研究員と共同利用・共同研究課題との関係を再検討して、新たに「共同利用・共同研究課題（外国人客員共同研究型）」の公募に踏み切ることにした。この方針転換が国際共同研究の研究成果増大に直結するかどうかは予断を許さないが、改革が実を結ぶことを期待したい。
5. 本研究所が「アジア・アフリカの言語文化に関する国際的研究拠点」として国際連携を推進するのは当然であり、二つの海外拠点（ベイルート、コタキナバル）の強化・発展はもとより、アジア・アフリカ地域の研究機関との交流、連携の模索や協力の可能性を常に追求してきてはいるものの、すでに述べたように、共同利用・共同研究拠点の期末評価結果では「今後は、国外研究者の受入に止まらず国際共同研究として研究成果を増加させるための取組を検討する……ことが期待される」とのコメントを受けた。そうである以上、今後はこうした国際連携もまた、優れた研究成果につなげるべく、いっそう意識的な取組を推進しなくてはならないだろう。
6. 同じく2015年度に文部科学省から通知された共同利用・共同研究拠点の期末評価結果において、本研究所は2013年度に行われた中間評価結果のフォローアップ状況について「具体的な改善措置が取られている点は一定の評価が出来るが、応募件数が大きく伸びているとは言い難く、引き続き、更なる質の向上に努めることが望まれる」という厳しい評価を下された。本研究所では、この期末評価のコメントを踏まえて、共同研究課題の応募を増やすべく、制度の改編に取り組んだ結果、2016年度には前年の1.5倍の応募を得ることができたが、今後も共同研究課題制度が研究者コミュニティのニーズをよりいっそう反映し得るような方策を検討し、共同研究が質量ともに充実していくように努める必要がある。
7. 2013年度に研究所全体の活動を見直すべく実施した外部評価で指摘された「修士課程・博士課程を一貫した大学院教育の実施、研究所の特色を生かした、東京外国語大学の大学院教育への参加、あるいはAA研でしか教育できない特徴を打ち出し、独自の「学位プログラム」の構築等、主体的関与の方策」を検討すべし、という提言を真摯に受け止め、今後の大学院教育との関わりを深化させて行く必要もある。本研究所はこれまでも、言語研修や中東☆イスラーム関係セミナーを学部・大学院科目として開講することで東京外国語大学の人材育成に貢献してきたが、2016年度に実施された大学院前期課程の改組にあたっては、これまで博士後期課程にのみ関わってきた研究所が新たに「アジア・アフリカ・フィールドサイエンスプログラム」を提供して、東京外国語大学の人材育成に貢献することとなった。また、2018年度に予定されている大学院博士後期課程の改組にあたっては、所員の有資格者全員が博士後期課程を担当することも決まっている。しかしながら、東京外国語大学大学院の枠内でAA研が独自の修士課程・博士課程一貫コースや「学位プログラム」を持つことは事実上不可能なこともすでに明らかになっており、研究所の特色を生かした大学院教育を今後いかに展開して行くべきか、引き続き検討しなくてはならないだろう。

II 資料編

II-1 年表

1961年(昭和36年)	日本学術会議が本研究所を設置するよう勧告
1964年(昭和39年)	4月東京外国語大学附置の共同利用研究所として発足 言語文化第一, インドシナ第一, アフリカ第一部門設置
1965年(昭和40年)	インド第一部門設置
1966年(昭和41年)	東北アジア, アラビア部門設置
1967年(昭和42年)	4月『通信』第1号発刊 2号館竣工(西側半分) AA研4, 5, 6階に入る 言語文化第二, インドネシア・オセアニア部門設置 共同研究プロジェクトを組織 研究未開発地域の言語文化修得のための助手等のアジア・アフリカへの派遣開始 この年から1973年まで「実験的言語研修」実施 『叢書』第1冊発行
1968年(昭和43年)	4月2号館増築完成 中国第一部門設置 『アジア・アフリカ言語文化研究』(通称『ジャーナル』)発刊 AA研教授会規程制定(教授会正式発足)
1969年(昭和44年)	インドシナ第二部門設置
1971年(昭和46年)	トルコ・ウラル部門設置
1972年(昭和47年)	イラン部門設置
1974年(昭和49年)	言語研修事業費が予算化, 東京会場で二言語開始 創立10周年記念式典, 講演会開催
1976年(昭和51年)	言語研修, 関西会場で1言語の研修開始
1978年(昭和53年)	1月メインフレーム・コンピュータ(HITAC M-150)を導入 インド第二部門設置
1979年(昭和54年)	言語文化第三, 中国第二部門設置 公募による短期共同研究員受け入れ開始
1981年(昭和56年)	言語研修, この年以降226時間から150時間に変更
1982年(昭和57年)	モンゴル・シベリア部門設置
1987年(昭和62年)	アフリカ第二部門設置
1991年(平成3年)	4月4大部門制への改組
1992年(平成4年)	4月大学院地域文化研究科博士後期課程設置, 所員15名が兼任
1993年(平成5年)	UNIXワークステーションのサブシステムをメインフレームに付加する形で導入 インターネットの利用開始
1994年(平成6年)	創立30周年記念式典, 講演会, シンポジウム, 公開セミナー開催
1995年(平成7年)	4月「中核的研究機関支援プログラム」による卓越した研究拠点(COE)に指定 創立30周年記念公開講座開催
1997年(平成9年)	4月情報資源利用研究センター, AA研に付属する形で設置(教官, 客員教官純増各1)

名, 教官振替増4名)

1998年(平成10年)	4月情報資源利用研究センター運営費予算化
2000年(平成12年)	4月事務一元化により事務部が廃止され, 事務局研究協力課が事務を担当
2001年(平成13年)	6月中核的研究拠点形成(COE)プログラムとして「アジア書字コーパス拠点」が認定(～2005年度)
2002年(平成14年)	2月西ヶ原から府中キャンパスへ移転 7月科学研究費特定領域研究「資源の分配と共有に関する人類学的統合領域の構築」(文化資源学)採択(～2006年度)
2004年(平成16年)	4月東京外国語大学, 国立大学法人になる
2005年(平成17年)	4月複数の研究ユニットからなるプロジェクト研究部を設置 4月フィールドサイエンス研究企画センターを設置 4月中東イスラーム研究教育プロジェクトを開始(～2009年度)
2006年(平成18年)	2月中東研究日本センターをレバノン共和国のベイルートに開設 10月文部科学省委託研究・世界を対象としたニーズ対応型地域研究推進事業「東南アジアのイスラーム」を開始(～2010年度)
2007年(平成19年)	4月副所長職を設置
2008年(平成20年)	3月コタキナバル・リエゾンオフィスをマレーシア・サバ州のコタキナバルに開設 4月文部科学省特別経費によるプロジェクト「急速に失われつつある言語多様性に関する国際研究連携体制の構築」を開始(～2012年度)
2009年(平成21年)	6月共同利用・共同研究拠点として認定される(2010年4月から6年間)。2009年度をもってこれまで55年間続いた「全国共同利用」という制度が廃止される
2010年(平成22年)	4月文部科学省により認定された共同利用・共同研究拠点(拠点名:アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究拠点)に移行
2012年(平成24年)	4月国立大学附置研究所・センター長会議会長機関を担当(～2013年3月)
2013年(平成25年)	文部科学省特別経費により「言語の動態と多様性に関する国際研究ネットワークの新展開:プロジェクト(LingDy2)」を開始
2014年(平成26年)	10月創立50周年記念講演・シンポジウム・記念式典, 関連諸事業を実施
2016年(平成28年)	研究組織のうちプロジェクト研究部を3研究ユニット(言語学研究ユニット, 地域研究・歴史学研究ユニット, 文化人類学研究ユニット)に改編 全所プロジェクトとして特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」(2016—21年度)を開始 下記3基幹研究プロジェクトを開始 <ul style="list-style-type: none">・基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3 Project)・基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ・マクロ系の関連2」・基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」 『頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム』「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」採択(～2018年度)

「中東イスラーム研究拠点」にて人間文化研究機構ネットワーク型基幹研究プロジェクト地域研究推進事業「現代中東地域研究」を開始

II-2 予算・組織・機構

II-2.1 研究所の予算

II-2.1.1 2016(平成28)年度予算

項目	金額 (単位：千円)	備考
運営費交付金	222,235	常勤職員人件費を除く
科学研究費補助金	132,055	間接経費除く
受託研究・受託事業等	11,348	間接経費除く
寄付金等	8,000	

II-2.1.2 運営費交付金（2016年度）

2016（平成28）年度 運営費交付金予算額（常勤職員人件費を除く）

区分	予算額 (千円)	
一般経費（研究費）	112,617	
特別経費	アジア・アフリカの言語文化に関する国際的共同研究	16,677
	アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築	67,888
学長裁量経費	25,053	
計	222,235	

2016（平成28）年度 運営費交付金予算額配分状況

経費名	配分額 (千円)	
個人研究費	9,390	
客員研究費	1,210	
基幹研究	多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築	*41,412
	同上（学長裁量経費）	1,700
	アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2	*7,467
	同上（学長裁量経費）	1,737
中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景		*22,129
	同上（学長裁量経費）	6,330
既形成拠点	アジア書字コーパス拠点（GICAS）	750
IRC経費	6,077	
FSC経費	3,000	
言語研修経費（学長裁量経費）	11,524	
成果等刊行経費	*9,076	
広報企画経費	3,828	
基礎データ経費	1,500	

共同利用・共同研究課題経費	*11,986
文献資料経費	10,000
共通経費	2,572
国際研修集会（学長裁量経費）	3,762
海外学術調査フォーラム経費	1,200
外部委員経費	*3,400
会議等経費	486
所長裁量経費	3,000
研究機関研究員／特任研究員人件費	*17,774
外国人研究員人件費（招へい・帰国旅費含む）	*16,958
派遣職員／非常勤職員経費	19,967
予備費	4,000
計	222,235

補足：「*」を付した項目は、その一部あるいはすべてを特別経費により実施する。

II-2.1.3 科学研究費補助金

以下の金額は、直接経費のみ（間接経費除く）。

	研究種目	予算額 (千円)
科学研究費補助金	基盤研究 (A) (海外, 一般含む) (5件)	30,900
	基盤研究 (B) (海外, 一般含む) (11件)	35,900
	基盤研究 (C) (19件)	17,196
	挑戦的萌芽研究 (1件)	500
	若手研究 (A) (1件)	1,800
	若手研究 (B) (12件)	8,959
	研究活動スタート支援 (1件)	400
	研究成果公開促進費 (3件)	11,700
	国際共同研究加速基金 (1件)	9,400
	特別研究員奨励費 (5件)	5,800
	計 59件	125,555

II-2.1.4 受託研究・受託事業等

以下の金額は、直接経費のみ（間接経費除く）。

代表者 氏名	機関	研究テーマ	実施期間	受入金額 (直接経費) :千円
近藤信彰	人間文化研究機構	現代中東地域研究推進事業	H28(2016).4.1 ～H34(2023).3.31	7,500
椎野若菜	日本学術振興会	ウガンダにおける「家族」の多様化と再編力についての研究：格差に対抗する潜在力分析	H28(2016).4.1 ～H30(2019).3.31	2,600
外川昌彦	日本学術振興会	ブッダガヤへの日本の巡礼者－インドにおける仏教復興運動と日印交流	H28(2016).9.1 ～H30(2019).8.31	1,248
計				11,348

II-2.1.5 寄付金等

代表者名： 細田 和江 中東イスラーム研究拠点
特任助教（人間文化研究機構・総合人間文化研究推進センター研究員）
機関： アサヒグループ学術振興財団
研究テーマ：「食の宗教規定に関する比較研究－アメリカとイスラエルにおけるコシエル（ユダヤ教の食物規定）「スシ」－」遂行のため
受入金額： 800,000円

II-2.2 外部委員リスト

II-2.2.1 運営委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
井野瀬久美恵	甲南大学文学部	教授
宇山 智彦	北海道大学スラブ研究センター	教授
梶 茂樹	京都産業大学	教授
小林 正人	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
佐藤 洋一郎	人間文化研究機構	理事
清水 展	京都大学東南アジア研究所	教授
棚橋 訓	お茶の水女子大学教育学部	教授
西尾 哲夫	国立民族学博物館	教授
渡邊 興亜	総合研究大学院大学	名誉教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
栗原 浩英	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.2 共同研究専門委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
井上 優	麗澤大学外国語学部	教授
窪田 幸子	神戸大学大学院国際文化学研究所	教授
倉沢 愛子	慶應義塾大学	名誉教授
杉山 祐子	弘前大学人文学部	教授
藤代 節	神戸市看護大学看護学部	准教授

吉澤誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
米田 信子	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
飯塚 正人	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・所長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・副所長
中山 俊秀	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・情報資源利用研究センター長
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・フィールドサイエンス研究企画センター長
栗原 浩英	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.3 研修専門委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
岸田 文隆	大阪大学大学院言語文化研究科	教授
久保 智之	九州大学大学院人文科学府	教授
小林 正人	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
南田 みどり	大阪大学大学院言語文化研究科	名誉教授
吉田 和彦	京都大学大学院文学研究科	教授
呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
芝野 耕司	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
中見 立夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
児倉 徳和	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.4 海外調査専門委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
伊藤 元己	東京大学大学院総合文化研究科	教授
梅崎 昌裕	東京大学大学院医学系研究科	准教授
岡本 正明	京都大学東南アジア研究所	教授
窪田 順平	総合地球環境学研究所研究部	教授
関 雄二	国立民族学博物館	教授
曾我 亨	弘前大学人文学部	教授
高樋 さち子	秋田大学教育文化学部	准教授
蓮井 和久	鹿児島大学	客員研究員
藤田 耕史	名古屋大学環境学研究科	准教授
本山 秀明	国立極地研究所	教授
荻谷 康太	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教
佐久間 寛	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

外川 昌彦	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
野田 仁	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
深澤 秀夫	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.5 フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会（任期：2016年4月1日
～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
飯田 卓	国立民族学博物館	准教授
大村 敬一	大阪大学大学院言語文化研究科	准教授
川田 牧人	成城大学文芸学部	教授
木村 大治	京都大学大学院アジア・アフリカ地域研究研究科	名誉教授
黒田 末寿	滋賀県立大学	名誉教授
湖中 真哉	静岡県立大学国際関係学部	教授
小松 かおり	北海学園大学人文学部	教授
長沼 毅	広島大学大学院生物圏科学研究科	教授
野林 厚志	国立民族学博物館	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
塩原 朝子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
佐久間 寛	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.6 フィールドネット運営委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
海老原 淳	国立科学博物館植物研究部	研究主幹
塩谷 哲史	筑波大学人文社会系	助教
竹ノ下 祐二	中部学院大学教育学部	准教授
田邊 優貴子	国立極地研究所	助教
津田 浩司	東京大学大学院総合文化研究科	准教授
長野 宇規	神戸大学大学院農学研究科	准教授
太田 和宏	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
児倉 徳和	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.7 編集専門委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

区分	氏名	所属	職名
人類学	石川 登	京都大学東南アジア研究所	教授
言語学	岩田 礼	金沢大学大学院人間社会環境研究科	教授
歴史学	三浦 徹	お茶の水女子大学基幹研究院人文科学系	教授

言語学	森口 恒一	静岡大学	名誉教授
歴史学	吉澤 誠一郎	東京大学大学院人文社会系研究科	准教授
人類学	和崎 春日	中部大学国際関係学部	教授
言語学	呉人 徳司	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
歴史学	近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
歴史学	陶安 あんど	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
人類学	椎野 若菜	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
人類学	西井 涼子	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
言語学	山越 康裕	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授

II-2.2.8 国際諮問委員会（任期：2016年4月1日～2017年3月31日）

氏名	所属	職名
JUKES, Anthony Robert	Australian Research Council	Postdoctoral Fellow
RAHAYU, Yosephin Aprisatuti	Wisma Bahasa, Yogyakarta	Lecturer
SONG, Huaqiang	The School of History, Wuhan University	Assoc. Prof.
Tung Aung Kyaw	Department of Myanmar Languages and Literature, Taungoo University	Professor
荻谷 康太	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教
近藤 信彰	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
外川 昌彦	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
渡辺 己	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.2.9 海外拠点専門委員会（任期：2016年4月1日～2018年3月31日）

氏名	所属	職名
内堀 基光	放送大学教養学部	教授
奥田 敦	慶應義塾大学総合政策学部	教授
大稔 哲也	早稲田大学文化構想学部	教授
酒井 啓子	千葉大学法経学部	教授
長沢 栄治	東京大学東洋文化研究所	教授
保坂 修司	財団法人日本エネルギー経済研究所 中東研究センター	研究理事／副センター長
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授
床呂 郁哉	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授・FSC長
錦田 愛子	アジア・アフリカ言語文化研究所	准教授
吉田 ゆか子	アジア・アフリカ言語文化研究所	助教

II-2.2.10 中東研究日本センター諮問委員会（任期：2016年4月1日～2018年3月31日）

氏名	所属	職名
ABU-HUSAYN, Abdul-Rahim	Faculty of Arts and Sciences, American University of Beirut	Professor
AZAR, Pierre	Japan Academic Center, Universite Saint-Joseph de Beyrouth	Director
DAHER, Massoud	Faculty of Literature and Human Sciences, Lebanese University	Professor
黒木 英充	アジア・アフリカ言語文化研究所	教授

II-2.3 内部委員会・業務担当

II-2.3.1 内部委員一覧

企画運営委員会 2015.4.1 - 2017.3.31 (2カ年)

(選出) 渡辺己, 栗原浩英, 深澤秀夫

(指定) 飯塚正人所長(委員長), 黒木英充副所長, 中山俊秀 IRC 長, 床呂郁哉 FSC 長
近藤信彰研究戦略策定委員会委員長

研究戦略策定委員会 2015.4.1 - 2017.3.31 (2カ年)

(選出) 近藤信彰(委員長), 澤田英夫, 星泉, 太田信宏, 西井涼子, 河合香吏

(指定) 飯塚正人所長(委員長), 黒木英充副所長, 中山俊秀 IRC 長, 床呂郁哉 FSC 長

共同研究専門委員会 2015.4.1 - 2017.3.31 (2カ年)

飯塚正人所長(委員長), 黒木英充副所長, 中山俊秀 IRC 長, 床呂郁哉 FSC 長
渡辺己, 栗原浩英, 深澤秀夫

II-2.3.2 各種業務分担（任期：2016.4.1～2017.3.31（1カ年））

文献資料（図書）担当

荒川慎太郎（担当長），河合香吏

国際交流担当

渡辺己（担当長），近藤信彰，外川昌彦，荻谷康太（フォーラム担当）

編集担当

西井涼子（担当長），椎野若菜，近藤信彰，陶安あんど，呉人徳司，山越康裕

出版担当

峰岸真琴（担当長），高島淳，陶安あんど

広報企画担当（『FIELDPLUS』，広報物制作，企画展担当）

太田信宏（担当長），高松洋一（『FIELDPLUS』編集長），

星泉，河合香吏，伊藤智ゆき，野田仁，錦田愛子，吉田ゆか子

基礎データ担当（要覧，ウェブサイト担当，自己評価書）

小田淳一（担当長／Web 管理者）

澤田英夫（要覧・Web 担当長），町田和彦（要覧），椎野若菜（要覧），品川大輔（要覧），

星泉（年次報告担当長）、栗原浩英（年次報告）、伊藤智ゆき（年次報告）

*ただし要覧と Website の改訂に関しては、基礎データ担当全員でかかわることとする。

研修担当

塩原朝子（担当長）、中見立夫、芝野耕司、呉人徳司、児倉徳和

海外学術調査フォーラム担当

深澤秀夫（担当長）、外川昌彦、野田仁、山越康裕、苅谷康太、佐久間寛

地域研究コンソーシアム担当

石川博樹（担当長）、錦田愛子

II-2.3.3 全学委員一覧

大学本部 会議等	会議等名	氏名		任期
	研究活動に関わる不正防止計画推進本部	飯塚正人	役職指定委員	

全学会議・委員会等	会議・委員会等名	氏名		任期
	経営協議会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	教育研究評議会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		黒木英充	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	情報公開・個人情報保護委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	ハラスメント防止委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		塩原朝子	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
	ハラスメント相談員	山越康裕	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
		西井涼子	選出委員	2015.5.21-2017.5.20
	情報マネジメント委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		中山俊秀	委員（委員長指名）	2015.4.1-2017.3.31
	基金委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	苦情処理委員会（苦情処理相談員）	高松洋一	選出委員	2015.4.1-2017.3.31
危機管理委員会	飯塚正人	委員（学長指名）	2015.4.1-2017.3.31	
	河合香吏	選出委員	2016.4.1-2018.3.31	
国際交流会館運営委員会	石川博樹	選出委員	2016.4.1-2018.3.31	

全学各室	室名	氏名		任期	
	点検・評価室	栗原浩英	室員		2015.4.1-2017.3.31
		澤田英夫	室員		2015.4.1-2017.3.31
	広報マネジメント室	星 泉	室員		2015.4.1-2017.3.31
	施設マネジメント室	伊藤智ゆき	室員		2015.4.1-2017.3.31
男女共同参画推進室	黒木英充	室員		2016.4.1-2017.3.31	

本部 全学	全学本部名	氏名		任期
	経営戦略情報本部	栗原浩英	本部長（学長特命補佐）	

総合戦略会議	専門部会等名	氏名		任期
	総合戦略会議	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	研究アドミニストレーション・オフィス	飯塚正人	役職指定委員	2016.4.1-2017.3.31
人事・財務マネジメント・オフィス	飯塚正人	役職指定委員		2016.4.1-2017.3.31

全学センター等運営委員会・その他	運営委員会等名	氏名		任期
	総合情報コラボレーションセンター委員会	飯塚正人	役職指定委員	2016.4.1-2017.3.31
	文書館運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	東京外国語大学出版会運営委員会	AA 研所員の参画はなし		
	国際日本研究センター運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
	多言語・多文化教育研究センター運営委員会	AA 研所員の参画はなし		
	保健管理センター運営委員会	飯塚正人	役職指定委員	2015.4.1-2017.3.31
		荒川慎太郎	選出委員	2016.4.1-2018.3.31
大学院協議会	澤田英夫	選出委員	2015.4.1-2017.3.31	

II-3 研究活動の詳細

II-3.1 センター

II-3.1.1 情報資源利用研究センター

センター長： 中山俊秀

副センター長： 澤田英夫

センター員： 小田淳一，高松洋一，荻谷康太，品川大輔

1. アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化の推進

本年度は以下のプロジェクトを支援し、アジア・アフリカ言語文化資料の情報資源化を引き続き推進した。

1) 「アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開」

代表者： 奥田統己・山越康裕

公開 URL：<http://ainugo.aa-ken.jp>

コンテンツの主要言語：アイヌ語，日本語

内容の説明： 田村すゞ子氏により採録されたアイヌ語資料のオンライン版である。対応する日本語訳が付されたアイヌ語（カタカナ表記・ローマ字表記）を見ながら，ポーズによる切れ目ごとに音声を聞くことができる。

今年度の活動： 昨年度公開した資料6篇に加え，新たに2篇のテキストを追加した。今年度は既公開資料から大きく仕様を変更し，テキストはアイヌ語カタカナ表記・アイヌ語ローマ字表記・日本語訳・注釈の4行立てで構成した。昨年度までの公開資料は音声データを切り分けてサーバに配置していたが，今年度公開テキストは音声データを切り分けて，（データ内で）指定した箇所AからBまでを再生するようなシステムを開発した。

2) 「チュルク諸語対照基礎語彙（第3期）」

代表者： 児倉徳和

プロジェクト参加者： 風間伸次郎

公開 URL：<http://turkbv.aa-ken.jp/turkbv2016/index.html>

コンテンツの主要言語：チュルク諸語（トゥヴァ語，ハカス語，チュヴァシ語など）

内容の説明： チュルク諸語の基礎語彙のデータベース。『アジア・アフリカ言語調査票 下』所収のA項目（200項目）の音声を聞くことができるほか，言語を特定しての検索も可能。

今年度の活動： チュヴァシ語（1方言1話者）の語彙データ・音声を追加，タタール語・カザフ語・キルギス語・ウズベク語・トルクメン語・アゼルバイジャン語・トルコ語の文語データを追加した。

3) 「オスマン演劇ポスター画像公開」

代表者： 江川ひかり

公開 URL：<http://osmanlitivyatro.aa-ken.jp/>

コンテンツの主要言語：トルコ語

内容の説明： AA 研所蔵のオスマン帝国末期の演劇ポスター・プログラム 170 点の画像を，劇団名，演目，上演年月日，劇場などの基本情報を含んだ「劇団別基本表」とともにデータベース化してウェブ上に公開する。

今年度の活動： すでに CD-ROM 化されていたポスター・プログラムの画像と，それらの文字情報を「劇団別基本表」として整理し，データベース化して Web 上に公開した。

- 4) 「インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター」
 代表者：塩原朝子
 プロジェクト参加者：Yanti
 公開 URL：<http://malayvarieties.aa-ken.jp/>
 コンテンツの主要言語：英語
 内容の説明：インドネシア Nusa Tenggara Timur 州 (NTT, 南東諸島州) の言語の情報とリソースを公開するためのページ。2016 年現在 9 言語 Manggarai, Lio, Sika, Lamaholot, Rote, Kambera, Kui, Kupang Melayu の音声データが転写・翻訳付きで公開されている。
 今年度の活動：2014 年度事業として作成したインドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センタープロジェクトからの派生プロジェクトとして Nusa Tenggara Timur 州の言語のためのページを外注により作成した。
- 5) 「故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開」
 (新規プロジェクト)
 代表者：塩原朝子
 プロジェクト参加者：品川大輔, 角谷征昭
 公開 URL：http://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178
 コンテンツの主要言語：日本語
 内容の説明：アジア・アフリカ言語文化研究所元所員, 故湯川恭敏教授の業績とその基盤となった博士自身のフィールド調査によって得られた言語データに関するページ。2016 年度の段階では業績リストと言語データのメタデータリストを掲載している。
 今年度の活動：湯川博士が遺された 500 本あまりのカセットテープの音源をデジタル化し, メタデータを作成した。また将来的にその音声データと関連づけられうる博士の業績一覧を作成した。
- 6) 「ハウサ語, ヨルバ語電子辞書の作成と公開」
 代表者：塩田勝彦
 プロジェクト参加者：町田和彦
 公開 URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html
 コンテンツの主要言語：ハウサ語, ヨルバ語, 英語
 内容の説明：ハウサ語とヨルバ語の語彙集および入力資料の全文検索をおこなうことができる。
 今年度の活動：2016 年度はナイジェリアの北部地域文学局が初学者向けに編纂したハウサ語会話例文集のデータを補強した。この補強により, 日本で教材が入手しにくいハウサ語の学習者にとって, 有用な情報が得られるようになった。
- 7) 「モンゴル文語・満洲文語辞書の電子化利用に関する研究」
 代表者：栗林均
 プロジェクト参加者：町田和彦
 公開 URL：<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/project1/kdic/list?groupId=18>
<http://hkuri.cneas.tohoku.ac.jp/p01/>
 コンテンツの主要言語：日本語
 内容の説明：清代満洲語の辞典 5 種類の見出し語および本文をローマ字転写で検索するデータベース, および現代モンゴル文語をモンゴル文字で検索するデータベース。
 今年度の活動：モンゴル文字からキリル文字の辞書を参照し, キリル文字からモンゴル文字の辞書を参考できるようにした。現代モンゴル文語をモンゴル文字で検索するデータベースは, 約 2,600 語の主見出しの単語をネイティブが読み上げる発音データが参照できるようにした。
- 8) 「ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析 (2)」
 代表者：町田和彦
 プロジェクト参加者：萩田博, 萬宮健策
 公開 URL：http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym_hirdu/2016.htm

コンテンツの主要言語：ヒンディー語、ウルドゥー語、英語

内容の説明： ヒンディー語（デーヴァナーガリー文字）とウルドゥー語（アラビア文字）の語句を、形態素レベルで、辞書の見出し語形と接辞に自動解析する。解析に成功した見出し語形に対し語源情報を付加して表示するシステム。

今年度の活動： 2015 年度に実施した同名プロジェクトを質量ともに向上したものである。ヒンディー語とウルドゥー語、合わせて2万強の見出し語の語源情報を確定し語源情報辞書を入力した。一昨年(2014年度)終了したIRCプロジェクト「ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析」で開発された解析プロセスに、2015年度から語源情報辞書を最終段階で参照させるプロセスを加えた。

9) 「アラビア文字等紀年銘（クロノグラム）年代計算プログラムの公開」

代表者：高松洋一

公開 URL：<http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/>

コンテンツの主要言語：英語（計算ページ）・日本語（解説）

内容の説明： アラビア文字による紀年銘（クロノグラム）をウェブ上で計算するツールである。ウィンドウにアラビア文字の文字列を入力またはペーストしてボタンをクリックすると、各文字に割り当てられた数値を合計し、計算結果を数式で表示する。

今年度の活動： セキュリティの強化のため、プログラムの動作確認を行ないつつ、WordPressを3.7.3にバージョンアップした。

2. ワークショップの開催

IRC ワークショップは、所内外の主に若手研究者を対象に、蓄積した研究成果・手法を発信し、普及させることを目的とするもので、このワークショップによって発信される研究成果・手法に関心を持つ参加者自身の研究を促進し、そうした研究者を募って共同研究を組織し、ひいては、その研究成果を核とした研究分野の形成・発展を促すことが期待されている。2016年度に開催したワークショップは以下の通り。

IRC 国際ワークショップ「中野暁雄氏の「ベルベル民族誌」について：ラハセン・アフーシュ氏による証言の再解釈 —スース地方の現代社会と照らし合わせて—」

(2017年2月9日、AA 研セミナー室 (301))

講演者：ラハセン・ダーイフ (リヨン第2大学)

II-3.1.2 フィールドサイエンス研究企画センター

センター長：床呂郁哉

副センター長：太田信宏

コロキウム担当：塩原朝子、佐久間寛、床呂郁哉

フィールドネット担当：太田信宏、児倉徳和

JacMES 担当：黒木英充

KKLO 担当：床呂郁哉、吉田ゆか子

1. 研究手法の開発

フィールドサイエンスの研究手法を開発し、洗練させるべく、公開研究会形式の「フィールドサイエンス・コロキウム」について、2010年度組織面・制度面での整備を進めて海外調査専門委員会のもとに設置した「フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会」を中心に、コロキウムの企画・運営体制を強化するとともに、所内では基幹研究「人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関」との連携を進めた。2016年6月17日（金）及び2017年2月12日（日）にそれぞれ「災害と／のフィールドワーク」と「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」と題したワークショップを基幹研究人類学班との共催で開催した。

2. 新たな研究ネットワークの形成

フィールドネットでは学術連携および交流を目的とするウェブ上における所属や研究分野を超えた交流の場を提供すると共に、公募の結果採択した「フィールドネット・ラウンジ」を次のように2回開催

した。ワークショップ「老い——「問題」として、「経験」として」(2016年12月4日(日)開催)。ワークショップ「「毒」のバイオグラフィー——学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える」(2017年1月21日(土)開催)。

3. 現地研究拠点

本研究所では、アジア・アフリカをめぐる研究状況と学術的戦略構想に鑑み、ベイルート(レバノン)とコタキナバル(マレーシア)に研究拠点を設置して国際共同研究などの活動を続けている。ベイルートについては、レバノン政府の閣議決定による認可を得て2006年2月に正式に中東研究日本センター Japan Center for Middle Eastern Studies(略称 JaCMES)を発足させ、コタキナバルについても2008年3月にコタキナバル・リエゾンオフィス Kota Kinabalu Liaison Office(略称 KKLO)を設置して活動を開始した。現在はフィールドサイエンス研究企画センターが両拠点の維持・運営にあたっている。

中東研究日本センター(JaCMES)

- 2016年9月1日(木)―2日(金) JaCMESにて共同研究課題 JaCMES 実施分“Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies”第1回研究会を実施した。
- 2016年1月29日(火) JaCMESにてラウンドテーブル“The future of Syria and the surrounding countries”を実施した。
- 2017年3月3日(金)―4日(土) AA 研にて共同研究課題 JaCMES 実施分“Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies”第1回研究会を実施した。
- 2017年3月13日(月)ベイルートの映画館 Metropolis Empire Sofilにて映画会議“Protesters on the Street”を開催した。

コタキナバル・リエゾンオフィス(KKLO)

- 2016年7月16日(土)にAA 研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により同年度の第1回ワークショップを実施した。
- 2016年8月9日(火)・13日(土)にマレーシア・サバ大学においてサバにおける会話言語の研究に関するワークショップが実施された。
- 2016年8月28日(日)にコタキナバル市内のホテル会場において、共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により東南アジアの文化多様性に関する第2回ワークショップを開催し、日本側、ならびにマレーシア側から研究者などが参加した。
- 2016年11月13日(日)にAA 研にて同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」の研究結果論文集の出版に関する打ち合わせが実施された。
- 2017年1月7日(土)にコタキナバル日本人学校において邦人向け講演会を開催し、金子奈央(アジア経済研究所研究員)がマレーシアの教育と社会に関する講演を行った。
- 2017年2月4日(土)に国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(インドネシア)において邦人向け講演会を開催し、吉田ゆか子(AA 研)がバリの芸能に関する講演を実施した。
- 2017年3月9日(木)にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)においてアジア・アフリカの文化と社会に関する現地講演会を開催した。日本から若手研究者3名、マレーシア側から1名の研究者が講演し、UMSの研究者や学生らも交えた質疑応答も行った。
- 2017年3月31日(金)AA 研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により第3回ワークショップを実施した。

II-3.2 共同利用・共同研究課題

II-3.2.1 共同利用・共同研究課題実施状況

“人間—家畜—環境をめぐるミクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける 牧畜語彙収集からのアプローチ

研究期間： 2014-2016（代表：星泉／所員 1，共同研究員 7）

所員：星泉

共同研究員：海老原志穂，ジャブ，ジュ・カザン，津曲真一，平田昌弘，別所裕介，ナムタルジャ

研究会等の内容

第1回研究会（通算第7回目） 2016年11月5日（土）13:00-19:00・6日（日）9:00-15:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）小会議室(302)

11月5日（土）

- (1) 星泉（AA研所員）「アムド・チベット牧畜民の生活サイクルと関連語彙に関する調査報告」
- (2) 別所裕介（AA研共同研究員・京都大学）
「アムド・チベットにおける宗教語彙と被服関連語彙の収集進捗の報告」
コメンテーター：山口哲由（チベット研究家）

11月6日（日）

- 海老原志穂（AA研共同研究員・AA研ジュニア・フェロー）
「青海チベット牧畜地域におけるイノベーションの事例報告」
コメンテーター：山口哲由（チベット研究家）

第2回研究会（通算第8回目）国際シンポジウム「チベット牧畜民の「いま」を記録する」

2017年2月18日（土）13:00-18:00・19日（日）13:00-17:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディア会議室(304)

使用言語：日本語，チベット語（通訳あり）

共催：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」（LingDy3），
科学研究費（基盤B）「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」
（代表者：星泉（AA研所員），課題番号：15H03203）

2月18日（土）

- (1) 別所裕介（AA研共同研究員・京都大学）「チベット牧畜民の「いま」を記録する：趣旨説明」
- (2) 山口哲由（チベット研究家）「牧畜政策の変遷と放牧の変化」
- (3) 平田昌弘（AA研共同研究員・帯広畜産大学）「アムド系チベット牧畜民のミルクの世界」
- (4) ナムタルジャ（AA研共同研究員・滋賀県立大学大学院生）「チベットの牧畜社会におけるヤクの糞の名称とその利用法について：中国青海省黄南チベット族自治州沢庫県の事例」
- (5) 別所裕介（AA研共同研究員・京都大学）
「草原の地価上昇？：アムド・ゴロク地方の冬虫夏草バブルと不動産投機」
- (6) 海老原志穂（AA研共同研究員・AA研ジュニア・フェロー）「家畜は宝物」
- (7) 星泉（AA研所員）「牧畜文化辞典をつくる」
- (8) 全員 総合討論
コメンテーター 棚瀬慈郎（滋賀県立大学），西田愛（神戸市外国語大学）

2月19日（日）

- (1) ジャブ（AA研共同研究員・青海師範大学）「チベット牧畜民の口承文学」
- (2) ニャンチャクジャ（GANGLHA）「持続可能なチベットコミュニティを目指して—地域発展のための社会起業家たちへのローカルな取り組み」
- (3) カシャムジャ（AMILOLO FILM）
「スクリーンの上の牧畜民—アムド牧畜民に関する民族学的映像製作から得たこと」
- (4) 全員 総合討論

コメンテーター 村上大輔 (駿河台大学), 根本裕史 (広島大学)

第3回研究会 (通算第9回目) 2017年3月11日 (土) 10:00-19:00・12日 (日) 10:00-16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) 小会議室(302)

3月11日 (土) 全員「チベット牧畜民の仕事展でのレクチャー」

3月12日 (日) 全員「辞典編纂に関する検討会」

研究成果一覧

〔学術論文〕計6件

1. Masahiro Hirata, Taija Nan, Ryunosuke Ogawa, Shiho Ebihara, Yusuke Bessho, Izumi Hoshi, “Milk processing system of Amdo Tibetan pastoralists and its transition in Qinghai Province, China”, *Journal of Arid Land Studies*, 26(4), 2017. 187-196 (査読有)
2. Hirata, Masahiro, Isamu Yamada, Kenji Uchida and Hidemasa Motoshima, The characteristics of milk processing system in Kyrgyz Republic and its historical development, *Milk Science*, 65(1), 2016. 11-23. (査読有)
3. 平田昌弘「ユーラシア大陸乾燥地における牧畜と搾乳 (乳利用の重要性)」『公開シンポジウムの記録 家畜化と乳利用その地域的特質をふまえて—搾乳の開始をめぐる谷仮説を手がかりにして—』, 2015年5月16日・17日, 公開シンポジウム事務局, 2016. 53-63.
4. 別所裕介「『包摂』の政治とチベット仏教の資源性—ヒマラヤ仏教徒の社会運動をめぐる—」『体制転換期ネパールにおける「包摂」の諸相』, 三元社, 2017. 406-446.
5. 別所裕介「「巡礼—インフラ—電子網—現代チベットの聖地と辺境市場経済システムの連環」」『観光学評論』4(2), 観光学術学会, 2016. 177-193.
6. 津曲真一 “Meaningful to Behold: A Translation of Longchenpa's Biography with Explanatory Notes 3”, 『駒沢女子大学研究紀要』23, 駒沢女子大学, 2016. 185-204.

〔口頭発表等〕計22件

1. Ebihara, Shiho, “Milk and Non-milk Cultures, from the View Point of Geolinguistics”, The 3rd International Conference of Asian Geolinguistics, 2016.5.23. Royal University of Phnom Penh.
2. Ebihara, Shiho, “The Richness of Tibetan Pastoral Vocabulary and its Loss”, The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24. The University of Bergen.
3. 別所裕介・海老原志穂「青海チベット牧畜社会の変化とイノベーション—日本のチベット研究者ができること—」, 第64回日本チベット学会ワークショップ, 2016.11.19. 身延山大学.
4. 海老原志穂「ラダックのイノベーター, ソナム・ワンチュク」(la dwags kyi gsar gtod pa/ bsod nams dbang phyug), ツォシヨク・サルワ起業セミナー, 2016.8.6. 中国青海湖.
5. 海老原志穂「ヤクは宝物」, 国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」, 2017.2.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 平田昌弘「乾燥地の発酵文化」, 民族自然誌研究会第82回例会「アジアの発酵文化の広がり」, 2016.4.23. 京都大学総合研究二号館.
7. Hirata, Masahiro, “Flexibility of milk processing in Amdo Tibetan pastoralist”, The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24. The University of Bergen.
8. 平田昌弘「非乳利用論考: 乳利用には進まなかったリヤマ・アルパカ牧畜民と家畜との関係性—ペルー南部のクスコ県ワイリャワイリャ共同体のE牧民世帯の事例から—」, 北海道民族学会2016年度第2回研究会, 2016.11.19. 新ひだか町博物館.
9. 平田昌弘「ユーラシア大陸における乳文化の発展の歴史」, 全道農業関連部会交流会 in くしろ, 2017.2.3. ANA クラウンプラザホテル釧路.
10. 平田昌弘「アムド系チベット牧畜民のミルクの世界」, 国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」, 2017.2.18. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
11. Bessho, Yusuke, “Introduction for PANEL#9: Decline and Local Innovation in the Pastoral Society of Amdo Tibet”, The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24. The University of Bergen.
12. Bessho, Yusuke, “Reformation of tsha ru: Traditional Tibetan Clothing and its Innovation in Contemporary Amdo”, The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24. The University of Bergen.
13. Bessho, Yusuke, “Selling the Holy Place by the Piece: The 2016 Monkey Year Great Pilgrimage to Drakar Drelzong and its Pervading Frontier Market Economy”, AMDO RESEARCH NETWORK 2nd International Workshop, 2017.1.30. Faculty of Arts, Charles University in Prague, Prague.
14. 別所裕介「ローカル・イノベーション: 民族服飾加工を事例として」, ツォシヨク・サルワ起業セミナー, 2016.8.6. 中国青海湖.

15. 別所裕介「草原の地価上昇? : アムド・ゴロク地方の冬虫夏草バブルと不動産投機」, 国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」, 2017.2.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
16. Hoshi, Izumi, "Local Innovations in Dairy Processing Based on the Rediscovery of Traditional Values", The 14th International Seminar for Tibetan Studies, 2016.6.24. The University of Bergen.
17. 星泉「伝統的価値の再発見にもとづく乳加工イノベーション」, ツォシヨク・サルワ起業セミナー, 2016.8.6. 中国青海湖.
18. 星泉「チベット・アムド地方の牧畜民の暮らしの「今」を映像で記録する」, フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」, 2016.11.23. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
19. 星泉「チベット牧畜民とその語彙: 異分野の研究者との共同研究で学んだこと」, AA 研フォーラム, 2016.12.15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
20. 星泉・別所裕介・海老原志穂・ナムタルジャ「『チベット牧畜民の一日』解説付き上映」, FIELDPLUS café, 2017.1.18. サロンド富山房 FOLIO.
21. 星泉「牧畜文化事典をつくる: あるいは SERNYA が牧畜特集を組む理由」, 国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」, 2017.2.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
22. ナムタルジャ「チベットの牧畜社会におけるヤクの糞の名称とその利用法について: 中国青海省黄南チベット族自治州沢庫県の事例」, 国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」, 2017.2.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.

〔図書〕計5件

1. チベット文学研究会(星泉・海老原志穂他)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』vol. 4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全176頁.
2. ツェラン・トンドゥブ(海老原志穂・大川謙作・星泉・三浦順子訳)『闘うチベット文学 黒狐の谷』, 勉誠出版, 2017. 全412頁.
3. 平田昌弘『デーリイマンのご馳走』, デーリイマン社, 2017. 全116頁.
4. 平田昌弘(編著)『公開シンポジウムの記録 家畜化と乳利用その地域的特質をふまえて—搾乳の開始をめぐる谷伝説を手がかりにして—』, 2015年5月16日・17日 公開シンポジウム事務局, 2016. 全254頁.
5. Tsumagari, Shinichi, Meaningful to Behold: A Critical Edition and Annotated Translation of Longchenpa's Biography, Createspace Independent Publishing Platform, 2016. 150 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計16件

1. 海老原志穂「ヤクの名は。」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 6-7.
2. 海老原志穂「アムドの結婚式 —形式とその簡略化—」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 17-24.
3. 海老原志穂「ラダックで唯一の小説家 ツェワン・トルデン」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 119-123.
4. 平田昌弘「ミルクが支えてきた人びとの生活」, Dairy Professional, 5, デーリイ・ジャパン社, 2016. 26-27.
5. 平田昌弘「食事の重要な食材として浸透するチーズ 非乳文化圏・南米ペルーの乳加工と乳製品」『デーリイマン』65(6), デーリイマン社, 2016. 62-64.
6. 平田昌弘「ユーラシア大陸の乳文化から和食を考える」『京都新聞』2016年6月1日号, 京都新聞社, 2016. 7-7.
7. 平田昌弘「ヨーロッパの熟成チーズの源流をルーマニアを訪ねて 山岳地帯の移牧民が育んできた食の文化」『デーリイマン』65(11), デーリイマン社, 2016. 46-48.
8. 平田昌弘「ユーラシアにおけるチベット乳文化の特徴」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 36-39.
9. 別所裕介「空間を刷新する儀礼「ドッカ・ペンバ」—牧畜社会の厄払いと年越し行事」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 8-16.
10. 別所裕介「手縫いでないと作れない最高級の民族衣装「ツァル」—牧畜社会の毛皮加工とその技術」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 25-28.
11. 別所裕介「牧畜社会の通過儀礼—幼児の髪切り式を事例として」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 29-32.
12. 別所裕介「現代チベットにおける人間と家畜の宗教的関係」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 4-5.

13. 星泉「映像紹介『チベット牧畜民の一日』」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』4, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 44-49.
14. 星泉「チベット牧畜民の「今」を記録する」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 3-3.
15. 星泉「映像による記録とその功罪」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 10-11.
16. ナムタルジャ「牧童だった私の目にうつるもの」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 8-9.

インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築

期間：2014-2016 年度（代表：塩原朝子／所員 2, 共同研究員 19）

所員：塩原朝子, 渡辺己

共同研究員：阿部優子, 稲垣和也, 内海敦子, 長崎郁, 長屋尚典, 三宅良美, ADELAAR, Alexander, ARKA, I Wayan, ARTAWA, Ketut, BOWDEN, John, DE BUSSER, Rik, JUKES, Anthony Robert, Katubi, KRATOCHVIL, Frantisek, PAAT, Hendrik, RIESBERG, Sonja, SCHAPPER, Antoinette, SORIENTE, Antonia, Yanti

研究会等の内容

昨年度までと同様、年度当初は国外での言語ドキュメンテーション活動を行い、年度後半に国内での研究会を開催した。

8 月にはコタキナバル拠点で「マレーシア サバ州で話されている言語に関するワークショップ」を開催し、サバ州で話されているドゥスン語、スグ語、イラヌン語のドキュメンテーション作業を現地話者・共同研究員・研究協力者と共同で行った。11 月にはクーパンのアルタ・ワチャナ・クリスチャン大学で言語ドキュメンテーションに関するセミナーを開催した。2 月には第一回国内研究会を開催し、各自のデータの処理・アノテーション付与について情報交換を行うとともに、オーストラリアの言語アーカイブ PARADISEC へのデータ登録について話し合いを行った。

3 月には基幹研究「多言語多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」との共催で国際シンポジウム“Language Documentation and Corpus Linguistics”を開催し、ドキュメンテーションによって得られた一次資料から汎用的なコーパスを構築とする方法について、オーストラリアの CoEDL プロジェクトから Nick Evans 教授らを招聘し講演を企画した。また、3 月には第三回国内研究会として、「インドネシア ヌサ・トゥングラ・ティモール州の危機言語記録のためのワークショップ」を開催した。この研究会ではインドネシアから 6 名の危機言語話者（うち 2 名は言語学者）を、オランダとインドネシアからこの地域の言語の招聘し、共同研究員とともに言語ドキュメンテーション作業を行った。

研究成果一覧

〔学術論文〕計 3 件

1. Yanti, Documentary linguistics (DocLing) 2016 workshop: A reflection, *Asian and African Languages and Linguistics*, No.11, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2017. 73-81. (査読有)
2. Nathan, David and Anthony Jukes, Reflecting and shaping the evolution of documentary linguistics: Nine years of DocLing workshops, *Asian and African Languages and Linguistics*, No.11, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2017. 11-23. (査読有)
3. Jukes, Anthony, Asako Shiohara, and Yanti, Collaborative project for documenting minority languages in Indonesia and Malaysia, *Asian and African Languages and Linguistics*, No.11, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2017. 47-57. (査読有)

〔口頭発表等〕計 8 件

1. Jukes, Anthony, “Language Documentation”, INTERNTIONAL SEMINAR Documenting Languages: What, Why, and How”, 2016.11.28. Arta Wacana Christian University.
2. Yanti, “Making products from language documentation, INTERNTIONAL SEMINAR Documenting Languages: What, Why, and How”, 2016.11.28. Arta Wacana Christian University.

3. Soriente, Antonia, “Documentation of Kenyah and Punan languages of Kalimantan”, INTERNATIONAL SEMINAR Documenting Languages: What, Why, and How, 2016.11.28. Arta Wacana Christian University.
4. Soriente, Antonia, “Collecting data: what and how”, INTERNATIONAL WORKSHOP DOCUMENTING MINORITY LANGUAGES: THEORY AND PRACTICE, 2016.11.29-30. Arta Wacana Christian University.
5. Yanti, “Data Management”, INTERNATIONAL WORKSHOP DOCUMENTING MINORITY LANGUAGES: THEORY AND PRACTICE, 2016.11.29-30. Arta Wacana Christian University.
6. Jukes, Anthony, “Making Recordings”, INTERNATIONAL WORKSHOP DOCUMENTING MINORITY LANGUAGES: THEORY AND PRACTICE, 2016.11.29-30. Arta Wacana Christian University.
7. Soriente, Antonia, “Ethic in Language Documentation”, INTERNATIONAL WORKSHOP DOCUMENTING MINORITY LANGUAGES: THEORY AND PRACTICE, 2016.11.29-30. Arta Wacana Christian University.
8. Shiohara, Asako, and Yanti, “ELAN”, INTERNATIONAL WORKSHOP DOCUMENTING MINORITY LANGUAGES: THEORY AND PRACTICE, 2016.11.29-30. Arta Wacana Christian University.

〔図書〕計1件

Abe, Yuko, 『Kabendeni. Historia fupi ya wilaya ya Mpanda-Katavi na watu wake, kabila la Wabende /The Short History of Mpanda District – Katavi Region: Bende Tribe and its People／カタヴィ州シパンダ県小史：ベンデ民族とその人々』, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 113 pp.

朝鮮語アクセント・イントネーション研究

研究期間：2014–2016（代表：伊藤智ゆき／所員 1, 共同研究員 7）

所員：伊藤智ゆき

共同研究員：宇都木昭, 姜英淑, 孫在賢, 福井玲, 李文淑, Poppe, Clemens, WHITMAN, John

研究会等の内容

第1回研究会（通算第7回目） Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology

日時：2016年7月2日（土）9:50 - 19:30, 3日（日）10:00 - 16:40

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）大会議室(303)

使用言語：英語および日本語

共催：AA研国際研究集会, 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」

Poppe, Clemens (ILCAA Joint Researcher, National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“The role of word prosodic structure in the analysis of Japanese and Korean accent systems”

Hirako, Tatsuya (Komazawa University) 「外輪式アクセントに関する幾つかの問題 (Issues on the Gairin type accent)」

Hwang, Hyun Kyung (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“Biased questions in Tokyo Japanese and South Kyeongsang Korean”

Lee, Munsuk (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Science) 「韓国語方言のアクセントと頭子音」

Kubozono, Haruo (National Institute for Japanese Language and Linguistics)

“Mora and syllable in the pitch accent system of Koshikijima Japanese”

De Boer, Elisabeth “Universals of tone rules and Japanese”

Fukui, Rei (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo) “Accent shift in Korean and Japanese”

Ramsey, S. Robert (Maryland University) “Naturalness and Parsimony in Historical Reconstruction”

Son, Jaehyun (ILCAA Joint Researcher, Duksung Women’s University)

“Accent Types and Their Correspondences in Korean”

Utsugi, Akira (ILCAA Joint Researcher, Nagoya University)

“Kyungsang Korean tonal system from the perspective of sentence prosody”

Kang, Young suk (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Junior Fellow)

「韓国語釜山方言における複合動詞のアクセント (Accents of compound verbs in Busan dialect of Korean)」

Sohn, Hyangsook and Micheal Kenstowicz (Kyungpook National University & Massachusetts Institute of Technology)

“The accent of Korean names”

Matsumori, Akiko (Japan Women’s University) “Reconstruction of the accentual system of Proto-Northern Ryukyuan”

Pellard, Thomas (French National Centre for Scientific Research)

“Typological and historical-comparative perspectives on tone and vowel length in Ryukyuan”

Igarashi, Yosuke (Hitotsubashi University)

“A unified list of cognate words in Japanese and Ryukyuan for the purpose of historical comparative linguistics”

Uwano, Zendo (Professor emeritus, The University of Tokyo) 「長母音の短縮から核が生ずるか—服部仮説を巡って—」

第2回研究会（通算第8回目）

日時：2017年3月18日（土）13:30-17:10

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室(306)

小山内優子（AA研研究機関研究員）「中期朝鮮語のモダリティ形式 -l-ti- のアクセント」

杉山豊（京都産業大学）『杜詩諺解』初刊本に見出されるアクセントに関わる現象について—文献内に共存する変種への観察を通じて—

研究成果一覧

〔学術論文〕計11件

1. 姜英淑「韓国の寧越方言におけるアクセント性質—上東邑を中心に—」『言語文化研究』36巻1号, 松山大学総合研究所, 2016. 145-163.
2. 姜英淑「韓国語の寧越郡上東邑方言のアクセント資料」『言語文化研究』36巻1号, 松山大学総合研究所, 2016. 165-197.
3. Fukui, Rei, Rice and related words in Korean, *Studies in Asian Geolinguistics III*, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2016. 36-41.
4. Fukui, Rei, Milk in Korean, *Studies in Asian Geolinguistics III*, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2016. 42-45.
5. Fukui, Rei, Phonetic observations on Korean dialects made by Ogura Shinpei, *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics*, The Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2016. 112-126.
6. 福井玲「小倉進平の朝鮮語方言調査について—『朝鮮語方言の研究』所載資料の活用のために—」『東京大学言語学論集』37, 東京大学言語学研究室, 2016. 41-70. (査読有)
7. Ito, Chiyuki, Analogical change of accent in the verbal inflection of Yanbian Korean, *Lingua*, 183, 2016. 34-52. (査読有)
8. Ito, Chiyuki and Michael Kenstowicz, Pitch Accent in Korean, *Oxford Research Encyclopedia of Linguistics*, to appear. (査読有)
9. Son, Jayhyun and Chiyuki Ito, The accent of Korean native nouns: North Gyeongsang compared to South Gyeongsang, *Studies in Phonetics, Phonology and Morphology*, 22.3, The Phonology-Morphology Circle of Korea, 2016. 499-532. (査読有)
10. 孫在賢「韓国語と日本語のアクセントの対照研究」『日本語文学』75, 日本語学会, 2016. 33-48. (査読有)
11. 孫在賢「韓日言語の使役形と受身形のアクセント」『日本語学研究』47, 韓国日本語学会, 2016. 23-34. (査読有)

〔口頭発表等〕計4件

1. 姜英淑「韓国語釜山方言の接尾辞による派生語形成のアクセント」, 日本言語学会第152回大会, 2016.6.25-6.26. 慶応義塾大学.
2. 福井玲「金沢庄三郎による日本語と韓国語の比較研究について」, 国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」, 2016.09.17. 国際日本文化研究センター.
3. 福井玲「小倉進平 ui cosen'e pang'encosa.ey tayhaye」, 国立政治大学韓国語文学系創系60周年国際学術会議, 2016.06.25. 台湾国立政治大学.
4. Fukui, Rei, "Phonetic observations on Korean dialects made by Ogura Shinpei", The 3rd international conference on Asian Geolinguistics, 2016.05.24. Royal University of Phnom Penh.

〔図書〕計2件

1. 姜英淑『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』, 勉誠出版, 2017. 全258頁.
2. 福井玲(編)『小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈第1集(PDF版)』, 東京大学人文社会系研究科韓国朝鮮文化研究室, 2017. 全133+viii頁.

アジア地理言語学研究

研究期間：2015-2017（代表：遠藤光暁／所員 2, 共同研究員 18）

所員：峰岸真琴, 呉人徳司

共同研究員：遠藤光暁, 岩田礼, 植屋高史, 岸江信介, 倉部慶太, 近藤美佳, 清水政明, 白井聡子, 白石英才, 鈴木博之, 中井精一, 長渡陽一, 西本希呼, 深澤美香, 福嶋秩子, 松本亮, 八木壱二, TEERAROJANARAT, Sirivilai

研究会等の内容

第1回は2016年11月19日・20日に「風」と「鉄」をテーマとして18の発表・討論を行った。

第2回は2017年2月17日・18日に「名詞の数え方」をテーマとして16の発表・討論を行った。また通常の研究会とは別に2016年5月23・24日にカンボジアのプノンペン王立大学で第三回アジア地理言語学国際会議を開催した。これは本プロジェクトのメンバーが中心となった国際研究集会である。

研究成果一覧

〔学術論文〕計12件

1. 遠藤光暁「三種本《暹羅館譯語》的混合性質」『青山スタンダード論集』11, 青山学院大学青山スタンダード教育機構, 2016. 143–155.
2. Endo, Mitsuaki and Yoichi Isahaya, Yuan Phonology as reflected in Persian Transcription in the Ziji Ilkhānī, 『経済研究』8, 一橋大学経済研究所, 2016. 1–38.
3. 遠藤光暁「Karlgrén, Études sur la phonologie chinoise 百周年に寄せて」『中国語学研究開篇』34, 好文出版, 2016. i-II.
4. 遠藤光暁「侗水語支声調的地理分布」『從北方到南方：第三届中国地理語言学国際學術研討會論文集』, 科学出版社, 2016. 210–220.
5. 遠藤光暁「20世紀以來漢語幾個方言聲調調值史」『漢語研究的新貌 方言, 語法与文献 獻給余靄芹教授』, 香港中文大学中国文化研究所吳多泰中国語文研究中心, 2016. 305–317.
6. 遠藤光暁「雲南中国語方言の声調体系の地理分布と系譜関係」『アジア言語論叢』10, 神戸市外国語大学外国語学研究所, 2016. 127–133.
7. Iwata, Ray, Dialect Geography (Geolinguistics), *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics 2*, Brill, Leiden and Boston, 2016. 61–69. (査読有)
8. Iwata, Ray, Dialect and Language Atlases of China, *Encyclopedia of Chinese Language and Linguistics 2*, Brill, Leiden and Boston, 2016. 35–38. (査読有)
9. 鈴木博之「藏語方言學研究與語言地圖：如何看待“康方言”」『民族學刊』2, 西南民族大學, 2016. 1–13. (査読有)
10. 鈴木博之「試論東方藏區藏語土話的語法地圖：以判斷動詞與存在動詞為例」『從北方到南方：第三届中国地理語言学国際學術研討會論文集』, 科學出版社, 2016. 111–122.
11. 鈴木博之「麗江永勝県大安藏語的來歷初探：通過與納西族的接觸如何演變」『藏學學刊』14, 四川大学中国藏学研究所, 2017. 250–263. (査読有)
12. 鈴木博之「音変化のABA分布が語りうる言語史—チベット文化圏南東端のカムチベット語を例に」『言語記述論集』9, 言語記述研究会, 2017. 43–64.

〔口頭発表等〕計3件

1. Endo, Mitsuaki, “Problems in Yunnan Dialect Geography, with special reference to Yunlyue Yitong”, International Workshop on the “History of Colloquial Chinese—Written and Spoken”, 2016.3.10. Rutgers University.
2. 遠藤光暁「中古漢語音韻研究概観——以『切韻』系韻書為主」, 中古近代漢語工作坊, 2016.12.24. 浙江大学漢語史研究中心.
3. 岩田礼「類推与牽引对詞彙变化的的作用—以漢語方言的時間詞為例—」, 24 Annual Conference of International Society of Chinese Linguistics, 2016.7.20. 北京語言大学.

〔図書〕計2件

1. 遠藤光暁『元代音研究—『脈訣』ペルシャ語訳による』, 汲古書院, 2016. 全590頁.
2. 竹越孝・遠藤光暁『元明漢語文献目録』, 中西書局, 2016. 全579頁.

〔社会に向けた成果発表〕計1件

岩田礼「中国における方言—境界と越境—」『言語文化の越境, 接触による変容と普遍性に関する比較研究』, 2017. 11–34.

〔その他〕計1件

福井玲「小倉進平『朝鮮語方言の研究』所載資料による言語地図とその解釈 第1集 (PDF版)」, <http://www.l.u-tokyo.ac.jp/~fkr/%E5%B0%8F%E5%80%89%E9%80%B2%E5%B9%B3%E3%80%8E%E6%9C%9D%E9%AE%AE%E8%AA%9E%E6%96%B9%E8%A8%80%E3%81%AE%E7%A0%94%E7%A9%B6%E3%80%8F%E6%89%80%E8%BC%89%E8%B3%87%E6%96%99%E3%81%AB%E3%82%88%E3%82%8B%E8%A8%80%E8%AA%E5%9C%B0%E5%9B%B3%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E8%A7%A3%E9%87%88%E2%80%95%E>

東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究

研究期間：2015–2017（代表：Eric McCready／所員 1，共同研究員 17）

所員：峰岸真琴

共同研究員： McREADY, Eric, 伊藤さとみ, 大島義和, 高橋清子, 田窪行則, 長屋尚典, 野元裕樹, 原由理枝, 山田真寛, DAVIS, Christopher, KAUFMANN, Magdalena, KAUFMANN, Stefan, SOH, Hooi Ling, TANCREDI, Christopher, VANDER KLOK, Jozina, WINTERSTEIN, Gregoire, ZIMMERMANN, Malte

研究会等の内容

第1回研究会（通算第4回目） 日時：2016年6月12日（日）9:00-18:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）大会議室(303), 小会議室(302)

1. Soh, Hooi Ling (University of Minnesota) “Evidentiality, modality, focus and presupposition: The case of the discourse particle *punya* in Colloquial Malay”
2. AnderBois, Scott (Brown University) “A QUD-based account of the discourse particle *naman* in Tagalog”
3. Tan, Jennifer (Spanish National Research Council) “On the modality of Tagalog evidentials”
4. Takahashi, Kiyoko (ILCAA Joint Researcher, Kanda University of International Studies) “A literature review on Thai pragmatic particles”
5. Rieser, Lukas (Graduate school of Letters, Kyoto University) “A semantic analysis of German *ja* and *doch*”
6. Davis, Christopher (ILCAA Joint Researcher, University of the Ryukyus) “Semantics of evidentiality in Ryukyuan”

第2回研究会（通算第5回目） 日時：2016年12月3日（土）13:30-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）小会議室(302)

1. McCready, Eric (ILCAA Joint Researcher, Aoyama Gakuin University) (with Upsorn Tawilapakul) “Toward a Formal Analysis of Some Thai Particles”
2. Ito, Satomi (ILCAA Joint Researcher, Ochanomizu University) “Chinese particle questions and their answerhood”
3. Nomoto, Hiroki (ILCAA Joint Researcher, Tokyo University of Foreign Studies) and Asako Shiohara (ILCAA) “An Analysis of the Malay/Indonesian Particle “YA””

研究成果一覧

〔学術論文〕計20件

1. Oshima, David Y. and Eric McCready, Anaphoric demonstratives and mutual knowledge: The cases of Japanese and English, *Natural Language and Linguistic Theory*, 35, Springer, 2016. (査読有)
2. Oshima, David Y., The meanings of perspectival verbs and their implications on the taxonomy of projective content/conventional implicature, *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)*, 26, Linguistic Society of America, 2016. 43–60. (査読有)
3. Ito, Satoshi and David Y. Oshima, On two varieties of negative polar interrogatives in Japanese, *Japanese/Korean Linguistics*, 23, CSLI Publications, 2016. 229–243. (査読有)
4. Oshima, David Y., On the polysemy of the Japanese discourse particle *ne*: A study with special reference to intonation, *Forum of International Development Studies* 47(3), Nagoya University 2016. 1–17. (査読有)
5. 伊藤さとみ, Two types of disjunctions in Mandarin Chinese, 『人文科学研究』12, 新潟大学人文学部 2016. 336–346. (査読有)
6. Nomoto, Hiroki, Passives and clitic doubling: A view from Classical Malay, *AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association, Asia-Pacific Linguistics*, 2016. 179–193.
7. 野元裕樹, アズヌール・アイシャ・アブドゥッラー 「マレーシア語の焦点表現と名詞述語文」『語学研究所論集』21, 東京外国語大学, 2016. 171–189. (査読有)
8. Davis, Christopher and Eric McCready, Expressives in questions, *Proceedings of Semantics and Linguistic Theory (SALT)*, 26, CLC, 2016. 75–772. (査読有)
9. McCready, Eric, Rational Belief and Evidence-based Update, *Rationality: Constraints and Contexts*, Elsevier, 2016. 243–258. (査読有)
10. Gutzmann, Daniel and Eric McCready, Quantification with Pejoratives, *Pejoration*, John Benjamins, 2016. 75–101. (査読有)
11. 田窪行則 「琉球諸語研究の現在—消滅危機言語と向かい合う」『異文化コミュニケーション論集』15, 立教大学大学院異文化コミュニケーション研究科, 2017. 7–17.

12. 田窪行則「統語論の自律性について」『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』, 開拓社, 2016. 34–47.
13. 田窪行則「知識ベースの構造について」『日英対照・文法と語彙への統合的アプローチ』, 開拓社, 2016. 180–185.
14. Kaufmann, Magdalena, Free choice is a form of dependence, *Natural Language Semantics* 24, 2016. 247–290. (査読有)
15. Kaufmann, Magdalena, Fine-tuning natural language imperatives, *Journal of Logic and Computation*, Oxford University Press. 2016. (査読有)
16. Kaufmann, Magdalena and Stefan Kaufmann, Mood and Modality in Formal Semantics, *The Oxford Handbook of Mood and Modality*, Oxford Handbook Online, 2016. (査読有)
17. Takahashi, Kiyoko, Mandarin Chinese and Thai Expressions of Caused Motion: Different Caused-Motion Components in Verb-Serializing Languages, *Language and Linguistics in Oceania* 9, the Japanese Association of Linguistics in Oceania, 2017. 43–69. (査読有)
18. 高橋清子「タイ語「変化」表現の教え方：コーパスを用いた類義動詞表現の事例研究」『神田外国語大学紀要』 29, 017. 343–366. (査読有)
19. 高橋清子「タイ語の移動表現」『移動表現の類型論』, くろしお出版, 2017. 129–158.
20. 高橋清子「タイ王国の言語と文化」『知っておきたい環太平洋の言語と文化』, 神田外国語大学出版局, 2016. 102–111.

〔口頭発表等〕計 19 件

1. Oshima, David Y., “The meanings of perspectival verbs and their implications on the taxonomy of projective content/conventional implicature”, *Semantics and Linguistic Theory* 26, 2016.5.13. University of Texas Austin.
2. 石井友美・伊藤さとみ「中国語の正反疑問文に見られる干渉効果について」, 日本言語学会第 152 回大会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
3. Nomoto, Hiroki and Kartini Abd. Wahab, “Tipe pasif di- pada teks klasik Melayu”, Kongres Internasional Masyarakat Linguistik Indonesia (KIIMLI) 2016, 2016.8.24. インドネシア・ウダヤナ大学.
4. Nomoto, Hiroki, “Towards a proper description of vowel lowering in Malay”, The 18th International Symposium on Malay/Indonesian Linguistics (ISMIL), 2016.7.14. オーストラリア・メルボルン大学.
5. Nomoto, Hiroki, “Passives and clitic-doubling: A view from Classical Malay”, The 23rd Annual Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (AFLA), 2016.6.10. 東京外国語大学.
6. 野元裕樹「受動文の接語重複分析再考：古典マレー語の di-受動文」, 日本言語学会第 152 回大会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
7. Davis, Christopher and Eric McCready, “Expressives and Alternatives”, SALT26, 2016.5.12. University of Texas-Austin
8. Davis, Christopher and Eric McCready, “Convention and Inference in Japanese Antihonorification”, ICAL2015, 2016.12.15. Ho Chi Minh City.
9. Davis, Christopher and Eric McCready, “Expressives are Not Presuppositions: Evidence from Expressive wh-expressions”, NISM2016, 2016.9.8. Paris 7 Diderot.
10. McCready, Eric and Gregoire Winterstein, “Credibility and Social Meaning”, Workshop on Meaning and Optimality in Interaction, 2016.9.9. Paris 7 Diderot.
11. 長屋尚典「タガログ語のリンカー並行事態構文と節連結」, 日本言語学会第 153 回大会, 2016.12.3. 福岡大学.
12. Nagaya, Naonori, “Motion expressions in Tagalog: A cross-linguistic experimental study”, 94 Years of UP Department of Linguistics, 2016.8.12. University of the Philippines, Diliman.
13. Nagaya, Naonori, “Grammaticalization of the verb ʔəʔə ‘make’ in Lamaholot”, The 26th Annual Meeting of the Southeast Asian Linguistics Society, 2016.5.26. Manila.
14. 長屋尚典「ラマホロット語における ʔəʔə 「作る」による動詞連続とその文法化」, Luncheon Linguistics, 2016.5.18. 東京外国語大学語学研究所.
15. Kaufmann, Magdalena, “What ‘may’ and ‘must’ may be in Japanese”, 24th Japanese/Korean Linguistics, 2016.10.14. 国立国語研究所.
16. Kaufmann, Magdalena, “Models for natural language meaning”, Annual Symposium of the Association of Symbolic Logic (ASL), 2016.5.23. コネチカット大学.
17. Kaufmann, Magdalena, “Embedded imperatives”, Imperatives: Worlds and Beyond, 2016.6.12. ハンブルグ大学.
18. Kaufmann, Magdalena, “Speech acts: the view from linguistics”, NYU Philosophy of Language Colloquium, 2016.5.9. ニューヨーク大学.
19. Kaufmann, Magdalena and Stefan Kaufmann, “Stativity and Progressive The case of Japanese tokoro da”, *Sinn und Bedeutung* 21, 2016.9.4. エジンバラ大学.

〔図書〕計 3 件

1. 田窪行則, ジョン・ホイットマン, 平子達也『琉球諸語と古代日本語』, くろしお出版, 2016. 全312頁.
2. Nomoto, Hiroki, Takuya Miyuchi and Asako Shiohara, *AFLA 23: The Proceedings of the 23rd Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association*, Asia-Pacific Linguistics, 2016. 302 pp.
3. 野元裕樹『ポータブル日マレー英・マレー日英辞典』, 三修社, 2016. 全1,152頁.

〔社会に向けた成果発表〕計2件

1. 野元裕樹「英語格差を生きる」『言葉から社会を考える：この時代に〈他者〉とどう向き合うか』, 白水社, 2016. 65–67.
2. 長屋尚典「越境する言葉」『言葉から社会を考える：この時代に〈他者〉とどう向き合うか』, 白水社, 2016. 92–94.

〔その他〕計1件

野元裕樹「書評『統語論キータム事典』(Silvia Luraghi, Claudia Parodi (著), 外池滋生 (監訳), 江頭浩樹他 (訳), 開拓社)『英語教育』2017年2月号, 大修館書店.

通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング

研究期間：2015–2017 (代表：下地理則／所員 1, 共同研究員 11)

所員：中山俊秀

共同研究員：下地理則, 青井隼人, 麻生玲子, 重野裕美, 白田理人, 當山奈那, 中川奈津子, 新永悠人, 原田走一郎, 又吉里美, DAVIS, Christopher

研究会等の内容

本研究は、琉球諸語のケースマーキングに関する類型論的研究である。今年度の目標は、(1) 主語・目的語のハダカ標示(無助詞)を正面から扱うということと、(2) 上記に関連し、主題や焦点などの取り立て性と格標示を切り離さずに統一的に考えるパラダイムを模索するということ、であった。まず、(1)を達成するために、各メンバーの談話データを分析した結果を提示する作業を行い、さらに、当該のテーマを詳しく扱っている他の科研(科研基盤(C)、日本語の分裂自動詞性、研究代表：竹内史郎)や国立国語研究所(消滅危機方言プロジェクト)との連携をはかった。具体的には、これらの共同研究のメンバーを、AA研の研究会に招いて共同で議論を行うなどした。その結果、くろしお出版より、『日本語の格表現』という書籍を出版することが決まり、現在その編集作業を行っている(2017年度中に出版予定)。研究代表者は、この書籍の編者および執筆者を務めており、(1)に関する論考を寄稿している。(2)について、具体的な成果としては焦点標示と格標示の関連を探る共同の調査票の開発を終えたことが挙げられる。この調査票は、次年度の共同研究の成果として反映される予定である。

研究成果一覧

〔学術論文〕計3件

1. Shimoji, Michinori, Aspect and non-canonical object marking in the Irabu dialect of Ryukyuan, *Transitivity alternations in Japanese and beyond*, De Gruyter Mouton, 2016. 215–246. (査読有)
2. Shimoji, Michinori, Dialects, *Cambridge Handbook of Japanese Linguistics*, Cambridge University Press, in press. 100–133. (査読有)
3. 重野裕美・白田理人「北琉球奄美方言における有生性階層：奄美大島浦方言と喜界島上嘉鉄方言・小野津方言を例に」『広島経済大学研究論集』38(4), 2016.4. 111–133. (査読有)

〔口頭発表等〕計1件

下地理則「格体系を調べるための調査票の開発と利用」, 日本言語学会第153回大会, 2016.12.4. 福岡大学.

〔図書〕計1件

Shimoji, Michinori, *A Grammar of Irabu, a Southern Ryukyuan Language*, Kyushu University Press, 2017. 462pp.

公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究

研究期間：2015–2016 (代表：児倉徳和／所員 3, 共同研究員 10)

所員：児倉徳和, 呉人徳司, 山越康裕

共同研究員：梅谷博之, 海老原志穂, 風間伸次郎, 川澄哲也, 栗林均, 佐藤暢治, 照日格図(ジョリクト),

研究会等の内容

2016年度は3回の研究会を開催した。

第1回(通算第4回目) 日時: 2016年8月6日(土) 13:00-18:30

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

1. 風間伸次郎(AA研共同研究員, 東京外国語大学)「基礎語彙からみる河西回廊の諸言語」
2. 佐藤暢治(AA研共同研究員, 広島大学)「保安語の記述をめぐる諸問題—積石山方言を中心に」
3. データベースの構築に関する議論

第2回(通算第5回目) 日時: 2016年11月12日(土) 13:00-17:30・13日(日) 10:00-13:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

1. Sandman, Erika (ヘルシンキ大学) “Grammar of knowledge in Wutun”
2. Lefort, Julie (Mahatma Gandhi Institute, Mauritius) “An overview of Structural Borrowing and Calquing in the Dongxiang language”
3. Tokusu Kurebito (AA研所員) “Notes on phonological and morphological characteristics in Eastern Yugur”

第3回(通算第6回目) 日時: 2017年3月6日(月) 13:00-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

1. 児倉徳和(AA研所員)「叢書データベースについて」
2. 共同研究員によるコメント・ディスカッション
3. 成果公開のための相談

このほか、計約20回のデータ入力班ミーティングを行った。

研究成果一覧

〔学術論文〕計7件

1. Yamakoshi, Yasuhiro, Predicative non-past participles in The Secret History of the Mongols, *Altai Hakpo* 26, The Altaic Society of Korea, 2016. 85–101. (査読有)
2. 山越康裕「シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現: 分詞の定動詞化に関する3類型」『北方人文研究』10, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター, 2017. 79–98.
3. 風間伸次郎「条件と継起の連続性について—疑似条件形式を中心として—」『北方言語研究』7, 北海道大学大学院文学研究科, 2017. 35–68. (査読有)
4. 風間伸次郎「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」『北方人文研究』10, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター, 2017. 3–33.
5. Kazama, Shinjiro, Emotional predicates in “Altaic-type” languages, *Linguistic Typology of the North* 4, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2017. 131–153.
6. Kazama, Shinjiro, The inanimate subject from the perspective of linguistic area and linguistic typology, *Linguistic Typology of the North* 4, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, TUFS, 2017. 173–202.
7. 佐藤暢治「保安語積石山方言における一人称複数代名詞の包括形と除外形」『広島大学中国学プロジェクト研究センター紀要』1, 2016. 9–27. (査読有)

〔口頭発表等〕計5件

1. 栗林均「モンゴル語の伝統的字母表チャガン・トルゴイの系譜」, 日本モンゴル学会2016年度春季大会, 2016.5.21. 東北大学.
2. Yamakoshi, Yasuhiro, “Mongol torol khelnuudiin insubordination(Gishuun bus oguulber)” (in Mongolian; “Insubordination in Mongolic languages”), The 11th International Congress of Mongolists, 2016.8.17. National University of Mongolia.
3. 山越康裕「ブリヤート語未来分詞の文末用法: 分詞の『再名詞化』によるモダリティ表現」, 日本言語学会第152回大会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
4. 山越康裕「ブリヤート語の動詞*a-に由来する接語類」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2017.3.30. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
5. 佐藤暢治「保安語積石山方言の話し手は文が表す事態をどのように捉えているのか」, 日本言語学会第153回大会, 2016.12.3. 福岡大学.

〔図書〕計4件

1. 栗林均『土族語・漢語統合辞典』, 東北大学東北アジア研究センター, 2016. 全596頁.
2. 栗林均『「東郷語詞彙」 「新編東部裕固語詞彙」 蒙古文語索引』, 東北大学東北アジア研究センター, 2017. 全268頁.
3. 栗林均『オイラート文語三種統合辞典』, 東北大学東北アジア研究センター, 2017. 全582頁.
4. 馬沛霆, 佐藤暢治『保安語漢語詞典』, 民族出版社, 2016. 全198頁.

アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究

研究期間: 2016-2018 (代表: 梶茂樹/所員 2, 共同研究員 15)

所員: 澤田英夫, 品川大輔

共同研究員: 梶茂樹, 安部麻矢, 阿部優子, 角谷征昭, 神谷俊郎, 河内一博, 古閑恭子, 小森淳子, 塩田勝彦, 高村美也子, 仲尾周一郎, 古本真, 牧野友香, 米田信子, 若狭基道

研究会等の内容

第1回(通算第1回目)研究会 日時: 平成28年4月16日(土) 13:30-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 301室等

梶茂樹 (AA研共同研究員・京都産業大学)

1. 「研究会を始めるにあたっての趣旨説明」
2. 「Tembo語, Haya語, Ankole語, Tooro語, Nyoro語など, 幾つかのBantu系諸語の声調の類型」

第2回(通算第2回目)研究会 日時: 平成28年7月2日(土) 13:30-17:30

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 301室等

1. 塩田勝彦(AA研共同研究員・大阪大学非常勤講師)「ハウサ語の声調概観」
2. 阿部優子(AA研特任研究員)「ベンデ語のトーン類型」

第3回(通算第3回目)研究会 日時: 平成29年3月25日(土) 13:30-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) 302号室

1. 古本真(AA研共同研究員・京都大学)
「スワヒリ語マクンドゥチ方言のトーンとストレス名詞のプロソディ特徴について」
2. 米田信子(AA研共同研究員・大阪大学)「ヘレロ語の名詞の声調(Bantu R31)」

研究成果一覧

〔学術論文〕計6件

1. Abe, Maya, Relative clause constructions in Mbugu/Ma'a, *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies*, 2017. 169-180. (査読有)
2. Yoneda Nobuko, Conjoint/Disjoint Distinction and Focus in Matengo (N13), *The conjoint/disjoint alternation in Bantu*, Berlin: Mouton de Gruyter. 2017. 426-452. (査読有)
3. 米田信子「ヘレロ語とスワヒリ語の限定を表すとりたて小辞に関する試論」『スワヒリ&アフリカ研究』28, 大阪大学外国語学部スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室, 2017. 72-90.
4. 梶茂樹「非洲的語言与社会」『非洲研究』2016年第2巻, 中国社会科学出版社, 2016. 192-211.
5. 小森淳子「バンバラ語のアクセントについて」『スワヒリ&アフリカ研究』28, 大阪大学外国語学部スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室, 2017. 91-108.
6. 高村美也子「タンザニア・スワヒリ農村の食文化」『AFRICA』56, 一般社団法人アフリカ協会, 2016. 52-57.

〔口頭発表等〕計17件

1. 品川大輔「キリマンジャロ・バントゥ諸語記述研究の射程—マイクロバリエーション研究とその先」, AA研フォーラム, 2016.6.16. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 品川大輔「アフリカ都市言語研究の動向と都市言語の諸相—シェン(Sheng)を事例に—」, 日本アフリカ学会関西支部主催2016年度第1回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人々—日常生活の言語・文学・音楽—」, 2017.1.7. 大阪大学(豊中キャンパス).
3. 品川大輔「キリマンジャロのこぼれ—チャガ諸語の共時的 多様性と分岐のプロセス」, 京都大学タンザニアフィールドステーション セミナー(第18回), 2017.1.28. International School of Tanganyika (ダルエスサラーム・タンザニア).

4. 河内一博「私の研究の紹介」, NPO 法人「地球ことば村—世界言語博物館」ワークショップ「少数話者(危機)言語・研究未開発言語研究の推進に向けて」, 2017.1.22. 慶應義塾大学三田キャンパス.
5. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーション—アフリカでの言語調査から—」, NPO 法人「地球ことば村—世界言語博物館」講演会, 2017.1.22. 慶應義塾大学三田キャンパス.
6. 梶茂樹「アフリカ人のコミュニケーション」, 大阪国際サイエンスクラブ「特別懇談会」, 2017.1.16. 京都大学稲盛記念館.
7. Yoneda, Nobuko, “Noun-modifying construction: the forms and the head-modifier relation”, The 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.22. University of Helsinki.
8. 米田信子「バントゥ諸語の関係節に見られるマイクロバリエーション」, 日本言語学会第 153 回大会, 2016.12.3. 福岡大学.
9. 米田信子「バントゥ諸語の名詞修飾構文—意味関係と形式—」, Prosody & Grammar Festa, 2017.2.19. 国立国語研究所.
10. Abe, Yuko, “Toward Micro-variation Parameters of Persistent in Lake Tanganyika Bantu”, The 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.22. University of Helsinki.
11. 高村美也子「スワヒリ農村地域における在来儀礼の継続-タンザニア・ボンデイ社会の儀礼と外来宗教との併存」, 日本文化人類学会第 50 回大会, 2016.5.28. 南山大学.
12. 高村美也子「口頭文芸ことわざからの学び—無文字社会ボンデイにおいて」, ことわざフォーラム 2016, 2016.11.12. 武庫川女子大学.
13. Abe, Maya, “Counterfactual conditional sentences in Mbugu”, 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.20-22. University of Helsinki.
14. Abe, Maya, “Grammaticalization of tense and aspect markers in Ma’a/Mbugu”, 46th Colloquium on African Languages and Linguistics, 2016.8.29. Leiden University.
15. 若狭基道「ウォライタ語の n 音」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.4. 日本大学生物資源 科学部
16. 仲尾周一郎「南スーダンのアラビア語ポップス—都市言語と都市文化の 100 年—」, 日本アフリカ学会関西支部 2016 年度第 8 回例会・2016 年度第 1 回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人びと—日常会話・文学・音楽にみるアフリカの言語実践—」, 2017.1.7. 大阪大学.
17. Nakao, Shuichiro, “Monogenesis Theory Reassessed: A View from Arabic Pidgins and Creoles”, Creolistics Workshop XI, 2017.3.24. Justus Liebig University Gießen.

〔図書〕計 1 件

Kaji, Shigeki (ed.), *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. viii-437pp.

〔社会に向けた成果発表〕計 2 件

1. 品川大輔「「姿勢のよい闊歩」はどこから来てどこへ行くのか—バントゥ諸語の語彙分布から探る—」『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 16-17.
2. 小森淳子「アフリカ諸語研究最前線」『生産と技術』68(4), 生産技術振興協会, 2016. 83-86.

南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション

研究期間：2016-2018 (代表：中川裕/所員 1, 共同研究員 7)

所員：中山俊秀

共同研究員：中川裕, 大野仁美, 菅原和孝, 高田明, 田中二郎, 丸山淳子, Christfried Naumann

研究会等の内容

第 1 回 (通算第 1 回目) 研究会 日時：2016 年 5 月 21 日 (火) 12:30 - 18:30

場所：東京外国語大学本郷サテライト 8 階

中川裕「プロジェクト趣旨説明」の後、まず、南西カラハリ・コエ諸語の語彙の類型論的特徴についての次の 3 本の研究発表があり質疑応答を行った：

- (1) 中川裕「グイ・ガナ語の基礎色彩語彙」
- (2) 中川裕・田中二郎・菅原和孝「グイ・ガナ語の動物分類」
- (3) 大野仁美「グイ・ガナ語の親族語彙」。次に、南西カラハリ・コエ社会の理解について研究協力者からの次の 2 本の報告を受け、高田明をコメンテータとする討議をおこなった。

- (4) 杉山由里子「ブッシュマンにおける葬儀に関する初期報告」
- (5) 関口慶太郎「定住地カガエ調査報告」

第2回（通算第2回目）研究会

2017年3月25日から28日の南アフリカ共和国シーダーバーグで開かれた「国際コイサン言語学シンポジウム」のサテライト・ミーティングとして開催（参加者：中川，高田，丸山，大野，Christfried Naumann）。

各自の研究進捗について情報交換の後，中川「グイ語の基礎色彩名称」の発表を受けて質疑応答。

また，シンポジウム内で論じられたコイサン識字教育について本共同研究課題関連トピックの「言語ドキュメンテーションを現地社会に還元する手法」という視点から，中川と丸山がコメントを述べた。

さらに，中川・高田・大野は，本研究課題を紹介する『FIELDPLUS』18号の巻頭特集の編集と寄稿に関する最終調整を話し合った。

研究成果一覧

〔学術論文〕計14件

1. 中川裕「世界の色彩語の類型と進化：“ブッシュマン”の言語の調査がもたらす新知見」『総合文化研究』20，東京外国語大学，2017. 88–89.
2. 中川裕「グイ・ガナ言語民族誌的辞書の編纂：速報」『東京外国語大学論集』92，東京外国語大学，2016. 293–304.（査読有）
3. 中川裕「グイ語データ：情報構造と名詞述語文」『語学研究所論集』21，東京外国語大学語学研究所，2016. 269–274.（査読有）
4. Nakagawa, Hiroshi, The aspect system in G|ui: with special reference to postural features, *African Study Monograph Supplementary Issue 52*, CAAS, The Center for African Area Studies, 2016. 119–134.（査読有）
5. Nakagawa, Hiroshi, Khoisan phonotactics: a case study from G|ui, *Lone Tree, Scholarship in the Service of the Koon: Essays in memory of Anthony Traill*, Rüdiger Köppe Verlag, 2016. 301–310.（査読有）
6. Ono, Hitomi, Is Same Sex Sibling Avoidance or Joking?, *African Study Monograph Supplementary Issue 52*, CAAS, The Center for African Area Studies, 2016. 105–118.（査読有）
7. Ono, Hitomi, A comparison of kinship terminologies of West Kalahari Khoe: #Haba, Tshila, G|ui, G|ana, and Naro, *Lone Tree, Scholarship in the Service of the Koon: Essays in memory of Anthony Traill*, Rüdiger Köppe Verlag, 2016. 353–368.（査読有）
8. Takada, Akira, Introduction to the supplementary issue “Natural history of communication among the Central Kalahari San”, *African Study Monograph Supplementary Issue 52*, CAAS, The Center for African Area Studies, 2016. 5–25.（査読有）
9. Takada, Akira, Employing ecological knowledge during foraging activity: Perception of the landform among the G|ui and G|ana, *African Study Monograph Supplementary Issue 52*, CAAS, The Center for African Area Studies, 2016. 147–170.（査読有）
10. Takada, Akira, Education and learning during social situations among the Central Kalahari San, in H. Terashima & B. S. Hewlett (eds.) *Social learning and innovation in contemporary hunter-gatherers: Evolutionary and ethnographic perspectives*, Springer, 2016. 97–111.
11. Takada, Akira, Unfolding Cultural Meanings: Wayfinding Practices Among the San of the Central Kalahari, in W. Lovis & R. Whallon (eds.) *Marking the Land: Hunter-gatherer creation of meaning in their environment*, Routledge, 2016. 180–200.
12. 高田明「南西アフリカ（ナミビア）北中部のサンの定住化・キリスト教化」，池谷和信（編）『狩猟採集民からみた地球環境史：自然・隣人・文明との共生』，東京大学出版会，2017. 203–216.
13. 高田明「再演される出産—ボツワナにおける再定住政策と異常出産の治療儀礼」，松岡悦子（編）『子どもを産む・家族をつくる人類学：オールタナティブへの誘い』，勉誠出版，2017. 185–209.
14. 菅原和孝「環境と虚環境のはざまを飛び走る鳥たち：狩猟採集民グイの民族鳥類学を中心に」，野田研一・奥野克巳編著『鳥と人間をめぐる思考』勉誠出版，2016. 367–387.

〔口頭発表等〕計25件

1. Nakagawa, Hiroshi, “G|ui basic color terms. International Symposium of Khoisan Linguistics”, The 6th International Symposium of Khoisan Linguistics (Riezler 6), 2017.3.27. University of Cape Town.
2. 中川裕「世界色彩俯瞰プロジェクトとカラハリ狩猟採集民の基礎色彩語」，高知大学人文社会科学部人文社会科学科国際社会コース研究プロジェクト，2017.2.1. 高知大学.
3. 中川裕「コイサン音韻類型論：初期報告」，日本言語学会第153回大会，2016.12.3. 福岡大学.
4. 中川裕「グイ語の色彩語」，日本アフリカ学会第53回学術大会，2016.6.4. 日本大学生物資源科学部.

5. Ono, Hitomi, “Focus marking and focus constructions in G|ui”, The 6th International Symposium of Khoisan Linguistics (Riezler 6), 2017.3.26. University of Cape Town.
6. Naumann, Christfried, “Acoustic features for the distinction of plain stops in West !Xoon”, The 6th International Symposium of Khoisan Linguistics (Riezler 6), 2017.3.27. University of Cape Town.
7. Takada, Akira, “Reconsidering regional structural comparison”, The 6th International Symposium of Khoisan Linguistics (Riezler 6), 2017.3.27. University of Cape Town.
8. Takada, Akira, “Environmental perception and wayfinding practices in the Central Kalahari”, “Evolutionary Anthropology” seminar, EHES, 2017.3.20. Marseille, France.
9. Takada, Akira, “Participation in rhythm: !Xun socialization through singing and dancing activities”, Seminaire special du CLLE-LTC, 2017.3.15. Universite Toulouse - Jean Jaures.
10. Takada, Akira, “Kyoto School of Ecological Anthropology”, the course of Atelier ouvert des Cahiers d'Etudes Africaines, EHES, 2017.3.11. Paris, France.
11. Takada, Akira, “Panelist of conversation hour, “Fieldwork and Family””, the 46th Annual Meeting of the Society for Cross-Cultural Research (SCCR), 2017.3.3. Hampton Inn Convention Center, New Orleans, LA, USA.
12. Takada, Akira, “Practices of early cultural learning: Responsibility formation in caregiver-infant interaction among the G|ui/G|ana of Botswana”, the seminar of Laboratoire Ethologie, Cognition, Developpement, 2017.2.24. Universite Paris Ouest Nanterre La Defense, Paris.
13. Takada, Akira, “The cultural and ecological foundations of ethnicity among the !Xun of North-central Namibia”, the seminar of Comprendre les relations Afrique-Asie: espace transversal de recherches et d'enseignement (CRAA-ETRE), EHES, 2017.2.21. Paris, France.
14. Takada, Akira, “Participation in rhythm: Peer group interactions among the !Xun San of Namibia”, Tema Barn Higher seminar spring 2017, 2017.2.14. Linköping University, Sweden.
15. 高田明「ナミビア北中部、クンとオバンボのコンタクトゾーンにおける景観の変遷」、第2回景観形成の自然誌コロキウム, 2016.12.17. 京都大学.
16. 高田明「養育者—子ども間相互行為における三者関係の枠組みを用いた行為指示連鎖」、社会言語科学会第38回大会, 2016.9.4. 京都外国語大学.
17. Takada, Akira, “Deconstructing in- and out-group biases: An ethnographic approach”, the symposium “Lights and shadows of in and outgroup bias: From development and evolutionary views” at 31st International Congress of Psychology, 2016.7.29. Yokohama, Japan.
18. 高田明「子育ての相互行為分析: 言語的社会化論によるアプローチ」、日本文化人類学会第50回研究大会 分科会: 異分野から見た文化人類学: コラボレーションの可能性と問題点, 2016.5.29. 南山大学名古屋キャンパス.
19. Takada, Akira, “Towards the gesture analysis of early ethnographic films”, the workshop “Infant-Caregiver Interaction”, held at Human Ethology Film Archive, 2016.4.9. Frankfurt am Main, Germany.
20. Takada, Akira, “Is There Cultural Evidence for Different Conceptions of Attachment?”, Group discussion at Ernst Struengmann Forum “Contextualizing Attachment: The Cultural Nature of Attachment”, 2016.4.3-8. Frankfurt am Main, Germany.
21. 菅原和孝「交働する身体から境界の攪乱へ」、共創学会設立記念大会, 2017.3.21. 早稲田大学.
22. SUGAWARA, Kazuyoshi, “A Summary of Animal Borders: From phenomenology to <naturalography> of the evolution”, International Workshop: “The Situationality of Human-Animal Relations: Perspectives from Anthropology and Philosophy”, 2017.2.9. University of Cologne, Germany.
23. 菅原和孝「場に生成する身体: 会話・語り・身ぶり」、場の言語・コミュニケーション研究会主催公開講演会, 2017.1.7. 早稲田大学.
24. 菅原和孝「人類学の夢想とフィールドワークの経験」、日本保健医療社会学会2016年度第2回定例研究会(看護・ケア研究部会関東定例会共催), 2016.11.23. 首都大学東京秋葉原サテライトキャンパス.
25. 田中二郎「アフリカ狩猟採集民ブッシュマンの生活と社会——五〇年の記録」、穂高公民館主催一般講演会, 2016.6.15. 安曇野市穂高公民館.

〔図書〕計2件

1. Takada, Akira (ed.), *Special Issue: Natural history of communication among the Central Kalahari San. African Study Monographs, Supplementary Issue, 52*, CAAS, The Center for African Area Studies, 2016. 187 pp.
2. 菅原和孝『動物の境界: 現象学から展成の自然誌へ』, 弘文堂, 2017. 全718頁.

〔社会に向けた成果発表〕計1件

- 田中二郎「アフリカ狩猟採集民ブッシュマンの生活と社会——五〇年の記録」、穂高公民館主催一般講演会(2016.6.15)

参照文法書研究

研究期間：2016–2017（代表：渡辺己／所員 4，共同研究員 15）

所員：渡辺己，澤田英夫，児倉徳和，山越康裕

共同研究員：阿部優子，蝦名大助，加藤重広，川澄哲也，黒木邦彦，下地理則，千田俊太郎，仲尾周一郎，長屋尚典，新永悠人，林範彦，牧野友香，松本亮，吉岡乾，米田信子

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2016年7月24日（日）10:00-15:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室（306）

渡辺己（AA研所員）「趣旨説明と参照文法書について」

山越康裕（AA研所員）「モンゴル語族の文法書」

児倉徳和（AA研所員）「ツングース語族の文法書」

第2回研究会（通算第2回目） 日時：2016年11月26日（土）13:00-18:00・27日（日）10:30-15:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディア会議室（304）

11月26日

黒木邦彦（AA研共同研究員・神戸松蔭女子学院大学）「日本語方言の文法書について：通時的観点から」

加藤重広（AA研共同研究員・北海道大学）「日本語の文法書について」

吉岡乾（AA研共同研究員・国立民族学博物館）「ブルジャスキー語の文法書について」

全員 議論

11月27日

新永悠人（AA研共同研究員・成城大学）「日琉諸方言の文法書：研究史の整理」

下地理則（AA研共同研究員・九州大学）

「日琉諸方言の文法書：理論的・方法的な問題点と今後の動向について」

全員 議論と今後の予定について

第3回研究会（通算第3回目）「バントゥの会」 日時：2017年3月27日（月）13:00-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディア会議室（304）

米田信子（AA研共同研究員・大阪大学）

「バントゥ諸語の参照文法書 — バントゥ諸語研究における参照文法の位置づけを中心に—」

阿部優子（AA研共同研究員・AA研特任研究員）「タンガニカ湖バントゥ諸語の参照文法」

牧野友香（AA研共同研究員・大阪大学大学院生）「ランバ語の文法書—動詞に関する問題を中心に」

全員 全体討議および連絡事項等

研究成果一覧

〔学術論文〕計16件

1. Yamakoshi, Yasuhiro, Predicative non-past participles in The Secret History of the Mongols, *Altai Hakpo* 26, The Altaic Society of Korea, 2016. 85–101. (査読有)
2. 山越康裕「シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現：分詞の定動詞化に関する3類型」『北方人文研究』10, 北海道大学大学院文学研究科北方研究教育センター, 2017. 79–98.
3. 加藤重広「文脈の科学としての語用論—演繹的文脈と線条性」『語用論研究』18, 日本語用論学会, 2017. 78–101.
4. 加藤重広「北奥方言における行為要求方言」『北海道大学文学研究科紀要』151, 2017. 49–59.
5. Yoshioka, Noboru, Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan, *Bulletin of the National Museum of Ethnology* (『国立民族学博物館研究報告』) 41(2), 国立民族学博物館, 2017. 109–125. (査読有)
6. Yoshioka, Noboru, Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view, *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics (Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 1)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2016. 38–45.
7. Yoshioka, Noboru, Milk: South Asia (IE (Aryan, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski), *Studies in Asian Geolinguistics, III*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2016. 24–25.
8. Yoshioka, Noboru, Rice: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski), *Studies in Asian Geolinguistics, II*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2016. 19–20.

9. Yoshioka, Noboru, Sun: South Asia (IE (Indic, Iranian, Nuristani), Dravidian, Andamanese, Nihali, Burushaski), *Studies in Asian Geolinguistics, I*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2016. 22–23.
10. 蝦名大助「日本語とケチュア語—文法関係と情報構造, 語順」『日本語学』35-6, 明治書院, 2016. 72–81.
11. Yoneda, Nobuko, Conjoint/Disjoint Distinction and Focus in Matengo (N13), *The conjoint/disjoint alternation in Bantu*. Berlin: Mouton de Gruyter. 2017. 426–452. (査読有)
12. 米田信子「ヘレロ語とスワヒリ語の限定を表すとりたて小辞に関する試論」『スワヒリ&アフリカ研究』28, 大阪大学外国語学部スワヒリ語・アフリカ地域文化研究室, 2017. 72–90.
13. 千田俊太郎「ウェブと語彙集: 朝鮮語済州方言語彙集研究の課題と展望」『ありあけ 熊本大学言語学論集』16, 熊本大学文学部言語学研究室, 2017. 35–46.
14. 千田俊太郎「ドム語の移動表現」『移動表現の類型論』, くろしお出版, 2017. 159–187.
15. Watanabe, Honoré, Insubordination in Sliammon Salish, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 309–340. (査読有)
16. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, The dynamics of insubordination, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 1–38. (査読有)

〔口頭発表等〕計 19 件

1. Yamakoshi, Yasuhiro, “Language documentation of Mongolic languages spoken in the northeast of China: a case of Shinekhen Buryat”, *Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP2016)*, 2016.4.8. The University of Hong Kong.
2. Yamakoshi, Yasuhiro, “Монгол төрөл хэлнүүдийн “insubordination (гишүүн бус өгүүлбэр)” “(in Mongolian; “Insubordination in Mongolic languages””, *The 11th International Congress of Mongolists*, 2016.8.17. National University of Mongolia.
3. 山越康裕「ブリヤート語未来分詞の文末用法：分詞の『再名詞化』によるモダリティ表現」, 日本言語学会第 152 回大会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
4. 加藤重広「3つの推意とタ形」『構文の意味と広がり』研究会, 2016.10.8. 大妻女子大学.
5. 加藤重広「日本語関係節構造の類型性と語用論的制約」, 国立国語研究所国際共同研究プロジェクト『名詞修飾構文の対照研究』, 2016.11.19. 名古屋大学.
6. 加藤重広「文脈の科学としての語用論」, 日本語用論学会第 19 回年次大会, 2016.12.11. 下関市立大学.
7. Yoshioka, Noboru, “Using of Urdu numerals in languages of northern Pakistan”, *日本南アジア学会 第 29 回全国大会*, 2016.9.25. 神戸市外国語大学.
8. Yoshioka, Noboru, “Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view”, *3rd International Conference on Asian Geolinguistics*, 2016.5.24. Royal University of Phnom Penh.
9. Yoshioka, Noboru, “Spatial expressions in Burushaski”, *32nd South Asian Languages Analysis Roundtable*, 2016.4.28. Universidade de Lisboa.
10. 蝦名大助「カムサ語の動詞における人称標示—肯定形の場合—」, 日本言語学会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
11. Yoneda, Nobuko, “Noun-modifying construction: the forms and the head-modifier relation”, *The 6th International Conference on Bantu Languages*. 2016.6.22. University of Helsinki.
12. 米田信子「バントゥ諸語の関係節に見られるマイクロバリエーション」, 日本言語学会第 153 回大会, 2016.12.3. 福岡大学.
13. 米田信子「バントゥ諸語の名詞修飾構文—意味関係と形式—」, *Prosody & Grammar Festa*, 2017.2.19. 国立国語研究所.
14. 松本亮「ツングースとサモエードの民族接触の可能性」, 日本シベリア学会, 2016.11.19. 千葉大学.
15. 松本亮「ネネツ語の声門閉鎖音の音声的実現について」, 2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2017.3.30. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター(羽田記念館).
16. 牧野友香「ベンバ語および周辺言語のテンス・アスペクト体系の概要」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2015.6.4. 日本大学.
17. 千田俊太郎「朝鮮語済州方言語彙集研究の現状と課題: 辞書作りを通して」, 言語記述研究会, 2017.3.26. 京都大学.
18. 千田俊太郎「ドム語は「パプア諸語的」か: パプア諸語研究史を辿る」, 言語記述研究会, 2016.7.17. 京都大学.
19. 渡辺己「スライアモン・セイリッシュ語における動詞結合価の操作について」『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 20 回研究会, 国際日本研究センター対照日本語部門主催, 2016.12.17. 東京外国語大学.

〔図書〕計 3 件

1. 加藤重広・安藤智子『基礎から学ぶ音声学講義』, 研究社, 2016. 全260頁.
2. 加藤重広・滝浦真人(編著)『語用論研究法ガイドブック』, ひつじ書房, 2016. 全296頁.
3. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. xii, 435pp.

[社会に向けた成果発表] 計1件

千田俊太郎「ドム語の重複 —繰り返し言葉」2016.11.25 講演, 2016.12.14youtube 公開. 38:41.

(URL: <https://www.youtube.com/watch?v=dNiMDxKJoK0&t=229s>)

[その他] 計2件

1. 千田俊太郎「デジタル博物館「濟州島の文化と言語」—対訳語彙集」, <http://kikigengo.jp/jeju/doku.php?id=exhibition:start>
2. 千田俊太郎「パプア諸語と日本語の源流」, 国際日本文化研究センター共同研究会「日本語の起源はどのように論じられてきたか—日本言語学史の光と影」, 第5回共同研究会, 2017.01.07

「アルタイ型」言語に関する類型的研究

研究期間: 2015–2017 (代表: 山越康裕/所員 4, 共同研究員 14)

所員: 山越康裕, 呉人徳司, 児倉徳和, 渡辺己

共同研究員: 麻生玲子, 梅谷博之, 江畑冬生, 蝦名大助, 風間伸次郎, 鍛冶広真, 下地理則, 松本亮, 吉岡乾, 吉村大樹, 白尚燁, 蔡熙鏡, JIN, Gang, SYURYUN, Arzhaana

研究会等の内容

第1回研究会(通算第4回目) 日時: 2016年7月3日(日) 10:00-16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

蔡熙鏡(AA研共同研究員・東京外国語大学大学院)

「ニヴフ語の名詞+名詞複合体と動詞+動詞複合体について」

松本亮(AA研共同研究員・京都外国語大学)「語の合成方法の種類〜エヴェンキ語とネネツ語の対照」

風間伸次郎(AA研共同研究員・東京外国語大学)「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」

全員 総合討論

第2回研究会(通算第5回目) 日時: 2016年10月1日(土) 13:00-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

蝦名大助(AA研共同研究員・神戸山手大学)「ケチュア諸語の関係節」

日高晋介(東京外国語大学大学院)「ウズベク語の -(a)r / -mas は形動詞なのか?」

山田洋平(東京外国語大学大学院)「ダグール語の動詞 aa」

第3回研究会(通算第6回目) 日時: 2017年2月11日(土) 13:00-18:00

場所: AA研マルチメディアセミナー(306)

吉岡乾(AA研共同研究員・国立民族学博物館)「ブルシヤスキー語の節連結」

梅谷博之(AA研共同研究員・東京大学)「モンゴル語の連体節」

全員 総合討論

研究成果一覧

[学術論文] 計21件

1. Watanabe, Honoré, Insubordination in Sliammon Salish, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 309–340. (査読有)
2. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, The dynamics of insubordination, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 1–38. (査読有)
3. Yoshioka, Noboru, Nominal Echo-Formations in Northern Pakistan, *Bulletin of the National Museum of Ethnology* (『国立民族学博物館研究報告』) 41(2), 2017. 109–125. (査読有)
4. Yoshioka, Noboru, Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view, *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics (Studies in Asian Geolinguistics, Monograph Series No. 1)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2016. 38–45.
5. Ebata, Fuyuki, Studies on Altaic languages in Japan: An overview and two recent studies on Sakha, *Language, Communication and Culture*.3, 2016. 48–65.

6. 江畑冬生「トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性」『北方言語研究』7, 北海道大学大学院文学研究科, 2017. 23–33. (査読有)
7. Ebata, Fuyuki, The linguistic status of Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages, *Linguistic Typology of the North North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 53–66.
8. 江畑冬生「サハ語(ヤクート語)の『双数』の解釈—聞き手の数からの分析—」『言語研究』151, 日本言語学会, 2017. 63–74. (査読有)
9. 蝦名大助「日本語とケチュア語—文法関係と情報構造, 語順」『日本語学』35(6), 明治書院, 2016. 72–81.
10. 風間伸次郎「条件と継起の連続性について—疑似条件形式を中心として—」『北方言語研究』7, 北海道大学大学院文学研究科, 2017. 35–68. (査読有)
11. 風間伸次郎「アルタイ型言語における主要部内在型関係節について」『北方人文研究』10, 北海道大学北方研究教育センター, 2017. 3–33.
12. Kazama, Shinjiro, Emotional predicates in “Altaic-type” languages, *Linguistic Typology of the North North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 131–153.
13. Kazama, Shinjiro, On the linguistic type of Japanese: Toward an understanding of “Altaic-type” languages, *Linguistic Typology of the North North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 155–172.
14. Kazama, Shinjiro, The inanimate subject from the perspective of linguistic area and linguistic typology, *Linguistic Typology of the North North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 173–202.
15. Yamakoshi, Yasuhiro, Predicative non-past participles in The Secret History of the Mongols, *Altai Hakpo* 26, The Altaic Society of Korea, 2016. 85–101. (査読有)
16. 山越康裕「シネヘン・ブリヤート語の2種類の未来表現: 分詞の定動詞化に関する3類型」『北方人文研究』10, 北海道大学北方研究教育センター, 2017. 79–98.
17. Baek, Sangyub, Grammatical peculiarities of Oroqen Evenki from the perspective of genetic and areal linguistics, *Linguistic Typology of the North North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 13–31.
18. 白尚燁「指小辞の意味機能における普遍構造から見たツングース諸語の接辞*-jukan」『北方人文研究』10, 北海道大学北方研究教育センター, 2017. 35–49.
19. 白尚燁「Jiyeog eoneohakjeon gwanjeom eseo bon tungguseu eojog ui budongsaeomi *-mi wa *-rAki-[=地域言語学的観点から見たツングース諸語の副動詞語尾*-mi と*-rAki-]」『民族文化研究』73, 高麗大学民族文化研究院, 2016. 1–29. (査読有)
20. Kurebito, Tokusu, Diversity of the passive voice in the Mongolic languages, *Linguistic Typology of the North(Vol.4)*, Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa (ILCAA), Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 1–11.
21. 呉人徳司「東部ユグル人とその言語」『現代中国における言語政策と言語継承』3, 三元社, 2016. 72–81. (査読有)

〔口頭発表等〕計26件

1. 渡辺己「スライアモン・セイリッシュ語における動詞結合価の操作について」『外国語と日本語との対照言語学的研究』第20回研究会, 国際日本研究センター対照日本語部門主催, 2016.12.17. 東京外国語大学.
2. Yoshioka, Noboru, “Using of Urdu numerals in languages of northern Pakistan”, 日本南アジア学会第29回全国大会, 2016.9.25. 神戸市外国語大学.
3. Yoshioka, Noboru, “Domaaki as a language of northern Pakistan: from a geolinguistic point of view”, 3rd International Conference on Asian Geolinguistics, 2016.5.24. Royal University of Phnom Penh.
4. Yoshioka, Noboru, “Spatial expressions in Burushaski”, 32nd South Asian Languages Analysis Roundtable, 2016.4.28. Universidade de Lisboa.
5. Ebata, Fuyuki, “Studies on Altaic linguistics in Japan”, The third international conference on Altaistics, Altaic languages 2016, 2016.5.27. North-Eastern Federal University, Yakutsk, Russia.
6. Ebata, Fuyuki, “The linguistic status of Sakha (Yakut): A contrastive analysis with Turkic and Tungusic languages”, International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia, 2016.7.9. Niigata University, Japan.
7. 江畑冬生「トゥバ語との対照から明らかになるサハ語の規則性と義務性」, 日本言語学会第153回大会, 2016.12.3. 福岡大学.

8. 松本亮「ツングースとサモエードの民族接触の可能性」, 日本シベリア学会, 2016.11.19. 千葉大学.
9. 松本亮「ネネツ語の声門閉鎖音の音声的实现について」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2017.3.30. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館) .
10. Yamakoshi, Yasuhiro, “Language documentation of Mongolic languages spoken in the northeast of China: a case of Shinekhen Buryat”, *Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP2016)*, 2016.4.8. The University of Hong Kong
11. Yamakoshi, Yasuhiro, “Mongol torol khelnuudiin “insubordination (Gishuun bus oguulber)” (in Mongolian; “Insubordination in Mongolic languages)””, *The 11th International Congress of Mongolists*, 2016.8.17. National University of Mongolia.
12. 山越康裕「ブリヤート語未来分詞の文末用法：分詞の『再名詞化』によるモダリティ表現」, 日本言語学会第152回大会, 2016.6.25. 慶應義塾大学.
13. 山越康裕「ブリヤート語の動詞*a-に由来する接語類」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」, 2017.3.30. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター (羽田記念館) .
14. Baek, Sangyub, “Grammatical status of Oroqen Evenki from the perspective of linguistic geography”, *International Workshop: Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia*, 2016.7.9. 新潟大学.
15. Baek, Sangyub, “Jiyeogeoneohakjeok gwanjeomeseo bon Manjueo [=地域言語学的観点から見た満州語]”, *The 6th International Conference of Center for Manchu Studies The Research on Manchu Language Grammar and Education*, 2016.6.3. 高麗大学.
16. Kurebito, Tokusu, “Diversity of the passive voice in the Mongolic languages”, *International Workshop “Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia”*, 2016.7.8. Niigata University.
17. Kurebito, Tokusu, “Some questions of causative and passive in Khorchin dialect of Mongolian”, *the 11th International Congress of Mongolists*, 2016.8.16. Ulaanbaatar, Mongolia.
18. Kurebito, Tokusu, “Notes on Tense in the Mongolic Languages”, *International symposium on Time and Language*, 2016.8.26. Turku, Finland.
19. Kaji, Hiromi, “Stem Alternation and Suffix Allomorphy in Ewen”, *Slavic-Eurasian Research Center 2016 Summer International Symposium Russia’s Far North: The Contested Frontier, Young researchers’ seminar*, 2016.7.6. 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター.
20. 鍛冶広真「エウエン語の接尾辞付加と交替現象を引き起こす音韻的条件」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
21. 児倉徳和「シベ語における意図と知識についての予備的考察」, *Luncheon Linguistics*, 2016.4.13. 東京外国語大学語学研究所.
22. 児倉徳和「论满语及锡伯语的动词形态系统简化」, 国学与丝绸之路历史文化研究国际学术讨论会 (满学组) / 第二届国际满文文献学术研讨会, 2016.8.24. 中国人民大学国学院, 冯其庸学术馆.
23. 児倉徳和「论锡伯语助动词构成的意愿性范畴」, 第1回錫伯族言語文化国際学術討論会 (首届錫伯族語言与文化国际学术研讨会), 2016.9.9. 伊犁师范学院錫伯語言文化研究中心.
24. 児倉徳和「錫伯语的情态系统」, 首届錫伯語語言文化国际研讨会, 2016.10.26. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
25. 児倉徳和「ことばを手がかりにシベ人の思考を探る」, フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」, 2016.11.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
26. 児倉徳和「シベ語の補助動詞 o- のテンポラリティとモダリティ」, 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30. 京都大学大学院文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.

[図書] 計2件

1. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. xii, 435 pp.
2. Ebata, Fuyuki and Tokusu Kurebito, *Linguistic Typology of the North (Vol.4)*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 201 pp.

バントウ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究 (フェーズ1)

研究期間：2016–2018 (代表：阿部優子／所員 2, 共同研究員 16)

所員：渡辺己, 品川大輔

共同研究員：阿部優子, 安部麻矢, 梶茂樹, 角谷征昭, 神谷俊郎, 小森淳子, 塩田勝彦, 古本真, 牧野友香, 森本雪子, 米田信子, 若狭基道, Koen Boston, Lutz Marten, Nancy C. Kula, Seunghun Lee

研究会等の内容

第1回(通算第1回目)研究会 日時:平成28(2016)年4月17日(日)11:00-17:00

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)セミナー室(301)

- 1) 全体討議(年度ごとの目標)
- 2) 阿部優子(AA研共同研究員・東京外国語大学)「マイクロバリエーション研究概説」
- 3) 品川大輔(AA研所員), コメンテーター:森本雪子(AA研共同研究員・フンボルト大学)
「マイクロバリエーションの事例研究:いくつかの具体例」

第2回(通算第2回目)研究会 日時:平成28(2016)年12月17日(土)13:00-18:00

場所:東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研)小会議室(302)

- 1) 全員「Microvariation 19 パラメーターに沿った, 参加者担当言語のデータ発表および討議」
- 2) 品川大輔(AA研所員)「ダルエスサラーム大学 Microvariation ワークショップ報告」
- 3) 品川大輔(AA研所員)・阿部優子(AA研共同研究員/AA研特任研究員)
「最新版 Microvariation パラメーター内容の紹介およびバントゥ諸語のマイクロバリエーション国際ワークショップ(3月3-5日開催予定)の事前打ち合わせ」

第3回(通算第3回目)研究会 日時:平成29(2017)年3月3・4・5日(金~日)10:30-18:00

場所:AA研マルチメディア会議室(304)

3月3日

- 1) Marten, Lutz, Hannah Gibson and Rozenn Guérois (SOAS, University of London)
“Morphosyntactic variation in Bantu: Convergence and divergence”
- 2) Bostoen, Koen (Ghent University) “Micro-variation and historical reconstruction in the West-Coastal Bantu languages”
- 3) Mapunda, Gastor (University of Dar es Salaam)
“An Account of Contact-Induced Language Instability in the Tanzanian Ngoni Language”

3月4・5日 Workshop: based on Guérois et al. (2016) “Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list”

研究成果一覧

[学術論文] 計8件

1. 小森淳子「バンバラ語のアクセントについて」『スワヒリ&アフリカ研究』28, 2017.
2. Yoneda, Nobuko, Conjoint/Disjoint Distinction and Focus in Matengo (N13), *The conjoint/disjoint alternation in Bantu*, Berlin: Mouton de Gruyter, 2017. 426-452. (査読有)
3. 米田信子「ヘレロ語とスワヒリ語の限定を表すとりにたて小辞に関する試論」『スワヒリ&アフリカ研究』28, 2017. 72-90.
4. Abe, Maya, Relative clause constructions in Mbugu/Ma'a, *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics*, Research institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 169-180. (査読有)
5. 梶茂樹「非洲の語言与社会」『非洲研究』2016年第2巻, 中国社会科学出版社, 2016. 192-211.
6. Morimoto, Yukiko, “The Kikuyu focus marker *nĩ*: formal and functional similarities to the conjoint/disjoint system”, *The Conjoint/Disjoint Alternation in Bantu.*, De Gruyter, 2017. 147-174. (査読有)
7. Watanabe, Honoré, “Insubordination in Sliammon Salish”, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 309-340. (査読有)
8. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, “The dynamics of insubordination”, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. 1-38. (査読有)

[口頭発表等] 計16件

1. Abe, Yuko, “Toward Micro-variation Parameters of Persistent in Lake Tanganyika Bantu”, The 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.22. University of Helsinki.
2. 品川大輔「キリマンジャロ・バントゥ諸語記述研究の射程—マイクロバリエーション研究とその先」, AA研フォーラム, 2016.6.16. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 品川大輔「アフリカ都市言語研究の動向と都市言語の諸相—シェン(Sheng)を事例に—」, 日本アフリカ学会関西支部主催2016年度第1回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人々—日常生活の言語・文学・音楽—」, 2017.1.7. 大阪大学(豊中キャンパス).
4. 品川大輔「キリマンジャロのことば—チャガ諸語の共時的多様性と分岐のプロセス」, 京都大学タンザニアフィールドステーションセミナー(第18回), 2017.1.28. International School of Tanganyika (ダルエスサラーム・タンザニア).
5. Yoneda, Nobuko, “Noun-modifying construction: the forms and the head-modifier relation”, The 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.22. University of Helsinki.

6. 米田信子「バントゥ諸語の関係節に見られるマイクロバリエーション」, 日本言語学会第 153 回大会, 2016.12.3. 福岡大学.
7. 米田信子「バントゥ諸語の名詞修飾構文—意味関係と形式—」, *Prosody & Grammar Festa*, 2017.2.19. 国立国語研究所.
8. Abe, Maya, “Counterfactual conditional sentences in Mbugu”, 6th International Conference on Bantu Languages, 2016.6.20-22. University of Helsinki.
9. Abe, Maya, “Grammaticalization of tense and aspect markers in Ma’a/Mbugu”, 46th Colloquium on African Languages and Linguistics, 2016.8.29. Leiden University.
10. 若狭基道「ウォライタ語の n 音」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.4. 日本大学生物資源科学部
11. 梶茂樹「無文字社会の文字的コミュニケーション —アフリカでの言語調査から—」, NPO 法人「地球ことば村—世界言語博物館」講演会, 2017.1.22. 慶應義塾大学三田 キャンパス.
12. 梶茂樹「アフリカ人のコミュニケーション」, 大阪国際サイエンスクラブ「特別懇談会」, 2017.1.16. 京都大学稲盛記念館.
13. Morimoto, Yukiko, “Verb doubling vs. the Conjoint/Disjoint Alternation”, International Conference on Bantu Languages, 2016.6.19. University of Helsinki.
14. Morimoto, Yukiko, “Cross-Bantu variation in the expression of predicate-centered focus and its implications for the study of grammaticalization”, International Conference on Bantu Languages, 2016.6.22. University of Helsinki.
15. 牧野友香「ベンバ語および周辺言語のテンス・アスペクト体系の概要」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2015.6.4. 日本大学.
16. 渡辺己「スライアモン・セイリッシュ語における動詞結合価の操作について」『外国語と日本語との対照言語学的研究』第 20 回研究会, 国際日本研究センター対照日本語部門主催, 2016.12.17. 東京外国語大学.

〔図書〕計 3 件

1. Abe, Yuko, 『Kabendeni. Historia fupi ya wilaya ya Mpanda-Katavi na watu wake, kabila la Wabende /The Short History of Mpanda District - Katavi Region: Bende Tribe and its People／カタヴィ州ンパンダ県小史：ベンデ民族とその人々』, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 3.20. 113 pp. ISBN 978-4-86337-239-9.
2. Kaji, Shigeki (ed.), *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2017.3.17. viii-437 pp. ISBN 978-4-86337-233-7.
3. Evans, Nicholas, and Honoré Watanabe, *Insubordination*, John Benjamins, 2016. xii, 435 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計 2 件

1. 小森淳子「アフリカ諸語研究最前線」『生産と技術』68(4), 生産技術振興協会, 2016. 83-86.
2. 品川大輔「「姿勢のよい闊歩」はどこから来てどこへ行くのか—バントゥ諸語の語彙分布から探る—」, 『FIELDPLUS』17, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 16-17.

インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間

研究期間：2014-2016（代表：宮原暁／所員 1, 共同研究員 9）

所員：床呂郁哉

共同研究員：宮原暁, 市川哲, 王柳蘭, 片岡樹, 河合洋尚, 木村自, 中西裕二, 三尾裕子, 横田祥子

研究会等の内容

第 1 回研究会（10 月 23 日開催）では、共同研究員のうち 5 人（宮原, 片岡, 河合, 三尾, 木村）が出席して、主として華僑華人が移動する空間に関して、研究成果の取りまとめに向けた検討を行った。

第 2 回研究会（2 月 26 日開催）では、1) “The Ethnic Chinese Women in the Philippines: Changes in the Family Role and Social Role” (Ao, Mengling, 大阪大学大学院研究生) 3) 「本プロジェクトにおける主要な成果」(宮原暁・大阪大学) の各報告を行った。

研究成果一覧

〔学術論文〕計 9 件

1. 横田祥子「インドネシア華人女性の国際結婚を通じた世帯保持：西カリマンタン州シンカワン市の事例から」『華僑華人研究』13, 日本華僑華人学会, 2016. 27-44. (査読有)
2. 横田祥子, 原めぐみ「7 章 表象としての『女性』」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 141-161. (査読有)

3. 横田祥子「東南アジア系台湾人の誕生:五大エスニックグループ時代の台湾人像」『アジア遊学 204 交錯する台湾認識:見え隠れする「国家」と「人々」』204, 勉誠出版, 2016. 142-153.
4. 横田祥子「第 26 章新移民」「第 27 章人間関係とコミュニティ」「第 53 章東南アジアとの関係」『台湾を知るための 60 章』, 明石書店, 2016. 149-153. (査読有)
5. 片岡樹「架空の識字力—現代タイ国における漢文經典の知識をめぐって—」『華僑華人研究』13, 日本華僑華人学会, 2016. 7-26. (査読有)
6. 片岡樹「信仰の軸線—東南アジアにおいて『宗教を信じる』とは何を意味するか—」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 269-288.
7. 宮原暁「序章 折り重なる社会の読み方」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 1-20. (査読有)
8. 宮原暁「台湾とフィリピン, そして日本—「近さ」と「隔たり」の政治学」『アジア遊学 204 交錯する台湾認識:見え隠れする「国家」と「人々」』204, 勉誠出版, 2016.48-65.
9. 中西裕二「文化ツーリズムの基礎としての文化人類学」『よくわかる観光学 3:文化ツーリズム学』, 朝倉書店, 2016. 36-43.

〔口頭発表等〕計 7 件

1. Yokota, Sachiko, “Cross-border Marriage Migration Between Indonesian Hakka Women and Other Area’s Chinese Men Global Household of Singkawang, West Kalimantan, Indonesia”, The Fourth Taiwan International Conference on Hakka Studies, 2016.9.11. National Chiao Tung University, Hsin-chu, Taiwan.
2. 片岡樹「タイにおける漢文經典朗誦」, 東南アジア学会第 95 回研究大会, 2016.6.5. 大阪大学.
3. 片岡樹「〈ヤシガラ椀〉の外をフィールドで学ぶ—東南アジア大陸山地民研究再考—」, 東南アジア学会第 95 回研究大会, 2016.6.5. 大阪大学.
4. Kataoka, Tatsuki, “Indigenization and Exclusiveness: Truth Claim and the Redefinition of Religion among the Lahu Christians in Thailand”, AAS-in-Asia Conference 2016, 2016.6.25. Doshisha University.
5. Kataoka, Tatsuki, “Straits Chinese outside the Straits: Baba-ness Reflected in Epigraphs of the Baba Cemeteries in Thailand”, 9th International Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas, 2016.7.8. University of British Columbia.
6. Miyahara, Gyo, “Multilayered Dualism in the formation of “Chinese Culture”: A Min Nan – the Philippines Model”, IUAES, Intercongress 2016 (Dubrovnik, Croatia), 2016.5.4. Dubrovnik, Palace.
7. Miyahara, Gyo, “Severing Ties and Mobile Bone: An Interpretation of the Cremation Practices among the Diasporic Chinese in the Philippines”, 9th International Conference of the International Society for the Study of Chinese Overseas, 2016.7.8. University of British Columbia.

「もの」の人類学的研究 (2) 人間／非人間のダイナミクス

研究期間: 2014-2016 (代表: 床呂郁哉/所員 4, 共同研究員 15)

所員: 床呂郁哉, 河合香吏, 西井涼子, 吉田ゆか子

共同研究員: 伊藤詞子, 内堀基光, 大村敬一, 奥野克巳, 春日直樹, 金子守恵, 久保明教, 黒田末寿, 湖中真哉, 小松かおり, 田中雅一, 中村美知夫, 丹羽朋子, 檜垣立哉, 森田敦郎

研究会等の内容

第 1 回研究会 (通算第 8 回目) 日時: 2016 年 6 月 11 日 (土) 13:00-19:00・12 日 (日) 10:00-15:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディアセミナー室 (306)

6 月 11 日

春日直樹 (AA 研共同研究員・一橋大学) 「二つの真実の間で: フィジーの時間と物理学の時間」

西井涼子 (AA 研所員) 「民族誌記述の基点としての『もつれ髪』—ヒッピーからダツク実践者へ—」

黒田末寿 (AA 研共同研究員・滋賀県立大学) 「農鍛冶の鉄のうち方: 循環する鍛冶物が木と土と人を語る」

6 月 12 日

伏木香織 (大正大学) 「人形劇『ポテヒ』のトポロジー」

丹羽朋子 (AA 研共同研究員・人間文化研究機構)

「窓花と儀礼的紙細工—「化」する世界の「勢」(布置)の顕現」

第 2 回研究会 (通算第 9 回目) 日時: 2016 年 10 月 23 日 (日) 10:00-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 研修室 (405)

河合香吏 (AA 研所員) 「五感によって把握される「もの」—知覚と環境をめぐって」
小松かおり (AA 研共同研究員, 北海学園大学) 「場が与える力 —第一牧志公設市場の生鮮商品」
全員 成果論集のためのメンバー全員による報告と討議・打合せ

研究成果一覧

〔学術論文〕 計 31 件

1. 床呂郁哉 「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 199–218. (査読有)
2. Tokoro, Ikuya, Peace building in the wild: Thinking about institutions from cases of conflict and peace in Sulu, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 197–218. (査読有)
3. 久保明教 「非人間への生成——非連続的思弁と連続的実践の狭間で」『現代思想』44(20), 青土社, 2016. 194–209.
4. Kawai, Kaori, Introduction, From “Groups” to “Institutions”: In Pursuit of an Evolutionary Foundation for Human Society and Sociality, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 1–14. (査読有)
5. Kawai, Kaori, Institutionalized Cattle Raiding: Its Formalization and Value Creation Amongst the Pastoral Dodoth, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 219–238. (査読有)
6. 河合香吏 「セミナー 「科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式」 報告」『文化人類学』81(4), 日本文化人類学会, 2017. 714–718. (査読有)
7. 吉田ゆか子 「レプリカの天女様のゆくえ—バリ島天女の舞トペン・レゴンにおける仮面の複製」『国立民族学博物館研究報告』41(1), 2016. 191–210. (査読有)
8. Tanaka, Masakazu, Institution and Ritualization, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 59–78. (査読有)
9. 田中雅一 「ヒンドゥーの供犠とその残滓—宗教的性格を探求する」『宗教研究』386, 2016. 55–80. 日本宗教学会 (査読有)
10. 湖中真哉 「アフリカ国内避難民のシティズンシップ—東アフリカ牧畜社会の事例」『移民／難民のシティズンシップ』, 有信堂, 2016. 60–80. (査読有)
11. Konaka, Shinya, Introduction: The Articulation-Sphere Approach to Humanitarian Assistance to East African Pastoralists, *African Study Monographs, Supplementary Issue 53*, The Center for African Area Studies (CAAS), Kyoto University. 2017. 1–18. (査読有)
12. Konaka, Shinya, Articulation between the Material Culture of East African Pastoralists and Non-Food Items of Humanitarian Assistance, *African Study Monographs, Supplementary Issue 53*, The Center for African Area Studies (CAAS), Kyoto University. 2017. 53–68. (査読有)
13. Nakamura, Michio, T. Sakamaki, and K. Zamma, What volume of seeds can a chimpanzee carry in its body? *Primates* 58, Springer, 2017. 13–17. (査読有)
14. Nakamura, Michio and H. Nishie, An annular solar eclipse at Mahale: Did chimpanzees exhibit any response? *Pan Africa News* 23, Mahale Wildlife Conservation Society, 2016. 9–13. (査読有)
15. 中村美知夫 「『サル学』の視座—人間以外の社会を理解するとは」『現代思想』2016年12月号44(22):76-90. 青土社
16. 中村美知夫 「野生チンパンジー集団のデモグラフィ—」, 『日本人類学会進化人類分科会ニュースレター』, 2016年5月:4-6.
17. Kaneko, Morie, Variations in Shape, Local Classification, and the Establishment of a Chaîne Opératoire for Pot Making among Female Potters in Southwestern Ethiopia, *SOCIAL LEARNING AND INNOVATION IN CONTEMPORARY HUNTER-GATHERERS: EVOLUTIONARY AND ETHNOGRAPHIC PERSPECTIVES*, Springer, 2016. 217–227.
18. Kaneko, Morie, Absence de restes dans une société non occidentale, Les Ari du Sud-Ouest de L’Ethiopie, *Techniques & Culture* 65-66, 2016. 134–137. EHESS. (査読有)
19. Shigeta, Masayoshi and Morie Kaneko, Chapter 11 ZAIRAICHI (Local Knowledge) as the Manners of Co-existence: Encounters between the Aari Farmers in Southwestern Ethiopia and the ‘Other’, *African Potentials: Conflict handling and peaceful coexistence*, Langaa, 2017. 311–338. (査読有)
20. 金子守恵 「第 8 章 共存の作法としての在来知—エチオピア西南部に暮らす農耕民アリと「他者」との出会い—」『紛争をおさめる文化：不完全性とブリコラージュの実践』, 京都大学出版会, 2016. 277–310.
21. Morita, Atsuro, Infrastructuring the Amphibious Space: The Interplay of Aquatic and Terrestrial Infrastructures in the Chao Phraya Delta in Thailand, *Science as Culture* 25(1), 2016. 117–140. Taylor & Francis Online (査読有)

22. Morita, Atsuro, Multispecies Infrastructure: Infrastructural Inversion and Involuntary Entanglement in the Chao Phraya Delta, Thailand, *Ethnos* Online first, 2016. 28(4): 738-757. (査読有)
23. Jensen, Casper B. and Atsuro Morita, Introduction: Infrastructures as Ontological Experiments., *Ethnos* Online first, 2016. *Ethnos*. 28(4): 615-626. (査読有)
24. Morita, Atsuro and Casper B. Jensen, Forthcoming Delta Ontologies: Infrastructural Change in Southeast Asia, *Social Analysis*, 61(2):15-33. Berghahn Journals. (査読有)
25. Jensen, Casper B. and Atsuro Morita, Forthcoming. Multiple Nature-Cultures, Diverse Anthropologies: Minor Traditions, Equivocations and Conjunctions, *Social Analysis*, 61(2): 1-14. Berghahn Journals. (査読有)
26. 鈴木和歌奈, 森田敦郎, リウ・ニューラン・クラウセ「人新世の時代における実験システム：人間と他の生物との関係の再考へ向けて」『現代思想：人類学のゆくえ』2016年3月臨時増刊号, 青土社, 2016. 65-78
27. Morita, Atsuro, Encounters, Trajectories, and the Ethnographic Moment: Why “Asia as Method” Still Matters, *East Asian Science, Technology and Society*, Online first, 2017.2. 11:1-12: 239-250. Duke University Press.
28. Higaki, Tatsuya, What is Minority, Who are the Minor People, *The Journal of Criticism and Theory, Korea* 22(1), 2017. 237-252. (査読有)
29. Higaki, Tatsuya, Tetsuro Watsuji's Theory of Betweenness, with Focus on Two-Person Community, *Canadian Journal of Communication*, 41(3), 2016. 455-463. (査読有)
30. 檜垣立哉「九鬼とレヴィ＝ストロース 二つの構造論的感性論」『理想』698, 2017. 92-103. 理想社
31. Omura, Keiichi, Socio-cultural Cultivation of Positive Attitude toward Learning: Considering Difference in Learning Ability between Neanderthals and Modern Humans from Examining the Learning Process of Inuit Children, *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers*, Tokyo: Springer, 2016. 267-284. (査読有)

〔口頭発表等〕計24件

1. 床呂郁哉「趣旨説明とイントロダクション」, 公開シンポジウム『「もの」の人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題』, 2016.11.12. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 床呂郁哉「趣旨説明とイントロダクション」, 公開シンポジウム『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築』, 2016.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 床呂郁哉「もの人類学をめぐるイントロダクション」, FIELDPLUS café, 2016.7.7. 荻窪カフェ6次元
4. 河合香吏「趣旨説明」, 日本霊長類学会第32回大会自由集会6『人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって』(河合香吏企画), 2016.7.15. 鹿児島大学.
5. 河合香吏「编者による報告」, AA 研基幹研究人類学班・合評会シンポジウム:『他者—人類社会の進化』をめぐって, 2017.2.4. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. Yoshida, Yukako, “Human and non-human agents in topeng dance drama in Bali: A non-anthropocentric analysis”, 4th symposium of the International Council for Traditional Music, Study Group on Performing Arts of Southeast Asia, 2016.8.4. Cititel Hotel Penang.
7. 吉田ゆか子「バリ芸能における顔—人形, 仮面, 化粧」, 公開シンポジウム『トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築』, 2016.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
8. 吉田ゆか子「仮面の命と物性—バリ島のトベン・レゴンの場合」, 公開シンポジウム『「もの」の人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題』, 2016.11.22. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 田中雅一「文化人類学の根本問題—最近のフィールドから」, 日本学術振興会学術システム研究センター, 2016.10.21. 東京・日本学術振興会.
10. 湖中真哉「フォーラム：東アフリカ牧畜社会における人道支援枠組みのローカライズ: 趣旨説明」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
11. 中村美知夫「野生チンパンジーの遊びに見られる多様性」, 第32回日本霊長類学会大会 自由集会3「遊びの霊長類学の展望」, 2016.7.15. 鹿児島大学.
12. 中村美知夫「チンパンジー研究者, 西田利貞が遺した1960~1970年代タンザニアの写真—京大博物館による研究資源アーカイブ化」, 『写真が開く地域研究』シンポジウム, 2016.6.13. 京都大学.
13. Kaneko, Morie, “What They Learned and How They Know: Formation of local knowledge (ZAIRAICHI) on livelihoods among the young farmers in Ethiopia”, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, Inter-Congress 2016, 2016.5.4-9. The Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia.
14. Kaneko, Morie, “Pottery Making Style and Chaîne opératoire in Southwestern Ethiopia with Special Reference to Finger Movement Patterns”, the Eighth World Archaeological Congress Kyoto 2016, 2016.8.28-9.2. Doshisha University.
15. Kaneko, Morie, “Non-waste in a non-western society: the Aari of South Western Ethiopia”, International workshop: “FIXING THE WORLD - Excess, leftover and innovation”, 2017.1.10. Research Institute for Humanity and Nature.

16. Morita, Atsuro, “Alterity within: Hydrological Models, Environmental Mimesis and a Fluid STS in Hydraulics”, Environmental Alterities Seminar, 2016. 9.16. University of Amsterdam.
17. Morita, Atsuro, “Environmental Data and Socio-cultural Anthropology: Experimentation in Mediating Scales and Domains”, International Co-Design Workshop on Earth observation in Support of the Sustainable Development Goals – The Case of Urban Areas in Asia, 2017.1.17. Science Council of Japan.
18. Morita, Atsuro, “Reconfiguring Adaptive Subjects: Territorializing Vulnerability and Resilience in Climate Change Adaptation”, Paper presented at Annual Conference of American Anthropological Association, 2016. 11.19. Minneapolis Convention Center.
19. Higaki, Tatsuya, “Why is the Past Preserved in Itself? : On the Multi-layeredness of Matter and Memory”, ベルクソン 科研国際シンポジウム, 2016.12.24. 大阪大学.
20. Higaki, Tatsuya, “Kuki and Levi-Strauss”, European Network of Japanese Philosophy, 2016.7.6. ブリュッセル自由大学.
21. Higaki, Tatsuya, “Shinji Sōmai’s Cinema and Deleuze”, Deleuze collective in India, 2017.3.5. ムンバイ・タタ社会科学研究所.
22. 久保明教「純粹内在と述語的ネットワーク——将棋電王戦をめぐるマイクロポリティクス」, 筑波人類学ワークショップ, 2016.8.2. 筑波大学.
23. 大村敬一「イヌイト・アートをめぐるコスメティックの政治：＜旅するアート＞と＜インヴォリューションするアート＞のもつれ合い」, 国立民族学博物館共同研究会「表象のポリティクス」ミニシンポ, 2017.1.31. 国立民族学博物館.
24. Omura, Keiichi, “Potentialities of Inuit Qaujimatugangit: Challenges of Nunavutmiut for Governance in Future”, Inuit Qaujimatugangit Workshop, 2017 .3.16. Department of Culture & Heritage, GN. (Frobisher Inn, Koojesse Room North, Iqaluit) .

〔図書〕計6件

1. 床呂郁哉（編）『トランスカルチャー状況下における顔・身体額の構築（シンポジウム報告書）』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全130頁.
2. 床呂郁哉（編）『ものの人類学をめぐって—脱人間中心主義の人類学の可能性と課題（シンポジウム報告書）』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全118頁.
3. 床呂郁哉・佐久間寛・塩原朝子（編）『災害の／とフィールドワーク』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全124頁.
4. Kawai, Kaori (ed.), *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 461 pp.
5. Jensen, Casper B. and Atsuro Morita (eds.), *Infrastructure as Ontological Experiments. Ethnos*, Taylor and Francis, 2016. pp.
6. Harvey, Penny, Casper B. Jensen and Atsuro Morita (eds.), *Infrastructure and Social Complexity*, Routledge, 2016. 424 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計4件

1. 床呂郁哉「書評：エドゥアルド・コーン『森は考える—人間的なるものを越えた人類学』 亜紀書房『図書新聞』2016年6月11日号, 2016. 6.
2. 中村美知夫「マハレのきのこ：第9回 小さな杯—チャダイゴケの仲間」『マハレ珍聞』28, マハレ野生動物保護協会, 2016. 6.
3. 中村美知夫「マハレのきのこ：第8回 キノコの女王—キヌガサタケ」『マハレ珍聞』27, マハレ野生動物保護協会, 2016. 6.
4. 金子守恵「フィールドワーカーのおみやげ」, 『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 34.

〔その他〕計2件

1. 金子守恵「エチオピアの女性職人から学ぶこと：土器づくりの技法と暮らしの変遷」, 京都大学アフリカ地域研究資料センター・公開講座「アフリカから学ぶこと」第2回（全5回）
2. Morita, Atsuro “Traveling within the Case”, A blog entry for the Ethnographic Case Series, on Somatosphere.net., <http://somatosphere.net/2016/01/traveling-within-the-case.html>

人類社会の進化史的基盤研究（4）

研究期間：2015–2017（代表：河合香吏／所員 3，共同研究員 19）

所員：河合香吏，床呂郁哉，西井涼子

共同研究員：足立薫，伊藤詞子，内堀基光，大村敬一，春日直樹，北村光二，黒田末寿，杉山祐子，曾我亨，竹ノ下祐二，田中雅一，デイビッド・S・スプレイグ，寺嶋秀明，中川尚史，中村美知夫，西江仁徳，花村俊吉，船曳建夫，山越言

研究会等の内容

第1回研究会（通算第4回） 日時：2016年7月30日（土）13:00-19:00・31日（日）9:00-15:00

場所：京都大学清風荘 本館第2会合室

1. D. スプレイグ（AA 研共同研究員・農業環境技術研究所）
「死亡率：生活史としての理解と生態学としての理解」
2. 春日直樹（AA 研共同研究員・一橋大学）「家族と縁組みについての幾らかの考察」
3. 田中雅一（AA 研共同研究員・京都大学）「ホロコーストの生存者たちとともに生きる人びと：アウシュヴィッツ=ビルケナウ強制収容所のガイドたち」
4. 北村光二（AA 研共同研究員・岡山大学名誉教授）「個人の選択がそのまま社会の選択になるとき—『地域社会の消滅／再生』という極限に向き合う生き方—」

第2回研究会（通算第5回） 日時：2017年3月4日（土）13:00-19:40・5日（日）9:30-16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）マルチメディアセミナー室（3階306室）

1. 伊藤詞子（AA 研共同研究員・京都大学）「変動する生息環境とチンパンジーの生存」
2. 曾我亨（AA 研共同研究員・弘前大学）「環境への適応がほころびる時」
3. 中村美知夫（AA 研共同研究員・京都大学）
「チンパンジーの孤児の生存をめぐる—「母親の不在」は極限的な社会環境か？」
4. 中川尚史（AA 研共同研究員・京都大学）「霊長類が群れを維持できる極限の環境」
5. 河合香吏（AA 研）「牧畜民の遊動再考—諸環境との相互作用から」

第32回日本霊長類学会大会・自由集会-6 タイトル：人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる

開催日時：2016年7月15日（金）17:25-20:05 会場：鹿児島大学郡元キャンパス（会場2）

企画責任者・司会：河合香吏（AA 研所員）

話題提供者：松田一希（中部大学 中部高等学術研究所），

杉山祐子（AA 研共同研究員・弘前大学 人文）

寺嶋秀明（AA 研共同研究員・神戸学院大学 人文）

中川尚史（AA 研共同研究員・京都大学 理）

コメンテーター：本郷峻（京都大学 理），内堀基光（AA 研共同研究員・放送大学 教養）

東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所・基幹研究人類学班・公開シンポジウム：

『他者：人類社会の進化』（河合香吏編，京都大学学術出版会，2016）をめぐる

日時：2017年2月4日（土），14:00-18:45

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）マルチメディアセミナー室（306室）

プログラム：

0. 基幹研究人類学班代表挨拶（西井涼子／AA 研所員）
1. 編者による報告（河合香吏／AA 研所員）
2. 共同執筆者による報告
 - 2-1. 霊長類学（西江仁徳／京都大学・AA 研共同研究員）
 - 2-2. 生態人類学（北村光二／岡山大学名誉教授・AA 研共同研究員）
 - 2-3. 社会文化人類学（船曳建夫／東京大学名誉教授・AA 研共同研究員）
3. コメント
 - 3-1. 霊長類学（デイビッド・スプレイグ／農業・食品産業技術総合研究機構・AA 研共同研究員）
 - 3-2. 生態人類学（大石高典／東京外国語大学）
 - 3-3. 社会文化人類学（佐久間寛／AA 研所員）
4. 討論

研究成果一覧

〔学術論文〕計 36 件

1. Nishie, Hitonaru, Mutual genital touch in the Mahale M-group chimpanzees, *Pan Africa News* 23 (1), 2016. 1–3. (査読有)
2. Nakamura, Michio and Hitonaru Nishie, An annular solar eclipse at Mahale: Did chimpanzees exhibit any response?, *Pan Africa News* 23 (2), 2016. 9–13. (査読有)
3. Nishie, Hitonaru, Who is the alpha male? The institutionality of dominance rank in chimpanzee society, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 121–140. (査読有)
4. Kawai, Kaori, Introduction, From “Groups” to “Institutions”: In pursuit of an evolutionary foundation for human society and sociality, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 1–14. (査読有)
5. Kawai, Kaori, Institutionalized cattle raiding: Its formalization and value creation amongst the pastoral Dodoth, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 219–238. (査読有)
6. 河合香史「セミナー「科学と文化をつなぐ—アナロジーという思考様式」報告」『文化人類学』81 (4), 日本文化人類学会, 2017. 714–718. (査読有)
7. 河合香史「日本霊長類学会第 32 回大会自由集会 6『人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐる』(河合香史企画)」『霊長類研究』32(2), 日本霊長類学会, 2016. 87–91.
8. 中川尚史「“ふつう” のサルとヒトの平行進化—類人猿からは見えてこない人類進化論」『現代思想』44(22), 青土社, 2016. 63–75.
9. Hanamura, Shunkichi, When keeping one's ears open for the distant voices of others: The process-oriented convention in chimpanzees and institution, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 165–195. (査読有)
10. Nakamura, Michio, T. Sakamaki, and K. Zamma, What volume of seeds can a chimpanzee carry in its body?, *Primates* 58, 2017. 13–17. (査読有)
11. 中村美知夫「「サル学」の視座—人間以外の社会を理解するとは」『現代思想』44(22), 青土社, 2016. 76–90.
12. 中村美知夫「野生チンパンジー集団のデモグラフィ—」『日本人類学会進化人類分科会ニュースレター』42491, 2016. 4–6.
13. Soga, Toru, The formation of institutions, institutions: The evolution of human sociality, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 19–38. (査読有)
14. Nishii, Ryoko, The Muslim community in Mae Sot: The transformation of the Da'wa Movement, *Communities of Potential Social Assemblages in Thailand and Beyond*, Chiang Mai: Silkworm Books, 2016. 107–127. (査読有)
15. Nishii, Ryoko, Was the old woman's death a suicide? A discussion on the basis of institutions, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 372–390. (査読有)
16. Terashima, Hideaki, The day teaching becomes institution: An evolutionary horizon from apes to man, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 95–117. (査読有)
17. Terashima, Hideaki, Hunter-Gatherers and Learning in Nature, *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, Tokyo: Springer, 2016. 253–266. (査読有)
18. Terashima, Hideaki, Reflections on Hunter-Gatherer Social Learning and Innovation, *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, Tokyo: Springer, 2016. 311–318. (査読有)
19. 床呂郁哉「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 印刷中. (査読有)
20. 床呂郁哉「もの研究の新たな視座」『詳説 文化人類学』, ミネルヴァ書房, 2017. 印刷中.
21. 床呂郁哉「書評: 鈴木佑記著『現代の〈漂海民〉—津波後を生きる海民モーケンの民族誌』」『東南アジア研究』Feb-54, 京都大学東南アジア地域研究所, 2017. 268–271.
22. Sugiyama, Yuko, The institution of “feeling”: On “feeling inside” and “institutionalized envy”, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 349–370. (査読有)
23. Itoh, Noriko, Duality of the mode of coexistence and action selection: Groups and the emergence of “institutions” in chimpanzees, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 141–163. (査読有)
24. Kitamura, Koji, What connects and separates pre-and post-institution, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 241–264. (査読有)

25. Funabiki, Takeo, Basic components of institution: Understanding institution according to triangular and tetrahedral models, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 309–323. (査読有)
26. Kuroda, Suehisa, The evolutionary foundations of institutions: rule, deviation, identity, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 393–412. (査読有)
27. Uchibori, Motomitsu, An Institution Called Death: Towards Its Arche, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 39–58. (査読有)
28. Tanaka, Masakazu, Institution and Ritualization, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 59–78. (査読有)
29. 田中雅一「軍事環境問題の文化人類学—在沖・米海兵隊普天間航空基地周辺の聞き取り調査から」『社会人類学年報』42, 首都大学東京社会人類学研究室, 2016. 1–29. (査読有)
30. Hockings, K.J., G. Yamakoshi, and T. Matsuzawa, Dispersal of a Human-Cultivated Crop by Wild Chimpanzees (*Pan troglodytes verus*) in a Forest–Farm Matrix, *Int J Primatol* doi:10.1007/s10764-016-9924-y. (査読有)
31. Adachi, Kaoru, Living one’s role under institution: Ecological niches and animal societies, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 25–34. (査読有)
32. Omura, Keiichi, Socio-cultural Cultivation of Positive Attitude toward Learning: Considering Difference in Learning Ability between Neanderthals and Modern Humans from Examining the Learning Process of Inuit Children, *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, Tokyo: Springer, 2016. 267–284. (査読有)
33. 大村敬一「<大地>に拓がる住まい：カナダ・イヌイトの生き方のかたち」『住まいがたえる世界のくらし』, 世界思想社, 2016. 9–28.
34. 大村敬一「絶滅の人類学：イヌイトの「大地」の限界条件から「アンソロポシオン」時代の人類学を考える」『現代思想』45(4), 青土社, 2017. 228–247.
35. Omura, Keiichi, The ontology of feeling: The evolutionary basis of ‘natural institutions’ in the Inuit extended-family groups, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 327–348. (査読有)
36. Tokoro, Ikuya, Peace building in the wild: Thinking about institution from cases of conflict and peace in Sulu, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 197–218. (査読有)

〔口頭発表等〕計 36 件

1. 西江仁徳「マハレのチンパンジー，センザンコウに出会う」, 第 32 回日本霊長類学会大会, 2016.7.17. 鹿児島大学.
2. Shimada, M, H. Nishie, and M. Nakamura, “Intergroup diffusion of a social custom among wild chimpanzees (*Pan troglodytes schweinfurthii*) in Mahale Mountains National Park”, The 26th Congress of the International Primatological Society, 2016.8.23. Chicago’s Navy Pier.
3. 西江仁徳「共同執筆者による報告：霊長類学」, AA 研基幹研究人類学班・合評会シンポジウム：『他者—人類社会の進化』をめぐって, 2017.2.4. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研).
4. 河合香吏「趣旨説明」, 日本霊長類学会第 32 回大会自由集会 - 6『人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって』(河合香吏企画), 2016.7.15. 鹿児島大学.
5. 河合香吏「編者による報告」, AA 研基幹研究人類学班・合評会シンポジウム『他者—人類社会の進化』をめぐって, 2017.2.4. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研).
6. 中川尚史「ニホンザルの社会構造の個体群間変異」, 日本霊長類学会第 32 回大会自由集会 1『ニホンザルにおける社会構造の個体群間変異と社会性の個体間変異：その遺伝的背景を探る』(中川尚史・村山美穂企画), 2016.7.15. 鹿児島大学.
7. 中川尚史「初期人類の重層社会についての新説—霊長類学の立場から」, 日本霊長類学会第 32 回大会自由集会 6『人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって』(河合香吏企画), 2016.7.15. 鹿児島大学.
8. 中川尚史・村山美穂「ニホンザルにおける社会構造の個体群間変異：その遺伝的背景を探る」, 第 8 回遺伝子の窓から研究会, 2016.12.10. 篠山市.
9. Nakagawa, Naofumi, “Similar but different: A comparative view on Laboratory and Japanese macaques”, The 50th Anniversary Symposium of KUPRI: Past, present and future of primatology, 2017.1.30. 犬山市.
10. 中川尚史「パタスモンキーの食性と長肢化」, 京都大学霊長類研究所共同利用研究会『霊長類の食性の進化』(半谷吾郎企画), 2017.2.4. 犬山市.
11. 花村俊吉「HRAF の紹介とそれを用いた「あいさつ」分析の方法」, 第 2 回「出会い」研究会, 2016.7.23. 京都大学.

12. 花村俊吉「これまでの研究会を振り返って」, 第4回「出会い」研究会, 2017.1.23. 京都大学.
13. 花村俊吉「非対面下の出会いの特徴: チンパンジーの長距離音声を介した相互行為から」, 「宇宙人類×出会い」合同研究会, 2017.3.13. 湯村ホテル会議室(甲府市).
14. 中村美知夫「野生チンパンジーの遊びに見られる多様性」, 第32回日本霊長類学会大会 自由集会3『遊びの霊長類学の展望』(島田将喜企画), 2016.7.15. 鹿児島大学.
15. 中村美知夫「チンパンジー研究者、西田利貞が遺した1960～1970年代タンザニアの写真—京大博物館による研究資源アーカイブ化」『写真が開く地域研究』, 2016.6.13. 京都大学.
16. Soga, Toru, “The Global Camel Trading: Transforms the Ethnic Relations and Pastoral Economies in Southern Ethiopia”, Inter-Congress of International Union of Anthropological and Ethnological Sciences, 2016.5.4. Dubrovnik.
17. 曾我亨「地域研究と地域学のズレと重なり」, 日本学術会議公開シンポジウム「地域学のこれまでとこれから」, 2016.10.8. 日本学術会議講堂.
18. 曾我亨「コメント」, 日本グループ・ダイナミクス学会第63回大会ワークショップ企画「グループ・ダイナミクスの<時間>」, 2016.10.9. 九州大学.
19. 曾我亨「アフリカ牧畜社会の紛争と協力」, サントリー文化財団プロジェクト研究集会「21世紀の「他者」理解」プロジェクト研究会, 2016.11.26. 名古屋大学.
20. Nishii, Ryoko, “The Body at Death: Muslim-Buddhist Relations in a Southern Thai Village”, Panel 102: Buddhist-Muslim Interactions in South and Southeast Asia, 75th Annual Conference AAS(Association for Asian Studies), 2016.4.1. Washington State Convention Center, Seattle, Washington USA.
21. 寺嶋秀明「人類進化からみた平等の意味と働き」, 東北大学学際科学フロンティア主宰シンポジウム「人類社会における不平等の生成と発達」, 2017.2.17. 東北大学.
22. Sugiyama, Yuko, “Agrarian Innovation and the Accessibility to Resources: A Case Study of the Miombo Woodland of Sub-Saharan Africa”, XIV World Congress of Rural Sociology 2016, 2016.8.12. Ryerson University, Toronto Canada
23. 杉山祐子「群れからムラへ—焼畑農耕民ベンバの村の分裂・再生サイクルと祖霊信仰—」, 第890回日本民俗学会談話会「ともに生きる—現代社会における集団形成の論理と他者理解をめぐる—」日本民俗学会, 2016.12.11. 成城大学.
24. Itoh, Noriko, “Long-term environmental changes surrounding the chimpanzees of Mahale Mountains National Park, Tanzania”, UMS-TUFS Exchange Lecture on Culture and Society of Asia and Africa, 2017.3.9. Universiti Malaysia, Sabah, Kota Kinabalu.
25. 内堀基光「文化人類学からの応答」, 日本文化人類学会第50回研究大会記念シンポジウム「人類の道徳性と暴力性をめぐって—隣接諸科学との対話—」, 2016.5.28. 南山大学.
26. 田中雅一「アウシュヴィッツのガイドたち オラリティと感情労働の視点から」, 日本オーラルヒストリー学会大会第14回, 2016.9.3. 一橋大学.
27. 田中雅一「アウシュヴィッツ以後、環世界について語るということをめぐる ひとでなしとものでなしの世界へ」, 研究会「環世界の人文学 生きもの・なりわい・わざ」, 2017.12.5. 京都大学.
28. 田中雅一「文化人類学の根本問題—最近のフィールドから」, 日本学術振興会学術システム研究センター, 2016.10.21. 日本学術振興会(東京).
29. 山越言, 森村成樹, 松沢哲郎「ギニア・ボツワンの野生チンパンジー群の保全状況と将来像: 持続可能性をどう定義するか」, 第32回日本霊長類学会大会, 2016.7.17. 鹿児島大学.
30. 山越言「アフリカ自然保護の現場が要請する地域研究アプローチ—京大のアフリカ研究60年の経験から—」, 日本学術会議公開シンポジウム「地域研究の意義を考える」, 2016.10.8. 日本学術会議講堂.
31. 山越言「アフリカの里山と人びとの暮らし」, 第6回岳都・松本山岳フォーラム2016 関連イベント「山のワイルドライフ・サイエンス」特別講演会, 2016.11.27. 松本市美術館.
32. Omura, Keiichi, “Maps in Action: An Operational Matrix of Entangled Worlds in Contemporary Inuit Everyday Life”, The International Conference The World Multiple: Everyday Politics of Knowing and Generating Entangled Worlds, 2016.12.10. National Museum of Ethnology Conference Room 4.
33. 大村敬一「イヌイトの「野生の科学」」, 人類の未来への問い, 2017.02.04. Handai-Asahi 中之島塾(大阪大学中之島センター).
34. 竹ノ下祐二「人類社会における教育、分業、協同育児の共進化」, 総合人間学会第11回大会, 2016.5.22. 國學院大學.
35. 座馬耕一郎・竹ノ下祐二・藤田志歩・浅井隆之・川添 達朗・鈴木滋「大隅半島のニホンザル野生個体群の集団サイズと遊動パターン」, 第32回日本霊長類学会大会, 2016.7.16. 鹿児島大学.
36. Sprague, D, 「ヒトの進化研究のための人類学における哺乳類学」, 日本哺乳学会2016年度大会, 2016.9.26. 筑波大学.

〔図書〕計2件

1. Kawai, Kaori (ed.), *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 461 pp.
2. Terashima, H. and Hewlett, B.S. (eds), *Social Learning and Innovation in Contemporary Hunter-Gatherers: Evolutionary and Ethnographic Perspectives*, Springer-Japan, 2016. 318 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計12件

1. 西江仁徳「マハレのチンプ(ん?) 紹介・第27回 アロフ」『マハレ珍聞(マハレ野生動物保護協会ニューズレター)』27, マハレ野生動物保護協会, 2016. 4-4.
2. 西江仁徳「マハレ研究史上初の金環日食」『マハレ珍聞(マハレ野生動物保護協会ニューズレター)』28, マハレ野生動物保護協会, 2016. 2-3.
3. 中村美知夫「マハレのきのこ: 第9回 小さな杯—チャダイゴケの仲間」『マハレ珍聞(マハレ野生動物保護協会ニューズレター)』28, マハレ野生動物保護協会, 2016. 6-6.
4. 中村美知夫「マハレのきのこ: 第8回 キノコの女王—キノガサタケ」『マハレ珍聞(マハレ野生動物保護協会ニューズレター)』27, マハレ野生動物保護協会, 2016. 6-6.
5. 杉山祐子「日曜随想」連載 2016年4月24日, 6月5日, 7月17日, 8月28日, 10月9日, 11月20日, 2017年1月8日, 2月19日, 『陸奥新報』
6. 春日直樹「アナロジーの非対称性から考える意図とパターン: 科学と文化をつなぐ思索」『UP』526, 東京大学出版会, 2016. 14-19.
7. 船曳建夫「神のようなもの」『大法輪』83(6), 大法輪閣, 2016. 51-52.
8. 田中雅一「討議: 性という謎から霊長類をまなぐす(山極壽一との対談)」『現代思想 特集 霊長類学の最前線』12月号, 青土社, 2016. 42-62.
9. 山越言「野生チンパンジーの道具使用—必要は発見の母か?」『25年の歩み』, 公益財団法人中山人間科学振興財団, 2016. 105-106.
10. 西村典優・石橋陽一・足立薫・水口充・中村暢宏「理系向け短期留学プログラム「海外サイエンスキャンプ」の目的と効果—チャレンジ精神と主体性の涵養を目指して—」, ウェブマガジン『留学交流』2017年2月号, 日本学生支援機構(JASSO), 2017. 21-28.
11. 大村敬一「「ひと」と「もの」との出会いを追いかけて: 第2回研究者訪問 スチュアート・ヘンリ(本多俊和) 放送大学客員教授」, 『文化人類学』81(3), 日本文化人類学会, 2016. 521-528.
12. 竹ノ下祐二「ゴリラの森を守る 住民生活 まず支援」, 岐阜新聞2016年11月23日朝刊

〔その他〕計2件

1. 中川尚史“TEDxKobe 2016: Spring out in unity”, 2016年6月12日(神戸市)
2. 寺嶋秀明「中村美知夫著「サル学」の系譜—人とチンパンジーの50年」(中公叢書) 書評『アフリカ研究』vol. 90, 日本アフリカ学会, p109. 2016.

『プレザンス・アフリケーヌ』研究 新たな政治=文化学のために

研究期間: 2015-2017 (代表: 中村隆之/所員 1, 共同研究員 8)

所員: 佐久間寛

共同研究員: 中村隆之, 栗飯原文子, 小川了, 佐々木祐, 砂野幸稔, 星埜守之, 真島一郎, 吉田裕

研究会等の内容

第1回研究会(通算第4回目) 日時: 2016年7月30日(土) 14:00-18:30

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

発表者(1): 吉田裕「人種と文化をめぐる冷戦: 第1回黒人作家芸術家会議とリチャード・ライト, ジョージ・ラミング, ジェームズ・ボールドウィン」

コメンテーター: 小川了

発表者(2): 星埜守之「Niam n'goura: 初期『プレザンス・アフリケーヌ』誌を読む」

コメンテーター: 有田英也

第2回研究会(通算第5回目) 日時: 2017年3月25日(土) 10:00-19:30・26日(日) 10:00-16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) マルチメディア会議室(304)

発表者(1): 佐久間寛「国際シンポジウムに関する報告」

発表者(2)：ロモ・アジェ＝ミヤジオーム “Presence Africaine dans le contexte de la decolonisation de l’Afrique”

コメンテーター：福島亮

発表者(3)：砂野幸稔 「1950年代『プレゼンス・アフリケーヌ』と言語の政治」

コメンテーター：元木淳子

発表者(4)：佐々木祐 「『プレゼンス・アフリケーヌ』誌における「詩学」と「社会科学」

コメンテーター：崎山政毅

研究成果一覧

〔学術論文〕計4件

1. 星椋守之「アンドレ・ブルトン後のシュルレアリスム—もうひとつのヴァージョンを巡って」『ユリイカ』48(10), 2016. 40-49.
2. Sunano, Yukitoshi, «Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 2.Ziguinchor», 『熊本県立大学文学研究科論集』9, 2016. 23-57. (査読有)
3. Sunano, Yukitoshi, «Wolofisation et multilinguisme au Sénégal - Étude sur l'état des langues nationales dans 7 villes sénégalaises 3.Saint-Louis», 『熊本県立大学文学部紀要』23(76), 2017. 117-138. (査読有)
4. 吉田裕「中野好夫と沖縄—「道義的責任」と主体化の論理」『年報カルチュラル・スタディーズ4』, 航思社, 2016. 245-262. (査読有)

〔口頭発表等〕計12件

1. 星椋守之「シュルレアリスムと日本の『前衛』」, 日仏シンポジウム「芸術照応の魅惑 2」, 2016.10.29. 日仏会館.
2. Sakuma, Yutaka, “Present of Sudanese agricultural complex: The case of western Niger”, International Workshop: Agricultural Practice and Social Dynamics in Niger, 2017.3.12. ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies.
3. Sakuma, Yutaka, “Qui est le propriétaire de cette terre? Possession et «affect» des terres dans le système agraire Songhai (Ouest Niger), MONDIALISATION ET MUTATIONS SOCIO-CULTURELLES EN AFRIQUE, 2017.1.11. Universite de Strasbourg.
4. Sakuma, Yutaka, “Moral Economy and Land Tenure in Sahel (Western Niger)”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy with Professor Goran Hyden: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016.12.10. Kyoto University.
5. 佐久間寛「モラル・エコノミーの変容と持続：ニジェール西部における灌漑稲作の導入を事例に」, 2016年度第3回アフリカ・モラル・エコノミー研究会, 2016.10.15. キャンパスプラザ京都.
6. 佐久間寛「経済的なものをめぐるモラルと自由：カール・ポランニー2.0から」, 2016年度第2回アフリカ・モラル・エコノミー研究会, 2016.7.10. キャンパスプラザ京都.
7. 佐久間寛「ポランニー思想のマトリクス：『経済と自由』を中心に」, 日本文化人類学会50回研究大会, 2016.5.28. 南山大学.
8. 佐久間寛「趣旨説明：ハザードとしての体制転換」『体制転換の人類学：「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2』公開シンポジウム, 2016.5.21. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
9. 小川了「フルベの行動規範再考—ニーチェによる—」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.4. 日本大学生物資源科学部.
10. 中村隆之 “Édouard Glissant et la revue Acoma”, 30e Congrès mondial de Conseil International d'Études Francophones, 2016.5.26. Saly-Portudal, Sénégal.
11. 砂野幸稔「識字詩集が伝えるセネガル農村女性の声」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.3. 日本大学生物資源科学部.
12. Yoshida, Yutaka, “Translation as a Radical Assimilation and Transpacific Calling: C.L.R. James on Melville and Sadao Shinjo's Tanka Couplet”, The Future of the Humanities and Anthropological Difference: Beyond the Modern Regime of Translation, 2016.7.12. Cornell University.

〔図書〕計2件

1. 佐久間寛(編)『基幹研究「体制転換の人類学：アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2』公開シンポジウム』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 全200頁.
2. 中村隆之(訳), エドゥアール・グリッサン『痕跡』, 水声社, 2016. 全255頁.

〔社会に向けた成果発表〕計7件

1. 佐久間寛「冗談関係」『ぴえりあ』8, 東京外国語大学出版会, 2016. 46-47.

2. 小川了「書評：川田順造著『人類学者への道』，青土社，2016年10月15日発行，335頁『AFRICA』春号，一般社団法人アフリカ協会，2017.48-51.
3. 中村隆之「書評 ル・クレジオ『ラガ』—透徹した知的洞察と詩的精神でもって描く」『図書新聞』3265，図書新聞社，2016.1面.
4. 栗飯原文子「ウォレ・ショインカ「狂人と専門家」」（翻訳）『紛争地域から生まれた演劇』7，公益社団法人国際演劇協会日本センター，2016.5-83.
5. 栗飯原文子「意味がやって来るのを待ちながら」（「狂人と専門家」改題）『紛争地域から生まれた演劇』7，公益社団法人国際演劇協会日本センター，2016.84-86.
6. 栗飯原文子「ヴィジャイ・プラシャド「拒絶の政治学」」（翻訳）『現代思想』1月臨時増刊号，青土社，2016.108-113.
7. 栗飯原文子「地を這う少女が見る夢は」『文學界』4月号，文芸春秋，2017.120-121.

東・東南アジアの越境する子どもたち——トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会——

研究期間：2016-2018（代表：石井香世子／参加者：所員 2，共同研究員 8）

所員：床呂郁哉，錦田愛子

共同研究員：石井香世子，岩井美佐紀，萩原崇世，工藤正子，酒井千絵，陳天璽，横田祥子，Hsia, Hsiao-Chuan

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2016年4月23日（土）10:30-17:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室(306)

- (1) 川上郁雄（早稲田大学）「移動する子どもたちとは」
- (2) 竹田美知（神戸松蔭女子学院大学）「移動する子どもたちに関する研究の現状」

第2回研究会（通算第2回目） 2016年10月1日（土）9:30-17:30

場所：立教大学（池袋）マキムホール第1・第2会議室（豊島区西池袋3-34-1）

主催：共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち——トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会——」

- (1) Rhacel Parrenas (University of Southern California) “Partial Citizenship of Family Migrants”
- (2) Hsia, Hsiao-Chuan (Shih Hsin University) “Partial Citizenship of Family Migrants in Taiwan”
- (3) Itaru Nagasaka (Hiroshima University) “Partial Citizenship of Family Migrants in Japan”
- (4) Choo Hae Yeon (University of Toronto)
“Contesting the politics of containment: Marriage migrant women and the negotiation of citizenship in South Korea”

第3回研究会（通算第3回目） 2017年2月25日（土）10:00-13:00（非公開），13:00-18:30（公開）

場所：立教大学（池袋）12号館 第2会議室（豊島区西池袋3-34-1）

- (1) Henrik Lebuhn (Humbolt University)
“How the Border Colonizes Our Everyday Life: Urban Borderlands, Citizenship, and the Politics of Contestation”
- (2) Fuminori Kawakubo (Chuo Gakuin University) “Revisiting Borders: New Ideas in Border Studies”
- (3) Susanne Y. P. Choi (The Chinese University of Hong Kong)
“Engendering Borders: Women and Children Living in the China-Hong Kong Borderland”

研究成果一覧

〔学術論文〕計2件

1. 酒井千絵「誰が子どもの世話をするのか シンガポール映画『色々』に見る家事労働と女性」『子どもの虐待とネグレクト』19, 2017. 岩崎学術出版社.
2. 横田祥子「インドネシア華人女性の国際結婚を通じた世帯保持：西カリマンタンシンカワン市の事例から」『華僑華人研究』13, 2016. 27-44. 日本華僑華人学会.（査読有）

〔口頭発表等〕計2件

1. Hsia, Hsiao-Chuan, “Citizenship Issue Faced by the Children of Marriage Migrants in Taiwan”, International Symposium on Partial Citizenship of Family Migrants, 2016.10.2. Rikkyo University.
2. Sakai, Chie, “Social Actions against Ethnic and Cultural Conflicts in Divrvisification”, 3rd International Forum of Sociology, 2016.7.10. University of Vienna.

〔図書〕計3件

1. 陳天璽・大西広之・小森宏美・佐々木てる編著『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 全272頁.
2. Teramoto, Minou, Nguyen Duc Chien, Misaki Iwai, and Bui The Cuong, *The Vietnamese Family during the Period of Promoting Industrialization, Modernization and International Participation*, IDE-JETRO, 2017. (近刊)
3. 石井香世子『国際社会学入門』, ナカニシヤ出版, 2017. 全177頁.

新出多言語資料からみた敦煌の社会

研究期間：2014–2016（代表：松井太／参加者：所員 1, 共同研究員 9）

所員：荒川慎太郎

共同研究員：松井太, 赤木崇敏, 岩尾一史, 岩本篤志, 橘堂晃一, 坂尻彰宏, 佐藤貴保, 白玉冬, 山本明志

研究会等の内容

第1回研究会（通算第7回目）日時：2016年6月4日（土）14:00-17:30・5日（日）10:00-16:00

場所：大阪大学・豊中キャンパス・文学部本館2階・史学科共同研究室

松井太「ウイグル語銘文からみた仏教巡礼の諸相」

山本明志「漢文銘文から見た元代敦煌の巡礼者」

佐藤貴保「莫高窟・榆林窟における西夏時代の漢文題記, 供養人像について」

橘堂晃一「2015年度敦煌地域ブラーフミー文字銘文調査報告」

第2回研究会（通算第8回目）日時：2016年11月6日（日）10:00-17:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディア会議室（304）

松井太「安西榆林窟のシリア文字テュルク語題記銘文」

岩本篤志「敦煌石窟出行図の基礎的研究：莫高窟曹氏・榆林窟慕容氏出行図を中心に」

※ 2016年度第3回研究会（2017年3月予定）は諸般の事情により中止した

研究成果一覧

〔学術論文〕計22件

1. 松井太「トゥルファン=ウイグル人社会の連保組織」『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』, 東洋文庫, 2017. 287-310.
2. 松井太「高昌故城寺院址αのマニ教徒と仏教徒」『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢』, 龍谷大学, 2017. 71-86.
3. 白玉冬・松井太「フフホト白塔のウイグル語題記銘文」『内陸アジア言語の研究』31, 中央ユーラシア学研究会, 2016. 29-77. (査読有)
4. 松井太「蒙元時代回鶻佛教徒和景教徒的ネットワーク」『馬可・波羅 揚州絲綢之路』, 北京大學出版社, 2016. 283-293.
5. Matsui, Dai, "Uigur-Turkic Influence as Seen in the Qara-Qota Mongolian Documents", *Actual Problems of Turkic Studies: Dedicated to the 180th Anniversary of the Department of Turkic Philology at the St. Petersburg State University*, St. Petersburg State University, 2016. 559-564. (査読有)
6. 松井太「大英圖書館所藏對譯語彙集斷片 Or. 12380/3948 再考」『東方學』132, 東方學會, 2016. 87-74. (査読有)
7. Li, Gang and Dai Matsui, "An Old Uighur Receipt Document Newly Discovered in the Turfan Museum", *Written Monuments of the Orient*4, 2016. 68-75. (査読有)
8. 岩尾一史「ドルポ考：チベット帝国支配下の非チベット人集団」『内陸アジア言語の研究』31, 中央ユーラシア学研究会, 2016. 1-19. (査読有)
9. 橘堂晃一「ウイグル文華巖經研究の新展開：奥書と訳出の背景を中心に」『東洋史苑』86・87, 龍谷大学東洋史学研究会, 2016. 1-25.
10. 橘堂晃一「ベゼクリク石窟供養比丘図再考：敦煌莫高窟の銘文を手がかりとして」『アジア仏教美術論集 中央アジアⅠ：ガンダーラ～東西トルキスタン』, 中央公論美術出版社, 2017. 523-550.
11. 橘堂晃一「大谷探検隊将来ウイグル文『大乘入道次第』残葉」『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢』, 龍谷大学, 2017. 87-104.
12. 橘堂晃一, New Light on the Huayan jing in Old Uighur from the Krotkov Collection and Yoshikawa Photographs, 『大谷探検隊収集西域胡語文献論叢』, 龍谷大学, 2017. 105-154.

13. 赤木崇敏「曹氏帰義軍節度使系譜攷：2つの家系から見た10～11世紀の敦煌史」『敦煌・吐魯番文書の世界とその時代』, 東洋文庫, 2017. 237-261, 482-483.
14. 岩本篤志「敦煌景教文献と洛陽景教経幢：唐代景教研究と問題点の整理」『唐代史研究』19, 唐代史研究会, 2016. 77-97.
15. 岩本篤志「トハリスタンの仏教遺跡と玄奘：立正隊による調査をふまえて」『唐代史研究』19, 唐代史研究会, 2016. 256-264.
16. 岩本篤志(田衛衛：訳)「何為敦煌文献」『敦煌学国際聯絡委員会通讯(2016)』, 上海古籍出版社, 2016. 145-148.
17. 荒川慎太郎「大英図書館所蔵西夏文「礼贊文」断片について：黒水城出土チベット語文献中の資料 K.K.II.0303.a」『京都大学言語学研究』35, 京都大学大学院文学研究科言語学研究室, 2016. 195-216. (査読有)
18. 荒川慎太郎「西夏文字」『口訣研究』38, 口訣学会, 2017. 57-81.
19. 白玉冬「有関回鶻改宗摩尼教的 U72-U73, U206 文書再釈読」『粟特人在中国：考古發現与出土文献の新印証』科学出版社, 2016. 24-44. (査読有)
20. 白玉冬「回鶻語文献中の II Ötükän Qutı」『唐研究』22, 北京大学出版社, 2016. 397-409. (査読有)
21. 白玉冬「PT.1189「肅州領主司徒上河西節度天大王書状」考述」『絲路文明』1, 上海古籍出版社, 2017. 103-124. (査読有)
22. 白玉冬, 楊富学「新疆和田出土突厥盧尼文木牘初探：突厥語部族聯手于闐對抗喀刺汗朝の新証拠」『西域研究』2016-4, 新疆社会科学院, 2016. 39-49. (査読有)

〔口頭発表等〕計20件

1. 松井太「英國圖書館藏蕃漢語詞對譯 Or. 12380/3948 文書殘片再考」, 2016 敦煌論壇：交融与創新：紀年莫高窟創建 1650 年国際學術研討会, 2016.8.20. 莫高窟敦煌研究院.
2. 松井太「出土文書と石窟銘文からみたウイグル仏教巡礼」, 龍谷大学仏教学セミナー, 2016.7.23. 龍谷大学
3. 松井太「黒城出土蒙古語契約文書與吐魯番出土回鶻語契約文書：黒城出土蒙古語文書 F61:W6 再讀」, 首屆北方民族古文字研究国際學術研討会, 2016.12.3. 内蒙古大学.
4. 松井太「内亜出土古代回鶻語文献对蒙元史研究的貢獻」, 遼寧師範大学歴史文化旅游学院學術講座, 2016.12.23. 遼寧師範大学.
5. Iwao, Kazushi, “dbung mtha’: Center and Periphery of the Old Tibetan Empire”, The 14th Seminar of International Association of Tibetan Studies, 2016.6.20. Bergen University.
6. Iwao, Kazushi, “Official Documents of the Old Tibetan Empire”, 『映日講座之三』, 2016.11.8. 復旦大学.
7. Iwao, Kazushi, “Some Tibetan Inscriptions in Dunhuang Caves”, 首屆北方民族古文字研究国際學術研討会, 2016.12.3. 内蒙古大学.
8. Iwao, Kazushi, “Diplomatic policy of the Old Tibetan Empire in the beginning of the 9th century”, Collegium Turanicum, No. 86, 2016.12.13. Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften Turfanforschung.
9. 赤木崇敏「敦煌石窟の供養人像調査：五个廟第4窟・莫高窟 202・205窟」, 第59回 中央アジア学フォーラム, 2016.12.10. 大阪大学.
10. 山本明志「嶺北行省のスタッフと碑文資料」, モンゴル史研究の新展開 III, 2017.2.11. 龍谷大学.
11. 荒川慎太郎「西夏文献学與語言学：関于大英図書館所蔵西夏文仏典断片」, 北方民族文字数字化与西夏文献研究国際研討会, 2016.8.21. 中国・北方民族大学.
12. Arakawa, Shintaro, “On the Formation of the Tangut Version Jingangjingzuan 金剛經纂 from the Chinese Version”, The 6th International Symposium on Oriental Ancient Documents Studies, 2016.10.3. Hotel Oktyabrskaya, Saint-Petersburg.
13. Arakawa, Shintaro, “Tangut Script –Studies of the unique features”, International Symposium SCRIPTA 2016 Tangut and Other Asian Scripts, 2016.10.8. Seoul National University.
14. Arakawa, Shintaro, “On Two Tangut Fragments “praising Buddha” preserved in the British Library”, The 1st International Symposium on Ancient Scripts of Northern Nationalities, 2016.12.3. Inner Mongolia University.
15. Arakawa, Shintaro, “Re-analysis of the Tangut suffix for ‘dual’ ”, Recent Advances in Tangut Studies, 2017.2.28. SOAS University of London.
16. 白玉冬「新疆和田出土突厥盧尼文木牘初探」, 2016 敦煌論壇：交融与創新：紀念莫高窟創建 1650 周年国際學術研討会, 2016.8.20. 莫高窟敦煌研究院.
17. 白玉冬「葉尼塞碑銘解読与研究(二)：凶瓦共和国 E11 貝格烈 begre 碑銘研究」, 黒龍江流域文明暨俄羅斯遠東歴史文化与社会發展論壇, 2016.9.17-20. 黒龍江・黒河学院.
18. 白玉冬「可敦墓考：兼論十一世紀初期契丹与中亜之交通」, 絲綢之路的互動与共生學術研討会, 2016.10.27-30. 中国中外關係史学会・大連大学.

19. 白玉冬「関于王延徳「西州程記」記録的漠北部族」, 首届北方民族古文字研究国際学術研討会, 2016.12.3. 内蒙古大学.
20. 坂尻彰宏「関于敦煌文献の般次」, 遼寧師範大学歴史文化旅游学院学術講座, 2016.12.23. 遼寧師範大学.

〔図書〕計2件

1. 松井太・荒川慎太郎(編)『敦煌石窟多言語資料集成』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全522頁.
2. 赤木崇敏・山本明志ほか『「元典章」が語ること』, 大阪大学出版会, 2017. 全368頁.

〔社会に向けた成果発表〕計1件

山本明志「モンゴル・元」『仏教史研究ハンドブック』, 法蔵館, 2017. 94-95.

里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究(2)

研究期間: 2014-2016 (代表: 陶安 あんど/所員 1, 共同研究員 14)

所員: 陶安あんど

共同研究員: 青木俊介, 飯田祥子, 片野竜太郎, 佐藤信, 鈴木直美, 角谷常子, 高村武幸, 中村威也, 廣瀬薫雄, 村上陽子, 目黒杏子, 靱山明, 鷲尾祐子, 渡邊英幸

研究会等の内容

第1回研究会(通算第29回目) 日時: 2016年5月20日(金) 14:00-18:00

場所: 研究講義棟遠隔講義室(205) および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室
全員 事務協議

目黒杏子(AA研共同研究員・京都大学) 里耶秦簡暦日索引と注釈検討会(2)

陶安あんど(AA研所員) 里耶秦簡訳注読み合わせ09(後半)

第2回研究会(通算第30回目)

日時: 2016年6月17日(金) 14:00-18:00・18日(土) 10:00-18:00・19日(日) 10:00-16:00

場所: 研究講義棟遠隔講義室(205) および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室

17日 鈴木直美(AA研共同研究員・明治大学) 里耶秦簡地名索引と注釈検討会(02, 前半・後半)

18日 青木俊介(AA研共同研究員・学習院大学) 里耶秦簡人名索引と注釈検討会(02, 前半・後半)

19日 全員 事務協議 陶安あんど(AA研所員) 里耶秦簡訳注読み合わせ(10, 前半・後半)

第3回研究会(通算第31回目)

日時: 2016年7月15日(金) 14:00-18:00・16日(土) 10:00-18:00・17日(日) 10:00-16:00

場所: 研究講義棟遠隔講義室(205) および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室

15日 鈴木直美(AA研共同研究員・明治大学) 里耶秦簡地名索引と注釈検討会(03, 前半・後半)

16日 伊藤瞳(関西大学大学院生) 研究報告:「簡牘の尺寸と規格」

石原遼平(東京大学大学院生) 研究報告:「里耶秦簡訳注疑問字考証」

青木俊介(AA研共同研究員・学習院大学) 里耶秦簡官職名索引と注釈検討会(03)

17日 全員 事務協議 陶安あんど(AA研所員) 里耶秦簡訳注読み合わせ(11, 前半・後半)

第4回研究会(通算第32回目)

日時: 2016年9月30日(金) 14:00-18:00, 2016年10月1日(土)・2日(日) 10:00-16:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) セミナー室(301)

および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室

30日 渡邊英幸(AA研共同研究員・愛知教育大学) 科研費申請書類検討会(01)

陶安あんど(AA研所員) 里耶秦簡訳注読み合わせ(12)

1日 伊藤瞳(関西大学大学院生) 研究報告:「簡牘の尺寸と規格」

靱山明(AA研共同研究員・東洋文庫) 史料講読:「里耶秦簡73」(前半・後半)

2日 全員 事務協議

青木俊介(AA研共同研究員・学習院大学) 里耶秦簡官職名索引と注釈検討会(04, 前半・後半)

第5回研究会(通算第33回目) 日時: 2016年10月14日(金) 14:00-18:00・15日(土) 10:00-18:00

- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
 および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室
- 14日 杉山明（AA研共同研究員・東洋文庫） 科研費申請書類検討会（02）
 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡訳注読み合わせ（13, 前半）
- 15日 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡訳注読み合わせ（13, 後半）
 青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学） 里耶秦簡官職名索引と注釈検討会（05, 前半・後半）

第6回研究会（通算第34回目）

- 日時：2016年11月25日（金）14:00-18:00・26日（土）10:00-18:00・27日（日）10:00-16:00
- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
 および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室
- 25日 陶安あんど（AA研所員）「敢言之」類文書釈文・注釈検討会（前半・後半）
- 26日 青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学）
 里耶秦簡官職名索引と注釈検討会06, 里耶秦簡人名索引と注釈検討会（03, 前半・後半）
- 27日 全員 事務協議
 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡訳注読み合わせ（14, 前半・後半）

第7回研究会（通算第35回目）・2017年度文献講読研修プレミーティング

- 日時：2016年12月16日（金）14:00-18:00・17日（土）10:00-18:00・18日（日）10:00-16:00
- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
- 16日 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡研修講読史料検討会（前半・後半）
- 17日 董珊（北京大学考古文博学院） 研究報告：「里耶秦簡県官管見——戦国工官制度の視点から」
 高村武幸（AA研共同研究員・明治大学）・杉山明（AA研共同研究員, 東洋文庫）
 簡牘製作演習（前半・後半）
- 18日 全員 事務協議
 角谷常子（AA研共同研究員・奈良大学） 西北漢簡研修講読史料検討会（前半・後半）

第8回研究会（通算第36回目） 日時：2017年1月21日（土）10:00-18:00・22日（日）10:00-16:00

- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
 および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室
- 21日 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡綴合簡牘の検討01
 目黒杏子（AA研共同研究員・京都大学）「下」類文書基本書式1訳注読合せ（前半・後半）
- 22日 全員 事務協議
 飯田祥子（AA研共同研究員・龍谷大学） 研究報告：
 「長沙五一広場東漢簡牘 郡府発信文書の初歩的整理」
 鷺尾祐子（AA研共同研究員・立命館大学） 研究報告：「走馬楼呉簡吏民簿について」

第9回研究会（通算第37回目）

- 日時：2017年2月17日（金）14:00-18:00・18日（土）10:00-18:00・19日（日）10:00-16:00
- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
- 17日 石原遼平（東京大学大学院生）「謂」類文書基本書式2訳注読合せ
- 18日 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡綴合簡牘の検討02,
 「謂」類文書基本書式2訳注読合せ（前半）（後半）
 鈴木直美（AA研共同研究員・明治大学）「告」類少内文書訳注読み合わせ（前半・後半）
- 19日 全員 事務協議
 目黒杏子（AA研共同研究員・京都大学） 簡牘製作演習（前半）
 角谷常子（AA研共同研究員・奈良大学） 簡牘製作演習（後半）

第10回研究会（通算第38回目）

- 日時：2017年3月17日（金）14:00-18:00・18日（土）10:00-18:00・19日（日）10:00-16:00
- 場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）
 および京都大学学術情報メディアセンター北館4階遠隔会議室
- 17日 青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学）「謂」類文書基本書式1訳注読合せ（前半）
- 18日 陶安あんど（AA研所員） 里耶秦簡綴合簡牘の検討02
 青木俊介（AA研共同研究員・学習院大学） 「謂」類文書基本書式2訳注読合せ（後半）

- 陶安あんど (AA 研所員) 里耶秦簡綴合簡牘の検討 03
 渡邊英幸 (AA 研共同研究員・愛知教育大学) 「追」類文書基本書式 1 訳注読み合わせ (前半) (後半)
 19 日 全員 事務協議
 角谷常子 (AA 研共同研究員・奈良大学) 「告」類倉文書訳注読み (前半) (後半)

研究成果一覧

〔学術論文〕計 20 件

1. 青木俊介「里耶秦簡 J1⑧1517 の作成過程と「某手」の示すもの」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note22\(Aoki\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note22(Aoki).html), 2017.
2. 青木俊介「岳麓秦簡「興律」の開封者通知に関する規定」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note23\(Aoki\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note23(Aoki).html), 2017.
3. 飯田祥子「湖南長沙五一廣場東漢簡牘 J1③: 129 木牘訳註稿」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note11\(Iida\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note11(Iida).html), 2016.
4. 陶安あんど「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀等四種』譯注稿—事案三—」『法史学研究会会報』19, 2016. 124-137.
5. 陶安あんど「「何計付」の句讀に関する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note13\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note13(Hafner).html), 2016.
6. 陶安あんど「上古漢語における「何」の意味に関する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note14\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note14(Hafner).html), 2016.
7. 陶安あんど「秦簡にみえる「最」と「取」に関する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note15\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note15(Hafner).html), 2016.
8. 陶安あんど「里耶秦簡における「校」・「校券」と「責券」に関する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note17\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note17(Hafner).html), 2016.
9. 陶安あんど「卒人に關する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note20\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note20(Hafner).html), 2016.
10. 陶安あんど「「應書」に關する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note21\(Hafner\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note21(Hafner).html), 2016.
11. 陶安あんど「嶽麓秦簡司法文書集成『爲獄等狀四種』譯注稿—事案四—」『法史学研究会会報』20, 2017. 151-160.
12. 鈴木直美「里耶秦簡からみた官府の織物生産」, 高橋継男教授古稀記念東洋大学区東洋史論集編集委員会編『高橋継男教授古稀記念東洋大学区東洋史論集』, 汲古書院, 2016. 1-28.
13. 村上陽子『『農言著実』試釈: 現地調査を踏まえて』『上智史学』61, 上智大学史学会, 2016. 85-117.
14. 村上陽子「明清時代の二つの農書—中国の食糧問題を考えるために」『アジア歴史研究報告書』, JFE21 世紀財団, 2017. 67-93.
15. 目黒杏子「後漢年始儀礼の構成に関する試論」『中国古中世史研究』39 輯, 中国古中世史学会, 2016. 1-35. (査読有)
16. 目黒杏子「里耶秦簡 J1⑧1449+⑧1484 の曆日誤記に関する覺書」, 中国古代簡牘の横断領域的研究ホームページ [http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note16\(Meguro\).html](http://www.aa.tufs.ac.jp/users/Ejina/note/note16(Meguro).html), 2016.
17. 目黒杏子「二〇一五年の歴史学界—回顧と展望—東アジア (中国—戦国・秦漢)」『史学雑誌』125(5), 山川出版社, 2016. 203-209.
18. 糴山明「簡牘文書学与法制史—以里耶秦簡為例」『史料与法史学』, 中央研究院歴史語言研究所, 2016. 37-68. (査読有)
19. 鷺尾祐子「秦漢代における血縁関係と擬制血縁関係—研究動向概観」『中国史学』25, 朋友書店, 2016. 99-114.
20. 渡邊英幸 (李力訳)「秦律的「夏」與「臣邦」」『日本学者中国法制史論著選: 先秦秦漢卷』, 中華書局, 2016. 241-268.

〔口頭発表等〕計 10 件

1. 陶安「從個人經驗談談簡牘學中的法律史研究」, 2016.9.2. 中国政法大学法律古籍整理研究所.
2. 陶安「文書資料專題 (一) —秦代行政管理舉隅」, 2016.9.7. 吉林大学古籍研究書.
3. 陶安「文書資料專題 (二) —里耶秦簡識小幾則」, 2016.9.14. 吉林大学古籍研究書.
4. 陶安「法律文獻專題—秦律刑罰體系略考」, 2016.9.21. 吉林大学古籍研究書.
5. 目黒杏子「「斬蛇劍」の創出とその背景」, 東洋史研究会, 2016.11.6. 京都大学文学部.
6. 目黒杏子「前漢王朝初期における君臣関係の形成と儀礼—酎祭制度を中心として—」, 洛北史学会, 2016.6.4. 京都府立大学.

7. 初山明「簡牘学与古文書学之間—日本研究秦漢出土文献的經驗」, 2016.5.19. 湖南大学岳麓書院.
8. 初山明「そして紙が生まれた—中国古代の書写文化」, 2016.12.11. 愛知教育大学.
9. 鷺尾祐子「嘉禾四年～六年吏民簿所見夫妻齡差 (嘉禾四年～六年吏民簿にあらわれた夫婦の年齢差)」, 紀念走馬楼三国呉簡發現二十周年長沙簡牘研究国際學術研討会, 2016.8.27. 中国・長沙市, 中国共産党湖南省委員会招待所.
10. 渡邊英幸「秦統一前後の「邦」と畿内」, 東洋史研究会, 2016.11.6. 京都大学文学部.

〔図書〕計1件

陶安『嶽麓秦簡復原研究』, 上海古籍出版社, 2016. 全432頁.

近世イスラーム国家と周辺世界

研究期間: 2014–2016 (代表: 近藤信彰/所員 3, 共同研究員 19)

所員: 近藤信彰, 黒木英充, 高松洋一

共同研究員: 秋葉淳, 阿部尚史, 磯貝健一, 小笠原弘幸, 鴨野洋一郎, 木村暁, 後藤裕加子, 齋藤久美子, 澤井一彰, 島田竜登, 清水保尚, 多田守, 二宮文子, 堀井優, 真下裕之, 黛秋津, 守川知子, 山口昭彦, 和田郁子

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第8回目) 日時: 11月19日 (土) 13:00–18:30

場所: 東京外国語大学本郷サテライト 4F

齋藤久美子 (AA 研共同研究員・慶應義塾大学)

「動くサンジャク (県) — 16世紀アナトリア南東部の移動する人間集団を対象とした地方行政組織」

小笠原弘幸 (AA 研共同研究員・九州大学)

「コンスタンティノーブル征服と「世界の終わり」 — メフメト二世による終末論の超克」

堀井優 (AA 研共同研究員・同志社大学)

「16世紀オスマン帝国下のヴェネツィア行政 — バイロ・領事の役割を中心に—」

多田守 (AA 研共同研究員・香川県立三本松高等学校)

「dirlik 制度の限界とその対応策を巡って — 17世紀末におけるオスマン朝の模索とヨーロッパ諸国」

磯貝健一 (AA 研共同研究員・追手門学院大学)

「ロシア帝国トルキスタン地方のシャリーア法廷判決台帳 — 何が書かれ, 何が書かれなかったか」

後藤裕加子 (AA 研共同研究員・関西学院大学)「サファヴィー朝のカズウィーン遷都に関する一考察」

第2回研究会 (通算第9回目) 日時: 3月27日 (月) 13:00–18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 大会議室(303)

真下裕之 (AA 研共同研究員・神戸大学)「アズファリー著『サーニハート』の新発見写本について」

和田郁子 (AA 研共同研究員・岡山大学)

「英国商人のマスリパトナム日記—イギリス東インド会社とクトゥブ・シャーヒー朝」

二宮文子 (AA 研共同研究員・青山学院大学)「南アジアの近世ペルシア語文学を巡る近年の研究動向」

山口昭彦 (AA 研共同研究員・聖心女子大学)

「在地ウラマーの任命書からみる中央=地方関係— 17–19世紀イランのアルダラーン州を例に」

近藤信彰 (AA 研所員)「近世イランにおける預言者の血と王家の血—『ダビデー族詩篇』に見る王権と系譜」

研究成果一覧

〔学術論文〕計23件

1. 近藤信彰「18世紀シンド地方におけるペルシア語文化と地方社会—詩人伝『詩人たちの諸論攷』を中心に」『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 317–329.
2. Kondo, Nobuaki, Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India, *Crossing the Boundaries: Asians and Africans on the Move: Proceedings of the Papers Presented at Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 7th International Conference*, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 67–73.
3. Abe, Naofumi, “Politics of Poetics in Early Modern Iran”, *Journal of Persianate Studies* 10-2, Brill, 2017. (査読有)

4. 小笠原弘幸「トルコ共和国建国期の歴史教育におけるイスラーム史—教科書の記述分析より」『2016年度大学研究助成 アジア歴史研究報告書』, 公益財団法人 JFE21 世紀財団, 2017. 95–115.
5. 小笠原弘幸「書評「セズギ・ドゥルグン著『王の領地から祖国へ』」『史淵』154, 九州大学大学院人文科学研究院, 2017. 147–154.
6. 鴨野洋一郎「フランチェスコ・ディ・ジュリアーノ・デ・メディチの駐在員帳簿—フィレンツェ・オスマン貿易に関する新史料—」『一橋大学社会科学古典資料センター年報』37, 2017. 2–12. (査読有)
7. 鴨野洋一郎「15世紀フィレンツェの赤色染料輸入—カンピーニ商会の備忘録から—」『経済系』267, 『関東学院大学経済学会研究論集』, 関東学院大学経済学会編, 2016. 1–15. (査読有)
8. Goto, Yukako, Posch, Walther: Osmanisch-safavidische Beziehungen 1545, *Wiener Zeitschrift für die Kunde des Morgenlandes* 106, Department of Oriental Studies, University of Vienna. 2016. 412–415.
9. Goto, Yukako, Kār Kiā, *Encyclopaedia Iranica*, Forthcoming
10. 山口昭彦・齋藤久美子・武田歩・能勢美紀 (翻訳)「マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シヤイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(1)」『聖心女子大学論叢』127, 2016. 89–116.
11. 山口昭彦・齋藤久美子・武田歩・能勢美紀 (翻訳)「マルティン・ファン・ブライネセン著『アーガー・シヤイフ・国家：クルディスタンの社会・政治構造』(2)」『聖心女子大学論叢』128, 2017. 155–217.
12. 澤井一彰「気候変動とオスマン朝「小氷期」における気候の寒冷化を中心に」『環境に挑む歴史学』, 勉誠出版, 2016.10. 277–291.
13. Sawai, Kazuaki, A Survey of Historical Research on Natural Disasters in Early Modern Istanbul, *Mediterranean World* 23, The Mediterranean Studies Group Hitotsubashi University (一橋大学地中海研究会論集), 2017. 155–261.
14. Ninomiya, Ayako, A note on wilāya and competitions of sufi saints in Medieval India, *History, Literature and Scholarly Perspectives South and West Asian Context*, Karachi: Islamic Research Academy, 2016. 119–126.
15. 二宮文子「前近代のスーフィー教団の広域ネットワークとその管理」『前近代南アジアにおけるまとまりとつながり』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 259–274.
16. Horii, Yutaka, Changes in the Ottoman-Venetian Treaties in the Sixteenth and Seventeenth Centuries, *Mediterranean World* 23, The Mediterranean Studies Group Hitotsubashi University (一橋大学地中海研究会論集), 2017. 147–154.
17. 真下裕之監修 (二宮文子・真下裕之・和田郁子訳)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリー』訳注 (5)」『神戸大学文学部紀要』44, 2017. 49–88.
18. 真下裕之「クトゥブ・シャーヒー朝の起源に関する諸説とその周辺：インド洋西部海域における人的移動の諸相」『西南アジア研究』86, 西南アジア研究会, 2017. (査読有)
19. Mayuzumi, Akitsu, The Establishment of the Russian Consulates in the Danubian Principalities in the 1780s and the Ottoman Empire, *Turkey & Romania: A History of Partnership and Collaboration in the Balkans*, Türk Dünyası Belediyeler Birliği (TDBB) Publications, 2016. 287–295.
20. 黛秋津「黒海国際関係の歴史的展開——20世紀初頭まで」『黒海地域の国際関係』, 名古屋大学出版会, 2017. 26–55.
21. 山口昭彦「『イランのクルド』とサファヴィー朝の「強制」移住政策」『アジア・アフリカ言語文化研究』93, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 65–90. (査読有)
22. 和田郁子「港町マドラスにみる「境界」—17世紀のクリスチャン・タウンと「ポルトガル人」—」『境界研究』7, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2017. 25–44. (査読有)
23. 島田竜登「モノに問う歴史学—グローバル・ヒストリーの一つの方法—」『比較文明』33, 比較文明学会, 2016. 39–55.

〔口頭発表等〕計 30 件

1. 近藤信彰「19世紀後半テヘランの宗教的少数派——シャリーア法廷記録より」, 日本中東学会第 32 回年次大会, 2016.5.15. 慶應義塾大学.
2. 近藤信彰「サファヴィー朝君主の称号について」, シンポジウム「イスラームの王権をみる視角」, 2016.7.16. 関西学院大学.
3. Kondo, Nobuaki, “Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India”, Consortium for Asian and African Studies Symposium “Crossing the Boundaries: Asian and Africans on the Move”, 2016.10.22. ILCAA.
4. Kondo, Nobuaki, “State and Shari‘a in Early Modern Iran”, International Workshop “State and Shari‘a in the Pre-20th Century Middle East”, 2017.2.18. ILCAA.
5. 秋葉淳「君主の正義とシャリーアの正義——18世紀オスマン帝国におけるディーワーンと法廷」, シンポジウム「イスラームの王権をみる視角」, 2016.7.16. 関西学院大学.
6. Akiba, Jun, ““The Governor’s Divan and its Successors: Judicial Authority” in the Ottoman Provinces, 18th to 19th Centuries”, International Workshop “State and Shari‘a in the Pre-20th Century Middle East”, 2017.2.18. ILCAA.

7. 阿部尚史「手段としての「女性史」」, イスラーム・ジェンダー科研, 公開シンポジウム, 2016.6.11. 東京大学東洋文化研究所.
8. 阿部尚史「19 世紀イラン社会の婚姻: 制度と実態」, 日本イスラム協会, 理論と動向研究会, 2017.3.8. 東京大学文学部.
9. 磯貝健一「帝政期トルキスタン地方のシャリーア法廷裁判文書: 判決台帳と紙片状判決」, 近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 2016.12.3. 静岡市ふしみや貸会議室.
10. 小笠原弘幸「オスマン帝国におけるイスラームとトルコ」, 九州シルクロード協会, 2016.4.2. 福岡市人権啓発センター.
11. Ogasawara, Hiroyuki, “The Mongol and Genghis Khan in the Ottoman Historiography”, International Workshop “Authority, Legitimacy and Historiography in the Ottoman Empire”, 2016.4.9. 東京外国語大学.
12. 小笠原弘幸「トルコ共和国史研究の潮流と動向 (1981-2016)」, 九州大学拠点教育プログラム・拠点形成プロジェクト「近現代イスラーム世界の国家形成をめぐる宗教・暴力・民族共存の総合的研究」第 6 回研究会, 2016.9.30. 大阪市立大学.
13. Ogasawara, Hiroyuki, “Solving the Ottoman Genealogical Puzzle”, One-day Workshop: State, Religion, and Authority in the Post-Mongol Persianate World and Beyond, 2017.3.19. 東京大学.
14. Ogasawara, Hiroyuki, “The Identity and Legitimacy through the Ottoman Genealogical Tree Development”, 19th Annual Mediterranean Studies Association International Congress, 2016.5.27. Palermo University.
15. 木村暁「ブハラ・アミール国の司法: 政治体制とのかかわりを中心に」, 第 7 回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 2016.7.3. 京都外国語大学国際交流会館.
16. 木村暁「聖者になった相撲取り: ウズベク相撲の史的断章」, 第 3 回トークの会 in 名古屋 (主催: NPO 法人日本ウズベキスタン協会), 2016.7.23. 名古屋大学教育学部.
17. 木村暁「ロシア宗主権下ブハラのイラン人: とくにその法的・社会的地位について」, 2016 年度東洋史研究会大会, 2016.11.6. 京都大学文学部.
18. 木村暁「ブハラ・アミール国の法空間の変成: 自存からロシア統治下へ」, 第 8 回近代中央ユーラシア比較法制度史研究会, 2016.12.4. 静岡市ふしみや.
19. 木村暁「ブハラにおけるスンナ派・シーア派関係: イラン人の動向を中心に」, 「前近代ユーラシアにおけるフロンティアとトランス・フロンティア」班研究会 (班長: 稲葉穰), 2016.12.9. 京都大学人文科学研究所.
20. 木村暁「ブハラ・アミール国とヒヴァ・ハン国の勅令」, 第 15 回中央アジア古文書研究セミナー, 2017.3.12. 京都外国語大学国際交流会館.
21. 後藤裕加子「サファヴィー朝初期の首都タブリーズの王宮地区」, 日本中東学会第 32 回年次大会, 2016.5.15. 慶応義塾大学.
22. Goto, Yukako, “Rethinking the Transfer of the Safavid Capital from Tabriz to Qazvin”, Iranian Studies in Eurasia: Past, Present and Future, 2016.9.22. Russian State University for the Humanities, Moscow.
23. 齋藤久美子「文献紹介 Markus Dressler, Writing Religion: The Making of Turkish Alevi Islam, New York: Oxford Univ. Press, 2013.」, 2016 年度第 2 回アレヴィー／ベクタシー研究会, 2017.3.26. 大阪国際大学.
24. 二宮文子「デリー・サルタナト後期におけるイスラーム的系譜意識と王権」, シンポジウム「イスラームの王権をみる視角」, 2016.7.26. 関西学院大学.
25. 堀井優「近世オスマン帝国下カイロのヴェネツィア人集団」, 都市史学会大会, 2016.12.11. 大阪歴史博物館.
26. 真下裕之「ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」, 国立民族学博物館共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」, 2016.12.18. 国立民族学博物館.
27. 真下裕之「ムガル帝国宮廷における贈与儀礼: マンサブ制度の一側面として」, 科学研究費助成事業「ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開」第 4 回研究会, 2017.3.31. 首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス.
28. Mayuzumi, Akitsu, “The Russian diplomatic intervention in the Ottoman-Crimean relations after the treaty of Küçük Kaynarca (1774)”, 3rd International Congress of Pontic Studies, 2016.11.19. Aristotle University of Thessaloniki.
29. 和田郁子「コロマンデル海岸の所謂「ポルトガル人」と草創期のマドラス — 「境界」の視点から」, 第 77 回羽田記念館定例講演会, 2016.11.17. 京都大学ユーラシア文化研究センター.
30. Shimada, Ryuto, “Iranian Settlers in Ayutthaya for Intra-Asian Trade during the Seventeenth and Eighteenth Centuries”, To the Seas and Beyond: An International Conference on the History of the Maritime Silk Road, 2017.3.4. Hong Kong Museum of History.

〔図書〕計 2 件

1. 和田郁子・小石かつら (編)『他者との邂逅は何をもたらすのか — 「異文化接触」を再考する』, 昭和堂, 2017. 全 192 頁.
2. Kondo, Nobuaki, *Islamic Law and Society in Iran: A Social History of Qajar Tehran*, Routledge, 2017. 210 pp.

〔社会に向けた成果発表〕計6件

1. 近藤信彰「イラン史のなかのテュルク——共存と交錯」『テュルクを知るための61章』, 明石書店, 258–261.
2. 阿部尚史「イラン文書調査雑記」『UTCMES ニュースレター』9, 東京大学グローバル地域研究機構附属中東地域研究センター, 2016. 14–15.
3. 小笠原弘幸「第4章 オスマン朝におけるテュルクの系譜—オグズ伝承から「系譜書」へ」『テュルクを知るための61章』, 明石書店, 2016.8.
4. 小笠原弘幸「第41章 コンスタンティノープルの征服—地中海と黒海の覇者テュルク」『テュルクを知るための61章』, 明石書店, 2016.8.
5. 齋藤久美子「映画から知る現代社会『消えた声, その名を呼ぶ』とトルコ南東部の今—アルメニア人の残した風景」『ワセダアジアレビュー』19, 早稲田大学地域・地域間研究機構, 2016. 66–69.
6. 高松洋一「オスマン朝のハットウ・ヒュマーユーン (宸筆)」『歴史と地理』699, 山川出版社, 2016. 26–33.

シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—

研究期間：2014–2016 (錦田愛子／所員 2, 共同研究員 12)

所員：錦田愛子, 床呂郁哉

共同研究員：伊藤一頼, 小坂田裕子, 久保忠行, 近藤敦, 佐伯美苗, 白川俊介, 菅原真, 陳天璽, 飛内悠子, 堀抜功二, 村尾るみこ, 柳井健一

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第7回目) 日時：2016年7月10日 (日) 13:00–17:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) マルチメディアセミナー室 (306)

久保忠行 (AA研共同研究員・大妻女子大学)

「難民・市民社会・NGOs—ビルマ (ミャンマー) 難民の視点から—」

柳井健一 (AA研共同研究員・関西学院大学) 「故郷を追われない権利とマグナ・カルタ」

全員 打ち合わせ

第2回研究会 (通算第8回目) 日時：2016年10月29日 (土) 10:00–19:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA研) マルチメディアセミナー室 (306)

陳天璽 (AA研共同研究員・早稲田大学) 「国籍, パスポート, アイデンティティ—無国籍者と複数国籍者から」

小坂田裕子 (AA研共同研究員・中京大学)

「難民及び庇護希望者の労働の権利—難民条約と社会権規約の比較検討」

全員 成果出版に向けた執筆計画報告

第3回研究会 (通算第9回目) 日時：2017年2月22日 (水) 13:00–19:00

場所：関西学院大学梅田キャンパス (大阪府大阪市北区茶屋町19-19 アプロースタワー)

全員 成果出版に向けた執筆状況報告, 相互コメント

研究成果一覧

〔学術論文〕計29件

1. 床呂郁哉「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 199–218. (査読有)
2. Tokoro, Ikuya, Peace building in the wild: Thinking about institutions from cases of conflict and peace in Sulu, *Institutions: The Evolution of Human Sociality.*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 197–218. (査読有)
3. 床呂郁哉「書評：鈴木佑記著『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』」『東南アジア研究』54(2), 京都大学東南アジア地域研究所, 2017. 268–271.
4. Kondo, Atsushi, Citizenship in Japan and the Influence of International Human Rights Law, *Grootboek: Liber Amicorum Prof. Gerard-René de Groot*, Wolters Kluwer, 2016. 229–239.
5. 近藤敦「教育をめぐる権利と義務の再解釈」『名城法学』66(1), 名城大学法学部, 2016. 305–328.
6. Kondo, Atsushi, Report on citizenship law: Japan, *EUDO Citizenship*, European University Institute, 2016. 1–18. (査読有)
7. 近藤敦「複数国籍の現状と課題」『法学セミナー』62(3), 日本評論社, 2017. 1–4.

8. 近藤敦「移民統合政策指数 (MIPEX) における欧米韓日の比較」『法律時報』89(4)1, 日本評論社, 2017. 73-78.
9. 近藤敦「日本における多文化家族支援政策のあり方」『多文化共生研究年報』14, 名古屋多文化共生研究会, 2017. (査読有)
10. 近藤敦「パスポートとは? 国籍とは?」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 160-165.
11. 小坂田裕子「公共空間におけるイスラムのヴェール問題—欧州人権裁判所の判例の批判的考察—」『中京法学』51(2・3), 中京大学学術研究会, 2017. 39-64.
12. 小坂田裕子「アイヌ女性と複合差別—多原良子さんと八幡巴絵さんへのインタビュー」『部落解放研究』206, 部落解放・人権研究所, 2017.
13. 伊藤一頼「国連海洋法条約—漁業資源をどう利用し, どう守るか」『法学教室』432, 有斐閣, 2016. 138-144.
14. 伊藤一頼「国際労働機関(ILO)憲章—社会に浸透する国際労働基準」『法学教室』438, 有斐閣, 2017. 113-119.
15. 伊藤一頼「TPP と『労働者の権利』—通商協定の下で国際化される労働問題—」『国際商事法務』45(1), 国際商事法研究所, 2017. 66-72.
16. 伊藤一頼「沖縄が日本から独立するかもしれない?—現在の国際社会における自決権の意義—」『国際法で世界がわかる—ニュースを読み解く 32 講』, 岩波書店, 2016. 32-40.
17. 錦田愛子「外国人の市民権とは——グローバル市民への視点」『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし, 互いに学ぶ社会へ』, 慶應義塾大学出版会, 2016. 92-100.
18. 錦田愛子「アラブ諸国のパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 47-51.
19. 錦田愛子「移民/難民とパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 215-218.
20. 錦田愛子「中東・北アフリカの移民/難民研究」『中東・イスラーム研究概説—政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』, 明石書店, 2017. 151-159.
21. 錦田愛子「ヨーロッパの市民権を求めて—アラブ系移民/難民の移動と受入政策の変容」『中東研究』528 (2016 年度 Vol.III), 中東調査会, 2017. 16-25.
22. 錦田愛子「封鎖されたガザ地区に生きる人々—政治的孤立による人と物の移動の変化」『日本の科学者』51(11), 日本科学者会議, 2016. 18-23.
23. 錦田愛子「北欧をめざすアラブ系「移民/難民」—再難民化する人びとの意識と移動モデル」『広島平和研究』4, 広島平和研究所, 2017. 13-34. (査読有)
24. 錦田愛子「パレスチナ・ディアスポラ—繰り返される移動」『パレスチナを知るための 60 章』, 明石書店, 2016. 23-26.
25. 錦田愛子「シリア・レバノンのパレスチナ人—安全と未来を求めて」『パレスチナを知るための 60 章』, 明石書店, 2016. 240-243.
26. 明石書店, 2016. 240-243.
27. Murao, Rumiko, The Daily Life Strategies of Small-scale Farmers after Prolonged War: Long-Term Influence of Humanitarian Assistance, *African study monographs. Supplementary issue* 53, Center for Kyoto University African Studies, 2017. 103-116. (査読有)
28. 村尾るみこ「ザンビアにおける国民と難民の開発—社会福祉実現に向けた課題」『世界の社会福祉年鑑 2016』, 旬報社, 2016.
29. 柳井健一「海外渡航の自由とパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 200-205.
30. 柳井健一「イギリス憲法改革と憲法の成文化」『比較法研究』78, 有斐閣, 2017. 138-144.

〔口頭発表等〕計 21 件

1. 近藤敦「ヘイトスピーチ規制の課題と展望」, 移民政策学会, 2016.5.28. 慶応義塾大学.
2. 近藤敦「日本における多文化家族支援政策のあり方」, 名古屋多文化共生研究会, 2016.7.16. 名古屋学院大学.
3. Kondo, Atsushi, “Japanese Style Integration Policy and Recent Comparative Data of Immigrants”, International Metropolis Conference, 2016.10.27. Nagoya Congress Center.
4. 小坂田裕子「公共空間におけるイスラムのヴェール問題—欧州人権裁判所判決・決定の批判的考察」, 国際法学会 2016 年度 (第 119 年次) 研究大会, 2016.9.10. 静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップ
5. 小坂田裕子「難民及び庇護希望者の労働の権利」, 全国難民弁護団連絡会議年次総会, 2016.10.1. 聖パウロ修道会.
6. Osakada, Yuko, “The CBD in the Human Rights Regime”, Japan-Korea Workshop on Access to Genetic Resources and Benefit Sharing Arising from their Utilization under the Nagoya Protocol, 2017.3.3. 立命館大学.
7. 白川俊介「新自由主義的世界におけるナショナリティの規範的重要性の再評価に関する若干の考察」, 社会思想史学会第 41 回大会, 2016.10.30. 中央大学後楽園キャンパス.
8. 白川俊介「リベラル・デモクラシーと公共精神—規範的一考察—」, 日本公共政策学会関西支部第 50 回例会,

2016.12.10. 関西大学高槻ミュージックキャンパス.

9. 伊藤一頼「公法分野における経済規制の国際的調和—私法統一との比較において」, 国際法学会 2016 年度研究大会, 2016.9.11. 静岡県コンベンションアーツセンター・グランシップ.
10. Nishikida, Aiko, "Migration in desperation: Palestinians' move to EU countries", International Metropolis Conference, 2016.10.26. Nagoya Congress Center.
11. 錦田愛子「ヨーロッパをめざす中東難民—レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って—」, 人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業・AA 研拠点・パレスチナ/イスラエル研究会, 2016.6.26. 東京大学東洋文化研究所.
12. 錦田愛子「シリア難民の移動と受入国における状況—中東の混乱とヨーロッパでの受け入れをめぐる変化」, 日本赤十字社和歌山国際保健セミナー, 2016.5.21. 日本赤十字社和歌山医療センター.
13. 村尾るみこ「アフリカ南部農村における緊急人道支援の影響」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
14. Murao, Rumiko, "Local Struggle with the Cassava Cultivation in Southern Africa: "Revolution" for the Immigrants' Life", Sustainable and Just Rural Transitions: Connections and Complexities Session 45B Green Revolution from Comparative Perspective: Between Asian and African Experiences 2, 2016. 12. 8. Ryerson University.
15. 飛内悠子「奇跡と啓蒙が会おうとき: 北部ウガンダにおける超教派的キリスト教礼拝集会」, 日本文化人類学会第 50 回学術大会, 2016.5.29. 南山大学.
16. 飛内悠子「地域形成とモビリティ: 北部ウガンダ, アジュマニ県を事例として」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学.
17. Tobinai, Yuko, "The Possibility and Necessity of Refugee Citizenship: The Case Study of a South Sudanese Refugee Village in Adjumani, Uganda", International Forced Migration Studies 16th Conference, 2016.7.16. Adam Mickiewicz University.
18. Chen, Tienshi, "Statelessness in Japan and the Network to support Stateless people", International Symposium on Statelessness, 2016.9.13. Thammasart University.
19. 陳天璽「国籍・パスポート・人間」, 日本平和学会, 2016.10.23. 明星大学.
20. Chen, Tienshi, "Trans-Border and Interdisciplinary Collaboration on Statelessness in Japan and Thailand", Association for Asian Studies, 2017.3.17. Toronto, Canada.
21. 久保忠行「難民の人類学—ビルマ難民の生活世界と難民経験」, 第26回日本移民学会年次大会シンポジウム, 移民と難民: いま移民研究に何ができるのか, 2016.6.25. 阪南大学.

〔図書〕計6件

1. 床呂郁哉『トランスカルチャー状況下における顔・身体額の構築 (シンポジウム報告書)』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全130頁.
2. 床呂郁哉『もの人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題 (シンポジウム報告書)』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全118頁.
3. 床呂郁哉・佐久間寛・塩原朝子 (編)『災害の／とフィールドワーク』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全124頁.
4. 近藤敦『人権法』, 日本評論社, 2016. 全395頁.
5. 倉持孝司 (編)・菅原真ほか (著)『歴史から読み解く日本国憲法 [第2版]』, 法律文化社, 2017. 全243頁.
6. 陳天璽他編『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 全272頁.

〔社会に向けた成果発表〕計15件

1. 床呂郁哉「書評: エドゥアルド・コーン『森は考える—人間的なるものを越えた人類学』 亜紀書房『図書新聞』2016年6月11日号, 2016.6-6.
2. 堀抜功二「カタール—天然ガス大国の危機感—」『アジア研ワールド・トレンド』2017年2月号 (No.256), アジア経済研究所, 2017.22-23.
3. 錦田愛子「中東地域からの移民/難民をめぐる動向と展望」『アジア研ワールド・トレンド』2017年2月号 (No.256), アジア経済研究所, 2017.46-47.
4. 錦田愛子「パレスチナ学生基金—無国籍の「ガザ難民」に学費支援」『季刊アラブ』158, 2016.32-32.
5. 錦田愛子「映画 シリアの花嫁—越えられない境界線」『ワールド・シネマ・スタディーズ—世界の「いま」を映画から考えよう』, 勉誠出版, 2016.45-52.
6. 飛内悠子「南スーダンと日本の平和: 紛争の『現場』から」『中東と日本の針路: 安保法制を超えて』, 大月書店, 2016.175-180.

7. 飛内悠子「スーダン」『中東・イスラーム研究概説：政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』、明石書店、2017. 302-307.
8. キース・ユウイング著、元山健・柳井健一訳「ブレグジットの憲法理論—イギリス高等法院ミラー判決を契機として」『法律時報』89(3)、日本評論社、2017. 86-91.
9. 陳天璽「『パスポート学』が解き明かす国家と個人の関係」、YOMIURI ONLINE『深読みチャンネル』(URL: <http://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20161122-OYT8T50036.html>)
10. 陳天璽「多文化社会の小さな種」『外国人の子ども白書』、明石書店、2017. 46-47.
11. 陳天璽「無国籍の子どもがなぜ生まれるのか」『外国人の子ども白書』、明石書店、2017. 180-182.
12. 久保忠行「ことばの重要性：ベトナム料理店を経営する女性の経験から」『ベトナム難民一世・二世たちの震災の記憶 阪神・淡路大震災から 20 年を迎えて』、2016. 14-16.
13. 久保忠行「小学生だった頃の震災経験：ベトナム難民二世として生きること」『ベトナム難民一世・二世たちの震災の記憶 阪神・淡路大震災から 20 年を迎えて』、2016. 29-31.
14. 久保忠行「外部有識者／地域専門家による所感」『ジャパン・プラットフォーム (JPF) ミャンマー少数民族帰還民支援プログラム 終了時評価調査報告書』、2016. 70-72.
15. Kubo, Tadayuki, 「書評：Beyond Borders: Stories of Yunnanese Chinese Migrants of Burma. By Wen-Chin Chang.」, *The International Journal of Asian Studies* 13(2), 2016. 263-265.

[その他] 計 2 件

1. 錦田愛子「中東和平交渉は後退するのカー・トランプ発言が意味するもの」『ニューズウィーク日本版』、2017 年 3 月 9 日
2. 錦田愛子「トランプはどこまでイスラエルに味方するのか：入植地問題」『ニューズウィーク日本版』、2017 年 2 月 10 日

東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）

研究期間：2014-2016（代表：富沢寿勇（静岡県立大学）／所員 5, 共同研究員 19）

所員：西井涼子, 黒木英充, 飯塚正人, 床呂郁哉, 錦田愛子

共同研究員：富沢寿勇, 今泉慎也, 小河久志, 奥島美香, 金子奈央, 川端隆史, 黒田景子, 塩谷もも, 菅原由美, 鈴木伸隆, 左右田直規, 辰巳頼子, 福島康博, 見市建, 森正美, Azizah Kassim, Julkipli Milhon Adduk, Omar Farouk, Shamsul Amri Baharuddin

研究会等の内容

第 1 回研究会（通算第 7 回目） 日時：2016 年 7 月 16 日（土）13:00 - 19:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）マルチメディアセミナー室（306）

使用言語：日本語

菅原由美（AA 研共同研究員・大阪大学）「インドネシア国史とイスラーム」

左右田直規（AA 研共同研究員・東京外国語大学）

「戦前期英領マラヤのマレー語歴史教科書に見る歴史認識—イスラームに関わる記述を中心に—」

床呂郁哉（AA 研所員）「フィリピン南部におけるムスリム分離主義の現在—ドゥテルテ新政権下におけるミンダナオ紛争と和平プロセスの行方」

コメント：錦田愛子（AA 研所員）

第 2 回研究会（通算第 8 回目） 東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ

日時：2016 年 8 月 28 日（日）14:00-20:00

場所：Gaya Room 1, Hotel Meridien Kota Kinabalu (Jalan Tun Fuad Stephens, Kota Kinabalu) 使用言語：英語

共催：Kota Kinabalu Liaison Office,

基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクローマクロ系の連関 2」

床呂郁哉（AA 研所員）開会挨拶

オマル・ファルーク（AA 研共同研究員・マレーシア理科大学）

「大陸部東南アジアにおけるイスラームと文化多様性」

シャムスル・A・B（AA 研共同研究員・マレーシア国民大学）

「多様性から超多様性へ：島嶼部東南アジアのイスラム世界」

吉田ゆか子 (AA 研所員)

「多宗教都市ジャカルタにおけるバリ舞踊—イスラムの学習者とヒンドゥ教徒のインストラクターについての事例研究より」

坪井祐司 (AA 研研究機関研究員) 「マラヤの脱植民地化におけるシンガポールのイスラム知識人の対案」
全員 討論

富沢寿勇 (AA 研共同研究員・静岡県立大学) 閉会挨拶

全員 情報交換会

第3回研究会 (通算第9回目) 日時：2016年11月13日 (日) 13:00-19:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディアセミナー室 (306)

成果論集出版のための打ち合わせ (全員)

第4回研究会 (通算第10回目) 日時：2017年3月31日 (金) 13:00-19:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディアセミナー室(306)

主催：基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ-マクロ系の連関2」

小林寧子 (南山大学) 「植民地期のインドネシアのイスラーム系定期刊行物：試論」

川端隆史 (AA 研共同研究員・Uzabase Asia Pacific)

「日本の「ハラール・ビジネス」をめぐる誤解とその再生産」

成果論集出版のための打ち合わせ (全員)

研究成果一覧

[学術論文] 計31件

1. 床呂郁哉「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 199-218.
2. Tokoro, Ikuya, Peace building in the wild: Thinking about institutions from cases of conflict and peace in Sulu, *Institutions: The Evolution of Human Sociality*, Kyoto University Press & Trans Pacific Press, 2017. 197-218. (査読有)
3. 床呂郁哉「書評：鈴木佑記著『現代の〈漂海民〉——津波後を生きる海民モーケンの民族誌』」『東南アジア研究』54(2), 京都大学東南アジア地域研究所, 2017. 268-271.
4. 塩谷もも「海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察：「アジア文化演習」を通じて」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス紀要』56, 2017. 179-189. (査読有)
5. 小河久志「世俗と宗教—タイのイスラム社会を事例に」『東南アジア地域研究入門 2 社会』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 289-305.
6. 小河久志「宗教を越えたNGOの協働—タイ南部インド洋津波被災地における支援活動」『グローバル支援の人類学—変貌するNGO・市民活動の現場から』, 昭和堂, 2017. 319-337.
7. Nishii, Ryoko, The Muslim community in Mae Sot: The transformation of the Da'wa Movement, *Communities of Potential Social Assemblages in Thailand and Beyond*, Chiang Mai: Silkworm Books, 2016. 107-127.
8. 鈴木伸隆「ユネスコ世界遺産一覧表記載とナショナルな歴史解釈—フィリピン歴史都市ビガンの事例から」『国際公共政策論集』39, 2017. 1-14. (査読有)
9. 鈴木伸隆「書評 永野善子著『日本/フィリピン歴史対話の試み—グローバル化時代のなかで』」『歴史評論』803, 歴史科学協議会, 2017. 109-110.
10. 左右田直規「国境を越える『マレー世界』運動の可能性と問題—ドゥニア・ムラユ・ドゥニア・イスラーム (DMDI) 運動を中心に」『東洋大学アジア文化研究所研究年報』51, 2017. 276-277.
11. 左右田直規「朝日新聞大阪本社所蔵『富士倉庫資料』(写真)—マラヤ関係概説—」『朝日新聞大阪本社所蔵「富士倉庫資料」(写真) 東南アジア関係一覧』, 早稲田大学アジア太平洋研究センター, 2017. 211-273.
12. 見市建「インドネシアの連邦制なき『世界一の地方分権化』」『連邦制の逆説? 効果的な統治制度か』, ナカニシヤ出版, 2016. 236-251.
13. 見市建「宗教」『東南アジア地域研究入門 3 政治』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 255-272.
14. Miichi, Ken, Looking at Links and Nodes: How Jihadists in Indonesia Survived, *Southeast Asian Studies* 5(1), 2016. 135-154. (査読有)
15. Miichi, Ken, Minority Shi'a Groups as a Part of Civil Society in Indonesia, *Middle East Institute*, 2016.
16. 見市建「時間と空間を超えたネットワーク」『中東・イスラーム研究概説』, 明石書店, 2017. 170-177.

17. 辰巳頼子「正しい被災者と正しい避難者」—福島第一原発事故からの母子避難者の四年間『清泉女子大学キリスト教文化研究所年報』25, 清泉女子大学キリスト教文化研究所, 2017. 1-17.
18. 菅原由美「インドネシア国史とイスラーム」『Ex oriente』24, 大阪大学言語社会学会, 2017.
19. 今泉慎也「タイにおける格差拡大と相続税の導入」『論究ジュリスト』2017年冬号, 有斐閣, 2017. 168-169.
20. 今泉慎也「タイ国王の権威はどこから来るか? プミポン時代から探る」『外交』41, 外務省, 2017.2. 84-85.
21. 富沢寿勇「ハラール産業の現状と日本の取り組み」『Bio Industry』33(4), シーエムシー出版, 2016. 13-19.
22. 福島康博「イスラームに基づく食の安全・安心: マレーシアのハラール認証制度の事例」『現代のイスラーム法』, 弘文堂, 2016. 151-193.
23. 錦田愛子「外国人の市民権とは——グローバル市民への視点」『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし, 互いに学ぶ社会へ』, 慶應義塾大学出版会, 2016. 92-100.
24. 錦田愛子「アラブ諸国のパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 47-51.
25. 錦田愛子「移民/難民とパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 215-218.
26. 錦田愛子「中東・北アフリカの移民/難民研究」『中東・イスラーム研究概説 —政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』, 明石書店, 2017. 151-159.
27. 錦田愛子「ヨーロッパの市民権を求めて—アラブ系移民/難民の移動と受入政策の変容」『中東研究』528 (2016年度 Vol.III), 中東調査会, 2017. 16-25.
28. 錦田愛子「封鎖されたガザ地区に生きる人々——政治的孤立による人と物の移動の変化」『日本の科学者』51(11), 日本科学者会議, 2016. 18-23.
29. 錦田愛子「北政をめざすアラブ系「移民/難民」—再難民化する人びとの意識と移動モデル」『広島平和研究』4, 広島平和研究所, 2017. 13-34. (査読有)
30. 錦田愛子「パレスチナ・ディアスポラ—繰り返される移動」『パレスチナを知るための60章』, 明石書店, 2016. 23-26.
31. 錦田愛子「シリア・レバノンのパレスチナ人—安全と未来を求めて」『パレスチナを知るための60章』, 明石書店, 2016. 240-243.

〔口頭発表等〕計22件

1. 床呂郁哉「ミダナオ情勢と和平プロセスの展望」, JICA 関係者実務者会合, 2016.10.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
2. 床呂郁哉「趣旨説明とイントロダクション」, 公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2016.12.9. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
3. 床呂郁哉「リスク・ハザードと在来知に関する試論: 東南アジア海域世界の事例から」, 三分野連携集会, 2016.12.15. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
4. 塩谷もも「インドネシアの今を衣服から知る」, 総合文化講座・島根県立大短期大学部松江キャンパス公開講座, 2016.7.13. 島根県立大学松江キャンパス.
5. 塩谷もも「多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの—インドネシアの事例から」, 公開シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2016.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. 小河久志・鈴木佑記「タイ(プーケット)現地調査報告」, 「アジアのイスラーム: 実像と課題」第3回研究会, 2016.10.18. 笹川平和財団.
7. 小河久志「タイにおける観光ダイビング産業の現状—東部の事例—」, 宮城学院女子大学キリスト教文化研究所公開研究会, 2017.2.13. 宮城学院女子大学.
8. Nishii, Ryoko, "The Body at Death: Muslim-Buddhist Relations in a Southern Thai Village", Panel 102: Buddhist-Muslim Interactions in South and Southeast Asia, 75th Annual Conference AAS(Association for Asian Studies), 2016.4.1. Washington State Convention Center, Seattle, Washington USA.
9. 西井涼子「民族誌記述の基点としての『もつれ髪』—ヒッピーからダツワ実践者へ」, 「もの」の人類学的研究会(2)—人間/非人間のダイナミクス—共同研究会, 2016.6.11. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
10. Suzuki, Nobutaka, "World Heritage Site Tourism and Its Impact on a Local Economy: A Study of Vigan, Ilocos Sur, the Philippines", 10th International Conference on Philippine Studies, 2016.7.8. Siliman University, Dumaguete City, the Philippines.
11. Suzuki, Nobutaka, "Debate over the U.S. Rubber Plantation in the Colonial Philippines", Joint Symposium on Empire and Nationalism: Comparative Analysis on Asia, 2016.11.24. University of the Philippines-Diliman, The Philippines.

12. 吉田ゆか子「無形文化遺産の担い手コミュニティとは何か—『美しきインドネシアミニチュア公園』のベスト・プラクティスへの申請から考える」, 日本文化人類学会第 50 回研究大会, 2016.5.28. 南山大学.
13. 辰巳頼子「難民をめぐる「誤解」と「理解」—東ティモールと日本の事例から」, 清泉女子大学公開講座第 34 回, 2016.10.8. 清泉女子大学.
14. Sugahara, Yumi and Toru Aoyama, “Introducing Javanese Documents Online (JVDO)”, Simposium Internasional ke 16 Masyarakat Pernaskahan Nusantara, 2016.9.28. Perpustakaan Nasional Republik Indonesia.
15. 菅原由美「19 世紀ジャワ語出版キターブとガザリー —Soleh Darat 著 Munjiyat puthikan saking Ihya Ulum al-Din を中心に」, 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキターブ比較研究」, 2017.2.23. 上智大学.
16. 富沢寿勇「静岡発ハラールサプライチェーンモデルの構築とムスリムツーリズム振興」, 静岡県立大学 US フォーラム, 2016.4.20. 静岡県立大学.
17. 富沢寿勇「日本のハラール対応と最新動向」, ハラール商品開発研究会, 2017.2.15. 静岡市ナマステ.
18. 富沢寿勇「ハラール産業の現状と対応策」, 情報機構セミナー, 2017.3.9. 大田区産業プラザ.
19. 福島康博「マレーシアにおけるイスラーム金融サービス法の施行とイスラーム金融機関への影響」, 2016 年度日本金融学会春季大会, 2016.5.14. 武蔵大学.
20. Nishikida, Aiko, “Migration in desperation: Palestinians' move to EU countries”, International Metropolis Conference, 2016.10.26. Nagoya Congress Center.
21. 錦田愛子「ヨーロッパをめぐる中東難民—レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って—」, 人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業・東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 拠点・パレスチナ/イスラエル研究会, 2016.6.26. 東京大学東洋文化研究所.
22. 錦田愛子「シリア難民の移動と受入国における状況—中東の混乱とヨーロッパでの受け入れをめぐる変化」, 日本赤十字社和歌山国際保健セミナー, 2016.5.21. 日本赤十字社和歌山医療センター.

〔図書〕計 2 件

1. 床呂郁哉『トランスカルチャー状況下における顔・身体額の構築 (シンポジウム報告書)』, アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全 130 頁.
2. 鈴木伸隆・大野拓司・日下渉 (編)『フィリピンを知るための 64 章』, 明石書店, 2016. 全 399 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計 13 件

1. 床呂郁哉「書評：エドゥアルド・コーン『森は考える—人間的なるものを越えた人類学』 亜紀書房『図書新聞』2016 年 6 月 11 日号, 2016. 6-6.
2. 小河久志「自著を語る, 小河久志『正しい』イスラームをめぐるダイナミズム—タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌—」, ASNET (東京大学日本・アジアに関する教育研究ネットワーク) メールマガジン (URL: <https://www.asnet.u-tokyo.ac.jp/node/7466>)
3. 吉田ゆか子『バリ島の芸能文化—踊り, 奏で, 祈る日常』在ジャカルタ邦人向け公開講演会
4. 見市建「ポピュリズムの流行と選挙ビジネスの拡大」『東亜』588, 霞山会, 2016. 8-9.
5. 見市建『宗派对立』の陥穽『東亜』591, 霞山会, 2016. 8-9.
6. 見市建「ジョコウィ政権の 2 年」『東亜』594, 霞山会, 2016. 8-9.
7. 見市建「イスラーム防衛行動と『反中』の影」『東亜』597, 霞山会, 2017. 8-9.
8. 金子奈央「マレーシア ナジブ首相の巨額汚職疑惑にゆれる」『アジア動向年報 2016』, アジア経済研究所, 2016. 350-374.
9. 金子奈央「もうひとつの海の問題」, 『じゃかるた新聞』, じゃかるた新聞, 2016. 1-1.
10. 金子奈央「マレーシアの外国人 - 新たな共生への挑戦 -」, 『アジ研ワールド・トレンド』2017 年 1 月号 (No.255), アジア経済研究所, 2016. 43-46. (URL: http://d-arch.ide.go.jp/idedp/ZWT/ZWT201701_014.pdf)
11. 錦田愛子「中東地域からの移民/難民をめぐる動向と展望」, 『アジ研ワールド・トレンド』2017 年 2 月号 (No.256), アジア経済研究所, 2017. 46-47.
12. 錦田愛子「パレスチナ学生基金—無国籍の「ガザ難民」に学費支援」『季刊アラブ』158, 日本アラブ協会, 2016. 32-32.
13. 錦田愛子「映画 シリアの花嫁—越えられない境界線」『ワールド・シネマ・スタディーズ—世界の「いま」を映画から考えよう』, 勉誠出版, 2016. 45-52.

〔その他〕計 2 件

1. 錦田愛子「中東和平交渉は後退するのか—トランプ発言が意味するもの」『ニューズウィーク日本版』, 2017 年 3 月 9 日

2. 錦田愛子「トランプはどこまでイスラエルに味方するのか：入植地問題」『ニューズウィーク日本版』, 2017年2月10日

アフリカに関する史的研究と資料

研究期間：2014–2016（代表：苅谷康太／所員 2, 共同研究員 8）

所員：苅谷康太, 石川博樹

共同研究員：網中昭世, 大澤広晃, 北川勝彦, 工藤晶人, 坂井信三, 永原陽子, 眞城百華, 溝辺泰雄

研究会等の内容

第1回研究会（通算第7回） 日時：2016年7月23日（土）13:00–19:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室（306）

大澤広晃（AA研共同研究員・南山大学）

「アフリカ・イメージの変化？：イギリス「人道主義」に関する史料を手がかりに」

永原陽子（AA研共同研究員・京都大学）「アフリカ史/アフリカ地域研究のアフリカ化と植民地史料」

全員 成果出版及び今後の日程について

第2回研究会（通算第8回） 日時：2016年11月19日（土）13:00–18:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）

西野太郎（中央大学）

「カブラルの航海記録に関するイタリア語写本の新たな価値：キルワ王国関連記事を中心に」

北川勝彦（AA研共同研究員・関西大学）「アフリカ史研究の『リオリエント』再訪」

全員 成果出版及び今後の日程について

第3回研究会（通算第9回） 日時：2017年3月5日（日）13:00–15:00（公開）、15:00–18:00（非公開）

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）セミナー室（301）

13:00–15:00（公開） 溝辺泰雄（AA研共同研究員・明治大学）「アフリカンナショナリズム及びパンアフリカニズム関連史料調査についての予備的報告：19世紀後半から1960年代までのガーナ（英領ゴールドコースト）メディアの事例から」

15:00–18:00（非公開） 全員 成果出版の打ち合わせ

研究成果一覧

〔学術論文〕計15件

1. 網中昭世「モザンビークにおける政治暴力発生メカニズム—除隊兵士と野党の役割—」『アフリカレポート』55, 2017. 62–73. (査読有)
2. 網中昭世「南アフリカ—『虹の国への道のり』」『安定を模索するアフリカ』, ミネルヴァ書房, 2017. 292–310.
3. 網中昭世「『雇用なき成長』下のモザンビークにおける雇用政策」『アフリカレポート』54, 2016. 56–66. (査読有)
4. 石川博樹「偽バナナは消えたのか：北部エチオピアの栽培植物をめぐる歴史学的考察」『環境に挑む歴史学』, 勉誠出版, 2016. 336–347.
5. 大澤広晃「戦間期イギリスにおける「人道主義」と南アフリカ問題—反奴隷制および原住民保護協会の活動を中心に—」『アカデミア 人文・自然科学編』12, 2016. 149–169.
6. 坂井信三「マリのイスラーム過激派組織 FLM (Le Front de Liberation du Macina) の社会的背景——牧畜民の周辺化と地域社会の不安定化」『アカデミア 人文・自然科学編』13, 南山大学, 2017. 23–38.
7. 世界史叢書編集委員会（秋田茂, 永原陽子, 羽田正, 南塚信吾, 三宅明正, 桃木至朗）「総論 われわれが目指す世界史」『世界史叢書総論 「世界史」の世界史』, ミネルヴァ書房, 2016. 391–427.
8. 眞城百華「戦う女性たち—ティグライ人民解放戦線と女性」『現代エチオピアの女たち：社会変化とジェンダーをめぐる民族誌』, 明石書店, 2017. 146–179.
9. 眞城百華「地中海を渡るアフリカ難民の検討—アフリカの角の事例から—」『多文化社会研究』（長崎大学多文化社会学部紀要）3, 2017. 35–49.
10. 眞城百華「内戦支援から NGO へ—ティグライ女性協会の活動を中心に—」『NGO とアフリカの市民社会』, 科研報告書（基盤研究 B（海外学術調査）（課題番号：25300049）, 研究代表者：大阪府立大学・宮脇幸生教

授, 「NGO 活動の作りだす流動的社会空間についての人類学的研究—エチオピアを事例として—」, 2017. 60-85.

11. Mizobe, Yasu'o, History of Intellectual Relations between Africa and Japan During the Interwar Period as Seen Through Takehiko Kojima's African Experience of 1936, 『明治大学国際日本学研究』 9(1), 2017. 63-81. (査読有)
12. 溝辺泰雄「植民地前半期に構想された「アフリカ独自の近代化」における「発展」概念の史的考察: イギリス領ゴールドコースト(現ガーナ)の現地エリート S.R.B.アットー=アフマの思想から」『明治大学人文科学研究紀要』 80, 2017. 1-34. (査読有)
13. 荻谷康太「19世紀初頭の西アフリカにおける不信仰者の分類と奴隷化: ウスマーン・ブン・フーディーの著作の分析から」『アフリカ研究』 89, 日本アフリカ学会, 2016. 1-13. (査読有)
14. Kariya, Kota, The "Ignorant People" in Hausaland: 'Uthmān bn Fūdī's Ḥukm juhhāl balad Ḥawsa, *Journal of Asian and African Studies* 92, 2016. 207-220. (査読有)
15. 荻谷康太「初期ソコト・カリフ国における背教規定」『アジア・アフリカ言語文化研究』 94号, 2017. (査読有)

[口頭発表等] 計 15 件

1. 石川博樹「食と農のアフリカ史: アフリカ史研究の可能性を探る」京都大学アフリカ地域研究資料センター第 221 回アフリカ地域研究会, 2016.10.20. 京都大学稲盛財団記念館.
2. 石川博樹「一皿のなかの歴史: 歴史学研究と地域研究」, 地域研究コンソーシアム 2016 年度ワークショップ「地域研究の底力: 現場から考える」, 2016.11.6. 京都大学稲盛財団記念館.
3. 大澤広晃「「帝国史」と「国内史」の総合を目指して」, 近世イギリス史研究会, 2016.10.8. 大学共同利用施設 UNITY.
4. Kitagawa, Katsuhiko, "Japan-Africa in the International Africanist Movement and the Discourse of Strengthening Implementation of TICAD", 日本アフリカ学会第 53 回学術大会 Forum Historicizing Japan-Africa Relations Revisited, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
5. 北川勝彦「インドにおけるアフリカ研究—歴史・現状・課題—」, JETRO アジア経済研究所「アフリカ開発政策の課題と連関」研究会, 2017.3.8. 日本貿易振興機構.
6. 坂井信三「イスラーム改革運動の歴史的展開 —仏領西アフリカと英領ナイジェリアの教育改革の比較から—」, イスラーム過激派研究会, 2016.12.14. 日本国際問題研究所.
7. 坂井信三「仏領西アフリカにおけるイスラーム改革運動の連続と断絶—植民地統治下におけるイスラーム教育改革をめぐる—」, 「アジア・アフリカにおける諸宗教の歴史と現状」, 2017.3.27. 上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター.
8. 永原陽子「南アフリカの "Rhodes Must Fall" 運動とその後」, DOSC 同志社大学植民地主義研究会, 2016.6.18. 同志社大学.
9. Nagahara, Yoko, "Land and "Tradition": Authorities, Border and Gender in Northern Namibia", Land, the State and Decolonizing the Agrarian Structure in Africa, 2016.11.28-29. University of Cape Town.
10. 永原陽子「20 世紀初期南部アフリカ社会の人種化とジェンダー—南ア戦争期の "black peril" と "white peril"」, イギリス女性史研究会・第 27 回研究会 シンポジウム「植民地戦争におけるセクシュアリティとジェンダー —帝国だったイギリスの過去を問い直す—」, 2016.12.10. 甲南大学東京ネットワークキャンパス.
11. 眞城百華「地中海を渡るアフリカ難民の検討—アフリカの角の事例から—」, 長崎大学多文化社会学部シンポジウム『21 世紀の「難民問題」～人道危機への向き合い方を考える～』, 2016.10.22. 長崎大学.
12. 眞城百華「エチオピア・ティグライ人民解放戦線の女性兵士: 武力闘争と女性解放」, 『アフリカ潜在力』と現代世界の困難の克服: 人類の未来を展望する総合的地域研究(科研基盤(S)) ジェンダー・セクシュアリティ班・シンポジウム『アフリカにおける女性兵士 — エチオピアとウガンダの事例から』, 2017.1.29. 京都大学.
13. Mizobe, Yasu'o, "Japanese-African Relations and the 1960s Campaigns against Atomic and Hydrogen Bombs: Analysing the 1962 Accra Conference's Impact", 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
14. 溝辺泰雄「「発展」のために「後退」する: 初期植民地期英領ゴールドコースト(現ガーナ)の現地エリートが構想した「知的退歩」運動」, 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服: 人類の未来を展望する総合的地域研究(教育・社会班第 3 回研究会), 2017 年 1 月 28 日. 京都大学稲盛財団記念館 3 階小会議室 2.
15. 荻谷康太「初期ソコト・カリフ国における背教既定の確立」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.

〔社会に向けた成果発表〕計3件

1. 網中昭世「資料紹介：小倉孝保著『空から降ってきた男』『アフリカレポート』55, 2017. 16.
2. 網中昭世「資料紹介：伊藤千尋著『都市と農村を架ける』『アフリカレポート』54, 2016. 91.
3. 石川博樹「エチオピア正統テワヒト教会」『東方キリスト教諸教会：基礎データと研究案内』, 明石書店, 2017.

中国雲南におけるテキスト研究の新展開

研究期間：2015–2017（代表：山田敦士／所員 3, 共同研究員 17）

所員：澤田英夫, 中見立夫, 星泉

共同研究員：山田敦士, 飯島明子, 伊藤悟, 稲村務, 川野明正, 黒澤直道, 立石謙次, 清水享, 新谷忠彦, 富田愛佳, 長谷千代子, 奈良雅史, 西川和孝, 野本敬, 堀江未央, 山田勅之, 吉野晃

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2016年6月19日（日）13:00-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディア会議室(304)

西川和孝（AA研共同研究員・国士舘大学）「清末民国期の雲南省におけるアヘンについて」

相原佳之（東洋文庫・人間文化研究機構）「貴州東南部清水江流域の林業関係史料を用いた研究とその現状」

奈良雅史（AA研共同研究員・北海道大学）「回族におけるイスラーム教育とテキスト」

第2回研究会（通算第2回目） 日時：2016年12月4日（日）13:00-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA研）マルチメディアセミナー室(306)

立石謙次（AA研共同研究員・東海大学）「雲南省大理白族（ペー族）の白文（ペー文）研究：その現状と課題」

梶丸岳（京都市立芸術大学）「歌を書くことと歌うこと：中国貴州省の山歌を事例に」

全体討論

研究成果一覧

〔学術論文〕計13件

1. 稲村務「柳田国男の『常民』概念についての資料的再検討：『日本文化の伝統について』『近代文学』および『常民婚姻史料』『耳で聞いた話』『人情地理』『人間科学』35, 琉球大学法文学部人間科学科, 2016. 1–82.
2. 稲村務「『伝承／伝統的知識』概念構築のために：民俗, フォークロア, 常民」『人間科学』36, 琉球大学法文学部人間科学科, 2017. 103–143.
3. 川野明正「雲南諸民族における漢人出身神祇の受容」『雲南の歴史と文化とその風土』, 勉誠出版, 2016. 173–189. (査読有)
4. 黒澤直道「中国ナシ族の過去と現在：急速な観光地化にゆれる生き様と『共存』『共存学4：多文化社会の可能性』, 弘文堂, 2017. 109–130.
5. 立石謙次「雲南省大理白族の大本曲の歴史とその現状」『中国21』46, 愛知大学現代中国学会, 2017. 1–21.
6. 立石謙次「雲南省大理白族の他界観：大本曲『黄氏女対金剛経』を中心に」『古事記学』3, 國學院大學研究開発推進機構研究開発推進センター, 2017. 1–31.
7. 奈良雅史「現代中国における宗教的状况をめぐる人類学的研究：二重の宗教的正統性と宗教実践のもつれ」『社会人類学年報』42, 2016. 143–155. (査読有)
8. 西川和孝「一九世紀初頭の雲南省元陽県一帯における漢人流入とその影響について：窩泥人高羅衣の蜂起を通して」『様々なる変乱の中国史』, 汲古書院, 2016. 307–342.
9. 野本敬「雲南の歴史と自然環境」『雲南の歴史と文化とその風土』, 勉誠出版, 2017. 1–23. (査読有)
10. 野本敬「少数民族文献翻訳における課題：イ族文書とイ族史を例に」『帝京大学短期大学紀要』37, 2017. 109–123.
11. Yamada, Atsushi, Toward the linguistic ethnography of the Wa people, *Journal of the Center for Northern Humanities* 10, 2017. 165–174.
12. 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語：『歌二娘古』発音と注釈」『ミエン・ヤオ族の歌謡と儀礼』, 大学教育出版, 2016. 55–71.
13. 吉野晃「タイ北部のミエンにおける歌と歌謡語（2）：『後生娘子歌』発音と注釈」『東京学芸大学紀要 人文社会科学系Ⅱ』68, 2017. 47–58.

〔口頭発表等〕計15件

1. Ito, Satoru, “Keynote address & film screening 'Lik Yaat' ”, the 20th International Conference of the European Foundation for Chinese Music Research (“CHIME”), 2017.3.29. Herb Alpert School of Music, University of California, Los Angeles (UCLA).
2. Ito, Satoru, “Keynote address & film screening 'Sensing the Journey of the Dead' ”, the 20th International Conference of the European Foundation for Chinese Music Research (“CHIME”), 2017.3.31. Herb Alpert School of Music, University of California, Los Angeles (UCLA).
3. 稲村務「ハニエアカ族の記憶と記録」, 国際シンポジウム「中国における歴史の資源化—その現状と課題に関する人類学的分析」, 2016.10.22. 国立民族学博物館.
4. 稲村務「グローバル化のなかの伝承／伝統的知識：柳田国男論, ABS 法, フォークロア, そして沖縄のこれから」, 国際沖縄研究所島嶼科学セミナー, 2016.12.21. 国際沖縄研究所.
5. 稲村務「柳田国男における伝承／伝統的知識と民俗あるいはフォークロア」, シンポジウム「グローバル化のなかの伝承／伝統的知識—柳田国男論, ABS 法, フォークロア, そして沖縄のこれから—」, 2017.2.18. 国際沖縄研究所.
6. 川野明正「雲南の世界遺産〈三江併流〉：その歴史と民俗」, カワカブ会, 2016.10.30. 東大島文化センター.
7. 川野明正「雲南からユーラシアを眺める」, 明治大学大学院教養デザイン研究科講演・ワークショップ「風に吹かれて—テントは世界を包む」, 2016.6.2. 明治大学和泉校舎.
8. 奈良雅史「現代中国における民族観光の展開」, 公開講座「旅は東アジアを変えるのか？日中韓から見る現代の観光文化」, 2016.10.20. 北海道大学.
9. 奈良雅史「イスラーム復興と民族観光のもつれ：雲南省回族社会における民族間関係の変化をめぐって」, エスニック・マイノリティ研究会ワークショップ「マイノリティの文化実践と現代社会：台湾原住民の例を中心に」, 2016.12.10. 獨協大学.
10. 奈良雅史「回族の民族・宗教意識の変化と観光開発：中国雲南省の事例から」, 科学研究費補助金 (B)「一帯一路構想の系譜とエスニシティのネットワークを介した対外文化戦略の研究」2016 年度第 2 回研究会, 2016.12.3. 北海道大学.
11. 奈良雅史「移動によるエスニシティおよび民族間関係の変容：雲南省沙甸区の事例から」, 現代中国における内国移動とエスニシティに関する共同研究第 2 回研究会, 2017.2.24. 東北大学.
12. Nara, Masashi, “A Change in Inter-ethnic Relationships amongst Hui Muslims: Entanglements of Islamic Revival and Ethnic Tourism in Contemporary China”, The 19th Hokkaido University and Seoul National University Joint Symposium: Re-imagining East Asia in Tourism, 2016.11.25. Hokkaido University.
13. Nara, Masashi, “Keep on Moving: Autonomy for Hui Muslim Minority in Contemporary China”, International Conference “Ethnographies of Islam in China”, 2017.03.28. SOAS, University of London.
14. Yamada, Atsushi, “From illiteracy to literacy: Developments in the writing culture among the Parauk Wa”, EAAA 2016, 2016.10.16. Hokkaido University.
15. Yamada, Atsushi, “Word order in the Wa languages”, ICAAL Workshop 2016, 2016.9.5-7. Chiangmai University.

〔図書〕計 6 件

1. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.107, The Siam(Hdsem) Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. xxii+267 pp.
2. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.108, The Va(En) Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. xxii+267 pp.
3. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.109, The Nangki Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. xxiv+267 pp.
4. Shintani, Tadahiko L.A., *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.110, The Matu Language*, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, 2016. xxii+267 pp.
5. 奈良雅史『現代中国における宗教的マイノリティの自律性：雲南省昆明市の回族によるインフォーマルな宗教活動を事例として』, 富士ゼロックス小林節太郎記念基金, 2016. 全 38 頁.
6. 立石謙次・吉田章人『大本曲「黄氏女対金剛経」の研究：雲南大理白族の白文の分析』, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2017. 全 259 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計 11 件

1. 飯島明子「クーナー王」「三印法典」「ジナカーラマーリー」「十二支」「スワンドーク寺院」「スワンドーク派」「タム文字」「貝葉写本保存プロジェクト」「ビエンチャン年代記略述本」等全 19 項目, 『上座仏教事典』, めこん
2. 清水享「【彝語】第 1 回 ～彝語と彝文字～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%A>

[C%AC1%E5%9B%9E%E3%80%80%EF%BD%9E%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%81%A8%E5%BD%9D%E6%96%87%E5%AD%97%EF%BD%9E.html](http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E5%BD%9D%E6%97%8F%E3%80%91%E7%AC%AC1%E5%9B%9E%E3%80%80%EF%BD%9E%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%81%A8%E5%BD%9D%E6%96%87%E5%AD%97%EF%BD%9E.html))

3. 清水享「【彝語】第2回～彝族の歴史と社会～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E5%BD%9D%E6%97%8F%E3%80%91%E7%AC%AC%EF%BC%92%E5%9B%9E-%EF%BD%9E%E5%BD%9D%E6%97%8F%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2%E3%81%A8%E7%A4%BE%E4%BC%9A%EF%BD%9E.html>)
4. 清水享「【彝語】第3回～彝族文化さまさま～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC3%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E5%BD%9D%E6%97%8F%E6%96%87%E5%8C%96%E3%81%95%E3%81%BE%E3%81%96%E3%81%BE%EF%BD%9E.html>)
5. 清水享「【彝語】第4回～彝語と彝族の現在と未来～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC4%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E5%BD%9D%E8%AA%9E%E3%81%A8%E5%BD%9D%E6%97%8F%E3%81%AE%E7%8F%BE%E5%9C%A8%E3%81%A8%E6%9C%AA%E6%9D%A5%EF%BD%9E.html>)
6. 奈良雅史「旅するムスリム:現代中国における回族のイスラーム実践」, 『観光創造学へのチャレンジ』(CATS叢書) 11, 北海道大学観光学高等研究センター, 2017. 111-116.
7. 奈良雅史「もうひとつのチベットとそこから見た「チベット問題」」(書評:川田進著, 『東チベットの宗教空間 — 中国共産党の宗教政策と社会変容』, 北海道大学出版会, 2015年), 『東方』433, 東方書店, 2017. 25-29.
8. 山田敦士「【ワ語】第1回～ワ族のことば～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E3%83%AF%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC1%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E3%83%AF%E6%97%8F%E3%81%AE%E3%81%93%E3%81%A8%E3%81%B0.html>)
9. 山田敦士「【ワ語】第2回～ワ族とその歴史～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E3%83%AF%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC2%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E3%83%AF%E6%97%8F%E3%81%A8%E3%81%9D%E3%81%AE%E6%AD%B4%E5%8F%B2%EF%BD%9E.html>)
10. 山田敦士「【ワ語】第3回～ワ族の伝承と文化～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E3%83%AF%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC3%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E3%83%AF%E6%97%8F%E3%81%AE%E4%BC%9D%E6%89%BF%E3%81%A8%E6%96%87%E5%8C%96%EF%BD%9E.html>)
11. 山田敦士「【ワ語】第4回～ワ族とワ語の現在・未来～」, 世界はことばでできている, 駿河台出版社 (URL: <http://www.e-surugadai.com/surugadai-selection/%E3%80%90%E3%83%AF%E8%AA%9E%E3%80%91%E7%AC%AC4%E5%9B%9E%EF%BD%9E%E3%83%AF%E6%97%8F%E3%81%A8%E3%83%AF%E8%AA%9E%E3%81%AE%E7%8F%BE%E5%9C%A8%E3%83%BB%E6%9C%AA%E6%9D%A5%EF%BD%9E.html>)

[その他] 計2件

1. 竹沢尚一郎監修・伊藤悟制作『津波を逃れて、避難所を運営する』(記録映画), 2016年11月(国立民族学博物館企画展『津波を越えて生きる—大槌町の奮闘の記録』2017年1月19日~4月11日にて上映)
2. 竹沢尚一郎監修・伊藤悟制作『津波から逃げる』(記録映画), 2016年11月(国立民族学博物館企画展『津波を越えて生きる—大槌町の奮闘の記録』2017年1月19日~4月11日にて上映)

アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から

研究期間：2016-2018 (代表：鶴田格/所員 2, 共同研究員 17)

所員：石川博樹, 深澤秀夫

共同研究員：鶴田格, 安溪貴子, 池上甲一, 石山俊, 大山修一, 小松かおり, 坂梨健太, 佐藤千鶴子, 佐藤靖明, 末原達郎, 杉村和彦, 杉山祐子, 田中利和, 藤岡悠一郎, 藤本武, 松田正彦, 村尾るみこ

研究会等の内容

2016年度は以下の三回の研究会を開催した。発表者と報告タイトルは以下の通り。

第1回(通算第1回目) 日時：2016年7月23日(土) 14:00-19:00・24日(日) 9:30-13:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所(AA研) セミナー室(301)

- 報告 1. 鶴田格 (AA 研共同研究員・近畿大学) 「アフリカ史における農業革命の位置づけ」
 報告 2. 杉山祐子 (AA 研共同研究員・弘前大学)
 「アフリカ農村におけるローカル・イノベーション・ヒストリー」
 報告 3. 末原達郎 (AA 研共同研究員・龍谷大学) 「アフリカ農業の比較の方法についての試論」
 報告 4. 杉村和彦 (AA 研共同研究員・福井県立大学)
 「文明史と農業革命論—飯沼二郎氏の仕事>をアフリカから読み直す」

第 2 回 (通算第 2 回目) 日時: 2016 年 12 月 3 日 (土) 14:00-19:00・4 日 (日) 9:30-13:30

場所: 京都大学稲盛記念館小会議室 1 (3 階)

報告 1. 松田正彦 (AA 研共同研究員・立命館大学)

「鳥瞰東南アジア農業, 虫瞰ミャンマー農村: アフリカ農業革命によせて」

報告 2. 深澤秀夫 (AA 研所員)

「マダガスカルの一農村の三十年間に稲作をめぐる変わったこと・変わらないこと
 —「生活」の中における新しい技術をめぐる取捨選択の論理—」

報告 3. 大山修一 (AA 研共同研究員・京都大学)

「人類の生きる術としての農業の宿命と未来: 西アフリカのサヘル農業の現状から」

報告 4. 加藤太 (日本大学)

「タンザニアにおける在来稲作の地理的分布と農牧民スクマの移住による移植稲作の拡大」

第 3 回 (通算第 3 回目) 日時: 2017 年 3 月 25 日 (土) 14:00-19:00・26 日 (日) 9:30-13:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) セミナー室(301)

報告 1. 横山智 (名古屋大学) 「東南アジア・ラオスの伝統的生業: 森林政策によって消えゆく焼畑とグローバル化によって変化する農村」

報告 2. 柴田誠 (京都大学) 「アフリカに広がる土壌と養分循環の特徴から持続的な農地利用を考える: カメルーン森林・サバンナ境界域を事例として」

報告 3. 四方籥 (京都大学) 「アフリカ熱帯雨林の焼畑をめぐる森と人のかかわり」

コメント: 小松かおり (AA 研共同研究員・北海学園大学), 坂梨健太 (AA 研共同研究員・龍谷大学)

研究成果一覧

[学術論文] 計 24 件

1. Tsuruta, Tadasu, *Agriculture-pastoralism Complex in Historical Perspective: A Case of Northern and Central Tanzania, Endogenous Development, Moral Economy, and Globalization in Agro-pastoral Communities in Central Tanzania*, Dar es Salaam University Press, 2016. 37-58.
2. Suriya Chanachai and Tadasu Tsuruta, *A Preliminary Survey on Livelihood and Values of Fair Trade Rice Producers in Surin Province, Northeast Thailand, Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, Kindai University, 2017. 85-98.
3. 石川博樹「偽バナナは消えたのか: 北部エチオピアの栽培植物をめぐる歴史的考察」『環境に挑む歴史学』, 勉誠出版, 2016. 336-347.
4. 小松かおり「バナナの比較食文化誌」『文化を食べる 文化を飲む —グローバル化する世界の食とビジネス』, ドメス出版, 2017. 276-296.
5. Muraio, Rumiko, *The Daily Life Strategies of Small-scale Farmers after Prolonged War: Long-Term Influence of Humanitarian Assistance*, *African Study Monographs. Supplementary issue 53*, Center for Kyoto University African Studies, 2017. 103-116. (査読有)
6. 村尾るみこ「ザンビアにおける国民と難民の開発——社会福祉実現に向けた課題」『世界の社会福祉年鑑 2016』, 旬報社, 2016. 121-144.
7. Ikegami, Koichi, *Land Reform and the Meaning of the Fair Trade in The Context of the Republic of South Africa*, *Journal of Asian Rural Studies* 1(1), Hasanuddin University (UNHAS), 2017. 28-42. (査読有)
8. 坂梨健太「熱帯アフリカにおけるカカオ生産地域の近代化と農業の可能性」『有機農業研究』8(1), 日本有機農業学会, 2016. 9-11. (査読有)
9. 坂梨健太「アフリカ農業の今」, 『食と農の教室 1 知っておきたい食・農・環境—はじめての一步』, 昭和堂, 2016. 68-87. (査読有)
10. Oyama, Shuichi, *Preface to the Special Issue: Food and land in economic differentiation of sub-Saharan Africa*, *Japanese Journal of Human Geography* 69(1), The Human Geographical Society of Japan, 2017. 1-8. (査読有)

11. Oyama, Shuichi, Hunger, poverty and economic differentiation generated by traditional custom in villages in the Sahel, West Africa, *Japanese Journal of Human Geography* 69(1), The Human Geographical Society of Japan, 2017. 27–42. (査読有)
12. Zulu, R. and S. Oyama, Urbanization, housing problems and residential land conflicts in Zambia, *Japanese Journal of Human Geography* 69(1), The Human Geographical Society of Japan, 2017. 73–86. (査読有)
13. Oyama, Shuichi, Guardian or misfeasor? Chief's roles in land administration under the new 1995 Land Act in Zambia, *What Colonialism Ignored: 'African Potentials' for Resolving Conflicts in Southern Africa.*, LANGAA Publishers., 2016. 103–128.
14. 藤岡悠一郎「マルーラ酒が守るサバンナの農地林」『アフリカ潜在力 4 争わないための生業実践——生態資源と人びとの関わり』, 京都大学出版会, 2016. 245–263.
15. Teshirogi, K., C. Yamashina, and Y. Fujioka, Variations in mopane vegetation and its use by local people: Comparison of four sites in northern Namibia, *African Study Monographs* 38(1), Center for Kyoto University African Studies, 2017. 5–25. (査読有)
16. Hiyama, Tetsuya, Hironari Kanamori, Jack Kambatuku, Ayumi Kotani, Kazuyoshi Asai, Hiroki Mizuochi, Yuichiro Fujioka, and Morio Iijima, Analysing the origin of rain- and subsurface water in seasonal wetlands of north-central Namibia, *Environmental Research Letters* 12, IOP Science, 2017. 034012 1-10. (査読有)
17. Watanabe, Y., F. Itanna, Y. Fujioka, A. Petrus, and M. Iijima, Characteristics of soils under seasonally flooded wetlands (oshanas) in north-central Namibia, *African Journal of Agricultural Study* 11(46), 2016. 4786–4795. (査読有)
18. Fujioka, Yuichiro, Introduction to the special topic: plant uses, livelihoods, and sustainability in Africa, *African Study Monographs* 38(1), Center for Kyoto University African Studies, 2017. 1–3.
19. 佐藤千鶴子「2016 年南アフリカ地方選挙—大都市自治体を巡る攻防」『アフリカレポート』54, ジェトロ・アジア経済研究所, 2016. 135–141. (査読有)
20. 藤本武「NGO の活動地域にみられる中心・周辺構造」『NGO とアフリカの市民社会』, 大阪府立大学人間社会システム科学研究科, 2017. 90–100.
21. Sugiyama, Yuko, The Institution of “Feeling”: On “Feeling Insaide” and “Institutionalized Envy”, Kawai Kaori(ed.) *Institutions*, Kyoto University Press, 2017. 349–370. (査読有)
22. 杉山祐子「「小規模」の力—2つのシステムの接合面を生み出す契機としての直売所」『グローバル化するアフリカ農村と「現金の社会化」を考える (中間成果集)』, 弘前大学人文社会科学部, 印刷中.
23. 末原達郎「文化としての農業と新たな農学の展開」, 『有機農業研究』8(1), 日本有機農業学会, 2016. 2–4. (査読有)
24. 杉村和彦「手作り感覚と有機農業: アフリカ世界から学ぶこと」, 『有機農業研究』8(1), 日本有機農業学会, 2016. 5–8. (査読有)

〔口頭発表等〕計 57 件

1. Tsuruta, Tadasu, “Making and Unmaking the “Green Revolution”: From Asian and African Experiences”, XIV World Congress of Rural Sociology, 2016. 8. 12. Ryerson University, Toronto.
2. Tsuruta, Tadasu, “Dual Dilemma of Agro-pastoralism in Central Tanzania: In the Face of Land Scarcity and “Agrarian Bias” of Rural Development Policy”, Dodoma Workshop on Agro-pastoral Societies in Transition: Cash Economy, Urbanization, and Land Issues in Central Tanzania, 2016. 8. 27. VETA Hotel, Dodoma, Tanzania.
3. Tsuruta, Tadasu, “Uncaptured Peasantry in Africa from Comparative and Historical Perspectives”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016. 12. 9. 芝蘭会館, 京都.
4. Tsuruta, Tadasu, “Cultural Uniqueness of the Economy of Affection in Africa”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016. 12. 11. 京都大学農学部.
5. 鶴田格「東アフリカ農牧民社会の現代的変容: 現金経済・都市化・土地問題④」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016. 6. 5. 日本大学生物資源科学部.
6. 石川博樹「食と農のアフリカ史: アフリカ史研究の可能性を探る」, 京都大学アフリカ地域研究資料センター第 221 回アフリカ地域研究会, 2016. 10. 20. 京都大学稲盛財団記念館.
7. 石川博樹「一皿のなかの歴史; 歴史学研究と地域研究」, 地域研究コンソーシアム 2016 年度ワークショップ「地域研究の底力: 現場から考える」, 2016. 11. 6. 京都大学稲盛財団記念館.
8. 深澤秀夫「マダガスカルで<世界>をおちこちに読み解く—一人が集まって暮らす景観が語るもの—」, マダガスカル在留邦人会, 2016. 9. 24. 駐マダガスカル・日本大使館.
9. 深澤秀夫「マダガスカルにおける老いとカー祝福・呪詛・勘当・邪術—」, マダガスカル在留邦人会, 2017. 2. 18. 駐マダガスカル・日本大使館.

10. 松田正彦「ミャンマー中央乾燥平原の農村生業体系—中心地域の作物生産とリスク恒常性」, 日本熱帯農業学会・第121回講演会, 2017.3.12. 日本大学.
11. Matsuda, Masahiko, “Whither Myanmar Agriculture? A Perspective of Productivity and Sustainability”, The 6th YAU-JICA TCP Special Lecture, 2016.8.8. Yezin Agricultural University, Yezin, Myanmar.
12. 松田正彦「ミャンマー・エーヤーワディーデルタ稲作の技術展開：農業生態・対ハザード・開発の観点から」, 京都大学東南アジア研究所・共同研究「東南アジア大陸部稲作圏における農業近代以降における技術展開の国際比較」, 2016.9.30. 京都大学.
13. 村尾るみこ「アフリカ南部農村における緊急人道支援の影響」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
14. Murao, Rumiko, “Local Struggle with the Cassava Cultivation in Southern Africa: “Revolution” for the Immigrants’ Life”, XIV World Congress of Rural Sociology, 2016. 8. 12. Ryerson University, Toronto.
15. Ikegami, Koichi, “Evaluation of Green Revolution of Rice Farming in the Kilimanjaro Region, Tanzania: Focusing on Japan Assisted Irrigation Project”, XIV World Congress of Rural Sociology, 2016.8.12. Ryerson University, Toronto.
16. Sato, Yasuaki, “The Status of Trees in Homegardens and the Associated Local Knowledge in the Banana-based Farming System of Central Uganda”, 15th Congress of the International Society of Ethnobiology, 2016.8.1-7. Makerere University, Kampala, Uganda.
17. 佐藤靖明「バナナ学入門 1—サイエンスで遊ぼう」, 大阪産業大学「大学と地域が育む自然・人・共生・教育・研究事業」公開講義, 2016.10.15. 大阪産業大学.
18. 佐藤靖明「バナナ学入門 2—バナナを料理して学ぼう」, 大阪産業大学「大学と地域が育む自然・人・共生・教育・研究事業」公開講義, 2016.10.29. 大阪産業大学.
19. Sakanashi, Kenta, “Green Revolution in African Cacao Production”, XIV World Congress of Rural Sociology, 2016.8.12. Ryerson University, Toronto.
20. 石山俊「フランスによるチャドの征服と植民地化」, 日本沙漠学会第27回学術大会, 2016.5.27-28. 鳥取大学乾燥地研究センター.
21. 石山俊「サハラ・オアシスの水問題と現代的变化—アルジェリア・サハラ, イン・ベルベルの事例—」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.4-5. 日本大学生物資源科学部.
22. 大山修一「ニジェールにおけるボコ・ハラムのテロ活動に対する人びとの怒りと恐怖感」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
23. Oyama, Shuichi, “Countering popular beliefs by applying urban waste and livestock-induced land rehabilitation in Sahel region of West Africa”, 15th Congress of International Society of Ethnobiology, 2016.08.05. Makerere University, Kampala, Uganda.
24. 大山修一, 桐越仁美, イブラヒム・マンマン「ニジェールにおける『逆転の発想』による緑化と紛争予防：農耕民と牧畜民の共存と地域の安定をめざして」, 総合地球環境学研究所「砂漠化をめぐる風と人と土」プロジェクト年次大会, 2016.10.6. 総合地球環境学研究所. 京都.
25. Oyama, Shuichi, “Mitigation of Land Scarcity and Resource Conflict between Farmers and Herders in the Sahel region of West Africa”, Land, the State and Decolonising the Agrarian Structure in Africa: A Colloquium in Honour of Professor Sam Moyo, 2016. 11. 28. University of Cape Town, South Africa.
26. 大山修一「ザンビアの土地政策と慣習地におけるチーフの土地行政の自律性」, アジア経済研究所『冷戦後アフリカの土地政策』研究会, 2016.12.18. 東京外国語大学本郷サテライト. 東京.
27. Oyama, Shuichi, “Cultural perception of Hausa society to movement “harukuki” and population explosion in Niger”, International Workshop: Agriculture Practice and Social Dynamics in Niger. , 2017.3.12. Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, Tokyo University of Foreign Language. Fuchu, Tokyo.
28. 大山修一「小さくなった地球の大きな問題：ニジェールの貧困とテロの問題」, 守谷市市民活動支援センター ニジェールDay. 一般社団法人 コモン・ニジェール, 2016.11.20. 守谷.
29. 大山修一「アフリカにおける砂漠化の問題とその対処法」, 阪神シニアカレッジ国際理解学科, 2017.1.17. 阪神シニアカレッジ尼崎学習室 尼崎中小企業センター, 尼崎.
30. 藤岡悠一郎, Benisiu Thomas, Otilie Shivolo「洪水—干ばつ対応農法導入に対する農家の認識と実践—ナミビア北中部における SATREPS の事例—」, 国際開発学会第27回全国大会, 2016.11.27. 広島大学.
31. 藤岡悠一郎, 水落裕樹, 渡邊芳倫, 飯嶋盛雄「ナミビア北中部における季節性小湿地群の土壌水文環境による分類」, 日本地理学会 2016 年秋季学術大会, 2016.9.30.-10.1. 東北大学.
32. 藤岡悠一郎, 手代木功基, 山科千里「モパネ植生帯の共通性と多様性—ナミビア北部を事例として」, 日本アフリカ学会第53回学術大会, 2016.6.4. 日本大学.
33. 藤岡悠一郎, 西川芳昭, 檜山哲哉, 水落裕樹, Awla Simon, Mwandemele Osmund, 飯嶋盛雄「洪水—干ばつ対応農法の提案に向けた農家と研究者の協働」, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会, 2016.5.22. 幕張メッセ

34. 藤岡悠一郎「ナミビア北中部における農地林の利用と管理にみられる変化」, 日本地球惑星科学連合 2016 年大会, 2016.5.25. 幕張メッセ.
35. 藤岡悠一郎「歴史の記憶装置としての農地林—ナミビア北部における樹木と人々との関係に関する一考察」, 2016 年度東北地理学会春季学術大会, 2016.5.15. 宮城教育大学.
36. 藤岡悠一郎「ナミビア北部農牧社会における洪水—干ばつ対応農法の検討」, 日本アフリカ学会東北支部会, 2017.2.10. 弘前大学.
37. 藤岡悠一郎「サバンナ農地林の社会生態誌—ナミビア北部にみる社会変容と資源利用—」, アフリカ地域研究会, 2017.11.17. 京都大学.
38. 藤岡悠一郎「ナミビア北部における気象災害と農業」, 海外学術調査フェスタ 地域別分科会 サハラ以南アフリカ, 2016.6.9. 東京外国語大学.
39. 藤岡悠一郎「ナミビア北部の農地林—樹木と人々の関わり」, アフリカセミナー, 2016.6.16. 仙台国際センター.
40. Fujimoto, Takeshi, “A Byproduct of Resettlement: A Study of Local Responses among the Malo, Southwestern Ethiopia”, IUAES Inter-Congress 2016, 2016.5.4. Dubrovnik, Croatia.
41. 藤本武「野生植物と栽培植物の利用の比較分析—エチオピアの農耕民マロの事例—」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
42. Fujimoto, Takeshi, “Comparison of the Utilization of Wild and Cultivated Plants among the Malo of Southwestern Ethiopia”, 15th Congress of Int. Society of Ethnobiology, 2016.8.2. Makerere University, Kampala, Uganda.
43. Fujimoto, Takeshi, “On the Rise of Tef Cultivation in Ethiopia: A Case Study of a Southwestern Society”, 59th Annual Meeting of the African Studies Association, 2016.12.3. Washington, DC, USA.
44. 杉山祐子「東アフリカ農牧民社会の現代的変容—現金経済・都市化・土地問題 ②家計簿にみる現金の必要性と現金づかいの諸相」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016.6.5. 日本大学生物資源科学部.
45. Sugiyama, Yuko, “Agrarian Innovation and the Accessibility to Resources: A Case Study of the Miombo Woodland of Sub-Saharan Africa”, XIV World Congress of Rural Sociology, 2016.8.12. Ryerson University, Toronto, Canada.
46. Sugiyama, Yuko, “Local Innovation and Emerging Resources: Are We Moving towards a New Platform?”, Dodoma Workshop on Agro-pastoral Societies in Transition: Cash Economy, Urbanization, and Land Issues in Central Tanzania, 2016.8.27. VETA Hotel, Dodoma, Tanzania.
47. Sugiyama, Yuko, “Grassroots Innovation in Natural Society”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016.12.9. 京都大学.
48. Sugiyama, Yuko, “Moral Economy and Social Stratification in Rural Africa”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016.12.10. 京都大学.
49. 杉山祐子「群れからムラへ—焼畑農耕民ベンバの村の分裂・再生サイクルと祖霊信仰—」, 第 890 回日本民俗学会談話会, 2016.12.11. 成城大学.
50. 杉山祐子「現金の介在とその『小規模性』にみる可能性—農産物直売所の事例から—」, 2016 年度課題研究会, 2017.1.22. アソベの森いわき荘会議室.
51. Tanaka, Toshikazu, “Engaged Area Studies to Creating Jika-Tabi Footwear culture of Africa: Potential of Ethio-Tabi Research project in Ethiopia”, Kyoto University Africa Unit Kickoff symposium, 2017.03.11. Inamori Foundation Memorial Hall, Big size conference room, The Center for African Area Studies, Kyoto University.
52. 末原達郎「現代社会における新しい農学の可能性」, 愛知大学地域政策学部研究会, 2017.2.14. 愛知大学地域政策学部.
53. 末原達郎「21 世紀における食と農の未来と地域の創生」, とっとり県民カレッジ講座 未来をひらく鳥取学, 2016.8.6. 鳥取県倉吉未来中心.
54. Sugimura, Kazuhiko, “An Overview of a New Book entitled “Endogenous Development, Moral Economy, and Globalization in Agro-pastoral Communities in Central Tanzania”: Looking Back on Our Past Research on Agro-pastoralism in Dodoma”, Dodoma Workshop on Agro-pastoral Societies in Transition: Cash Economy, Urbanization, and Land Issues in Central Tanzania, 2016. 8. 27. VETA Hotel, Dodoma, Tanzania.
55. Sugimura, Kazuhiko, “Debate on African Peasantry in the 1980s and the World of Agro-pastoralisms”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016. 12 9. 芝蘭会館, 京都.
56. Sugimura, Kazuhiko, “Endogenous Development of Agro-pastoralist Societies in Africa”, 7th International Workshop on Africa Moral Economy: Peasant Economy of Africa in Comparative and Historical Perspectives, 2016.12.11. 京都大学農学部.
57. 杉村和彦「東アフリカ農牧民社会の現代的変容: 現金経済・都市化・土地問題①」, 日本アフリカ学会第 53 回学術大会, 2016. 6. 5. 日本大学生物資源科学部.

〔図書〕計5件

1. Makita, Rie and Tadasu Tsuruta, *Fair Trade and Organic Initiatives in Asian Agriculture: The Hidden Realities*, Routledge, 2017. 160 pp.
2. Ikegami, Koichi (ed.), *Impacts of Fair Trade: Considering Economy of Virtue*, Faculty of Agriculture, Kindai University, 2017. 153 pp.
3. 石山俊『サーヘル環境人類学—内陸国チャドにみる貧困・紛争・砂漠化の構造』, 昭和堂, 2017. 全 221 頁.
4. Maghimbi, S., K. Sugimura, and D. Mwamfupe (eds.), *Endogenous Development, Moral Economy, and Globalization in Agro-pastoral Communities in Central Tanzania*, Dar es Salaam University Press, 2016. 236 pp.
5. 末原達郎／龍谷大学農学部食料農業システム学科編『知っておきたい食・農・環境—はじめの一步』, 昭和堂, 2016. 全 237 頁.

〔社会に向けた成果発表〕計29件

1. 深澤秀夫「子どもと遊ぶ大人が見た遊びの世界 マダガスカルにおけるフィールドワークから」, 『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 2016. 14–15.
2. 小松かおり「もう一つの『パナマ』問題—バナナに迫る危機」, 読売オンライン (URL: <http://www.yomiuri.co.jp/fukayomi/ichiran/20160527-OYT8T50046.html>)
3. 池上甲一「農業の新たな可能性—農業の枠を広げることの意義」『農村と都市をむすぶ誌』778 (2016.8 月号), 全農林労働組合, 2016. 40–47.
4. 池上甲一「バイオ経済・生命操作技術と農民的主体性」『農業と経済』2017年3月臨時増刊号 (vol.83 No.2), 2017. 165–177.
5. 石山俊「不安定な降雨とつきあう三つの知恵—サヘル・スーダン帯からの報告」『グローバルネット』2016年4月号, 地球・人間環境フォーラム, 2016. 16–17.
6. 石山俊「サハラ誘惑」『La forêt, c'est la vie, 森こそ命, 緑のサヘルニューズレター』66, 緑のサヘル, 2016. 1.
7. 石山俊「ナツメヤシの誘惑」『La forêt, c'est la vie, 森こそ命, 緑のサヘルニューズレター』67, 緑のサヘル, 2016. 1.
8. 石山俊「篤農家を訪ねて」『Humanity and Nature, 地球研ニューズレター』63, 総合地球環境学研究所, 2016. 12.
9. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人: どうしてニアメでゴミ回収?」『ニジェール支所便り』2016年7月号, JICA ニジェール事務所, 2016. 4–7.
10. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人: どうしてニアメでゴミ回収? その2 人びととの信用のなかで育つプロジェクト」『ニジェール支所便り』2016年8月号, JICA ニジェール事務所, 2016. 4–9.
11. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人: どうしてニアメでゴミ回収? その4 突然やってくる災難と人生の選択肢」『ニジェール支所便り』2017年1月号, JICA ニジェール事務所, 2017. 4–9.
12. 大山修一「ニジェールでゴミを集める日本人: どうしてニアメでゴミ回収? その5 役人のストライキに直面する」『ニジェール支所便り』2017年3月号, JICA ニジェール事務所, 2017. 4–8.
13. 大山修一「書評 食と農のアフリカ史: 現代の基層に迫る (石川博樹・小松かおり・藤本武 編)」『農業と経済』82(11), 昭和堂, 2016. 119.
14. 大山修一「サハラ以南のアフリカの生活・文化」『新地理 A (高校教科書)』, 帝国書院, 2017. 98–103.
15. 大山修一「北アフリカとサハラ以南アフリカ」『新詳 地理 B (高校教科書)』, 帝国書院, 2017. 270–276.
16. 大山修一「自然エネルギーの開発が進むアフリカ」『図説地理資料 世界の諸地域 NOW2017』, 帝国書院, 2017. 105.
17. 大山修一「焼畑でのひえの収穫 (ザンビア)」『新詳地理資料 COMPLETE2017』, 帝国書院, 2017. 111.
18. 大山修一「専門家ゼミ アフリカで進むランドラッシュ (農地収奪)」『新詳地理資料 COMPLETE2017』, 帝国書院, 2017. 128.
19. 大山修一「練りがゆをつくる女性 (ニジェール)」『新詳地理資料 COMPLETE2017』, 帝国書院, 2017. 251.
20. 大山修一「砂漠化が進んでしまった地域の緑化の取り組み」池上彰監修『ライブ! 現代社会 2017』, 帝国書院, 2017. 27.
21. 大山修一「サハラ以南のアフリカの生活・文化」, 『新地理 A (高校教科書) 指導用教科書 (朱書き)』, 帝国書院, 2017. 98–103.
22. 大山修一「サハラ以南のアフリカの生活・文化」『新地理 A (高校教科書) 指導用教科書 (指導資料 研究編)』, 帝国書院, 2017. 62–64.

23. 大山修一「北アフリカとサハラ以南アフリカ」『新詳 地理 B (高校教科書) 指導書』, 帝国書院, 2017. 317-325.
24. 藤岡悠一郎「(フィールドノート 07) サバンナに食用昆虫を追って: ナミビアの昆虫食調査」『東北学』 8, はる書房, 2016. 212-233.
25. 佐藤千鶴子「南アフリカの移民・難民問題」『アジア研ワールド・トレンド』 2016年11月号 (No.253), 日本貿易振興機構アジア経済研究所, 2016. 20-23.
26. 藤本武「アフリカ社会における野生植物と栽培植物の利用比較」『富山大学環境報告書 2016』, 2016.13. (URL: http://www.erc.u-toyama.ac.jp/environment/pdf/EMR2016_web.pdf)
27. 杉山祐子「日曜随想」連載『陸奥新報』, 陸奥新報社
28. 末原達郎「書評: 池谷和信『人間にとってスイカとは何か—カラハリ狩猟民と考える』」『アフリカ研究』 89, 日本アフリカ学会, 2016. 57-59.
29. 末原達郎「書評: 石川博樹・小松かおり・藤本武編『食と農のアフリカ史—現代の基層に迫る』」『アフリカ研究』 90, 日本アフリカ学会, 2016. 115-117.

ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容 (2) ジャワのイスラーム化再考

研究期間: 2016-2018 (代表: 菅原由美/所員 2, 共同研究員 9)

所員: 塩原朝子, 澤田英夫

共同研究員: 菅原由美, 青山亨, 東長靖, 深見純生, 宮崎恒二, 山崎美保, 山根聡, Oman Fathurahman., Willem van der Molen

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第1回目) 日時: 2016年6月18日 (土) 13:00-17:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) セミナー室(301)

菅原由美 (AA 研共同研究員・大阪大学) 共同研究課題趣旨説明

自己紹介および関連文献紹介など

研究計画に関する意見交換

第2回研究会 (通算第2回目) 日時: 2016年11月6日 (土) 10:00-16:30 (公開)・16:30-18:00 (非公開)

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) 研修室(405)

ジャワ語文献 Babad Tanah Jawi (Balai pustaka 版) 講読

菅原由美 (AA 研共同研究員・大阪大学) 「ジャワのイスラーム史研究—研究史と史料」

山根聡 (AA 研共同研究員・大阪大学) 「南アジアのムスリム域外ネットワーク形成について」

全員 来年度現地調査計画策定

第3回研究会 (通算第3回目) 日時: 2016年12月10日 (土) 10:00-17:15 (公開)・17:30-18:00 (非公開)

場所: 大阪大学中之島センター6階 607 および3階 302 (〒530-0005 大阪市北区中之島 4-3-53)

共催: 科研費基盤研究 (B) 「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」 (研究代表者: 菅原由美)

ジャワ語文献 Babad Tanah Jawi (Balai pustaka 版) 講読

東長靖 (AA 研共同研究員・京都大学)

「スーフイズム・タリーカ・聖者信仰複合現象と東南アジア・イスラーム」

菅原由美 (AA 研共同研究員・大阪大学) 「ジャワの九聖人伝承」

第4回研究会 (通算第4回目) 日時: 2017年2月15日 (水) 10:00-16:15 (公開)・16:30-18:00 (非公開)

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディア会議室(304)

共催: 科研費基盤研究 (B) 「ジャワ語文献にみるジャワのイスラーム化再考」 (研究代表者: 菅原由美)

ジャワ語文献 Babad Tanah Jawi (Balai pustaka 版) 講読

Farhurahman, Oman (AA 研共同研究員, 大阪大学)

“Female Indonesian Sufis: with Special Reference to Java in the 18th and 19th Centuries”

山崎美保 (AA 研共同研究員・東京外国語大学大学院生) 「マジヤパヒト時代のイスラーム」

研究成果一覧

[学術論文] 計9件

1. 菅原由美「インドネシア国史とイスラーム」『Ex oriente』 24, 大阪大学言語社会学会, 2017. 1-26.

2. 青山亨「プルボチャロコ著『古典ジャワ文学史入門』(3)」『東京外大東南アジア学』22, 東京外国語大学東南アジア語学科・東南アジア課程研究室, 2017. 48-72.
3. Tonaga, Yasushi, Fact or Fiction? : The Images of the Sufi Authors in 10th-12th Century”, *History, Literature and Scholarly Perspectives South as West Asian Context: Festschrift Presented in Honor of Moinuddin Aqeel*, Karachi: The Islamic Research Academy, 2016. 77-80.
4. 東長靖「ファナーの観点からスーフィズムを見直す」『東洋哲学研究』55(1), 東洋哲学研究所, 2016. 229-254.
5. 深見純生訳「ハバッド・タナ・ジャウイ (10) 第 5 部 ハバッド・マタラム 4」『人間文化研究』(桃山学院大学総合研究所) 5, 2016. 99-122.
6. 深見純生「(書評) 石澤良昭著『(新) 古代カンボジア史研究』」『東南アジア研究』54(1), 京都大学東南アジア地域研究所, 2016. 127-134. (査読有)
7. 山根総「現代ウルドゥー詩におけるパレスチナ問題—南アジアのムスリムにみられる「向心性」について」小林寧子編『アジアのムスリムと近代 (3)—植民地末期の出版物から見た思想状況—』, 上智大学アジア文化研究所・イスラーム研究センター, 2016. 29-50.
8. 山根総「アフガニスタン安定化への課題」『海外事情』9, 拓殖大学海外事情研究所, 2016. 91-103.
9. Willem van der Molen, *Sajarah Cina. A nineteenth-century apology in Javanese*, *Wacana* 18(2), 2017. 379-398. (査読有)

〔口頭発表等〕計 16 件

1. Sugahara, Yumi and Toru Aoyama, “Introducing Javanese Documents Online (JVDO)”, *Symposium Internasional ke 16 Masyarakat Pernaskahan Nusantara*, 2016.9.28. Perpustakaan Nasional Republik Indonesia.
2. 菅原由美「19 世紀ジャワ語出版キターブとガザーリー —Soleh Darat 著 Munjiyat puthikan saking Ihya Ulum al-Din を中心に」, 上智大学アジア文化研究所アジア研究セミナー「東南アジアのキターブ比較研究」, 2017.2.23. 上智大学.
3. 宮崎恒二「史資料の救出・保存とその活用—インドネシアでの経験から—」, 日本アーカイブズ学会 2016 年度大会, 2016.4.23. 東京外国語大学.
4. 東長靖「平和・愛・共存を求めるイスラームのもうひとつの顔」, 京都大学春秋講義「宗教と平和」第 3 回, 2016.4.20. 京都大学.
5. Tonaga, Yasushi, “Towards the Asian Network of Sufi Studies: From the Japanese Experience”, the 11th AFMA (Asian Federation of Middle East Studies Associations) Conference, 2016.9.23-24. Ulaanbaatar (Mongolia).
6. 東長靖「スーフィズムの三極構造論—スーフィズムの立場から」, スーフィズム・聖者信仰研究会, 2016.10.2. 上智大学.
7. Tonaga, Yasushi, “Past, Present and Future of Sufi Studies in Japan: Three-Axis Framework of Sufism and Interdisciplinary Approach”, Opening Symposium of the Education Program for Sufi Culture, “The Bridge of Two Easts”, 2016.10.22. Nermin Tarhan Conference Hall of Uskudar University (Turkey).
8. 東長靖「イスラームのとらえ方—穏健イスラームに注目して—」, 立命館西園寺塾・梅原文明コース, 2017.1.21. 立命館東京キャンパス.
9. 深見純生「用語解説の例示」, 東南アジア学会第 95 回研究大会パネル「高校世界史における東南アジア関係用語の厳選 その 3」, 2016.6.4. 大阪大学.
10. 深見純生, 田畑幸嗣「東南アジア古代史 (7~10 世紀) ウェブ版詳細年表の公表と今後の利用」, 東南アジア学会関東例会, 2016.5.14. 東京外国語大学本郷サテライト.
11. 深見純生「10~14 世紀東南アジアの史料と研究をふりかえる」, 東南アジア古代史科研, 2016.5.13. 早稲田大学.
12. 山根総「宗教とテロの峻別へ—パキスタンの選択」, 「9.11 から 15 年 中東の混迷と『イスラム国』」東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所中東イスラーム研究拠点(人間文化研究機構『現代中東地域研究』), 2016.9.11. 大手町サンケイプラザ 301-304 会議室 (東京都・千代田区) .
13. 山根総「パキスタン・シャリーフ政権と軍の関係」, 中東情勢研究会, 2016.10.17. (社) 国際情勢研究所 (東京都・千代田区) .
14. Yamane, So, “Jadīd Urdū Adab ke Farogh men Aḥmad Nadīm Qāsmī kī Khidmat”(in Urdu) (現代ウルドゥー文学におけるアフマド・ナディーム・カースミーの貢献), *International Urdu Literature Conference*, “Memory of the 100th Birth Year of Ahmed Nadeem Qasmi”, 2016.10.13. アンカラ大学アンタルヤ・キャンパス会議室 (トルコ・アンタルヤ) .
15. Yamane, So, “Social and Political Modification in Pakistan in the War on Terror”, *International Conference “Reconstructing State Security and National Integration in the Middle East”*, 2017.1.27. 同志社大学今出川キャンパス志高館会議室 (京都府・京都市) .

16. Yamane, So, “The Taste of Colonization: A Dilemma between Tradition and Modernity among Indo-Muslims under the British Raj in Nadhir Ahmad's Ibn al-Waqt”, *Cookbooks and Culinary Practices Food, Body and Identity in India from Medieval to Contemporary Times*, International conference supported by ICSSR(India)-JSPS(Japan) Bilateral Programme, 2016.12.10. インド・ジャワール・ルール・ネルー記念図書館会議室 (インド・デリー) .

〔図書〕計3件

1. Tonaga, Yasushi, *Bibliography of Sufism, Tariqa, and Saint Cult Studies in Japan* (『日本におけるスーフィズム・タリーカ・聖者信仰研究文献目録』) *Kyoto Kenan Rifai Sufi Studies Series 1*, Kenan Rifai Center for Sufi Studies, Kyoto University, 2016. Xxvi + 126pp pp.
2. 深見純生 (教科書) 『世界史 B 新訂版』 (世 B309) (木畑洋一, 松本宣郎他と共著), 実教出版, 2017. 全 448 頁.
3. 深見純生 (教科書指導書) 『世界史 B 新訂版 教授用指導書』 (木畑洋一他と共著), 実教出版, 2017.

〔社会に向けた成果発表〕計5件

1. 青山亨「インド化」, パーリ学仏教文化学会・上座仏教事典編集委員会編『上座仏教事典』, めこん, 2016. 168-169.
2. 青山亨「繁栄するジャワの王国の記録: デーシャワルナナ」, 池田嘉郎・上野慎也・村上衛・森本一夫 (編) 『名著で読む世界史 120』, 山川出版社, 2016. 228-230.
3. 東長靖「スーフィズム」「イブン・アラビー」『哲学中辞典』, 知泉書館
4. 山根総「パキスタン」『NHK データブック 世界の放送 2017』, NHK 出版, 2016. 333.
5. 山根総「変わる名前, 変える名前—パキスタン」岩波書店辞典編集部編『世界の名前』 (岩波新書), 岩波書店, 2016. 243.

〔その他〕計1件

菅原由美・青山亨・宮崎恒二・ウィルムファンデルモーレン “Javanese Documents Online”, <https://jvdo.aa-ken.jp/>

イスラームに基づく経済活動・行為 (第二期)

研究期間: 2016-2018 (代表: 福島康博/所員 2, 共同研究員 13)

所員: 床呂郁哉, 黒木英充

共同研究員: 福島康博, 赤堀雅幸, 今堀恵美, 大川真由子, 上山一, 川端隆史, 小牧幸代, 砂井紫里, 佐竹弘靖, 塩谷もも, 藤原達也, 舛谷鋭, 安田慎

研究会等の内容

第1回研究会 (通算第1回目) 日時: 2016年10月1日 (土) 13:00-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディアセミナー室 (306)

使用言語: 英語

- ・ 共同研究員による打ち合わせ
- ・ 報告: Ahmad Puad Mat Som (アフマド・プアド・マッド・ソン), Dean, Faculty of Applied Social Sciences, Universiti Sultan Zainal Abidin, Malaysia (マレーシア, スルタン・ザイナル・アビディン大学応用社会科学部教授・学部長), 立教大学観光学部招へい研究員 “Islamic Tourism Demand and the Development of Shariah Compliant Hotel” (イスラーム・ツーリズムへの受容とシャリーア適格ホテルの発展)

第2回研究会 (通算第2回目) 日時: 2017年3月19日 (日) 13:00-18:00

場所: 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 (AA 研) マルチメディア会議室(304)

使用言語: 日本語

- ・ 報告1: 藤原達也 (AA 研共同研究員・麗澤大学大学院生) 「日本におけるハラール産業の課題—日本の中小企業の輸出発展に対する潜在的障壁の検討」
- ・ 報告2: ニツ山達朗 (京都大学) 「イスラーム消費財のゆくえ—チュニジアにおけるクルアーングッズの事例から—」

研究成果一覧

〔学術論文〕計13件

1. Kamiyama, Hajime, Kenichi Kashiwagi, and Mohamed Kefi, Technical efficiency among irrigated and non-irrigated olive orchards in Tunisia, *African Journal of Agricultural Research* 11(45), Academic Journals, 2016. 4627–4638. (査読有)
2. 上山一「中東産油国の経済動向」『世界経済評論』686(9/10月号), 国際貿易投資研究所 (ITI) (編), 文眞堂, 2016. 57–64.
3. 上山一「GCC 諸国のマクロ経済情勢と今後の政策課題」『中東協力センターニュース』2016年5月号41(2), JCCME 中東協力センター, 2016. 11–18.
4. 床呂郁哉「東南アジア社会における紛争・暴力とその処理」『東南アジア地域研究 (第二巻)』, 慶應義塾大学出版会, 2017. 199–218. (査読有)
5. 床呂郁哉「書評: 鈴木佑記著『現代の〈漂海民〉—津波後を生きる海民モーケンの民族誌』」『東南アジア研究』Feb-54 (54巻2号), 2017. 268–271.
6. 福島康博「イスラームに基づく食の安全・安心: マレーシアのハラール認証制度の事例」『現代のイスラーム法』, 弘文堂, 2016.11. 151–193.
7. 塩谷もも「海外研修を通じた異文化理解・多文化共生に関する考察: 「アジア文化演習」を通じて」『島根県立大学短期大学部松江キャンパス 紀要』56, 2017. 179–189. (査読有)
8. 砂井紫里「協働・対話・フィードバック—大学学生食堂におけるハラールチキンメニューをめぐって」『文化を食べる 文化を飲む: グローバル化する世界の食とビジネス』, ドメス出版, 2017. 67–86.
9. 小牧幸代「イスラーム復興と宗教商品をめぐるグローバルビジネス: 現代南アジアにおける聖遺物信仰の再活性化とその背景」『ディスカッション・ペーパー2016-02』, 高崎経済大学地域政策学会, 1–12.
10. 小牧幸代「パキスタン系移民社会と強制結婚: ノルウェーの事例を中心に」『ディスカッション・ペーパー2016-03』, 高崎経済大学地域政策学会, 1–12.
11. 大川真由子「帝国の子どもたち——オマーン帝国/後における混血の処遇」, 『文化人類学研究』17, 早稲田文化人類学会, 2016. 26–46. (査読有)
12. 大川真由子「巻頭言・帝国と混血」, 『文化人類学研究』17, 早稲田文化人類学会, 2016. i–vii. (査読有)
13. 大川真由子 Ethnicity or Tribe? Social Cleavage in Omani Employment Patterns, 『人文学研究所報』56, 神奈川大学人文学研究所, 2016. 13–24.

〔口頭発表等〕計10件

1. Kamiyama, Hajime, “Government Bill and Sukuk Market”, Islamic Finance Seminar for Iran, 2016.10.3-10.4. イラン財務省.
2. 上山一「財務データから見たイスラーム銀行の経営実態について—GCC 諸国を例として—」, 日本金融学会 2016 年度春季大会, 2016.5.14. 武蔵大学.
3. 福島康博「マレーシアにおけるイスラーム金融サービス法の施行とイスラーム金融機関への影響」, 日本金融学会 2016 年度春季大会, 2016.5.14. 武蔵大学.
4. 塩谷もも「インドネシアの今を衣服から知る」, 総合文化講座・島根県立大短期大学部松江キャンパス公開講座, 2016.7.13. 島根県立大学松江キャンパス.
5. 塩谷もも「多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの—インドネシアの事例から」, シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」, 2016.12.10. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
6. Sai, Yukari, “Halal Food Consumption in China and Taiwan”, The 2016 International Metropolis Conference, 2016.10.26. Nagoya Congress Center.
7. Sai, Yukari, “How to make halal options: a case study of a university canteen in Japan”, International workshop on Cross-Border Discourses on Halal, 2016.11.12. University of Malaya.
8. Sai, Yukari, “Dialogue, negotiation, and transparency: a case study of making halal options at a university in Japan”, Halal Marketing Tourism Research Symposium (HMTRS) 2016, 2016.12.2. University of Canterbury.
9. Fujiwara, Tatsuya, “Comparison of Recall and Boycott Scandals of Halal Certification Food Products from Perspectives of Business Ethics in Islam and Supply Chain Risk Management”, Sixth World Congress of the International Society of Business, Economics, and Ethics (ISBEE), 2016.7.15. Shanghai Academy of Social Sciences (SASS), 中国.
10. Fujiwara, Tatsuya, “Supplier Management in Halal Food Supply Chain: A Preliminary Case Study”, 3rd International halal conference 2016 (INHAC), 2016.11.21. Grand BlueWave Hotel, マレーシア.

〔図書〕計2件

1. 床呂郁哉『トランスカルチャー状況下における顔・身体額の構築（シンポジウム報告書）』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017. 全130頁。
2. 床呂郁哉『もの人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題（シンポジウム報告書）』、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2017. 全118頁。

〔社会に向けた成果発表〕計8件

1. 上山一（監修）「バーレーン」『バーレーン王国の産業基盤』、中東協力センター、2016. 1-37.
(URL: <http://www.jccme.or.jp/japanese/08/pdf/08-07-17.pdf>)
2. 床呂郁哉「書評：エドゥアルド・コーン『森は考える—人間的なるものを越えた人類学』 亜紀書房『図書新聞』2016年6月11日号、2016. 6-6.
3. 砂井紫里「マレーシアの友人からのいただきもの」『VESTA』105, 味の素食の文化センター、2017. 18-19.
4. 砂井紫里「中国の清真と食事」『VESTA』105, 味の素食の文化センター、2017. 20-21.
5. 福島康博「ムスリムの日常サービスを支える商品・サービス」『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016. 4-5.
6. 上山一「中東におけるイスラーム銀行の現状：イスラーム金融が利用される背景とは？」『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016. 6-7.
7. 川端隆史「ハラール・ブーム 日本企業はどこへ行く？」『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016. 8-9.
8. 福島康博「ムスリム観光客への対応とハラール食品の輸出：沖縄の取り組み」『FIELDPLUS』16, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、2016. 10-11.

近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析

研究期間：2016-2018（代表：太田信宏／所員 3, 共同研究員 15）

所員：太田信宏, 高島淳, 近藤信彰

共同研究員：石田友梨, 井田克征, 小川道大, 置田清和, 小倉智史, 北田信, 小磯千尋, 榊和良, 長崎広子, 二宮文子, 橋本泰元, 真下裕之, 水野善文, 三田昌彦, 和田郁子

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2016年12月11日（日）14:00-19:00

場所：東京外国語大学本郷サテライト8階会議室

太田信宏「近世南アジア文化／文学の境界をぼかす：マイソール王国宮廷文学／文化からの視点」

置田清和／Okita, Kiyokazu

“Vaiṣṇava Perceptions of Muslim Authority in Early Modern South Asia: Based on Bengali Hagiographies of Caitanya”

討論と打ち合わせ（出席共同研究員全員）

研究成果一覧

〔学術論文〕計17件

1. 石田友梨「インドにおけるイスラーム神秘主義の靈魂論—シャー・ワリーウッラー・ディフラウィーを例に—」, *International Journal of the Asian Philosophical Association* 9(1), IJAPA 2016. 111-113. (査読有)
2. 石田友梨（訳）「シャー・ワリーウッラー・ディフラウィー著『か弱き下僕の生涯における優雅なる一編』」『大阪経済法科大学 論集』111, 2016. 85-99. (査読有)
3. 井田克征『『エークナーティー・バグヴァト』における神の化身について』『印度学佛教学研究』65(1), 日本印度学仏教学会, 2016. 271-276. (査読有)
4. 井田克征「ケーシャヴ・ナーヤクの井戸：中世聖者伝におけるダリト像」『RINDAS プロシーディングス・マハーラーシュトラ州におけるダリトの実像：その社会的・歴史的多様性』, 龍谷大学南アジア研究センター, 2017. 19-37.
5. 小川道大「近世インドの農村における農民と「家」」『家と共同性』, 日本経済評論社, 2016. 279-301.
6. 小川道大「18-19世紀のマハール集団の内部構造」『RINDAS プロシーディングス・マハーラーシュトラ州におけるダリトの実像：その社会的・歴史的多様性』, 龍谷大学南アジア研究センター, 2017. 41-55.
7. Okita, Kiyokazu, “From Rasa to Bhaktirasa: The Development of A Devotional Aesthetic Theory in Early Modern South Asia”, *The Journal of Indian and Buddhist Studies* (『印度学佛教学研究』) 65(3), 日本印度学仏教学会, 2017. 1066-1072. (査読有)

8. Okita, Kiyokazu, “A Vedāntic Refutation of Buddhism in Eighteenth Century North India: The Tattvaḍīpikā of Baladeva Vidyābhūṣaṇa”, *Journal of Vaishnava Studies* 25(1), 2016. 153–162. (査読有)
9. Okita, Kiyokazu, “Quotation, Quarrel and Controversy in Early Modern South Asia: Appayya Dīkṣita and Jīva Gosvāmī on Madhva’s Untraceable Citations”, *Adaptive Reuse in South Asian Literatures and Arts, Abhandlungen für die Kunde des Morgenlandes*, Harrassowitz Verlag, 2017. 255–280.
10. Ogura, Satoshi, “A Note on the Genesis and Character of a So-Called ‘Persian Translation of the Rājatarāṅgīnī’”, *History, Literature, and Scholarly Perspectives: South and West Asian Context (Festschrift presented in honor of Moinuddin Aqeel)*, Islamic Research Academy, 2016. 135–146.
11. 小磯千尋「中世バクティ詩人にみる浄・不浄観」『金沢星稜大学人文学研究』1(1), 金沢星稜大学学会人文学部会, 2016. 59–69.
12. Nobuaki Kondo, “Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India”, *Crossing the Boundaries: Asians and Africans on the Move: Proceedings of the Papers Presented at Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 7th International Conference*, Tokyo University of Foreign Studies, 2017. 67–73.
13. 長崎広子「アブドゥル・ラヒーム・カーンカーナー作『都市の輝き』—ムガル帝国期の女の恋模様—」『印度民俗研究』16, 大阪大学印度民俗研究会, 2017. 77–99.
14. Ninomiya, Ayako, “A Note on wilāya and competitions of sufi saints in Medieval India”, *History, Literature, and Scholarly Perspectives: South and West Asian Context (Festschrift presented in honor of Moinuddin Aqeel)*, Islamic Research Academy, 2016. 119–126.
15. 真下裕之 (監修)・二宮文子・真下裕之・和田郁子 (訳注)「アブル・ファズル著『アーイーニ・アクバリ』」訳注 (5)『神戸大学文学部 紀要』44, 2017. 49–88.
16. Mita, Masahiko, “Sanskritized Imperialism and State Integration in Early Medieval North India (c. 950-1200)”, *State Formation and Social Integration in Pre-modern South and Southeast Asia: A Comparative Study of Asian Society*, The Toyo Bunko, 2017. 179–202.
17. 和田郁子「港町マドラスにみる「境界」—17世紀のクリスチャン・タウンと「ポルトガル人」—」『境界研究』7, 北海道大学スラブ・ユーラシア研究センター, 2017. 25–44. (査読有)

〔口頭発表等〕計 19 件

1. 石田友梨「インドにおけるイスラーム神秘主義の修行論—ナクシュバンディー教団を中心に—」, 大阪経済法科大学哲学研究会, 2016.12.21. 大阪経済法科大学研究センター.
2. 井田克征『『エークナーティー・バーグヴァト』における神の化身について』, 日本印度学仏教学会, 2016.9.3. 東京大学.
3. 太田信宏「完璧な妻か、完璧な夫婦か: 『ハディバデヤ・ダルマ (貞女の法)』再読」, 人間文化研究機構プログラム「南アジア地域研究」東京外国語大学拠点 2016 年度第 1 回研究会「貞しき女性・浄なる女性: 歴史的アプローチから」, 2016.4.23. 東京外国語大学本郷サテライト.
4. 小川道大「18-19 世紀におけるカースト動態～不可触民に注目して～」, 二国間交流事業「近代マハーラーシュトラにおけるカースト観の構築」第 1 回研究会, 2017.1.28. 金沢大学.
5. Ogawa, Michihiro, “Construction of Caste in the early Modern Maharashtra”, 2 Day Exploratory Workshop CAS-JSPS Joint Research Project on “Construction of Caste in Modern Maharashtra”, 2017.3.8. Savitribai Phule Pune University, India.
6. Okita, Kiyokazu, “The Number of Bhaktirasa-s: Jīva Gosvāmī’s Pṛītisandarbhā on Bhāgavatapurāṇa 10.43.17”, *The Bhāgavata Purāṇa: Its Histories, Philosophies, and Cultures*, 2017.1.7. CPR Institute of Indological Research, University of Madras, India.
7. Okita, Kiyokazu, “Transcultural Dynamics in South Asian Religions”, *Transcultural Dynamics of Asia and Europe: Mobility, Negotiation, and Transformation*, 2016.9.26. 京都大学.
8. Okita, Kiyokazu, “Hindu-Muslim Encounters in Early Modern South Asia: According to Bengali Hagiographies of Caitanya”, 日本南アジア学会第 29 回全国大会, 2016.9.25. 神戸市外国語大学.
9. Okita, Kiyokazu, “From Rasa to Bhaktirasa: The Development of Devotional Aesthetic Theory in Early Modern South Asia”, 日本印度学仏教学会第 67 回学術大会, 2016.9.3. 東京大学.
10. Okita, Kiyokazu, “Singing in Protest: Early Modern Hindu-Muslim Encounters in Bengali Hagiographies of Caitanya”, *Exploring Bhakti: Is Bhakti a Language of Power or of Protest?*, 2016.5.14. Yale University.
11. 小倉智史『『集史』インド史・釈迦牟尼伝の情報源に関する一考察』, 第 53 回野尻湖クリルタイ, 2016.7.16. 藤屋旅館.
12. Ogura, Satoshi, “From Brutal Invaders to Brave Warriors: Mughals as seen by Kashmiri Pandits in the Sixteenth Century”, Perso-Indica seminar, 2016.11.30. Sorbonne Nouvelle Paris 3.
13. Ogura, Satoshi, “The making of Persian Sufi-Rishi narratives: the cases of ‘Alī Hamadānī and Nūr al-Dīn Rīshī’”, *Seminaire ‘Societes, Politiques et Cultures du Monde Iranien’*, 2016.12.1. Sorbonne Nouvelle Paris 3.

14. Ogura, Satoshi, "Revisiting "In Search of Equivalence": Muḥammad Šāhābādī's Strategies in Translating the Rājatarānginī", SFB 1167 "Macht und Herrschaft" & Bonner Forum Iranistik, 2017.2.7. Institut für Orient- und Asienwissenschaften der Universität Bonn.
15. Ogura, Satoshi, "Some Remarks on the History of India and the Life of Buddha in Rašīd ad-Dīn Faḡl Allāh's Ġāmi' at-Tawārīḡ", Collegium Turfanicum, 2017.2.23. Berlin-Brandenburgische Akademie der Wissenschaften.
16. Kondo, Nobuaki, "Making a Persianate Society: Literati Migration to Mughal India", Consortium for Asian and African Studies Symposium "Crossing the Boundaries: Asian and Africans on the Move, 2016.10.22. ILCAA.
17. 真下裕之「ムガル帝国におけるペルシア語キリスト教典籍とその周辺」, 国立民族学博物館共同研究「近世カトリックの世界宣教と文化順応」, 2016.12.18. 国立民族学博物館.
18. 真下裕之「ムガル帝国宮廷における贈与儀礼：マンサブ制度の一側面として」, 科学研究費助成事業「ユーラシア諸帝国の形成と構造的展開」第4回研究会, 2017.3.31. 首都大学東京 秋葉原サテライトキャンパス.
19. 和田郁子「コロマンデル海岸の所謂「ポルトガル人」と草創期のマドラス—「境界」の視点から」, 第77回羽田記念館定例講演会, 2016.12.17. 京都大学ユーラシア文化研究センター.

〔図書〕計2件

1. 高島淳(編)・内田紀彦・B.B.ラージャブローヒト(著)『カンナダ語・日本語辞典』, 三省堂, 2016. 全939頁.
2. 和田郁子・小石かつら(編)『他者との邂逅は何をもたらすのか—「異文化接触」を再考する』, 昭和堂, 2017. 全192頁.

〔社会に向けた成果発表〕計2件

1. Ogura, Satoshi, "A preliminary entry of Šāhābādī, Rājatarānginī (Akbar)", *Perso-Indica* (URL: http://www.perso-indica.net/work/historical_works/rajatarangini_%28akbar%29)
2. 三田昌彦「教養教育としての「世界史」講義の試み」『高大連携歴史教育研究会 会報』2, 2016. 98–103.

中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究

研究代表者名：近藤洋平 参加者：

研究期間：2016（平成28）年度～2018（平成30）年度

研究期間：2016–2018（代表：近藤洋平／所員 2, 共同研究員 9）

所員：黒木英充, 錦田愛子

共同研究員：近藤洋平, 高橋英海, 辻明日香, 吉村貴之, 若松大樹, Antranig Dakessian, Guita Hourani, Ray Mouawad, Souad Slim

研究会等の内容

第1回研究会（通算第1回目） 日時：2016年9月1日（木）10:00-14:00・2日（金）10:00-14:00

場所：Japan Center for Middle Eastern Studies, Beirut (JaCMES) 使用言語：英語

主催：AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

9月1日

Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) Introduction

Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) "Minorities in Oman"

Guita HOURANI (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University-Louaize (NDU)) "Kurds in the Middle East"

Hiroki WAKAMATSU (ILCAA Joint Researcher, Toros University) "Alevi in Turkey"

Aiko NISHIKIDA (ILCAA) "Palestinians in the Middle East"

9月2日

Hidemitsu KUROKI (ILCAA) "Elites in the Ottoman Period"

Souad SLIM (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand) "Christians in the Middle East (1)"

Ray MOUAWAD (ILCAA Joint Researcher, Saint Joseph University) "Christians in the Middle East (2)"

Hidemi TAKAHASHI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo) "Christians in the Middle East (3)"

Antranig DAKESSIAN (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University) "Armenians in the Middle East (1)"

Takayuki YOSHIMURA (ILCAA Joint Researcher, Waseda University) "Armenians in the Middle East (2)"

All members About next meetings

第2回研究会（通算第2回目） 日時：2017年3月3日（金）14:00-18:00・4日（土）14:00-18:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）セミナー室（301） 使用言語：英語
主催：AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」
3月3日

Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate)

“Survival Strategies of Minority Groups: A General Introduction”

Antranig DAKESSIAN (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University)

“Surviving Strategies of Armenians in Lebanon”

Guita HOURANI (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University-Louaize (NDU))

“Surviving Strategies of the Kurds in the M.E.”

Hiroki WAKAMATSU (ILCAA Joint Researcher, Toros University) “Surviving Strategies of Alevis”

3月4日

Tatsuya KIKUCHI (The University of Tokyo) “Surviving Strategies of Druzes”

Asuka TSUJI (ILCAA Joint Researcher, Kawamura Gakuen Woman’s University)

“Surviving Strategies of Copts in Egypt”

Souad SLIM (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand)

“Surviving Strategies of Orthodox Christians in Lebanon”

Ray MOUAWAD (ILCAA Joint Researcher, Saint Joseph University)

“Surviving Strategies of Minority Groups in Tripoli”

研究成果一覧

〔学術論文〕計15件

1. 黒木英充「シリア—内戦と多民族・多宗派問題」『現代中東を読み解く—アラブ革命後の政治秩序とイスラーム』, 明石書店, 2016. 152–176.
2. Wakamatsu, Hiroki, An anthropological analysis popular belief on Kurdish Alevis in Turkey, *International Journal of Social Sciences and Education Research* 3(1), IJSSER, 2017. 49–57. (査読有)
3. 錦田愛子「外国人の市民権とは——グローバル市民への視点」『多文化「共創」社会入門——移民・難民とともに暮らし, 互いに学ぶ社会へ』, 慶應義塾大学出版会, 2016. 92–100.
4. 錦田愛子「アラブ諸国のパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 47–51.
5. 錦田愛子「移民／難民とパスポート」『パスポート学』, 北海道大学出版会, 2016. 215–218.
6. 錦田愛子「中東・北アフリカの移民／難民研究」『中東・イスラーム研究概説—政治学・経済学・社会学・地域研究のテーマと理論』, 明石書店, 2017. 151–159.
7. 錦田愛子「ヨーロッパの市民権を求めて—アラブ系移民／難民の移動と受入政策の変容」『中東研究』528 (2016年度 Vol.III), 中東調査会, 2017. 16–25.
8. 錦田愛子「封鎖されたガザ地区に生きる人々——政治的孤立による人と物の移動の変化」, 『日本の科学者』51(11), 日本科学者会議, 2016. 18–23.
9. 錦田愛子「北欧をめざすアラブ系「移民／難民」—再難民化する人びとの意識と移動モデル」『広島平和研究』4, 広島平和研究所, 2017. 13–34. (査読有)
10. 錦田愛子「パレスチナ・ディアスポラ—繰り返される移動」『パレスチナを知るための60章』, 明石書店, 2016. 23–26.
11. 錦田愛子「シリア・レバノンのパレスチナ人—安全と未来を求めて」『パレスチナを知るための60章』, 明石書店, 2016. 240–243.
12. 吉村貴之「アルメニア使徒教会について」『東方キリスト教諸教会—研究案内と基礎データ』, 明石書店, 2017. 344–346.
13. Tsuji, Asuka, The Depiction of Muslims in the Miracles of Anba Barsauma al-‘Uryan, *Studies in Coptic Culture: Transmission and Interaction*, The American University in Cairo Press, 2016. 107–122.
14. Tsuji, Asuka, Preliminary Report on Four saints from the Mamluk period: Hadid, Yuhanna al-Rabban, Barsauma al-‘Uryan, and ‘Alam, *Coptic Society, Literature and Religion from Late Antiquity to Modern Times: Proceedings of the Tenth International Congress of Coptic Studies, Rome, September 17th-22nd*, Peeters, 2016. 1153–1160.
15. Dakessian, Antranik, Socializing the Incoming Armenian Refugees: The Lebanese-Armenian Media (1927-1952), *Armenians in Lebanon (II): The Proceedings of the International Conference on the Armenians in Lebanon May 14th-16th 2014*, The Armenian Diaspora Research Center, 2016.

〔口頭発表等〕計12件

1. 黒木英充「移動と労働（亡命者、難民、出稼ぎ労働者とジェンダー）」, イスラーム・ジェンダー学キックオフ・シンポジウム, 2016.6.11. 東京大学東洋文化研究所.

2. Kuroki, Hidemitsu, “Dragomanity: An origin of multifaceted nature of Lebanese and Syrian migrants?”, Workshop: The future of Lebanese and Syrian migration studies, 2016.10.24. AA 研.
3. Wakamatsu, Hiroki, “Saint Veneration and Religious Practice of Kurdish Alevi in Turkey: Evliyâ-e Sırrî and Daqqah Yemine as a Popular Belief”, 2nd International Conference on Social Sciences and Education Research, 2016.12.4. Istanbul.
4. Wakamatsu, Hiroki, “Geçmisten Günümüze Çorum da Ziyaretler, Bütün Yönleri İle Çorum, Dün, Bugün”, Yarın ve Degisim Sempozyumu Bildiri, 2016.4.28. Hitit University.
5. Wakamatsu, Hiroki, “Günümüz Alevilerin Dini Ritielleri”, Günümüz Alevilige Temel Yaklaşımlar Sempozyumu (Tam Metin Bildiri/Davetli Konusmacı), 2017.2.18. Türkiye Barolar Birliği Av. Özdemir Özok Kongre ve Kültür Merkezi, Ankara.
6. Wakamatsu, Hiroki, “Bir Antropologun Bakış Açısı ile Alevilik”, Akdeniz Rotary Kulübü Ocak 2017 Toplantısı, 2017.2.9.
7. Wakamatsu, Hiroki, “Müşâhiplik An anthropological analysis on fictive kinship of Alevi in Turkey”, The 20th Congress of the European Anthropological Association: European Anthropology in a Changing World: From Culture to Global Biology, 2016.8.28. Zagreb.
8. Wakamatsu, Hiroki, “Tarih Antropolojisi açısında Koyun Baba Ziyareti”, I. Uluslararası Koyun Baba Sempozyumu, 2016.5.13. Hitit University.
9. Nishikida, Aiko, “Migration in desperation: Palestinians' move to EU countries”, International Metropolis Conference, 2016.10.26. Nagoya Congress Center.
10. 錦田愛子「ヨーロッパをめざす中東難民—レバノン・シリアのパレスチナ難民の足取りを追って—」, 人間文化研究機構「現代中東地域研究」事業・AA 研拠点・パレスチナ／イスラエル研究会, 2016.6.26. 東京大学東洋文化研究所.
11. 錦田愛子「シリア難民の移動と受入国における状況—中東の混乱とヨーロッパでの受け入れをめぐる変化」, 日本赤十字社和歌山国際保健セミナー, 2016.5.21. 日本赤十字社和歌山医療センター.
12. Dakessian, Antranik, “A Demographic Study of the Jordanian Armenians (1925-2005)”, International Conference on Armenians in Jordan, 2016.5. 23. Haigazian University.

〔図書〕計1件

辻明日香『コプト聖人伝に見る十四世紀エジプト社会』, 山川出版社, 2016. 全259頁.

〔社会に向けた成果発表〕計1件

錦田愛子「中東地域からの移民／難民をめぐる動向と展望」『アジア研ワールド・トレンド』2017年2月号 (No.256), アジア経済研究所, 2017. 46-47.

II-3.3 外部資金による研究の詳細

II-3.3.1 特別経費「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

異分野間連携の国内合同研究集会

日時： 2016年12月15日(木) 14:00-16:30

会場： AA研マルチメディア会議室(304)

14:00-14:05 飯塚正人(AA研所長) 趣旨説明

【各分野報告】14:05-15:35

14:05-14:35 星泉(AA研所員)

「チベットの牧畜民とその語彙：異分野の研究者との共同研究で学んだこと」

14:35-15:05 床呂郁哉(AA研所員)

「リスク・ハザードと在来知に関する試論—東南アジア島嶼部の事例から」

15:05-15:35 黒木英充(AA研所員)「シリア内戦の都市・農村関係の側面について」

15:35-15:50 休憩

15:50-16:30 質疑応答・討論

以下の言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究集会およびワークショップを開催した。

<国際>

- ・ 第23回オーストロネシア形式言語学会(AFLA 23)(2016年6月10日~12日)
- ・ Workshop on languages spoken in Sabah state, Malaysia (Skypod Hostel at Kota Kinabalu, Malaysia)(2016年8月9日~13日)
- ・ Language Documentation Seminar (Institute of Language and Literature, Mongolian Academy of Sciences, Mongol)(2016年9月26日~30日)
- ・ International workshop on language documentation of Indoensian languages (Artha Wacana Christian University, Kupang, Indonesia)(2016年11月28日~30日)
- ・ AA研フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ 講演：研究未開発言語のコーパス構築：多様な言語間に見られる対象指示方略の研究への適用を中心に(2016年7月6日)
- ・ AA研フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ：連続講義—データマネージメントとアーカイブ(2017年1月16日~18日)
- ・ AA研フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ：連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」(2017年3月14日・15日)
- ・ AA研フィールド言語学ワークショップ：第11回文法研究ワークショップ：講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型—アノテーションシステム GRAID を用いて」(2017年3月21日・22日)
- ・ 第1回リンディフォーラム(2016年4月5日)
- ・ 第2回リンディフォーラム(2016年4月26日)
- ・ 第3回リンディフォーラム(2016年7月5日)
- ・ 第4回リンディフォーラム(2016年11月11日)
- ・ 第5回リンディフォーラム(2016年11月15日)
- ・ 第6回リンディフォーラム(2016年11月22日)
- ・ 第7回リンディフォーラム(2017年3月1日)
- ・ 第8回リンディフォーラム(2017年3月2日)
- ・ 第1回シベ言語文化国際会議(2016年10月26日・27日・29日・30日)
- ・ シベ語ドキュメンテーションのためのワークショップ(2017年2月26日~3月3日)
- ・ 国際シンポジウム「チベット牧畜民の「いま」を記録する」/AA研共同利用・共同研究課題「人間—

家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第8回研究会（2017年2月18日・19日）

- ・ 国際バントゥ諸語マイクロ・バリエーションワークショップ/AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第3回研究会（2017年3月3日～5日）
- ・ 国際シンポジウム“Language Documentation and Corpus Linguistics”/AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第8回研究会（2017年3月10日）
- ・ インドネシア ヌサ・トゥンガラ・ティムール州の危機言語記録のためのワークショップ/AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第9回研究会（2017年3月24日～30日）
- ・ チベットの今を見つめる眼『Bringing Tibet Home』（2016年9月13日）

<国内>

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第7回研究会（2016年11月5日・6日）、第9回研究会（2017年3月11日・12日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」成果取りまとめのための研究会（2017年1月21日・22日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第7回研究会（2017年2月18日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」第4回研究会（2016年6月4日）、第5回研究会（2016年11月19日・20日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」第4回研究会（2016年7月3日）、第5回研究会（2016年10月1日）、第6回研究会（2017年2月11日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第4回研究会（2016年8月6日）、第5回研究会（2016年11月12日・13日）、第6回研究会（2017年3月6日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第1回研究会（2016年7月24日）、第2回研究会（2016年11月26日・27日）、第3回研究会（2017年3月27日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第1回研究会（2016年4月16日）、第2回研究会（2016年7月2日）、第3回研究会（2017年3月25日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」第1回研究会（2016年5月21日）
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第1回研究会（2016年4月17日）、第2回研究会（2016年12月17日）
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ「Praat を用いた音響音声学的分析の初歩」（2016年10月5日）
- ・ AA 研フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ ArcGIS を用いた言語地図作成入門（2016年12月7日）
- ・ 第5回リンディフォーラム（2016年11月15日）
- ・ リンディフォーラム：特任研究員研究発表会（2017年3月28日）
- ・ 言語研修シベ語フォローアップミーティング：第6回シベ語研究会（2016年5月22日）
- ・ 『ラサへの歩き方～祈りの2400km』公開記念チベット映画傑作選『静かなるマニ石』（2016年7月7日）
- ・ 『ラサへの歩き方～祈りの2400km』公開記念チベット映画傑作選『陽に灼けた道』（2016年7月14日）
- ・ 琉球語言語研修フォローアップミーティング/2016年度言語研修（琉球語）成果物編集打ち合わせ（2016年9月21日）
- ・ 2016チベット異文化理解交流事業（2016年10月2日）
- ・ 隠岐の島方言調査事前ワークショップ（2016年10月22日・23日）
- ・ フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」（2016年11月19日～23日）
- ・ 世界の言語で読む Le Petit Prince（2016年11月19日～23日）

- ・ チベット牧畜民の仕事展 (2017年2月13日～3月11日)
- ・ 第3回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2017年2月17日～23日)
- ・ チベットの今を見つめる眼『チベット牧畜民の一日』上映会 (2017年2月19日・3月11日)

【オンライン研究交流環境】

「チュルク諸語対照基礎語彙 (第3期)」サイト構築によるチュルク諸語一次資料のオンライン公開準備 (IRCプロジェクト)

【研究連携】

<海外視察・関係構築>

連携事業をより活発に展開するために以下の海外研究機関を訪問し、研究交流関係の構築を行った。

- ・ University of Alaska (アメリカ)
- ・ Artha Wacana Christian University, Kupang (インドネシア)
- ・ Nanyang Technological University (シンガポール)
- ・ Mahidol University (タイ)
- ・ 香港大学 (中国)
- ・ Universität Bonn (ドイツ)
- ・ University of Helsinki (フィンランド)
- ・ Vietnam National University, Hanoi (ベトナム)
- ・ Institute of Language and Literature, Mongolian Academy of Sciences (モンゴル)

<研究交流>

国際シンポジウム、国際ワークショップ開催に合わせて、以下の海外研究機関から研究者を招き、研究交流を行った。

- ・ Graduate Institute of Applied Linguistics (アメリカ)
- ・ SIL International (アメリカ)
- ・ University of Minnesota (アメリカ)
- ・ University of Naples “L’Orientale” (イタリア)
- ・ Atma Jaya Catholic University of Indonesia (インドネシア)
- ・ Bible Translation Center (Tomohon) (インドネシア)
- ・ Education and Culture Service of Sub Region of Pantar (インドネシア)
- ・ Pusat Masyarakat dan Kebudayaan Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia (インドネシア)
- ・ SMPN SATU ATAP BATULAI, ROTE (The first middle school of Atap Batulai, Rote) (アタップ・バトゥライ第一中学校) (インドネシア)
- ・ STIBA Cakrawala Nusantara Kupang (インドネシア)
- ・ UBB GMTI Kupang (Language and Culture Unit of Christian Evangelical Church in Timor) (インドネシア)
- ・ Udayana University (インドネシア)
- ・ Australian National University (オーストラリア)
- ・ La Trobe University (オーストラリア)
- ・ Macquarie University (オーストラリア)
- ・ The University of Melbourne (オーストラリア)
- ・ KITLV (Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies at Leiden) (オランダ)
- ・ University of Alberta (カナダ)
- ・ Nanyang Technological University (シンガポール)
- ・ Mahidol University (タイ)
- ・ University of Dar es Salaam (タンザニア)
- ・ イリ師範学院 (中国)
- ・ 青海師範大学 (中国)
- ・ 瑟公錫滿文化伝播中心 (中国)
- ・ AMILOLO FILM (中国)
- ・ GANGLHA (中国)
- ・ Humboldt-Universität zu Berlin (ドイツ)
- ・ University of Cologne (ドイツ)

- University of Helsinki (フィンランド)
- Gent University (ベルギー)
- Universiti Kebangsaan Malaysia (マレーシア)
- Mahatma Gandhi Institute, Mauritius (モーリシャス)
- Buryat State University (ロシア)

【現地コミュニティへのアウトリーチ】

危機・少数言語コミュニティへの支援・共同研究活動展開に向け関係構築と予備調査・企画を行った。

- 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師, および現地語調査 (マレーシア・インドネシア) 期間: 8/7-21/2016
- Hooi Ling Soh ワークショップ企画運営協力・講師 (マレーシア) 期間: 8/8-14/2016
- Kartini Abd Wahab ワークショップ企画運営協力・講師 (マレーシア) 期間: 8/8-14/2016
- 三宅良美 ワークショップ企画運営協力・講師 (マレーシア) 期間: 8/10-14/2016
- 呉人徳司 ワークショップ企画運営・講師 (モンゴル) 期間: 9/24-10/3/2016
- Jargal Badagarov ワークショップ企画運営協力・講師 (モンゴル) 期間: 9/25-10/2/2016
- 友定賢治 ワークショップ運営協力・講師 (島根) 期間: 10/21-23/2016
- 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師 (島根) 期間: 10/22-23/2016
- 児倉徳和 ワークショップ企画運営・講師 (島根) 期間: 10/22-23/2016
- Antonia Soriente ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 11/25-12/11/2016
- 塩原朝子 ワークショップ企画運営・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 11/26-12/3/2016
- Anthony Jukes ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ, 現地語調査 (インドネシア) 期間: 11/26-12/16/2016
- Yanti ワークショップ企画運営協力・講師, および研究打ち合わせ (インドネシア) 期間: 11/27-12/2/2016
- 大野剛 ワークショップ企画運営協力・講師 (宮古島) 期間: 2/16-25/2017
- 中山俊秀 ワークショップ企画運営・講師 (宮古島) 期間: 2/17-24/2017

【研究未開発言語調査・研究支援】

研究未開発言語の調査・研究のために以下の通り研究者を派遣した。

- 塩原朝子 スンバワ語の調査 (インドネシア) 期間: 8/7-21/2016
- 塩原朝子 スンバワ語のテキスト集作成 (インドネシア) 期間: 9/23-28/2016
- 安達真弓 ベトナム語の調査 (ベトナム) 期間: 2/16-3/1/2017
- 山越康裕 モンゴル語文献調査 (ドイツ) 期間: 2/23-26/2017
- 児倉徳和 シベ語の調査 (台湾) 期間: 3/17-20/2017

【若手研究者養成】

- (1) 特任研究員2名を雇用し, 特に若手研究者を対象とした言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する共同研究の展開において指導的な役割を負う機会を与えた。
- (2) 若手研究者にむけて以下のワークショップを開催した:
 - Workshop on languages spoken in Sabah state, Malaysia (Skypod Hostel at Kota Kinabalu, Malaysia) (2016年8月9日~13日)
 - Language Documentation Seminar (Institute of Language and Literature, Mongolian Academy of Sciences, Mongol) (2016年9月26日~30日)
 - International workshop on language documentation of Indoensian languages (Artha Wacana Christian University, Kupang, Indonesia) (2016年11月28日~30日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ 講演: 研究未開発言語のコーパス構築: 多様な言語間に見られる対象指示方略の研究への適用を中心に (2016年7月6日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ 「Praat を用いた音響音声学的分析の初歩」 (2016年10月5日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ ArcGIS を用いた言語地図作成入門 (2016年12月7日)
 - AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ: 連続講義—データマネー

- ジメントとアーカイブ (2017年1月16日～18日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ: テクニカル・ワークショップ: 連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」(2017年3月14日・15日)
- AA 研フィールド言語学ワークショップ: 第11回文法研究ワークショップ: 講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型～アノテーションシステム GRAID を用いて」(2017年3月21日・22日)
- 琉球言語研修フォローアップミーティング/2016年度言語研修(琉球語) 成果物編集打ち合わせ (2016年9月21日)
- 隠岐の島方言調査事前ワークショップ (2016年10月22日・23日)
- 第3回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」(2017年2月17日～23日)

【成果公開・還元】

<学会発表・講演>

以下の通り学会・研究集会等で学術成果の発表を行った。

- 山越康裕 Documentary Linguistics: Asian Perspectives (DLAP-2016) (香港) (2016年4月6日～9日)
- 児倉徳和 東京外国語大学語学研究所 Luncheon Linguistics (東京) (2016年4月13日)
- 阿部優子 AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第1回研究会(東京) (2016年4月17日)
- 品川大輔 AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第1回研究会(東京) (2016年4月17日)
- 山越康裕 東京外国語大学語学研究所 Luncheon Linguistics (東京) (2016年4月20日)
- 中山俊秀 布池外語専門学校 招待講演会(名古屋) (2016年4月27日)
- 児倉徳和 第6回シベ語研究会/シベ語言語研修フォローアップミーティング(東京) (2016年5月22日)
- 品川大輔 AA 研フォーラム(東京) (2016年6月16日)
- 星泉 The 14th International Seminar for Tibetan Studies (ノルウェー) (2016年6月18日～26日)
- 山越康裕 日本言語学会第152回大会(東京) (2016年6月25日, 26日)
- 阿部優子 AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」第2回研究会(東京) (2016年7月2日)
- 渡辺己 AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第1回研究会(東京) (2016年7月24日)
- 山越康裕 AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第1回研究会(東京) (2016年7月24日)
- 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第1回研究会(東京) (2016年7月24日)
- 呉人徳司 Descriptive and Contrastive Analysis on Languages of Northeast Eurasia (新潟) (2016年7月)
- 中山俊秀 International symposium on the emergence of units in social interaction (フィンランド) (2016年8月3日～6日)
- 山越康裕 第11回国際モンゴル学者会議(モンゴル) (2016年8月15日～18日)
- 呉人徳司 第11回国際モンゴル学者会議(モンゴル) (2016年8月15日～18日)
- 児倉徳和 国学与丝绸之路历史文化研究国际学术讨论会(满学组)/第二届国际满文文献学术研讨会(中国) (2016年8月24日～28日)
- 呉人徳司 Time and Language (フィンランド) (2016年8月25日・26日)
- 星泉 ツォショク・サルワ起業セミナー(中国) (2016年8月)
- 児倉徳和 第1回錫伯族言語文化国際学術討論会(首届锡伯族语言与文化国际学术研讨会)(中国) (2016年9月9日～11日)
- 中山俊秀 琉球諸語研究会(福岡) (2016年9月27日)
- 星泉 2016チベット異文化理解交流事業(北海道) (2016年10月2日)
- 星泉 2016チベット異文化理解交流事業(北海道) (2016年10月2日)
- 中山俊秀 隠岐の島方言調査事前ワークショップ(島根) (2016年10月22日・23日)
- 児倉徳和 隠岐の島方言調査事前ワークショップ(島根) (2016年10月22日・23日)
- 児倉徳和 第1回シベ語言語文化国際会議(福岡, 東京) (2016年10月26日・27日, 29日・30日)
- 児倉徳和 第1回シベ語言語文化国際会議(福岡, 東京) (2016年10月26日・27日, 29日・30日)

- ・ 星泉 AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第7回研究会（東京）（2016年11月5日・6日）
- ・ 澤田英夫 第49回国際シナ=チベット言語学会議（中国）（2016年11月11日～13日）
- ・ 呉人徳司 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第5回研究会（東京）（2016年11月12日・13日）
- ・ 中山俊秀 Mahidol University Invited lecture（タイ）（2016年11月16日）
- ・ 中山俊秀 Mahidol University Invited lecture（タイ）（2016年11月17日）
- ・ 呉人徳司 AA 研共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」第4回研究会（東京）（2016年11月19日・20日）
- ・ 星泉 第64回日本チベット学会ワークショップ「チベット学研究のホットスポット」（山梨）（2016年11月19日・20日）
- ・ 山越康裕 フィールド言語学カフェ・特別編（東京）（2016年11月19日～23日）
- ・ 山越康裕 フィールド言語学カフェ・特別編（東京）（2016年11月19日～23日）
- ・ 児倉徳和 フィールド言語学カフェ・特別編（東京）（2016年11月19日～23日）
- ・ 塩原朝子 フィールド言語学カフェ・特別編（東京）（2016年11月19日～23日）
- ・ 星泉 フィールド言語学カフェ・特別編（東京）（2016年11月19日～23日）
- ・ 星泉 AA 研フォーラム（東京）（2016年12月15日）
- ・ 渡辺己 『外国語と日本語との対照言語学的研究』第20回研究会（東京）（2016年12月17日）
- ・ 品川大輔 AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第2回研究会（東京）（2016年12月17日）
- ・ 品川大輔&阿部優子 AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第2回研究会（東京）（2016年12月17日）
- ・ 澤田英夫 文化庁平成28年度文化遺産国際協力拠点交流事業 Mini Symposium on Myanmar “Palm Leaf Documents, an urgent necessity for digitization”（京都）（2016年）
- ・ 品川大輔 日本アフリカ学会関西支部主催2016年度第1回若手研究会「表現する主体としてのアフリカの人々—日常生活の言語・文学・音楽—」（大阪）（2017年1月7日）
- ・ 安達真弓 第11回東京大学言語変異・変化研究会（東京）（2017年1月13日）
- ・ 星泉 FIELDPLUS café（東京）（2017年1月18日）
- ・ 星泉 AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」成果取りまとめのための研究会（東京）（2017年1月21日・22日）
- ・ 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」成果取りまとめのための研究会（東京）（2017年1月21日・22日）
- ・ 澤田英夫 ミャンマー連邦共和国の文化遺産保護のための取組みと課題（東京）（2017年1月25日）
- ・ 品川大輔 京都大学タンザニアフィールドステーションセミナー（第18回）（タンザニア）（2017年1月28日）
- ・ 中山俊秀 第56回ヴァーバル・ノンヴァーバル・コミュニケーション研究会（東京）（2017年2月3日）
- ・ 星泉 国際シンポジウム「チベット牧畜民の「いま」を記録する」/AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第8回研究会（東京）（2017年2月18日・19日）
- ・ 塩原朝子 AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第7回研究会（東京）（2017年2月18日）
- ・ 阿部優子 国際バントゥ諸語マイクロ・バリエーションワークショップ/AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第3回研究会（東京）（2017年3月3日～5日）
- ・ 児倉徳和 AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」第6回研究会（東京）（2017年3月6日）
- ・ 中山俊秀 Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University Special lecture（タイ）（2017年3月15日）
- ・ 中山俊秀 Research Institute for Languages and Cultures of Asia, Mahidol University Special lecture（タイ）（2017年3月15日）
- ・ 中山俊秀 Division of Linguistics and Multilingual Studies, Nanyang Technological University Special lecture

(シンガポール) (2017年3月22日)

- ・ 澤田英夫 慶應義塾大学言語文化研究所公開シンポジウム「移動動詞表現の対照— 東南アジア諸言語の「行く・来る」を中心に—」(東京) (2017年3月25日)
- ・ 阿部優子 AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」第3回研究会(東京) (2017年3月27日)
- ・ 安達真弓 リンディフォーラム：特任研究員研究発表会(東京) (2017年3月28日)
- ・ 阿部優子 リンディフォーラム：特任研究員研究発表会(東京) (2017年3月28日)
- ・ 山越康裕 九科研合同研究会 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」(京都) (2017年3月30日)
- ・ 児倉徳和 九科研合同研究会 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」(京都) (2017年3月30日)
- ・ 澤田英夫 九科研合同研究会 2016年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会「ユーラシア言語研究 最新の報告」(京都) (2017年3月30日)

<出版物刊行>

以下の出版物を刊行した。

- ・ アジア・アフリカの言語と言語学編集担当(編)『アジア・アフリカの言語と言語学 11』(166pp.) (オンラインジャーナル)
- ・ Nicholas Evans and Honoré Watanabe (eds.) *Insubordination* (xii+435pp.)
- ・ チベット文学研究会(星泉, 海老原志穂, 大川謙作, 三浦順子)(編)『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』Vol. 4 (176pp.)
- ・ ツェラン・トンドゥブ(著) 海老原志穂, 大川謙作, 星泉, 三浦順子(訳)『黒狐の谷』(416pp.)
- ・ Yuko Abe (ed.) “Kabendeni: Historia fupi ya wilaya ya Mpanda-Katavi na watu wake, kabila la Wabende” (“The Short History of Mpanda District: Katavi Region: Bende Tribe and its People”) / 『カタヴィ州ンパンダ県小史：ベンデ民族とその人々』(154pp.)

【調査・研究成果の資源化】

以下の研究未開発言語に関する調査資料, 研究成果の分析, 電子化, 資源化を進めた:

- ・ アイヌ語
- ・ スライアモン語
- ・ モンゴル諸語
- ・ 現代ウイグル語

【言語ダイナミクス科学研究推進環境の整備】

言語ダイナミクス科学研究推進に必要な文献資料の整備をはかった。

【共同研究の推進】

<外国人研究員の受入>

(1) 言語ドキュメンテーションと言語多様性に関する研究を専門とする以下の外国人研究員を受入, 共同研究にあたった。

- ・ Tun Aung Kyaw
- ・ RIESTER, Arndt
- ・ ARKA, I Wayan

<AA 研共同利用・共同研究課題>

(2) 以下の共同利用・共同研究課題を組織し, 共同研究を推進した:

- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーキング」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「『アルタイ型』言語に関する類型的研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」
- ・ AA 研共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」

- AA 研共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」
- AA 研共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
- AA 研共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」
- AA 研共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」（成果取りまとめのための研究会を2017年1月21日・22日に開催）

<外国人研究者の短期招へい>

- (3) 国際シンポジウム, ワークショップ開催のため, 次の外国人研究者を招へいし, 短期共同研究を行った。
- Amos Rehabeam Sir (UBB GMTI Kupang (Language and Culture Unit of Christian Evangelical Church in Timor))
 - Anderias Susang (所属なし)
 - Anthony Jukes (La Trobe University)
 - Antoia Soriente (University of Naples “L’Orientale”)
 - Antoinette Schapper (KITLV (Royal Netherlands Institute of Southeast Asian and Caribbean Studies at Leiden))
 - Ba, Wenxin (名古屋学院大学大学院)
 - Chengzhi (追手門学院大学)
 - Dominikus Tauk (Udayana University)
 - Elsijon Marjesi Thine (SMPN SATU ATAP BATULAI, ROTE (The first middle school of Atap Batulai, Rote) (アタップ・バトゥライ第一中学校))
 - Erika Sandman (University of Helsinki)
 - Gastor Mapunda (University of Dar es Salaam)
 - He, Shujian (慈公錫満文化伝播中心)
 - He, Yuanxiu (イリ師範学院)
 - Hooi Ling Soh (University of Minnesota)
 - Jargal Badagarov (Buryat State University)
 - Jermy Imanuel Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang)
 - John Bowden (Pusat Masyarakat dan Kebudayaan Lembaga Ilmu Pengetahuan Indonesia)
 - Julie Lefort (Mahatma Gandhi Institute, Mauritius)
 - Kartini Abd Wahab (Universiti Kebangsaan Malaysia)
 - Khasham Gyal (AMILOLO FILM)
 - Koen Bostoën (Gent University)
 - Liu, Feixiong (慈公錫満文化伝播中心)
 - Meng, Ronglu (慈公錫満文化伝播中心)
 - Nantaijia (滋賀県立大学大学院)
 - Nicholas Evans (Australian National University)
 - Nicholas Thieberger (The University of Melbourne)
 - Nyangchak Gyal (GANGLHA)
 - Paul R. Kroeger (Graduate Institute of Applied Linguistics / SIL International)
 - Semram Serang (Education and Culture Service of Sub Region of Pantar)
 - Sonja Riesberg (University of Cologne / Australian National University)
 - Stefan Schnell (The University of Melbourne)
 - Sumittra Suraratdecha (Mahidol University)
 - Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia)
 - Zhabu (青海師範大学)

中東研究日本センター (JaCMES – Japan Center for Middle Eastern Studies)

- 2016年9月1日(木) —2日(金) JaCMESにて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第1回研究会を実施した。
- 2016年1月29日(火) JaCMESにてラウンドテーブル “The future of Syria and the surrounding countries” を実施した。
- 2017年3月3日(金) —4日(土) AA 研にて共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and

- Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第1回研究会を実施した。
- 2017年3月13日(月) ベイルートの映画館 Metropolis Empire Sofil にて映画会議 “Protesters on the Street” を開催した。
- 中東都市ベースマップシステムのコンテンツ充実を図った。
<http://meis2.aacore.jp/basemap.html>
<http://asp.netmap.jp/mebasemap/index.html>

コタキナバル・リエゾンオフィス (KKLO – Kota Kinabaru Liaison Office)

- 2016年7月16日(土) にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により同年度の第1回ワークショップを実施した。
- 2016年8月9日(火) -13日(土) にマレーシア・サバ大学においてサバにおける会話言語の研究に関するワークショップが実施された。
- 2016年8月28日(日) にコタキナバル市内のホテル会場において、共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により東南アジアの文化多様性に関する第2回ワークショップを開催し、日本側、ならびにマレーシア側から研究者などが参加した。
- 2016年11月13日(日) にAA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」の研究成果論文集の出版に関する打ち合わせが実施された。
- 2017年1月7日(土) にコタキナバル日本人学校において邦人向け講演会を開催し、金子奈央(アジア経済研究所研究員) がマレーシアの教育と社会に関する講演を行った。
- 2017年2月4日(土) に国際交流基金ジャカルタ日本文化センター(インドネシア)において邦人向け講演会を開催し、吉田ゆか子(AA研) がバリの芸能に関する講演を実施した。
- 2017年3月9日(木) にコタキナバルのマレーシア・サバ大学(UMS)においてアジア・アフリカの文化と社会に関する現地講演会を開催した。日本から若手研究者3名、マレーシア側から1名の研究者が講演し、UMSの研究者や学生らも交えた質疑応答も行った。
- 2017年3月31日(金) AA研にて共同研究課題「東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」枠により第3回ワークショップを実施した。

フィールドサイエンス・コロキウム

- フィールドサイエンス・コロキウム運営委員会を6月17日(金)、2月12日(日)に実施し、2016年度及び2017年度のフィールドサイエンス・コロキウム事業の運営に関わる企画・策定作業等を実施した。
- 同運営委員会と同日開催でフィールドサイエンス・コロキウムの連続ワークショップをAA研基幹研究人類学班「人類学におけるミクローマクロ系の連関2」との共催により下記のように2回実施した。
- 「災害と／のフィールドワーク」日時：2016年6月17日(金)開催
- 「データと論文の間ーフィールドサイエンスにおける論証とは(連続ワークショップ第3回)」日時：2017年2月12日(日)開催

II-3.3.2 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

2016年11月15日(火)

第5回リンディフォーラム

赤瀬川史朗(Lago 言語研究所) 「ウェブユーバスの構築の実際」

使用言語：日本語

主催： 科研費基盤(C)「Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究」(15K02472)
 代表者塩原朝子

後援： 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3)、頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究

のための機動的国際ネットワーク構築」

2017年1月16日(火)～18日(水)

主な内容:

長期的なアーカイブに耐えるフィールドワークとデータ採録の手法(録音,書き起こし,グロス付加,コーパス構築)

ファイル名のつけ方とメタデータの管理

言語アーカイブの作成, PARADISEC の活動の概要紹介

テキスト加工のための正規表現と複雑なコーパス検索の方法

講師: Nicholas Thieberger (メルボルン大学, 言語アーカイブ PARADISEC ディレクター)

共催: AA 研, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

2017年1月21日(土)

International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut

1. Nathan HILL (SOAS University of London) Linguistic researches of Tibetan based on the corpus

2. Shintaro ARAKAWA (ILCAA) Linguistic researches of Tangut based on the corpus

Commentators: Tsuguhito TAKEUCHI (Kobe City University of Foreign Studies), Takumi IKEDA (Kyoto University), Norihiko HAYASHI (Kobe City University of Foreign Studies), Kazue IWASA (Kyoto University)

使用言語: 英語

共催: 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」, 科学研究費補助金基盤研究 B 「「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相」

2017年3月1日(水)

第7回リンディフォーラム

Alexander COUPE (ナンヤン工科大学) “On grammaticalization processes in Ao: Sources, pathways and functional extensions”

使用言語: 英語

共催: 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

2017年3月2日(木)

第8回リンディフォーラム

Alexander COUPE (ナンヤン工科大学) “Nominalization and grammatical complexity in Tibeto-Burman and beyond”

使用言語: 英語

共催: 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

2017年3月3日(金)～5日(日)

国際バントゥー諸語マイクロ・バリエーションワークショップ

Marten, Lutz, Hannah Gibson and Rozenn Guerois (SOAS, University of London)

“Basic concepts and perspectives on micro-parametric approach to Bantu morphosyntax [interim]”

Bostoen, Koen (Gent University) “Micro-variation and historical reconstruction in the West-Coastal Bantu languages”

Gastor Mapunda (University of Dar es Salaam)

“An Account of Contact-Induced Language Instability in the Tanzanian Ngoni Language”

All members & Discussants:

Kumiko MIYAZAKI (State University of Zanzibar), Sayaka KUTSUKAKE (Osaka University)

Questions and Answers, Discussion

Yuko ABE (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) Closing remarks.

3月4日 “Workshop based on Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list”

3月5日 “Workshop based on Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list”

使用言語：英語

共催： 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

2017年3月10日 (金)

国際シンポジウム “Language Documentation and Corpus Linguistics”

1. 塩原朝子 (AA 研所員) はじめに
 2. Nicholas Evans (オーストラリア国立大学) “Do grammars do best what speakers did most: the Social Cognition Parallel Interview Corpus (SCOPIC) cross-linguistic corpus on social cognition in grammar”
 3. Stefan Schnell (メルボルン大学) “Conditions on object agreement and pronominalisation – a corpus-based typological study”
 4. Sonja Riesberg (AA 研共同研究員, オーストラリア国立大学, ケルン大学) “Cross-corpus annotation - a report from the ongoing Three Participant-Project”
 5. I Wayan Arka (AA 研共同研究員, AA 研客員准教授, オーストラリア国立大学) “On the pedagogical literacy for local (endangered) languages: lessons learned from Indonesia”
- ディスカッション

使用言語：英語

共催： 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

3月14日 (火)・15日 (水)

フィールド言語学ワークショップ

テクニカル・ワークショップ：連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」【公開】

講師：Sonja Riesberg 博士 (オーストラリア国立大学/ケルン大学/AA 研共同研究員)

1. データアノテーションソフト ELAN (講義および実習)
2. フィールド言語学の手法：フィールドで話者から調査・研究目的に沿ったデータを引き出す方法 (講義)

3月14日 1. 10:30-12:00. 講義：ソフトウェア ELAN～機能と使用法の概略
2. 13:00-16:00. 実習：ELAN

3月15日 1. 10:30-12:00. 講義：フィールド言語学の手法～目的に沿ったデータを引き出す方法
2. 13:00-16:00. 各自のデータに対する ELAN を用いたアノテーション作業と講師への質問・相談

使用言語：英語

主催： 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」

後援：AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

場所：アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディアセミナー室(304)

3月21日 (火)・22日 (水)

フィールド言語学ワークショップ：第11回 文法研究ワークショップ：講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型～アノテーションシステム GRAID を用いて～」【公開】

講師：Stefan Schnell 博士 (メルボルン大学ポスドク研究員)

3月21日 1. 10:30-12:00 講義：指示方略の選択と情報構造・イベント構造との相互作用に関する諸問題の紹介

2. 13:30-15:00 実習：アノテーションシステム GRAID の紹介

3. 15:15-16:30 実習：参加者自身の調査データに GRAID アノテーションを付与

3月22日 1. 10:30-12:00 講義：一致システムの類型論・一致システムの歴史的発展

2. 13:30-15:00 実習：GRAID を用いて一致システムの歴史的発展を調べる

3. 15:15-16:30 実習：参加者自身の調査データに GRAID アノテーションを付与

使用言語：英語

主催： 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする
循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」
後援： AA 研基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
場所： アジア・アフリカ言語文化研究所 マルチメディアセミナー室 (304)

II-3.3.3 科学研究費等によるその他の研究活動

所属等が代表者の科学研究費補助金の研究分担者と交付（予定）金額（直接経費のみ 単位：千円）
基盤研究（A） 一般

研究代表者： 峰岸 真琴
課題番号： 25244017
課題名： コーパスに基づく談話の結束性の研究
研究分担者： 岡野賢二, 川口裕司, 長屋尚典, 川上茂信, 鈴木玲子, 降幡正志, 藤縄康弘, 野元裕樹,
黒沢直俊, 加藤晴子
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)
交付予定額： 4,900 千円

研究代表者： 芝野 耕司
課題番号： 26240051
課題名： 大規模会話コーパスに基づくラーニングマイニングの深化とテーラーメイド日本語教育
研究分担者： 藤村知子, 大津友美, 佐野洋, 藤森弘子, 望月源, 鈴木美加
期間（年度）： 2014(H26)～2017(H29)
交付予定額： 6,600 千円

研究代表者： 近藤 信彰
課題番号： 15H01895
課題名： イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として
研究分担者： 高松洋一, 秋葉淳, 小笠原弘幸, 二宮文子, 清水和裕, 真下裕之, 後藤裕加子
期間（年度）： 2015(H27)～2019(H31)
交付予定額： 6,300 千円

基盤研究（A） 海外学術調査

研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 25257002
課題名： 東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究
研究分担者： 西井涼子, 福島康博, 富沢寿勇, 塩谷もも
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)
交付予定額： 5,900 千円

研究代表者： 黒木 英充
課題番号： 25257003
課題名： レバノン・シリア移民の拡張型ネットワーク—自己多面化と空間構想力
研究分担者： 鈴木茂, 真島一郎, 飯塚正人
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)
交付予定額： 7,200 千円

基盤研究（B） 一般

研究代表者： 高松 洋一
課題番号： 25284132
課題名： イスラーム圏におけるイラン式簿記術の成立と展開
研究分担者： 近藤信彰

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)
交付予定額： 2,600 千円

研究代表者： 錦田 愛子
課題番号： 26283003
課題名： アラブ系移民／難民の越境移動をめぐる動態と意識：中東と欧州における比較研究
研究分担者： 高岡豊，濱中新吾，溝渕正季
期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 2,600 千円

研究代表者： 佐藤 大和
課題番号： 26284057
課題名： 超文節素の動態形式に基づくアクセント言語と声調言語の対照研究
研究分担者： 峰岸真琴，益子幸江，遠藤光暁，鈴木玲子，降幡正志，岡野賢二，春日淳
期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 2,900 千円

研究代表者 星 泉
課題番号： 15H03203
課題名： チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂
研究分担者： 平田昌弘，海老原志穂，別所裕介
期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
交付予定額： 4,500 千円

研究代表者： 荒川 慎太郎
課題名： 「方向接辞」からみたチベット・ビルマ語系言語の諸相
課題番号： 16H03414
研究種目： 基盤研究（B）
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
研究分担者： 倉部慶太，白井聡子
交付予定額： 3,700 千円

研究代表者 中見 立夫
課題番号： 16H03462
課題名： “帝国”周縁部における国勢調査・人口調査の比較研究
研究分担者： 野田仁，青木雅浩
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 4,100 千円

研究代表者 陶安 あんど
課題番号： 16H03487
課題名： 最新史料に見る秦・漢法制の変革と帝制中国の成立
期間（年度）： 2016(H28)～2020(H32)
交付予定額： 3,800 千円

基盤研究（B） 海外学術調査

研究代表者： 新谷 忠彦
課題番号： 15H05154
課題名： 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明
研究分担者： 山田敦士
期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
交付予定額： 1,900 千円

研究代表者 呉人 徳司

課題番号： 15H05155
課題名： 北東ユーラシア諸言語の語形成に関する地域類型的研究
研究分担者： 風間伸次郎, 江畑冬生
期間(年度)： 2015(H27)～2018(H30)
交付予定額： 3,100 千円

研究代表者 小田 淳一
課題番号： 16H05671
課題名： インド洋フランス語系クレオール民話の口演の研究
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,700 千円

研究代表者 渡辺 己
課題番号： 16H05672
課題名： 語の統合度と文の相関関係に関する研究—形態法の異なる言語の比較対照をとおして—
研究分担者： 児倉徳和, 山越康裕, 沈力, 清澤香
期間(年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 5,000 千円

基盤研究(C) 一般

研究代表者： 床呂 郁哉
課題番号： 25370936
課題名： スルー海域世界を中心とする真珠のグローバリゼーションに関する文化人類学的研究
期間(年度)： 2013(H25)～2017(H29)
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 伊藤 智ゆき
課題番号： 26370442
課題名： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究
期間(年度)： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 阿部 優子
課題番号： 26370477
課題名： タンガニカ湖周辺の人々の異動と言語接触に関する研究
期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 外川 昌彦
課題番号： 25370750
課題名： 近代日本のアジア認識とインド—岡倉天心とインド知識人の交流から
期間(年度)： 2015(H27)～2016(H28)
交付予定額： 204 千円

研究代表者： 齋藤 久美子
課題番号： 25370825
課題名： オスマン朝アジア境域のフロンティア社会—アナトリア南東部の地域史の解明を目指して
期間(年度)： 2015(H27)～2016(H28)
交付予定額： 241 千円

研究代表者： 細谷 幸子
課題番号： 15K01892
課題名： イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶：障害者の生きる権利をめぐる
研究分担者： 松永 佳子

- 期間（年度）： 2015(H27)～2016(H28)
 交付予定額： 150 千円
- 研究代表者 栗原 浩英
 課題番号： 15K01865
 課題名： ベトナム・中国間境域における協力／対立と国家関係の連動性に関する研究
 期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 900 千円
- 研究代表者： 塩原 朝子
 課題番号： 15K02472
 課題名： Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究
 期間（年度）： 2015(H27)～2019(H31)
 交付予定額： 1,000 千円
- 研究代表者 中山 俊秀
 課題番号： 15K02473
 課題名： スートカ語における統語構造の特性―節と節結合の連関の中で
 研究分担者： 中山 久美子
 期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 1,100 千円
- 研究代表者 中山 久美子
 課題番号： 15K02509
 課題名： スートカ語アハウザット方言の統合テキストデータベースの構築
 研究分担者： 中山 俊秀
 期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 1,200 千円
- 研究代表者 石川 博樹
 課題番号： 15K02888
 課題名： 植民地期 PALOP における主食用作物栽培とその社会的影響に関する研究
 期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 1,000 千円
- 研究代表者： 野田 仁
 課題番号： 15K02914
 課題名： 露清帝国の西方境界における紛争と秩序形成
 期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)
 交付予定額： 700 千円
- 研究代表者： 河合 香吏
 課題番号： 15K03034
 課題名： 共鳴する「五感」：東アフリカ牧畜民における知覚の共同性に関する人類学的研究
 期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)
 交付予定額： 900 千円
- 研究代表者： 福島 康博
 課題番号： 16K01974
 課題名： イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究：東南アジアの例
 期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
 交付予定額： 1,200 千円
- 研究代表者： 勝畑 冬実
 課題番号： 16K02177
 課題名： エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

交付予定額： 1,200 千円

研究代表者： 外川 昌彦

課題番号： 16K02602

課題名： 岡倉天心とタゴールの反響するアジアへのまなざし—植民地主義をめぐる日印の比較研究

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

交付予定額： 1,300 千円

研究代表者： 品川 大輔

課題番号： 16K02630

課題名： 言語ドキュメンテーションに基づくバントゥ諸語のミクロな類型的多様性の探究

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

交付予定額： 1,500 千円

研究代表者： 渡辺 己

課題番号： 16K02660

課題名： スライアモン・セイリッシュ語の焦点構文に関する研究

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

交付予定額： 1,400 千円

研究代表者： 太田 信宏

課題番号： 16K03075

課題名： 植民地インドのマイスール藩王国における文芸と王権

期間（年度）： 2016(H28)～2019(H31)

交付予定額： 600 千円

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 小田 淳一

課題番号： 15K12831

課題名： 映像表現と古典的修辞技法との対応関係の情報学的分析

研究分担者： 石井 満 尚美学園大学 芸術情報学部 准教授

期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)

交付予定額： 500 千円

若手研究（A）

研究代表者： 佐久間 寛

課題番号： 15H05385

課題名： サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築

期間（年度） 2015(H27)～2018(H30)

交付予定額： 1,800 千円

若手研究（B）

研究代表者： 姜 英淑

課題番号： 25770166

課題名： 韓国語諸方言におけるN型アクセントの実態調査研究

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

交付予定額： 400 千円

研究代表者： 古谷 伸子

課題番号： 25770303

課題名： タイにおける医療システムの再編と民間治療師実践の変容に関する人類学的研究

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

交付予定額： 600 千円

研究代表者： 福島 康博

課題番号： 25870206

課題名： イスラーム金融におけるイスラーム性形成の実証研究：マレーシアの事例

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

交付予定額： 259 千円

研究代表者： 大塚 行誠

課題番号： 26770136

課題名： インド北東部におけるラルテー語の記述言語学的な研究

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

交付予定額： 800 千円

研究代表者： 児倉 徳和

課題番号： 26770144

課題名： 記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

交付予定額： 900 千円

研究代表者： 山越 康裕

課題番号： 26770146

課題名： 中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

交付予定額： 500 千円

研究代表者： 近藤 洋平

課題番号： 26870123

課題名： 婚姻法の法制史的考察によるイバード派イスラーム法学派の形成と展開の研究

期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)

交付予定額： 900 千円

研究代表者： 海老原 志穂

課題番号： 26770137

課題名： 東西方言から見たチベット語の基層の研究

期間（年度）： 2014(H26)～2017(H29)

交付予定額： 700 千円

研究代表者： 苅谷 康太

課題番号： 15K16578

課題名： 18-19 世紀の西アフリカ・ハウサランドにおけるムスリムと非ムスリムの境界

期間（年度）： 2015(H27)～2018(H30)

交付予定額： 800 千円

研究代表者： 吉村 大樹

課題番号： 15K16740

課題名： アゼルバイジャン語における疑問接語の生起一と生起条件に関する研究

期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)

交付予定額： 1,000 千円

研究代表者： 池田 昭光

課題番号： 15K16895

課題名： レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

期間（年度） 2015(H27)～2018(H30)

交付予定額： 800 千円

研究代表者： 八木 堅二
課題番号： 16K16820
課題名： 中国語北方方言における韻律構造の変化課程
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,300 千円

国際共同研究加速基金（国際共同研究強化）

研究代表者： 錦田 愛子
課題番号： 16KK0050
研究課題名： ドイツのアラブ系移民／難民の移動と受け入れに関する学際的研究
期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 11,300 千円

研究代表者： 伊藤 智ゆき
課題番号： 15KK0041
研究課題： 韓国語慶尚道方言のアクセント研究（国際共同研究強化）
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 9,400 千円

研究活動スタート支援

研究代表者： 岡田 一祐
課題番号： 15H05981
課題名： 明治期国語教科書と平仮名初習者の筆写資料とを連関させた平仮名字体史研究
期間（年度）： 2015(H27)～2016(H28)
交付予定額： 400 千円

研究代表者： 平田 秀
課題番号： 16H06784
課題名： 紀伊半島熊野灘沿岸地域諸方言のアクセント研究
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 細田 和江
課題番号： 16H06783
課題名： イスラエル／パレスチナにおけるアラブ性の探求—包括的な現代文化研究の基盤形成
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,200 千円

研究成果公開促進費 学術図書 ⑤広領域

著者： 河合 香吏 ほか17名
課題番号： 15HP6007
刊行物の名称： Practices, Conventions and Institutions: The Evolution of Human Sociality
出版社名： 一般社団法人京都大学学術出版会 和文・欧文の別：欧文 判型：B5 変型 頁数：512 頁
期間（年度）： 2015(H27)～2016(H28)
交付予定額： 2,500 千円

著者： 床呂 郁哉 ほか21名
課題番号： 16HP6005
刊行物の名称： An Anthropology of Things: The Dynamics of Human and Non-human Interactions
出版社名： Trans Pacific Press 社&京都大学学術出版会 和文・欧文の別：欧文 判型：B5 頁数：416 頁
期間（年度）： 2016(H28)～2017(H29)
交付予定額： 8,300 千円

著者： 姜 英淑
課題番号： 16HP5063
刊行物の名称： 韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究 (ISBN: 978-4-585-28031-6)
出版社名： 勉誠出版 和文・欧文の別： 和文 判型： A5 判・上製 頁数： 256 頁
期間 (年度)： 2016(H28)
交付予定額： 900 千円

特別研究員奨励費

研究代表者： 倉部 慶太 特別研究員(PD)
課題番号： 14J02254
課題名： 北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション
期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 1,200 千円

研究代表者： 岩本 佳子 特別研究員(PD)
課題番号： 15J03916
課題名： オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明
期間 (年度)： 2015(H27)～2018(H30)
交付予定額： 600 千円

研究代表者： 伊藤 雄馬 特別研究員(PD)
課題番号： 16J00729
課題名： 少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,200 千円

研究代表者： 高尾 賢一郎 特別研究員(PD)
課題番号： 16J01130
課題名： イスラームと社会統治に関する研究 : ヒスバ制度を事例に
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,400 千円

研究代表者： 杉江 あい 特別研究員(PD)
課題番号： 16J05363
課題名： イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,400 千円

東京外国語大学の AA 研以外の部局所属研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧と交付予定金額 (直接経費のみ 単位：千円)

基盤研究 (B) 一般

研究代表者： 藤森 弘子 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授
課題番号： 26284070
課題名： アカデミック日本語能力到達基準の策定とその妥当性の検証
研究分担者： 芝野耕司, 藤村知子, 伊集院郁子, 伊東祐郎, 工藤 嘉名子, 鈴木 美加
期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 3,200 千円

研究代表者： 望月 源 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 准教授
課題番号： 15H02794
課題名： 大規模会話コーパスの FS2vec 処理による CEFR Can-do 言語教材の開発
研究分担者： 芝野耕司, 佐野洋, 藤村知子

期間（年度）：2015(H27)～2018(H30)

交付予定額：2,800 千円

研究代表者：水野 善文 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号：16H03410

研究課題名：南アジア多言語社会における複合文化のなかの文学伝承

研究分担者：太田信宏, 藤井守男, 萩田博, 丹羽京子

期間（年度）：2016(H28)～2019(H31)

交付予定額：3,300 千円

研究代表者：藤村 知子 東京外国語大学大学院国際日本学研究院 教授

課題番号：16H03432

課題名：大規模字幕コーパスを利用した Can-do リスト対応型 e ラーニング教材の研究

研究分担者：芝野耕司, 望月源, 佐野 洋, 藤森 弘子

期間（年度）：2016(H28)～2019(H31)

交付予定額：2,300 千円

研究代表者：青山 弘之 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号：15H03132

研究課題名：「アラブの春」後の中東における非国家主体と政治構造

研究分担者：錦田愛子, 末近浩太, 山尾大

期間（年度）：2015(H27)～2017(H29)

交付予定額：3,400 千円

基盤研究 (B) 海外学術調査

研究代表者：風間 伸次郎 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号：15H05153

研究課題名：アルタイ諸言語の語彙の総合的集成

研究分担者：児倉徳和, 山越康裕

期間（年度）：2015(H27)～2019(H30)

交付予定額：2,400 千円

基盤研究 (C) 一般

研究代表者：益子 幸江 東京外国語大学大学院総合国際学研究院 教授

課題番号：26370443

研究課題名：文イントネーションの型についての言語間対照研究

研究分担者：峰岸真琴, 佐藤大和, 降幡正志, 岡野賢二

期間（年度）：2014(H26)～2016(H28)

交付予定額：1,000 千円

他大学の研究代表者の科学研究費補助金について、AA 研所員等が研究分担者となっている課題一覧と交付予定金額（直接経費のみ 単位：千円）

基盤研究 (A) 一般

研究代表者：西尾 哲夫 国立民族学博物館・研究戦略センター・教授

課題番号：24242013

課題名：アラブ世界の都市部中流層文化とアラビアンナイト —エジプト系伝承形成の謎を解く

研究分担者：小田淳一, 杉田英明, 中道静香, 青柳悦子, 鷺見朗子, 永崎研宣, 菅瀬晶子, 岡本尚子, 相島葉月

期間（年度）：2012(H24)～2016(H28)

交付予定額：7,200 千円

研究代表者：武内 紹人 神戸市外国語大学・外国語学部・教授

課題番号： 24242015
課題名： チベット語最古層の形成とその構造推移 —データベース解析による辞書と歴史文法の編纂
期間（年度）： 2012(H24)～2016(H28)
研究分担者： 星泉, 長野泰彦, 白井聡子, 池田巧, 西田愛
交付予定額： 4,100 千円

研究代表者： 長澤 榮治 東京大学東洋文化研究所 教授
課題番号： 16H01899
研究課題名： イスラーム・ジェンダー学構築のための基礎的総合的研究
研究分担者： 黒木英充, 村上薫, 松永典子, 後藤絵美, 岩崎えり奈, 服部美奈, 岡真理, 白杵陽, 山岸智子, 嶺崎寛子
期間（年度）： 2016(H28)～2019(H31)
交付予定額： 9,500 千円

研究代表者： 大沼 保昭 学習院女子大学国際文化交流学部 客員研究員
課題番号： 25245029
研究課題名： 多極化する世界への文際的歴史像の探求
研究分担者： 黒木英充, 平野聡, 渡辺浩, 木畑洋一, 三ツ松誠, 豊田哲也, 姜東局, 水谷智, 中溝和弥, 三牧聖子, 浅野豊実, 長縄宣博, 平野千果子, 茂木敏夫, 佐々木閑, 篠田英朗
期間（年度）： 2013(H28)～2016(H29)
交付予定額： 9,100 千円

研究代表者： 石井 香世子 立教大学社会学部 准教授
課題番号： 16H02737
課題名： アジアの越境する子どもたちとトランスナショナル階層社会の出現に関する実証研究
研究種目： 基盤研究 (A)
研究分担者： 床呂郁哉, 荻巣崇世, 酒井千絵, 陳天璽, 岩井美佐紀, 横田祥子, 工藤正子
期間（年度）： 2016(H28)～2019(H31)
交付予定額： 7,200 千円

基盤研究 (A) 海外学術調査

研究代表者： 森 雅秀 金沢大学人間科学系 教授
課題番号： 25257007
課題名： 国際標準となるチベット美術の情報プラットフォームの構築と公開
期間（年度）： 2013(H25)～2017(H29)
研究分担者： 高島淳, 乾仁志, 高田良宏, 高本康子
交付予定額： 6,000 千円

基盤研究 (B) 一般

研究代表者： 久保 智之 九州大学人文科学研究科(研究院) 教授
課題番号： 24320079
研究課題名： シベ語の体系的文法と辞書の作成
研究分担者： 児倉徳和
期間（年度）： 2012(H24)～2016(H28)

研究代表者： 三浦 徹 公益財団法人東洋文庫 研究員
課題番号： 25284141
課題名： ワクフ（イスラーム寄進制度）の国際共同比較研究
研究分担者： 近藤信彰, 大河原知樹, 守川知子, 林佳世子, 永田雄三, 磯貝健一
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)
交付予定額： 2,400 千円

研究代表者： 福嶋 伸洋 共立女子大学文芸学部 准教授

課題番号： 15H03200
研究課題名： ポスト世界文学に向けた比較詩学的共同研究の基盤構築
研究分担者： 細田和江, 中村隆之, 中丸禎子, 鶴戸聡, 三枝大修, 奥彩子, 古川哲
期間 (年度)： 2015(H27)～2018(H30)
交付予定額： 3,400 千円

研究代表者： 桑原 尚子 早稲田大学 法学大学院
課題番号： 16H03538
研究課題名： イスラーム圏における法現象の分析枠組構築に関する学際的研究
研究分担者： 飯塚正人, 佐藤やよひ, 大河内美紀, 青柳かおる, 吉川 孝, 辻上 奈美江
期間 (年度)： 2016(H27)～2018(H30)
交付予定額： 4,400 千円

研究代表者： 藤代 節 神戸市看護大学看護学部 教授
課題番号： 16H03417
課題名： 「混成言語」から見なおすユーラシアの諸言語—言語接触と言語形成の類型を探る—
研究分担者： 澤田英夫, 片山修, 岸田文隆, 岸田泰浩, 菅原睦, 早津恵美子
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 5,100 千円

研究代表者： 山中 弘 筑波大学人文社会系 教授
課題名： ツーリズムにおける「スピリチュアル・マーケット」の展開の比較研究
課題番号： 16H03329
研究分担者： 外川昌彦, 岡本亮輔, 別所裕介, 安田慎, 鈴木涼太郎, 門田岳久
期間 (年度)： 2016 (H28)～2018(H30)
交付予定額： 2,800 千円

基盤研究 (B) 海外学術調査

研究代表者： 鶴戸 聡 鹿児島大学法文教育学域法文学系 准教授
研究課題名： アラブ＝ベルベル文学の比較地域文化的研究体制の構築
課題番号： 26300021
研究種目： 基盤研究 (B)
研究分担者： 細田和江, 二村淳子, 石川清子, 酒井佑輔, 青柳悦子, 武内旬子, 柳谷あゆみ, 茨木博史
期間 (年度)： 2014(H27)～2017(H29)
交付予定額： 3,000 千円

研究代表者： 松井 太 大阪大学文学研究科 准教授
課題番号： 26300023
研究課題名： 多言語資料の比較分析による敦煌・トゥルファン文献研究の再構築と統合
研究分担者： 荒川慎太郎, 岩本篤志, 橘堂晃一, 佐藤貴保, 赤木崇敏, 岩尾一史, 山本明志, 坂尻彰宏
期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 4,030 千円

研究代表者： 櫻井 義秀 北海道大学文学研究科 教授
課題名： アジアの政教関係と新しい公共宗教論構築の地域比較研究
課題番号： 16H05712
研究分担者： 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高
期間 (年度)： 2016 (H28)～2018(H30)
交付予定額： 3,400 千円

基盤研究 (C) 一般

研究代表者： 中村 美奈子 お茶の水女子大学基幹研究院 准教授
課題番号： 26350269

課題名： タンジブルインタフェースを用いたダンスのシミュレーション
研究分担者： 芝野耕司
期間（年度）： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 1,100 千円

研究代表者： 中谷 哲弥 奈良県立大学 教授
課題番号： 15K01958
課題名： 南アジア地域の持続可能な観光とコミュニティ・ベースド・ツーリズムに関する比較研究
研究分担者： 外川昌彦, 川田進, 矢野秀武, 藤野陽平, 高橋沙奈美, 滝澤克彦, 塚田穂高
期間（年度）： 2015 (H27)～2017(H29)
交付予定額： 1,100 千円

研究代表者： 佐藤 貴保 盛岡大学文学部 准教授
課題番号： 15K02906
課題名： 西夏王国の人名に関する研究—多民族国家における文化交流・融合の視点から—
研究分担者： 荒川 慎太郎
期間（年度）： 2015(H27)～2017(H29)
交付予定額： 1,300 千円

研究代表者： 包 聯群 大分大学経済学部 准教授
課題番号： 16K02686
研究課題名： 中国黒龍江省における危機に瀕するダグル語の社会言語学的研究
研究種目： 基盤研究 (C)
研究分担者： 呉人徳司
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

基盤研究 (S)

研究代表者： 松田 素二 京都大学文学研究科 教授
課題番号： 16H06318
研究課題名： 「アフリカ潜在力」と現代世界の困難の克服：人類の未来を展望する総合的地域研究
研究分担者： 椎野若菜, 品川大輔, 武内進一, 阿部利洋, 太田至, 大山修一, 落合雄彦, 平野美佐, 宮地歌織, 遠藤貢, 重田眞義, 高橋基樹, 竹村景, 永原陽子, 峯陽一, 目黒紀夫, 山越言, 山田肖子
期間（年度）： 2016(H28)～2020(H32)
交付予定額： 37,200 千円

挑戦的萌芽研究

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授
課題番号： 25540152
課題名： インド古典文献韻律指向検索アーカイブの構築
研究種目： 挑戦的萌芽研究
研究分担者： 芝野耕司
期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

研究代表者： 中谷 英明 関西外国語大学外国語学部 教授
課題番号： 16K12544
課題名： インド古典のフレーズインデックス付き統合アーカイブ構築とフレーズ分析
研究分担者： 芝野耕司
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 800 千円

研究代表者： 野口 靖 東京工芸大学芸術学部 准教授
課題番号： 16K13128
課題名： ケニア都市部における人々の移動史と居住環境に関する民族誌デジタルアーカイブ研究

研究種目： 挑戦的萌芽研究
研究分担者： 椎野若菜
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,600 千円

新学術領域研究

研究代表者： 吉田 憲司 国立民族学博物館文化資源研究センター 教授
課題番号： 16H06281
研究課題名： 地域研究に関する学術写真・動画資料情報の統合と高度化
研究種目： 新学術領域研究
研究分担者： 中山俊秀, 園田直子, 丸川雄三, 高野明彦, 西尾哲夫, 野林篤志, 飯田卓, 卯田宗平, 寺村裕史, 平勢隆郎, 柳澤雅之
期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 2,300 千円

II-4 研究者コミュニティと一般社会に開かれた研究プラットフォームの構築

II-4.1 若手研究者養成プログラム

II-4.1.1 言語研修の実施状況

期間	時間数	講師	研修内容	場所	受講者	修了者
2016年8月16日 (火)～29日(月)	50時間	下地理則, 新永悠人, 仲間博之, 直三男也	琉球語	AA研	11 (4)	11 (4)
2016年8月17日 (水)～9月13日 (火)	100時間	西岡美樹, Rajesh Kumar (ラジェーシ ユ・クマール)	ヒンディー語	AA研	12 (1)	11 (1)

() は東京外国語大学学部・大学院履修生の数

II-4.1.2 フィールド言語学ワークショップ実施状況

1. 文法研究ワークショップ (1件)

第11回 講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型～アノテーションシステム GRAID を用いて」

日時：2017年3月21日(火)～3月22日(水) 10:30～16:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

講師：Stefan Schnell (メルボルン大学ポスドク研究員)

2. テクニカル・ワークショップ (5件)

講演：研究未開発言語のコーパス構築：多様な言語間に見られる対象指示方略の研究への適用を中心に

日時：2016年7月6日(水) 14:30～15:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

講師：Stefan Schnell (メルボルン大学ポスドク研究員)

「Praat を用いた音響音声学的分析の初歩」

日時：2016年10月5日(水) 13:00～17:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

講師：青井隼人 (国立国語研究所・日本学術振興会特別研究員)

「ArcGIS を用いた言語地図作成入門」

日時：2016年12月7日(水) 13:00～17:00

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

講師：海老原志穂 (AA研・ジュニアフェロー)

連続講義「データマネージメントとアーカイブ」

日時：2017年1月16日(月)～1月18日(水) 10:30～16:30

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304号室

講師：Nicholas Thieberger (メルボルン大学, 言語アーカイブ PARADISEC ディレクター)

連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」

日時：2017年3月14日(火)～3月15日(水) 10:30～16:00

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 304 号室
講師：Sonja Riesberg（オーストラリア国立大学, ケルン大学, AA 研共同研究員）

II-4.1.3 中東☆イスラーム関連セミナー実施状況

中東☆イスラーム研究セミナー

期間：2016年12月16日～18日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）マルチメディアセミナー室（306）

内容：博士論文執筆予定者を対象として、受講者による研究発表とそれを受けた議論を通して、研究のいっそうの深化と討論スキルの向上をはかる

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）

協賛：地域研究コンソーシアム

中東☆イスラーム教育セミナー

期間：2016年9月18日～21日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）マルチメディア会議室（304）

内容：大学院生を対象に、中東・イスラーム研究に関する講義などにより知識の幅を広げる

主催：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）

協賛：地域研究コンソーシアム

オスマン文書セミナー

期間：2017年1月7日～8日

場所：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）大会議室（303）

内容：オスマン朝の公文書のうち、マズバタ、マフザル文書を用いた演習形式によるセミナー

主催：基幹研究「中東・イスラーム圏における人間移動と多元的社会編成」

共催：人間文化研究機構地域研究推進事業研究プログラム・イスラーム地域研究東洋文庫拠点／共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

II-4.1.4 文化／社会人類学研究セミナー実施状況

文化／社会人類学研究セミナー

日時：2016年11月6日（日）13:00～19:00

会場：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所（AA 研）301・306 室

共催：2016年度日本文化人類学会次世代育成セミナー

プログラム

第1部 挨拶・講演

開会の挨拶 西井涼子（AA 研）

講演（トーク・セッション）：「抵抗論の現在」

松田素二（京都大学）×小田亮（首都大学東京）

第2部 発表

第1会場 司会 深澤秀夫（AA 研）

・白福英（総合研究大学院大学）

「誰が牧畜民なのか？誰が牧畜民でないのか？：内モンゴル・オラド後旗の事例を中心に」

コメント 栗田博之（東京外国語大学）・河合香吏（AA 研）

・田川夢乃（広島大学大学院）

「フィリピンのグローバル化に関する今日の動態：コールセンター産業に注目して」

コメント 小田亮（首都大学東京）・清水昭俊（AA 研）

- ・ 生駒美樹 (東京外国語大学大学院)
「負債」と「借り」の民族誌：チャをめぐる農家と労働者の関係
コメント 箕曲在弘 (東洋大学)・佐久間寛 (AA 研)

第2会場 司会 西井涼子 (AA 研)

- ・ 山内健太郎 (首都大学東京大学院)
「台風常襲地の災害観に関する一考察：鹿児島県坊津町の事例を中心に」
コメント 林勲男 (国立民族学博物館), 外川昌彦 (AA 研)
- ・ 岡本圭史 (九州大学大学院)
「せめぎ合う霊力：ケニア海岸地方ドゥルマにおけるキリスト教への改宗」
コメント 岡崎彰 (AA 研)・吉田ゆか子 (AA 研)

講評：西井涼子 (AA 研)・深澤秀夫 (AA 研)

閉会の挨拶：西井涼子 (AA 研)

II-4.1.5 短期共同研究員（公募）受け入れ状況

2016年度の採用はなし。

II-4.1.6 大学院教育の現在

大学院総合国際学研究科博士後期課程への AA 研教員の協力

教員名	担当科目	授業題目
飯塚正人	中東言語文化論 アジア歴史文化論Ⅲ	近現代イスラーム研究Ⅰ・Ⅱ
石川博樹	アフリカ歴史文化論	アフリカ歴史文化論
河合香吏	アフリカ歴史文化論	生態人類学
栗原浩英	アジア歴史文化論Ⅱ	中ソ対立の歴史的意義 ／ベトナムをめぐる国際関係
黒木英充	アジア歴史文化論Ⅲ	日本・オスマン関係史
近藤信彰	アジア歴史文化論Ⅲ	近世イランにおけるワクフ文書の研究／近世イランにおけるワクフ文書の研究2
澤田英夫	東南アジア言語論	チベット＝ビルマ系言語の形態統語論に関する論文講読
椎野若菜	アフリカ言語文化論	アフリカ女性の処遇について(1) —土地の権利等に注目して／アフリカ女性の処遇について(2)—ウガンダの事例
芝野耕司	言語基礎論	言語情報学
陶安あんど	アジア歴史文化論Ⅰ	秦漢法制簡牘史料講読演習
高松洋一	アジア歴史文化論Ⅲ	オスマン・トルコ語写本講読
床呂郁哉	文化人類学	文化人類学演習
中見立夫	国際関係論	国際関係史・外交史
中山俊秀	アメリカ言語論	動的体系としての文法をめぐる研究課題を探る
西井涼子	アジア歴史文化論Ⅱ	人類学的思考における生命・身体・情動
錦田愛子	アジア歴史文化論Ⅲ	現代中東政治とパレスチナ／イスラエル
深澤秀夫	文化人類学	現代人類学入門／初期人類学学説史を通して見た社会理論の生成
星泉	言語基礎論	チベット語文語文法記述研究

峰岸真琴	言語基礎論	言語類型論と言語理論Ⅰ・Ⅱ
渡辺己	言語基礎論	言語基礎論
芝野耕司	比較言語文化論	比較言語文化論（リレー講義）
飯塚正人, 石川博樹, 河合香吏, 栗原浩英, 黒木英充, 近藤信彰, 椎野若菜, 陶安あんど, 高松洋一, 床呂郁哉, 西井涼子, 錦田愛子, 深澤秀夫	比較社会論	アジア・アフリカ歴史・人類学研究
飯塚正人, 黒木英充, 近藤信彰, 高松洋一, 錦田愛子	中東言語文化論 アジア歴史文化論Ⅲ	中東☆イスラーム研究セミナー

大学院総合国際学研究科博士前期課程へのAA 研教員の協力

教員名	担当科目	授業題目
飯塚正人	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス基礎2	イスラームの教えと現実
栗原浩英	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス地域研究1/2	ベトナム・中国関係の現状/ 「同志=兄弟」期のベトナムと中国
澤田英夫	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス言語研究1	フィールド語彙データ分析のための形態論
芝野耕司	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス言語研究1/2	言語情報学
陶安あんど	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス地域研究1	簡牘史料を通じてみる秦漢法制史
中山俊秀	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス言語研究2	話し言葉を基盤とした文法体系性の探求
西井涼子	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス実践研究2	人類学的におけるフィールド・サイエンスの 手法と展開
深澤秀夫	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス実践研究1	文化/社会人類学的フィールドワーク入門
峰岸真琴	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス言語研究1/2	タイ語日本語対照研究の基礎Ⅰ/ タイ語日本語対照研究の基礎Ⅱ
渡辺己	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス基礎1	セイリッシュ語文法概説
近藤信彰	アジア・アフリカフィールドサイエ ンス地域研究1	中東☆イスラーム教育セミナー

II-4.1.7 研究機関研究員／特任研究員および日本学術振興会特別研究員

特任研究員

安達 真弓

「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3 Project)

任期：2016(H28).12.1～2019(H31).3.31.

研究主題：ベトナム語，語用論

阿部 優子

「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(Linguistic Dynamics Science 3: LingDy3 Project)

研究主題：バントゥ諸語，記述言語学

任期：2015(H27).4.1～2017(H29).3.31

岡田 一祐

情報資源利用研究センター

任期：2015(H27).9.1～2017(H29).9.30

研究主題：日本語史, 文字史

近藤 洋平

基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」

中東研究日本センター (Japan Center for Middle Eastern Studies, JaCMES)

任期：2015(H27).4.1～2018(H30).8.31

研究主題：宗教学, イスラム学, イバード派

中村 恭子

任期：2013(H25).10.1～2018(H30).9.30

研究主題：美術 (日本画)

平田 秀

情報資源利用研究センター

任期：2016(H28).3.1～2018(H30).3.31

研究主題：日本語の音声・音韻, 日本語アクセント論

研究機関研究員

小山内 優子

任期：2016(H28).12.1～2017(H29).12.31

研究主題：中期朝鮮語文法, 朝鮮語史

坪井 祐司

任期：2014(H26).5.1～2018(H30).3.31

研究主題：マレーシアにおけるエスニシティ形成に関する近代史

日本学術振興会特別研究員

伊藤 雄馬 (峰岸 真琴)

任期：2016(H28).4.1～2019(H31).3.31

研究主題：少数言語ムラブリ語に起きた方言分岐の諸相の解明

倉部 慶太 (澤田 英夫)

任期：2014(H26).4.1～2017(H29).3.31

研究主題：北部ビルマにおけるジンポー語危機方言の調査とドキュメンテーション

岩本 佳子 (高松 洋一)

任期：2015(H27).4.1～2018(H30).3.31

研究主題：オスマン帝国における免税特権保有者と統治施策の解明

杉江 あい (外川 昌彦)

任期：2016(H28).4.1～2019(H31).3.31

研究主題：イスラームのトランスナショナル・ネットワークとバングラデシュ村落社会の変動

高尾 賢一郎 (飯塚 正人)

任期：2016(H28).4.1～2019(H31).3.31

研究主題：イスラームと社会統治に関する研究：ヒスバ制度を事例に

II-4.2 国内連携研究活動

II-4.2.1 国内研究者受け入れ（フェロー等）

フェロー

梅川 通久（うめかわ みちひさ）

研究主題：量的手法による東南アジア大陸部における社会的多階層構造の総合的分析法の確立

研究期間：2015.9.1～2018.8.31

受入教員：中山 俊秀

研究成果：

1. 論文（共著）：「早稲田大学人間科学学術院玉城絵美助教インタビュー」（相馬りか，新村和久，梅川通久，佐野幸一共著），*STI Horizon*, 3(1), 2017.3. 13-16.
2. ポスター講演：「博士人材のキャリアパスの把握と可視化に向けた取組」，RA 協議会「第2回年次大会 福井市地域交流プラザ・福井県民ホール」，2016.9.1-2. 福井市地域交流プラザ・福井県民ホール.

岡崎 彰（おかざき あきら）

研究主題：アフリカを中心とするポピュラー・アートの社会人類学的研究

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：深澤 秀夫

奥田 統己（おくだ おさみ）

研究主題：アイヌ語資料のアーカイブス化準備およびアイヌ語の記述的研究

研究期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：山越 康裕

研究成果：

1. 論文：「神謡と叙情歌の韻律的志向性—沙流地方の語り手の録音から」『北海道博物館アイヌ民族文化研究センター研究紀要』2, 2017.3. 33-40. (査読有)
2. 論文：「アイヌ叙事詩における英雄像」『口承文芸研究』40, 2017.3. 179-185. (査読有)
3. 口頭発表：「アイヌ叙事詩における英雄像」，第40回日本口承文芸学会大会，2016.6.5. 北海道大学.
4. 口頭発表：「アイヌ語の再帰・中相とアスペクトに関する予備的観察」科研費基盤研究(C)「通言語的観点から分析する逆使役関連形態法の広がり」2016年度研究会，2016.7.30. 札幌学院大学.
5. 講演：「アイヌ口頭文芸の「語りかた」をさぐる」，北海道博物館「ちゃれんが講座」，2016.10.30. 北海道博物館.
6. 口頭発表：「アイヌ語研究の現状と展望」，東京外国語大学語学研究所 Luncheon Linguistics, 2016.12.21. 東京外国語大学.

押川 文子（おしかわ ふみこ）

研究主題：現代インドの社会変化

研究期間：2015.4.1～2018.3.31

受入教員：太田 信宏

研究成果：

口頭発表：「大都市低所得層～中間層の家族：インタビュー調査を通して」、日本南アジア学会第29回全国大会，2016.9.25. 神戸市外国語大学。

小副川 琢（おそえがわ たく）

研究主題：現代レバノン・シリア関係の展開

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

研究成果：

1. 口頭発表：“Regional Impact of the Syrian Civil War: With a Focus on the 'Islamic State', the Party of God, and the Israel Defense Forces”，明治大学国際武器移転史研究所: *International Workshop: Arms Transfer, Regional Conflicts, and Refugee Crisis in the Balkans and Middle East*, 2016.7.2. 明治大学。
2. 口頭発表：「シリア和平交渉と課題」，日本国際問題研究所「中東におけるイスラーム過激派の動向と平和構築」，2016.8.8. 日本国際問題研究所。

加藤 博（かとう ひろし）

研究主題：近現代におけるエジプト社会経済変容

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

川上 泰徳（かわかみ やすのり）

研究主題：ベイルートのパレスチナ難民の政治社会意識の変遷

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：飯塚 正人

研究成果：

1. 著書：『「イスラム国」はテロの元凶ではない』，2016.12. 集英社，256 pp.
2. 共著書：『パレスチナを知るための60章』（白杵 陽編），2016.4. 明石書店，394 pp.
3. 論文：「シリアの市民ジャーナリズム 驚嘆すべき命がけの闘い」『月刊 *Journalism*』 no.315, 2016.8.
4. 論文：「アラブ世界で広がる反サイバー犯罪法 犯罪でなく市民を取り締まる政府の武器」『月刊 *Journalism*』 no.319, 2016.12.
5. 講演：「中東のいまと日本の私たち，パレスチナ子どものキャンペーン「パレスチナ講演会」，2017.3.19. 東京都新宿区戸塚地域センター。
6. 講演：「シリア内戦，イスラム国の行方と日本の関わり」，長崎県立大学新聞会：長崎県立大学新聞会創設50周年記念講演会，2017.3.4. 長崎県立大学佐世保校。
7. 報道：ニューズウィーク日本版「エジプトの人権侵害を問わない日本のメディア」，2016.4.8.
8. 報道：ニューズウィーク日本版「イラク政府のフェルージャ奪還「成功」で新たな火種」，2016.6.26.
9. 報道：ニューズウィーク日本版「ダッカ事件「私は日本人だ」の訴えを無にするな」，2016.7.7.
10. 報道：ニューズウィーク日本版「トルコは「クーデター幻想」から脱却できるか」，2016.7.18.
11. 報道：ニューズウィーク日本版「【解説】トルコのシリア越境攻撃—クルドをめぐる米国との確執」，2016.9.5.
12. 報道：ニューズウィーク日本版「トランプの「大使館移転」が新たな中東危機を呼ぶ？」，2017.1.18.
13. 報道：ニューズウィーク日本版「安倍トランプ蜜月の先にある中東の3つの課題」，2017.2.17.
14. 報道：朝日新聞 WEBRONZA 「連載 トランプ新政権で中東はどうなる 1～4」，2017.1.24, 1.26, 2.2, 2.7.
15. 報道：朝日新聞 WEBRONZA 「アレッポ陥落後のシリアはどうなる？」，2016.12.22.

姜 英淑（カンヨンスク）

研究主題：韓国語諸方言におけるアクセントの記述及び理論研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：伊藤 智ゆき

研究成果：

1. 著書：『韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究』, 2017.3. 勉誠出版, 258 pp.
2. 論文：「韓国の寧越方言におけるアクセント性質—上東邑を中心に—」『言語文化研究』36 卷1号, 2016.9. 145-163.
3. 論文：「韓国語の寧越郡上東邑方言のアクセント資料」『言語文化研究』36 卷1号, 2016.9. 165-197.
4. 講演：「韓国語釜山方言における複合動詞のアクセント」, 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」, 共催「Japanese and Korean accent: diachrony, reconstruction, and typology」, 2016.7.2-7.3. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
5. 口頭発表：「韓国語釜山方言の接尾辞による派生語形成のアクセント」, 日本言語学会「第152回大会」, 2016.6.25-26. 慶応義塾大学.

競争的研究資金：

研究代表者：姜 英淑

課題番号：25770166

研究種目：若手研究 (B)

課題名：韓国語諸方言におけるN型アクセントの実態調査研究

期間 (年度)：2013(H25)～2016(H28)

交付予定額：400 千円

所属機関：東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所

課題番号：16HP5063

研究種目：研究成果公開促進費 学術図書 ⑤広領域

刊行物の名称：韓国語慶尚道諸方言のアクセント研究 (ISBN: 978-4-585-28031-6)

著者：姜 英淑

交付予定額：900 千円 和文・欧文の別：和文 判型：A5 判・上製 頁数：256 頁

出版社名：勉誠出版

木俣 美樹男 (きまた みきお)

研究主題：インド亜大陸の雑穀農耕文化の起源と展開過程

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：太田 信宏

研究成果：

1. 論文：『明日の小菅村を探る』～持続可能な地域社会の再検討』『民族植物学ノオト』10, 2017.1. 42-48.
2. 論文：「欧米系諸国の雑穀見聞録」『民族植物学ノオト』10, 2017.1. 58-61.
3. 論文：「自分で日本国憲法を考える」『民族植物学ノオト』10, 2017.1. 62-107.
4. 論文：「嗜好品」『植物学の百科事典』(日本植物学会編), 2016.6. 732-733.
5. 報道：やまゆり倶楽部<キャッチアップ BeGREEN>「[食農×環境教育：スペシャルインタビュー] 「100年先の文明社会が求める暮らし方とは何か。我々が「自然と共に生きる智慧」が必要だ。」, 2017 Spring.

栗林 均 (くりばやし ひとし)

研究主題：モンゴル文語・満州文語辞書の電子化利用に関する研究

研究期間：2013.4.1～2017.3.31

受入教員：町田 和彦

研究成果：

1. 著書：『土族語・漢語統合辞典』, 2016.12. 東北大学東北アジア研究センター, 596 pp.

2. 著書：『「東郷語詞彙」「新編東部裕固語詞彙」蒙古文語索引』, 2017.1. 東北大学東北アジア研究センター, 268 pp.
3. 著書：『オイラート文語三種統合辞典』, 2017.2. 東北大学東北アジア研究センター, 582 pp.
4. 口頭発表：「モンゴル語の伝統的字母表チャガン・トルゴイの系譜」, 日本モンゴル学会 2016 年度春季大会, 2016.5.21. 東北大学.

古谷 伸子 (こや のぶこ)

研究主題：タイにおける民間治療師実践の変容と医療システムの再編に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：西井 涼子

研究成果：

1. 著書：『大学生のための異文化・国際理解—差異と多様性への誘い』(高城玲編), 2017.1, 丸善出版, 204 pp.
2. 口頭発表：「民間医療復興における地域的特殊性とその要因について—東北タイ・サコンナコン県の事例を中心に」, 日本タイ学会「日本タイ学会第 18 回研究大会」, 2016.7.3, 九州大学西新プラザ.
3. 口頭発表：「タイの民間医療をめぐる法的状況と治療師の実践」, 白山人類学研究会「2016 年度第 6 回白山人類学研究会」, 2017.1.16, 東洋大学.

競争的研究資金：

研究代表者： 古谷 伸子

課題番号： 25770303

研究種目： 若手研究 (B)

課題名： タイにおける医療システムの再編と民間治療師実践の変容に関する人類学的研究

期間 (年度)： 2013(H25)～2017(H29)

交付予定額： 600 千円

佐藤 久美子 (さとう くみこ)

研究主題：トルコ語と日本語諸方言のイントネーション研究—意味論・統語論との相互作用の仕組みの解明に向けて

研究期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：児倉 徳和

研究成果：

1. 論文：「長崎方言におけるアクセント変化に関する資料」『北星学園大学文学部北星論集』54(1), 2016.9. 33-54.
2. 口頭発表：「長崎市方言における不定語を含む語・文の音調と複合法則」, 日本言語学会 153 回大会, 2016.12.3-4.福岡大学.
3. 口頭発表：「トルコ語における複合語マーカー(s)i と名詞修飾に関する予備的考察」, 九科研合同研究会 2016 年度ユーラシア言語研究コンソーシアム年次総会, 2017.3.30. 京都大学文学研究科附属ユーラシア文化研究センター.
4. 報道：NHK 宮崎「イブニング宮崎」「宮崎弁いいっちゃが」, 2017.3.2.

佐藤 大和 (さとう ひろかず)

研究主題：日本語と東南アジア諸言語における超分節的特性の動態に関する研究

研究期間：2012.4.1～2017.3.31

受入教員：峰岸 真琴

研究成果：

1. 口頭発表：「共通語における動的音調形式とアクセント知覚」, 日本音声学会「第 334 回研究例会」, 2016.12.3, 十文字学園女子大学.

2. 口頭発表：「アクセント核のあとピッチの急峻な降下はあるか？ーピッチの動態特性とアクセント知覚ー」, 日本音響学会「2017 春季研究発表会」, 2017.3.17, 明治大学生田キャンパス.
3. 講演：「統計数理的に見た「ことば」の性質」, 国土舘大学「理工学研究所講演会」, 2017.1.18, 国土舘大学.
4. 口頭発表：「音調特性研究のための音声分析・再合成ツール」, 東京外国語大学 科研基盤研究 G: ワークショップ「アジア諸語の音調特性の解析：日本語と東南アジア諸語を対象として」, 2017.2.1, 東京外国語大学.
5. 口頭発表：「日本語アクセントにおける音調降下特性とその知覚」, 東京外国語大学 科研基盤研究 G: ワークショップ「アジア諸語の音調特性の解析：日本語と東南アジア諸語を対象として」, 2017.2.1, 東京外国語大学.

競争的研究資金：

研究代表者： 佐藤 大和
 課題名： 超文節素の動態形式に基づくアクセント言語と声調言語の対照研究
 課題番号： 26284057
 研究種目： 基盤研究 (B) 一般
 期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)
 交付予定額： 2,900 千円
 研究分担者： 峰岸真琴, 益子幸江, 遠藤光暁, 鈴木玲子, 降幡正志, 岡野賢二, 春日淳

清水 昭俊 (しみず あきとし)

研究主題：人類学, 人種学, 民族学, 民族研究, 文化人類学：日本の人類学の歴史的展開
 研究期間：2015.11.5～2018.11.4
 受入教員：西井 涼子

研究成果：

口頭発表：「玉碎戦を生きた兵士と慰安婦—北ビルマ・中国雲南と沖縄の事例から」, 神奈川大学歴史民俗資料学研究科「歴史民俗資料学研究会」, 2016.6.24. 神奈川大学.

新谷 忠彦 (しんたに ただひこ)

研究主題：言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明
 研究期間：2016.4.1～2018.3.31
 受入教員：澤田 英夫

研究成果：

1. 著書： *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.107, The Siam(Hdsem) Language*, 2016, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, xxii+267 pp.
2. 著書： *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.108, The Va(En) Language*, 2016, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, xxii+267 pp.
3. 著書： *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.109, The Nangki Language*, 2016, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, xxiv+267 pp.
4. 著書： *Linguistic Survey of Tay Cultural Area (LSTCA) No.110, The Matu Language*, 2016, ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies, xxii+267 pp.

競争的研究資金：

研究代表者： 新谷 忠彦
 課題名： 言語・文化調査に基づくタイ文化圏の少数民族の歴史の解明
 課題番号： 15H05154
 研究種目： 基盤研究 (B) 海外学術調査
 期間 (年度)： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 1,900 千円
 研究分担者： 山田敦士

福島 康博（ふくしま やすひろ）

研究主題：マレーシアにおけるイスラーム金融のイスラーム性に関する研究

研究期間：2014.5.1～2017.4.30

受入教員：床呂 郁哉

研究成果：

1. 論文：「イスラームに基づく食の安全・安心：マレーシアのハラール認証制度の事例」『現代のイスラーム法』（アジア法学会編），2016.11, 151-193.
2. 口頭発表：「マレーシアにおけるイスラーム金融サービス法の施行とイスラーム金融機関への影響」，日本金融学会「2016年度日本金融学会春季大会」，2016.5.14, 武蔵大学.

競争的研究資金

研究代表者： 福島 康博

課題名： イスラームに基づく商品・サービスの規格化と地域・産業間比較研究：東南アジアの例

研究種目： 基盤研究（C） 一般

課題番号： 16K01974

期間（年度）： 2016(H28)～2018(H30)

交付予定額： 1,200 千円

研究代表者： 福島 康博

課題番号： 25870206

研究種目： 若手研究（B）

課題名： イスラーム金融におけるイスラーム性形成の実証研究：マレーシアの事例

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

交付予定額： 259 千円

研究分担者： 福島康博，西井涼子，富沢寿勇，塩谷もも

研究代表者： 床呂 郁哉

課題番号： 25257002

研究種目： 基盤研究（A） 海外学術調査

課題名： 東南アジア・中東に跨るイスラーム・ネットワークの動態に関する学際的研究

期間（年度）： 2013(H25)～2016(H28)

交付予定額： 5,900 千円

細谷 幸子（ほそや さちこ）

研究主題：イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶：障害者の生きる権利をめぐる

研究期間：2016.4.1～2019.3.31

受入教員：飯塚 正人

研究成果：

1. 論文：「イランにおける生殖補助医療に関する倫理的議論と実践」『中東イスラーム諸国における生殖医療と家族研究会調査報告書』（村上薫編），2016. JETRO アジア経済研究所，38-54.
2. 論文：“Volunteer Caregiving Activities in Kahrizak Charity Care Center in Iran”, *NGOs in Muslim World: Faith, and Social Services* (ed. by NEJIMA, Susumu), 2016. Routledge, 47-56.
3. 論文：「テヘランの脊髄損傷者の生活状況～環境，家族・夫婦の関係性，社会とのつながりに注目して」『イラン研究万華鏡：文学，政治経済，調査現場の視点から』（原隆一編），2016.12. 大東文化大学出版会，165-186.
4. 口頭発表：“Ethical Discussion on Iran's National Prevention Program for Genetic Diseases: From the Experiences of People with Thalassemia”, *American Anthropological Association: 2016 Annual Meeting, American Anthropological Association*, 2016.11.16. Minneapolis Convention Center.

5. 口頭発表：“Ethical Discussion on the National Prevention Program for Genetic Diseases in Iran: From the Experiences of People with Thalassemia”, Lancaster Center for Disability Research: *Eighth International Disability Studies Conference*, 2016.9.7. University of Lancaster.
6. 口頭発表：“Choosing a unique life as a Thalassemia patient: Biological citizenship and marriage partner preference of people with a genetic illness in Iran”, The International Union of Anthropological and Ethnological Sciences: *2016 Middle Eastern Commission Conference*, 2016.8.7. Jagiellonian University.
7. ポスター発表：“Qualitative Research on the Obstacles in Marriage and Reproductive Process of People with Transfusion Dependent Thalassemia”(with M. Shahriari, G.R. Jamali), Thalassemia International Federation : *Second MEGMA conference, Thalassemia International Federation* , 2016.11.11-12. Hotel Le Royal Amman.

競争的研究資金

研究代表者： 細谷幸子
 課題番号： 15K01892
 研究種目： 基盤研究 (C) 一般
 課題名： イラン・イスラーム共和国における選択的人工妊娠中絶：障害者の生きる権利をめぐる
 て
 期間 (年度)： 2015(H27)～2016(H28)
 交付予定額： 150 千円
 研究分担者： 松永 佳子

ジュニアフェロー

新谷 崇 (あらや たかし)

研究主題：イタリア領東アフリカにおける植民地統治と宗教の問題 (1935～1941 年)

研究期間：2015.4.1～2017.3.31

受入教員：石川 博樹

研究成果：

1. 論文：「ファシズムとカトリシズムの結合：ジューリオ・デロッシによる聖職者の動員活動とその思想的基盤について」『早稲田大学イタリア研究所 研究紀要』6, 2017.3. 1-27. (査読有)
2. 論文：「カトリック聖職者によるファシズムへの協力宣言：1938 年 1 月の集会の背景と史的意義について」『声をさがしつけて：和田忠彦先生退任記念論文集』(石田聖子編), 2016.12. 223-246. 和田忠彦先生退任記念論文集編集委員会, 京都.
3. 口頭発表：「イタリアにおけるファシズム体制とカトリック教会の共生 (1929-1943)：聖職者の支持からみる全体主義体制の一側面」, 第 66 回日本西洋史学会大会, 2016.5.22. 慶応義塾大学.

池田 昭光 (いけだ あきみつ)

研究主題：レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：黒木 英充

研究成果：

1. 論文：“Flexibility and Tension: A Case Study of Communicational Practice in a Lebanese Town”, *World Affairs*, No.3 1996, 2016. 155-160.
2. 論文：「アイデンティティと「見えないもの」——レバノンの事例による論点導出のための覚え書き」, 『専修人文論集』99, 2016.11.189-206.
3. 論文：“Around Boudaries: Everyday Interaction in a Lebanese Town”, *Proceedings of the Papers, Consortium for Asian and African Studies (CAAS) 7th International Conference*, 2017.3. 113-118.
4. 書評：小河久志著『「正しい」イスラームをめぐるダイナミズム—タイ南部ムスリム村落の宗教民族誌』『東南アジア研究』第 54 巻第 2 号, 2017.1. 274-276.
5. 講演：「レバノンにおける宗教・宗派とコミュニケーション」, NPO 法人地球ことば村・世界言語博物館「ことばのサロン」, 2017.2.11. 目黒区青少年プラザ.

6. 講演：Fieldwork Research Cooperation on Personal Basis, Embassy of Japan in Lebanon in collaboration with Japan Foundation: *Round Table in Honor of Adel Amin Mahmoud Saleh*, 2017.2.27. Shogun Lounge Verdun, Beirut, Lebanon.
7. 講演：Notes for a Research on Ageing Society in Lebanon: In Relation to Migration Studies, Seminar on migration studies: *Seminar on migration studies*, 2017.3.3. Institute of Social Sciences - Lebanese University (Rabieh).
8. 口頭発表：“Flexibility and Tension: A Case Study of Communicational Practice in a Lebanese Town”, Asian Federation of Middle East Studies Associations: *The 11th International Conference of Asian Federation of Middle East Studies Associations “World New Trends in the 21st Century and Middle East”*, 2016.9.24. Ulaanbaatar Hotel, Mongolia.
9. 口頭発表：“Around Boundaries: Everyday Interaction in a Lebanese Town”, Consortium for Asian African Studies: *Consortium for Asian African Studies (CAAS) 7th International Conference*, 2016.10.23. Tokyo University of Foreign Studies.
10. 口頭発表：“Money as Worldview: From Fieldwork in Alberta, Canada”, Grants-in-Aid for Scientific Research Project “Extensive networks of Lebanese and Syrian migrants: Multifaceted self and spatial imagination”: *Workshop “The future of Lebanese and Syrian migration studies”*, 2016.10.24. Tokyo University of Foreign Studies.
11. 口頭発表：「趣旨説明 古い—「問題」として、「経験」として」「フィールドネット・ラウンジ」, 2016.12.4. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 口頭発表：「流れと顔 レバノンにおける民族誌的研究」, 日本文化人類学会 2016 年度関東地区研究懇談会, 2017.3.18. 東京大学.
13. 口頭発表：“Thinking Popular Culture in Confessional Society: Everyday Interaction in Lebanon” Musée national d’ethnologie (Osaka, Japon) / Institut d’études de l’Islam et des sociétés du monde musulman: *Colloque « La culture populaire au Moyen-Orient : Approches franco-japonaises croisées »*, 2017.3.28. École des hautes études en sciences sociales, Paris.

競争的研究資金

研究代表者 池田 昭光
 課題番号： 15K16895
 研究種目： 若手研究 (B)
 課題名： レバノン高齢社会の人類学的研究—親族・国外移民・家事労働者
 期間 (年度) 2015(H27)～2018(H30)
 交付予定額： 800 千円

海老原 志穂 (えびはら しほ)

研究主題：現代方言と文献を用いたチベット語の比較研究

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：星 泉

研究成果：

1. 著書 (共編著：星泉, 海老原志穂, 大川謙作, 三浦順子) 『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 vol. 4 (チベット文学研究会 (星泉, 海老原志穂他) 編), 2017.2. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, 174 pp.
2. 著書 (共訳：ツェラン・トンドゥプ, 海老原志穂, 星泉, 大川謙作, 三浦順子) 『闘うチベット文学 黒狐の谷』, 2017.3. 勉誠出版, 412 pp.
3. 論文：「ヤクの名は。」『フィールドプラス』17, 2017.1. 6-7.
4. 論文：「アムドの結婚式 —形式とその簡略化—」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 (チベット文学研究会編) 4, 2017.2. 17-24.
5. 論文：「ラダックで唯一の小説家 ツェワン・トルデン」『チベット文学と映画制作の現在 SERNYA』 (チベット文学研究会編) 4, 2017.2. 119-123.
6. 論文 (共著：Masahiro HIRATA, Nantaijia, Ryunosuke OGAWA, Shiho EBIHARA, Yusuke BESSHO, Izumi HOSHI) : “Milk Processing System of Amdo Tibetan Pastoralists and Its Transition in Qinghai Province, China”, *Journal of Arid Land Studies* 26(4), 187-196, 2017.3.
7. 口頭発表：“Milk and Non-milk Cultures, from the View Point of Geolinguistics”, Asian Geolinguistic Society of Japan: *The 3rd International Conference of Asian Geolinguistics*, 2016.5.23. Royal University of Phnom Penh.

8. 口頭発表： “The Richness of Tibetan Pastoral Vocabulary and its Loss”, 国際チベット学会: *The 14th International Seminar for Tibetan Studies*, 2016.6.24. The University of Bergen .
9. 講演：「青海チベット牧畜社会の変化とイノベーション～日本のチベット研究者ができること～」, 第64回日本チベット学会ワークショップ, 2016.11.19. 身延山大学.
10. 講演：「ラダックのイノベーター, ソナム・ワンチュク」(la dwags kyi gsar gtod pa/ bsod nams dbang phyug) , ツォショク・サルワ起業セミナー, 2016.8.6. 中国青海湖.
11. 口頭発表：「ヤクは宝物」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築」(LingDy3), 科学研究費(基盤B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者：星泉)「国際シンポジウム「チベット牧畜民の『今』を記録する」」, 2017.2.19. 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所.
12. 報道：読売新聞 朝刊(地域/多摩)「チベット牧畜文化を体感」, 2017.2.17.

競争的研究資金

研究代表者： 海老原 志穂
 課題番号： 26770137
 研究種目： 若手研究 (B)
 課題名： 東西方言から見たチベット語の基層の研究
 期間(年度)： 2014(H26)～2017(H29)
 交付予定額： 700 千円

研究分担者： 海老原志穂, 平田昌弘, 別所裕介
 研究代表者 星 泉
 課題名： チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂
 課題番号： 15H03203
 研究種目： 基盤研究 (B) 一般
 期間(年度)： 2015(H27)～2017(H29)
 交付予定額： 4,500 千円

大島 一 (おおしま はじめ)

研究主題：ハンガリー周辺地域のハンガリー語方言における言語接触
 研究期間：2015.4.1～2017.3.31
 受入教員：塩原 朝子

研究成果：

1. 口頭発表：“A heterogén többes szám funkcionális használata a magyarban a korpusz kutatásával” (Functional Usage of Associative Plural in Hungarian with a Corpus Study), International Association for Hungarian Studies: *VIII. Nemzetközi Hungarológiai Kongresszus (The 8th International Hungarology Conference)*, 2016.8.24. University of Pécs, Pécs, Hungary.
2. 口頭発表：“A magyaroktatás Tokióban” (Hungarian Language Education in Tokyo), International Association for Hungarian Studies: *VIII. Nemzetközi Hungarológiai Kongresszus (International Hungarology Conference)*, 2016.8.23. University of Pécs, Pécs, Hungary.
3. 口頭発表：「ハンガリー語の結合の複数について：大規模コーパスによる分析試論」, 第43回日本ウラル学会研究発表大会, 2016.7.2. 東京外国語大学本郷サテライト.

大塚 行誠 (おおつか こうせい)

研究主題：ミャンマーおよびインド北東部におけるクキ・チン諸語の研究
 研究期間：2015.4.1～2017.3.31
 受入教員：澤田 英夫

研究成果：

論文：「ラルテー語の人称標示」『東京大学言語学論集 電子版』(eTULIP) 37, 2016.9. 19-28. (査読有), 東京大学文学部言語学研究室・東京外国語大学

競争的研究資金

研究代表者： 大塚 行誠
課題番号： 26770136
研究種目： 若手研究 (B)
課題名： インド北東部におけるラルデー語の記述言語学的な研究
期間 (年度)： 2014(H26)～2016(H28)
交付予定額： 800 千円

小山内 優子 (おさない ゆうこ)

研究主題：『捷解新語』の日朝対照言語学的研究
研究期間：2016.4.1～2017.1.31
受入教員：伊藤 智ゆき

勝畑 冬実 (かつはた ふゆみ)

研究主題：エジプト映画におけるイスラーム表象の変遷
研究期間：2014.4.1～2017.3.31
受入教員：飯塚 正人

研究成果：

1. 論文：「「シャリーアの意図」から民主主義へ—ハーリド・ムハンマド・ハーリドと 20 世紀イスラーム改革思想—」『史滴』38 号, 2016.12.1-25. (査読有) 早稲田大学東洋史懇話会・東京
2. 口頭発表：「エジプト映画における「イスラーム主義」の表象～「テロリスト (1994)」以前の作品分析から～」, 日本中東学会「第 32 回年次大会」, 2016.5.15. 慶應義塾大学.
3. 口頭発表：「エジプト映画の歴史と現在」, 科学研究費基盤研究 (C)「エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析」・中東映画研究会・早稲田大学文化構想学部多元文化論系中東イスラーム文化論ゼミ主催等: エジプト映画の新潮流～「マイクロフォン」(2010) 上映とともに～, 2016.11.27. 早稲田大学.

競争的研究資金

研究代表者： 勝畑 冬実
課題名： エジプト映画における「イスラーム」表象の変遷とその分析
課題番号： 16K02177
研究種目： 基盤研究 (C) 一般
期間 (年度)： 2016(H28)～2018(H30)
交付予定額： 1,200 千円

加藤 敦典 (かとう あつふみ)

研究主題：ベトナムにおける高齢者ケアの思想・制度・実践についての文化人類学的研究
研究期間：2016.4.1～2017.3.31
受入教員：栗原 浩英

研究成果：

1. 著書:Nhan Hoc o Viet Nam: Mot so van de lich su, nghien cuu va dao tao (『ベトナムにおける人類学—歴史, 研究, 教育の諸問題』) (Ngu yen Van Suu ほか (編)), 2016, Tri Thuc 出版, Hanoi, 455 pp.
2. 書評：「新刊書紹介—杉島敬志編『複ゲーム状況の人類学—東南アジアにおける構想と実践』『東南アジア 歴史と文化』第 45 巻, 2016.5.159-163. 東南アジア学会 (編) 山川出版社・東京
3. 口頭発表：“Talking like a state: The constellation of narratives in the policy implementation process in villages in Vietnam”, International Union of Anthropological and Ethnological Sciences: Inter-Congress 2016, 2016.5.4-5.9. Hotel Dubrovnik Palace, Dubrovnik, Croatia.

4. 講演： “Ve 'dan tục học' Nhat Ban” 「日本の「民俗学」について」（ベトナム語），Vien Nghien Cuu Van Hoa（ベトナム社会科学院・文化研究院）「Sociological Seminar Series」，2016.07.14. Vien Nghien Cuu Van Hoa（ベトナム社会科学院・文化研究院）。
5. 指名討論者：合評会「神原ゆうこ『デモクラシーという作法—スロヴァキア村落における体制転換後の民族誌』，九州大学出版会 2015」，筑波人類学研究会「FACT（筑波民俗学人類学コロキウム）15」，2016.7.30. 筑波大学。
6. 指名討論者：“Discussant for Panel 5 “Cultural policies””，University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University, Hanoi, Vietnam: Cultural Resources for Sustainable Development: Theories, Practices and Policy Solutions, 2016.12.14. University of Social Sciences and Humanities, Vietnam National University, Hanoi, Vietnam.

栗田 知宏（くりた ともひろ）

研究主題：東アフリカ系ブリティッシュ・エイジアンのエスニック・アイデンティティに関する調査研究
 研究期間：2014.4.1～2017.3.31
 受入教員：椎野 若菜

研究成果：

口頭発表：『テロの時代』におけるムスリム・ヒップホップ，第26回日本移民学会年次大会，2016.6.26. 阪南大学。

小池 まり子（こいけ まりこ）

研究主題：現代バリの社会・宗教改革運動—バリヒンドゥー教徒の親族集団組織を事例として—
 研究期間：2016.4.1～2017.3.31
 受入教員：西井 涼子

小林 貴幸（こばやし たかゆき）

研究主題：東アジアにおける社会集団の構造と対人関係に関する比較研究
 研究期間：2014.4.1～2017.3.31
 受入教員：深澤 秀夫

四條 真也（しじょう まさや）

研究主題：島嶼地域における伝統の再解釈—米国制度下のハワイにおける伝統的養取慣行に関する社会人類学的研究
 研究期間：2016.4.1～2017.3.31
 受入教員：深澤 秀夫

澁谷 俊樹（しぶや としき）

研究主題：ベンガルの民衆文化をめぐる地域研究
 研究期間：2016.4.1～2017.3.31
 受入教員：太田 信宏

竹村 和朗（たけむら かずあき）

研究主題：現代エジプトのワクフに関する国家法（カーヌーン）の研究
 研究期間：2016.4.1～2017.3.31
 受入教員：近藤 信彰

研究成果：

1. 論文：“The Future of the Ownership of Desert Land: A Reflection Based on Modern Egyptian Experiences”, *World Affairs*, No. 3/34 (461), 2016.12. 7-16.
2. 書評：「奈良雅史著『現代中国の〈イスラーム運動〉—生きにくさを生きる回族の民族誌』『文化人類学』81(3), 544-547. 日本文化人類学会
3. 口頭発表：「マシタルで働く：現代エジプトの沙漠開拓地における農業実践の一事例として」, 日本中東学会「第32回年次大会」, 2016.5.15. 慶應大学.
4. 口頭発表：「個人の語りを書く：エジプト・ブハイラ県バドル郡の住民 G を事例として」, 日本文化人類学会「第50回研究大会」, 2016.5.29. 南山大学.
5. 口頭発表：“The Future of the Ownership of Desert Land: A Reflection Based on Egyptian Experiences”, AFMA: The 11th International Conference, 2016.9.24. UB Hotel, Ulaanbaatar.
6. 口頭発表：「趣旨説明」, IG 科研（日本学術振興会科学研究費 基盤研究（A）「イスラーム・ジェンダー学の構築のための基礎的総合的研究」）「公募研究会「イスラーム・中東の家族・親族」第1回研究会」, 2017.3.31. 東京大学.

西村（西野） 範子（にしむら のりこ）

研究主題：ベトナムの国際社会参画時代における内政と対中国関係の変動

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：栗原 浩英

II-4.2.2 海外学術調査総括班の活動

[I-3.2.4 海外調査専門委員会](#)を参照

II-4.2.3 四大学連合附置研究所長懇談会

2016年度 実施

四大学連合附置研究所長懇談会（第31回）

日時： 2016年6月9日（木）16:30-17:30

会場： 東京工業大学西9号館6階607会議室

懇談事項：①第11回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

四大学連合文化講演会（第11回）

日時： 2016年10月28日（金）13:00～16:30

会場： 一橋講堂 学術総合センター内（東京都千代田区一ツ橋2-1-2）

主催： 四大学連合（東京医科歯科大学，東京外国語大学，東京工業大学，一橋大学）

企画： 四大学連合附置研究所

後援： お茶の水会，東京外語会，蔵前工業会，如水会

【プログラム】

12:20 開場

13:00-13:10 開会挨拶 一橋大学 学長

13:10-13:20 来賓挨拶 文部科学省 学術機関課長（代理）

13:20-14:00 「バイオマテリアルによる再生医療」

東京医科歯科大学 生体材料工学研究所 教授 岸田晶夫

14:00-14:40 「ミクロの取引データからわかるマクロ経済の需要と供給」

一橋大学 経済研究所 教授 阿部修人

14:40-15:00 休憩

15:00-15:40 「宗教が紛争を生み出すとき —南アジアのムスリム・ヒンドゥー教徒の関係から」

東京外国語大学 アジア・アフリカ言語文化研究所 准教授 外川昌彦
 15:40-16:20 「ナノテクノロジーが拓く未来医療 一体内病院の実現を目指して」
 東京工業大学 科学技術創成研究院 化学生命科学研究所 教授 西山伸宏
 16:20-16:30 閉会挨拶 東京外国語大学 学長

四大学連合附置研究所長懇談会（第 32 回）

日時： 2016 年 11 月 24 日（水） 16:30～17:30

会場： 一橋大学佐野書院応接室

懇談事項：①第 11 回四大学連合文化講演会について

②次回以降の四大学連合文化講演会について

（第 12 回四大学連合文化講演会について、次回当番機関について）

II-4.2.4 シンポジウム等

開催日	内容・使用言語・場所・開催主体
2016 年 5 月 19 日（木）	AA 研フォーラム 1. 吉田ゆか子（AA 研所員） 「演じる身体とモノの人類学—バリ島とジャカルタの事例から」 2. 野田仁（AA 研所員） 「越境問題・「国際紛争」とその解決：19 世紀後半の露清国境の事例から」 使用言語：日本語 AA 研（304） AA 研
5 月 20 日（金） ・21 日（土）	体制転換の人類学【公開】 「体制転換の人類学（1）——田沼幸子『革命キューバの民族誌』合評会+映像上映会」 5 月 20 日（金） 1. 挨拶：西井涼子（AA 研所員） 発表 & 解題：田沼幸子（首都大学東京） 2. 映画上映 Cuba Sentimental 3. 佐久間寛（AA 研所員） コメント 1 中村隆之（大東文化大学） コメント 2 大杉高司（一橋大学） コメント 3 「体制転換の人類学（2）——東欧，アジア，アフリカにおける体制転換と社会」 5 月 21 日（土） 1. 西井涼子（AA 研所員） 挨拶，佐久間寛（AA 研所員） 趣旨説明 2. 神原ゆうこ（北九州市立大学） 発表（1）：「体制転換後の村落における社会変容と人々の意思と実践：『デモクラシーという作法』自著解題を兼ねて」 コメント：清水昭俊（AA 研フェロー） 3. 津田浩司（東京大学） 発表（2）：「体制転換とインドネシア華人：『「華人性」の民族誌』への著者解題」 コメント：内堀基光（放送大学） 4. 松本尚之（横浜国立大学） 発表（3）：「ナイジェリアにおける体制転換と王位／首長位：『アフリカの王を生み出す人々』への自著解題とその後」 コメント：三浦敦（埼玉大学） 5. 総合コメント：名和克郎（東京大学） 6. 全体討論 使用言語：日本語 AA 研（304） 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する「在来知」の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」

5月22日(日)	<p>言語研修シベ語フォローアップミーティング／第6回シベ語研究会【公開】 13:00-14:00 児倉徳和 (AA 研所員) 「談話における小辞 =ni'の機能：所有・主題と認知」 14:10-15:10 巴文馨 (名古屋学院大学大学院) 「翻訳文化における言語転用現象の少数民族言語の保存に対する影響—シベ語を例として」 15:20-16:20 承志 (追手門学院大学) 「シベの歴史研究とその問題—歴史記述と創造をめぐって」 16:30-17:30 玉聞祐 「父・玉聞精一の思い出」 17:40-18:40 コメント・総合討論 コメンテーター：久保智之 (九州大学)</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>本郷サテライト 7F</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
6月16日(木)	<p>AA 研フォーラム</p> <p>1. 品川大輔 (AA 研所員) 「キリマンジャロ・バントゥ諸語記述研究の射程—マイクロバリエーション研究とその先」 2. 外川昌彦 (AA 研所員) 「ダルマパーラのブッダガヤ復興運動とシンハラ人ナショナリズム」</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>AA 研</p>
6月17日(金)	<p>フィールドサイエンス・コロキウムワークショップ第1回「災害と／のフィールドワーク」【公開】 趣旨説明 床呂郁哉 (AA 研所員) 発表 (1) 木村周平 (筑波大学) 「災害下での人類学的フィールドワークの試み：サルベージ・コラボレーション・アクション」 発表 (2) 清水展 (京都大学) 「フィールド・ワークと民族誌の長い距離：スローな人類学が災害復興にできる／できないこと」 発表 (3) 祖田亮次 (大阪市立大学) 「災害研究と地理学」 コメント：外川昌彦 (AA 研所員)・菅豊 (東京大学)・大石高典 (東京外国語大学) + 討論</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>フィールドサイエンス研究企画センター，共催：「アジア・アフリカにおけるハザードに対処する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロマクロ系の連関2」</p>
7月7日(木)	<p>『ラサへの歩き方〜祈りの2400km』公開記念チベット映画傑作選『静かなるマニ石』【公開】 静かなるマニ石 2005年 102分 英語題：The Silent Holy Stones 概要： 監督・脚本：ペマ・ツェテン 撮影：杜傑 撮影助手：ソントルジャ 録音：李哲 挿入歌：ドゥッカル・ツェラン 出演：ロブザン・テンペル (少年僧)，チョクセ (少年僧の先生)，トゥルク・ジャホンツァン (化身ラマ) 19:00 開映-21:20 *上映後トーク付き</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>アンステイチュ・フランセ東京 エスパス・イマージュ (東京都新宿区市谷船河原町 15)</p> <p>共催：ムヴィオラ，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 協力：福岡市総合図書館</p>
7月14日(木)	<p>『ラサへの歩き方〜祈りの2400km』公開記念チベット映画傑作選『陽に灼けた道』【公開】 陽に灼けた道 2011年 89分 英語題：The Sun Beaten Path 監督・脚本・製作：ソントルジャ 撮影：王猛 芸術指導：ペマ・ツェテン 出演：イシェ・ルンドゥプ (ニマ)，ロチ (老人)，カルザン・リンチェン (兄)</p>

	19:00 開映-21:20 *上映後トーク付
	使用言語：日本語
	アンスティチュ・フランセ東京 エスパス・イマージュ（東京都新宿区市谷船河原町 15）
	共催：ムヴィオラ，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所 協力：福岡市総合図書館
8月22日（月）	AA 研フォーラム：言語研修（琉球語）文化講演（言語研修「琉球語」の一環として開催） 「宮古島池間民族の言語・文化・歌謡」 仲間博之（岡山理科大学）
	使用言語：日本語
	AA 研（304）
	共催：AA 研，東京外国語大学社会・国際貢献情報センター
8月29日（月）	AA 研フォーラム：言語研修（琉球語）文化講演（言語研修「琉球語」の一環として開催） 「奄美大島宇検村の民俗行事の解説と八月踊りの体験」 渡聡子（宇検村教育委員会），直三男也，踊り手：菅井えつ子，村石厚子
	使用言語：日本語
	AA 研（304）
	共催：AA 研，東京外国語大学社会・国際貢献情報センター
9月8日（木） ・9日（金）	AA 研フォーラム：言語研修（ヒンディー語）文化講演「インド・ラージャスターン農村 の25年」（言語研修「ヒンディー語」の一環として開催） 中谷純江（鹿児島大学） 「インド・ラージャスターン農村の25年」 注意：お席に限りがありますので，人数が多い場合は立ち見となります。共催：
	使用言語：日本語
	大阪研修センター十三 会議室D（大阪市淀川区十三本町 1-12-15）
	AA 研，東京外国語大学社会・国際貢献情報センター
9月21日（水）	琉球語言語研修フォローアップミーティング／2016年度言語研修（琉球語）成果物編集打ち合わせ【公開】
	12:30-14:00 1. タオ・ティアンロン（東京外国語大学） 成果発表 1 2. 谷津もゑり（東京外国語大学） 成果発表 2 3. 原礼美（東京外国語大学） 成果発表 3
	14:10-15:40 4. 奥真裕（東京外国語大学） 成果発表 4 5. 麻生玲子（東京外国語大学） 成果発表 5 6. 呉唯（東京外国語大学） 成果発表 6
	15:50-17:20 7. 黒島規史（東京外国語大学） 成果発表 7 8. 加藤幹治（九州大学） 成果発表 8 9. 占部由子（九州大学） 成果発表 9
	17:30-18:30 10. 佐久間篤（南山大学） 成果発表 10 11. 林智昭（日本学術振興会） 成果発表 11
	使用言語：日本語
	AA 研（301）
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」
10月2日（日）	2016 チベット異文化理解交流事業【公開】 講演会 開演 10:00 「チベットの物語世界へようこそ」 講師：星泉（AA 研所員） 映画会 開演 13:30 『草原』『静かなるマニ石』 解説「チベットの映画制作とペマ・ツェテン作品」星泉（AA 研所員）
	使用言語：日本語
	札幌市教育文化会館 4 階講堂

	共催：ヒマラヤ圏サバナ，基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」 後援：札幌市，協賛：株式会社日本レーベン
10月5日(水)	フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ「Praatを用いた音響音声学的分析の初歩」【公開】 講師：青井隼人（国立国語研究所・日本学術振興会特別研究員） 使用言語：日本語 AA 研 (304) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
10月9日(日)	ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち—その背景とこれからを考える【公開】 栗屋利江（東京外国語大学） 開会挨拶 <第一部> 1. 高田峰夫（広島修道大学）ダッカのテロ事件—イスラーム研究との関連で 2. 南出和余（桃山学院大学）農村の若者の生活から見たテロ事件 3. 石山民子（アジア砒素ネットワーク）家庭やコミュニティの視点から振り返るダッカ事件 4. 外川昌彦（AA 研所員）ダッカの若者たちとテロ事件 <第二部> 5. 日下部尚徳（東京外国語大学）コメントとその後の展開 6. リプライ ディスカッション 7. 堀口松城（元バングラデシュ大使，日本バングラデシュ協会会長） 閉会挨拶 司会 丹羽京子（東京外国語大学） 使用言語：日本語 AA 研 (303) AA 研，共催：AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」，FINDAS センター（東京外大・NIHU 南アジア研究拠点センター），日本南アジア学会，（特活）アジア砒素ネットワーク
10月22日(土) ・23日(日)	隠岐の島方言調査事前ワークショップ 10月22日 1. 木部暢子（国立国語研究所・東京外国語大学）「調査実習の概要」 2. 友定賢治（県立広島大学名誉教授）「隠岐の島方言の実態概説」 3. 児倉徳和（AA 研所員）「録音技法実習 (1) 言語資料のいい録音のための5+1」 4. 中山俊秀（AA 研所員）「録音技法実習 (2) 自然談話の録り方」 10月23日 木部暢子（国立国語研究所・東京外国語大学）・原田走一郎（国立国語研究所）・佐藤久美子（国立国語研究所）「IPAによる書き起こしトレーニング」 使用言語：日本語 島根大学法文学部（島根県松江市） 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」，国立国語研究所
11月6日(日)	2016年度文化/社会人類学セミナー【公開】 使用言語：日本語 AA 研 (301, 306) AA 研，共催：基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探求—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」，日本文化人類学会次世代育成セミナー
11月12日(土)	シンポジウム「もの」の人類学をめぐって—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題【公開】 1. 床呂郁哉（AA 研所員）趣旨説明

	<p>2. 奥野克巳 (立教大学) 「複数種のネットワークにおける生命：ボルネオの熱帯雨林の狩猟採集民, プナンの場合」</p> <p>3. 大石高典 (東京外国語大学) 「民族霊長類学からみた人間と非人間の境界」</p> <p>4. 吉田ゆか子 (AA 研所員) 「仮面の命と物性—バリ島のトペン・レゴンの場合」</p> <p>5. 久保明教 (一橋大学) 「存在論的相対主義—プレ・シンギュラリティの時代における機械と人間」</p> <p>6. 内堀基光 (放送大学), 田中雅一 (京都大学) コメント</p> <p>7. 質疑応答</p>
	使用言語：日本語
	AA 研大会議室 (303)
	基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2」
11月15日(火)	<p>第5回リンディフォーラム「ウェブコーパスの構築の実際」【公開】</p> <p>講師：赤瀬川 史朗 (Lago 言語研究所)</p>
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	<p>主催：科研費基盤C「Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究」(15K02472) 代表者塩原朝子</p> <p>後援：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」</p>
11月19日(土)～23日(水)	<p>フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」【公開】</p> <p>11月19日(土)～23日(水・祝) 10:00～17:00</p> <p>ポスターセッション「少数言語研究の最前線」</p> <p>11月19日(土) トークセッションI</p> <p>11:00-11:45 塩原朝子 (AA 研所員) 「インドネシアのことわざと比喩」</p> <p>13:00-13:40 吉村大樹 (トルコ, アンカラ大学, AA 研共同研究員) 「アゼルバイジャン語の疑問文への疑問」</p> <p>15:00-15:40 山越康裕 (AA 研所員) 「中国東北部でモンゴル諸語を記録する」</p> <p>11月20日(日) トークセッションII</p> <p>11:00-11:45 Julie Lefort (Mahatma Gandhi Institute, Mauritius) “Language contact in Northern China: an overview of the Dongxiang language”</p> <p>14:00-14:40 児倉徳和 (AA 研所員) 「ことばを手がかりにシベ人の思考を探る」</p> <p>15:00-15:40 岡田一祐 (AA 研特任研究員) 「『和翰名苑』平仮名字体データベースと江戸・明治教科書字体コーパスの設計」</p> <p>11月22日(火) トークセッションIII / 第6回リンディフォーラム</p> <p>10:30-11:45 I Wayan Arka (Australian National University) “Clausal complexity and syntactic gradience: evidence from Balinese SVCs”</p> <p>11月23日(水・祝) トークセッションIV</p> <p>13:30- 星泉 (AA 研所員) 「チベット・アムド地方の牧畜民の暮らしの「今」を映像で記録する」</p>
	使用言語：日本語, 英語
	AA 研 (306)
	<p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 科研費 (基盤B) 「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(#15H03203 : 星泉), 科研費 (基盤C) 「Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究」(#15K02472 : 塩原朝子), 科研費 (若手B) 「アゼルバイジャン語における疑問接語の生起位置と生起条件に関する研究」(#15K16740 : 吉村大樹), 科研費 (若手B) 「記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究」(#26770144 : 児倉徳和), 科研費 (若手B) 「中国北方のモンゴル系危機言語の文法記述とドキュメンテーション」(#26770146 : 山越康裕), 科研費 (スタート支援) 「明治期国語教科書と平仮名初習者の筆</p>

	写資料とを連関させた平仮名字体史研究」(#15H05981 ; 岡田一祐)
11月19日(土) ～23日(水)	世界の言語で読む Le Petit Prince 【公開】 11月19日(土)～23日(水・祝) 10:00～17:00 ポスター展示 「世界の言語で読む Le Petit Prince」 11月19日(土) トークセッションⅠ 13:00～14:00 風間伸次郎(東京外国語大学) 11月20日(日) トークセッションⅡ 13:00～13:40 吉岡乾(国立民族学博物館)「悲喜交々だよフィールド言語学」 14:00～15:00 山田祥子(北海道立北方民族博物館)「ウイльта語を話す「王子様」誕生 サハリン先住民言語の現在」 15:20～16:00 呉人恵(富山大学) 11月23日(水・祝) トークセッションⅣ 15:00～15:40 石塚政行(東京大学)「外国語はなぜ重要なのか 能格性と対者性」 16:00～17:00 新永悠人(成城大学)「フィールドワークってどんなこと?ひらがなで書けない奄美の音を聞こう!」 17:10～17:50 江畑冬生(新潟大学)「世界の言語の多様性:「語」に含まれる情報に着目して」 使用言語:日本語 AA研(303) 共催:東京外国語大学風間伸次郎ゼミ, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築(LingDy3)」 後援等:日本語学会
12月4日(日)	フィールドネット・ラウンジ:老い——「問題」として,「経験」として【公開】 1. 太田信宏(AA研所員) 開会の辞:フィールドネット・ラウンジについて 2. 池田昭光(AA研ジュニア・フェロー) 趣旨説明:老い——「問題」として,「経験」として 3. 菅沼文乃(南山大学) 「老人問題と老人「の」問題——沖縄都市部の人類学的調査研究からみえてくるもの」 4. 横田祥子(滋賀県立大学) 「高齢者の扶養と国際送金——台湾=インドネシア間のグローバルな世帯保持」 5. 鳥山純子(桜美林大学/日本学術振興会) 「威厳と衰えをつなぐもの——2010年代エジプトで考える「老い」の相対性」 6. 岡戸真幸(人間文化研究機構/上智大学) 「他者の死に接し,人生を顧みる——エジプト都市部での地方出身者による追悼式参列事例から」 7. 細谷幸子(AA研フェロー) 「凶太さと希望——生命予後が限られた疾患をもつイラン人の若者の結婚選択」 8. 関根里奈子(一橋大学) コメント1 9. 小田亮(首都大学東京) コメント2 池田昭光(AA研ジュニア・フェロー) 閉会の辞 使用言語:日本語 AA研(304) AA研
12月5日(月) ～2017年1月 20日(金)	大瀬二郎写真展「遙かなる地へ思いを馳せて」【公開】 今,世界で起きていること。“紛争”,“暴力”,“自然の脅威”...。 使用言語:日本語 AA研資料展示室(1F) 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」
12月7日(水)	フィールド言語学ワークショップ:テクニカルワークショップ「ArcGISを用いた言語地図作成入門」【公開】 講師:海老原志穂(AA研・ジュニアフェロー)

	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
12月9日(金)	<p>シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 西井涼子 (AA 研所員) 開会挨拶 2. 床呂郁哉 (AA 研所員) 趣旨説明 3. 山口真美 (中央大学)・渡邊克巳 (早稲田大学)「イントロダクション：文化をつなぐ顔と身体」 4. 河野哲也 (立教大学)「私、顔がないんです」：ある統合失調症患者の経験」 5. 高橋康介 (中京大学)・大石高典 (東京外国語大学)・島田将喜 (帝京科学大学) 「顔と身体表現の多文化比較フィールド実験研究」 6. 塩谷もも (島根県立大学)「多様なムスリム・ヴェールが伝えるもの：インドネシアの事例から」 7. 吉田ゆか子 (AA 研所員)「バリ芸能における顔 - 人形, 仮面, 化粧」 8. 原島博 (東京大学)・北山晴一 (立教大学)・柿木隆介 (自然科学研究機構生理学研究所) コメント 9. 総合討議
	使用言語：日本語
	AA 研 (303)
	AA 研基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」
12月11日(日)	<p>シンポジウム「バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線」【公開】</p> <p>第一部：災害支援と地域開発の課題</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 外川昌彦 (AA 研所員) 趣旨説明 2. 池田恵子 (静岡大学) 「地方自治体レベルの地域開発計画への災害リスク削減の主流化」 3. 日下部尚徳 (東京外国語大学) 「サイクロン常襲地域における被災後の復興課題に関する研究—バングラデシュにおける定性調査をもとにした一考察」 <p>第二部：NGO の活動現場からの報告</p> <ol style="list-style-type: none"> 4. 大橋正明 (聖心女子大学)・藤崎文子 (特定非営利活動法人シャプラニール=市民による海外協力の会) 「全国的災害枠組みとショランコラユニオンの現実—シャプラニールの活動現場から」 5. 床呂郁哉 (AA 研所員)・玉城毅 (奈良県立大学)・高田峰夫 (広島修道大学) コメンテーター 6. ディスカッション
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」
2017年1月21日(土)	<p>シンポジウム『フィールドネット・ラウンジ「毒」のバイオグラフィー—学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える』【公開】</p> <p>児倉徳和 (AA 研所員) 開会の辞</p> <p>下田健太郎 (日本学術振興会・お茶の水女子大学) 趣旨説明</p> <p>セッションⅠ：あわい(間)を生きる毒</p> <p>長岡慶 (京都大学/文化人類学)「ヒマーラヤ地域における毒/薬—インド北東部タワンの毒盛りとトリカブトをめぐる実践」</p> <p>大石高典 (東京外国語大学/歴史生態学) 「カメルーン東南部熱帯雨林における魚毒漁—「毒が効かない」ということの解釈をめぐる」</p> <p>吉田真理子 (オーストラリア国立大学/文化人類学) 「牡蠣と人の関わりをめぐる〈毒〉の比較, 知識実践」</p> <p>セッションⅡ：「毒」の新たな相貌</p>

	<p>関山牧子（東京大学／人類生態学） 「インドネシア西ジャワ農村における化学物質導入と住民の認識」</p> <p>下田健太郎（日本学術振興会・お茶の水女子大学／歴史人類学） 「「毒」を消化／昇華する—水俣病と共に生きる人びとのライフヒストリーを通して」</p> <p>上杉健志（岡山大学／文化人類学） 「枯葉剤は毒ではない？—ブルックリンとアルーイでの毒概念のギャップと汚染」</p> <p>セッションⅢ：「毒」をめぐる学際的な知の交差</p> <p>棚橋訓（お茶の水女子大学／文化人類学） コメント1</p> <p>山口徹（慶應義塾大学／歴史生態学・考古学） コメント2</p> <p>下田健太郎（日本学術振興会・お茶の水女子大学） 閉会の辞</p>
	使用言語：日本語
	AA 研 (303)
	AA 研
2月4日(土)	<p>合評会シンポジウム：『他者-人類社会の進化』をめぐる【公開】</p> <p>1. 河合香吏（AA 研所員） 編者による報告</p> <p>2. 共同執筆者による報告</p> <p>2-1. 西江仁徳（京都大学） 霊長類学</p> <p>2-2. 北村光二（岡山大学名誉教授） 生態人類学</p> <p>2-3. 船曳建夫（東京大学名誉教授） 社会文化人類学</p> <p>3. コメント</p> <p>3-1. デイビッド・スプレイグ（農業・食品産業技術総合研究機構） 霊長類学</p> <p>3-2. 大石高典（東京外国語大学） 生態人類学</p> <p>3-3. 佐久間寛（AA 研所員） 社会文化人類学</p> <p>4. 討論</p>
	使用言語：日本語
	AA 研 (306)
	基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2」
2月12日(日)	<p>フィールドサイエンス・コロキウム連続ワークショップ第3回「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」【公開】</p> <p>趣旨説明</p> <p>幸島司郎（京都大学） 「ヒマラヤ、アマゾン、動物園・水族館での研究から」</p> <p>大村敬一（大阪大学） 「生き方としてのフィールドワーク：人類学者に負わされる「責め」(Responsabilite) について考える」</p> <p>ディスカッション</p>
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	フィールドサイエンス研究企画センター，共催：基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロマクロ系の連関2」
2017年2月13日(月)～11日(土)	チベット牧畜民の仕事展【公開】
	使用言語：日本語
	AA 研資料展示室 (1F)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」，科学研究費(基盤 B)「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂」(代表者：星泉 (AA 研所員)，課題番号：15H03203)，AA 研共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学” の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
2月17日(金)～23日(木)	<p>第3回「言語フィールド調査ワークショップ@宮古島」</p> <p>講師：中山俊秀 (AA 研)，大野剛 (アルバータ大学)</p>
	使用言語：日本語

	沖縄県宮古島市池間島・池間公民館ほか 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
2月19日(日)	チベットの今を見つめる眼『チベット牧畜民の一日』上映会【公開】 95分/2017年/ドキュメンタリー 撮影・編集・録音：カシャムジャ (Amilolo Film) 制作：「チベット牧畜民の一日」制作チーム 使用言語：チベット語 (日本語字幕つき) 撮影場所：中国青海省黄南チベット族自治州ツェコ県 撮影：2015年8月 出演：R家のみなさん, K家のみなさん 協力：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, JSPS 科研費 使用言語：日本語 AA 研 (303) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」, 科研費基盤研究B チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂 (代表者：星泉 (AA 研所員), 課題番号：15H03203)
3月9日(木)	AA 研フォーラム：退職所員記念講演 中見立夫 (AA 研所員) 「『実録』と日本—近代日本皇室による『実録』編修, 日本人東洋史学者による『実録』探究と影印事業—」 町田和彦 (AA 研所員) 「ことばを測る — ヒンディー語の語彙 —」 使用言語：日本語 AA 研 (304) AA 研
3月11日(土)	チベットの今を見つめる眼『チベット牧畜民の一日』上映会【公開】 95分/2017年/ドキュメンタリー 撮影・編集・録音：カシャムジャ (Amilolo Film) 制作：「チベット牧畜民の一日」制作チーム 使用言語：チベット語 (日本語字幕つき) 撮影場所：中国青海省黄南チベット族自治州ツェコ県 撮影：2015年8月 出演：R家のみなさん, K家のみなさん 協力：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所, JSPS 科研費 使用言語：日本語 AA 研 (303) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築 ~青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」, 科研費基盤研究B チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞典の編纂 (代表者：星泉 (AA 研所員), 課題番号：15H03203)
3月27日(月)	「近世イスラーム国家と周辺世界」第9回研究会 (総括シンポジウム) 13:00 近藤信彰 (AA 研) 「開会挨拶」 13:10 真下 裕之 (AA 研共同研究員, 神戸大学) 「アズファリー著『サーニハート』の新発見写本について」 13:50 和田 郁子 (AA 研共同研究員, 岡山大学) 「英国商人のマスリパトナム日記——17世紀後半の南インド」 (仮) 14:40 二宮 文子 (AA 研共同研究員, 青山学院大学) 「南アジアの近世ペルシア語文学を巡る近年の研究動向」

	15:50 山口 昭彦 (AA 研共同研究員, 聖心女子大学) 「在地ウラマーの任命書からみる中央=地方関係——17-19 世紀イランのアルダラーン州を例に」 16:40 近藤 信彰 (AA 研所員) 「近世イランにおける預言者の血と王家の血——『ダビデー族詩篇』に見る王権と系譜」 17:30 総合討論「プロジェクトを振り返って」
	使用言語：日本語
	AA 研大会議室 (303)
	共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」
3月28日(火)	リンディフォーラム：特任研究員研究発表会【公開】 1. 13:00-14:10 安達真弓 (AA 研特任研究員)「ベトナム語における同形の指示詞・文末詞・感動詞」 2. 14:20-15:30 阿部優子 (AA 研特任研究員)「タンガニイカ湖バントゥ諸語の TAM 標識*ki のマイクロバリエーション」 3. 15:30-16:00 総合討論
	使用言語：日本語
	AA 研 (304)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」

II-4.2.5 地域研究コンソーシアムとの連携

12月5日(土), 6日(日)に京都大学稲盛財団記念館で, 2016年度年次集会・公開シンポジウム・ワークショップが開催され, シンポジウムとワークショップに所員2名が登壇したほか, コンソーシアム幹事組織として運営に関わり, 先導的な役割を果たした。

II-4.3 国際連携研究活動

II-4.3.1 国際シンポジウム等一覧

開催日	内容・使用言語・場所・開催主体
2016年4月5日 (火)	第1回リンディフォーラム 【公開】 Qandeel Hussain (Macquarie University) “Importance of Phonetic Fieldwork in Language Documentation” David Moeljadi (Nanyang Technological University) “Building an open-source computational grammar for Indonesian “INDRA””
	使用言語：英語
	AA 研 (306)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
4月9日(土)	国際ワークショップ： “Authority, Legitimacy and Historiography in the Ottoman Empire” Hiryoyuki OGASAWARA (Kyushu University) “The Mongol and Genghis Khan in the Ottoman Historiography” Hakan Karateke (Chicago University) “Changing Notions of Authority and Legitimacy in the Ottoman Empire”
	使用言語：英語
	AA 研マルチメディア会議室 (304)

	<p>科研費基盤研究 A 「イスラーム国家の王権と正統性—近世帝国を視座として」(代表者: 近藤信彰 (AA 研所員))</p> <p>AA 研基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」</p>
4 月 26 日 (火)	<p>第 2 回リンドィフォーラム 【公開】</p> <p>John Mansfield (The University of Melbourne) “Methodological challenges of documenting sociolinguistic variation in indigenous communities”</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>AA 研 (306)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
6 月 10 日 (金) ～12 日 (日)	<p>The 23rd Annual Meeting of the Austronesian Formal Linguistics Association (第 23 回オーストロネシア形式言語学会) (AFLA 23) 【公開】</p> <p>Friday, 10 June</p> <p>Opening remarks [Hiroki Nomoto (TUFS)]</p> <p>Plenary talk [Chair: Kunio Nishiyama (Ibaraki University)]</p> <p>Edtih Aldridge (University of Washington) “ϕ-feature competition: The Austronesian extraction restriction and its origin”</p> <p>Voice and extraction [Chair: Naonori Nagaya (TUFS)]</p> <p>Michael Yoshitaka Erlewine (National University of Singapore) “Multiple extraction and voice in Toba Batak”</p> <p>Voice and A-bar dependency [Chair: Hooi Ling Soh (University of Minnesota)]</p> <p>Victoria Chen (University of Hawaii at Manoa) “Philippine-type “voice affix” as A’-agreement marker: Evidence from productive causative”</p> <p>Jed Sam Pizarro-Guevara and Matthew Wagers (University of California, Santa Cruz) “The role of voice morphology in processing Tagalog A-bar dependencies”</p> <p>Matt Pearson (Reed College) “Voice and aspectual focus in Malagasy”</p> <p>Voice and related constructions [Chair: Norvin Richards (MIT)]</p> <p>Victoria Chen and Shin Fukuda (University of Hawaii at Manoa) “Re-labeling “ergative”: Evidence from Formosan”</p> <p>Yuko Otsuka and Nozomi Tanaka (University of Hawaii at Manoa) “Tagalog oblique relative clauses”</p> <p>Mayumi Oiwa (University of Hawaii at Manoa) “Possessor raising in Truku Seediq”</p> <p>Nouns and pronouns [Chair: Takuya Miyauchi (TUFS / National Institute for Japanese Language and Linguistics)]</p> <p>Charlotte Hemmings (SOAS, University of London) “Pronouns in Kelabit: Case-marking or clitic status?”</p> <p>Elizabeth Pearce (Victoria University of Wellington) “Person marking in three Oceanic languages”</p> <p>Saturday, 11 June</p> <p>Plenary talk [Chair: Asako Shiohara (TUFS)]</p> <p>Paul Kroeger (Graduate Institute of Applied Linguistics/SIL International) “Descriptive vs. expressive reduplication in Kimaragang and beyond”</p> <p>Morphology [Chair: Anthony Jukes (La Trobe University / TUFS)]</p> <p>Haowen Jiang (Rice University) “Subject indexes in Budai Rukai”</p> <p>David Medeiros (California State University, Northridge) “The morpho-syntax of Hawaiian valency morphology”</p> <p>Jonathan Cheng-Chuen Kuo (Academia Sinica) “Voice marking and manner/result complementarity in Amis”</p> <p>Poster (at University Hall)</p>

	<p>Ed Keenan (University of California, Los Angeles), Ralalaoherivony Baholy (Universite d'Antananarivo), Paul Law (City University of Hong Kong) and Ravaka Julie Razanamampionona (Universite d'Antananarivo) “Intensive Predicate Copying (IPC) in Malagasy”</p> <p>Gakuji Kumagai (Tokyo Metropolitan University) “Recursive Feet and Hidden Phonology: The case of Fijian”</p> <p>Theodore Levin (University of Maryland) “Palauan object-marking: Split-aspect and differential object marking”</p> <p>Shih-Yueh Lin (New York University) “On deriving the copula initial structure in Ulivelivek”</p> <p>Hiroki Nomoto (Tokyo University of Foreign Studies) “Passives and clitic-doubling: A view from Classical Malay”</p> <p>Hajime Ono (Tsuda College), Jungho Kim (Kyoto Women's University), Apay Tang (National Dong Hwa University) and Masatoshi Koizumi (Tohoku University) “VOS preference in Seediq: A sentence comprehension study”</p> <p>Norvin Richards (MIT) “Immobile wh-phrases in Tagalog”</p> <p>Asako Shiohara (ILCAA, Tokyo University of Foreign Studies) “Constituent order in Sumbawa”</p> <p>Shih-Chi Stella Yeh (National Kaohsiung Normal University) “Quantity-sensitivity in Kazangiljan and Piuma Paiwan”</p> <p>Ellipsis [Chair: Edith Aldridge (University of Washington)]</p> <p>Yosuke Sato (National University of Singapore) “An in-situ syntax of sluicing in Indonesian”</p> <p>Ting-Chi Wei (National Kaohsiung Normal University) “Fragment answers in Formosan languages: A typological perspective”</p> <p>Prosody and syntax [Chair: Masashi Furihata (TUFS)]</p> <p>Henrison Hsieh (McGill University) “Prosodic indicators of phrase structure in Tagalog transitive sentences”</p> <p>Aspect [Chair: Paul Kroeger (Graduate Institute of Applied Linguistics/ SIL International)]</p> <p>Vera Hohaus (Eberhard Karls Universität Tübingen) “The inchoative aspect in Samoan”</p> <p>Sihwei Chen (University of British Columbia) “Taking about initial stages of events”</p> <p>Business meeting [Chair: Matt Pearson (Reed College)]</p> <p>Reception (at University Hall)</p> <p>Sunday, 12 June</p> <p>Plenary talk [Chair: Hiroki Nomoto (TUFS)]</p> <p>Hooi Ling Soh (University of Minnesota) “Evidentiality, modality, focus and presupposition: The case of the discourse particle punya in Colloquial Malay”</p> <p>Discourse particles [Chair: Eric McCready (Aoyama Gakuin University)]</p> <p>Scott AnderBois (Brown University) “A QUD-based account of the discourse particle naman in Tagalog”</p> <p>Jennifer Tan (Spanish National Research Council) “On the modality of Tagalog evidentials”</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (303)</p> <p>科研費基盤(C)「Malayo-Sumbawan 言語における定性標示と文構造との関係に関わる研究」(代表：塩原朝子)， 科研費若手(B)「数の仕組みとその文法・情報構造との連関の通言語的研究」(代表：野元裕樹)， 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3) 」</p>
7月5日(火)	<p>第3回リンディフォーラム 【公開】</p> <p>Stefan Schnell (The University of Melbourne) & Nils Schiborr (University of Bamberg) “Referential choice in 3-participant constructions”</p> <p>使用言語：英語</p>

	AA 研 (304) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
7月6日(水)	フィールド言語学ワークショップ:テクニカルワークショップ 講演:研究未開発言語のコーパス構築:多様な言語間に見られる対象指示方略の研究への適用を中心に 【公開】 講師:Stefan Schnell (メルボルン大学ポスドク研究員) 使用言語:英語
	AA 研 (304) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
8月9日(火) ~13日(土)	Workshop on languages spoken in Sabah state, Malaysia (マレーシア サバ州で話されている言語に関するワークショップ) 参加者:塩原朝子(AA 研所員), 野元裕樹(東京外国語大学), 三宅良美(秋田大学), Kartini Abd. Wahab (マレーシア大学), Hooi Ling Soh (ミネソタ大学) 使用言語:英語, マレー語
	Skypod Hostel at Kota Kinabalu (マレーシア) Kota Kinabalu Liaison Office, 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
8月28日(日)	共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」第8回研究会【公開】 東南アジアにおけるイスラームと文化多様性に関する国際ワークショップ 1. 床呂郁哉(AA 研所員) 開会挨拶 2. オマル・ファルーク(AA 研共同研究員, マレーシア理科大学) 「大陸部東南アジアにおけるイスラームと文化多様性」 3. シャムスル・A・B(AA 研共同研究員, マレーシア国民大学) 「多様性から超多様性へ: 島嶼部東南アジアのムスリム世界」 4. 吉田ゆか子(AA 研所員) 「多宗教都市ジャカルタにおけるバリ舞踊—ムスリムの学習者とヒンドゥ教徒のインストラクターについての事例研究より」 5. 坪井祐司(AA 研研究機関研究員) 「マラヤの脱植民地化におけるシンガポールのムスリム知識人の対案」 6. 討論 7. 富沢寿勇(AA 研共同研究員, 静岡県立大学) 閉会挨拶 8. 情報交換会 使用言語:英語
	Gaya Room 1, Hotel Meridien Kota Kinabalu (Jalan Tun Fuad Stephens, Kota Kinabalu) 共催: Kota Kinabalu Liaison Office, 基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクロ・マクロ系の連関2」
9月1日(木) ・2日(金)	共同利用・共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第1回研究会 1 September Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) Introduction Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) “Minorities in Oman” Guita HOURANI (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University-Louaize (NDU)) “Kurds in the Middle East” Hiroki WAKAMATSU (ILCAA Joint Researcher, Toros University) “Alevi in Turkey” Aiko NISHIKIDA (ILCAA) “Palestinians in the Middle East” 2 September

	<p>Hidemitsu KUROKI (ILCAA) “Elites in the Ottoman Period” Souad SLIM (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand) “Christians in the Middle East (1)” Ray MOUAWAD (ILCAA Joint Researcher, Saint Joseph University) “Christians in the Middle East (2)” Hidemi TAKAHASHI (ILCAA Joint Researcher, The University of Tokyo) “Christians in the Middle East (3)” Antranig DAKESSIAN (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University) “Armenians in the Middle East (1)” Takayuki YOSHIMURA (ILCAA Joint Researcher, Waseda University) “Armenians in the Middle East (2)” All members About next meetings</p>
	使用言語：英語
	JaCMES, Beirut
	共同利用・共同研究課題 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies”
9月13日(火)	<p>チベットの今を見つめる眼『Bringing Tibet Home』【公開】 1. Bringing Tibet Home 劇中歌担当テンジン・チョーギャルさんによる歌とお話 2. Bringing Tibet Home 上映 (18:30ging Ti 3. テンジン・ツェテン・チョクレイ監督講演 4. テンジン・チョーギャルさんによる歌 Bringing Tibet Home 2014 アメリカ／韓国／インド 82分 監督 Tenzin Tsetan Choklay (テンジン・ツェテン・チョクレイ)</p>
	使用言語：日本語, チベット語 (日本語⇔チベット語の逐次通訳あり)
	AA 研 (303)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, キキソチベットまつり
9月26日(月) ～30日(金)	<p>Language Documentation Seminar (言語ドキュメンテーションセミナー) 講師: 呉人徳司 (AA 研所員), Zhargal Badagarov (ブリヤート国立大学(ロシア)), Sambuudorj Ochirbat (モンゴル国科学アカデミー)</p>
	使用言語：モンゴル語, 英語
	モンゴル国科学アカデミー言語文学研究所 (モンゴル)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, モンゴル国科学アカデミー言語文学研究所 (モンゴル)
10月26日(水) ・27日(木), 29日(土) ・30日(日)	<p>第1回シベ言語文化国際会議【公開】 10月26日 会場：九州大学文学部会議室 10:30-10:40 久保智之 (九州大学) 開会 10:40-11:10 久保智之 (九州大学) 日本側あいさつ 11:00-12:00 賀元秀 (イリ師範学院) 中国側あいさつ 13:30-14:40 賀元秀 (イリ師範学院) 14:50-15:50 庄声 (東北師範大学) 16:00-17:00 趙潔 (イリ師範学院) 17:10-17:30 総合討論 10月27日 会場：九州大学文学部会議室 10:30-11:30 児倉徳和 (AA 研所員) 11:30-12:00 久保智之 (九州大学) 10月29日 会場：AA 研マルチメディア会議室 (304)</p>

	<p>10:30-10:40 児倉徳和 (AA 研所員) 開会 10:40-11:10 児倉徳和 (AA 研所員) 日本側あいさつ 11:10-12:00 賀元秀 (イリ師範学院) 中国側あいさつ 13:30-14:30 Zikmundova, Veronika 14:40-15:50 承志 (追手門学院大学) 16:00-17:00 孟榮路 (瑟公錫滿文化伝播中心) 17:10-17:30 総合討論 10月30日 会場: AA 研マルチメディア会議室 (304) 10:30-11:30 久保智之 (九州大学) 11:30-12:00 児倉徳和 (AA 研所員) 閉会</p> <p>使用言語: シベ語, 中国語, 日本語</p> <p>九州大学文学部会議室, AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 科学研究費補助金・基盤研究 (B)「シベ語の体系的文法と辞書の作成」(研究代表者: 久保智之 (九州大学) 課題番号: 24320079), 若手研究 (B)「記憶領域のモデル化に基づくシベ語文法の研究」(研究代表者: 児倉徳和 (AA 研所員) 課題番号: 26770144)</p>
11月11日(金)	<p>第4回リンディフォーラム 【公開】 Erika SANDMAN (ヘルシンキ大学) “Wutun, a creolized Sinitic language from Northwest China’s Amdo Sprachbund”</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
11月22日(火)	<p>第6回リンディフォーラム 【公開】 I Wayan Arka (オーストラリア国立大学准教授) “Clausal complexity and syntactic gradience: evidence from Ballinese”</p> <p>使用言語: 英語</p> <p>AA 研 (306)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
11月28日(月) ~30日(水)	<p>International workshop on language documentation of Indoensian languages (インドネシアの言語のドキュメンテーションに関する国際ワークショップ) Lecturers: Antonia Soriente (University of Naples “L’Orientale”, ILCAA Joint Researcher), Anthony Jukes (La Trobe University, ILCAA Joint Researcher), Asako SHIOHARA (ILCAA), Yanti (Atma Jaya Catholic University of Indonesia, ILCAA Joint Researcher)</p> <p>使用言語: インドネシア語, 英語</p> <p>Artha Wacana Christian University, Kupang (インドネシア)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, Artha Wacana Christian University, Kupang</p>
11月29日(火)	<p>JaCMES Round Table “The future of Syria and the surrounding countries” Chair: Aiko Nishikida (ILCAA)</p> <p>15:00-15:10 Welcoming remarks Hidemitsu KUROKI (ILCAA) 15:10-15:40 Presentation 1 Nobuhisa DEGAWA (NHK-Japan Broadcasting Corporation) 15:40-16:10 Presentation 2 Eberhardt Kienle (Institut Francais du Proche-Orient) 16:10-16:40 Presentation 3 Tetsuya SAHARA (Meiji University) 16:50-17:20 Presentation 4 Lokman Slim (Umam Documentation & Research) 17:20-17:50 Presentation 5 Yasuyuki MATSUNAGA (Tokyo University of Foreign Studies) 17:50-18:20 Discussion</p> <p>使用言語: 英語</p>

	<p>JaCMES, Beirut</p> <p>基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」</p>
12月27日(火)	<p>公開講演会：大瀬二郎（報道写真家）「遙かなる地へ思いを馳せて」／ジュリア・アン・ザイカウスキー（国連難民高等弁務官事務所）「中央アフリカおよび東アフリカにおける難民の現状」【公開】</p> <p>1. 大瀬二郎（報道写真家） 「遙かなる地へ思いを馳せて」</p> <p>2. ジュリア・ザイカウスキー（Julia Zajkowski）国連難民高等弁務官事務所（UNHCR） 「中央アフリカおよび東アフリカにおける難民の現状」</p> <p>3. 総合討論</p> <p>使用言語：日本語・英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるミクローマクロ系の連関2」</p>
2017年1月7日(土)	<p>コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会【公開】</p> <p>1. 佐伯隆志（コタキナバル日本人会会長），床呂郁哉（AA 研所員） 開会挨拶</p> <p>2. 金子奈央（日本貿易振興機構・アジア経済研究所／AA 研共同研究員） 「教育からみるマルチ〇〇社会マレーシア」</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>コタキナバル日本人会，AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス</p> <p>コタキナバル日本人学校 KINABALU JAPANESE SCHOOL (Lorong Burong Ejek House No.8, Jalan Tuaran, Miles 3.5, 88450, Kota Kinabalu, Sabah, Malaysia)</p>
1月16日(月)～18日(水)	<p>フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ：連続講義「データマネージメントとアーカイブ」 【公開】</p> <p>講師：Nicholas Thieberger（メルボルン大学，言語アーカイブ PARADISEC ディレクター）</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築（LingDy3）」，頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」</p>
2月4日(土)	<p>邦人向け公開講演会『バリ島の芸能文化—踊り，奏で，祈る日常』【公開】</p> <p>吉田ゆか子（AA 研所員） 講演</p> <p>国際交流基金ジャカルタ日本文化センター（Summitmas I, 2-3F, Jalan Jenderal Sudirman, Kav. 61-62 Jakarta Selatan 12190, Indonesia）</p> <p>使用言語：日本語</p> <p>AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス，協力：国際交流基金ジャカルタ日本文化センター，ジャカルタ・ジャパン・クラブ</p>
2月9日(木)	<p>情報資源利用研究センター・国際ワークショップ【公開】</p> <p>「中野暁雄氏の「ベルベル民族誌」について：ラハセン・アフーシュ氏による証言の再解釈 —スース地方の現代社会と照らし合わせて—」</p> <p>1. 小田淳一（AA 研）</p> <p>ワークショップの趣旨説明と講演者紹介</p> <p>2. 講演者：ラハセン・ダーイフ（リヨン第2大学）</p> <p>「中野暁雄氏の「ベルベル民族誌」について：ラハセン・アフーシュ氏による証言の再解釈 —スース地方の現代社会と照らし合わせて—」</p> <p>3. コメント</p> <p>コメンテータ</p> <p>堀内里香（神奈川大学）</p>

	堀内正樹 (成蹊大学) 齋藤剛 (神戸大学)
	使用言語：フランス語 (通訳あり), 日本語 通訳：岡本尚子 (洗足学園音楽大学)
	AA 研 セミナー室 (301)
	情報資源利用研究センター
2月18日 (土) ・19日 (日)	国際シンポジウム「チベット牧畜民の「いま」を記録する」/AA 研共同利用・共同研究 課題「人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学の構築 ～青海チベットにおける牧 畜語彙収集からのアプローチ」第8回研究会 【公開】 2月18日 別所裕介 (AA 研共同研究員, 京都大学) 「チベット牧畜民の「いま」を記録する：趣旨 説明」 山口哲由 「牧畜政策の変遷と放牧の変化」 平田昌弘 (AA 研共同研究員, 帯広畜産大学) 「アムド系チベット牧畜民のミルクの世界」 ナムタルジャ (AA 研共同研究員, 滋賀県立大学大学院生) 「チベットの牧畜社会におけ るヤクの糞の名称とその利用法について：中国青海省黄南チベット族自治州沢庫県の事 例」 別所裕介 (AA 研共同研究員, 京都大学) 「草原の地価上昇? : アムド・ゴロク地方の冬 虫夏草バブルと不動産投機」 海老原志穂 (AA 研共同研究員, AA 研ジュニア・フェロー) 「家畜は宝物」 星泉 (AA 研所員) 「牧畜文化辞典をつくる」 全員 総合討論 コメンテーター 棚瀬慈郎 (滋賀県立大学), 西田愛 (神戸市外国語大学) 2月19日 ジャブ (AA 研共同研究員, 青海師範大学) 「チベット牧畜民の口承文学」 ニャンチャクジャ (GANGLHA) 「持続可能なチベットコミュニティを目指して—地域発 展のための社会起業家たちへのローカルな取り組み」 カシャムジャ (AMILOLO FILM) 「スクリーンの上の牧畜民—アムド牧畜民に関する民 族学的映像製作から得たこと」 全員 総合討論 コメンテーター 村上大輔 (駿河台大学), 根本裕史 (広島大学)
	使用言語：日本語, チベット語
	AA 研 (304)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 科学 研究費 (基盤B) 「チベット牧畜民の生活知の研究とそれに基づく牧畜マルチメディア辞 典の編纂」 (代表者：星泉 (AA 研所員), 課題番号：15H03203)
2月26日 (日) ～3月3日 (金)	シベ語ドキュメンテーションのためのワークショップ 参加者：児倉徳和 (AA 研所員), 賀舒堅 (瑟公錫満文化伝播中心), 孟栄路 (瑟公錫満 文化伝播中心), 劉飛熊 (瑟公錫満文化伝播中心)
	使用言語：中国語, シベ語
	AA 研 (705)
	基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
3月1日 (水)	第7回リンディフォーラム “On grammaticalization processes in Ao: Sources, pathways and functional extensions” 【公開】 Alexander COUPE (ナンヤン工科大学)
	使用言語：英語
	AA 研 (306)
	頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を

	中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
3月2日(木)	第8回リンディフォーラム “Nominalization and grammatical complexity in Tibeto-Burman and beyond” 【公開】 Alexander COUPE (ナンヤン工科大学) 使用言語: 英語 AA 研 (306) 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築, 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」
3月3日(金) ～5日(日)	国際バントゥ諸語マイクロ・バリエーションワークショップ/共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究(フェーズ1)」第3回研究会【3月3日のみ公開】 3月3日 10:30-18:00 (公開) 10:30-13:00 Marten, Lutz, Hannah Gibson and Rozenn Guerois (SOAS, University of London) “Basic concepts and perspectives on micro-parametric approach to Bantu morphosyntax [interim]” 14:30-16:00 Bostoen, Koen (Gent University) “Micro-variation and historical reconstruction in the West-Coastal Bantu languages” 16:15-17:45 Gastor Mapunda (University of Dar es Salaam) “An Account of Contact-Induced Language Instability in the Tanzanian Ngoni Language” 17:45-18:00 All members & Discussants: Kumiko MIYAZAKI (State University of Zanzibar), Sayaka KUTSUKAKE (Osaka University) Questions and Answers, Discussion Yuko ABE (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) Closing remarks. 18:30-20:30. Reception. 3月4日 10:30-20:30 (非公開) 10:30-18:00 “Workshop based on Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list” 3月5日 10:30-18:00 (非公開) 10:30-18:00 “Workshop based on Parameters of Bantu morphosyntactic variation: Master list” 使用言語: 英語 AA 研 (304) 基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」
3月3日(金) ～4日(土)	共同利用・共同研究課題 JaCMES 実施分 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies” 第2回研究会 3 March Yohei KONDO (ILCAA Joint Researcher, ILCAA Research Associate) Survival Strategies of Minority Groups: A General Introduction Antranig DAKESSIAN (ILCAA Joint Researcher, Haigazian University) “Surviving Strategies of Armenians in Lebanon” Guita HOURANI (ILCAA Joint Researcher, Notre Dame University-Louaize (NDU)) “Surviving Strategies of the Kurds in the M.E.” Hiroki WAKAMATSU (ILCAA Joint Researcher, Toros University) “Surviving Strategies of Alevis” 4 March Tatsuya KIKUCHI (The University of Tokyo) “Surviving Strategies of Druzes” Asuka TSUJI (ILCAA Joint Researcher, Kawamura Gakuen Woman's University) “Surviving Strategies of Copts in Egypt” Souad SLIM (ILCAA Joint Researcher, University of Balamand) “Surviving Strategies of Orthodox Christians in Lebanon” Ray MOUAWAD (ILCAA Joint Researcher, Saint Joseph University)

	<p>“Surviving Strategies of Minority Groups in Tripoli”</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研セミナー室 (301)</p> <p>共同利用・共同研究課題 “Studies on Religious and Politico-Social Minority Groups in Middle Eastern Societies”</p>
3月9日(木)	<p>アジア・アフリカの文化と社会に関する東京外国語大学—マレーシア・サバ大学の交換講演会【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. ジャリハ・モハメド・シャー (マレーシア・サバ大学) 開会挨拶 (1) 2. 床呂郁哉 (AA 研所員) 開会挨拶 (2) 3. 蔦谷匠 (京都大学) 「オランウータンの生態と保全: 現状のレビューとダナムバレイでの研究紹介」 4. 伊藤詞子 (京都大学) 「マハレ山塊国立公園 (タンザニア) のチンパンジーをとりまく環境の長期的変動」 5. 奥野克巳 (立教大学) 「ヤマアラシの胃石と油ヤシ・プランテーション: サラワクにおける人間と自然の相互作用をめぐる民族誌粗描」 6. Paul Prodong (Universiti Malaysia Sabah) “Conservation and cultural revival: A case study on Gumantung Forest of Matunggong, Sabah” 7. 討論 <p>使用言語：英語</p> <p>Meeting Room, Faculty of Humanities, Arts and Heritage, Universiti Malaysia, Sabah, Kota Kinabalu</p> <p>情報資源利用研究センター, 共催: AA 研コタキナバル・リエゾンオフィス, School of Social Science, Universiti Malaysia Sabah, Kota Kinabalu</p>
3月10日(金)	<p>国際シンポジウム “Language Documentation and Corpus Linguistics”/共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第8回研究会【公開】</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. 塩原朝子 (AA 研所員) はじめに 2. Nicholas Evans (オーストラリア国立大学) “Do grammars do best what speakers did most: the Social Cognition Parallel Interview Corpus (SCOPIC) cross-linguistic corpus on social cognition in grammar” 3. Stefan Schnell (メルボルン大学) “Conditions on object agreement and pronominalisation – a corpus-based typological study” 4. Sonja Riesberg (AA 研共同研究員, オーストラリア国立大学, ケルン大学) “Cross-corpus annotation - a report from the ongoing Three Participant-Project” 5. I Wayan Arka (AA 研共同研究員, AA 研客員准教授, オーストラリア国立大学) “On the pedagogical literacy for local (endangered) languages: lessons learned from Indonesia” 6. ディスカッション <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」</p>
3月12日(日)	<p>International Workshop: Agricultural Practice and Social Dynamics in Niger</p> <ol style="list-style-type: none"> 1. Jan Patrick Heiss (University of Zurich) “Some reflections on the relationship between magic/religion and field-cultivation in South Central Niger” 2. Yuichi SEKIYA (The University of Tokyo) “Comparative study on African rural development, Niger, Kenya and Malawi: An analysis focusing on Nigerien case” 3. Shuichi OYAMA (Kyoto University) “Hausa basic thought of the movement “harukuki” and population explosion in Niger”

	<p>4. Yutaka SAKUMA (ILCAA) “Present of Sudanese agricultural complex: The case of western Niger” 5. Aggée Celestin LOMO MYAZHIOM (ILCAA Visiting Professor) Total comment 6. Discussion</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (306)</p> <p>AA 研, 共催：基幹研究「アジア・アフリカにおけるハザードに対する『在来知』の可能性の探究—人類学におけるマイクロ・マクロ系の連関2」, 科研費若手 A「サハラ南縁地域をめぐるモラル・エコノミー論的土地制度研究を通じた所有概念の再構築」(研究代表者：佐久間寛 (AA 研所員) 課題番号：15H05385)</p>
3月13日(月)	<p>映画会議 “Protesters on the Street” Film Screening of “Tell the Prime Minister”, Lecture by Eiji Oguma (Keio University)</p> <p>使用言語：英語</p> <p>Metropolis Empire Sofil, Ashrafieh, Gerges Tueini Str., Bldg. 28, 1st floor, Beirut</p> <p>基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」</p>
3月14日(火) ・15日(水)	<p>フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ：連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」【公開】 講師：Sonja Riesberg (オーストラリア国立大学, ケルン大学, AA 研共同研究員)</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>主催：頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」 後援：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
3月21日(火) ・22日(水)	<p>フィールド言語学ワークショップ：第11回 文法研究ワークショップ：講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型～アノテーションシステム GRAID を用いて～」【公開】 講師：Stefan Schnell (メルボルン大学ポスドク研究員)</p> <p>使用言語：英語</p> <p>AA 研 (304)</p> <p>主催：頭脳循環を加速する戦略的国際研究ネットワーク推進プログラム「危機言語・少数言語を中心とする循環型調査研究のための機動的国際ネットワーク構築」 後援：基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」</p>
3月24日(金) ～30日(木)	<p>インドネシア スサ・トゥンガラ・ティムール州の危機言語記録のためのワークショップ ／共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」第9回研究会 【3月27日のみ公開】</p> <p>コーディネーター： 1. 塩原朝子 (AA 研所員) 2. Antoinette Schapper (AA 研共同研究員, KITLV) 3. Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia)</p> <p>参加者： 1. Amos Rehabeam Sir (UBB GMIT Kupang) 2. Semram Serang (Education and Culture Service of Sub Region of Pantar) 3. Dominikus Tauk (Udayana University) 4. Jermy Imanuel Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang) 5. Elsjon Marjesi Thine (Smpn Satu Atap Batulai, Rote) 6. Anderias Susang</p> <p>3月27日公開講演のプログラム Antoinette Schapper (AA 研共同研究員, KITLV) “History of a macro-linguistic area through lexico-semantics: The case of Southeast Asia”</p>

Amos Rehabeam Sir (UBB GMT Kupang) “Languages in Alor” I Wayan Arka (AA 研共同研究員, AA 研客員准教授, オーストラリア国立大学) “Plurality and comitatives in Indonesian languages” Yanti (AA 研共同研究員, Atma Jaya Catholic University of Indonesia), Dominikus Tauk (Udayana University), 塩原朝子 (AA 研所員) “Metathesis and Truncation in Helong: A Preliminary Study” Jermy Imanuel Balukh (STIBA Cakrawala Nusantara Kupang), and Elsijon Marjesi Thine (Smpn Satu Atap Batulai, Rote) “An overview of Rote language”
使用言語：英語
AA 研 (304)
基幹研究「多言語・多文化共生に向けた循環型の言語研究体制の構築 (LingDy3)」, 共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワーク構築」

II-4.3.2 外国人研究員招聘

I-4.3.3 外国人研究員招聘を参照。

また、それぞれの業績はI-2.7.2 所員の研究業績一覧 外国人研究員の項を参照。

II-4.3.3 外国研究者受け入れ（フェロー等）

フェロー

杜山那里・阿不都拉西木（デュセンアイル・アブディラシム）

研究主題：カザフ・ハン国文書に関する研究

研究期間：2016.12.27～2017.12.27

受入教員：野田 仁

研究成果

報道：カザフスタン Egemen Kazakhstan 新聞<歴史>「中国第一歴史档案館蔵カザフ関連文書について」, 2017.3.24.

ジュニア・フェロー

烏云高娃（ウユンゴワ）

研究主題：近代内モンゴル知識人の文化活動

研究期間：2016.4.1～2017.3.31

受入教員：中見 立夫

研究成果

1. 口頭発表：『奉天蒙文報』と内モンゴル知識人たち, 中国蒙古史学会「清代以来蒙古政治与社会变迁学术研讨会」, 2016.10.15, 呼和浩特.
2. 取材協力: 锡林郭勒职业学院<锡林郭勒三个 100 口述史>项目

周 太 加（ジュクタルジャ）

研究主題：青海近代史—アムドにおけるチベット人の文化活動を手掛かりとして

研究期間：2015.4.1～2016.3.31

受入教員：星 泉

Arezoo Fakhrejehani (アレズ ファクレジャハニ)

研究主題：イランと中東他国との関係、そして、相違

研究期間：2014.4.1～2017.3.31

受入教員：飯塚 正人

II-4.3.4 研究未開発言語文化の調査事業

2016年度派遣者一覧

言語研修のための資料収集を目的とした派遣

大島 一氏 (成城大学非常勤講師)

目的： 2016 (平成28) 年度言語研修『ハンガリー語』実施のための教材作成準備作業

渡航先： オーストリア, ハンガリー

期間： 2016年9月3日～2016年9月15日

II-4.4 研究成果と資料の公開

II-4.4.1 出版

2016年度に AA 研から刊行された出版物は下記の通りである。なお、電子出版物については「5. 電子出版物」を参照のこと。

1. 逐次刊行物

『アジア・アフリカ言語文化研究』 Journal of Asian and African Studies

① No.92 (2016.9)

② No.93 (2017.3)

編集：アジア・アフリカ言語文化研究所編集委員会 (委員長：床呂郁哉) 年に 2 回発行

<http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/jaas/back-issue>

所外の研究者をふくむ編集専門委員会によって運営され、毎号、査読を経た水準の高い言語学・歴史学・文化人類学に関する論文を掲載。海外からの投稿も多数あり、国内外から高い評価を得ている。

『FIELDPLUS (フィールドプラス)』 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/field-plus/back-issue>

① No.16 (2016.7) 巻頭特集 イスラームに基づく商品とサービスの多様性 責任編集/福島康博

② No.17 (2017.1) 巻頭特集 チベット牧畜民の「今」を記録する 責任編集/星泉

多様な研究分野の垣根を超えて、世界のあらゆる地域をフィールドとする研究者たちの取り組みや経験を紹介する雑誌。年 2 回 (1 月・7 月) 刊行。高校生以上の若い世代をふくむ多くの読者を対象として、豊富なカラー写真や図を使い、フィールド研究の面白さを伝えていく。

『アジア・アフリカの言語と言語学』 Asian and African Languages and Linguistics/AALL

ISSN: 2188-0840 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall>

Vol.11(2017.3) Special Feature: DocLing Workshop: Dedication to Kristian Walianggen.

編集：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所『アジア・アフリカの言語と言語学』編集部

《No.8 より、オンラインジャーナル化》 <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/aall/back-issue/>

フィールドワークに基づく記述的言語研究の成果を発信するために 2006 (平成 18) 年に創刊された学術雑誌。東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の言語学分野の研究者が編集。本誌は、アジア・アフリカの言語を主な対象とし、一次データに基盤を置いた記述的研究の成果を共有することで、(i) 言語システムの実現形である個別言語の包括的な理解を深め、(ii) 人間言語の構造的多様性を明らかにし、(iii) 言語記述・理論研究にも貢献することを目的としている。

2. 言語研修テキスト

言語研修テキストは、2016年度版から電子出版物として公開されている。<https://publication.aa-ken.jp/>

- ① 琉球語 B232『2016年度言語研修「琉球語」成果報告書』新永悠人・下地理則・占部由子(編) Intensive Language Course 2016, *The Ryukyuan Languages: Basic Vocabularies and Grammatical Outlines*. Niinaga, Yuto, Shimoji Michinori., and Urabe Yuko (eds.).2017. ISBN 978-4-86337-232-0

② ヒンディー語

1. B249『平成28年度言語研修ヒンディー語テキスト1:デーバナーガリー文字練習帳』西岡美樹, ILCAA Intensive Language Course 2016: *Hindi Textbook 1, Learning Hindi: How to Write and Read Devanagari Script*. Nishioka, Miki. 2017.3.27. ISBN 978-4-86337-249-8
2. B250『平成28年度言語研修ヒンディー語テキスト2:初級ヒンディー語 文型練習帳』西岡美樹(編), Gunjan Sharma(著), Ashwani Kumar Srivastava(監修) ILCAA Intensive Language Course 2016: *Hindi Textbook 2, Learning Hindi: Basic Sentence Patterns*. Nishioka, Miki (ed.), Gunjan Sharma (author), Ashwani Kumar Srivastava (supervised). 2017.3.27. ISBN 978-4-86337-250-4
3. B251『平成28年度言語研修ヒンディー語テキスト3:現代ヒンディー語 文法概説初級~初中級編』西岡美樹, ILCAA Intensive Language Course 2016: *Hindi Textbook 3, Handbook of Modern Hindi Grammar: for Primary and Pre-intermediate Levels*. Nishioka, Miki. 2017.3.27. ISBN 978-4-86337-251-1
4. B252『平成28年度言語研修ヒンディー語テキスト4:初級ヒンディー語 会話編』西岡美樹・Ranjana Narsimhan(編), ILCAA Intensive Language Course 2016: *Hindi Textbook 4, Learning Hindi: Hindi Conversation*. Nishioka, Miki, and Ranjana Narsimhan (eds.). 2017.3.27. ISBN 978-4-86337-252-8
5. B253『平成28年度言語研修ヒンディー語テキスト6:初級ヒンディー語 語彙集』西岡美樹(編), ILCAA Intensive Language Course 2016: *Hindi Textbook 6, Learning Hindi: Vocabulary*. Nishioka, Miki (ed.). 2017.3.27. ISBN 978-4-86337-253-5

3. アジア・アフリカ基礎語彙集

- B208 [AAL-59] 『アフリカーンス語・日本語辞典 Afrikaans-Japanese woordenboek』
E. F. コツェー Afrikaans-Japanese Dictionary. Ernst F. Kotzé. 2017.1.31. ISBN 978-4-86337-208-5

4. 地域・文化研究

北東アジア (NORTHEAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#northeastasia>

- B245 Linguistic Typology of the North Volume 4. Ebata, Fuyuki, and Kurebito Tokusu (eds.). 2017.3.
ISBN 978-4-86337-245-0

東アジア (EAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#eastasia>

- B230『大本曲『黄氏女対金剛経』の研究—雲南大理白族の白文の分析』立石謙次・吉田章人 *The Study of Huang Shi Nii Dui Jin Gang Jing, a Text of Da Ben Qu that Records the Folk Entertainment Songs Performed by the Bai People: the Analysis of the Texts of the Bai People in Yunnan Province of China*. Tateishi, Kenji, and Yoshida Akihito. 2017.1.31. ISBN 978-4-86337-230-6

東南アジア (SOUTHEAST ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#southeastasia>

1. B227 [LSTCA107] *The Siam (Hsem) Language*. Shintani, Tadahiko L.A. 2016.8.8. ISBN 978-4-86337-227-6
2. B228 [LSTCA108] *The Va (En) Language*. Shintani, Tadahiko L.A. 2016.8.8. ISBN 978-4-86337-228-3
3. B229 [LSTCA109] *The Nangki Language*. Shintani, Tadahiko L.A. 2016.8.8. ISBN 978-4-86337-229-0
4. B240 [LSTCA110] *The Matu Language*. Shintani, Tadahiko L.A. 2016.12.20. ISBN 978-4-86337-240-5.

南アジア (SOUTH ASIA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#southasia>

1. B243『闘うチベット文学 黒狐の谷』ツェラン・トンドゥブ(著), 海老原志穂・大川謙作・星泉・三浦順子(訳), *The Valley of Black Foxes. (Japanese translation of the collected works of Tsering Döndrub)*. Tsering Döndrub (author). Ebihara, Shiho, Okawa Kensaku, Hoshi Izumi, and Miura Junko (trans.). 2017.3.31. ISBN 978-4-86337-243-6
2. B244『チベット文学と映画制作の現在 Sernya Vol.4』星泉・海老原志穂・大川謙作・三浦順子(編), *Tibetan Literature and Filmmaking Sernya Vol.4*. Hoshi, Izumi, Ebihara Shiho, Okawa Kensaku, Miura Junko et al. (eds.). 2017.2.25. ISBN 978-4-86337-244-3
ISBN 978-4-86337-226-9.
3. B231『前近代南アジア社会におけるまとまりとつながり』太田信宏(編), *Collective and Connectedness in Pre-modern South Asian Society*. Ota, Nobuhiro (ed.). 2017.2.20. ISBN 978-4-86337-231-3

アフリカ (AFRICA) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#africa>

1. B233 *Proceedings of the 8th World Congress of African Linguistics*. Kaji, Shigeki (ed.). 2017.3.17. ISBN 978-4-86337-233-7
2. B239 *Kabendeni: Historia fupi ya wilaya ya Mpanda-Katavi na watu wake, kabila la Wabende. Kabenden: The Short History of Mpanda District; Katavi Region; Bende Tribe and its People*. Juma H. Lumbwe (author), Abe, Yuko (editor, translator). 『Kabendeni カタヴィ州ンパンダ県小史：ベンデ民族とその人々』, ジュマ H ルンブウェ・阿部優子 (監修・訳) 2017.3.20. ISBN 978-4-86337-239-9

広域 (EXTENSIVE AREAS) <http://www.aa.tufs.ac.jp/ja/publications/area-culture#extensive>

B242 *Proceedings of the International Workshops on Information Structure of Austronesian Languages 2013-2016*. Utsumi, Atsuko, and Shiohara Asako (eds.). 2017. ISBN 978-4-86337-242-9

5. 電子出版物

著作権者からの許諾を得て2016年度に公開した電子出版物は下記の通りである。<https://publication.aa-ken.jp/>

1. B246 『資料集：三世紀の長沙における吏民の世帯—走馬楼呉簡吏民簿の戸の復原』 鷺尾祐子, *Household Registers in Third Century Changsha: A Collection of Source Documents Reconstructed from Zoumalou-Wujian*. Washio Yuko. 2017.5.9. ISBN 978-4-86337-246-7
2. B241 *Proceedings of the Third International Workshop on Information Structure of Austronesian Languages (Second enlarged edition 2017)*. Utsumi, Atsuko, and Shiohara Asako (eds.).2017. ISBN 978-4-86337-241-2
3. B238 [SAGM 1] *Papers from the Third International Conference on Asian Geolinguistics*. Endo, Mitsuaki (ed.). 2016. ISBN 978-4-86337-238-2
4. B237 *Studies in Asian Geolinguistics III*. Endo, Mitsuaki (ed.). 2016. ISBN 978-4-86337-237-5
5. B236 *Studies in Asian Geolinguistics II*. Endo, Mitsuaki (ed.). 2016. ISBN 978-4-86337-236-8
6. B235 *Studies in Asian Geolinguistics I*. Endo, Mitsuaki (ed.). 2016. ISBN 978-4-86337-235-1

上記の他, 「2. 言語研修テキスト」に挙げたテキストも電子出版物として公開されている。

II-4.4.2 データベース構築・公開状況一覧

2016年度 新規追加 5件:

故湯川恭敏所員の調査テープに残された言語データの電子化およびメタデータ公開 (塩原朝子, 品川大輔)
http://aflang-res.aa-ken.jp/?page_id=178

オスマン演劇ポスター画像公開 (江川ひかり)
<http://osmanlitivatro.aa-ken.jp/>

ヒンディー語・ウルドゥー語の語彙属性自動解析 (2) (町田和彦, 萩田博, 萬宮健策)
http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/etym_hirdu/2016.htm

ベンデ語の語学教材 (“Tusahule Sibhende”(2015)) のマルチメディア (Web) 版の作成 (阿部優子)
<http://bendeproject.aa-ken.jp/>

オスマン演劇ポスターに関する情報の精度化 (江川ひかり)
<http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

チュルク諸語対照基礎語彙 (児倉徳和, 風間伸次郎)
<http://turkbv.aa-ken.jp/>
<http://turkbv.aa-ken.jp/turkbv2016/index.html> (2016年度)

アイヌ語音声資料の文字化テキスト対応づけと公開 (奥田統己, 山越康裕)
<http://ainugo.aa-ken.jp/index.html>

チベット牧畜語彙データベース (星泉, 海老原志穂, 津曲真一, 平田昌弘, 別所裕介, ジャブ, ジュ・カザン, ナムタルジャ, 山口哲由, 小川龍之介)
<http://nomadic.aa-ken.jp/>

オンライン・スライアモン語テキスト集 (渡辺己)

<http://sliammontexts.aa-ken.jp/>

ソンガイ語テキスト集の電子化と公開 (佐久間寛)

<http://songhay.aa-ken.jp/>

インドネシア周辺の少数言語のリソース&情報センター (塩原朝子, 内海敦子, 稲垣和也)

<http://id-lang-rc.aa-ken.jp/>

<http://ntt-lang.aa-ken.jp/> (2016 年度)

リアルタイムフィールドワーク報告システムの構築 (梅川通久)

<http://rft.aa-ken.jp/>

AA 研辞書データベースの WebAPI 提供への試み (松田訓典)

<http://ircdict.aa-ken.jp/>

ハウサ語, ヨルバ語電子辞書の作成と公開 (塩田勝彦, 町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2013/Hausa_Yoruba/Hausa_Yoruba_dic.html

パレスチナ/イスラエルにおける共存を求める運動の記録 (岩崎稔, 錦田愛子, 武田祥英)

<http://otherisrael.aa-ken.jp/>

海外学術調査総括班

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~gistr/index.htm>

アジア・アフリカにおける多言語状況と生活文化の動態 (梶茂樹, 飯塚正人, 石井溥, 小田淳一, 黒木英充, 塩原朝子, 高知尾仁, 永原陽子, Peri Bhaskararao, 深澤秀夫, 星泉)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tagengo/>

地域研究による「人間の安全保障学」の構築 (黒木英充)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/humsecur/>

GIS を用いた認知地図の解析の試み (河合香吏)

http://irc.aa.tufs.ac.jp/gis/gis_project.html

言語調査票 (峰岸真琴)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/query/aaquery-1.htm

「アサバスカンリバイバル」アサバスカ諸語の言語と文化に関する展示会と学会 (呉人徳司, 中山俊秀, 小田昌教, ジェフ・リアー, 峰岸真琴, 高島淳, 内堀基光)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/athabaskan/>

浅井タケ昔話全集 I, II (峰岸真琴)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/kiki_gen/murasaki/asai01.html

GICAS (COE 拠点) (ペーリ・バースカララーオ, 町田和彦)

<http://www.gicas.jp/>

福建省, 台湾の文化 (三尾裕子)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/>

ベトナム ホイアン歴史民族誌 (三尾裕子, 澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/DAMCSR/hoian.html>

中部ベトナム地名対応表 (現在⇔『同慶地輿志』所収) (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-viet.html>

チャム碑文検索 (高島淳)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/khmercham/cham_insc.html

チャム碑文画像データベース (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc/chaminscindex.html>

チャムの碑文 (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/chaminsc.html>

ビルマ文字のローマ字転写方式 (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/burroman.pdf>

ビルマ文字の碑文・墨文 (画像+転写) (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/ODSEAS/burminsc.html>

ビルマ語学習のためのテキスト (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/oldtexts-sjis.html>

カチン州地名データベース (試験公開) (澤田英夫・梅川通久)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/gnames-kachin.html>

20世紀前半のインドネシア華人関連資料コレクション (津田浩司)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/arsip_tionghoa/

ムラコ語-外来語辞典 “Kitab VORTARO” (津田浩司)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tsuda/IRC/vortaro/>

南タイホームページ (西井涼子, アレックス・ホーストマン)

http://www.uni-muenster.de/Ethnologie/South_Thai/

サンスクリット電子辞書 (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/sktdic/index.html>

インド聖典データベース (高島淳)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/gicas/ind_scripture.html

ヒンドゥーの神々の図像様相 (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/indspace/dcsidx.html>

アジア文字曼陀羅～インド系文字の旅 (宮崎恒二, 町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/i-moji/>

Saiva Scriptures (高島淳)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/data/saiva/>

アジア諸文字実装プロジェクト (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/gicas/ASTI/asti_j.htm

インド憲法 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/constitution_of_india/consti_top_j.htm

デーヴァナーガリー文字 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/grammatology/devanagari/dvng_r_top_j.htm

ヒンドゥー教の神々 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindu_gods/gods_top_j.htm

インド地図 (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/map.htm>

ヒンディー語電子辞典 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/mrd/mrd_top_j.htm

ヒンディー語テキストコーパス (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/txtsrchj.htm>

ヒンディー語の文字転写規則 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/dv_trans/dv_tr_j.htm

こうすれば話せる CD ヒンディー語 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/asahi/as_top_j.htm

エキスプレスヒンディー語 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/express_hindi/ex_top_j.htm

ヒンディー語オノマトペ (擬態語・擬声語) (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/onoma.htm>

多言語処理技術の基盤整備 (NEDO プロジェクト 2000-2002) (星泉, 町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/nedo/nedo_top_j.htm

多言語処理技術の基盤整備 (町田和彦, 星泉)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/nedo/nedo_top_j.htm

サントル語辞書・検索 (峰岸真琴)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mmine/india/india-j.htm>

現代チベット語動詞辞典 (星泉)

<http://star.aacore.jp/vdic/>

チベットの言語と文化 (星泉)

<http://star.aa.tufs.ac.jp/>

Old Tibetan Documents Online (URL 修正)

(星泉, 今枝由郎, 武内紹人, 岩尾一史, 石川巖, 大原良通, 西田愛, ブランドン・ドットソン, ナタン・ヒル, サム・ヴァン・シャイク)

<http://otdo.aa-ken.jp/>

チベット地図／人名・地名検索 (星泉)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~hoshi/cgi-bin/dictionary/TJmap.html>

チベット語 IM (星泉)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~hoshi/tibetjiten/jitenframe.html>

アラビア文字の旅 (宮崎恒二, 町田和彦)

<http://www.gicas.jp/a-moji/index.html>

近現代アラブ・イスラーム研究 (飯塚正人)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~masato/>

カイロの肖像・19世紀（黒木英充）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/kairo/>

オスマン朝演劇ポスター（飯塚正人）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/osman/>

トムソン写真集（吉澤誠一郎）

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/thomson/>

オスマン古地図（jpeg データ）（黒木英充）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kuroki/map/frameM.html>

マダガスカル研究（深澤秀夫）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/>

西アフリカ民族誌（真島一郎）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~imajima/>

フィジー語 CAI（菊澤律子）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ritsuko/1999/fiji/lesson.html>

ネパール村落民族誌（石井溥）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~hishii/contents.html>

西夏文字研究（中嶋幹起）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mnaka/index.htm>

インターネット西夏学会（中嶋幹起）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~mnaka/tangutindex.htm>

ゾンカ語・英語辞書電子化（町田和彦）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/2011/Dzongkha2011.htm>

ウルドゥー語・古典ヒンディー語辞書（町田和彦）

http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/_09.html

Premchand 2011（町田和彦）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/hindi/premchand/mansarovar/mansarovar.htm>

「AjaxIME」（多言語・多文字文字入力システム）（町田和彦）

http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/AjaxIME/AjaxIME_09.html

日本人の言語能力発達過程のコーパス化（峰岸真琴）

<https://sites.google.com/site/yanyunenglifadaguocheng/>

スース地方（モロッコ）の吟遊詩人による 20 世紀前半の音源のデジタル化（小田淳一，堀内正樹）

http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/chants_berberes.html

ツングース諸語の言語データデジタル化およびオンライン公開（渡辺己）

<http://coe.aa.tufs.ac.jp/tungus/home.html>

インド演劇論根本教典の電子データ化（高島淳）

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/engekiron.html>

アジア・アフリカ手話言語情報室（AASL）の構築（星泉，亀井伸孝）

<http://aasl.aacore.jp/wiki/>

アラビア文字紀年銘変換プログラム (高松洋一)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/tarih.html>

「モッラー・ナスレディーン」修復デジタル化プロジェクト (近藤信彰)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~n-kondo/nasr_al_din/index.html

全文検索システム (町田和彦)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/IRC/server/fts.htm>

環インド洋におけるマダガスカルの歴史・文化・生業についての画像資料 (深澤秀夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~nfuka/slideimages/>

フィールド 3D マッピングプロジェクト：歴史と文化の時空間表現 (椎野若菜)

<http://aacore.cloc.jp/mosaic/>

Asian Photograph Selection (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/asianphoto/>

インド洋民話の DB 化 (小田淳一)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~odaj/contes_ocean_indien.html

「ホイアン歴史民族誌」構築・公開プロジェクト (三尾裕子, 澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/DAMCSR/hoian-ethn.html>

植民地期台湾に関する人文科学的研究 (三尾裕子)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~ymio/cafe/Taiwan1.html>

地名にみる歴史の痕跡 (澤田英夫)

<http://www.aa.tufs.ac.jp/~sawadah/gnames/>

『エジプト週報』のデジタル化と公開 (小田淳一)

<http://irc.aa.tufs.ac.jp/egypt/semaine/>

言語調査票のデジタル化 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html

タミル語 2000 語 (町田和彦)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~kmach/AA2000/AA_2000.html

電子辞書プロジェクト (高島淳)

<http://www.aa-ken.jp/edic/>

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/FullTextSearch/25.html>

インド・歴史書文献の電子データ化 (高島淳)

http://www.aa.tufs.ac.jp/~tjun/irc/rajatarangini_p.html

モンゴル語文献資料の電子化利用の研究 (栗林均, 町田和彦)

<http://www.cneas.tohoku.ac.jp/staff/hkuri/project.html>

多重置換システムの構築 (町田和彦)

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/02.html>

ヒンディー語・ウルドゥー語の形態素自動解析 (町田和彦, 萩田博, 萬宮健策)

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/08.html>

<http://irc2010-server.aa.tufs.ac.jp/CoCo/09.html>

アラビア文字紀年銘（クロノグラム）年代計算プログラムの公開（高松洋一）
<http://coe.aa.tufs.ac.jp/abjad/JP/>

II-4.4.3 公開講座の実施および外部公開講座への講師派遣

講演： 東京藝術大学 芸術情報センター(AMC)アートノマドカフェミーティング No.3「SAWACHI DE MOBY DICK」

講師： 中村 恭子

開催日： 2016年4月20日

会場： 東京藝術大学

講演： 下越佐渡有道会記念講演会『『イスラム原理主義』とテロ／ジハードの論理』

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年4月

講演： 布池外語専門学校招待講演会「伝え合いの英会話-文を作ることから気持ちを伝えるコミュニケーションへ」

講師： 中山 俊秀

開催日： 2016年4月27日

会場： 布池外語専門学校（愛知県名古屋市）

講演： 日本ナボコフ協会大会『『ラ・ヴェネツィアーナ』のレモンが流通する世界』

講師： 中村 恭子

開催日： 2016年5月7日

会場： 東京大学

講演： 「Re-Edit Sunda 南洋の暮らし 形と痕跡 talk show」

講師： 吉田 ゆか子

開催日： 2016年5月

会場： IDEE 自由が丘店

講演： 古代オリエント博物館 春の特別展『世界の文字の物語』関連講演会『文字のシルクロード：西アジアから東アジアへ』『東アジアの文字世界－漢字とそれをとりまく文字』

講師： 荒川 慎太郎

開催日： 2016年5月21日

会場： 池袋サンシャインシティワールドインポートマート5階 コンファレンスルーム15

講演： 警部任用科本課程第46期研修「イスラム情勢」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年6月1日

会場： 警察大学校（府中市朝日町）

講演： AAR Japan 難民を助ける会「難民の日」トークイベント「吹き荒れる暴力 テロの背景にあるもの」
『難民－テロの犠牲者たち-』

講師： 黒木 英充

開催日： 2016年6月14日

会場： 共同通信会館（港区虎ノ門）

講演： 長野市民教養講座『アジア諸国の歴史と現況』『「肥沃な三日月地帯」から「戦争の三日月地帯」へ シリア内戦の世界史的意味』

講師： 黒木 英充

開催日： 2016年6月

出前授業：東京都立国際高等学校『キャリアガイダンス』「研究者」というキャリアとこれからのキャリア作り」

講師： 中山 俊秀

開催日： 2016年6月

会場： 東京都立国際高等学校（目黒区）

講演： 茨城県民大学講座「多極化世界の中のヨーロッパと中東 テロ・移民・難民問題を考える」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年7月1日

会場： 茨城県県西生涯学習センター

講演： 日本霊長類学会第32回大会「自由集会 - 6 人類を含む霊長類の重層社会の形成をめぐって」

講師： 河合 香史

開催日： 2016年7月15日

会場： 鹿児島大学

講演： 第52回法務省入国管理局関係職員特別科（難民調査官）研修「イスラム世界を理解する」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年7月19日

会場： 法務省赤れんが棟

講演： 日本工業倶楽部素修会講演会「『イスラム国』のイスラーム思想」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年7月25日

会場： 丸の内日本工業倶楽部会館

講演： 高大連携事業『東京外国語大学夏期世界史セミナー：世界史の最前線』「イスラーム世界の歴史とイスラーム」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年7月28日

会場： 東京外国語大学研究講義棟 227 室

講義： やまと市民大学『みんなで考える中東問題～中東の歴史と昨今の中東情勢 第1回』「イスラエルの誕生～先史からイスラエル建国まで」

講師： 細田 和江

開催日： 2016年7月28日

会場： つきみ野学習センター

講演： 東京工業大学『「ぐるなび」食の未来創成寄附講座 食の文化研究会 公開講義第8回』「イスラエル・ワインの現代史：ユダヤ人のパレスチナ入植から現状まで」

講師： 細田 和江

日程： 2016年8月4日

会場： 東京工業大学

講演： ツォシヨク・サルワ起業セミナー「伝統的価値の再発見にもとづく乳加工イノベーション」

講師： 星 泉

開催日： 2016年8月6日

会場： 中国青海省

講演： 特定非営利活動法人『難民を助ける会』研修会「イスラーム入門」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年9月

セミナー・ワークショップ：「国際理解教育の文脈と方法」

講師： 中山 俊秀

開催日： 2016年9月

会場： (株)メガブルーバード

講演： 武蔵大学第65回公開講座『現代世界とイスラーム』「シリア内戦をめぐるイスラームと暴力のとらえ方」

講師： 黒木 英充

開催日： 2016年9月24日

会場： 武蔵大学（練馬区豊玉）

講演： 在マダガスカル・邦人会 文化講演会「マダガスカルの村で<世界>をおちこちに読み解く 人が集まって暮らす景観が語るもの」

講師： 深澤 秀夫

開催日： 2016年9月24日

会場： 駐マダガスカル・日本大使館

講演： ヒマラヤ圏サパナ，東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所「ペマ・ツェテンとチベット映画の世界」

講師： 星 泉

開催日： 2016年10月2日

会場： 札幌市教育文化会館

講演： ヒマラヤ圏サパナ「チベットの物語世界へようこそ」

講師： 星 泉

開催日： 2016年10月2日

会場： 札幌市教育文化会館

講演： 警部任用科本課程第47期研修「イスラム情勢」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年10月6日

会場： 警察大学校（府中市朝日町）

講演： 日本イスラム協会公開講演会「再難民化するパレスチナ人～サイクス・ピコ合意100年目の離散の現状」

講師： 錦田 愛子

開催日： 2016年10月8日

会場： 東京大学文学部法文1号館113教室

講演： 京都大学アフリカ地域研究資料センター 第221回アフリカ地域研究会「食と農のアフリカ史：アフリカ史研究の可能性を探る」

講師： 石川 博樹

開催日： 2016年10月20日

会場： 京都大学稲盛財団記念館

講演： 国際テロリズム捜査研修「イスラーム情勢」

講師： 飯塚 正人

開催日： 2016年10月25日

会場： 警察大学校（府中市朝日町）

講演： 第51回法務省入国管理局関係職員高等科研修「イスラム世界を理解する」

講師： 飯塚 正人

- 開催日： 2016年11月2日
会場： 法務総合研究所（桜田門）
- 講演： 2016年度 聖路加国際大学円環講座「イスラーム思想における生命倫理と看護」
講師： 近藤 洋平
日程： 2016年11月15日
会場： 聖路加国際大学
- 講演： 調布市北部公民館国際理解講座『中東の混迷とヨーロッパ』
講師： 飯塚 正人
開催日： 2016年12月1日
会場： 調布市北部公民館（調布市柴崎2丁目）
- 講演： 調布市文化・コミュニティ振興財団『平成28年度ちょうふ市内・近隣大学等公開講座 東京外国語大学』「漢字系文字のなかまたち—その特徴と古代文字の解読—」
講師： 荒川 慎太郎
開催日： 2016年12月13日
会場： 調布市文化会館たづくり8階映像シアター
- 講演： 第13回法務省入国管理局関係職員専攻科研修「イスラーム世界を理解する」
講師： 飯塚 正人
開催日： 2017年1月27日
会場： 法務総合研究所（桜田門）
- 講演： FIELDPLUS café『チベット牧畜民の一日』解説付き上映
講師： 星 泉
開催日： 2017年1月18日
会場： サロンド富山房 FOLIO（千代田区田神保町）
- 講演： 公益財団法人 大同生命国際文化基金「大同生命地域研究賞 第10回ミニフォーラム「海を越えるパレスチナ難民—アラブ系移民／難民のヨーロッパへの移動と背景—」
講師： 錦田 愛子
開催日： 2017年2月9日
会場： 大同生命保険株式会社 大阪本社5階 第4会議室
- 講演： 在マダガスカル・邦人会 文化講演会「マダガスカルにおける老いと力 祝福・呪詛・勘当・邪術」
講師： 深澤 秀夫
開催日： 2017年2月18日
会場： 駐マダガスカル・日本大使館
- 講演： Malay Heritage Centre, Singapore: Public Lecture Series “Age of Qalam” “World View of Malay Muslim Intellectuals in Singapore”
講師： 坪井 祐司
開催日： 2017年2月18日
会場： Malay Heritage Centre, Singapore
- 講演： ジャカルタ邦人向け公開講演会「バリ島の芸能文化 踊り、奏で、祈る日常」
講師： 吉田 ゆか子
開催日： 2017年2月
会場： 国際交流基金ジャカルタ日本文化センター
- 講演： 警部任用科本課程第48期研修「イスラーム情勢」
講師： 飯塚 正人

開催日： 2017年3月8日
会場： 警察大学校（府中市朝日町）

セミナー・ワークショップ： Онлайн-семинар Евразийского национального университета имени Л.Н. Гумилева

講師： 野田 仁
開催日： 2017年3月
会場： カザフスタン共和国 Astana, Kazakhstan

講義： 国際協力機構 国際協力人材赴任前研修「カザフスタン赴任国概要講義」
講師： 野田 仁
開催日： 2017年3月

講演： 世田谷区ピースセミナー「現代イスラーム文化の源流」
講師： 飯塚 正人
開催日： 2017年3月
会場： 世田谷区民会館別館 三茶しゃれなあとホール5階オリオン(世田谷区太子堂)

II-4.5 公共的利用

II-4.5.1 共同利用スペース等の稼働状況

セミナー室(301)

共同利用・共同研究課題研究会

- | | |
|----------------|---|
| 2016/4/16 | 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」 |
| 2016/4/17 | 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」 |
| 2016/6/18 | 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容（2）ジャワのイスラーム化再考」 |
| 2016/7/2 | 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」 |
| 2016/7/23 | 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」 |
| 2016/9/30~10/2 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |
| 2016/10/14&15 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |
| 2016/11/19 | 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」 |
| 2016/11/25~27 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |
| 2017/1/21&22 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |
| 2016/12/16 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」／2017年度文献講読研修プレミーティング |
| 2017/2/17 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |
| 2017/2/26 | 共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」 |
| 2017/3/3 | 共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究」 |
| 2017/3/5 | 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」第1回研究会 |
| 2017/3/17~19 | 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」 |

- 2017/3/25&26 共同利用・共同研究課題「アフリカ農業・農村社会史の再構築：在来農業革命の視点から」第3回研究会
- シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等
- 2016/9/21 2016 年度言語研修『琉球語』言語研修フォローアップミーティング／成果物編集打ち合わせ
- 2016/12/16 2017 年度文献講読研修プレミーティング／共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」
- 2017/2/7 国際研究会「シングルと家族—インドにおける尼僧を考える」
- 2017/2/9 情報資源利用研究センター・国際ワークショップ

小会議室 (302)

共同利用・共同研究課題研究会

- 2016/6/12 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」
- 2016/9/16 「ヒマラヤ・チベット文明の史的展開と学際的研究」2016 年度第5回研究会
- 2016/11/5&6 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第7回研究会
- 2016/12/3 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」第5回研究会
- 2016/12/17 共同利用・共同研究課題「バントゥ諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」第2回研究会
- 2017/1/21&22 共同利用・共同研究課題「日本語のノダに類する文末表現標識の通言語的研究：思考プロセスの観点からのアプローチ」成果とりまとめのための研究会
- 2017/3/11&12 共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」第9回研究会
- 2017/3/25 共同利用・共同研究課題「アフリカ諸語における声調・アクセントの総合的研究」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2017/2/2~4 国際研究集会「グローバル社会における多様な「シングル」の共存にむけて」

大会議室 (303)

共同利用・共同研究課題研究会

- 2016/6/12 共同利用・共同研究課題「東アジア・東南アジアの諸言語における談話小辞の意味研究」
- 2016/7/2&3 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」
- 2017/3/27 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2016/6/10~12 第23回オーストロネシア形式言語学会（AFLA 23）
- 2016/7/9 海外学術調査フォーラム
- 2016/9/13 チベットの今を見つめる眼『Bringing Tibet Home』
- 2016/9/17 シンポジウム「チベット文明のレジリエンス」
- 2016/10/9 ダッカのテロ事件とバングラデシュの若者たち—その背景とこれからを考える
- 2016/10/22 CAAS シンポジウム 基調講演
- 2016/10/24 The future of Lebanese and Syrian migration studies
- 2016/11/12 シンポジウム「「もの」の人類学をめぐる—脱人間中心主義的人類学の可能性と課題」
- 2016/11/19~23 世界の言語で読む Le Petit Prince
- 2016/12/9 シンポジウム「トランスカルチャー状況下における顔・身体学の構築」
- 2017/1/21 フィールドネット・ラウンジ「「毒」のバイオグラフィー——学際的な知の交差を通じて現代世界のフィールドワーク手法を考える」
- 2017/2/17 国際ワークショップ “Imagining an Alternative ‘Post-Secular’ State: Historicizing and Comparing National Struggles over Re-secularization”
- 2017/2/18 国際ワークショップ “State and Shari`a in the Pre-20th Century Middle East”
- 2017/3/10 国際シンポジウム “Language Documentation and Corpus Linguistics”／共同利用・共同研究課題

「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」

2017/3/11 チベットの今を見つめる眼『チベット牧畜民の一日』上映会

2017/3/30 映像ワークショップ「Messages from Paradise」

マルチメディア会議室(304)

共同利用・共同研究課題研究会

2016/6/4&5 共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」

2016/6/19 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」

2016/7/3 共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」

2016/7/30 共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケース』研究 新たな政治=文化学のために」

2016/8/6 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」

2016/10/1 共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」

2016/11/6 共同利用・共同研究課題「新出多言語資料からみた敦煌の社会」

2016/11/19&20 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」

2016/11/26&27 共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」

2017/3/6 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」

2017/3/25&26 共同利用・共同研究課題「『プレザンス・アフリケース』研究 新たな政治=文化学のために」

2017/3/27 共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

2016/4/9 国際ワークショップ“Authority, Legitimacy and Historiography in the Ottoman Empire”

2016/5/19 AA 研フォーラム

2016/5/20&22 体制転換の人類学

2016/6/16 AA 研フォーラム

2016/6/17 フィールドサイエンス・コロキウム 2016 年度第 1 回ワークショップ「災害と／のフィールドワーク」

2016/6/25 中東イスラーム研究拠点国際ワークショップ

2016/7/5 2016 年度第 3 回リンディフォーラム

2016/7/6 フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ

講演：研究未開発言語のコーパス構築：多様な言語間に見られる対象指示方略の研究への適用を中心に

2016/8/22 AA 研フォーラム：言語研修（琉球語）文化講演「宮古島池間民族の言語・文化・歌謡」

2016/8/29 AA 研フォーラム：言語研修（琉球語）文化講演「奄美大島宇検村の民俗行事の解説と八月踊りの体験」

2016/9/18~21 中東☆イスラーム教育セミナー

2016/10/5 フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ「Praat を用いた音響音声学的分析の初歩」

2016/11/6 2016 年度文化／社会人類学セミナー

2016/11/11 2016 年度第 4 回リンディフォーラム

2016/11/12&13 共同利用・共同研究課題「公刊資料に基づく中国・河西回廊地域モンゴル諸語の研究」

2016/11/15 2016 年度第 5 回リンディフォーラム

2016/12/4 フィールドネット・ラウンジ：老い——「問題」として、「経験」として

2016/12/7 フィールド言語学ワークショップ：テクニカルワークショップ ArcGIS を用いた言語地図作成入門

2016/12/11 シンポジウム「バングラデシュにおける災害支援と地域開発の最前線」

2016/12/15 全所プロジェクト「アジア・アフリカの現代的諸問題の解決に向けた新たな連携研究体制の構築」

2016/12/17 中東イスラーム研究拠点「政治変動研究会」

2016/12/27 公開講演会：大瀬二郎（報道写真家）「遙かなる地へ思いを馳せて」／ジュリア・アン・ザ

- イカウスキー（国連難民高等弁務官事務所）「中央アフリカおよび東アフリカにおける難民の現状」
- 2017/1/7&8 第9回オスマン文書セミナー
- 2017/1/16&18 フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ：連続講義—データマネージメントとアーカイブ
- 2017/1/21 International workshop: Studies of Tibet-Burman languages, based on the corpus: Tibetan and Tangut
2017/1/22 Workshop (KAKENHI Project “Aspects of Tibeto-Burman Languages through analysis of the Directional prefixes”): Directional prefix of Tibeto-Burman languages
- 2017/1/28 中東イスラーム研究拠点「政治変動研究会」
- 2017/2/5&6 言語研修古ジャワ語フォローアップミーティング
- 2017/2/12 フィールドサイエンス・コロキウム連続ワークショップ第3回「データと論文の間—フィールドサイエンスにおける論証とは」
- 2017/2/15 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容（2）ジャワのイスラーム化再考」
- 2017/2/18&19 国際シンポジウム「チベット牧畜民の「いま」を記録する」／共同利用・共同研究課題「“人間—家畜—環境をめぐるマイクロ連環系の科学”の構築～青海チベットにおける牧畜語彙収集からのアプローチ」
- 2017/2/19 チベットの今を見つめる眼『チベット牧畜民の一日』上映会
- 2017/3/3~5 国際バントゥー諸語マイクロ・バリエーションワークショップ／共同利用・共同研究課題「バントゥー諸語のマイクロ・バリエーションの類型的研究（フェーズ1）」
- 2017/3/9 AA 研フォーラム
- 2017/3/14&15 フィールド言語学ワークショップ：テクニカル・ワークショップ：連続講義・実習「フィールド言語学と言語ドキュメンテーション」
- 2017/3/19 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為（第二期）」
- 2017/3/21&22 フィールド言語学ワークショップ：第11回 文法研究ワークショップ：講義と実習「コーパスに基づく対象指示方略の類型～アノテーションシステム GRAID を用いて～」
- 2017/3/28 リンディフォーラム：特任研究員研究発表会
- 2017/3/29 基幹研究「中東・イスラーム圏における分極化とその政治・社会・文化的背景」研究機関研究員発表会

マルチメディアセミナー室(306)

共同利用・共同研究課題研究会

- 2016/6/11&12 共同利用・共同研究課題「「もの」の人類学的研究(2)人間／非人間のダイナミクス」
- 2016/7/10 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」
- 2016/7/16 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）」
- 2016/7/23 共同利用・共同研究課題「アフリカに関する史的研究と資料」
- 2016/7/24 共同利用・共同研究課題「参照文法書研究」
- 2016/10/1 共同利用・共同研究課題「イスラームに基づく経済活動・行為（第二期）」
- 2016/10/29 共同利用・共同研究課題「シティズンシップと政治参加—移民／難民によるコミュニティ形成と社会福祉への影響の比較研究—」
- 2016/11/13 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）」
- 2016/12/4 共同利用・共同研究課題「中国雲南におけるテキスト研究の新展開」
- 2017/2/11 共同利用・共同研究課題「「アルタイ型」言語に関する類型的研究」
- 2017/2/17&18 共同利用・共同研究課題「アジア地理言語学研究」
- 2017/3/4&5 共同利用・共同研究課題「人類社会の進化史的基盤研究（4）」
- 2017/3/12 International Workshop: Agricultural Practice and Social Dynamics in Niger
- 2017/3/18 共同利用・共同研究課題「朝鮮語アクセント・イントネーション研究」
- 2017/3/31 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究（第二期）」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2016/4/5 2016年度第1回リンディフォーラム
2016/4/26 2016年度第2回リンディフォーラム
2016/4/23 共同利用・共同研究課題「東・東南アジアの越境する子どもたち—トランスナショナル家族の子どもをめぐる文化・アイデンティティとローカル社会—」
2016/11/6 2016年度文化／社会人類学セミナー
2016/11/19~23 フィールド言語学カフェ・特別編「アジア地域の言語と文化」
2016/12/16~18 中東☆イスラーム研究セミナー
2017/2/4 合評会シンポジウム：『他者-人類社会の進化』をめぐって
2017/2/5 「暴力、儀礼、ジェンダー：南スーダンと北部ウガンダの紛争後社会の事例から」
2017/2/5 日本学術振興会二国間交流事業（ウガンダ）研究会「ウガンダにおける「家族」の多様化と再編力についての研究」
2017/3/1 リンディフォーラム “On grammaticalization processes in Ao: Sources, pathways and functional extensions”
2017/3/2 リンディフォーラム
2017/3/24~30 インドネシア ヌサ・トゥンガラ・ティモール州の危機言語記録のためのワークショップ／共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」

研修室(405)

共同利用・共同研究課題研究会

- 2016/10/23 共同利用・共同研究課題「「もの」の人類学的研究(2) 人間／非人間のダイナミクス」
2016/11/6 共同利用・共同研究課題「ジャワ語テキストにみるジャワの宗教変容(2) ジャワのイスラーム化再考」
2016/11/19&20 共同利用・共同研究課題「通言語的・類型論的観点からみた琉球諸語のケースマーケティング」
2017/2/18 共同利用・共同研究課題「インドネシア周辺の少数言語・危機言語ドキュメンテーションに関する研究ネットワークの構築」

7階企画作業室(705)

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2017/2/26~3/3 シベ語ドキュメンテーションのためのワークショップ

8階企画作業室(805)

- 2016/10/23 共同利用・共同研究課題「インターフェイスとしての女性と中国系移民のディアスポリック空間」

資料展示室(1F)

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2016/12/5~20 大瀬二郎写真展「遙かなる地へ思いを馳せて」
2017/2/13~3/11 チベット牧畜民の仕事展

コタキナバル リエゾン・オフィス

共同利用・共同研究課題研究会

- 2016/8/28 共同利用・共同研究課題「東南アジアのイスラームと文化多様性に関する学際的研究(第二期)」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

- 2017/1/7 コタキナバル・リエゾンオフィス邦人向け講演会
2017/3/9 アジア・アフリカの文化と社会に関する東京外国語大学—マレーシア・サバ大学の交換講演会

JaCMES バйлрут拠点オフィス

2016/9/1&2 共同利用・共同研究課題「中東社会における宗教宗派的・政治社会的少数派に関する研究」
 2016/11/29 JaCMES Round Table “The future of Syria and the surrounding countries”

研究講義棟遠隔講義室（205）

共同利用・共同研究課題研究会

2016/5/20 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」
 2016/6/17~19 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」
 2016/7/15~17 共同利用・共同研究課題「里耶秦簡と西北漢簡にみる秦・漢の継承と変革—中国古代簡牘の横断領域的研究（2）」

本郷サテライト3・4・7・8F

共同利用・共同研究課題研究会

2016/5/21 共同利用・共同研究課題「南西カラハリ・コエ語派の語彙の民族言語学的ドキュメンテーション」
 2016/11/19 共同利用・共同研究課題「近世イスラーム国家と周辺世界」
 2016/12/11 共同利用・共同研究課題「近世南アジアの文化と社会：文学・宗教テキストの通言語的比較分析」

シンポジウム・ワークショップ・基幹研究・その他等

2016/5/22 言語研修シベ語フォローアップミーティング／第6回シベ語研究会
 2016/6/29 Jampeissova 氏近代中央ユーラシア史講演会
 2017/1/22 中東イスラーム研究拠点「移動・交流が創る中東・イスラーム圏」研究会

II-4.5.2 文献資料室の利用状況

2016年度 来館数（単位：人）

月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	
来館数	222	176	220	153	105	129	
月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	合計
来館数	249	185	246	216	140	116	2,157

アジア・アフリカ言語文化研究所の現状と課題
2016 年度年次報告書

2018 年 2 月 28 日発行
発行：東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所
〒183-8534 東京都府中市朝日町 3-11-1
